

東北學院百年史

各論篇

## 発刊の辞



院長 情野 鉄雄

一昨年 of 創立記念日を期して『東北学院百年史』通史篇が刊行され、引き続き昨年には同資料篇の刊行を見たので、十年の歳月を閲した創立百周年記念の年史編纂事業も、残すところ本篇、すなわち「各論篇」のみとなっていた。

この度、執筆者諸氏ならびに編集委員諸氏の多大な努力によって、各論篇を世に送ることになり、これをもって百年史が一応の終結を迎えることとなったのは、まことに大きな喜びであり、ただ感謝の一語に尽きる。編集委員長小笠原政敏教授、編集主任出村彰教授、

竹井一夫委員を始め、長年にわたってひたすら精励・恪勤された関係者各位に、心からの敬意と謝意を表するものである。本篇によって、前の二篇では触れ得なかつた歴史の「ひだ」、あるいは陰影までも明らかにしたことと確信する。

三卷合わせて総計三〇〇〇ページにも達するこの学校史は、その体裁・内実と相俟って、他には類例を見ないものと、ひそかに自負の念さえも抱くのであるが、何よりも、本修史事業の主旨である建学の原点に立ち帰り、新しい百年への展望を得るよすがとなることを念じてやまない。

一九八六年の創立記念式典に配付された写真誌『東北学院の一〇〇年』を含めて、計四冊の年史を、今ここに、本学院のまことの創立者、歴史の導き手なる全能の神の御前にお捧げしたい。

一九九一年五月

## 凡例

一、本篇では、原則として執筆者の意向を生かすこととした。従って、文体や年号表記等は、通史篇を規準にしているが、必ずしもそれにこだわらなかつた。

一、本篇は第一部（明治）、第二部（大正・昭和）に分けてあるが、それは各論考の人物・主題の活動時期の目安をそこに置いたもので、必ずしもその時代に限定されるものではない。

一、引用資料は原典主義をとっているが、漢字は常用漢字に統一した。

一、写真、統計、図表、地図等は執筆者の判断に任せ、統一しないことにした。

一、出典の表示、注記も、敢て統一しなかつた。

一、英文は巻末に組み、目次にはその取り扱い年代に該当する位置を示してある。



東北学院百年史 各論篇 目次

凡 例 院長 情野 鉄雄

発刊の辞……………

第一部 明治

東北伝道とプロテスタント先覚者たち…………… 小笠原 政 敏 3

- 一 日本プロテスタントの源流 3
- 二 プロテスタント各派の東北伝道 7
- 三 横浜バンドと東北伝道 11
- 四 伝道のビジョン 16
- 五 教育の遺産 21

押川方義の政治神学——神政政治をめぐって…………… 竹 井 一 夫 53

- 序 53
- 一 前期 63
- 二 後期 88

WILLIAM F. HOY AND “THE JAPAN EVANGELIST” …… William Mensendiek 531

ドイツ改革派教会の伝道の神学…………… 出 村 彰 125

- 一 歴史的視点 125
- 二 初期の宣教論 133
- 三 宣教論の成熟 142
- 四 シュネーターの場合 150
- 五 結びにかえて 167

藤村・泡鳴・春浪——東北学院時代の頃……………藤 一也 171

序171 一 岩野泡鳴177 二 押川春浪197 三 島崎藤村205

明治の洋風煉瓦造校舎 R・ゼールとG・デ・ラランデ……………坂 田 泉 223

## 第二部 大正・昭和

笹尾象太郎のカント理解——書かれた「序論」と生きられた「本論」……………石 川 文 康 241

はじめに241 一 笹尾象太郎の生涯242 二 笹尾のカント解釈248 おわりに264

山川丙三郎と『神曲』……………下 館 和 巳 269

序269 一 北越学館から東北学院へ270 二 藤村との触れ合い273 三 渡米前277 四 米国留学278  
五 新井奥達との出会い287 六 『神曲』翻訳292 七 大賀壽吉の批評296 八 東北学院教授303  
九 山川の死後312 あとがき314

ミミズの畑井とコケの飯柴……………飯 泉 茂 315

はじめに315 一 畑井新喜司317 二 飯柴永吉331

杉山元治郎と労農運動……………森 健 一 343

一 土に生き基督者となる343 二 苦難の農村伝道から農民組合の設立348 三 動揺する労農運動と農民福音学校355  
四 平和と農民の開放を求めつつ363 五 新しい時代の人間・杉山元治郎370

鈴木義男……………飯塚滋雄 377

序377 一 生い立ちから修業時代まで 377 二 教育者としての鈴木義男 385 三 弁護士としての鈴木義男 391  
四 政治家としての鈴木義男 400

東北学院の英語教育とゲルハード・メソッド……………清水浩三 407

序407 一 ポール・ゲルハードと英語教授法 409 二 ロバート・ゲルハードの英語音声学 429

東北学院「英学」の伝統と

大学「英語英文学教育」を始動させた群像……………志子田光雄 445

一 伝統 445 二 群像 450 三 結語 472

キャンパスの自然……………村山磐 475

一 仙台および周辺の自然概観 475 二 土樋・一番町キャンパス 485 三 泉キャンパス 496  
四 多賀城キャンパス 500 五 青根セミナーハウス 508 六 高山セミナーハウス 506

編集後記……………532

# 第一部

明治

## 東北伝道とプロテスタント先覚者たち

小笠原 政敏

### 一 日本プロテスタントの源流

キリスト教の日本伝来に三つの時期を挙げるとすれば、第一期は奈良時代、第二期は室町時代、第三期は徳川末期である。第一期の天平八（七三六）年には東方正教会系ネストリウス派（確かでない）、第二期の天文一八（一五四九）年には西方教会、すなわちローマ・カトリック、第三期の安政六（一八五九）年にはローマ・カトリックの再来、同年、プロテスタント、文久元（一八六一）年には東方正教会ハリストス正教会が伝来する。極東の国日本に、西からカトリック、東からプロテスタントが入ってくる。東とはアメリカ合衆国のことである。日本プロテスタントはアメリカ・プロテスタントの日本移植によつて始まる。そしてアメリカ・プロテスタントは、教派的プロテスタントである。爾来一三〇年、日本プロテスタントは、アメリカ・プロテスタントとの深い結びつきをなかに教派的プロテスタントとして形成され、その歴史的展開をしてきている。

さて、日本プロテスタントの源流として、横浜バンド、熊本バンド、札幌バンドの三つを挙げるのが通例であ

る。明治初期、横浜のバラ、ブラウン塾に学んで入信した青年たち、熊本洋学校にジェーンズの教えをうけて入信した一群の青年たち、札幌農学校でクラークの感化をうけて信仰者となった学生たちのことである。これらの群は、それぞれ個性を發揮し、日本プロテスタントの先駆としてその発展に寄与した。

熊本のL・L・ジェーンズと札幌のW・S・クラークは南北戦争に戦った軍人であり、ジェーンズは砲兵大尉、クラークは陸軍大佐でマサチューセッツ農科大学の学長でもあった。ジェーンズは熊本藩校の熊本洋学校に、クラークは官立札幌農学校にそれぞれ教頭として招かれ、青年たちの教育に当たったキリスト信徒であった。西洋の學術技芸を授けるために教師になったのであって、聖書を教えるためではない。教育のために招かれたのであって伝道のために派遣されたのではなかった。しかし、二人とも洋学を教授すること以上に人間の教育を眼目とした。そのために二人とも聖書を説いた。そのことは許されざることであったが、クラークは黙認のもと、ジェーンズは私的に行つた。

クラークは毎朝授業に先立ち、聖書の講義をし、学生に聖書や讚美歌の名句を暗誦させまた熱禱を捧げた。クラークの朗吟した讚美歌は二つある。「いさおなき我を」（現行讚美歌二七一）と世界伝道の讚美歌「北のはてなるこおりの山」（現行讚美歌二二四）である。クラークは確かに伝道心に燃えていた。

ジェーンズは授業では聖書を説かなかつた。キリスト教のことも語らなかつた。三年たつて学生たちが英語が多少わかるようになると、天文学の授業において天地の神秘から神の存在にふれ、歴史や英文学を講ずるなかで欧米文明の基礎がキリスト教信仰であることを述べて、聖書を理解する必要ありとし、週一夜自宅で聖書を講じ始める。そして熱誠溢れて祈禱した。ジェーンズとクラークにとってキリスト教は聖書であった。祈禱であった。

ジェーンズの感化を受けて、学生たちが熊本郊外の花岡山にのぼり互いに誓約し、「奉教趣意書」に署名し（三五名）、日本教化の決意を表明した（明治九（一八七六）年）。やがてそのなかから約半数と小崎弘道らが、ジェーンズより洗礼を受けた（ジェーンズは聖職者ではなかった）。宮川経輝、不破雄次郎、蔵原惟郭、海老名弾正、森田久万人、市原盛宏、浮田和民等である。その他伊勢（横井）時雄、金森通倫、徳富猪一郎などを加え、これらの青年たちは、やがて創立まもない同志社に入学し、のちに社会に教育に、そしてキリスト教伝道に多大の貢献をなす。

クラークの八ヶ月間の滞在によって薫陶を受けた第一期生一六名は、クラークの作成した「イエスを信ずる者の契約」に署名した（明治十（一八七七）年）。それは信仰の告白であった。まもなく、その全員ではないが、メソジスト派宣教師M・C・ハリスから洗礼を受け、第二期生一五名も第一期生の感化をうけて「契約」に署名、そのうち七名が受洗した（クラークは洗礼を授けなかった）。佐藤昌介、大島正健、渡瀬寅次郎、黒岩四方之進、伊藤一隆、内村鑑三、新渡戸稲造、宮部金吾、広井勇、高木玉太郎等である。その中から学界や教育界の指導的人物、また内村鑑三のような独立伝道者が輩出した。

横浜バンドは、S・R・ブラウン、J・H・バラの私塾から起こった。ブラウンもバラもアメリカのオランダ改革派教会から派遣されて来日した宣教師であった。英学を教えたが伝道が目的であった。英学を教授しつつ伝道の門戸の開放を待った。まだその時のいたらないまに、九名の塾生、押川方義、吉田信好、篠崎桂之助らが洗礼を受け、その日のうちに、既受洗者二名を加えて、一一名によって、日本最初のプロテスタント教会である「日本基督公会」が横浜に設立される。それは切支丹禁制高札撤去の前年のことであった。まもなく、本多庸一、熊

野雄七、奥野昌綱、井深梶之助、植村正久、山本秀煌その他が相次いで受洗し入会する。数年のうちに東京、神戸、大阪、弘前、上田、長崎、などに公会が設立されていく。札幌バンドの内村鑑三はのちに無教会を唱えるようになったが、公会の出発は無教派主義に立った。明治七（一八七四）年、その定めた「日本基督公会条例」の第二条例に、「我（不明）ノ公会ハ宗派ニ属セズ、唯主耶穌キリストノ名ニ依テ建ル所ナレバ 単ニ聖書ヲ標準トシ 是ヲ信ジ 是ヲ勉ル者ハ 皆是キリストノ僕 我儕ノ兄弟ナレバ 会中ノ各員全世界ノ信者ヲ同視シテ一家ノ親愛ヲ尽スベシ 是故ニ此会ヲ日本国基督公会ト称ス」<sup>(3)</sup>と表明した。ところが間もなく、「宗派的宣教師」急増し、東西各地に「宗派的教会」を設立した<sup>(4)</sup>。それだけではなく、神戸、大阪の両公会（アメリカン・ボード（組合派）の宣教師たちの伝道によって設立される）も、横浜、東京の公会から分立する。こうして横浜バンドの無教派主義の実現の志は、挫かれるのである。

とにかく、公会は、バラ、ブラウンの指導のもとにその設立式において、長老が選挙され、その按手札が行われ、聖餐式をもって終了、なお牧師についてはバラを仮牧師とした。さらに、教会の規則を総会において定めてその信仰、生活、組織その他を明らかにする。横浜バンドは、このように教会の信仰を表明し、教会政治を規定して、はっきりした輪郭をもつ教会の設立に始まり、それを拠点として伝道を推進し、教会を建設し、キリストの霊的王国を日本に樹立、拡張しようとの目的実現を目指した<sup>(5)</sup>。

熊本バンドの海老名弾正はのちに語る。

日本のキリスト教の指導者になつた所の、三つの中心があります。一つは北海道の札幌にある農学校、一つは熊本の洋



学校、一つは横浜の宣教師の立てた学校であります。この横浜から出身した所の者にはキリスト教会といふものが主眼と成つてゐます。それから北海道から来た所の人は、どうも一種の個人主義を大いに鼓吹したものであります。之に就いては内村鑑三氏が嘗て私共の集会に来て云はれた事がある。横浜から来たものはエクレジヤスチカルと云つた、それから札幌はスピリチュアルで熊本はナシヨナル、国家的キリスト教と云はれた。其の時私が「それは内村君、君のは君の方に良い所ばかり取つて居る。横浜はエクレジヤスチカルで熊本はナシヨナル、それはどうもさうだ。が君の方のスピリチュアルが問題だ。精神的といふのは三者共通で君等の独占ではない。君等のインデヴキヂュアリスチックだ」と云つた。皆んなが「海老名の言ふ事が当つてゐる。内村の敗けだ」と云つた……<sup>5)</sup>

## 二 プロテスタント各派の東北伝道

東北とキリスト教との関係<sup>6)</sup>はザヴィエルの鹿児島上陸後四十一年、キリシタン大名蒲生氏郷が会津若松城に封ぜられた頃に始まる(天正十八(一五九〇)年)。仙台藩主伊達政宗をはじめ、東北の大名たちはキリスト教に寛容を示し、東北の至るところにキリシタンをみるに至る。しかし慶長十八(一六一三)年支倉常長の使節派遣より十年後、東北の各地にも迫害の嵐が吹き荒れ、ついには、東北のキリシタンはほとんど絶滅し、明治六(一八七三)年になって、ようやくローマ・カトリックは東北に再来する。

他方、東北正教会のハリストスに關しては、戊辰戦争で敗北した仙台藩を脱藩し、北海道函館の榎本武揚の軍

に投じた新井常之進、金成善左衛門、酒井篤礼、浦野大蔵らが、函館のロシヤ領事館付司祭ニコライと出会うことに始まる。やがて仙台藩中にハリストスの伝道が起り、「其頃〔明治十八年〕東北地方は希臘教が盛に行はれ、基督教と云へば希臘教のことと思ふた故私は何時も新旧兩教の相異点を挙げ、我国は新教を信ぜねばならぬ事を話した」と小崎弘道が言うほど、仙台藩を中心に東北の各地に教会が建設される。のちに、かなりの信徒がバプテスト派に吸収される。

プロテスタントで最初に東北に入ったのは、横浜バンドである。明治八（一八七五）年、本多庸一が弘前に日本基督公会を設立する（横浜公会設立より三年後である）。その後、大小様々なプロテスタント教派が東北伝道にあたった。

熊本バンド系同志社系組合派は、明治十二（一八七九）年に水沢に伝道を始める。日本人による伝道である。同地出身の同志社卒業生、山崎爲徳の伝道である。山崎が同志社へ去ると、同郷の片桐清治が同志社より帰郷し、教会の基礎が据えられる。新島襄と関係の深い会津若松に伝道が開始されたのは、十八年である。翌十九年、新島襄によって洗礼式、聖餐式が行われ、講義所が開設され、若松を中心に会津伝道が展開する。同じ十九年、仙台に県知事、財界の支援を得て東華学校が設立されると、新島襄がその責任者となり、アメリカン・ボード宣教師J・H・デフォレストが仙台に定住する。デフォレストを仮牧師として日本組合教会宮城教会が設立される（明治二十（一八八七）年）。デフォレストは、ニューヨークの『インデペンデント』誌に二十五年間も寄稿し、またその著『日出る国における日の出』によって、日本への宣教師としてアメリカで著名になる。東華学校は五年で廃校になるが、河北新報の力健治郎、衆議院副議長内ヶ崎作三郎その他の人材を輩出した。

組合派と同じ頃、バプテスト派が東北に入る。明治十三（一八八〇）年、アメリカ・バプテスト伝道会社のイギリス人T・P・ポートの盛岡伝道である。同年、盛岡にまた仙台に浸礼教会が建設され、さらに花巻その他の岩手地区に伝道が拡大される。ポートの伝道はもともと盛岡のハリストス信徒の要請によるものであった。しかし、バプテスト派の東北伝道の開拓者は、最初の仙台定住宣教師となったE・H・ジョーンズといわれている。明治十七（一八八四）年、塩釜伝道に始まり、仙台を中心に、東北の交通不便な山村、農村、漁村に開拓伝道を進め、岩手、青森まで伝道の足跡を残した。バプテスト東北伝道開始より十二年たつて明治二十五年、尚綱女学校が創立される。第一代校長A・S・ブゼルの自宅で開かれた聖書研究会から、大正デモクラシーの旗手、吉野作造、内ヶ崎作三郎らが現われる。

東北の日本海側の伝道を始めたのが、デサイブル派である。バプテスト派のポートの勧めで、G・T・スミスとチャールス・E・ガーストが秋田に開拓伝道を始め。明治十七（一八八四）年である。デサイブル派は、十九世紀前半アメリカ西部開拓地に起こった新しい教派であったので、東北の僻地を選び、日本における農村伝道の先駆として高い評価を受けた。秋田を本拠とし、バプテスト派の信徒、ハリストス派からの改宗者を吸収し、鶴岡、仙台、福島と伝道を拡大した。やがて、本拠を東京に移す。バプテスト派は東北の東側、デサイブル派は東北の西側を分担したと云えるかも知れない。

東北におけるメソジスト派の伝道に関しては、弘前の本多庸一が存在が大きい。本多は、東北最初のプロテスタント教会である弘前日本基督公会の設立に努力したが、東奥義塾英語教師、アメリカ・メソジスト監督教会宣教師ジョン・イングと伝道の労苦を分かちあい、翌年（明治九年）、弘前公会とともにメソジスト監督教会に加入す

る。弘前を中心に伝道が青森県下に盛んに行われ、東奥義塾のキリスト教教育もその地方に感化が大きく、さらに天童、山形、米沢、仙台とメソジスト派の伝道は展開する。

聖公会は、アメリカ聖公会伝道会、イギリス国教会伝道会、イギリス海外福音宣教会が合同して日本聖公会を組織したのであるが（明治二十（一八八七）年）、その東北伝道は、アメリカ聖公会伝道会が担当し、その始まりは福島である（明治二十四（一八九一）年）。仙台はH・S・ジェフリースが開拓伝道に当たる（明治二十七（一八九四）年）。仙台に伝道女学館も開設されて婦人伝道師養成を行う（明治三十六（一九〇三）年）。聖公会は、東北全域にわたり主要都市に教会を建設する総合的計画をもっており、明治時代、他のどの教派よりも伝道宣教師を東北に多くもっていたと云う。

その他、メソジスト派に近いアメリカ福音教会が、明治二十五（一八九二）年以降、福島県に伝道し、組合派に近いアメリカ・クリスチャン教会が、明治二十（一八八七）年、農村伝道を志すD・F・ジョーンズによる石巻伝道によって日本伝道を開始し、まもなく東京に本拠を移す。セブンスデー・アドベンチスト派は、明治二十九（一八九六）年、日本に渡来するが、東北には明治末年頃、会津若松や福島に現われ、「末世の福音」を唱えてキリスト教界に困惑を引き起こす。メソジスト系の東洋宣教会は、明治三十四（一九〇一）年、C・E・カウマンと中田重治が東京神田に中央福音伝道館を開設、翌三十五（一九〇二）年、山形県楯岡にその支部を置き、その後大正初期までに青森県を除いて東北各県に支部を開く。日本全国のすべての家庭にトラクト配布運動を展開した。

内村鑑三の不敬事件は、東北にも広く知られていた（明治二十四（一八九一）年）。明治三十二（一八九九）年、

旧制第二高等学校の「忠愛之友倶楽部」の招待で、仙台の五城館で「東北人士の天職」と題して講演をする。第一回夏期講談会（明治三十三（一九〇〇）年）には、磐城国白石の新田勝寛の出席が内村によって敬愛の念をもって記録されている。内村の弟子、花巻の齋藤宗次郎の回心は明治三十三年である。内村自身も岩手、山形の僻地をはじめ東北の伝道に赴いている（明治三十九年以降）。「人に卑しめらるる東北の山野は、多くの信仰的勇者を宿している。神よ、東北とその民とを恵みたまえ」。

以上のように、日本プロテスタントは、アメリカの諸教派の移植によって始まったので、大小様々な教派が東北伝道を始めたが、そのなかでも東北伝道の主流は、横浜バンドと云つてよい。横浜バンドとその継承者である日本基督一致教会、そして日本基督教会である。それと協力したアメリカのドイツ改革派教会（合衆国改革派教会）である。

### 三 横浜バンドと東北伝道

ドイツ改革派教会の日本伝道の始まりは、明治十二（一八七九）年、同派宣教師 A・D・グリングの来日による。七年後、伝道の本拠を仙台に移し、それ以後、東北伝道に集中する。アメリカの数ある教派のなかで、東北伝道のみを推進した教派は、ドイツ改革派教会ただ一つである。このドイツ改革派教会と横浜バンドとが相合して東北学院が生まれる。この東北学院こそ、両者の東北伝道の根拠地となつたのである。

さて、東北伝道における横浜バンドは、本多庸一と井深梶之助と押川方義の三人によって代表されると言ってもよい。三人とも、横浜のブラウン、バラの感化を受けて入信し、押川は、日本最初のプロテスタント教会である横浜の日本基督公会の設立者の一人となり、そのなかでも重きをなし、本多はその一ヶ月後、井深はその翌年に受洗し入会している。

本多は津輕藩出身で、東奥義塾の第二代塾長となるために横浜より帰郷し、同伴した宣教師イングとともに郷里の教育と伝道に没頭し、その感化は大きく、既述のように東北最初のプロテスタント教会、弘前日本基督公会を明治八（一九七五）年に設立し、弘前公会を拠点として津輕地方の伝道に奔走した。その翌年、公会から離脱してメソジスト派に転出する。横浜のバラは不満を表明し、本多はかなり苦慮している。しかし、それは本多が教派主義者になったということではない。もともと本多にとっては、仏教宗派は久しく日本人の嫌悪するもの、そして「しかるに基督教も又佛教に劣らざる小派別を有す。これ一大不幸なりとす」であった。宗派に分かれず小異を棄てて大同に帰すべきことであつた<sup>7)</sup>。しかし、諸教派乱立するなかにあつて、公会は一教派となり、その無教派主義は現実的でなくなつてくる。本多は、教派分立の現実を容認し、また伝道の現場をふまえ、メソジスト派に移り、他方においては、日本の救いのために、教派間の一致への熱い願いと、そのための弛まない努力において生涯変わることがなかつた。こうしてのちに、福音同盟会、あるいは日本基督教会同盟という超教派協力機関の会長を歴任し、教派協力、教会一致の伝道の先頭に立つことになる。また、メソジスト三派合同の実現のために、寛容と隠忍をもつてその目的を達成した。「日本に有効なる伝道をして、キリストの王国を確実に建設する為に合同独立」することであつた。

本多の東北伝道は、弘前教会を中心に、津軽はもとより下北、南部、三本木、八戸方面にまで、辛苦の開拓伝道を精力的に展開し、その足跡を残した。明治十九（一八八六）年、本多は仙台に移り、創立間もない仙台メソジスト教会に一年、盟友押川と終始協力して伝道し、上京する。やがて明治四十（一九〇七）年日本のメソジスト三派合同して日本メソジスト教会が誕生すると、その初代監督に選挙された本多は、あたかも、「世界はわが教区なり」と言ったメソジズムの創始者ジョン・ウエスレーのように、北海道、東北から沖縄、朝鮮にまで日本全国の伝道教化に明け暮れし、ついに長崎において休みなき奮闘の生涯を終えた。六十三歳、本多は、実に、日本伝道に殉じたのである。

会津藩出身の井深梶之助は、郷里である会津の伝道に直接挺身したとは聞かない。その点本多と違う。その活躍は中央において著しい。麴町教会牧師、日本基督一致神学校、明治学院において伝道者養成にあたり、また日本基督一致教会大会議長、さらに日本基督教会大会議長を幾度か重任し、日本基督教会の伝道と教会形成に貢献し、その感化は東北をはじめ日本全国に及び、さらに井深は、本多とともに日本プロテスタントを代表して国際会議に参加した。会津藩士井深にとつて伝道は、「恩恵の福音を普く天下に伝うるは主耶穌基督の命令」であつた。「今日我が国民の道徳は如何、政治界は如何、実業界は如何、教育界は如何、頭の頂より足の爪先まで中毒の状態にあらずや」。伝道は急務である。そして「能く伝道する所の教会は其の信仰も健全にして益々開発成長するなり」。「然して我が日本基督教会の生命を愈々健全強壮ならしめんがためにも亦吾人は全力を尽くして伝道すべきにあらずや」<sup>(8)</sup>。

三人目の押川方義は東北の人ではなかつた。伊予松山藩出身であつた。彼は、エディンバラ医療伝道会の宣教

医、スコットランド人セオボールド・A・パームの招請に応じるため、ブラウンの勧めにより横浜公会より新潟伝道に赴き（明治八（一八七五）年）、やがて仙台に移り（明治十三（一八八〇）年）、弟子の吉田亀太郎とともに仙台を拠点として猛烈な勢いで伝道を開始した。翌十四年、仙台教会を設立し、それを母体として五年後、伝道者養成を目的に仙台神学校を興し（明治十九（一八八六）年）、燃えるような伝道精神をもって東北南三県をはじめ東北の各地に開拓伝道を進め、その働きは北海道にも及んだ。

明治十八（一八八五）年、押川は、日本基督一致教会に加入した。押川の東北伝道に大きな転機を迎える。元来、押川は、日本基督一致教会の成立時、反対して加わらなかつた。日本基督一致教会とは、横浜、東京などの四つの日本基督公会がその無教派主義に立つにもかかわらず、芝、品川、横浜住吉町などの五つの日本長老教会（明治七（一八七四）年）と合同して成立した教派的教会である。しかし、押川の日本基督一致教会への参加は、公会の無教派主義の立場を放棄して教派主義に変わったということではなかつた。押川は、もともと、公会と長老教会との合同それ自体には反対ではなかつたのではないか。押川の反対の主たる理由は、バラ、タムソンの指導のもとでの日本人信徒押川らの所産であつた公会の簡易信条を棄てて、宣教師主導のもと、ドルト信条、ウェストミンスター信仰告白と教理問答、ハイデルベルク信仰問答を合同教会の信条として採用したということにあつた。これには押川のみならず公会の中にも強い反対があつたのである。合同によつて新たな教会を形成するにあたり、教派的教会が日本プロテスタントの教会形態として抗し難く確立しつあつたとき、公会の無教派独立主義を生かすために、教会合同のなかにその精神を継承させる他はなかつたと考えられる<sup>9)</sup>。

それで押川は東北伝道の大きな飛躍を期して、仙台、岩沼、石巻、古川の四独立教会をもつて、日本基督一致



教会加入を決意した。第三回大会（明治十八年）は、その加入を承認し、四教会をもって「仙台中会」の組織を許可し、さらにそれを、同大会は、函館教会を旧東部中会から転属させ、「仙台中会」四教会と合わせて「宮城中会」と改称した。

日本基督一致教会加入とともに、中央から伝道者が続々と東北伝道に参加する。教勢は拳がり、伝道は拡大された。時を同じくして明治十九（一八八六）年、仙台にリバイバルが起こり、仙台地方の伝道は復興し入会者が増した。白石教会、盛岡教会、上ノ山教会、福島教会、中村教会が設立される。押川は北海道巡回伝道を重ね、室蘭、紋別は教会設立の願書を提出、札幌、空知地方にも伝道は及んだ。翌二十年には山形教会、紋別教会の設立、二十一年には鶴岡教会の設立、青森伝道の開始がある。また、仙台では仙台神学校がやがて東北学院に発展（明治二十四（一八九一）年）、押川はその初代院長に就任、また宮城女学校の設立を果たし（明治十九（一八八六）年）山形英学校を創設（明治二十（一八八七）年）、さらに韓国の教育のため大日本海外教育会（明治二十（一八九四）年）、北海道に大学設立のための北海道同志教育会（明治二十九（一八九六）年）を組織し、やがて大日本海外教育会の事業に専念するために、押川は仙台を去っていく。

押川の東北伝道は明治十三年から三十四年までの二十一年間、本多は明治七年から十九年までの十二年間である。三人の代表的な横浜バンドの伝道者たちは、東北を離れ、東北伝道にその生涯を捧げることにならなかった。三人にとって東北とは何であったのか、押川は東北を去るとともに、直接伝道からも離れていった。しかし、三人が東北に残していったものがある。それは伝道と教育である。

## 四 伝道のビジョン

まず三人とも伝道のビジョンは大きかった。井深も本多も押川も、東北の救いから日本の救い、そして世界の救いに思いをはせ、そのために心血を注いだ。日本の救いというビジョンは、この三人の他にも明治のプロテスタント先覚者たち、即ち横浜バンド、熊本バンド、札幌バンドの共通のビジョンであった。札幌バンドの内村鑑三は言う、「私どもが明治初年にキリスト信者に成りし主なる理由は、キリスト教が日本の国家を救うにおいて最も有力であると信じたからであります。私どもは愛国心に励まされてキリスト信者に成った者であります。その点において、故新島君、故本多君、小崎君、宮川君、金森君、海老名君、松村君、押川君、植村君、田村君、横井君等、みな同じであると信じます」<sup>100</sup>。

明治のプロテスタント先覚者たちに共通する濃厚な伝道的ナショナルリズムを我々は見る。時代がそれを生んだのである。幕末から明治のはじめの動乱期に生き、新しい時代の到来を体験していた若い藩士の子弟たちの心は、新しい日本の建設のビジョンに燃えていた。彼らは洋学を学ぶために、宣教師やアメリカ人教師のところに集まった。長崎のフルベッキのところでは、大隈重信、後藤象次郎、小松帯刀、江藤新平、副島種臣、西郷隆盛その他が教えを受け、横浜のヘボンのところには横浜バンドのものたちはいうまでもなく、大村益次郎、高橋是清、林薫、その他のものがいた。しかし、すべてがキリスト教信者になつたわけではない。明治の評論家、山路愛山によれば、「試みに新信仰を告白したる当時の青年に就て其境遇を調査せよ。植村正久は幕人の子に非ずや、彼れ

は幕人の総てが受けたる戦敗者の苦痛を受けたるものなり」であり、愛山は続いて本多庸一、井深梶之助、押川方義をあげて、「新信仰を告白して天下と戦ふべく決心したる青年が揃ひも揃うて時代の順潮に棹すものに非ざりしの一事は当時の史を論ずるものの注目せざるべからざる所なり」<sup>(11)</sup>と言う。

その他にも例えば、新島襄は佐幕派上州安中藩、その妻山本八重子は会津藩砲術師範の娘、鶴ヶ城に籠城し、七連発銃を撃ちまくって戦った婦人であった。内村鑑三は佐幕派上州高崎藩、新渡戸稲造は佐幕派奥州南部藩である。

会津藩の井深梶之助は、父に随行して越後の戦いで薩長と戦い、一歳不足したために白虎隊には加わることが許されなかったが、会津籠城の際には小姓として藩主松平容保の傍に終始いた。国破れ山河ありの逆境のなかから東京に遊学し、横浜修文館においてブラウンの教えを受けるに至った。

津軽藩の本多庸一は、藩命によって庄内藩へ攻守同盟の使者として赴いたが、その間に藩論が一変した。津軽藩は奥羽列藩同盟を離脱、本多は庄内藩に対する信義を主張して脱藩し、庄内に走った。かえってその清節を賞せられ罪は不問、帰藩を許され、さらに藩命によって内地留学、横浜のブラウンのもとで洋学を学ぶことになった。井深も本多も、そこで押川に会う。

伊予松山藩の押川方義も、長州征伐に参戦し、鳥羽伏見の戦いに敗れた松山藩の城の明け渡し、また土佐藩兵が松山に入るのを見る。やがて藩命により上京、大学南校に学び、続いて横浜の修文館、ブラウンのもとに来る。本多の言葉に、「我輩は逆境に立った人間であった。勤王党の人々は幕府を倒すときには、尊王攘夷を標語としたが、愈々天下を取ると、攘夷どころではない。幕府の開港主義にしんにゆうをかけたやり口であった。それをみ

て我輩は非常に憤慨した。此鬱憤をはらさねばならぬと思つて居つた。所が基督を聞いて、眞の日本を救うものは之である事を知り、之が爲めに身命を捧げても苦しくないと言ふ決心を起した」<sup>10</sup>。

このようにして三人も、他の三バンドのものたちと同様に、維新の激動の只中でキリスト教と出会うことになつた。しかし、彼らはキリスト教を学ばんとしたのではない。洋学を学んで、新しい日本の建設のために、独力で自分の生涯を切り開いていこうと欲したのである。もちろん、薩長藩閥明治政府による道は閉ざされていた。むしろ、その好意に浴することをいさぎよしとしなかつた。あるものは深い憎しみさえもつていた。そういうものたちがキリスト教を信するに至つたのはなぜか。それは彼らの師の人格的感化であつた。師の説くキリスト教には反発を感じていたものたちでも、その人格を通して「キリスト教を見、理解し、これを信奉したのである」<sup>11</sup>。そしてついには、キリスト教が、それを信じるることによって自分たちの志を達成することができる、キリスト教こそ日本を救うものだ、新しい日本の建設を完成する道だと確信したのである。キリスト教のとらえ方には互いに違いがあつても、彼らにとつてキリスト教とは、まず唯一神信仰と十字架の基督と隣人愛、そしてとくに彼らの師の高潔なる人格から感得された禁欲的な厳格な倫理であつた。

山路愛山によれば、「彼等は浮世の榮華に飽くべき希望を有せざりき。彼等は俗界に於て好位地を有すべき望少かりき」<sup>12</sup>。今や政治によつて人を支配するのではなく、キリスト教によつて人々を啓蒙教化し、外側からではなく内側からの変革によつて新日本を建設することを使命として立つた。こうしてキリスト教こそが新日本建設の最もすぐれた道であるとの確信に立つたとき、国民道德の支柱であつた儒教が批判された。儒教そのものもはや過去の時代のものとされた。上下卑賤の階級的道德として封建社会を支えた封建社会の教学であつた。今日日

本は、西洋文明を導入して近代国家として建設される、そのためにはキリスト教は不可欠である、キリスト教が西洋近代文明と社会の精神的基礎であるからである、明治政府はそれを妨げている、キリスト教を導入しなければならぬとの主張が彼らの間では聞かれた。

こうして、幼少より儒教的教養のなかで育った明治のプロテスタント先覚者たちは、儒教からキリスト教に入った。その場合、儒教を批判して棄否するよりは、むしろキリスト教によって儒教は完成されとした。小崎弘道は言う、「私共が儒教より進んで基督教に入つたのは彼を棄て、之を取つたのではなくて、基督教は儒教の精神孔子の教の真意を成就するものなることを信じたが為である。私は我国の神道家や仏教者等も其の如き態度にて基督教に帰せんことを望むのである」<sup>15)</sup>。

また武士道についても、その長所とともに短所も指摘しながら「神が特に日本に賜わりたる旧約なるべきと信ず」と言い、愛の「洗礼を受けた武士道」「余輩は武士道の精粹は基督教に依りて保全せらるべきを疑はず」<sup>16)</sup>と植村正久は語る。押川方義も「武士道化したる基督教」<sup>17)</sup>を言う。内村鑑三は、武士道は日本最善の産物であるが、武士道そのものに日本を救う力はない。「武士道の上に接木されたキリスト教」こそ世界最善のもので、日本のみならず全世界を救う力がある、と言う。内村の言葉に、「いわゆる熊本バンド、横浜バンド、札幌バンド、これに加わりし者の多数は武士の子弟であった。彼らはいずれも、武士の魂をキリストにささげて日本の教化を誓ったのである。そこに朝日に匂う山桜の香があった。外国宣教師はこれを見て驚いたのである」<sup>18)</sup>とある。

したがって、彼らは、キリスト教といつても西洋からの直輸入的受容を好まず、植村によれば、「日本人は西洋人に学ぶべきも、西洋人を通して神に接するを要せず、我ら自らが神に交わり、我ら自らがキリストを見、我ら

自らが聖書を解すべきなり」<sup>98</sup>。故に日本はキリスト教のゆえに否定されるべきではなく、日本は救われねばならぬし、新しく建設され、キリスト教によつて高められ完成されねばならぬものであった。そしてその日本は、日本のためにあるのではなく、日本は世界の中の日本としてその天職を果たすべきものであった。内村鑑三は、日本の天職は東西文明の仲人とし、さらに宗教の民である日本人によつて、欧米で捨てられたキリスト教を日本において保存し闡明し復興して、再びこれをその新しき形において、即ち人類全体があこがれる純信仰を世界に伝えることであるとした。植村正久も「余輩は思ふ、二十世紀において、全世界のキリスト教に一大改革を起こすの使命は日本の教会に託せられ居るにあらざるかを」<sup>99</sup>と云う。押川方義の大日本海外教育会告白によれば、この組織の会長が押川であり副会長が本多であるが、

夫れ国家独立の根柢は国民精神の独立にあり国民開明の基礎は各人教育の発達にあり……今や帝国朝鮮をして真乎独立の基礎を固ふし大に革進する所あらしめんとするに方りては則ち亦大に之が教育を振張し之が精神を脩養せざるべからざる也。……然るに今や西洋大に東洋に待ち東洋亦大に西洋に得る所あらんとす 方さに是れ東西相会して文化一新するの機勢にあらずや。而して大日本帝国此期に際するの天職は極めて光大莊重なり 即ち東西の文化を合成し世界の大道を發揮せざる可からず即ち日東第一の聖地より起つて靈化したる新文明を宇内に布及せざる可からず……<sup>100</sup>

明治のプロテスタント先覚者たちの間で、日本の精神的伝統である儒教、神道、仏教に関し、さらに日本、日本国家、天皇について、キリスト教においてどのように据え直したか、人により、また時や状況や事柄によつて

対決的、あるいは妥協的、変革的、あるいは総合的であり、それらの間で動揺し、不徹底であり、また一貫性に欠けたりして、多分に問題性を示していることは止むを得ないことであった。また、このようにも考えられる。内村鑑三の云う二つのJ、JesusとJapanと、二つの中心をもつ楕円を考えると、その二つの中心を結び、それを底辺とし頂点を楕円の円周上にとるとき、その点と二つの中心を結んで出来る三角形は、円周上のどこに頂点をとるかによってその形はちがってくる。プロテスタント先覚者たちによって頂点のとり方がちがうし、したがってそこに出来る三角形は様々になる。イエスという中心の方に傾くもの、あるいは日本の方に傾くもの、そして傾き方もちがうであろう。

井深も本多も押川も、明治の生んだ第一級の人物と言ってよい。個性は相互に著しく違うが、洗礼を受けた日本武士としてキリスト教伝道者となり、ビジョンを共通にし、日本の救いと新日本の建設を目指して身命を賭して奮闘し、その生涯の馳せ場を走りぬいた。

## 五 教育の遺産

さて教育であるが、三人の横浜バンドの東北の代表者たちの残していったものに教育がある。

本多も井深も学校を建てなかった。また東北に学校を残していかなかった。しかし、井深は、明治学院の総理として初代へボンの後継者となり、三十年間その職にあつてキリスト教教育に大きな貢献をした。本多も郷里弘

前にあつたとき、東興義塾の第二代塾長として郷里の青年の教育に力を尽くし、後、青山学院院長として十七年間教育事業に専念し、多大の感化を与え同校発展の基礎を築いた。押川のみ学校を建て、東北にそれを残した。

仙台の東北学院（仙台神学校）である、十五年間院長として教育に力を注いだ。宮城女学校、山形英学校の設立、大日本海外教育会、北海道同志教育会など教育事業に情熱を燃やした。

このようなプロテスタント先覚者たちの教育への熱い関心の背景には、彼らの育つた藩の教育を考へることが出来る。幕末の幕府や各藩は競つて教育の奨励またその条件の整備、とくに洋学の導入に力を注いだ。藩校の充実、留学生の派遣など目を見張るものがある。さらに井深たちの師ブラウンの感化も見逃すことができない。「私は日本に福音を伝える一番よい方法は日本の青年を教育することだと信じている。二十人の日本人宣教師を私の学校で教育するとしたら、二十人のブラウンが世の中へ飛び出して行くことになるではないか」<sup>10</sup>。押川たちはこのブラウンの言葉をよく覚えていた。

さらにブラウンの教派的背景をみると、それはオランダ改革派である。改革派は十六世紀スイスのジャン・カルヴァンの宗教改革から起つたもので、フランスに入りフランス改革派、オランダに入りオランダ改革派、ドイツに入りドイツ改革派、スコットランドに入りスコットランド国教会（長老派）、イギリスに入りピューリタンとつたのである。一六三〇年、アメリカ大陸に渡つてマサチューセッツ植民地を拓いたピューリタンは、六年後にハーバード大学を設立し、さらにまもなく初等教育を始めている。改革派は教育を重んじた。それは、聖書を学ぶ以外に真理を学ぶ道はないとし、学校を興して聖書知識の普及に努め、また聖書共同体としての社会の建設のため指導者養成に力を入れたのである。アメリカ・プロテスタントの柱の一つとして改革派があり、したがって、



アメリカでは早くから教会とともに学校が設立され、教育が盛んであった。教育を重んずることはアメリカ・プロテスタントの特質の一つである。宣教師たちによる学校の設立は、単なる伝道の手段ではなかった。それはキリスト教的人物養成の道であり、日本の救いを目指す伝道そのものであった。

井深の言葉に「夫れ一国民を教化するの道は、第一直接伝道にあり。是れ勿論の事なり。然れども唯直接に福音を説教することのみをもつて唯一の方法と為すは、寧ろ浅薄の見と言わざるべからず。真に国民を教化せんと欲せば、其の脳髓となり指導者たるべき人物を教化し、而して国民全体の思想と観念を基督教化せざるべからず。然して之がためには、唯公衆に向つて広く福音を宣伝し教会を建設するのみならず、最高の教育機関を設けて基督教的人物を養成するの必要あるなり」<sup>28)</sup>とある。

つまり、日本の教化のためにキリスト教的指導者養成の必要を訴えている。本多庸一は言う、「日本の各学校各教会よりは色々の人物貴器多く出づべし。神学の新説等は京都（同志社）又は白金（明治学院）辺より将来何程湧出るやも知るべからずとも、さまで羨むことにはあらず。希くは神の恵みにより我輩の学校より所謂 Man を出さしめよ。Man の資質多くあるべし」と雖 *Man Sincerity, Simplicity* 最大切なるべし<sup>29)</sup>と。教育の基礎理念は人間の教育であると端的に言っている。押川方義の北海道同志教育会の趣意書は、「嗟呼教育なる哉教育なる哉社会の改良国民の教化は独り寺院教会の能くする所にあらず有為の人物を養成して国家の根底を固め多能の技工を出して社会の形成を助け内鞏外美の文明国を造るは実に真正なる教育に在つて存す<sup>30)</sup>」と。教育の主眼は真正の人物の養成であるとは、押川の「東北学院の教育方針」<sup>31)</sup>にも繰返し強調されている。「夫れ教育は、文字を理解し、事実を証明するのみを以て足れりとすべからず、人物其の物を養成するこそ、教育の主眼にてあるなれ」。キリスト

教主義をもつて教育を施そうとするのは、世人が言うように狭隘淺薄なる目的をもつてするのではない。完全な教育を施さんとするもので、世人一般の教育とその主眼において全く異なるないし、異なるべきようもない。そしてその完全な教育とは、完全なる人物を作り出す教育であつて、「知識広く、道徳高く、精神活発有為に、身体強壯健全なるに非らずんば、真正の人物とはいふべからず」。そしてかかる人物が「同志協力以て身命を擲ち、國家に殉する覚悟なかるべからず。……是れ所謂國家の元氣、社會の主動者たるなり。斯かる豪邁なる人物によりてこそ、其の國の改良は真に出来得るなれ」。「願くは諸君、今日我國の現況を察して、夜半瞑目、胸に手を置きて前途の日本を思へ、基督教主義は人をして善美に、高貴に、偉大に、敬虔に、仁義に、慈愛に自然を愛し、天を愛する君子的英雄、豪傑的君子、即ち真正のツル・マンを造成するを以て大主眼となす」。さらに押川は、「然れども教育といふものは、宇宙万般の理を考究し、人世の完全を期する者なるが故に、國家といふ一小部分の内にと束縛せられ、現在の政治を維持する為に、万般の道理を犠牲に供することは、其の為す所にあらず、蓋し真理は、一國若しくは一國民の專有物にあらず、況んや現制度の箝制を受くるの理あらんや」。「基督教主義は、神人合一の主義なり、故に之を宇内の主義といふも可なり。真理主義といふも可なり。即ち真理ある処には、我もまた在るなり、我れ忠孝を重んず、是れ真理なればなり、我れ國を愛す、是れ真理なればなり、我れ自由平等を重んず、是れ真理なればなり、此処に勢力集まり、此処に真理集る」と、強固な確信をもつてキリスト教主義教育の本義を説くのである<sup>切</sup>。

押川方義は、「東北をして日本のスコットランドたらしめん」と言つて、伝道に東奔西走し、また学校を興した。東北をして日本のすぐれた人材の養成地としようとの願望からであつた。スコットランドについては、新潟伝道

の際、押川が助けた宣教師バームから直接に学んだのであろう。バームはスコットランド人であった。スコットランドはイングランドの東北、寒冷の地、貧困の地であるが、改革派的宗教改革によって人々の魂が清められ、有為な人物を輩出した。

ところで、井深にとつて東北は会津藩であつたろう。本多にとつては、東北は津軽藩であつたろう。押川にとつてのみ東北は東北であつた。しかし押川に、その東北について、どれだけの認識と、理解と、同情があつたのかはわからない。おそらく、東北から東北でなく、東北から日本を見ていたにちがいない。

東北は戊辰戦争の結果、敗者の住む所とみなされた。それで白河以北一山百文の値うちしかないと蔑視の対象となり、後進地と見下げられ、また見放されることになった。内村鑑三は上州高崎の人であつたけれども、東北は日本の尻尾であると言つた。暴言として取り消したが、東北は貧しい、貧しければ民の心を耕す必要があると言ふ。そして薩州の産はその軍人、長州の産はその政治家、畿内の産はその美人、江州の産はその商人、東北の産は正直なる高潔なる神の人であるべきだと。彼によると、これは根柢なき希望ではない。東北人は正直である。頑にして愚である。東北人は容易に真理を受けいれない。しかしひとたび受けいれれば、頑固にこれを維持する。人をはばからずして愚（世の称する）を押し通す勇氣がある。東北を化することはその石地を耕すがごとく困難である。果実は容易にこれを取むることができない。しかしひとたび収めし果実は容易にその味を失わない。東北の靈魂開発の希望が有する。涙と共にまく者は、喜びと共に刈りとらんと<sup>80</sup>。

さらに、内村は別の文章のなかで東北について、「東北を救うとは東北人を救うことである。東北人を救うとは東北人一人一人を救うことである。……そうして人を救うとは、彼を神に導くことである。人を、その造り主に

して父なる神に結び付けて、その人は完全に救われる。その時、彼は、独立の人となる。宇宙は広し、天恵限りなし。政府にたより、政党にたより、社会にたよりて人はいつまでも依頼の人となる。スコットランドはわが東北より沃饒なる国ではない。スコットランド人の多数が靈的に救われて、スコットランドは今や世界屈指の富国となつた。……国の富はその土地においてあらずして、その民の心においてある。国の救済を単に経済的方面より見るほど、浅薄にして愚かなることはない。東北の救済しかり、いたつて容易である。聖書一冊あれば足りる」<sup>26</sup>と言つ。

もう一つ、内村の「地人論」に「歴史は山に始まり、平原を通過して海に終る」、「山は学校にして平地は社会なり」<sup>27</sup>という言葉がある。

東北は日本の山ではなからうか。東北は、人物を養成して平地に送り出すところではないか。押川の「東北をして日本のスコットランドたらしめん」は、そのような山としての東北を含蓄する。

最後に、東北の南会津において二十四年間働いたすぐれた学者であり、ドイツ改革派の宣教師クリストファー・ノッス博士に *Tohoku the Scotland of Japan* (一九一八年) がある<sup>28</sup>。そのなかでノッスは、深い同情と理解とをもって、東北の風土、住民、生活、宗教、貧困、労働者の悲惨その他の社会問題にふれ、広範囲にわたつて紹介し、論じ、批判している。そしてキリスト教伝道の過去と現状と未来を語り、伝道者の情熱と洞察力と幻とをもつて東北伝道の意義を説いている。

ノッスによると、ドイツ移民は、ペンシルヴァニアにおいて森の深い土地を選んだ―他の移民は広々とした草地を選んだ―。大木を倒して開墾するのは容易ではないが、樹木の繁っている所は土壤が肥えていると考えたか

らである。伝道においてもそうであって、困難の少ないところ必ずしも最上のところではない。もつとも近い道が最上の道ではない。日本伝道は長い準備と忍耐と耕作があつてこそ、大きな収穫がえられるとノッスは確信する。そしてその最後に言う。

我々の美しい東北、その山々、雲の上にそびえて輝き、そのふもとの湖、サファイアのように青く澄み、その水晶のよ  
うな清流、勢いよく流れ下り、海辺に打ち寄せる青白い波と交わる。そのすばらしい溪谷はエメラルド色の緑に包まれ、  
黄金色にきらめく。その褐色の畑、褐色の農家、褐色に日焼けした農夫と女たち、そして樂しげに跳び廻る子供たち、  
もし神の御心であるならば、スコットランドが西洋にとつて最も純粋な最も真実なキリスト教の本拠であつたように、  
東北はアジアのスコットランドとなるのであろう。

ここに東北の山々と人々への熱い思いを見る。それは忘れてはならないもの、失われてはならないものである。

注

(1) Charles W. Gleghart, *A Century of Protestant Christianity in Japan*, pp.49-53 では弘前と東京を加えている。  
大濱徹也『明治キリスト教会史の研究』(三四頁)は静岡を挙げて四バンドとしている。しかし、日本プロテスタントの

その後の展開において果たした歴史的役割、意義を考えると、横浜、熊本、札幌の三バンドに比することはできない。

(2) 佐波巨編『植村正久と其の時代』第三卷、六六四―六六七頁。これは、明治七年四月、横浜、東京の二公会の代議会で決定した草案で、同年十月の横浜、東京、神戸、大阪の四公会の代議会において可決、確定。翌八年四月神戸で開催の公会総会において、一般公会の共同条例とすることに取り定められたものであった。その間の事情については補注(一)を参照。

(3) 右同第三卷、六四七頁「本邦の信徒の奮発し居たるに拘らず、是等外国教師の艱難を忍びつゝ、尽力したるにも拘らず、日本の伝道好景況なりとの報知、外国に達すると同時に、宗派的の宣教師頼みに増加し、東西各地に宗派的の教会を設立したり。此所に於て宗派を却け、日本純粹の基督教会のみになさんとの志を抱ける輩は大いに其の鋭気を挫かれたり。さらぬだに前途茫茫たるものを、此に一つの手酷き鞭を加ふる出来事こそ起りたれ、其は他にあらず。明治七年、新島襄氏帰朝す。予等は同氏帰り来らば、必定無宗派の主義を賛成し、非常に大いなる援助を与えらるゝことならんと樂しみ居たるに、豈図らんや、氏は大いに無宗派主義を非難し、外国の宗派に属するに非ざれば事業挙がらず、伝道の前途望みなしとして飽くまでコングリゲーション主義を固執し、宗派的の運動をなすべしと明言せり。神戸、大坂の諸教会是れより漸く約束を解き、純然たるコングリゲーションの旗幟を掲ぐるに至れり」。

なお、新島襄の帰国は、明治七年十一月である。実にそれに先き立つ同年二月に、横浜公会は、その牧師として、新島を招聘することを決議し、長老奥野昌綱が長文の懇篤な招聘状を書き送った。不思議なことに、それは新島にとどかなかつたと言ふ。「此上はせめて日本人の信徒のみにても一致協同して、この主義を貫かんとの志望が発して」が新島招聘の主旨となつている。しかし、新島は受諾しなかつた(右同第三卷、六二六―六三八頁)。「事情斯の如き場合に、新島は米国から帰朝した。予てより全国一致教会主義と外国宗派排斥とを標榜していた有志の徒は、その主張に対して、

強大なる援兵を獲べく希望して、此の新婦朝者を訪問した。然るに豈測らん、新島は強い宗派論者であつた。彼は外国の優勢なる教派と結託せずんば、事をなすが困難であるとの理由のもとに、日本基督公会の有志者の提議を斥けた。其れのみか反対に之を説伏せんとまで試みたのである。新島訪問者のうちには成るほど全国一教会主義は、孤城落日、外国の力ある宗派に寄るに如くはなからうと考へ出して、間もなくプレスビテリアンの宣教師団体に走るものも出来た。

安川享、戸田忠厚の如きが其れである。アメリカン・ボードの宣教師のうちでは、デピスの如く新島と同意見の人が勢力を増して来た。……神戸公会にも大阪公会にも長老や執事があつた。宛も現今の中会のやうなものを開くために、双方から代員長老を派遣したこともあつた。……西も東も同じ日本基督公会といふ名称のもとに、組織にも差異なく、長老と執事とを置いたのである。然し新島の主張が力を得た結果であつたか、少なくとも其の後の事であるに相違ない、神戸大阪の雲行きが大分變つて来た。神戸が先づ長老といふ名称をば一旦会長に改め、更にそれを執事にしてつた……(右同第三卷、六三六―六三七頁)。

(4) 横浜公会の教会規則については、「公会定規」「公会規則」「日本基督公会条例」の三つがあつた。それぞれの成立事情、また内容特色については、補注(一)を参照。

(5) 『植村正久と其の時代』第一巻、五四〇頁。

なお、熊本バンドの生みの親、L・L・ジェーンズは、H・ブッシュネル(Horace Bushnell)やH・W・ビーチャー(Henry Ward Beecher)に私淑していたと云われている。ブッシュネルとビーチャーはともに、十九世紀後半のアメリカ・プロテスタント自由主義神学の代表的人物である。その影響もあり「ゼーンズのキリスト教信仰が、個性的、内発的なものを尊重する、いわゆるリベラルな聖書主義の立場に立ったもの」であつた。「それ故、彼は、形式的な儀式

を甚しく嫌悪した」。牧師とか、洗礼とか聖餐式等の話といえは非常に「罵詈」したという。「そこから、祈禱を特に重視する彼の信仰態度が生まれてきたのであらう。……祈禱による信仰の指導が、彼の教化のすべての如き観があったのである」（辻橋三郎『奉教趣意書』の成立とその後―熊本バンドの精神―）同志社大学人文科学研究所編『熊本バンド研究』一七三頁）。

「ゼーンズのキリスト教はいわば無教会的キリスト教で、制度的、教義的、また教会的キリスト教には反対でなくとも批判的な立場をとっていた。後年熊本バンドのある者が、政治的、哲学的、また倫理的キリスト教に走つたことは、必ずしも不可解ではない。キリストの贖罪論にしても、彼らはブシュネル流の道德的感化説をとつて、正統的な代償説、満足説の如きものを排していたようである」。「ゼーンズを通してビーチャーの神学思想が熊本バンドの学生の心に滲透したことは言うまでもなく、宮川はビーチャーの如く一教会に四〇年も奉仕することは牧師の理想として心の中に秘めていたのである」（高橋虔「宮川経輝と金森通倫―信仰と人間―」『熊本バンド研究』三一〇頁、三一二頁）。

海老名弾正は語っている、「余らは熊本を出るときから教会の無教派合同に就て、同志社のデビス、新島襄に其の決心のほどを質ねたのであるが、言葉の上では合同賛成といふから、そのつもりでゐたのが、いよいよとなるとそれは精神的の一致合同だといふのであった」。これは明治二三年の一致・組合両教会合同不調後の談である。小崎弘道も「熊本から出て来た者は、無教派であつた。またアメリカン・ボールドでも何うでもよい方針だと言ふことであつた。各派の者の協同で、アメリカン・ボールドは出来てゐるとのことであつた。だから、熊本から来た者は皆合同賛成であつた。キヤプテン・ゼーンズが本来プレスビテリアンの人、妻君はリフオームドの牧師の女であつた」と言っている。兩人とも



合同不調に終わらしたのは新島襄とデビスの反対が原因としている（『植村正久と其の時代』第三卷、七〇二―四頁）。

小崎弘道は、この無教派主義について、第一に日本人の国民性から出たものとして、横浜の日本基督公会と熊本バンドとを例にあげ、第二に、ジェーンズが極力吹き込んだとし、「日本には欧米の如く各種の教派を要せず、単にキリストの福音さえ受け入れば事足るので、教会政治杯は必要に依じて設ければ可なり」との主義であった。第三に、アメリカン・ボードが教派的でなかったとする。したがって組合教会は元来無教派主義で、ただ某地の基督教会と称した。しかし、伝道、教育、慈善、其他社会事業を行うにあたり、組織をつくるのが急務であることを認めて、一つの団体を作ることになり、明治十九年、日本組合教会が組織された。組合という名称も、「独立」とか「自治」という名称もだされなければ、教会の組合というので、通俗的な「組合」がよいとなった。「会衆」の名称が挙げられなかったことは、興味深い現象で、その理由は、日本の組合教会のものは多く無教派主義で、英米の会衆教会主義を輸入したとの意識はなかったためである。こうして出来た組合教会の信条は、福音同盟会の教理基礎九箇条をそのまま採用し、簡単な七箇条の規約、規則という語を避けて規約とし、各教会の独立をこわさぬように注意し、協力の伝道その他の事業を行なうに必要な条項だけを掲げたと云う（小崎弘道『七十年の回顧』七六―八〇頁）。

なお、ジェーンズが洗礼式を執行したことに関しては、アメリカン・ボードのデビスに、宣教師派遣を依頼したが、デビスは仲間の宣教師たちとの相談の結果、平信徒のジェーンズに洗礼執行を勧め、明治九年四月三日、一八名の熊本洋学校の卒業生と在校生が受洗することになった（右同二三頁、『熊本バンド研究』二八頁、二〇五頁）。

(6) 補注(三)を参照。

(7) 「日本に於ける基督教」 青山学院編纂 『本多庸一先生遺稿』 一一七頁。

(8) 『井深樞之助とその時代』 第三卷、一九―二二頁。第一卷、三九五頁。

- (9) 教会合同と押川方義については、補注(二)を参照。
- (10) 山本泰次郎編『内村鑑三信仰著作全集』第二四卷、三三〇頁。
- (11) 山路愛山「現代日本教會史論」(岩波文庫『基督教評論・日本人民史』)二五頁。
- (12) 青山学院編『本多庸一』三九頁。
- (13) 海老沢有道、大内三郎『日本キリスト教史』一六八頁。
- (14) 山路愛山 前出 二五頁。
- (15) 小崎弘道『七十年の回顧』三八頁。
- (16) 『植村正久著作集』第一卷、四一三、三九五、五九六頁。
- (17) 岩波書店『文学』四七卷三号、一〇〇頁。
- (18) 『内村鑑三信仰著作全集』第二三卷、一九二頁。
- (19) 『植村正久著作集』第六卷、四八頁。
- (20) 右同 四九頁。
- (21) 『東北学院百年史』四一五頁。
- (22) 『東北学院七十年史』一六頁。
- (23) 『井深梶之助とその時代』第三卷、二四四頁。
- (24) 青山学院『本多庸一』二五八頁。
- (25) 『東北学院百年史』四二五頁。
- (26) 『東北学院百年史』資料篇 三六～四一頁。

- (27) 鬼塚正二編『恩師のみあと』「女学雑誌社時代その3」二七一頁。
- (28) 『内村鑑三信仰著作全集』第一七巻、九四、九五頁。
- (29) 右同 第二四巻、二九七、二九八頁。
- (30) 右同 第四巻、三〇、二三頁。
- (31) 補注(三)を参照。

補注(一)横浜公会の教会規則について

まず謀者安藤劉太郎の耶蘇教探索報告書(明治五年旧三月一三日付)に書かれている全文漢文の「公会定規」なるものがあつた。これは、横浜公会設立直後バラによって提示されたものであらう(小澤三郎『幕末明治耶蘇教史研究』三一九―三二二頁)。

全体は四つに区分され、その第一惣規において、聖書は神靈の黙示によるもので信仰と行為の規準であるとの宗教改革の信仰、とくに改革派の立場が表明されている。第二可信点は、使徒信条を十項に分けて掲げ、第三可行事では、十誡、二礼典、死者のために祈らずとし、最後に会中例則は、十四項にわたつて教会の組織と運営を規定する。長老について九項目に及んでいる。しかし、いわゆる長老政治を指向するものとは言い難い。教会組織の未発達の段階であつて、宣教師バラは「此公会ヲ立テシトキ条目未ダ熟セザリシ」と言っている(『植村正久と其の時代』第二巻、一五六頁)。

同年の秋、かなりの修正が加えられて「公会規則」となる。これは二つの部分から成り、「公会規則」と「内規條」に分かれ、前者は信仰と生活について十五項目となつている。

「公会規則」の第一項、すなわち冒頭に、「公会定規」と同様に、聖書の権威が打ち出されている。第二項から第九項

までは「公会定規」の使徒信条にあたる部分であるが、キリストの誕生、受難、埋葬、陰府下降、復活、高挙は削除されて、それに代って、キリストの神人両性、父と子より出づる聖霊、アダムの原罪、キリストの贖罪などが表明されている。つまり、「定規」よりも教理的である。ニカイア信条、カルケドン信条などの基本信条が基礎になっている。これらに続いて六項目の生活綱領が挙げられている。

「内規条」においては、教会の組織、運営の仕組が整い、表現も明瞭になっている。その第一項目には、「長老の政事たるべし」と謳っている。第二項では「教師、長老、執事の三職」を教会の職務とし、それぞれの職務の内容を、第三、第四、第五の項目で明かにし、第六項は年二回の教会会議、第七項は長老、執事の選挙、第八項以下は「定規」の「中規則」にあるのとはほぼ同様であって、会員として守るべきことや戒規に及んでいる。第十五項が教師、長老に関する戒規になっており、注目に値する。「日本に公会多立までは美国の教師、長老の裁判を受べきなり」。これがプレスビテリアニズムの方向を指しているのか（幸日出男『日本基督公会について』参照）。「定規」、そして「規則」においてはさらに明瞭に、教会の政治は、聖書に適合するもの、つまり聖書的政治として「長老の政事たるべし」としているけれども、公会が横浜公会一個だけであるためか、年二回の教会総会は定められているけれども長老の会議はない。

この「公会規則」は、翌年（明治六年）の三月の公会総会で、逐条審議、検討されている（右同第二卷、一二四―五頁）。

他方、その前年、第一回のプロテスタント宣教師会議が開かれている。横浜公会設立後六ヶ月、すなわち、明治五年八月、横浜においてである。S・R・ブラウンが議長となり、日本伝道の諸問題について協議されている。まだキリスト教禁制下であった。聖書翻訳のこと、伝道方針を定めること、そして日本における教会組織のことが議題であった。

この会議の出席者は、改革派五名、長老派五名、アメリカン・ボード宣教師五名、以上宣教師十五名、それに一二、

三名が加わった。横浜公会の長老も招待された。また、英国教会の牧師もそのなかにいる。

三つの議題のうち、日本に設置さるべき教会組織については、激しい議論となつて会議は紛糾したと言ふ。最後に至つて、議長ブラウンの提示した妥協案が全会一致で採択された。それは左記の通りである。

夫れキリストの教会はキリストに在りて一体たり。プロテスタント教徒間の諸派分立の如きは偶然の出来事にして、キリスト教徒の精神的一致を妨げず。然れども既にキリスト教国に於ても尚此れが為め教会の一体たることを曖昧にするの嫌ひあり。況哉諸派分立の歴史を了解せざる異教国に於てをや。且つそれ吾等宣教教師はあまりに顕著なる差別より生ずる弊害を避けんが為めに伝道の方法を一定せんことを希望するものなるが故に、吾等は本会議に由て与へられたる此の最初の機会を利用して、自今吾等の援助に由て設立せらるべき日本の諸教会に於ては、成るべく、其名称及び組織を同一ならしむべく努力せんことに同意す。即ち其名称は基督公会と言ふ公同的のものとなし、其組織は各教会の政治を其会員の協賛に由り、教師職及び長老職に由りて執行せらるべきものとす。右決議す（山本秀煌編『日本基督教会史』三九―四〇頁）。

右の決議は、宣教師たちの日本伝道の努力目標を示したものである。異教国日本伝道のためには、諸教派の宣教師たちの一致協力態勢が必要であり、その結果設立される教会は、それぞれの宣教師たちの教派に所属するのではなく、日本独自の国民的教会の形成を目指すべきである。したがつてできるだけ（as far as possible）、名称においても組織においても同一のものとなるように努めるといふのである。

ところで、その組織になると、教会政治は、各個教会が決定するもので、その牧師と長老によって、会員の協賛をもつて行わるべきものであるとし、同一の名称のもとで政治に幅をもたせたといつてよいと思われる（the government of each church shall be by the ministry and eldership of the same with the concurrence of the brethren）。

横浜公会の設立に指導的役割を果たしたオランダ改革派のブラウン、バラ、また長老派のデイヴィッド・タムソンらの宣教理念が、この決議に色濃く蔭を落していることは云うまでもないことであるが、米国のオランダ改革派教会もこれを支持し、「米國ノ公会ヨリ文通我邦ノ公会宗派ヲ別タズ一公会タラン事ヲ許諾セシコト」が、バラより横浜公会に伝えられている。（明治六年一月十九日、『植村正久と其の時代』第二巻、一三八頁）。しかし、米國の長老派伝道局は、日本に中会（presbytery）を組織してそれを支那の大会（Synod）に属させよと訓令し、その直前に長老派宣教師クリストファ・カラゾルス一派による中会設立があり（明治六年一二月）、翌年（明治七年）九月になると、横浜長老教会が誕生する（山本秀煌編『日本基督教会史』四一、六一頁）。

さて、前記の明治六年三月の公会総会において、「公会規則」が逐条審議される過程で、重要な修正提案が本多庸一、篠崎桂之助、押川方義等から出ている。それは、「我輩ノ公会ハ他ノ諸宗派ニ係ラズ……」という公会の無教派・独立主義の主張である。「公会規則」にはなかったことである。おそらく、バラ、ブラウン、タムソン等の感化によるものと思われる。公会の無教派主義は、バラ、ブラウン、タムソン等から出て、日本人信徒たちが深く共鳴し、次第に強い自己主張、大きな願望となつていったと考えられる。彼らは、教会につき、教派につきいまだとくに学んだわけではなかった。彼らの知っていたのは、忌むべき仏教界の宗派争いであつた。

さらに、この総会において、タムソンの提案によって規則改正を検討する委員会が設けられ、日本人四名、関係ミッション宣教師三名が選挙された。日本の教会規則を作るのであるから「日本ノ風俗ヲヨク知ル」日本人を委員に、「信ズ

ベキ一ケ条ヲヨク熟知」する西洋人も委員に加えねばならぬとタムソンは説いた。そしてそもそも信条は、一朝一夕に出来たものではなく、古来より多くの議論があった。「前轍ヲフムヲ戒メ改正スルコトアラバ永ク公会ノ基礎トモナルベク又西洋ノ人ヲシテ撰シムルハ宗派多くアレバ改正ノ後ソノ書モノヲ神戸ノ教師ニモ見セテ此ノ日本ノ公会後ニハ同一トナスベケレバナリ」と。

こうして委員会の検討の結果が、九月の総会に提出されたが、同時に東京公会の新設立が承認され、横浜公会支会として東京公会の設支会式が行われた。そして両公会を代表する長老と関係ミッション宣教師によって代議会が組織され、第一回代議会が翌月十月に開かれて武総地方伝道を決議した（『植村正久と其の時代』第二卷一三五―一三七頁）。

ところが、キリシタン高札撤去（明治六年二月）とともに諸ミッションが続々来日し、伝道を開始し、それぞれの教会を建設しようとする空気が濃厚となり、また長老派の中にも分裂が起り、横浜長老教会の設立をみることになる。その様な状況のなかで、公会は、「日本ニ在ル外国耶蘇教ノ諸伝道者ニ呈ス」の書状を、押川方義、熊野雄七の二名を使者として派遣し、日本基督公会の無教派・独立主義に対する理解と賛助支援を、東京、横浜在住の宣教師たちに懇請したのである。しかし、その反応は必ずしも期待したほどではなかった（明治七年一月、右同第二卷二〇八―二二二頁）。

この様な事情のなかで、注(2)注(3)で述べたように、明治七年四月、横浜、東京の二公会は代議会を開き、公会の規則のおそらく委員会案を審議し決定した。「日本基督公会条例案」である。この草案は、設立されたばかりの神戸公会（四月十九日）、大阪公会（五月二四日）に大いなる希望をもって示され、十月には四公会代議会開催になり、可決され確定されたのである。ところが、神戸、大阪両公会は、翌年、この「日本基督公会条例」に不同意を表明した。したがって、公会は東西に分立することになる（山本秀煌編『日本基督教会史』四四―四五頁）。

さて、この「日本基督公会条例」なるものは、前の「公会規則」よりも「稍整頓せる」ものであるばかりではなく、

全体教會的組織を規定している（第五條例第一則 中會的組織規程、第六條例第二則 教師長老執事の戒規規定）。全体として七つの條例から成り、信條については、第一條例、「信仰諸則」において九則に分けて福音同盟會の教理基礎をほとんどそのまま採用している。「公會定規」が使徒信條に、「公會規則」が世界教會信條に則っているのは異なっている。福音同盟會の教理基礎に依つたのは、山本秀煌によれば「新教各派合同の基礎を掘んが為なりき」であつた（『日本基督教會史』二五頁）。

そもそも「福音同盟會」（Evangelical Alliance）は、ロンドンに八〇〇名以上の教職、信徒が集り、英國教會内の福音派と非國教會派を中心に、アメリカとヨーロッパ大陸からの共鳴者を加えて組織されたものである（一八四六年）。それは、當時の英國教會内に起こつたオックスフォード運動のアングロ・カソリシズムの潮流に危機感を覚えて、福音主義信仰による「眞のクリスチャン」の一致を目的としたものであつた。その福音主義とはカトリックに対してプロテスタントの立場という意味である。第二の目的は、信仰の自由を促進することである。當時、ロシアにおけるルター派やバプテスト派に対する圧迫に対し、その他のヨーロッパの地区、中東におけるプロテスタント信仰の自由のために働きかけることであつた。これらの目的のために、祈禱會を行う、二、大會を開く、三、宗教的迫害の中止を呼びかけるなどの事業を行うというのであつた。

福音同盟會は、その運動への参加を広く呼びかけるとともに、参加者の範圍の枠を定めるために、九ヶ條から成る「教理的基礎」を発表した。

その第一条に聖書の權威を挙げている点、明らかに改革派的である。元來、福音同盟會は、ウェストミンスター信仰告白の二〇〇年祭から生まれたものであり、また、一八六四年の大會はジュネーヴで開催され、カルヴァンの死を記念している。九ヶ條は、全体として「宗教改革とその正統的後継者たる諸教會によって告白されてきた聖書の福音主義的



信仰の体系」である。(Philip Schaff, *Creeeds of Christendom*, Vol.I, p.916) シヤフは、それを九ヶ条に数えあげただけで肉付けされていない「単なる骨格」に過ぎないと言っている。また、教会の信条や信仰告白ではなく、同盟会加入者の範囲を示したものであると言う。一八六七年組織されたアメリカ支部では、九ヶ条に前文を附し、福音同盟会が教会ではないこと、信条や信仰告白を定める権威がないこと、同盟会が個々のキリスト信者の任意の団体であることなど明らかにした。

この福音同盟会の「教理的基礎」の教会論的主張は、第九条の教職制度の神的起源と二礼典の制定だけである。福音同盟会の性格上当然のことと考えられる。

さて、「公会条例」において、公会が、この福音同盟会の九ヶ条の翻訳をそのまま採用して、公会の信仰を表明するものとしたことに対し、様々な批判がなされてきた。それらについては紹介しないが、「九ヶ条」は、福音同盟会にとって信条ではないが、公会にとっては信条である。信条とすることによって、公会が福音同盟会のような運動となるとは云えない。公会条例は、前文において、「日本国ニ立ル所ノ耶蘇キリストノ公会ニ於テ信ズベキコト左ノ如シ」といつて九ヶ条を掲げ、また福音同盟会の九ヶ条にはない「公会」(教会)という言葉が第五則と第九則に用いて、公会の信条であることを明かにしている。第五則は神の子の受肉、贖い、仲保、統治に関する項であるが、その「統治」という言葉が「且公会ノ首トナリテ之ヲ統一スル事」とし、公会の首は神の子キリストであることを宣言している。また第九則はキリスト教教職制度の神的起源と二礼典の執行義務に関するものであり、「条例」では、「洗礼ト聖晚餐ノ式ハ公会ノ大礼ニシテ永ク守ルベキ事」と、宗教改革の教会としての公会の立場を明かにしている。しかしなお第一条例の教会論は、福音同盟会の九ヶ条同様に不十分であるのは云うまでもない。「公会条例」の教会論は、その第二条例「公会基礎」においてその特色ある主張をみる。

なお、アメリカン・ボードの宣教師たちの指導によって設立された神戸公会（明治七年四月）の公会規則は、その「信仰の条例」に福音同盟会の教理的基礎九ヶ条を挙げている（土肥昭夫『日本プロテスタント教会の成立と展開』四〇頁）。また、神戸、大阪の二公会を代表するデビスと新島襄も、公会条例の第一条例、信仰諸則の信仰に反対してはいない。反対したのは公会条例の第五条例、第六条例の教会政治であった。

第二条例 公会基礎、「我輩ノ公会ハ宗派ニ属セズ」は、「公会規則」検討の際にすでにあらわれていた日本人信徒の主張が明確な形をとったものであり、無教派・独立主義の主張である。すなわち、公会は外国の教派には属さないものである。すると新しい教派を立てるのか、そうではなくて日本における一つの国民的教会を建設するということであった。公会の無教派主義とは、教派を否定しているのではない。日本では諸教派を立てないということである。そして外国の諸教派から独立した一つの国民的教会の建設と形成である。とするならば、それはどのような教会になるかということ。「唯主耶穌キリストノ名ニ依テ建ル所ナレバ単ニ聖書ヲ標準トシ是ヲ信ジ是ヲ勉ル者ハ皆是キリストノ僕我儕ノ兄弟ナレバ会中ノ各員全世界ノ信者を同視シテ一家ノ親愛ヲ蓋スベシ是故ニ此会ヲ日本国基督公会ト称ス」とする。

すなわち、公会は、ただ主イエス・キリストに属する教会である。そして聖書の教会である。しかし、原始キリスト教会に帰るというのではない。第一条例の信仰諸則に表明される宗教改革の聖書の信仰に立つ教会である。そして民族を越え、同じ聖書の信仰に立つ信仰者の世界的交わりのなかにある教会であるということである。

なお、「公会」という言葉が公同の意味をもっているのではない。教会という言葉も使用されている。「基督公会」という名称それ自体が公同の意味をもっているのである。さきのブラウンの提案文は“Church of Christ”という公同的名称を用うることが望ましいとしている。またフルベッキも“Church of Christ in Japan”という公同的名称と言っている。

第二に、この教会の組織について、第四条例「会吏ノ職務」において、牧師、長老、執事の三職を定めてその任務を

明らかにし、牧師と長老が教会を治めるものとする。これらの三職は公選によるとされ、任期があり、またその戒規は第六条例「勸懲」において、牧師と長老の「組」の任とされる。会員の戒規は牧師と長老が執行し会衆の同意を必要とする。第五条例「集会及公撰」においては、年二回、四月と十月に集会を開き、各公会から牧師、長老一名ずつ集り、各公会の「状態及び其定議」を報告し、「規則ノ変換全公会ノ保護及び伝道ノ便宜ヲ論定」する。おそらく前記の三職の戒規もこの集会で行われると考えられる。この集会が、長老主義の「中会」に当たるとは明らかではない。いずれにせよ、監督制ではないであろう。長老制と会衆制のどちらをも包含できる教会の政治形態である。各個教会の独立自治を尊重しつつ教会と教会との間に規則を定めて一つの教会として働き、全体教会を指向する一つの日本の国民的教会を目指すのである。したがって、横浜、東京の二公会は、これで全国的公会を組織し得るとしたであろうし、神戸、大阪の両公会もはじめは同意したわけである。要するに、フルベッキによれば、「自分たち自身の憲法、単純な福音主義信条、ならびに教会政治に関するいくらかの規則」であり（Guido F. Verbeek, *History of Protestant Mission in Japan from Proceedings of the General Conferences of the Protestant Missionaries of Japan, 1883*）植村正久によれば、「簡易信条、簡易政治」である。自由独立の精神を養った簡易なる政治信条である。「初実の教会は、政治簡易に、信条単純にして、其の組織極めて自由寛大なるものにてありしなり」（『植村正久と其の時代』第三卷、六五〇頁、六四六頁）。そして、「曰く日本国基督教徒は其の信条を成るべく、自由寛大にして十分に進歩の余地を与へ協和の根基を固うせざるべからず今日に於て妄りに信条を細密にし、<sup>ぼんやり</sup>子を瀝して駱駝を呑むが如きは教会に不利を遺すこと少々に非るなり」（右同第三卷七六六頁）。

このような考えは、公会設立に深い関係をもった宣教師たち、バラやブラウンやタムソン等の主張であり、その指導を受けた日本人信徒たちが深く共鳴し、また理解し、その実現を強く意志するものとなったと考えられる。タムソンは

「一夜造りに翻訳し、且つ不十分に理會せられたる教理の系統を全然無理押しに、之を好みもせぬ人民に採用せしめたりとの批評は、不親切にして且つ事實を誤聞せる批評家の往々唱ふる所なるが、日本基督教会の設立に係る外国宣教師等は、斯の如き批評を受けんことを好まず。力めて斯る過ちに陥らざるやう用心せり。彼等は、日本の教会が一旦簡易明白に陳述せられたる大綱領の上に建設せられるときは、必ず他の諸国に於ける歴史的教会のなせし如く、自ら進んで聖書の中より十分なる又満足す可き信条を開発し、随意之を採用するに至る可しと確信せり」と云う（右同第三卷、六六〇頁）。

バラも「公会規則」の検討の際、信条や諸規則は永久的なものではなく、衣のように変えることができると言っている（右同第二卷、一二五頁）。日本における伝道と教会形成の展開のなかで、現実をふまえ、教会史教理的検討をへて改正されていくものと考えられていた。

こうして、「公会条例」は、はじめの日本プロテスタントの意志、目的、願望、理想をあらわしたものであるとともに、公会が、日本プロテスタントの帰るべき原点というよりは、いわゆる「教会的」プロテスタント（海老名弾正も云った）の出发点であったことを示している。信者が集まればそこに教会があるのではなく、また信者が集まって相互に契約を結んで成る教会というものでもなく、宗教改革の聖書の信仰の基本を標榜する信条と全体教会的理念と組織の上に形成されるべき教会である。したがって、単に回心者を獲得することが伝道であるのではなく、伝道によって宗教改革の教会を建設し形成していくこと、それが伝道の目的となる。

#### 補注(二)教会合同と押川方義

明治十年、日本基督公会と日本長老教会が合同して日本基督一致教会が設立されたとき、押川は新潟伝道の只中にあ

った。「東京横浜上田長崎の基督教会は一致教会となりたり。弘前は疾くにメソヂストの旗章を掲げたり。然るに此の際其の意志を維持し日本基督教会の体裁を保てる者を押川方義氏とす。氏は当時伝道して越後の新潟に在り、明治十三年転じて仙台に移る。氏は明治十七年頃一致教会に加入せられたるまでは、何れの宗派にも属せずしてありしなり」(『植村正久と其の時代』第三卷、六四九―六五〇頁)。山本秀煌編『日本基督教会史』は「此の時一致教会の採用したる信条に不服を唱へて一時分離したる押川方義」と言い、「日本基督教会に於て最も異論ありしも此等の信条を採用するの可否にてありき。就中青年基督者は激しく之に反対せしも、その意見を達する能はざりしが、当時新潟に在りて蘇国の医師バームを援けて伝道しつつありし横浜基督公会の長老押川方義は、この信条採用に異議を唱へ、断然分離するに至りぬ。而して彼は其の後仙台に赴き、独力布教に努力しつゝ、ありき」(七一頁)。しかし、押川は明十一年、東京で開催された第一回全国基督信徒大親睦会には新潟から代表参加し、新潟伝道の報告をし、「基督教と敵」と題して演説をしている。第二回は欠席、第三回は明治十六年、仙台から参加をし、プロテスタント諸教派の代表的信徒の一人として「一致の説」と題して演説をする。また「神の存在」の演説を二千人の聴衆の前でする(『植村正久と其の時代』第二卷、五二―一頁、五六―七頁、五六―九頁)。押川の母教会、横浜海岸教会(横浜公会)の大説教会で、伊勢時雄(熊本バンド、今治教会牧師)、松山高吉(攝津第一公会牧師)とともに講壇に立ったのもこのときである(『植村正久と其の時代』第二卷、五六―九頁)。

一致教会加入後、押川は、一致教会と組合教会との合同の議が台頭したとき(明治二十年)、一致教会側の協議委員五名の一人に選ばれている。この合同が不調に終る明治二十三年の前年、押川は欧米視察に出立するが、一致教会大会議長長井深樗之助にアメリカから手紙を書き、寛容と忍耐と知能とをもって充分の談判をなすなら合併は成就するであらうと、激励の言葉を送っている。この両教会の合同問題は、信条の面では、公会の線にもどることによって(使徒信条、ニカイア信条、福音同盟会九ヶ条)合同の基礎を置くことによって解決可能であった。けれども教会政治の面において、

先の東西公会の合同推進のときと同様に不調に終わった。「二教派は信仰の大綱目に変更を来すことなきのみならず教会政治に就ても大体上の一致を期し其の形式の如きは深く之を問はざる趣意なりしなり」。井深は、二年半余の苦心尽力又もや水泡に帰したと述べている。(右同第三卷、七〇〇頁)。

一致教会と組合教会との間の合同が頓挫するや、一致教会のなかにその信条、憲法、規則の機運一氣に高まり、明治二十三年十二月の第六回定期大会はそれらの修正案を審議した。信条問題は烈しい議論をひき起し、用意された二十四箇条は全廃され、あらたに使徒信条に前文を附したものが採用された。植村は言う「嚴密なる信条を以て使徒の信仰を拘束せんとするが如きは却て信仰の一致を害し、我国将来に於ける基督教の上に与ふる弊害実に少なからざるを知る。……彼の二十四箇条の原案を全廃して、使徒信条の如きものを以て之に代へられたるは、予輩我日本基督教会の爲めに深謝して止まざる処なり」(右同第三卷、七六〇頁)。山本秀煌は、このような信条改正の原因を、「第一に日本基督公会創立当時の信仰の立場に立ち返らんとの精神なりき」と云っている(『日本基督教会史』一三〇頁)。そして山本によれば、修正急進派の押川と植村たちがあらかじめ協議を凝らし、この過激な修正案を提出させたのだと言う(右同 一三二頁)。「日本基督一致教会の幹部或は指導者とも云ふべき人には、殆ど総て横浜公会で誕生し、又如何に短時日にもせよ其処で教養と訓練とを受けたのだから、現在の環境が理想的なる教会生活をするのに非なる事を感じずれば感ずる程、昔なつかしくも憶え、時来らば之が挽回を計らんとの一念いよいよ深きものがあつた」との植村の談話がある(『植村正久と其の時代』第三卷、七五一頁)。

以上のことから、押川において、無教派・独立主義の精神が、日本基督一致教会に加わつてからも失われることがなかつたことがわかる。これは、押川においても、あるいは植村においても、救いは日本の救いであり、そのためには一つなる國民的教会の建設は必須であるとの確信から来ているものであろう。ところが、一方において、宣教師たちの

来日が盛んとなり、それぞれの教派的伝道を開始し教会が続々と各地に建設されていく。他方、日本基督公会の挫折の経験、日本一致教会における教派的教会への急傾斜の感得のなかで、押川は一種の危機感を覚え、日本プロテスタントの将来に不安を抱くようになる。彼自身、ドイツ改革派の協力を得て東北伝道を進めるのであるが、彼自身の確信をめぐって苦闘し、ついに伝道界から離れていく。押川は伝道者、教育者、実業家、政治家（代議士）と変っていったのであるが、実業は教育のため、教育は伝道のため、伝道は日本の救いのため、この日本の救いのために政界に入っていくということができらるであらう。

補注(三)クリストファー・ノッスの東北伝道論

*Tohoku the Scotland of Japan, 1918 by Christopher Noss and Associates of the Tohoku Mission (Board of Foreign Missions, Reformed Church in the United States.)*

著者のノッスは、東北伝道の素描をその第四章に試みている。ヘレニズム時代の東西文明の交流から説き起こし、コンスタンチン大帝時代の中国のキリスト教の存在、八世紀ネストリウス派、仏教へのキリスト教の感化（空海、阿弥陀信仰）、十六世紀ローマ・カトリックの日本伝道と東北伝道、そして十九世紀のその再来、東北伝道の復活、十九世紀ハリストスの東北伝道、最後にプロテスタント諸派の東北伝道に及ぶ。

ノッスは、カトリック伝道方策について興味ある指摘をしている。それは、個人よりも家族を対象とする伝道で、一九一七年、プロテスタントが一〇、三四五人の大人と一、〇四九人の子供の受洗者、カトリック受洗者は大人七八四人、子供二、五三九人となっている。「対照は著しい」とノッスは言っている。ただ統計はプロテスタントは厳密であるがカトリック側はかなり不明瞭な部分がある。さらに、カトリックでは、日本人は三代目の信者でないと司祭にはなれないと

は興味あることだと言っている。ハリストスにおいても伝道の対象は家族となっている。一九一六年の統計でも、受洗者、大人一〇〇人に対して子供は九二人となっている。献金は、東北の日本基督教会の献金の約三分の一となっていると言ふ。

ノッスは、東北でもつとも活発に伝道してきたプロテスタント教派として、ドイツ改革派（日本基督教会）、アメリカ監督教会（聖公会）と東洋宣教会の三教派を挙げ、それぞれ三つの型の伝道を代表していると言ふ。一、相互協力的、二、排他的、三、援助的である。プロテスタント諸派の大部分は第一型で、アメリカ監督教会とセブンスデー派は第二型、第三型は東洋宣教会と救世軍である。プロテスタント東北伝道の二つの興味ある事實は、ルター派の伝道がないこと、アメリカ人以外の宣教師がないことであるとしている。

ノッスによれば、日本のプロテスタント諸教派の信者の八十六パーセントが、長老改革派（日本基督教会）と組合派とメソジスト派に属する。そしてこの三派はその教会政治においてそれぞれ異なる。しかし、日本では教会政治以外のあらゆることで全く一致しているほどで、合同して一つの教会にならない理由がないと言ふ。

ノッスによると、組合派においては、日本伝道が日本人にすべて委ねられるときが近いとして、アメリカン・ボードは、若い宣教師が必要とされるとき補充することを怠ったという。ノッスの時代、仙台のミス・ブラッドショー以外には東北地方に宣教師がひとりもない。また組合派は仙台でも若松でも独立教会を形成しているが、信徒訓練において問題が現われているとしている。

またメソジスト派については、日本メソジスト教会の初代監督本多庸一を挙げ、六十人の伝道者が弘前教会から生まれたが、メソジスト派は他の地方のように東北では影響力を及ぼしてはいない。その伝道は青森県が活発である。バプテスト派とデサイブル派は困難な開拓伝道を推進してきたが、その結果は必ずしも満足するものではない。その理由に



ついでノッスは、バプテスト派においては、将来の指導者を訓練する教育事業の価値に気付くのが遅かったこととして  
いる。

東北の聖公会は、アメリカ監督教会のもとにあり、他のプロテスタント諸派との協力伝道を拒んでいる。伝道説教に  
関心は少なく、路傍伝道を嫌い、典礼の執行を重視し、とくに敬服されることは、どんなに離散している信者に対して  
も訪問をし聖餐式を定期的に行うことである。東北全体に対して総合的な伝道計画を遂行している。東洋宣教会につい  
ては、伝道小冊子が東北の山奥の家々に配布されているのを、ノッスの宣教師仲間が発見していると云う。救世軍の活  
動は刮目すべきものであり、東北では未だ強力ではないが、その積極的勢力的な伝道は宣教師たちに高く評価されてい  
る。広く読まれている『平民の福音』の山室軍平の活動、金森通倫の大衆伝道は、諸教会にとって伝道への大きな刺戟  
となっている。内村鑑三の無教会キリスト教については日本のような国では永続性がないとしている。

ノッスの所屬するドイツ改革派と、その協力教派の日本基督教会の東北伝道について記述が詳しいのは言うまでもな  
い。日本基督教会の源泉であるオランダ改革派の渡来と、日本最初のプロテスタント教会の誕生、長老派伝道との合同、  
組合派との合同問題さらに日本基督教会への発展、その強い日本民族意識のゆえに関係ミッションとの摩擦、協力ミッ  
ションと申合ミッションとの区別、植村正久とその神学社、日本基督教会伝道局の設置、その盛んな伝道、そして押川  
方義による日本基督教会の東北伝道の開始、ドイツ改革派の「東北宣教師団」の設立（一八八五年）による東北伝道へ  
の参加、押川との協力によって創設された東北学院、東京以北ドイツ改革派が高等教育機関をもつ唯一のキリスト教団  
体であることを示している。なお、ノッスは、オランダ改革派の盛岡伝道にふれ、一九一七年、岩手、青森地方のオラ  
ンダ改革派の伝道地がドイツ改革派に移譲され、日本基督教会に關しては、日本の南部がオランダ改革派、中央部がア  
メリカ長老派、北部がドイツ改革派が分担することになったと言う。

また教会合同問題について、日本人キリスト者は仏教の宗派的分立には馴れているので、もし同じ福音を説き、合同祈禱会、協力伝道ができるなら、教派の問題にはわずらわされないうであらう。日本基督教会でも、もし凡てのキリスト者が合同ができるなら、浸礼も監督政治も土曜安息日などその他も容認するであらう。日本プロテスタントに対するノッスのこのような樂觀的評価は、ヘンドリック・クレーマーの日本プロテスタントの強い教派意識批判と対照的である。ノッスはペンシルヴァニア州のランカスターのフランクリン・アンド・マーシャル大学卒業後、ランカスター神学校卒業一両校ともドイツ改革派の高等教育機関一、ドイツのベルリン大学でアドルフ・フォン・ハルナックのもとで研鑽を重ね、明治二十八（一八九五）年、二十六歳で来日。翌二十九年、東北学院神学部教授、その後、帰米、ランカスター神学校の組織神学教授（三十五歳）、再び明治四十三（一九一〇）年来日し、会津若松に着任、以後南会津伝道に後半生を捧げ、大正六（一九一七）年、帰休のためアメリカ滞在中、同派伝道局によって東北伝道に関する研究書である本書が出版された。「東北宣教師団」のC・ノッス、W・G・サイプル、C・D・クリーテの出版委員によって準備され、ノッスが文章に纏めたものである。ノッスは翌七年（一九一八）年、若松に帰任、南会津伝道に挺身、昭和九（一九三四）年逝去した。『会津教壇』の発行（明治四十三年）、新生館の建設に尽力した（大正十年設立）。なおノッスについては、A・H・クレーラ著『ある種子は百倍に』一フロンテア宣教師ノッス博士伝一（教文館 昭和三十六年）がある。東北伝道についてこのように総合的に論述したものは、他には皆無である。その意味で貴重であり、内容的にも極めてすぐれている。次に、その内容について簡単に紹介したい。

全体は八章から成り、前半の三章にわたり、伝道の対象としての東北の風土、社会、後半の五章はキリスト教東北伝道について述べる。東北については、スコットランドの比較に始まり、地勢、気候、住民、食物、農業、養蚕、伝統工芸、炭坑、紡績、女子労働、封建時代と近代の並存する社会秩序、住居、衣服、家族、農民の生活、日本人の特徴（気

質、長所、短所)、行政、教育、宗教について説明し、多くの実例を主として福島県におけるノッスの経験から紹介し、しばしば鋭い批判が見受けられる。とくに女子労働者への搾取、教育の現状、さらに神道、儒教、仏教、民間信仰、日本人の性格などの理解や批判は興味深い。

キリスト教東北伝道については、すでに紹介したように、ヘレニズム時代の東西文明の交流から説き起こし、十九世紀プロテスタント東北伝道に及び、諸派の東北伝道の歴史と現状の概略と特徴を記している。続いて、第五章にアメリカ人宣教師の生活、仕事、伝道の実際など詳細に紹介し、宣教師は“Specialist”が歓迎され、また“Pioneers”として必要であり、それは“Assistants”であり“Rulers”ではないと注意している。そして人々を“Americanize”することではなく、宣教師は“Japanize”されるべきではない。第六章ではキリスト教指導者養成の必要を強調し、そのためにキリスト教学校の重要であることを東北学院、宮城女学校の紹介をとおして説いている。日本人の観念を根本的に再構成するためには教育によらねばならない、忍耐強い全体的作業を必要とする。日本においては、“education is intensive evangelism, and evangelism is extensive education”であると言う。そして自分の経験から、東北をキリスト教化するためには、東北の青少年を東北の学校で育てなければならぬとする。第七章に伝道それ自体を説明し論じる。宣教師のあらゆる仕事の究極目的は“a self-propagating, self-supporting and self-governing native church”を建設することである。個人々人を獲得するだけではなく native church を打ち立てることであつて、それによって伝道が続けられていく、たとえ宣教師たちが現在の活動を続けられなくなつてもである。それで、東北地方の大衆は宗教的な意味で旧約聖書の水準までも達していないことを覚えておく必要がある。幼児には堅い食物でなく、乳を与えねばならない。伝道は全体として教育の仕事であり、それを継続できる制度として教会を建てることであるとする。神、罪、救いその他のキリスト教的意味を理解するように訓練する以前に、突然の感情的な回心を促すことは害をもたらす。と、リバイバルズムを批判している。

ノッスは続いて東北伝道の実際の様々な面を紹介しているが、それらは実に興味深い。種播き伝道の種々相、伝道の収穫を保つための教会の建設、宣教師と日本人教会との関係、社会活動（日曜学校、夜学校、保育所など）をとおしての伝道を語り、例えば教会の発展には墓地が必要であることを指摘している。また東北では、都市伝道や農村伝道よりはるかに困難な county-town 伝道が主となる。古い日本人伝道者は平民を信頼していない。押川方義は社会の上層部を伝道の対象とした。アメリカ宣教師は下層から始めたいと思い、日本人伝道者は上層から始めたいと思い、おのずから中間のところ両者妥協したのだと言う。Town 伝道でも成功している場合の条件を挙げて説明している。

最後の第八章は、「東北伝道への招き」とし、まず、国際情勢、すなわち日中、日米関係、日本の国際社会における地位、続いて国内における既成宗教の衰退とキリスト教の前進について述べる。それから、東北は日本国土の五分の一の面積を持つ、この地方をキリスト教に向かわしめるため、一二五人の宣教師が東北の教会に協力すればそれは可能であると強調する。そして東北伝道に集中するドイツ改革派が他のどのミッションよりも有利である。このことは、日本全体にとって、またアジア、世界にとって大きな意味があると力説する。東北は二五地区に分けられ、一地区約三十万人、その各地区に宣教師二家族、一婦人宣教師を配すれば五十家族と二五人の独身婦人宣教師、計一二五人が必要となる。

これをもってすれば、一世代中に (within a generation) 全東北の隅々までに伝道が行き亘り、おそらく大部分キリスト教化することができるであろう。不可能と見えることも、神が命じられるとき、それを果すことができる。「為すべきである故に為すことが出来、出来る故に我々は為すべきである (We can because we ought. We ought because we can.)」。

このようなノッスの熾んな伝道精神の背景には、ドワイト・ムーデーの夏季学校から生まれた（一八八六）「外国伝道学生志願運動」(Student Volunteer Movement for Foreign Missions) の滔々たる潮流があった。ジョン・R・モットがその推進者となり、全米に、またヨーロッパにも拡大し、十九世紀、二十世紀の始め、アメリカの大学生間の最大の

運動となり、アメリカ外国伝道者の偉大なる貯水池となった。運動のスローガンは、「今世代中に全世界の伝道」(The Evangelization of the world in this generation)であった。そして一九二〇年の大会―四年毎に大会が開催―には、九五〇大学から六、九〇〇人の学生代表が集まり、この運動の絶頂を示した。翌年には六三七人が外国伝道に向かった。一九二〇年まで八、一四〇人ばかりの大学卒が伝道のために母国を離れた。

# 押川方義の政治神学——神政政治をめぐつて——

竹井一夫

## 序——明治国家主義思想の中で

「もし我が兄弟わが骨肉の為にならんには、我みづから詛はれてキリストに棄てらるるも亦ねがふ所なり」

ロマ書第九章三節

ここで取り扱おうとする問題は、押川方義のナシヨナリズム（国家主義）である。押川ほど、明治キリスト教史、ひいては日本キリスト教史の中で、キリスト教からナシヨナリズムへの転向者（後年の押川はキリスト教とは無縁）と見なされている人物もいないからである。

しかもその発言は、キリスト教の側からだけでなく、ナシヨナリストの側からもある。

各種の「事典」——キリスト教、文学、歴史（国史）大辞典——の中で押川方義の生涯の重要なポイントを網羅し、しかも正確に押川生涯を歴史的、実証的、史料的に描き出しているものに唯一つ『東亜先覚志士記伝』（全

三卷、黒龍会、上巻・昭和八年、中巻・昭和十年、下巻・昭和十一年刊）下巻「列伝」（一九五―六頁）の「押川方義」がある。押川方義小伝でこれ以上正確なものはない。これはナシヨナリストの側からのものである。多少長いが、ここにその全文を引用して見る。

### 押川方義

嘉永二年伊予松山藩士橋本氏の家に生れ、出で、押川氏を嗣ぎ、明治の初め藩の貢進生として大学南校に学び、後ち米人ブラオンの創立せる横浜の英学校に入り、基督教の信仰を得て少壮北陸地方の伝道に従ひ、激烈なる迫害を凌ぎて布教に努めた。元来経世の才を抱ける志士にして、その基督教の伝道に従ひしは之に依りて国家を救はんとする熱情に出でたものである。後ち米国に遊びて宗教事業を觀察し、同国に於ける基督教が形骸のみを存してその生命を失へるを觀取し、武士道化されたる日本の基督教の却つて大に優ぐれたる所以を高唱し、米人の反省を促して憚らず、当時未開国を以て目されたる日本の為めに大に気を吐いた。明治十九年仙台に神学校を創立し、尋いでその規模を拡張して東北学院と名づけ広く子弟を集めて薰陶に従つた。当時彼の高邁なる風格を慕ふて来り学ぶ有為の士多く、東北の名譽として天下に名を馳せた。川合信水、島貫兵太夫、畑井新喜司、榊原政雄、酒井勝軍、今井忍郎、岩野泡鳴等は皆當時その門下に学んだ人物である。

日清戦役の頃より基督教主義の教育に依り東亞民族の精神的啓発を図り、東亞経緯の一端に資せんことを期して海外教育会を創立し、朝鮮公使井上馨を説くと共に近衛篤磨、西園寺公望、伊藤博文、大隈重信、渋沢栄一等の賛同を求め、

朝鮮京城に京城学堂を、同全州に三南学堂を開設し、巖本善治、永島忠重、渡瀬常吉等が親しく教鞭を執つて鮮人子弟の教育に従ふこと、した。この善隣教化の事業は更に之を支那に及ぼし、北京にも同様の学堂を建設する筈であつたが惜い哉経費の支弁意の如くならず、後ち中絶するの已むべからざるに至つた。次いで日露戦役の当時朝鮮に渡り、同志松本武平、巖本善治等と共に朝鮮の策士李逸植を操縦して韓国皇帝より同国に於ける二十一件の利権を獲得し、之を基礎として朝鮮経営の実を挙ぐべく画策した。同利権は埋立、塩田、堤防、牧場、水運、作田、煙草、石油等の諸利権を包含し、時価凡そ二億円に上る莫大なるものにして、一旦韓国皇帝の勅許を得るや、伊藤博文、大隈重信、渋沢栄一、大橋新太郎等に謀り、之が経営に着手せんとする準備に努むる所あつたが、時の首相桂太郎、駐韓公使林権助等の反対する所となり、韓国皇帝の之に関する勅許は李逸植が玉璽を偽造して作成したるものとして遂に無効と認むるに至りし為め、不幸にも抹殺せらるゝ運命に陥つた。当初押川が利権を獲得するに至つた理由は、日露戦争に於て日本が勝利を得ざる如き場合に遭遇するも、予め右の如き利権を占有し置けば、以て朝鮮に於ける我が地歩を維持するを得べく、又た予定の如く勝利を制すれば、神功皇后以来の我国是たる朝鮮経営に向つて歩を進むるに便宜多きを信じた為めであつたと称せられる。問題となつた利権許与の勅書に『勅諭○○○曰特許日韓同志組合代表者押川方義等之契約書十三件命宮内府印蓋印以下汝其管藏俟該人等前往東京克竣韓日兩國永遠敦睦安寧大策將諸契約交付弁理也』とあるに徴しても日韓共存共栄の大義明分の下に行つたものであることが知られる。

大正二三年の頃より城南荘に関係ある大竹貫一、柴四郎、五百木良三、松平康国や川嶋浪速等と往来して国事を談じ、我が東亜政策に関し意見を交換する所あり、それらの士の懲懲によつて代議士となり衆議院に議席を占むること二回、大正五年袁世凱が支那の帝位を窺ふや、前記の川嶋、大竹、柴、松平、五百木の諸士と共に之に反対して起ち、旅順にありし肅親王と氣脈を通じて滿蒙独立の計画を凝らし、蒙古の巴布札布を起たしめて滿蒙建国運動に乗出したが、我が



政府当局の態度変化し、且つ国内政客の反対等に会し、時非にして遂に志を遂ぐるに至らなかつた。これらのことに就ては本書中巻に詳述しあるを以て省略するも、この運動が後年の満州建国の先驅をなせるはいふまでもない。彼の対支意見は、日支兩國の關係は濃かに相結んで一となるか、或は相離れて敵となるか、兩者の外に出づる能はずとなし、帝國が國を挙げて道に殉ずるの覚悟を以て新支那の建設を助けんとするも、支那にして帝國の精神を解せず、帝國の勸奨を初めより斥くるが如くんば是れ洵に無縁の衆生にして、之に向つて百年親善を説くは枯木を守つて爛漫の花を待つが如きものである。しかも帝國の地位は一日の苟安を許さないのであるから、若し支那が亡國の道を急ぎて英米俎上の死屍とならんとする如き場合には、帝國は國家存在の權利の上より支那に於て必要とするものを声言し、断々乎として鐵血政策を行ふべきである。然る時には當に滿蒙のみならず、国力の許す限り於て山東直隸普く日章旗を翻々たらしむべしといふにあつた。その發して滿蒙獨立運動となれるは決して偶然でない。後ち昭和の初め時の首相田中義一に説いて滿蒙買収計画を立て、その所志に邁進せんとしたが、將に支那に遊ばんとするに際して病に罹り、昭和三年一月十日歿した。年八十。彼の対支問題に於ける立場は、初め國民義会の同人として、あつたが、後には國民外交同盟会にも關係し、屢々同盟会の演説会に於て所信を披瀝した。力のある音声と明晰なる語句を以て該博なる知見により世界の大勢を説き、対支問題の解決を叫んだ雄姿は熱烈颯爽たるものあり、毎に聴衆に感動を興へずには措かなかつた。

その八十年の生涯は、半ば宗教家としての活動に捧げられ、既に白人の間に滅びたる基督教を日本に於て復活せしめんととの信念の下に伝道を努め、究極の目的を、日本の皇室を中心とする世界人類の道德的統合に置き、天之御中主尊の下に宇宙一切を救済せんと期した。夙に西郷隆盛を崇拜し、居室に大西郷の肖像を掲げてその精神を偲び、彼れ自身また雄偉高邁、剛勇果敢、熱烈猛火の如き至情と不動磐石の如き信念とに依つて行動した。冒險小説家として將又文壇の快男児として知られた押川春浪はその長子にして、早稲田大学野球部の元老たる押川清はその次男である。

〔この同じ下巻には、巻頭の口絵写真の中に、大正五年三月二十四日の「第二次滿蒙独立運動協議記念 於滝野川名主の滝」(前列右、柴四朗・川嶋浪速・大竹貫一 後列、五百木良三・松平康国・押川方義)の写像がある。これは基督教団不二山荘(本山教会)の同教団本部資料(押川関係)の中にもある。そこには右の日付が明記されてある。〕

これに対してキリスト教側の文献では、この「列伝」にふれる大部分は、当然のことながら、キリスト教に関係のないものとして切り捨てられる。

それに戦後の大川周明著の『安樂の門』(昭和二十六年、出雲書房)による押川方義と大川周明との関係、現代日本思想大系9『アジア主義』(編集竹内好、一九六三年・筑摩書房)巻末関係略年表「一九二八年、三・一五事件。治安維持法改正。第二次山東出兵(濟南事変)。中国、北伐完成、国民党の全国統一。張作霖爆死。押川方義死」(全事項)の、押川方義・その後、の位置づけからも、押川はキリスト教とは何の関係もない、ナシヨナリスト、全アジア主義者としてとらえられている。押川の政治活動の面からすれば、それは当然の事であったとも言える。そこでは押川思想は、問題にならない。押川は単純に、ナシヨナリストに押しこめられる。が、ここでは、そうしたナシヨナリスト、全アジア主義者としてしか、評価を持たない押川を、その思想——これまで殆ど、押川を思想家として捉えたものはキリスト教側にも、ナシヨナリスト側にも皆無であった。それは押川生涯の全体像が、史料的にも明確でなかったその点にもあった——の面から、キリスト教とナシヨナリズム(明治プロテスタントイズムの最も大きな課題は「国家とキリスト教」の問題であった)を考えながら、そして押川がその究極

で何を考えていたかを追ってみたい。

明治五（一八七二）年三月、維新政府は教部省設立と共に、幕府の儒教思想にとって代わるものとして続く四月、国民教化の基本大綱とし、「神武創業ノ精神」を体するものとして、「三条教則」を教導職に示した。それは、次の通りであった。

教 則

第一条 一敬神愛国ノ旨ヲ体スヘキ事

第二条 一天理人道ヲ明ニスヘキ事

第三条 一皇上ヲ奉載シ朝旨ヲ遵守セシムヘキ事

右ノ三条兼テ之ヲ奉載シ説教等ノ節ハ尚能注意致シ御趣意ニ不悖様厚相心得可申候事

それより先の明治三（一八七〇）年一月、政府は天皇の名によって「大教宣布」の詔書を出していた。「かんながら惟神<sup>かんながら</sup>之大道」を明らかにし、敬神崇祖の教えを中心に、新たな国づくりの中で、国民教化を行なうためであった。神道国教主義にもとづく「教化」である。この大教宣布運動は成功せず、間もなく挫折する。

明治十一（一八七八）年には教部省は廃止、やがてこれは近代的要素を取り入れた義務教育制度の中で「教育の目的は、もっぱら尊王愛国の志気をふるいおこさせるにある」（改正「教育令施行規則」明治十三年）となって

行く。この「三条教則」直前の明治五年二月（以上、いずれも月は陰暦）二日、小川義綏、仁村守三、押川方義ら十一人は、日本人最初のプロテスタント教会を横浜居留地に設立した。

日本基督公会横浜教会がそれで、仮牧師はJ・H・バラであった。そしてこのバラの祈り「神よ、わが日本を救い給え」が、押川をキリスト教へと決定づける。押川の心に、キリスト教こそわが日本を救う唯一の道と確信せしめるのである。押川はそこに立つ。それが押川の〈救国の志（ambition）〉であった。

押川の回心のテーマは「わが日本」＝「国家」であった。以後、「国家」は押川の、〈個人の論理〉になる。これに對して、「神道と皇道による大教宣布」「三条教則」「教学大旨」「教育令」等、皇祖神を教化の中心に置いた思想は、君臣関係を中軸とした儒教道徳と結合、やがてこれらを集めるかたちで成立する「教育ニ関スル勅語」は、教育現場での国家が主導権を持つ〈国家の論理〉となる。これは、その前年の「大日本帝国憲法」と並んで〈国家の論理〉の二大柱石となる。

そこに、明治国家とそのナショナルリズム——やがて、神権天皇制社会——は成立する。

この「国家」をめぐるの、押川の「神を畏るべし、国帝を敬うべし」（Iペテロ二・一七参照）の〈個人の論理〉と、国家が持つ〈国家の論理〉が、その後の押川の生涯の戦いを規定することになる。

こうした国家とキリスト教（プロテスタント・キリスト教）の時代の中で、植村正久は『日本評論』創刊号（明治二十三年三月）刊行の辞の中で、

人は宗教的存在者なり。真正の宗教を奉ずるに至り、始めて真正の人たるを得ん。一個人已に然り。一国亦之に異

ならず。真正の宗教を奉ずるに非れば、社会国家の機関完からず、寧靜活動の根基堅固ならず、而して其生命を健全に維持せんと欲するも豈夫れ得べけんや。

余輩は真正なる宗教は仏に在らず、神道に在らず、独り基督教にあるを確信す。

と言ふ。

植村はここで社会国家について語ってはいるが、その言わんとする核心は真正の宗教であつて、『日本評論』の目的とするところも「力を極めて、基督教の真理たるを弁明し、銳意以て、その拡張に従事せんと欲するものなり」であつた。

植村の個人の論理の論理規準は、「真正の宗教」 、「キリスト教」、そしてその「教会」であつた。

その同じことは、内村鑑三にとつては、聖書主義であつた。

内村鑑三は明治三十四（一九〇一）年三月、雑誌『無教会』を創刊する。それに先立って、当時内村が出していた『聖書之研究』第六号（明治三十四年二月）に『無教会』についての広告をする。その「無教会」の六つの広告文の第五に、次のように言ふ。

『無教会』は国政を議せざるは勿論、教会政治すら論ぜず、談ずる事は神の事、靈魂の事、天国の事、天然の事のみ、安心して読まれよ。

これは『無教会』という限定せられた雑誌の広告文であるが、ここには内村鑑三の無教会主義の基本的なテーゼがある。

内村はその前年「余は最早や再び藩閥政府に就て語らざるべし、そは是をなすの詮なければなり、余は再び肥後人を罵らざるべし、そは罵るべきは肥後人に限らずして、日本到る所に存すればなり」そして「余も日本人ならずや、彼等の腐敗せるは同時に余の不能を意味するにあらずや」(明治三十三年九月十八日「萬朝報」・「帰来録」と言う。

内村鑑三不敬事件から、凡そ十年後である。

ここには内村鑑三の非政治的立場が、同時に預言者的立場が、ほぼ正確に語られている。

内村にあつては、「政治の病源は教育にあり、教育の病源は家庭にあり、家庭の病源は之を組織する個人にあり」(明治三十三年九月二十八日「萬朝報」・「秋の初陣」と言い、そこでは個人の意識革命を先ず問題にする。意識革命は存在革命であつて、存在革命は意識革命ではない。内村等の「理想団」(明治三十四年七月結成)も、政治的団体でも宗教的団体でもなく、「先づ第一に自身を改良して然る後に社会を改良せんとする団体」であつた。内村にあつたのは、聖書主義であり、精神主義であつた。

「理想団」について語つた文章の中で、内村はさらに「一人の義人は百人の悪人を制するに足るの勢力である。一人が断然正義を実行すればそれがために社会は動く」(明治三十四年十月十六日「萬朝報」・「理想団は何である乎」と言う。そこには内村の精神主義的な選良意識エリートが見える。それはアブラハムの義人思想である。

内村の生涯を貫いて、この思想は変わらなかつた。

内村における「J」(Japan, Jesus)——国家と宗教——は、かくして幾つかの矛盾的要素を孕みながら、Jesus (宗教) に一元的に集約されて行く。これが彼の「基督愛国」Christo-national の実体であった。その点では、本質的には、内村も植村も変わらない。

それは「国家とキリスト教」という、へとで結び合わされる問題ではなかった。

内村が無教会を唱えながら、尚、植村同様にキリスト教界内の存在であり続けるのはこのためである。

しかもある点では、その時流を突抜けた強烈な預言者的性格は、教会形成者としての植村以上に、現在も大きな普遍的な影響力を持ち続けている。

これに反して押川の場合、その生涯にわたる思想は終始一貫しながらも、キリスト教学校という具体的な場を失なうと同時に、押川の名はキリスト教界からは、忽然と消えて行く。そして押川は一般に、キリスト教界からは「挫折転向型」に類別し位置づけられる。その後の押川は、転向型の、いつこの、しかも単なるナシヨナリス・ト・国家主義者に過ぎなくなる。

押川の思い描いた神政政治の宗教社会学的な神権政治体制・神権社会は、遂に問題にせられることなく、現在にまで及んでいる。

同じく国家や愛国を語っても、これが押川を、植村や内村と全く異なるものとした。と同時にまた異なる道を歩ませたのである。しかも植村が教会人であり、内村がジャーナリスト、個人伝道者であったのに対し、押川は教育者であった。このこともまた押川を、植村や内村とは自ら異なる道を歩ませる重要な要因の一つともなったのである。

## 一 前期

### 一、伝道と教育

押川方義には植村正久や内村鑑三のように著作集がない。押川は多く語りはしたが、自ら筆を執って論評を書きしめることは、その生涯、一度もなかったと言える。現在文字とし活字として残っているものは、説教、講演、講義、談話、インタビューなどの筆記録である。このことも押川思想の把握を困難なものにしている。従って押川の外面的な行動だけが、しかも断片的、エピソード的に捉えられた行動だけによって、押川像はつくり上げられた嫌がある。

それらの記録の中で重要なものは、押川の生涯の忠実な弟子であった川合信水の諸般にわたる記録と、後に同志的な結合をする大川周明等による『道』誌上の押川の講演記録、それに国会速記録である。

その点、押川は「国土」としての姿勢を貫いた。そうした押川の記録としての最初のもものは、川合信水の「押川先生講話説教集」の中の、「東北学院の教育方針」（須藤鬼一筆記・川合信水校正、明治二十四年秋）である。

これ以前の押川について一言すれば、横浜公会時代の押川が、教派主義を否定、超教派無教派主義を篠崎桂之助等と唱え、結局横浜公会から離脱、新潟でT・A・バームのもとで超教派伝道を続けたことは、教会史的にも



知られた著名な出来事であった。押川のそこにあつたもの「神よ、わが日本を救い給え」の、日本人による、日本人のための、日本の救いを——それはS・R・ブラウンの基本的な考え方で、ブラウンは中国伝道で既に「自国民による、自国民のための、自国の救い」を語ってきていた——その基底にしていたことは疑い得ない。押川にとっては教派的教条主義よりも、国家の救い——そしてその救いをピューリタニズム（清教徒的キリスト教）を背景にして考えた——が問題であつた。

押川の新潟時代から始まる「東北をして日本のスコットランドたらしめよ」も、続く仙台時代の東北から北海道全域にわたる日本の北辺地域への広域伝道も、そして仙台での後に代議士となつて行く自由民権運動家達との連携交遊も、すべてこうした押川の意図から発したものと考えられる。

今、押川方義の明治二十四（一八九一）年秋——九月十八日に東北学院（仙台神学校）の校舎が完成されるので、恐らくそれに近い日、二日連続で行なわれた——の「東北学院の教育方針」についてふれる。この中でふれている内容（鬼塚正二編集『恩師のみあと』第3部その3・一九八八、二五四～二八二頁）は二講（二日）に分れ、第一講では、

基督教主義学校とは何か

東北学院教育の目的

第二講では、

国家主義教育（ナショナル・エデュケーションとゼネラル・エデュケーション）

愛国教育（愛国と愛国心）

についてふれる。

今、これを押川講話を追いながら見て行きたい。時代はちょうど内村鑑三不敬事件（明治二十四年一月九日）

——これに対して押川、植村正久、巖本善治等が『郵便報知新聞』などに「敢て世の識者に告白す」（二・二二）、『福音週報』二・二七）、「重ねて告白す」（三・一一）を連名で出し、「皇上を神となし、之に向かつて宗教的礼拝」をなすことに抗議——間もなくで、やがてこれを機に教育と宗教の衝突が言われる時代に入る。

第一講の冒頭は、次のようにして始まる。

百年の迷夢は一朝に覚めず、二百年の妄想は一夕に改まらず、我が国民が基督教に向つて夢みし歲月や甚だ長し、二十年來欧米文化の侵入と共に、我が国の外形は著しき変更をなし、と雖へども、之が為に我が国民が数十年來懐き來れる基督教に対する妄念は、容易に改まらず、之を目するに種々雑多なる綽名を以てし、或は之を「邪教」といひ、或は「外教」といひ、或は「君父を無みする教」といひ、或は「国を奪ふ教」といひ、其の他偏頗自儘なる解釈を下すに至れり。

ここには内村鑑三不敬事件後の時代的背景が見える。

これに対して押川は、基督教主義学校について、「基督教信者は己れ先づ正義を重んじ、真理を遵守し、国家を愛し、君に忠に、親に孝に、神を尊び、信を慕ひ、又人をして正道を履ましめんことを旨とす、其の為す所の事業一にして足らずと雖へども、学校を開設して子弟に教育を施さんと欲するが如きは、遠大なる目的を抱かずん

ばあらず」とし、教育立国が、既に国家が持つ「国家の論理」に矛盾するものでないことを語る。

世人我党の精神を知らざれば、或は国粹を攻撃する者なりといひ、或は自国を卑下して他国を尊重する者なりといひ、甚だしきに至りては、或は我党の学校を宗教学校といふ、是れ果して如何なる意なるか、教員中耶蘇信者あるの故を以てなるか、然らば何れの学校か或る種の宗教（広き意味に於て）を信する教員の其の職に在らざらんや。又校長若しくは主座教員の如き者が宗教信者なるが故に斯く謂へるか、然らば校長若しくは主座教員が漢学者なる時は、其の校を以てして之を漢学校と唱ふるか、或は仏教信者なる時は、之を仏教学校と称するか、或はカントを奉じスペンセルを尊ぶ時は、之をカント学校、スペンセル学校と云ふか、豈に其の理あらんや

押川はここで、自らの学校を基督教主義学校、即ち「唯宗教のみを教授する」「唯宗教、祈禱、讚美、読経のみを以て、基督教の主義なり」とする宗教学校、に反対し東北学院教育の目的・「東北学院の主義目的方針」を、次のように説明している。

東北学院の教育と、世人一般の教育と、主眼に於て何の異なる所あるか、教育上には主眼あり、東北学院の取る所は如何、之を前以て曰はざるべからず、併しながら教育に就いては種々の説ありて一定せず、然れども或は先覚者ベスタロツジ、スペンセル、フォックス、ミルトン、フローベル等の有名なる人ありて、教育に就きての見解を論議せり、此の人々が教育てふ語に下したる定解は世既に之を知る。曰く、人物其れ自身を完全に発達せしむるにありと。

教育に就いて、其の方法をいふときは、種々異なる所あれども、其の主眼に至りては、自ら一定する者あり、即ち不具者を作らずして、完全なる人物を作り出すにあり、細言すれば、人には靈魂と肉体とあり、靈魂は靈を完全に発達せしめ、肉体は体を完全に發育せしめざるべからず、身体の養成には又それ／＼の方法ありて、四肢五体を養ひ、或は運動に、或は音楽に、或は健全学に、或は医学に、其の他種々なる形体上に就き、教養其の宜しきを得たる方法あり、また靈魂の教育に至りては、靈魂には智情意の三者ありて、智は如何にして発達せしめんか、情は如何にして之を潔めんか、意は如何にして之を養い、之を強めんかの問題あり、智識を進め、情を清くし、意を強くせんが為には、種々なる事により、其の発達を図らざるべからず、是れ所謂哲学、宗教、道德、審美科学等の学問のある所以なり。此の学院よりして、将来は学者も出でん、詩人も出でん、科学者も出でん、政治家も出でん、其の他種々なる者出で来るべし、教育の目的たる斯くの如くにして、其の結果如何を問はゞ、即ち豪腸男子、真正なる人物、所謂有為の人物、偉人賢者を養成するにあり。智識は狭からずして事に曉通せんことを要し、道德は高くして所謂俯仰天地に愧ぢざらんことを要し、意志は剛くして潔からんことを要し、身体は壯健ならんことを要す。知識広く、道德高く、精神活発有為に、身体強壯健全なるに非らずんば、真正の人物とはいふべからず、斯く論じ来らば、我が東北学院の人に授くる教育は、世人の授くる教育と比して、何の異なる所かある。また決して異なる事のあるべきやうなし。然らば基督教徒が基督教主義を以て教育を施さんとするは、彼の世人の言ふが如く、決して狹隘淺薄なる目的を以て、教育の主眼となす者にあらざるなり。世に真理は二つあることなし、人を導きて完全の教育を授けざれば、其の国立たず、人物養成の道豈に他あらんや。

ここには押川の教育に対する基本的な考えと教育立国論とも言えるものがある。

押川はさらに続けて、次のように言つ。

夫れ日本をして文明の花を咲かしめ、開花の実を結ばしめんと欲せば、宜しく斯くの如く完全なる教育の下に出でたる人物が、同志協力以て身命を擲ち、国家に殉する覚悟なかるべからず、我國民にして、此の献身的精神を有するに非らざるよりは、日本の事得て期すべからず。若し天、幸にして我が国を棄てず、日本の継続者中此くの如き人物を出すに於ては、天下何事か成就せざらんや、此の人平時にありては、或は鋤を肩にし、或は商売に従事し、或は新聞記者となり、或は演説家となり、或は政治家となり、或は教育家となり、或は宗教家となるべし。是れ所謂國家の元氣、社會の主動者たるなり。斯かる豪邁なる人物によりてこそ、其の國の改良は真に出来得るなれ、十人、二十人、百人、乃至千人と、志士に人追々増加するに至りて、始めて我國の改良以て期すべし、此の人々が戰場にありては如何、乃ち勇壯直進、千軍万馬の間を馳駆し、軍事に従事することを得べし、斯かる人物を我が学校に於て造成せんことを望むなり、教育の成否は校舎の大小、生徒の多少、書籍の多寡にもあらざるなり、唯此の校果して真正なる人物を養成し得るや否やを見るべし、此の事にして成就せば、我儕は上帝に謝せん、若し成就せざれば、我教育は其の目的を誤れるものと謂ふべし、我が東北学院は此の目的を以て世に立つ者なり。諸君よ、願くは此の目的を体し、此の主義を守り、此の方針を取り、唯鞠躬勉勵して怠ること勿かれ、我儕は唯諸君が此の豁大有望なる決心を持たれんことを希望して止まざるなり。

（ここには押川の「完全なる教育」「真正なる人物」（「真正のツルー・マン」）の教育による、日本改造論がある。

押川のヴィジョンがある。

この「完全なる教育」「真正なる人物」について押川は第二講で、さらに次のように述べている。

進歩とは何ぞ、是れ現実の境界を脱し、高尚なる理想界に向ひて運動するの謂にあらずや、今日英国文学の美妙は何れよりぞ、彼のバイロン（ウォルツウォールスの誤りか）変移を厭ひて自然を誦ひ、テニソン進んで人を誦ひ、また有名なる二人の詩人ありて、一人は婦人を誦ひ、一人は天を誦ひしに由るにあらずや、自然、男、女、天、此の四者、詩人の優美なる理想に現れて、英国文学の完全を致せりと。是れ所謂基督教主義にあらずや、是れ所謂宗教にあらずや、カントの良心、パウロの信仰、ヨハネの愛、此くの如き者相合して生ずる所の結果、果して如何、是れ真正の大人勇士にあらずや、此くの如き者を生ずる、之を基督教主義学校の目的とす。

ウォルツウォールスの神、カントの良心、テニソンの人、基督の天国、此くの如き者をも顧みず、之を聞いて心に留めざる国民は、其の理想果して如何、高きか、低きか、優れるか、劣れるか、潔白なる国民か、汚濁なる国民か、我が基督教主義を嗤ふ者、宜しく猛省すべし、我輩の目的は、真正なる人物は如何なる者たるやの意味を、実に玩味考究して、以て其の目的を達せんとするに外ならず、世の子弟が今日飲食学に彷徨して学を為すは、是れ食を得るの道といへるが如き、卑劣なる、賤近なる感情に駆られ、高尚なる觀念を欠く故なることを悲み、ここに此の学校を設けて、完全なる人物を養成せんとするの他、一の目的をも有せず、吾輩は我が国民の現状を思つて、涙潜然たらざるを得ざるなり。願くは諸君、今日我国の現況を察して、夜半瞑目、胸に手を置きて前途の日本を思へ、基督教主義は人をして善美に、高貴に、偉大に、敬虔に、仁義に、慈愛に、自然を愛し、天を愛する君子的英雄、豪傑の君子、即ち真正のツルー、マシオンを造成するを以て大主眼となす。

これは「明治二十四年初秋、東北学院講堂に於て」、全校生徒（予科・本科・神学部生）を集めての、字義通り、暗涙流れる大講話であった。初期学院生はこういう押川の下に育てられた。そこには高遠なる目的があった。ここには押川の抱いたキリスト教が、いかなるキリスト教であったかがわかる。単なる教会主義をとっていない。遙かにそれを逸脱したものであった。「願くは諸君、今日我国の現況を察して、夜半瞑目、胸に手を置きて前途の日本を思へ、基督教主義は人をして善美に、高貴に、偉大に、敬虔に、仁義に、慈愛に、自然を愛し、天を愛する君子的英雄、豪傑的君子、即ち真正のツルー・マンを造成するを以て大主眼となす」ここには押川の、押川なりの英雄崇拜論がある。これは押川の生涯を支配する論であった。

ナポレオン、西郷隆盛、勝海舟、後年ではクロムウェルが重要な位置を占める。第二講では教育者として吉田松陰、佐久間象山、藤田東湖の三傑を挙げている。

福沢諭吉については「其の主義の如何は暫く措き、福沢諭吉氏無くしては、今日各社会に散在せる彼の慶応義塾出の人物は、之を見ることを得ざりしならん」と言う。

第二講の中心は、国家主義教育である。「凡そ今日我が国に於て欠くる所の者は何ぞ、即ち経世の大本、国家の柱石是れなり」「我輩苟くも一個の教育者を以て自ら任ずる者、如何ぞ我が国体の何者たるを知らざらん。唯時流に媚び、雷同を旨とし、尤も大切なる我国の子弟を導きて陥穽の罪を負ひ、我国百年の大計を誤るが如き事は、決して為さざるなり」とし、国家主義教育について、次のように言う。

国家主義教育と、我が基督教主義とは、果して一致するか、將た反対するか、是れ我党に限らず、何れの党派にある

も、必ず研究すべき問題なり、国家主義教育といふ語は、従前より公然世に現れ居りし者に非らずして、近年頻りに流行する所の名目なり。

所謂国家主義とは、ナショナル、エヂュケーションといふ事なり、ナショナルとは字義の取り方により、種々に變ずるなり、時には普通といひ、公然といひ、或は固執といひ、或は熱心といひ、其の他種々なる意義はあるなり、茲には之を国家と訳す。主義といふ語は、何れより附加せしかを知らず、兎に角ナショナル、エヂュケーションといふ語を訳して、国家主義教育と唱へしに相違なかるべし、此のナショナル、エヂュケーションの真意を訳出せば、所謂ゼネラル、エヂュケーションの意に相違なかるべし。ゼネラルとは一般、エヂュケーションとは教育なるが故に、之を言へば、国民の租税を以て、日本全国に普く学校を設け、子弟に教育を施すといふに他ならず。

予東京に在りし時、文部省に至り、省中有力の人に就きて、所謂国家主義といふもの、意義を問ひ合したることありしが、其の人答へて曰く、「ナショナル、エヂュケーションとはこれゼネラル、エヂュケーションの意義に他ならず、民間にて主義といふ語を其の間に挿みしは、文部省に於て敢て知らざる所なり。」と、予曰く、「然らば善し、然れども民間の所謂国家主義教育といふものを聞くに、種々勝手なる議論を附加し、之が為に無智者の誘惑に陥ること甚だしく、彼等の所謂国家主義に対して、反対の議論を有する者は、其の説の善悪是非に拘はらず、一も二もなく之に被らしむるに汚名を以てす、文部省にして、国家教育といふ意の一般教育といへる義ならば、此の定義を普く天下に公けにせられんことを希望す、凡そ文字を解釈するは、各自其の意に任せて可なりと雖へども、斯くの如き重大なる意義の民間に誤解せられ、為に無益の談論を費し、正義國を愛する者をして、却て反名を負はしむるが如きに至つては、実に歎くべきの至りなり。」と、思ふに国家主義教育といふ真意のある所を討究すれば、日本に於ては、日本国民たる者、宜しく君に忠に、親に孝に、友に信に、長幼其の礼を有ち、國を愛すべしとの意なるべし、是れ果して真意なりとせば、我が基督



教主義の一部を公言したる者にして、之に毫末の反対なきのみならず、大に賛成を表し、子弟を薰陶して、殊に茲に従事せしめんことを期す。

そして押川はナショナル・エヂュケーションが、ゼネラル・エヂュケーションと矛盾するものでないように、国家主義教育が基督教主義教育と何ら矛盾するものでないことを主張し、その国民が、その国（国家）を愛することは当然のことであり、自分は「基督教主義を主張すると共に、此の主義に反対せざるのみならず、大に賛成せざるを得ず」と言ふ。そして基督教主義をここでは、

基督教主義は保守主義に非らずして進歩主義なり、基督教主義は公平にして不偏不党なり、基督教主義は開港にして鎖港にあらず、基督教主義は一個の主義を有するが故に、仏教を奉ぜず、また儒教をのみ尊ばず、然れども敢て此等を敵視する者にあらず、然れども教育といふものは、宇宙万般の理を考究し、人世の完全を期する者なるが故に、国家といふ一小部分の内に束縛せられ、現在の政治を維持する為に、万般の道理を犠牲に供することは、其の為す所にあらず、蓋し真理は、一國若しくは一國民の専有物にあらず、況んや現制度の箝制かぎせを受くるの理あらんや、我輩は国家主義の天文学といふ者あるを知らず、若しくは国家主義理学、国家主義哲学、国家主義宗教、国家主義真理といふ者あるを知らず、真理の為には、時に或はガリレオが困苦迫害を辞せずして、教会の主張に反対したる前例を遵奉せずとも期し難し。是れ実に我党の忠孝なり、愛国なり。

と言つ。

「教育といふものは、宇宙万般の理を考究し、人世の完全を期する者なるが故に、国家といふ一小部分の内に束縛せられ、現在の政治を維持する為に、万般の道理を犠牲に供することは、其の為す所にあらず」ここには押川の、国家と教育に関する基本的な考え方、教育は国家（政治）を超えるもの、がある。それは内村鑑三不敬事件に対して押川や植村等が「皇上は神なり。之に向つて宗教的礼拝を為すべし」と云はゞ是れ人の良心を束縛し奉教の自由を奪はんとするものなり、帝国憲法を蹂躪するものなり吾輩死を以て、之に抗せざるを得ず」「蓋し政治上人君に対するの礼儀として之を為すことなるべし。果して然らば是れ宗教上の問題に非ず」と同じ論理が働いている。

皇上（天皇）が、宗教的礼拝の対象としての神として崇められるなら、これを拒否する。然し政治上の人君としてなら、礼儀上のことで「教育社交政治上得失利弊の一問題なるのみ」と言つ。

押川の「国家の論理」は、どこまでも「神を畏るべし、国帝を敬うべし」であつた。政治的人君としての天皇が、神として直接、崇められることはなかつた。「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に」（マルコ一・一七、マタイ二二・二二）であつた。

押川はこの聖書の言葉に対して、後に「馬太伝講義」（『押川先生聖書講義』誠修学院編輯部・昭和六年三月、講義明治二十六年）の中で、「カイザルの物はカイザルに帰し」には「其の国の民は、其の国の法に従ひ、忠信を以て其の義務を守るべきなり」、「神の物は神に帰すべし」には「宇宙人類の支配者たる神は誠なり、善なり、智なり、愛なり、力なり、故に我等が誠を尽し、善を尽し、智を尽し、愛を尽し、力を尽して、神に事へ人に尽す

は、是神の物を神に帰すなり」と註釈している。そしてこれに加えて、「此の問答によりて、イエスの機智を見るべし。此の世の如何なる権謀家・策略家・頓智家も及ばざる明智神智を持ち給へり。イエスは宗教家としての天才たるのみならず、経世家としての大才を持ち給へり」「今の道を専らにするといふ者、たゞ道を説き教を宣べて、時勢の如何、時務の如何を知らず、迂濶迂遠なる者多きは、是其の通弊なり」と言う。

押川の時代への目は、そこにも光っていた。

ここで押川や植村等が主張することは、「日本臣民誰か皇室に忠なることを懷はざらん。誰れかまた之を政治上の君として崇めざる者あらん。此の区域に於て為すの礼式は（得失の議論はさておき）基督教徒として敢て不可とする所に非るなり」（「敢て世の識者に告白す」・『福音新報』五一号、明治二十四年二月二十七日）であった。ここでの問題は「良心の自由を固執し、信教の権利を維持し、神と人との別を明らかにして、世に立たんことを期するなり」（植村正久「今日の宗教論および德育論」・『日本評論』明治二十六年三月）の「良心の自由・信教の権利・神人の別」であった。そして教育が国家（政治）を超えるものであったように、良心も国家を超えるものであった。

そこで押川は行政機関府である政府について「政府が教育に干渉して、全国の子弟を一模型の中に形造するが如きに至つては、其の利害の係る所、実に尠なからざるべし」と批判する。

第二講の最後は、この上に立って「真正の愛国者」とは何かを語る。

真正の愛国者は、国家をして完備に発達せしめよ、国民必ず之が為に国を慕ふの念盛ならん。

我が目的を達し、我国をして極盛の位置に進ましむることを得ば、我國民の愛国心また一層の多きを加へん、吾人力の及ばん限り、改良の道を図り、其の方向を取らざるべからず、故に商業を隆盛にし、政治の欠点を改良し、教育の不正を革め、人為の限内に在つて、力の及ぶ限り、我国を改造せんとす、是れ我輩の所謂愛国心なり、「我は此の国に生まれたるが故に、此の国を愛すべし。」といへるが如き、單純なる命令的訓誨を以て、其の目的を達せんとするが如きは、是れ人心の進歩を知らざる陳腐の説のみ、諸君は日本の継続者を以て任ずる者なり、宜しく愛国の心を盛にし、此の国をして独立鞏固の国たらしめ、高尚なる位置に進ましむるを以て、目的とせざるべからず。印度、埃及の如き國民が、天に向つて号泣するは、国亡びて社稷存せざるを以つてなり。是れ其の民が猥りに国土を誇り、進歩の方針を誤りたるを以てのみ、今日の痛歎は既に遅し、我が日本人民たる者、亡国の先轍を見て、戒心せざるべけんや、諸君にして若し國家の為に全力を尽し、身を犠牲に供する勇氣あらば、我が日本は尤も有望の國と謂ふべきなり。

基督教主義は、神人合一の主義なり、故に之を宇内の主義といふも可なり、真理主義といふも可なり、即ち真理ある処には、我もまた在るなり、我れ忠孝を重んず、是れ真理なればなり、我れ國を愛す、是れ真理なればなり、我れ自由平等を重んず、是れ真理なればなり、此処に勢力集まり、此処に真理集まる。

ここには押川の日本改造論、後年の押川の政治的テーゼとなる「内鞏外美の文明国」に通じる「独立鞏固の国」、それに「宇内主義」（世界主義・全アジア主義）などの重要な政治概念が語られている。

天地を貫く至誠の心を以て立つ人は、国愛すべからずといふとも、決して愛することを禁ずる能はざるなり、子輩は真正の愛国者が、人に教へられて国を愛したる例しを聞かず、国を愛するは、真実其の人の心より生ず、此処にありては、愛国これ天真に出づ、此の心を起成し、此の念を起さしむる者は、基督教主義教育の一主眼とす。假令完備なる教育と雖へども、必ず之に対して反対者のあるは、数の免れざる所なり、唯教育を以て、国家現在の制度を保持する一方便とするが如きは、決して我党の服従せざる所なり。国家といふものは、政治の一方に偏すべからず、之に偏するは、恰も南窓に倚りて天空を眺望し、一方の景色をのみ見たるが如し、東西北の絶景は、斯くの如き人の目には隠れたり、また悲しからずや、我が主義は、恰も屋上にありて自由に四顧したるが如し、故に之を宇内主義といふ、我輩は簡にして之を真理主義と名づく、恰も大洋に浮び出でたる船舶の如し、哲学にあれ、化学にあれ、物理学にあれ、其の他百般の学芸は、みな此処に來りて之に泳ぐことを得るなり、昔アゼンスは審美を主とし、スパルタは尚武を主とし、埃及は人種の階級を主とし、ペルシヤは国家を主とし、また支那は保守を以て教育を施せり、是れみな其の弊害を免れざる所なり、成程当時は之によりて、一時人心を収攬したることあり、然れども教育は百年の大計を図り、国家前途の発達を抱いて、競争場裡にある者なるが故に、遠大の希望を以て、精心熟慮之を行はざるべからず、

そして押川はこの二日にわたる講話を、次の言葉でしめくくる。

教育は自由ならざれば発達せず、必ず一方に偏すべきものにあらず、公平を主とし、宇内を目的とすべし、故に我が学校は、此の主義を以て立ち、此の目的を貫き、以て子供を教育せんことを期する者なり。

長々と押川の「東北学院の教育方針」についてふれてきたが、ここに後年の押川の政治思想と行動のすべてが要約されていると思うからであった。

明治二十四（一八九一）年九月と言えば、これはW・E・ホーイやD・B・シュネーダーなどの宣教師教員を前にした講話である。しかし講話の内容には、彼等のナシヨナリズムと矛盾する要素は何一つない。

当時のキリスト者達は、誇張も留保も抜きにして、キリスト者であることが、国家と世界への愛と献身に繋がるものであることを、単純明快に受け入れ、信じていたのである。

後年、明治四十四年五月、創立二十五年周年記念感謝会の席上、押川は同窓生（その中にはかつてのこの「東北学院の教育方針」を聞いた者達もいる）を前にして、この問題を次のように語っている。

吾国には色々なミツシヨンスクールがあるが皆各々其の主義を異にして居る。然し日本を基督教化せんとして居る点  
は、其の規を一にして居ると云ふて宜しい、扱て此日本を基督教化せしむると云ふ事には二つの重大な意味が存する、  
諸君はよく此の事を各脳裡に印して貰い度いと思ふ、即ち堂々たる基督教本義は何物をも許さぬ、何物をも此の教義を  
以て教化し行かねばならぬ、が而し諸君帝國の存在には、亦犯すべからざる根本の真理あることを思はねばならぬ、実  
に此の真理は何物をも得て犯すことを得ざるものである、此の二つのものを調和融合して如意自在にしようとするのは  
容易の事業では無い、然るに此の容易ならざる事業は伝道者其の者の双肩に掛つて居ることである、実に此の事業は賢  
者ならでは成就し能はざるものである、諸君よ此の重且つ大なる責任を双肩ににのふ諸君よ、伝道者の使命は実に此所

に存することを思ふて奮励努力せられんことを希望するのであります。共に俱に協力一致して此の大事業に尽さねばならぬ。

押川は、「伝道者の使命」をこのように見ている。へキリスト教と国家の問題である。そして押川の生涯は、そこにあつた。へキリスト教と国家の、この二つのものの「調和融合」と、それによつてこの二つのものを「如意自在」にしようとする、それは押川生涯の戦いであつた。そこに生まれたものが、押川の神、政治、政治の思想であつた。

さらに後年、押川は『道』の「改造の本源」(大正八年十二月)——目次は「本源」であるが、本文題は「根本」となっている——や「宗教と政治—政教一致の新理想—」(大正十一年三月)で、政治の理想を語り、後者では「政治とは何ぞや、其は理想によつて道を求め、之を實際に應用して行く事である。理想とは上帝を此地上に持つて来る事である」。「私の考るところによると、此日本帝国は一大使命を天父が与へた国家である。其大使命を果す為には先づ日本全国民が救はれ、更に世界を我帝国が救済せねばならぬ」「一体我は神の命を果すべく、世界に於ける此日本に生れたものである。故に其命を果すのが真の愛国心であると信ずる」と言ふ。押川の「調和融合・如意自在」は、こうしてやがて「天父神政の道」——「神政政治」を考ふるに至るのである。

押川はこれより前、明治二十二(一八八九)年三月から翌年五月にかけて欧米視察の旅に出る。この外遊で押川が感じとつたものは、「アングロ・サクソン、恐るべし」であつた。

押川はアメリカに十か月滞在した。アメリカ人に国民的アイデンティティを与えたのは、ピューリタン思想に

基づいた「アメリカン・イスラエル」の思想であった。そこからJ・L・オサリバンの「明白な定め」(一八四五)の思想がでてくる。アメリカ合衆国が領土を拡大することは、神がアメリカ人に与えた使命という、アメリカ膨張論である。そのアメリカの中心的な形成力に、このピューリタニズム、アングロ・サクソン民族を押川は見たのである。

押川の外遊に先立つ明治十八(一八八五)年、アメリカ会衆派の牧師J・ストロングは、『わが祖国』を出す。アメリカ膨張論をキリスト教の立場から弁証しようとするものである。ストロングの思想の出発点は「われわれは選ばれた民である」「アメリカは約束の地」「神はアングロ・サクソンをこの大陸に送り込んで、世界伝道のために訓練を行なっておられる」であった。

そこから神意に基づくアメリカの膨張は、民族の競争における「適者生存の原理」にならうものとなる。「おそるべき危険があるとしても、それによってわれわれの文明は滅亡するとは考えられない。私は、ただキリストの王国を世界に來らせることを早めるか遅らせるかは、今後十年乃至は十五年間のアメリカのキリスト教徒の手に委ねられているのである」(曾根暁彦『アメリカ教会史』、日本基督教団出版局、一九七四、二三六―七頁)とストロングは言う。これを基点としてアメリカに、神意としての宣教師の波が、新しく起きるのは当然であった。へ明白な定めはかつてアメリカ大陸内部での膨張であったが、ここでは全世界に対しての、定めとなる。

ストロングの結論は「アメリカが進むがごとくに世界も進む」である。

ストロングのものが如何に読まれていたかということは、当時の本学のケルカー記念図書館に、その主著である『わが祖国』『來たるべき王国の新時代』をはじめ、『大覚醒』『社会改良のための宗教運動』『時代と青年』『二



十世紀都市』、『膨張論』等の著書があることからでも知られる。

このピューリタンの抱いた「アメリカン・イスラエル」の意識、「神の国」としての神権社会思想は、外遊の押川に一つの大きな衝撃を与えた。特にイギリス、アメリカ、ロシアの西欧列強のアジア進出に対して、「自国の独立如何」（福沢諭吉『文明論之概略』）を問うことは、「神よ、わが日本を救い給え」から出発した押川にとっては、焦眉の急の問題であった。

## 二、国家の問題——神と国家——

明治二十七（一八九四）年八月一日、日清戦争が起きると、その同年十二月に押川方義は本多庸一、巖本善治、原田助、松村介石と「大日本海外教育会」を起こす。その十か月後には「北海道教育義会私立大学設立計画」を立てる。そしてそのための学田用地を探す。押川の頭には、はじめから対露問題があった。最初日本海に面した天塩を求めたが、結局オホーツク海に面した湧別原野にきめる。こうして明治二十九（一八九六）年一月には会長押川、副会長・会計本多で「北海道同志教育会」を設立する。

「大日本海外教育会告白」は、次のように言う。

夫れ国家独立の根柢は国民精神の独立にあり国民開明の基礎は各人教育の発達にあり故に先づ国人世界日進の智識を

得文明の学芸を修め道義を明かにし博愛の精神を懐き天命を畏れて自重嚴莊の氣象を養ふ事懇切なるに非ずんば真誠に長久に邦家の独立を維持せん事は難しとす。今や帝國朝鮮をして真乎独立の基礎を固ふし大に革進する所あらしめんとするに方りては則ち亦大に之が教育を振張し之が精神を脩養せざるべからざる也。：是を以て我脩今方さに朝鮮国現時の狀態に同情を表し其教育の為に懇ろに計画し只管らに該国民の心霊を開導し其国力を涵養し其国粹を啓発し真に善良強健なる一國独立の基礎を育造せん事を期図す。

この「告白」が出されるのは明治二十七（一八九四）年十二月であるが、日清戦争宣戦布告（八月一日）以前、既に戦争状態に入っていた六月以来、この「告白」が発表される巖本善治の『女学雑誌』には、この時期までに朝鮮、もしくは日清戦争に関し、殆ど毎号（三八三―四〇五号）論説が掲げられていた。その中でも注目すべき論説（無署名であるのは巖本自身の筆になるもの）は「国民の大抱負」（三八三号、明治二十七年六月九日）、「朝鮮開導論」（草堂、三九四号、明治二十七年八月二十五日）、そして「告白」後の、「海外伝道論」（四〇九号、明治二十八年四月二十五日）、「国家主義、世界主義」（四一二号、明治二十八年七月二十五日）などである。

これより前に島貫兵太夫には「往て朝鮮に伝道せよ」（『福音新報』八三号、明治二十五年十月十四日、八四号、同二十一日）があった。

いずれもここにあるのは「一國独立」論であった。「一國独立」のための教育立国、「朝鮮開導論」であった。島貫兵太夫は「往て朝鮮に伝道せよ」で、

我大日本は東洋の盟主なり。東洋の先導者なり。宗教に於て、政治に於て教育に於て技芸に於て、其他百般の事。東洋諸国に冠たり。我等は東洋諸国を導くの責任を有せり。我等は今東洋伝道策を講ずるの責任を有せり。我等は東洋諸国を伝道するの天職を有せり我之れを信すること久し。……以爲らく先きに我れ日本にありて東洋を伝道するは我日本为天職なりと確信したりしか益々其信仰を堅ふするに足るなりと其宗教其政治其教育、其他百般の事を看来る時は実に伝道せざるべからざるを知る。日本に勝りて早く救はざるべからざるを知る。

と言ひ、続いて朝鮮（韓国）に対しては、

夜沈々四壁寂莫たり危坐瞑目韓国の現状を考へ将来を思ふ時は実に我心燃えざるを得ざる也。誰か韓国の現状を見。韓国の同胞を愛するものにしてキリスト教の伝道を必要ならずと云ふか。今其時にあらずと云ふか往昔は彼れ我国を啓発せり。文明の器彼が手を通して来れるもの多かりき。今我れは彼に負へる所を果さずんばあるべからずの時機に達せり欧米の同胞我れをキリストに導きたるは我をして又他を導かしめんが爲なり我れ豈に独り受けて他に与ふるの義俠心なくして可ならんや。否な我國民は与られずとも他に与ふるの義俠心を有せり。此れ大和民族の特質なり。

そして「韓国は三十年前の我日本と同じき也。唯志士烈傑の愛国者起りて国事の爲めに死するもの少なきのみ」と言つ。

ここではキリスト教伝道が「其宗教其政治其教育」という様に、密接に、政治と教育にかかわっている。当時

のキリスト教は多かれ少なかれこの島貫と同じ考えに立っていた。そのナシヨナリズムは明治三十七、八年の日露戦争以後の侵略主義的なナシヨナリズムとは異なっていた。が、「海外伝道論」（巖本善治）になると、少し様相が異なってくる。

凡そ、宗教界の伝道者は、政治界の遠征者に先だつてを常とす。僧侶が山を開き、宣教師が領事に先んずるもの、即ち是れ也。左るを、帝師大に動きて、朝鮮国の独立に戦かひ、又、鮮血を流して、新らしき占領地を収めたる今日、尚ほ以て海外伝道の是非を喋々して止まざるが如きは、何事ぞ。

勅宣に之れ有り、朝鮮国は、我帝国が以て扶助し、以て啓導せざる可らざるものなり。他日もし占領地を帝国永遠の属地となさば、これ東洋平安の為めなり、其民以て教えざる可らず、以て化せざる可らず。是れ、既に明白の事にあらずや。此の明白の事あるに際して、尚ほ伝道の是非を言ふ。抑そも伝道なるものは、何事の言ぞや。

既にこの「明白の事」には、アメリカ膨張論の「明白な定め」が見える。

「一国独立」と「明白の事」は押川らの大日本海外教育会に、微妙な陰影を落とす。「大日本海外教育会告白」の「一国独立の基礎を育造せん事を期図す」はそれに続く部分があつて、そこには「是れ我儕が今上皇帝の勅宣を奉軼し其最とも任すべきの方面に尽忠する所以なり」とある。それはこの「勅宣に之れ有り」に照応する。

「基督教新聞」五七六号（明治二十七年八月十日）の「教報」には、宣戦布告翌日の「日清戦争に関して基督教徒の協議」と題して本多庸一等の清韓事件日本基督教徒同志会の記事が掲載されている。そこで本多は、次の

ような「決議案」を提出している。

一、日清韓事件は關係ある国家各自の利害榮辱に關するのみならず實に東洋文明の進退幸福の安危を決するものなり吾人天父を信じ世界を兄弟となすもの宜しく旻天びんてんに号泣し該事件全般の進行をして天意に適合せしめんことを祈るべし且つ其局面に於て最重大なる立場にある日本国上下の思想及軍閥の機務運動の上特に啓誘を加へて仁義と知勇に富ましめ真に其軫職を尽さしめんことを協心懇禱すべき事

一、宣戰の勅語は既に発せられたり事の成功をば国民の忠実勇武に訴られたり日本臣民たるもの焉ぞ感奮尽碎せざるを得んや（略）

この本多決議案とやがて（あるいは殆ど同時に）各地に起きる基督教徒連合の報国義団・戰時軍人慰勞会・奉公義会・同志会等が、そしてその活動内容が、その後の日本の戦時下の、キリスト教と国家のモデルになる。

日本国民にとって、日清戦争は近代における最初の対外戦争であった。

「大日本海外教育会」の設立を本多のこの「決議案」の延長線上に見ることもできる。

これに對して「北海道同志教育会」では、その「旨意書」に、「嗟呼教育なる哉教育なる哉社会の改良国民の教化は独り寺院教会の能くする所にあらず有為の人物を養成して国家の根底を固め多能の技工を出して社会の形成を助け内鞏外美の文明国を造るは實に真正なる教育に在つて存す」とし、北海道の将来は農水産・鉱業の宝庫で約束に満ちていると述べ、さらに「且つ本道は北門の鎖鑰台湾の以て南に備へざる可からざる如く北に備へざる

可からず故に早晚一二の師団置かれ軍港開かれ内外の文物大に面目を改め物質的の進歩蓋し刮目して観るべきもの」と言う。押川等にあったものは、教育立国を中心にした「邦家百年の長計」であった。大日本海外教育会にしても、北海道同志教育会にしても、押川の後年の朝鮮利権問題にしても、そこにあるものは、押川の対ロシア戦略の意識であった。国家はそれ自身に即して言えば軍事的、経済的力をもその本質とするものであり、国際的には、その政治的発展力を主体的単位とする競合的な対立者であった。押川は、既にそうした点から全アジアをその戦略視野に入れているのである。そしてその視野の中で、福沢諭吉の『文明論之概略』・『学問のすゝめ』で言う「一国独立」の文明化(近代化・富国強兵)を考えるのである。それを彼は「邦家百年の長計」と呼んだのである。

押川の大日本海外教育会の「該國民の心霊を開導し其国力を涵養し其国粹を啓発し真に善良強健なる一国独立の基礎を育造せん事を期す。是れ我儕が今上皇帝の勅宣を奉軼し其最とも任すべきの方面に尽忠する所以なり」の「一国独立」は、天皇の宣戦布告の詔勅(勅宣)の「朝鮮ハ帝國カ其ノ始ニ啓誘シテ列國ノ伍伴ニ就カシメタル独立ノ一国タリ」を踏まえたものであろうが、押川の念頭には、この場合、〈政治〉よりも〈教育〉があったことは確かである。それは「一国独立の基礎を育造せん事」を見ても明らかである。押川にとっては、そこには師のブラウンや、バラがあった。その業があった。が、押川のこの業は、洪沢栄一(会計監督)、大隈重信(後、會長)、後援者に日清開戦当時の閣僚井上馨(内務大臣)、榎本武揚(農商務大臣)、それに非公式に伊藤博文等を加えて行く段階で、既に押川等の手を離れる国家的事業の中に組み込まれて行く。

「基督教新聞」の主筆であった横井時雄はこの時期、盛んに同新聞に、「真正なる愛国心」(明治二十六年七月二十一日)、「基督の倫理教」(明治二十七年六月十五日(一))、八月三日(七)、「基督教界の新潮流」(明治二十

七年八月十日（十七日）等を書いている。

「真正なる愛国心」ではその冒頭、先づ「基督教の教理と所謂国家的精神とに如何なる関係あるやは今敢て之を論ぜざるべし、然れども試に聖書を繙ひて之を一読すれば終始之を一貫して常に之と相離れざるものは即ち希伯来国民が愛国の精神にして、其歴史に於ても其文学に於ても皆偕に如何に彼等が此心情に富めるやを示めずを見ることならん」と言つ。

ここには明治国家主義的キリスト者の聖書の原理とも呼べるものがある。彼等は国家主義の原理を、イスラエル民族の歴史や文学、そして具体的個々には預言者や、イエス（基督）、パウロ等に熱狂的に見て行つた。そして「義は国を高くし罪は民を辱しむ」（箴言一四・三四）の観点からイスラエル選民思想を、民族的モデルとして行つた。それはピューリタニズムの中の「アメリカン・イスラエル」に重なるものであつた。

横井はここで「正義公道」を語る。そして「彼の預言者等が其国家を愛するの心は即ち正義公道を愛するの心にして、彼等に於ては正義の観念は常に国家より離るゝことなし」とし、これに反し「彼の詐偽と腕力とによりて猥に小を苦め弱を弄し非理を行ひ不義を遂げ、以て尚ほ自国の繁栄を計らんと欲する姑息的愛国心に比ぶる時は殆ど霄壤月鬩の差あるをみるなり」と言つ。

「基督の倫理教」では「日本人は先天的に倫理的国民なり」とし、この倫理性を善美に完成するものは儒教や仏教ではなく、基督教の持つ「倫理的勢力」であるとし、「今日に至るまで新教信徒中に多数の旧士族の子弟を得たる所以のものは、基督教の高尚なる倫理的精神が能く古代武士の気風と相合したるも其一原因たらずんばあらず」と言つ。これに対し、国家主義者に対しては「国家主義なるものは遂に狭隘偏僻なる道徳主義たるを免かれ

ず、是れ豈に我国人民天賦の美を成し以て大に之を發揚するに足らん哉、夫れ之を能くせむ者は愛神愛人の人類宗教的倫理教を措て何れの所にか之を求めん」と、当時、澎湃として起つて来ていた国家主義者に向かつて言う。それは押川が「東北学院の教育方針」で語つたナショナル・エヂュケーションとゼネラル・エヂュケーションと、本質的には何ら異なるものではなかつた。彼等はキリスト教倫理こそ、眞の愛国心を形成する形勢力と見た。そこでは「國家の論理」と「個人の論理」とは何ら矛盾するところはなかつた。

「神を畏るべし、国帝を敬うべし」

は、この愛国心の中では、矛盾するものではなかつた。

押川にもし問題があるとすれば、この愛国心の問題ではなく、大日本海外教育会という国家的事業、洪沢栄一が「本会ハ清韓諸国ニ文明的教育機關ヲ起サントスルモノニシテ、已ニ韓国ニ一・二ノ学校ヲ設立シ其成績見ルヘキモノアリ、亦國家事業トシテ必要ノモノナルニ付之ヲ贊助シ、現ニ會計監督タリ」(明治三十二年、『洪沢栄一伝記資料』第二十七卷、七五頁)という「國家事業」の枠の中に、つまり政治——「個人の論理」を超える「國家の論理」の中に生きねばならぬ——の枠の中に身を置いた、その事の中にあつた。

朝鮮や中国(北清事變の際の北京)での大日本海外教育会(民間レベル)の仕事は、押川の意志に関係なく、当初から伊藤博文や小村寿太郎の外交政策の中に組み込まれていたと言える。または、そうした性格を持つていた。

その中で押川の持ちうる「政治からの自由」の確保だけが、押川の「個人の論理」を生かす。それがその後キリスト者、もしくはキリスト教思想家としての押川方義の、政治的生命を賭けた戦いとなる。押川が単純に



転向者として、キリスト教を、もしくはその生涯の前期に欧州列強の帝国主義的東方政策・植民地主義の中でへ一  
国独立・教育立国<sup>▽</sup>の志を抱き続けたキリスト教的理念を、捨てたのではない限り、これは当然押川生涯の戦い  
となつて行く筈のものであった。

## 二 後期

### 一、民族独立

押川方義の政治活動が始まるのは、大正四（一九一五）年三月の第十二回衆議院議員選挙に福島県から立候補  
した時に始まる。

#### 立候補宣言

今や世界大乱、東洋多事の秋に際し、心を君国の事に致す者、孰か政道の興廢を念はざらん、子の非才を以てして、常  
に心思を国運の隆盛に勞するに於て、密かに人後に落ちざらんことを期す。

偶ま今回の総選挙に際し大隈伯の懇篤なる勧誘に依り遂に中立を標榜して候補者たることを決するに至れり、その中立を標榜する所以は従来既成政党と何等の關係を有せざるを以てなり、若し夫れ幸にして当選の榮を得ば平素の懷抱を以て議政壇上に臨み、誓つて諸君の信頼に負かざるを期すべし。即ち予が懷抱の一端述べること下の如し。

- 一、大権を尊重し民権の伸張を図る事
- 二、国防の充実を計り国家經濟の基礎を堅固ならしむる事
- 三、列強に対しては經濟的關係を厚ふし国交を円満ならしめ而して東洋政策の大計を確立する事
- 四、教育制度を改革し大、中、小学をして各々独立教育機關たらしむる事
- 五、殖民政策を確立して大和民族の海外發展を図る事
- 六、交通機關の完備を期し産業の發達を図る事
- 七、選挙権を拡張し単に財産制度に由る事なく知識徳操を以て選挙資格の要件たらしむる事
- 八、党弊を打破し国家本位の真政党を確立する事
- 九、議員の風紀を振肅し其の神聖を保持する事

勿論、政治的宣言であるから、そこからは直接キリスト教は聞こえて来ない。が、既に押川はこの時期までに松村介石の『道』（編集助手は大川周明であった）に、次のような講演記録（大川の手によるもの）があった。

号 年月（大正） 題名

五五	元・一一	国民の覚悟
五六	一一二	生命力
五八	二・二	我に三楽あり
五九	三	国の盛衰
六一	五	排日案と基督教徒
六二	六	諸君果して準備ありや否や
六四	八	真宗教の標準
六九	三・一	日本の宗教家に問ふ
七二	四	国乱れて英雄を懐ふ
七五	七	天来の声
七六	八	唯だ一語を松村君に餞す
七七	九	日本及日本人の運命
七八	一〇	欧州戦争と大和民族
七九	一一	「若しも」
八〇	一二	大正三年の回顧
八一	四・一	予想と希望と
八二	二	時の休徴
八三	三	時事雑感

以上である。

第一次世界大戦が起こるのは、大正三（一九一四）年七月二十八日であった。日本が対独宣戦布告をするのは八月二十三日である。押川の『道』論調もそれを境に、それ以前、宗教的色彩を主にしていたものが、それ以後、政治的、民族的色彩が濃厚になってくる。「立候補宣言」の「今や世界大乱、東洋多事の秋に際し、心を君国の事に致す者、孰か政道の興廢を念はざらん」（前文）、「九、議院の風紀を振肅し其の神聖を保持する事」は『道』の「国乱れて英雄を懷ふ」の山本内閣の、シーメンス事件にふれるものである。

「日本及日本人の運命」では、押川は「維新決して此かた、帝国の危機今日より甚しき事あるか。この四五年以来、日本に起りつゝ、ある事実は何事を吾等に語るか。如何なる無声の声が日本の現在並に将来に就て叫ばれつゝ、あるか。一片憂国の丹心あるものならんには、到底晏如として居られる今日ではない。古へのイスラエルに於ける如く、あゝエルサレムよ、エルサレムよと叫ぶ森厳にして悲壮なる声、及び此声に従ふ真摯にして剛健なる精神なくば、君国の前途は寒心に堪へぬ」と言い、「この貧しく狭小なる国家を擁立して、列強と角逐する」ためには「従来の愛国心よりも、更に壮嚴偉大なる愛国心」が必要であると主張する。その壯嚴偉大な愛国心とは「独り日本帝国に於てのみならず、世界に於て大和民族の大精神を發揮する事」「大和民族が、至美至善至真の道（ひま）を提（ひ）げて、世界に打つて出る事である」と言う。

そのモデルを押川はユダヤ人に見る。世界におけるユダヤ人は、世界の経済界、政治界、思想界に、極めて大きな貢献をしている。しかし彼等ユダヤ人は頑冥固陋である。従つて今尚、亡国の民に過ぎない。

そこで押川は次のように結論づける。

今後の大和民族は、国を思うて思はず、愛して愛せず、執着して執着せざる底の大愛国心を抱き、大和民族本来の大精神を飽迄も護持し乍ら、吾等は無形に於て偉大なる発展をなす可き運命を有すとの確信に立ち、英国に於ては英国のため、米国に於ては米国のため、露国に於ては露国のために、心身を尽して生活する覚悟がなければならぬ。

ここには押川の政治的宗教的理想主義・ロマンティシズムがある。が、一方押川はこうしたロマンティシズムの中で、「アメリカン・イスラエル」のアメリカ(国家)を超えた、超国家的、世界主義的視野に立ったユダヤ民族的神政政治を、その究極的形態として持つに至る。その過渡的曖昧な表現がここにある。

既にそれは押川の民族独立論、全アジア主義にも通じるものであった。

押川方義はその生涯において、幾つかの民族独立運動に参加した。

明治三十二(一八九九)年 フィリピン独立運動(アギナルド將軍)の志士マリアノ・ポンセの武器調達支援 || 布引九事件(七月)

大正四(一九一五)年 押川、大川周明・頭山満・寺尾亨等と組んでインド独立運動の志士ラス・ビハリ・ボースを相馬黒光のもとに匿う(十二月)

大正五(一九一六)年 肅親王、川島浪速等と満州新国家実現計画に乗り出す || 第二次滿蒙独立運動瀧野川協議(三

月二十四日)

「押川は結局、辛亥革命（一九一一年）の孫文の中国を支援すると共に、この肅親王の満蒙独立運動という、二つの中国を支援することになる。」

ここで押川が朝鮮、特に日韓併合（一九一〇・八）についてどう考えていたかにふれたい。

この同じ「日本及日本人の運命」で、押川は伊藤博文や明治天皇について、次のように言う。

然るに此四五年以来の日本の国情を觀よ。我国第一等の政治家を以て目せられ、遠大なる思想を以て国家の経綸に当れる伊藤博文は、天寿を全うせずして異域に變死した。聖帝にして賢王、賢王にして明主たる明治天皇は、宝算万々歳を祈り奉れる甲斐もなく、苟且かりそめとのみ察し奉りし御病悩いたづきの為に、俄然として神逝かんきり給ふた。大正の御代に入りては、国家の宰相として政治の枢機に与かれる其人が、国民粒々辛苦の結晶なる国帑を盗んで、一家一身の為に計つたと言ふ世上巨悪の嫌忌を受けて、遂に内閣を投げ出した。

ここでは伊藤は「遠大なる思想を以て国家の経綸に当れる、我国第一等の政治家」であり、明治天皇は「聖帝にして賢王、賢王にして明主」であった。最後の「内閣」は山本権兵衛内閣である。後に押川に「我輩は朝鮮遷都を主張す」（『道』一八六号、大正十二年十二月）がある。関東大震災直後のものである。そこで押川は国家経営上の問題から、「当局の謂ゆる大東京復興案」に反対、「帝国千年の将来のためには宜しく王城を朝鮮に移し奉

るべしと主張」するのである。

その理由として、押川はまず「凡そ一国の盛衰は其国の地理的關係と交渉すること極めて深きものがあるのであつて、東洋の辺陬に孤立して四面を水に囲まれたる我帝国は、列強角逐の活舞台と縁薄く将来愈々大をなさざるべからざる帝国の使命のためには」甚だ恵まれない地にいると言うのである。そして「我輩は多年我日本のために大陸政策の必要を絶叫し来つたのであるが、而かも我輩は是れがために他国の領土を侵略せよといふのではない。尺寸も他人の国土を侵さずして我輩の持説を實行し得る方法があるのである。我領土のうちで不完全ながらも大陸に联接するものは半島朝鮮の他よりない」と言う。そこから日本の人口問題も同時に解決しようと言う。

天に二日なく地に二王なし。いづれの国民と雖其元首を尊敬せざるはないが、わけて我國の皇室は万世一系の歴史を有し、国民の宗家として其崇拜の目標とならせ給ふ所である。

夫れ普天の下王土にあらざるなく、卒土の浜王臣にあらざるはなけれど、凡そ王城の地は王化の未だ大に光被せざる所を選んで定むべきである。

ここには押川の「神よ、わが日本を救い給え」の、〈日本の論理〉しかない。そこには微塵も、〈朝鮮の論理〉はない。押川にすれば、この〈日本の論理〉の中に〈朝鮮の論理〉を抱き取っていると考えたのであろう。押川にあったのは、日本の大陸政策、その中での朝鮮王化だけであつた。

押川はこの文章を「稍もすれば不企ふきを謀らんとする者さへある新付の領土に龍駕を遷し奉りて、著大深厚なる帝徳を以て新に得たる彼等兄弟姉妹の心を和らげ、彼等をして忠良の臣たらしむるは、治國平天下の大目的を貫徹する所以と信ずる」で結ぶ。押川の「経國の大計」はこのようにその大陸政策から皇民化教育（後に同和政策、皇民化政策と呼ばれる）までを含んでいた。

その点、押川にはここに言及された不企、即ち大正八年（一九一九）三月の三・一独立運動も（日本の論理）だけで押し切っていて、その歴史的現実は見えていない。

大正十（一九二一）年には、

日本組合教会第三七総会、朝鮮伝道部廃止を決議。所属朝鮮教会は独立し、朝鮮会衆教会を創設。会長・柳一宣。渡瀬常吉、組合教会総務部長となる（『日本帝国主義下の朝鮮伝道』巻末年表、飯沼・韓共著、一九八五・日本基督教団出版局）。

ここにある渡瀬常吉は、かつて押川の大日本海外教育会京城学堂長（明治三十二年～四十年）、柳一宣は、その卒業生であった。

対韓問題に対しては、日韓併合当時、海老名弾正は『新人』第十一卷九号（明治四十三年九月）に「日韓併合を祝す」を書き、そこで「吾人は日人の為にこの合併を祝するのみならず。又韓人の為にも祝すなり、独り日韓人の為に祝するのみならず、神国発展の為に祝せずんばならず。朝鮮の独立は吾人の希望したる所なりき。外国



の隷属として存在するほどその人民に取りて不幸なるはあらざりき。吾人が韓国の独立を希望したるは実に韓人の不幸を限りなく憫然に思うたるが故なり」と言う。

ここには「合併—神国発展—朝鮮独立」の海老名独自の「帝国膨張論」がある。海老名はこれに続いて「先づ韓国が亡国となり韓人が亡国民となれりとの浅墓なる感想を懐かざることなり」「朝鮮国はその従来の隷属国状に死してこの独立特行の大国民に復活すべきなり」「日韓の合併は千古未聞の偉業なり、建国以来国民の実験せざりし所なり。しからは帝国民は此合併の偉業に於てその本来の靈能を發揮せずんばならず。日本は従来の島国根性に死して新国興民の氣象に復活すべきなり。日韓の合併は宜しく英蘇合併の如くなるべし、英蘭合併の如くあるべからず」と言い、さらに最後を「吾人人道の名を以て、神国の名を以て日韓の合併を謳歌せざらんと欲するも得んや」で結ぶ。

吉馴明子は、その『海老名弾正の政治思想』（東京大学出版会、一九八二）・第三章第二節「『帝国膨張論』との共鳴」の中で、この神国思想について、次のようにふれている。

海老名は「個の尊厳」を「人類社会」のミニアチュア、「普遍の原理」に読みかえ、それによって、やはり「普遍の原理」の実現の場である「宇宙・世界」に生起する現象に対する「同情」「同感」を可能たらしめたのであった。これは、個人を国家に重ね、「帝国膨張」を「神の国」の膨張に重ねる彼の「帝国膨張論」形成のための第一の手続きであった。

（△△）個人の「人類の精霊」への同化）

「帝国膨張」に自我実現と「神の国」の実現を重ね合わせるために必要とされたもう一つの手続きは、機構としての「国家」から、「生物」のようにそれ自身で発展して行くような「全体」としての「国家」へと、国家像を転換すると同時に、それを「精神」において捉え、「普遍的精神」に根づかせること、すなわち、日本帝国に「神の国」の実現を見ることであつた。

仏陀・聖人・神子といった宗教上の理想像・人間類型に、それらの理想を「国家」的に具現する「国家の仏陀」「国家の聖人」の存在を海老名は対峙させる。それは、「個人」が仏陀であるのとまったく同じ意味で、「国家」が仏陀となること、換言すれば、仏陀の集合からなる「仏陀の国家」ではなく、それ自体不可分の統合体としての「国家」が仏陀となることへの希求の表現であつた。そのような「国家の仏陀」「国家の聖人」「国家の神子」は、各宗教の発祥地においてさえ実現されることがないが、日本国にはそれができると、海老名は言う。

(三三三)「神の国」としての日本国

そしてそこに海老名は「世界的国是の原理」(普遍的精神)の内容としてキリストによって示された「博愛平等」を語る。それは、国々の主義を超絶した普遍の主義であるから、日本魂の拠つて立つべき原理を、この世界人類の基礎に読みかえて行くべきだと言うのが、海老名の膨張論であつた。

吉馴氏は、海老名のこの日本民族の指導原理としての博愛平等は、国粹的国家主義者を打つと共に、他方では

欧米の民族的宗教的特権意識を打破するとも言つ。

植村正久は、これとは別に、朝鮮における独立運動を当然として認めた。植村は「福音新報」第七九三号（明治四十三年九月八日）に「朝鮮の基督教（一）」を書き、この（一）のしめくくりを、次のように結んでいる。

孰れにしても朝鮮の基督者が国を憂ひ、独立を重んじ、他の威力に対して反抗するの氣勢を保つといふことが事実ならば、仮令ひ根が浅く、中学生徒の無闇に威張る様な生意気であるにもせよ、高尚な精神的方面から人道の側に立ち、之を批評するならば、却つて末頼母しく、後世恐るべしとでも云ふが適當であるまいか。敵の健気な振舞にも感服する日本の武士道から言つても、然うであらう。若し基督教の外国宣教師が朝鮮人民の間に屈從的精神を鼓吹し、無闇に柔和しく、何でも構はず太平無事の人民を養成したとするならば、是は日本人の氣象として決して感服することの出来ぬ始末である。其れどころか、是れでは基督教は国民の害であると認めて極力之に反対する態度を取るに至るが自然の結果であらう。又斯る場合に非難をされても弁解の辞柄を見出し難いであらう。朝鮮の基督教徒の中に或る人々のいふ如き気概でもあるならば、当分此方には少しく不便ではあるが、末を樂んで歓迎すべきである。朝鮮八道せめては少数でも斯ういふ程の者無くして如何なるものか。我々は朝鮮の基督教を論ずる者に雅量乏しきを残念に思ふのである。

そして次号には、

朝鮮の基督教

読者の記憶せらる、如く、是れ前号福音新報に於て僅かに其の第一稿を掲げたる題目なり。然るに去ぬる十一日突然警視總監より次の如く達せらるゝに遭ひぬ。

一、明治四十三年九月八日発行福音新報第七百九十三号は安寧秩序を紊すものと認め新聞紙法第二十三条に依り其の発売及頒布を禁止す

二、朝鮮の基督教と題する掲載事項と同一趣旨の事項は其の掲載を差止む右内務大臣より命令ありたるに付此の旨相達す。

遠隔の地に住居せらるゝ福音新報購読者の中には其の第七百九十三号を受取らざる人のあらんことを恐る。全国の郵便局は、該号の福音新報を配達すべからずてふ通牒を受けたるべきを以てなり。是れ福音新報当事者の深く遺憾と為す所なり。

朝鮮の基督教と題する文章果して斯の如き処置を値ひするものなるや否やは暫く之を論ぜざるべし。篇を重ねて、論旨佳境に入るに及ばゞ、官府の当局者と雖も、福音新報の所説最も深く朝鮮の治安を助け、国家及び人道の爲めに満足せらるべきところありたるべきを疑はず。然れども死せる児の年齢を算ふるにも似たれば、之を啾々しく論ぜんは詮無し。『朝鮮の基督教』は、前号限りを以て葬り去らるべし。無論当局者の意旨は福音新報をして朝鮮の基督教及び其伝道に關して、一切沈黙を守らしめんとするにも非ざるべければ、他の機会を得て更に之を論ぜんと欲するのみ。

内村は、これより少し後の時代、D・ベル宛て「私は日本が朝鮮を併合したことは、とりも直さず、一ポーランド国を合併した事であり、結局このたべ物を完全に消化することは望みがないのではないか、と案じます」(一

九一七・四・一九）と言う。

以上、対韓問題に関し長々と、海老名、植村、内村、三者の基本的姿勢を見て来たが、これに対して押川は日本膨張論の線に即しながら「内鞏外美の文明国」「独立鞏固の国」、後に大正六年（一九一七）四月の衆議院議員選挙の際の「日本国をして最善、最強、最大の国たらしむること」（「愛媛新報」四月十二日）、「吾国を最大、最強、最富のものにしたい」（同、四月十九日）という、その線上をひたすらに走るのである。

それはあるいは海老名や植村や内村とも異なつた四国艦隊がその沖を通過する瀬戸内海の町松山に、しかも尊皇攘夷という教育的、家庭的環境にその青少年期を過ごした、そのことによるとも言えるかも知れない。それは同時に、「アングロ・サクソン恐るべし」の押川の肉体と精神の心底からの政治的危機感でもあつたらう。押川はたゆみなく欧州列強のアジア侵略の目を感じた。押川の対韓政策は完全にこうした中での、日本のとるべき大陸政策の一環に組み込まれたものであつた。押川はその生涯、自らの政治の師として西郷隆盛を崇拜していた。「居室に大西郷の肖像を掲げてその精神を偲び、彼れ自身また雄偉高邁、剛勇果敢、熱烈猛火の如き至情と不動磐石の如き信念とに依つて行動した」（前出）と言われる。

西郷の征韓論については、現在色々取沙汰されるところはあるが、西郷が征韓論に破れ下野した直後の明治七（一八七四）年一月、酒井玄蕃（旧庄内藩士）に語つた西郷談話がある。

閣議が征韓を内定したとき、開拓長官黒田清隆が樺太問題をもちだし、朝鮮よりも樺太を守るのが先決ではないかというので、西郷はつぎのように答えた。『今日ノ御国情ニ相成候テハ、（中略）ヒッキョウハ露国ト戦争ニ相成候外コレ

無く、イヨイヨ戦争ニ御決着ニ相成候テハ、直ニ軍略ニテ取運ビ申サズ候テハ相成ラズ、只今北海道ヲ保護シ、ソレニテ露国ニ対峙相成ルベキヤ。サスレバイヨイヨ以テ朝鮮ノ事御取運ビニ相成リ、ポシエツトノ方ヨリニコライマデモ張リ出シ、此方ヨリキツト一步彼地ニ踏込ンデ此地（北海道・樺太）ヲ護衛』せねばならない。

ちようどいまトルコ地方で英露の対立が激化しており、近く英露の戦争がおこるとの説もある。『カツ欧羅巴ニテハ、北海道ハ各国雜居ノ地ニ致候目論見ニコレ有り候ト相聞キ、大方其事モ近々照会ニ相成ルベシ。トカク英ニテハ海軍ハ世界ニ敵ナク候間、北海道ハ暫時英仏ニ貸シ候テハ如何ナド申事ニテ、欧羅巴ニ於テモ、露ノ北海道ヲ目懸ケ候ハ、甚ダ以テ大体ニ關係イタシ候、右故趣向モ付ケ候ニハ相違コレナシ。

右ノ通りノ事情ニゴザ候エバ、日本ニテ其通りニ憤発致候トナレバ、トルコニ於テモ、是非一憤発ハ致スベク、サスレバイヨイヨ英ニテ、カネテヨリノポーランドヨリ事ヲ起スニハ相違コレナク、ヨクヨク英国ト申合セ事ヲ拳ゲ候ニ於テハ、露国恐ルルニ足ラズト存ゼラレ候。其段キツトナク申述べ候処、岩倉ハ、現ニ軍ハ恐ロシトモ申シ難キニ候エバ、ソレニテハ順序ヲ失ウト云ウ、云々』

なお対露策として、北海道の札幌に鎮台を置くとの義もあり、そうすれば西郷は札幌本営に、篠原国幹は樺太分営に長として行き、ロシアと一戦を交え、政府は降参しても『私一人ハ決シテ降参致サズ候、云々』の決心もあつた（日本の歴史20『明治維新』井上清、中公文庫・一九七四、三三四〜三五頁）。

この西郷の対露抗争論は、押川の政治活動の根底にあつた。大日本海外教育会も北海道同志教育会も、そうした点からとらえることもできる。

この「我輩は朝鮮遷都を主張す」に続いて押川は『道』一九六号（大正十三年十月）に「遷都に關する建議案」を再び提出している。そこでは押川方義と松平康国の連名による、大正十二年九月、内閣総理大臣伯爵山本権兵衛（第二次）宛の「遷都ニ關スル建議案」（全文、六頁）が、震災一周年を記念して掲載されている。押川は「遷都の意見を時の内閣に建議いたしましたけれども、之れは一笑に付せられまして、空しく反古にされまして」というこの建議案の前文で、前回同様、大陸政策論としての遷都論をぶち上げている。建議案の内容は「我輩は朝鮮遷都を主張す」で述べたことと変わらない。押川は、この建議案の中で、

明治維新以來開國進取ノ國是ニヨリ、着々トシテ大陸政策ヲ行ヒタルモノハ、豈ニ毫モ侵略ニ意アラシヤ、誠ニ土地狭ク、人口衆ク、生産少ク、物資以テ自給スルニ足ラザルガ故ニ、廣ク移植ノ途ヲ求ムルガ為ニシテ、一ニハ弱肉強食ノ世界ニ立チ、守ルハ失フノ本ニシテ、退クハ亡ブルノ由ナレバナリ、台鮮ノ版図ニ入り、南滿ノ勢力ニ歸シタルガ如キ、水到リ渠成ル自然ノ勢ニシテ、国力ノ海外ニ展ビ重キヲ東洋ニナセシモノハ、是レ固ヨリ先帝神武聖文ノ致セシ所ナリと雖モ、亦未ダ必ずシモ國民ノ元氣横溢、大日本ヲ理想トシテ世界ニ雄飛スルノ精神アリシニ由ラズンバアラズ

ここにあるものは、一見、全く「國家の論理」だけである。日本膨張論の「明白な定め」だけである。その中で押川は「豈ニ毫モ侵略ニ意アラシヤ」と言う。

押川はかつて『芙蓉峯』（明治二十九年―三十一年）の時代―それは押川の大日本海外教育会の時代になる―學生に向かつて語った。

○此世は競争の為に造られたり、競争によりて進む、物相磨して、其緻密をなし、其精微をなす、此競争場裏に立つこと能はざるは病人なり、神は之を憐み給ふなり：然れども其子の独立して働くことを喜び給ふ：今は世界の三大人種が競争の時なり、「アングロサクソン」人種と、「スレヴォニツク」人種と、「モンゴリヤン」人種とが、互に競争する時なり、智力に於て、德行に於て、体力に於て、優者は勝ち、劣者は敗る。

基督曰く『地に泰平を出さん為に我来れりと思ふ勿れ、泰平を出さんとに非ず、刃を出さん為に来れり』と、此世は有形、無形の戦争場なり、明治の青年たる者、大に覚悟する所なかるべからず（「競争と進歩」明治二十九年四月）。

○今日は大日本海外教育の事業より連想し来れる国家といふことに就きて、考を述べんとす、世界の盛衰興廢に由りて、国家にも亦生命あることを知る、生命ある国は、生命ある人の如く、追々に発達生長す、人間の死は、内に「エネルギー」の不足を生じ、外来の力に勝たざるより起るものなりと、生理学者は曰へり、国家の死も亦然るなり、人はこれまで有し来りし歴史にのみ由るべからず、基督の教に於ては、「人間は死なす」といふ、天然自然の願望は不死に在り、国も亦然らん、理想の国は不死の国に非ずや、人の死なざる体を義といひ、国の死なざる体を天国といふ、国をして不死ならしめんが為めに、大人の生命を以て国家の「エネルギー」となす、是れ真の愛国なり、人、愛国といふ、然れども愛国にして、無智蒙昧なる母の其子を愛するが如くならば、恐らくは誤ること多からん、真の意味に於て猶太は国家無きなり、夫れ適當なる土地と、其上にある人民と相合して、ここに一つの「ネーション」といふものを生ず、近頃は国家の盛衰と、地理の学問との研究は、学者間に行はる、日本は如何にせば、勢力を強むるか、昔よりの歴史を見るに、日本の発達は外交に由れり、日本は鎖国攘夷を以て国是となすべからず、大器晩成といふ如く、日本は二千五百年來、非常の蓄積をなせり、太陽に長く照らされたる石炭は、堅くして長く燃ゆ、日本の大方針、大国是は、世界に向て、日本の外交を盛んにすることにありと思ふ、日本が朝鮮を預かれるは、医者が大病人を預りたるが如し、船頭が破船を救



はんとするが如し、大工が將に傾かんとする家を支へ建てんとするが如し、実に日本の力量を現はす時なり、朝鮮を救ふは、日本の生命を朝鮮に入る、ことなり、日本を強くすることは、外を救ふといふことに於て欠くべからざるなり、一人の学者が学問をなすこと、他人に与へんが爲めに必要なが如し、日本の道德の觀念は、大義明分なり、大義は君臣に始まり、名分は社交の間より起れり、今日の有様は此大切なものを失ひ居れりと思ふ、之を粗末にする軽薄の人となりたるもの多しと思ふ、之を大切とせざるものは、真に国を害するものなり、国家の一分子として、一人の悪は國家の病なり、朝鮮に猜疑心多し、日本国民は猜疑心なきや否や、朝鮮に公同の心なしといふ、日本国民は公同の心あるや否や、是れ自省すべき問題なり、此古往今来、比すべからざる盛運の時代に生れて、國家が大に為さんとする時に當り、我が人民たるもの、今日悔べき所には、麻を衣、灰を被りて、悔ひ改めざるべからず、吾人此大時機に際して、大覚悟をなして、人となることに努むべきなり、愛國の精神を世界的になすべし（『日本國家の大方針』—東北學院講堂—明治二十九年五月、前者共抄録 川合信水）。

明治二十九年も、大正十三年も、押川の言う所は全く変わっていない。そこには（転向）と呼ばれるべきものは、何一つない。

「競争と進歩」で言うところのものは、ダーウィニズムであり、H・スペンサーの社会進化論であり、十九世紀ナショナリズムの社会理論であった。

既に言及した「日本及日本人の運命」（『道』論文）で押川は「壯嚴偉大なる愛國心」を語った。その愛國心とは「独り日本帝國に於てのみならず、世界に於て大和民族の大精神を發揮する事」「大和民族が、至美至善至真の

道を提げて、世界に打つて出る事」「今後の大和民族は、国を思うて思はず、愛して愛せず、執着して執着せざる底の大愛国心を抱き、大和民族本来の大精神を飽迄も護持し乍ら、吾等は無形に於て偉大なる発展をなす可き運命を有すとの確信に立ち、英国に於ては英国のため、米國に於ては米國のため、露國に於ては露國のために、心身を尽して生活する覚悟がなければならぬ」と言い、世界に離散するユダヤ人は、世界の經濟界、政治界、思想界に極めて大きな貢献をしている、と述べた。

「日本國家の大方針」で言う「愛國の精神を世界的になすべし」のこの結語もまた、これに外ならない。

押川はその「教育と伝道」の出發の当初から、この幻視と予見の上に立つて「無形にして偉大なる」「大精神」の、見えざる「神の國」・神政政治の世界を考えていたのである。それを押川は「愛國心」に対して「大愛國心」と呼び、大和民族にそのような「心身を尽して生活する覚悟」を求めたのである。それは國家エゴイズムの國家主義の枠内での愛國心ではなかった。それを超えるものであった。

押川の「豈ニ毫モ侵略ニ意アラシヤ」のそこにあるものは、單なる日本膨張論ではなかった。

押川は、その神政政治について、「政治の要道は國家を神の國とするに在る。堂々たる人生觀の上に立ち、社會と宇宙とに対する徹底せる觀念を有し、宇宙の大精神に従ひて國民の生活を指導すること、これが即ち眞實なる政治である：宗教なくして何ぞ人生觀あるを得ん。人生觀なくして何ぞ何ぞ宇宙觀あるを得ん。如何に況んや宇宙の精神を知る事を得ん。日本をして偉大なる國家たらしめる為には人々皆な天來の聲に従つて動かねばならぬ」(『道』、七五号、「天來の聲」大正三年七月)と言つ。

「政治の要道は國家を神の國とするに在る」は、押川生涯のヴィジョンであり、理想であり、テーマであった。

押川はこの建議案の中で、「大正維新ノ道」「大正維新ノ大業」と、(大正維新)という言葉を繰り返す。これは、既に大正十(一九二一)年二月の皇太子妃冊立をめぐるの山県有朋の非違越権に対する抗拒運動であった、宮中某重大事件と呼ばれる運動の中で、用いられていたものであった。押川等の国民義会、頭山滿、内田良平、北一輝、大川周明等のナシヨナリストの運動は共に激越であった。彼等は「大正維新を標榜した」。

『現代史資料』四(「国家主義運動」1)は、「この事件は、それまでたんなる大陸浪人、国粹会的任侠の徒、赤化防止的の団体、とみられていた所謂民間右翼が、一つの大義名分をかかげて、我國の政治問題——それも最高の問題——について強力な運動を展開し、右翼運動に一つの転換を与えたという意味において重要な事件である」と言う。そこにあつたのは「皇室ノ尊嚴、国体ノ精華」の問題である。

「建議案」の中で、押川は次のように言う。

抑モ世界大戦以來、名ハ五大国ノ一二居スルト雖モ、外力ノ圧迫ニ遭ヒテ反発スルノ勇ナク、屈讓ヲ重ヌルニ屈讓ヲ以テシ、撤退ニ繼グニ又撤退ヲ以テシ、数億ノ財ヲ費シ、数万ノ生ヲ損テ、数十年ヲ積ミテ築キ上ゲタル東洋ノ地盤モ、殆ンド根底ヨリ覆ラントシ、發展セントスレバ其口ヲ塞ガレ、苦境ニ陥リ、危機ニ瀕シ、国歩艱難此時ヨリ甚シキハナシ、而シテ内ハ則チ綱紀全ク紊レテ秩序立たズ、国家ノ權威ナク、社会ノ制裁ナク、上下解体、公私混淆、政党ノ腐敗、議員ノ墮落、已ニ其極ニ達シ、学者文士ハ自由ノ名ノ下ニ放縱ヲ恣憑シ、青年ヲシテ倫理ヲ排シ規律ヲ悪マシメ、口ニ筆ニ險惡ノ思想ヲ宣伝セザルナク、国体ノ精華、皇室ノ尊嚴、果シテ安クニカアル、之ニ加フル享樂是レ耽リ、虚榮是レ誇リ、奢侈淫蕩ノ風都鄙ニ漲ルヲ以テス、不肖等ヲ以テ之ヲ觀レバ、凶国ノ形已ニ成ル、若シ今ニシテ之ガ所ヲ為サ

ズンバ、土崩瓦解收拾スベカラザルニ至リ、聖賢豪傑起ルト雖モ復タ奈何トモスル能ハザラン

押川の憂慮はここにあつた。さきに宮中某重大事件があり、今またこの様な状況がある。

若年の日、キリスト教による日本改造論を胸に抱いた日から押川は、既に晩年に近いこの日まで、改造国家の実現への道を思い続けた。ピューリタニズムの倫理的清潔、義は国を高くする倫理的共同体としての国家、国家から始まり世界救済としての「神の国」の実現、それらは何一つ、この世俗的国家日本には実現していない。その中であつて「皇室ノ尊嚴、国体ノ精華」それだけが、押川にとつて「神武聖文」（しんぶせいぶん）にかかわる倫理的聖域であつた。押川の「ナシヨナリチ」もそこにあつた。

「馬太伝講義」（明治二十六年）の中で、押川は言う。

○ユダヤ人は己の国民は上帝の命により、特別の任務を持ち居ることを信ぜり。自尊・自重の精神は善き事なり。自國が特別の任務を持ちて、他國の爲すこと能はざる所を爲し得と信するは、高貴なる事なり。

古來興起せる國は、皆自任自重の精神を有せり。

世の中には種々の事あれど、物の奥に毀つべからざる理といふものあり。

人は宇宙の爲に生き居れり。

神武天皇が此の日本國を創め給ひたれど、今日の我々が無き時は、固より日本の發達はできざるなり。

「天国」（「神の国」）とは、神の政治といふことなり。

「葡萄園」ユダヤ人は能く注意して之を養ひたり。「葡萄園」とは神の大事をなす世界をいふなり。

(一八一—一八三頁)

○神の旨により、唯一の 天皇陛下を戴き、而して此の国に尽し、此の国を發達せしむ、是日本キリスト教徒の心なり。万世一系の 天皇陛下を戴く、是日本が最上の發達をする為に必要なり。アメリカに於ては然らざらんも、日本に於ては最も大切なり。

(二〇二—二〇三頁)

○イエスが此の事をいひたるはユダヤなりしが故なり。彼等は神政の国を懇望し居れり、彼等はユダヤ人を支配する神が、直接に世界を支配し給ふことを思ひしなり。

(二一〇頁)

○我国は如何にして立つか、変らざれば立つこと能はず。世界の終極の目的は、天下を正しき道に於て平かにすることなり。世界は聖人義人の存らへる為に在るものなり。天と地と万物と己の心の中の律法に合へる人が国を嗣ぐなり。眞の憂国の士は、かゝる觀念を心の基として働かざるべからず。

(二六三—二六四頁)

○世界は斯くの如き神の政治の下にあり、「筵を設け」て「客を請き」、而して神は之を「見」給へり。

(二八四頁)

押川は後年の『道』論文で折にふれて天皇、国家、国体、民族について言及する。

第一次欧州戦争が始まると、押川は『道』(七九号、大正三年十一月)に『若しも』を発表する。

皇天の深旨玄々にして妄りに人の覬覦を許さず。草履を懐ろにして瞿々然として蹲踞せる木下藤吉郎に於て、何人か

後年の関白豊臣秀吉を想望し得たる。コルシカより出で来れる矮少にして沈鬱なりし兵学校の一学生ポナバルテに於て、誰か後年全欧を脚下に蹂躪せる『帝王の帝王』ナポレオンを予言し得たる。ペテレヘムの馬槽に於て呱呱の声を挙げ、齡三十に達するまで殆ど知らるゝ事なかりし猶太の工匠の子耶蘇は、世界史の新たな時期を自己の生命に於て展開し、爾来西欧文明の根源となりて、政治、文学、芸術、及び自余の全精神的生活を支配して今日に及べるに非ずや。三千年の昔、八重に棚びく村雲を押分けて、高千穂の峰に下れる大和民族は、莊嚴なる努力によりて国民的精神の發展長養を成就し、今や東洋の一角に国し乍ら、全世界を舞台として活躍す可き地位を占むるに至れり。暗澹たる森林に徘徊し、北方不文の蛮民を以て目せられ乍ら、アルペンの峻嶺を越えて羅馬を脅かせるゲルマン民族は、今や世界の覇權を握らんとする大望を抱くに至れり。而して此の大和民族と、彼のゲルマン民族とは、互にその民族的威嚴の爲めに、干戈を提げて起つに至れり。

予は大和民族の偉大なる使命を信するもの也。吾等の先輩は五十年の昔に於て、既に『何ぞ富国に止まらん、何ぞ強兵に止まらむ、大義を四海に布かんのみ』と喝破して、皇国の世界に対する使命を力説したり。吾等は東洋を統一して西洋と対立すべき運命を有す。新日本の国民は、この偉大なる職責を双肩に荷ひつゝある事を自覚せざる可からず、自覚して一斉に奮起せざる可からず。

欧州戦争は、美術以上の美術なり、詩歌以上の詩歌なり、政治以上の政治なり。上帝は一指を染め給ふ事なくして能くこの壯觀を現はさしめ給ふ。国民よ。上帝の偉大に拝跪せよ。上帝はその意思する如く一切を在らしめ給ふ。されば神旨を吾等に伝ふる予言者の声に聴け。聴いて其声に随順せよ。かくの如くにして或は不測の重大事を生ずる事あらん。

然れどもこれ即ち天命なり。古へはナザレの耶蘇堂々として告白して曰く、吾は天父の命じ給ふ所の事の外は何事をも行ふ能はざる也と。能はずの一語、何ぞ莊重にして、自ら任ずるの森嚴なる。わが国民は宜しく彼の自任と確信とを以て天命に忠なる可し。

押川は、この文章の最後を「国民よ。大命吾等の上に在り。吾等責任の重大なるを惟んみれば、悚然として戦慄せざるを得ず、事業の尊きを惟んみれば、煥乎として其光榮に謝せざるを得ざる也。希くば共に意氣を鮮かにして皇天を拝し、凜烈の勇を振つて心肚を張り、互に其長を献じて盛んに奉公の大義に鞠躬し、以て国運を富士山の高きに致さん。『邦家十人の義人あれば亡ぶる事なし』。吾党の同志、慨然として任せよ」で結ぶ。そこには神の自由に基礎づけられた人知を超える莊重森嚴なる「神旨」と、それへの「拝跪」「隨順」がある。

そして押川は「国民的使命の自覚」(『道』八六号、大正四年六月)の皇天思想で、神道の「天之御中至尊」(創造神)とキリスト教の「エホバ」(ヤハウェ、創造神)を習合し、そこに大和民族とイスラエル(ユダヤ)民族を重ねる。ユダヤ選民思想は、日本選民思想となる。

惟んみるに大和民族の精神的根柢なる神道の生命は、日本国民を以て神の子孫なりとする莊嚴なる信仰に在り。猶太民族もまた人類を以て神の子なりとする信仰を有せり。而して此の信仰を醇化し完美したるものを耶蘇基督となす。然りと雖も猶太人の信仰に在りては、神はもと宇宙の超在者なり。そは天地を作り、万物を作り、而して人間を造れるものなり。天地人の神に対するや、即ち造られたるものの造れるものに対する関係なり。大和民族に在りては即ち然らず、

神自ら天地となり、万物となり、而して人間となれるなり。日本国民の正統思想によれば、吾等は死すれば即ち神となる也。これ甚だ僭越なるに似たりと雖も、実は宗教の真髄は此外に求む可からず。神より出でて神に帰る。総ての真実の宗教は、要するに唯だ此一事の上に立つ。

日本国民は建国以来神を以て宇宙の大生命となし、国民を以てその神格の表現者とするの信仰を有せり。これ吾等の神話の物語るところなり。大日本帝国は実に此の信仰を根柢として、皇室を中心と仰ぎ奉る一國体を築けるものなり。天皇は吾等の君主たると同時に祖先に在まし、吾等は臣民たると同時に子孫たり。これ此國の異國と異なり、此民異邦の民と似ざる所以にして、洵に世界無比の國体たり。これ皇天の寵賜なり。然りこれ皇天の特異なる発現なり。

思ふに政教別途の語ありてより、世人動もすれば兩者を離して別個物の如く観ず。然れども政教一致は皇國の大道にして、神政は即ち政治の極致なり。其のこれを分離せるは、後世の人たゞ其形を襲ひて其弊を嗣げるに由る。兩者の外形は固より別途なる可し、而も其の心機に至りては必ずや一徹なるを要す。近来政教兩界の大萎縮は、大率此の間の消息に通せざるより来る。今日の政治家に欠くる所多し、而して其の宗教的熱誠を欠くを以て最大恨事となす。彼等すでに宗教なし。宗教なくして何ぞ人生觀あるを得ん。人生觀なくして何ぞ世界觀あるを得ん。如何に沉んや宇宙の精神を知ることを得ん。政治の要道は他なし國家をして神國たらしむるに在り。堂々たる人生觀の上に立ち、社会と宇宙とに對する徹底せる觀念を有し、皇天の命ずる所に従つて國民を指導する、これ即ち真実の政治家なり。



ここには「アングロ・サクソン、恐るべし」「アメリカン・イスラエル」に対する押川の、海老名弾正とはまた異なつたナシヨナリズムの上に立つた、日本（大和）民族再編成がある。

『神皇正統記』は「大日本者神国也。天祖ハジメテ基ヲヒラキ、日神ナガク統ヲ伝給フ。我国ノミ此事アリ。異朝ニハ其タグヒナシ。此故ニ神国ト云也」でもって始まる。この天祖は国常立尊で、天御中主神（高天原）に対する国土形成の神であつた。そこには天御中主神は出てこない。天御中主神が哲学的な無始無終全知全能の造物主の性格を持つて来るのは平田派神道によつてであつた。

同時期押川は「時の休徴」（『道』八二号、大正四年二月）では「上帝の主旨を地上に成らしむるの覚悟なかる可からず」と、「上帝」という語を使っている。つまり押川には「上帝」（キリスト教）でも「皇天上帝」（道会）でも、「天之御中主尊」（神道）でも、そんなことはどうでもよかつたのである。すべては同じ唯一神の別称にし過ぎなかつた。

## 二、全アジア主義と和衷協同論

押川が大川周明との「全亜細亜会設立趣旨」を發表するのは、大正七（一九一八）年六月の『道』（一二二号）誌上である。

既に押川は代議士となり、川島浪速の「告知書」をめぐるの対満蒙問題や、時の政府（寺内正毅内閣）の施

政方針演説や外交問題に関する質疑を国会議政壇上で行なっている。

全亜細亜会設立趣旨

欧州曠古の大戦は、刻々に世界史の新局面を打開し、万国の運命將に決せられ、皇国の運命亦將に決せられんとす。外に如是世界非常の一大変局に際して、内に皇国の現状を顧れば、綱紀弛靡、人心萎靡、殆ど冷膚をして沸然たらしめずんば止まず。夫れ維新元勳の苦心は、皇国をして世界列強たらしむるに存し、雄健進取の精神、潑刺として国民の間に躍動せり。然るに日清日露の兩役を経て、僅かに世界一等国の末班に列するに及んで、明治日本の理想、茲に其の外面的理想尚未だ樹立せられざるが故に、沈滯頹廢の風潮、一世に漲るに至れり。されば今日の急務は、拳国一斉に奮起して、之が実現に拮据すべき雄渾森嚴なる大正日本の理想を樹立するに在り。而して是の如き理想は、皇国をして亜細亜の指導者たらしめ、其の復興を成就せしめんとする理想を措きて、他に之を求む可からざるなり。

夫れ日露戦争に於ける皇国の勝利は、深甚なる感激を全亜細亜に与へ、亜細亜諸国の同情並に信賴は翕然として皇国の上に聚れり。日本国民たるもの、当に此機に乗じて皇国に対する亜細亜民族自然の愛着に具体的形式を与へ、親善の誠を批瀝し、友誼を彼等と厚くし、以て亜細亜同胞向上の基礎を置くに努むべかりしなり。然るに日露戦役以来既に十有余年、此間専ら欧米諸国と親交を図るに没頭して、殆ど全亜同胞を無視し疎外したるの觀ありしは、實に皇国の一大失策にして、之が為に亜細亜民族曩日の親日感情は、今や殆ど地を払ふに至れり。吾人同志、当局の無能と国民の怠慢とを償ひ、皇国絶大の志業を全うせんことを期して、茲に全亜細亜会を組織し盛んに全亜細亜主義の理想を宣傳し、摯實に亜細亜民族に同情し、精確に其の事情を研究し、東洋諸国の親善を国民的基礎の上に安置して、亜細亜共存の大義を実現し、亜細亜の正義を確立して之を世界に及ぼし、以て人類の自由と正義と光榮とに貢献せんことを期す即ち広く

天下同憂の士に訴ふ。

押川のここでの批判は、日本が「欧米諸国と親交を図るに没頭して、殆ど全亜同胞を無視し疎外」する、脱亜入欧的侵略主義に傾いて行くことにあった。

日本は飽迄も支那をして名実相叶ふ独立国たらしめねばならぬ。支那の消長興廢は、直ちに吾国の安危に関するが故に、日支の關係は欧米の如き單純なる經濟的關係でない。従つて吾等は眞実に支那と提携し、財政軍事一切の方面に於て、協同して富強の実を挙ぐるに努めねばならぬ（「為す可きを為さずば國危し」、『道』一一九号・大正八年一月）。

日中間の、和衷協同論である。押川はさらに、

第一に改む可きは帝国の支那に対する態度なり。日支兩國の關係は、濃かに相結んで一となるか、或は風馬牛相離れて敵となるか、兩者の外に出づること能はず。……歴代の内閣口に親善を唱へて、而も事實は日支兩國の乖離年と共に甚だしきを致せる所以は、支那保全を根本の正義として戦へる日露戦争以降、帝国の対支政策が不斷に迷路に彷徨し來れるに存す。

今日に於て帝国の対支政策は、一ありて二なし。曰く、日清戦争によりて日本が直接清国より割讓せられたる台湾一島を除き、満州並に青島を即刻支那に還付し、日本の真意、支那の保全に他ならざるの実を示す可し。……帝国は支那

が欧米に対して断乎として利権の撤廃を迫るべきを条件として、即ち明日満州を還付し、青島を還付して可なり。而して如是新支那の確立は、実に東亜復興の根本義なりとす。然らば即ち日支兩國は眞個異体同心の実を挙げ可く、日本は帝国自身の関心事として、支那の軍事、外交、財政に獅子の全力を揮ひ、国を挙げて道に殉ずるの覚悟を以て、新支那の建設を妨ぐる一切内外の敵と戦ふを辞せざるなり（『帝国興亡の岐路に立ちて』、『道』一三八号・大正八年十月）。

あるいはまた、

対支政策を立つるに当り、真に根本的に支那の心理を知らねばならぬ。而して対支政策は根本的に日本が起つべく出来るだけの犠牲を払ひ、己の国を思ふ如く、他の国を思ひ、而も近親の如く利損のみでなく、大道の大精神を鼓舞して、始めて対支政策を立つべきである（『世界政策と対支政策』、『道』一一三号・大正十五年三月）。

これが押川の対支政策の基本的な考え方であつた。年少の時代、孔子（論語）の国にあこがれ、北清事変下を中国で過ごし、悲惨な中国民衆の姿を目にし、アジア救済を教育立国、一国独立の観点からとらえた壮年時代の考えが、そこには依然として流れていた、と言えるかも知れない。

国家は今日の世界に於ける最高の対抗個体にして、各国独自の国体を有し、各国独自の理想を有して居る。故に全世界を挙げて一個の統一ある組織体とならざる限り、一国の理想が他国の理想と衝突し撞着することあるは己むなき成行

である。

シルレル曰く、世界史は世界の審判なりと。誰か英国の善が絶対の善にして、独逸の善は絶対に誤りなりと断じ得るか。之を断ずるものは、唯だ神あるのみである。故に今日の戦争は、万国に対して試みられたる神の試験であり、審判である。而して吾国も亦其例に洩る、ことなく、等しく神の試験を受けつゝ、あるのである。

夫れ日本民族は如何なる民族ぞ。其血は東西各種の血を混じて生じたる無二の民族である。其国は万国無比の国体を具へて、精華を世界に誇る国家である。其の歴史は支那印度の文明を同化して東洋文化の統一を成就し、更に欧米文明を撰取して世界文化を国民的生活の上を実現せんとする歴史である。日本帝国の理想は、その独一無二の国体を根柢として万邦の善を統一し、万国の至高至全至美なるものを実現して、以て世界に臨まんとするに在る（以上「日本帝国の使命」、『道』一二二号・大正七年五月）。

押川は〈神の審判〉・神義論の下に、英国も、独逸も、日本もあることを言う。その中で日本のあるべき理想を語る。イスラエル民族が、〈聖なる民〉として神の前に立ちうるのは、その民族が、神の聖性にふさわしきものである時だけである。押川はその聖性に向かつて、日本（大和）民族を改造しようとした。押川は歴史の中における神の審判と支配の現実を信じていた。そして歴史を究極的に支配するものが、神の聖と神の義であることも知っていた。が、「日本国を理想の国家にする」という課題の下に、押川は、第一に政治の革新、第二に教育の革

新、第三に宗教の革新、第四に道徳の革新（「我に三樂あり」、『道』五八号、大正二年二月）を考える。

押川はそのために、日本（大和）民族にひたすら「アメリカン・イスラエル」の、ピューリタニズムの倫理的  
世界を求め続けた。それは荒野に叫ぶ空しい声であった。押川は議政壇上でも「大政治家は大哲学者たるべし」（その  
時、笑声起る）や、「憂国の赤誠」「武士の情」論が飛び出したりするような、政治の中での、政治家の倫理や  
道義を語って止まなかった。

押川は「之れからの日本は、仁義五常丈では行かぬ。権利、独立、自由と云ふ様な思想が大切である。権利は  
何、独立は何、自由は何、此等のことに就て確実な思想のないと云ふことは、実に弱い源である」（「諸君果して  
準備ありや否や」、『道』六二号・大正二年六月）、「今日まで欧米諸国の日本に対して為した行為は不正、不義、  
不当なことが甚だ多いのである。人類平等といふ人間固有の哲学的観念に基いて、諸外国が日本に対して為した  
行為が、不正であること」、常に「自国の利害のみを計り、名は正義、人道、平和、自由などと美名の下にかくれ  
て」、「利己主義、侵略主義」であったこと（「近代文化の功罪」、『道』二〇〇号・大正十四年二月）を言う。

押川はこの上に立って、ヨーロッパの「近代」を撃ちながら、同時に日本の「近代」が脱亜入欧の侵略主義に  
偏向して行くことへの警告を発しながら、国家・民族間の裕余なき「戦争の時代」を生きた。しかもその最も危  
険な場所に身を置きながら、「国家と宗教」の問題を、明治キリスト者の誰よりも一身に引き受け、考え続けたの  
である。

押川は大正十三（一九二四）年五月、第十五回衆議院議員選挙（四回目）に松山より立候補、落選する。その  
最後の綱領（宣言書）で、押川は次のように言っている。

綱 領

世界的宣言

- 一、人類は平等なり之が実現に努むべし
- 二、国にして国家の体裁を完備し独立の実を具備せるものは皆対等たるべし
- 三、未だ真国家的体裁を備へざる邦国に対しては務めて之を誘掖啓導し以て対等の地位に達せしむ可し

外 交

- 一、国家は各其權利を主張すると共に其義務を尽さざるべからざるものなるを以て各国民は其国家をして義を先にして利を後にし私を棄て公に就かしめ各自其体面を維持し相互福祉の増進に努力すべし
- 二、国家と国家との間には自ら親疎遠近の別あるを以て対外の道は各其宜しきに随ひ樽俎折衝を誤らざらんことを期すべし
- 三、外交は自国の体面を尊重し国威の進展を計り自発的公正の方策を樹て漫りに他に追隨することを許さざるべし

内 政

- 一、先づ経国の大計を樹て我国をして世界救済の主体たらしむることを以て立国の大義皇道の本旨となすべし

(二、三、四、略)

大正十三年三月

押川はこの宣言の前、「改造の本源」(前出)、「宗教の人」(『道』一四五号・大正九年五月)で世界改造論につ

いてふれる。当時は第一次欧州大戦後で、世界改造論と国際主義思想の時代とも呼べた。その後者で、

人は『宗教の人』とならねばならぬ。昔はカント暗嘆して曰く、『今日の人類は未だ「人間」に非ず、寧ろ盲目なる自然の必然に駆られて、益々甚だしき痛苦の裡に沈淪せんとする不幸なる素質の動物である』と。而して彼の崇高なる生涯の目的は、実に人類を以て『人間』たらしむるに存した。吾等此の偉大なる学者を憶ふ毎に、今に於て尚ほ彼れと嘆を同じくせざるを得ぬ。宗教の人こそ、真個の『人間』でないか。

改造の声、今や内外に喧伝せらる。洵に世界は改造せられねばならぬ。歴史は一大転期に際会して居る。而も改造とは何ぞ。多くの人思へらく、表面の制度組織を改むれば足ると。然れども制度は末にして魂が根本である。此一事を忘れては、一切の改造運動、総じて是れ猿芝居だ。魂の改造によりて、人類を真個の人間とすること、真個宗教の人とすることが、一切改造のアルファであり、またオメガであらねばならぬ。

世界改造の真意義、之を徹底して認識し得るものは実に吾等の魂其ものであり、世界改造の真目的、また実に吾等魂其もの、為でないか。蓋し総ての透徹せる主義、政策、経綸は、深き智識の上に初めて可能である。而して総ての智識は、自我の認識即ち自覚に生れる。ソクラテスの名と共に、千古に不朽なる此の真理は、吾等を擁して、必然吾等の魂、即ち日本の自我に導き到らざるを得ぬ。此の魂によりて、吾等は初めて世界に行はる、不義、不正、邪悪を認識し、而して此の魂のために、一切の善ならざるもの、真ならざるものを克服し改造し革命せんとするのである。若し魂の真個の活躍なくば、如何に外部の組織乃至制度を改廃するも、終に何の益する所無い。



押川はここで、世界改造論の根底に自覚的な「日本的自我」・「吾等の魂」を説く。

押川は自我の論理を神人合一の「神子論」で乗り越えようとした。神人合一は、押川の宗教論の究極的な姿であった。押川の「国民的使命の自覚」の理論的根拠もそこにあった。しかし「日本的自我」の原理は、どのような要請を立てようと、「義人なし一人だになし」（ロマ三・一〇）の原罪の世界のものなのである。従って、

政治とは何ぞや、其は理想によつて道を求め、之を實際に應用して行く事である。理想とは上帝を此地上に持つて来る事である。然るに現在の日本には此政治が全くない。

これが押川の「宗教と政治―政教一致の新思想―」（『道』一六七号・大正十一年三月）の帰結であった。

押川の政治的理想と現実とは、国家と宗教の間で大きく口を開いたままであった。政治の世界では、〈国家の論理〉はもともと〈個人の論理〉をこえていた。政治の自律の世界の中で、押川の〈個人の論理〉は、全アジア主義、日中衷協同論、大正十三年綱領、そのいずれにしても、遂に政治的実体を持たないものであった。押川の孤立無援な〈政治からの自由〉の戦いも、〈国家の論理〉に沿いながら、生み出すものは何もなかった。そして空しくナシヨナリスト、転向者の中に組み込まれ、現在に來ている。身をもって〈日本の救い〉を「内鞏外美の文明国」〈「独立鞏固の国」〉「最善、最強、最大」の国にするという中で、日本人の倫理的、宗教的覚醒を求め続けて戦ったその戦いの跡も、今は草むしたままとなった。

押川の門下には酒井勝軍、川守田英二など何人かの日猶主義者や学者がいる。ユダヤ選民思想（ユダヤ民族主

義的市政政治)をそのモデルに、天皇の「聖性」・「皇室ノ尊嚴」・「国体ノ精華」の倫理的ピューリタニズム——それを国家機構の一としてではなく、歴史的変革力を持った国家形成力の一として——を武器に、日本選民思想の上に築き上げた押川の市政政治は、当然のことのように破れる。

その点、押川の市政政治はどこまでも政治的プログラムを持たない非政治的・宗教的なものであったと言える。昭和二(一九二七)年・押川方義『遺墨帖』には、次の言葉がある。死の前年である。

政治外交ハ正義ヲ主トス可シ 日支協同之方法 相互無欲大志ヲ抱ク可シ 共存共栄ヲ無視スレバ兩國ノ親和成立セズ

最後まで日中間の和衷協同を考えていたのである。

押川はその生涯、政治の中に踏みとどまった。政治の外に立って、政教分離の原則(「国家と教会の分離」原則)から「国家」を批判することはなかった。政治の中心に非政治的・宗教的立場から、自らの「政治からの自由」を、孤立無援なたちで確保しようとした。そしてその立場から、時の政治を批判し続けた。

「神よ、わが日本を救い給え」の中で、キリスト教と国家が結びつき、やがてそれが日本膨張論の中で国体論と結びつき、そこにキリスト教における神国思想(市政政治の思想)を考える。それは儒教的武士道的精神で伝統的に培われてきた士族明治キリスト者の一つの帰趨でもあった。

ここには、欧州列強の植民地主義的侵略というのっぴきならぬ時代を背景に置いた、明治プロテスタンティズ

ム（キリスト教思想）の一つの典型的な性格がある。そこでは、国家への忠信とキリストにおける神への至誠とは、一つのものであった。しかもそれは神権天皇制の絶対主義とは、また別な道であった。

一つ言葉をかえて言えば、押川の辿った道は「西欧の衝撃」をもちに受け、しかもまだ一国独立の基礎の定まらない幕末から明治にかけての、切迫した時代の選択の余地のない道であった。その中であつて押川は、常に国家という上位概念に焦点をしばりながら、その中で政治、経済、宗教、文化を一元的に考え、その延長線上に *up building of God's Kingdom on earth* の神政政治の世界を見据えながら、その独一无二な一生を明治・大正・昭和と歩んだと言へる。

しかも、その間、「神を畏るべし、国帝を敬うべし」の道を、彼は彼なりに辿って行ったのである。

「国家は単に偶然に便宜上に出來たるものに非らず。上帝の摂理になれり」（「羅馬書講義」）、は押川の教育と思想の、出発当初からの考えであつた。その上に立つて彼は「一国独立」の世界、神政政治の世界を考えたのである。

押川はその生涯、神人合一の天命（至誠）——個人的神秘主義ではない——を現世にしく「神政の現実」という壮大なる世界観を抱き続けた。それと同時に、それを身みずからに追い続けた。

明治末年から押川方義没年（昭和三年一月十日没）まで、松村介石の道会を通して深くかわつた大川周明のナシヨナリズム（特に後期の形成過程）と、押川方義のナシヨナリズムとの関係についての論考は、ここでの直接のテーマではないので、別に稿を改めるしかないが、日本のナシヨナリズムの系譜を辿る上で、これは重要な

問題である。

昭和四（一九二九）年四月二十日、大川周明は朝日講堂に於ける押川方義翁追悼講演会で、次ように押川にふれる。

英雄をして不遇に終らしむる如き国家は、改造せらるべき国家である。英雄をして処を得ざらしむる如き時代は、棄て去らるべき時代である。…押川方義先生は、まさしく不遇の英雄であつた。

そしてこの最後を、次の言葉で結んでいる。

予は押川先生に於て一個莊嚴なる魂を見た。この魂は其の接する総ての人々に至深の感激を与へた。愚鈍予の如きも、先生の魂によつて終生忘れ難き感化を受けた。感謝と思慕のこゝろ、綿々不断なる所以である。

さり乍ら相集まつて先生の偉大を語ることは、決して真に先生を追悼する所以でない。先生の魂に属する一切の価値を、吾等の努力と健闘とによつて日本国家に実現することが、先生に對する真個の手向である。先生の魂は複雑なるが故に、一人能く其の全体を尽すことは難い。予は唯だ予の力の能くする限り、先生の魂の一部を分担する覚悟である。

そこには押川思想の継走者としての、大川周明の姿が鮮やかに見えて来るが、その詳論は、既に別稿に属する。

# ドイツ改革派教会の伝道の神学

出村 彰

## 一 歴史的視点——三つの座標軸

長年イエール大学神学部でキリスト教史、ことに伝道史を講じ、膨大な著作を残したケネス・ラトウレット教授が、十九世紀を世界伝道の「偉大なる世紀」(the great century)と呼んだことは良く知られている<sup>④</sup>。もちろんのこと、何が偉大であるのか、その内実についての議論はいくらでも可能であろう。しかし、客観的事実として、それまでは結局のところ欧米世界に限定されていたキリスト教が、とにもかくにも世界的拡がりを持つに至ったのが十九世紀であることは、否定のしようがない。

無論、キリスト教そのものが当初から、極めて積極的な自己拡張、すなわち布教・伝道の意欲に満ちた宗教であつたことは周知のごとくである。遅くとも紀元一世紀の後半には成立していたマタイによる福音書の巻末には、復活のキリストが弟子たちに向かつて「すべての国民」を教え、バプテスマを施すように命じたと記されている。当時の「世界」、すなわち地中海世界に限って見ても、驚くべき自意識と言わねばなるまい。当然のことながら、多くの障害なくしてではなかつたとしても、やがてキリスト教は地中海世界全域を支配し、イスラムの勃興とい

う打撃にもかかわらず、ついにはゲルマン世界に伸張し、今日のヨーロッパ全域がほぼ福音を受け入れるに至るのは、紀元十一世紀に入ってからのことであった。こうして中世ヨーロッパ・キリスト教文明の花が咲き誇ることになる。

中世も終わりに近付くにつれてヨーロッパ世界の視野も拡大し、やがては新世界の発見となり、ことにカトリックの各修道会による新大陸やアジア・アフリカ各地への布教も緒に着く。日本におけるキリシタン伝道もその一端であることは言うまでもない。それにもかかわらず、真の意味での世界宣教の開始にはさらに数世紀の年月が必要であった。いま、このような限られた紙幅の中でこれ以上の詳述はできないが、キリスト教、特にプロテスタント諸教会が世界宣教の使命に目覚めるのは、十八世紀後半から十九世紀に入ることである。日本伝道、具体的には本小論の主題であるドイツ改革派教会の日本宣教もまた、このような世界的な規模での巨大なうねりの一部にほかならなかったのである<sup>②</sup>。

そこで、主題に入る前に、この時代を特色付ける幾つかの顕著な時代思潮に短く言及し、いわば本論の下敷きともしたい。一つの時代、あるいはそこで起こった運動を理解するためには、時代そのものの性格を把握して置く必要があることは言うまでもないだろう。以下で取り上げる三つは、いわばこの記述の座標軸である。啓蒙思潮が代表するような「合理主義」およびその対である感情中心のローマン主義、信仰復興運動(リヴァイヴァル)およびその対極である「正統主義」、そして最後に、近世初期以来顕著になった民族国家中心のナショナルリズムおよびそれと対蹠をなす普遍主義がそれである<sup>③</sup>。すべての歴史的対象が時間と空間という範疇の中で生起する以上は当然のことであるが、十九世紀の世界伝道の興隆も、上記の三つの座標軸が切り結ぶ軌跡にほかならない。以

下において、なお少々の論述が必要かと思われる。

十六世紀の宗教改革以後、キリスト教思想の歴史を少し長い視野で振り返るならば、そこには「歴史の振子」とでも呼ぶべき、思想そのものの往復運動ないし回帰現象を観測できそうである。改めて言うまでもなく、十六世紀のヨーロッパ、信仰分裂の時代には、カトリック、プロテスタントを問わず、人々は宗教的良心を守るため文字どおり生命を惜しまなかった。そこからまた、いわゆる宗教戦争が頻発したことは付言するまでもない。ところが、十七世紀も半ばに入り、三十年戦争が終わる頃になると、ヨーロッパの人々は人間の本質、その生きる意味合いが、果たして信ずること、宗教そのものにあるのかどうかを怪しみ出す。宗教の内容理解、信条の僅少な差異の故に憎み合い、血を流し、分裂に分裂を重ねることが本当に人間にふさわしいのかという自然な問いであった。信仰よりは知性、神学よりは科学、教会よりは国家が優先するのではないだろうか。こうして到来するのが理性の時代、啓蒙思潮である。宗教改革者たちの激しい情熱はすっかり影を潜め、キリスト教の自己理解は牢固な正統主義に凝縮し、大陸でも英国でも、教会は完全に支配体制と癒着、みずみずしい生命力を失ってしまったかのごとくであった。そこでは宗教までも合理性の物指しで計られ、啓示とか奇蹟とか、理性と合わないと思われるものはすべて退けられる。人間の個人生活でも社会制度でも同じことであった。すべてを理性の秤で、と。その行き着いた先がフランス革命であった。こうして再び多くの血が流される。

ところが、このように歴史の振子が一方の極に達したかのように思われた時、歴史の復元力そのものが働きます。十八世紀半ばから十九世紀前半にかけて、振子は反対の側へと振れるのである。すなわち、人間の本質を理性よりも感情に、マインドよりもハートに求めようとするローマン主義の時代である。分析的な精神や知性より

も直観的感情や洞察の方が、人間をより人間らしくするのではないだろうかという問い掛けであった。このような「揺れ戻し」は、哲学や宗教の世界だけでなく、文学や音楽、美術の領域でも広範に起こる。最も代表的なキリスト教の思想家シュライエルマハーによれば、宗教の本質は絶対依存の感情であり、その究極は宇宙の直観にほかならないのである。ここでは宗教は形式ないし形骸化した「信条」よりも、常に新鮮で個人的な「心情」がより固有のものと思なされる。

もつとも、歴史の振子は決して留まることがないので、十九世紀も半ばを過ぎると振子は再度反対の方向へと動くことになる。この度の主調音は「進歩」の理念であった。それが生物学的に表現されれば、ダーウィンの「進化論」となるだろうし、社会科学的に表出されれば、マルクスの唯物史観ともなり得るであろう。こうしてキリスト教信仰もまた、迷信から自覚へ、不条理から合理性への進歩・発展の段階として捉えられることになる。十九世紀後半、日本を含めて世界のキリスト教界を揺り動かした「新神学」の提起した問題である。そこでは、たとえば三一論のような伝統的教義は周辺のなものとされる。端的に上記の規範と合致しないと考えられるからである。このように、十九世紀世界伝道の第一の座標は、信仰と理性、聖書の啓示と人間の思惟、神学と哲学との間を往復する。後に見るように、ドイツ改革派教会の宣教師たちもまたこの問題との直面、そして神学的選択を余儀なくされる。

上述の第一の座標軸と深く関わっているのが信仰復興運動（リヴァイヴァル）である。十七、十八世紀のヨーロッパのキリスト教が、いわゆる体制の一部と化し、教会の聖日礼拝に出席するのは地主とか貴族とかの特権階級だけとなり、一般庶民、ことに、すでに発生していた都市労働者や炭鉱労働者などは、およそ無縁のものとな



なってしまう時、宗教というものを制度や思想や儀式のような外面の問題としてではなく、信ずる人間の個々の心の問題として捉え直し、福音に触れた信仰者の心の高ぶりを前提として、キリスト教信仰の内実を表出しようとしたのが信仰復興運動あるいは覚醒運動であった。そこでは、宗教改革が強調したような神の恵みの客観性よりは、人間の主体的応答の真摯さが、長い時間をかけたキリスト教的教育・涵養よりは、その場、その時での「決断」が強調される。要するに、伝統的教義の理解、それに基づく成長というよりは、強烈な回心の「体験」、そしてそれに起因する献身の情熱が要求される。かつては地域共同体と同じ広がり、同じ構成員だった信仰共同体が個人に分解され、その結果、宗教は国家とか社会とかの公の関心事ではなく、私事とされる。そうなる時、宗教集団の指導性は職業的な訓練を受けた専門の「聖職者」から、たとえ知識では乏しくとも、豊かな生活体験を持つ平信徒へと移行することとなる。さらには、学校教育を介する間接的な伝道よりは、教会における直接伝道に力点が置かれる。

リヴァイヴアルが十八、十九世紀の欧米のキリスト教の刷新に果たした役割は、どれほど大きく評価してもし過ぎることはない。たとえば、ジョンとチャールズのウェスレー兄弟に発するメソディズム運動は、文字通り英国を救ったとされる。この運動に巻き込まれた英国の一般民衆は、そこで初めて宗教的自己を確立し、他者と共に生きる意味をも学んだのであった。ほど経ずして、この新しい信仰覚醒の大波は新大陸アメリカにも移って行く。あの広大なアメリカ大陸の各地には、大覚醒の嵐が二度、三度と吹き荒れ、制度的なキリスト教の牧会の手からはほとんどこぼれ落ちていた開拓民や都市住民の多くが、再び教会と結ばれるに至る。

そもそも新大陸に辿り着いた移民たちのすべてを、信教の自由を求める宗教的熱心の持主と理解することの誤

り是指摘するまでもなからう。実際には、もつと現世的・実利的・世俗的な動機や事情から大西洋の荒波を越えることがはるかに多かったのである。彼らが新大陸に到着し、一度あのように広大な大陸の各地に散らされて行ってしまつと、そこではもはや、彼らが後にしたヨーロッパのような地域社会と同延的な信仰共同体は見いだされなかつた。茫漠たる開拓地ではいわゆるキャンプ・ミーティングが開かれ、巡回説教者が激越かつ感覚的な説教で会衆に回心を迫る。時には何日もかけて徒歩や馬車で集まって来た開拓民たちは、しばしば異常なほどの情緒的興奮の中で、罪に目覚めて悔い改めに至るのであった。彼らはその場、その時に洗礼を授けられて、信仰者の群れに加えられる。そこでは、旧大陸におけるような長い時間をかけた信仰問答教育は端的に不可能であつた。それは開拓地の現実を思えば、余りにも自然な成り行きであつた。

しかし、キリスト教の伝統の中には、このような成り行きを「余りにも自然」とは受け止めない流れもまた脈々として生き続けている。語義の多様性を承知の上で、仮にそれを「正統主義」と名付けることにしよう。この立場によれば、信仰の本質とはその場・その時での決断や献身ではなくて、長い時間の中での永続的な育成・涵養の努力、「代々の聖徒」たちが告白してきた信仰の内実、具体的には「信条」へ参与することにはかならない。リヴァイヴァルの「心情」中心と対比的に、「信条」中心とでも表現できるかも知れない。そこからまた、宣教の目標であるはずの教会像も異なってくるだろう。救われた者ひとりびとりが、同一の体験を共有する場としての信仰共同体となれば、どのような意味でも国家や政治から独立した自由教会となるはずである。反対に、すでに歴史的存在である信仰共同体への加入の儀式である洗礼（具体的には新生児洗礼）と、客観的恵みの受容である聖餐式を重視する立場が考えられる。国家教会とは言わないまでも、ある地域に住む者全員が構成員である国民教

会がそれである。新大陸アメリカでは、法制的にも事実的にも、このような正統主義は不可能であったが、しかもなお理念の問題として、旧大陸での長い記憶から自由になることは決して容易でなかったのである。

こうして、もう一つの座標軸、リヴアイヴアルと正統主義を設定することができよう。もつとも、このように分け方は極端であつて、実際には個人的信仰あるいは共同体としての教会は、上記の二つの面を包含するし、またそうあるべきなのである。あたかも、楕円が二つの焦点を持ち、これらの焦点からの距離の相違はあつても、一つの楕円という軌跡を描くのと同じである。しかもなお、十九世紀の現実にあつては両者は相対立するものとして受け止められ、その軋轢・葛藤は太平洋を隔てた宣教の地の日本でも、高く低く聞かれたのであつた。

第三の座標軸もまたキリスト教史にとつて永遠の課題である。それはキリスト教使信の特殊性と普遍性をめぐる問いと言い換えても良いだろう。ある意味では、旧約と新約の関連性とも言えるかも知れない。今更言うまでもなく、キリスト教は旧約の宗教であるユダヤ教の偏狭な民族中心的傾向への批判として成立した。過越しの祭りに替えるに聖餐、割礼からバプテスマへの変転は、ユダヤ民族主義からの脱皮の表現であつた。しかもなお、歴史で生起するものすべてがそうであるように、キリスト教もその展開に際しては、民族とか国家とか国民のような特殊・具体的な価値との出会いと折衝が不可避的であつた。ことに十九世紀は民族国家の著しい伸張期で、たとえば日本のように、それまでの閉鎖的な社会から世界に自分を開く決心をした時、それまでの文化とか宗教とかを持つ固有の価値と、新たに受容を決めた普遍的な価値との関係——連続にせよ、非連続にせよ——を改めて問わざるを得なくなる。民族とか国家とかいった固有の価値は、世界的・普遍的な福音の前には廃絶されてしまふのか、それとも前者を後者によつて救い上げ、新しく位置付ける可能性はないのか、少なくともそれまでは、

欧米的印刻を帯びて伝達されたキリスト教に触れた新宣教地は、幅や程度の差を別として、この問いを深刻・率直に受け止めざるを得なかった。宣教師たち自身も、それぞれの背景に固有の価値観から決して自由だったわけではないから、一概に宣教師たちを普遍的価値の担い手、それと出会った日本人キリスト者を反対の価値観の担い手、と単純に二分することの誤りは当然である。いずれにしても、ドイツ改革派を含めて、日本のナショナリズムとの関わりは避けがたいところであった。ここに第三の座標軸として設定する所以である。

以上、十九世紀後半から二十世紀前半にかけてのドイツ改革派の日本「伝道の神学」を瞥見するに当たって、合理主義とローマン主義、リヴァイヴアルと正統主義、そして民族主義と普遍主義の三本の柱を仮定し、それぞれの両極の間で揺れ動く実情を例証することとしよう。

(1) Kenneth S. Latourette, *A History of the Expansion of Christianity* Vol. VI, *The Great Century in Northern Africa and Asia A.D. 1800-A.D. 1914* (New York: Harper, 1944).

(2) アメリカの宗教史について日本語の刊行物は少なくないが、代表的なものとしては曾根曉彦『アメリカ教会史』(日本基督教団出版局、一九七四)、フランクリン・H・リッテル『アメリカ宗教の歴史的展開——その宗教社会学的構造』(ヨルダン社、一九七四) 柳生望、山形正男訳、S・E・ミード『アメリカの宗教』(日本基督教団出版局、一九七八) 野村文子訳、S・E・オールストローム『アメリカ神学思想史入門』(教文館、一九九〇) 児玉佳与子訳、などが有益である。

(3) この点については出村彰「改革教会と私達の教会」(『信仰告白を規範とする教会形成』日本基督教団改革長老教会協議会編、一九八八)、五五―六二頁。同「改革長老教会の伝統」(『合同教会としての日本基督教団——その教派的伝統と

特質をめぐって』、一九八九)、四二―六一頁を参照のこと。

## 二 初期の宣教論

一八八九(明治二二)年三月、押川方義は、かねてからの自分自身および在日宣教師団の熱望によって、初の欧米視察の旅の途に着く。日本側からの訪米許可の求めに対し、財政難を理由に極めて消極的だったドイツ改革派外国伝道局が、拒否のつもりで送らせた電報が、打ち間違いから「受け入れ」となって仙台に届いたいきさつは、押川の死を悼むバーソロミュー幹事の文章にあるとおりである。(『資料篇』七八六。以下、特別断わらない限り、頁数はすべて『東北学院百年史』資料篇の通しページを指す)。翌年一月、ヨーロッパに向けて出帆するまでの月日を、ペンシルヴェニア州ポッツヴィルのバーソロミュー宅を本拠として、東海岸各地の教会や学校の訪問に費やした押川は、八月二八日、ドイツ改革派教会の全国総会に招かれて、一場の演説を試みた。幸いにも、押川家に保管されていたこの英文演説の原稿は、今は東北学院史料室に移されている。数少ない押川の英文原稿として極めて貴重である(八六八―六三二)。

「日本伝道の過去と現在についての一見解」と題されたこの手書きの草稿において、押川は自分自身も身をもって体験した日本伝道の、そして「外国伝道」の進展状況を三つの段階に分けて語る。第一段階を押川は「粗野で不完全な段階」と呼ぶ。「この時期には伝道事業のすべては外国宣教師の責任となる。伝道者・牧師・教師のす

べては宣教師であつて、彼らを助ける日本人はひとりもない。宣教師たちは決して好意的ではない耳に福音の種子を蒔くわざを強いられる。彼らは福音受容の土壤までも用意しなければならなかつた。この段階で福音に触れ、改宗にまで至るのは、どちらかと言えば無教育な階層でしかない。さまざまの妨げによつて、宣教師たちはもつと上の階層に手を延ばすべしを知らないからである。そこで、宣教師たちは何とかして活路を開こうと教育機関を設立する。ここでも、教師、教材、言語等々、障害は少なくないが、学校こそは未教化の社会での福音伝播の第一歩となる。

こうして橋頭堡が確保されて第二段階に進み得る。宣教師の傍らには学校で教育・訓練された日本人が立ち、教会でも学校でも有力な援助・助言を提供する。もつとも、彼らはまだ完全に自立して事業を推し進めることはできないし、牧師養成も不完全でしかない。そこで、この段階での最大の急務は神学教育機関の整備・充実である。そうするならば、第三の段階に到達するのも、それほど遠いことではないだろう。優れた神学教育を受けた日本人教職は外国宣教師と対等の立場に立ち、伝道と教育に責任を持つに至る。そうなれば、「国全体をキリスト教化する機会も生じて来るだろう」。

この演説そのものは、ドイツ改革派教会が日本伝道を展開するに際して、従前のように首都圏で、教会中心の方策を継続すべきか、それとも僅か数年前に着手した東北は仙台での教育中心、殊に有力な神学教育機関の設立を目指すべきか、外国伝道局自体が去就に迷っていた時点で、仙台圏伝道を強く訴える目的をもつてなされたのであるから、上述のような論旨はむしろ当然かも知れないが、押川自身が横浜バンドの一員として初めて福音に触れて以来、新潟での伝道を経て、今や仙台で自立・自給・自伝の教会形成を目指す指導者として、みずからも

体験したところの総括であった。そして、それは取りも直さず、押川がそれまで出会った宣教師たちから、身をもって学び・吸収したところにほかならなかったのである。

一般論として言うならば、初期ドイツ改革派教会の海外「伝道の神学」が、基本的には十九世紀前半に共通の「異教徒改宗の情熱」だったことは疑えない。同教会が日本伝道着手を総会の名で決議した一八七三年の四月、かねて海外伝道の熱心な支持者・推進者として知られたニューヨーク州ファイエットのディートリヒ・ウィラーズ牧師は、『メツセンジャー』紙に外国伝道の好機到来の訴えを掲載するが（九三七―三四）、そこでは「異教の国々にキリストの教会を宣べ伝え……この世を主イエス・キリストの所有とする」責務を今こそ果たさねばならないことを強調する。ここでは、前記の座標軸のローマン主義、リヴァイヴァル、そして紛うことのないナシヨナリズムの三つが、見事に結合していることがわかる。思えばむしろ、幸福な使命感に溢れた時代であった。「異教徒の回心のために労する」ことは、改革派教会の偉大なる改革者たちの輝かしい遺産であり、したがってわれらの教会は本質的に「外国伝道の教会」であるはずなのである。ウィラーズはその論稿を祈りをもって結ぶ、「夜が来ると、もはやだれも働けなくなる。われらの外国伝道の星が異教世界に輝き昇りますように」と。

このような改宗の神学は、外国伝道局幹事として、以後数十年にわたって理論と実務の両面を担うことになるアレン・バーソロミューが、ドイツ改革派の六人目の宣教師として日本に派遣されるシュネーダー夫妻のために寄せた壮行の辞にも明らかである（八七九―七四）。バーソロミューはこの世紀、十九世紀が「すべての時代のうちでも外国伝道の世紀（missionary century）」であり、そもそも「キリストの教会はこの世界にあって偉大な外国伝道協会であって、すべてのキリスト者は十字架の伝達吏、罪の暗黒の中での光、神の同労者である」と

断言する。「罪に陥った魂が神から離れ、この世で何の望みも持たないのを目にするとは、何と悲しい情景ではないだろうか」。ここに見られるのは、十九世紀欧米キリスト教会に共通なある種の二元論にほかならない。すなわち、キリスト教世界と異教世界、救われた光の領域と罪と滅びに定められた暗黒の領域、伝道する側と伝道される側、与える教会と受ける教会という二つの異なる原理・原則の対立意識である。確かに、それなくしては、十九世紀欧米教会のあの巨大な外国伝道への献身と献財もあり得なかつたことであろう。

したがって、日本に派遣された最初のドイツ改革派教会の宣教師グリーンングが、満三年間の、彼自身が準備期間と呼んだ時が経過して、まさに伝道の緒に着こうとするに当たって、自分の第一義的任務を以下のように規定するのは当然であつた。

第一の、最も大切なわれわれの仕事は、この人々をクリスチャンにすることである。はつきりとしたキリスト教への手引きと比べれば、世俗的な教育の必要は物の数ではない。ある人をクリスチャンにすること、学識ある人間に育てることは別の事である。ある人に先ず西欧の学問を教え込み、それによつてキリストへ導くというのは大変な回り道である。……日本で最も必要とされているのは、われらの信仰の基本的教理を徹底して、絶え間なく教えることである。神の言葉の偉大なる真理の数々が、精神と心に固く附着するまで、繰り返し教えることが大切である。必要なのは深遠な学問ではなくて、信仰の単純な諸真理を忍耐強く教える努力にほかならない。枢要なのはこの人々が救われることであつて、西欧の学問に通暁することではない（九二二）。



いわゆる直接伝道に着手して、宣教地日本の現実に触れる以前のグリングには、伝道とは何よりも先ず、改宗者の獲得にほかならなかつたのである。問題は「どのようにして」であつた。宣教の方策論と言い換えても良い。

このグリングが、個人として、どれほどウイリアム・ネヴィンとそのマーサーズバーグ神学を知悉し、これにコミットしていたのか残された文献からは確かめようがない<sup>4)</sup>。上述のように、時間と労力を費やしてのキリスト教的涵養よりは、その時・その場での献身の決意、養育よりは回心体験、歴史的共同体としての教会よりは主体としての個人、礼典や儀式よりも強烈な説教、教職の専門的知見よりは平信徒の實際的指導力、一語にして、信条よりも心情あるいは真情を重視する型のキリスト教、すなわちフロンティア育ちのアメリカのキリスト教の在り方を根底から問い直したのが、ネヴィンやフィリップ・シャフによつて代表されるマーサーズバーグ運動であつた。最初の宣教師たちを単純に信条型と心情型とに分類することの危険と愚かさについては言うまでもなからうが、しかも敢えて試みるならば、グリングがマーサーズバーグ神学の流れに属することは否定しがたい。十年前後の日本在任期間についてのみならず、ドイツ改革派教会を離れてからは、やがて聖公会に教籍を移し、同教会の日本派遣宣教師として再度来日、京都の平安女学院の創設にも深く関わつた事実からも推察できるところである。

そのグリングが三年間の準備期間に完成させたのが、改革派諸教会の代表的な信仰問答の『海徳山問答』（「ハイデルベルク信仰問答」）であつた。グリングによるならば、伝道の基本になるのは十分な時間をかけた教理問答教育で、その上で初めて洗礼が施され、聖餐式に加わることも許される。他方、教会組織としても、母国におけると同様に、会衆から正当に選ばれた執事と長老とが、教会規定に従つて正式に任職され、教職と共に長老会（小

会)を形成し、さらにいくつかの小会からそれぞれ選出された教職と長老とによって地区会(中会)が組織されなければならぬ。もつとも、この場合、ドイツ改革派教会の「日本中会」を組織せよという外国伝道局ジョンストン幹事の指令(一八八五年六月十二日付け)にもかかわらず、在日宣教師団はすでに機能している日本の教会、すなわち日本基督一致教会と協同する道を選んだことは、上述した三段階の第二の段階へと意識が進んでいくことを暗示するだろう。

同労者を求めるグリーング夫妻の強い要請に応えて、外国伝道局は一八八三(明治一六)年にモール夫妻を派遣する。着任したモール夫妻は、まだ言葉が不自由なうちから早速伝道に取り掛かる。学校教師の経験も豊富なモールの周辺には、英語やドイツ語を習いたいという日本人青年たちが集まって来たからである。間もなくモールは、築地の居留地を出て、山手の麴町に伝道の拠点を設置する。ところが、諸般の事情はあつたにせよ、この伝道拠点で一人の日本人歯科医とその関係者に独自の判断から洗礼を授けたことから、先任者グリーングとの間で軋みを生ずる結果となる。教理問答教育、教会訓練、戒規を重視するグリーングの「正統主義」から見ると、モールの方策は悪しきリヴァイヴァルへの傾倒であつて、ドイツ改革派教会の教規違反にほかならない。他方、モールの立場からすれば、たとえどこでも明言はされていないとしても、もし回心者がそう望むならば、信仰問答教育、長老会の試問など教会の定める手続きを経なくとも、洗礼を授けて差し支えないし、信仰者の群れが集まっている所では、長老が臨席していなくとも聖餐式を執行して構わないことになる。信仰の「今・ここで」が優先するからである。詳述の余地はないが、ここには前述の二つの極の間を揺れ動く十九世紀半ばのドイツ改革派の苦悩が、はしなくも反映されていると思われる。

それでは、ドイツ改革派の三人目の宣教師で、東北学院の創立者となるホーイの場合はどうだったろうか。ホーイが周囲何マイルも隣家が見えず、大多数の人々がその生涯を生まれた村で送るようなペンシルヴェニアの片田舎に生を受けながら、はるかアメリカ大陸の彼方、さらに太平洋を渡った日本に伝道の眼差しを向けるに至るのは、偏えにリヴァイヴアルの途方もないエネルギーの波に乗ったからであることは否定の仕様がない。十九世紀後半の澎湃として沸き上がった世界伝道の情熱だけが、ホーイの献身を解く秘密である。しかもなお、ランカスター神学校の子として、依然色濃く残っていたマーサーズバーグ運動を呼吸して神学的に成長したことも疑えない。加えて、ホーイには生得的な生きとし生けるものへの瑞々しい感受性が認められる。仙台の市街を見下ろす旧藩伊達家の廟所の廢墟を描写する詩的な行文にうかがわれるごとくである。そこに写されているのは、小さなもの、弱いもの、病めるものへの抑えがたい共感・共苦の念である。そして、それこそは伝道者にとって何よりも不可欠な資質ではないだろうか。

仙台着任から二月後の一八八六（明治十九）年三月二六日付けで、伝道局幹事ジョンストンに宛てたホーイの手紙は、このような観察を鮮やかにあかしする。「神の摂理によってもしも道が開けるならば」という、これまで伝道局がいつも用いてきた一種の遁辞を厳しく糾弾しながら、ホーイは自分自身の立場を二〇の「提題」に凝縮する（八九六―九五）。「今や神の靈が働いている」（二項）、「神が道を開かれた」（三項）、「ここで『道』とは、人材とか金銭とか人間の努力を含まない」（四項）に始まって、「提題」はさらに続く。「今や道が開かれたということは、神の愛と恩顧の表われでもある」（一四項）、「開かれた道を喜んで進み行くのが伝道の教会である」（一五項）、「伝道の教会は愛の教会——神と人への愛の教会である」（一六項）、「主は一刻も早い応答を待っておられ

る」(一九項)、要するに「道を開かれた神、訴え呼ばれる神は、開かれた心と、答える魂と、積極的な働きをする手を待っておられる」(二〇項)。ホーイによるならば、「今日の外国伝道への呼び掛けは、樂觀的な宣教師たちの素朴な熱意といったものではない。それはまさしく、神にあって生命が生命へと呼び交わすことにほかならない」。ここでは、世界伝道の世紀の所産としてのホーイが確かに息付いている。

この時期の宣教師魂とでも呼ぶべき情熱は、しばしば「前進(Forward)」という一語で表現された。まさしく、魂の未開地への開拓者精神である。ただ「前へ、前へ」の気迫にはかなならない。最も代表的なのは、いくらか時期的には遅れるが、日本伝道から中国伝道へと転身しようとするホーイが、十数回にわたって『メッセンジャー』紙に寄せた烈火のごとき文章である。「我らは前進すべきか」(“Shall we go forward?”)と題されたこの一連のアピール文は、日本伝道もまだ未完であり、子供も幼少であるのに、敢て危険の多い未知の中国伝道に転じようとするホーイに、消極的ないし否定的な母教会伝道局内外の引き留め論に対して、中国への召命感の抑えがたいことを、キリストの足跡に従う者として強く訴える。

後ろを振り返るのではなく、前を見ようではありませんか。もしも私たちが最善を尽くしさえすれば、私たちの前には教会がこれまで受け継いできた豊かな嗣業が置かれております。もしも、牧師たちがわが外国伝道事業の前進に参加……するならば、出来ないことが何かあるでしょうか。もしも、長老、執事たちがキリストの御国の到来のために燃える炎となるならば、勝利は間違いありません。もしも、教会員全員が、子供たちが、日曜学校教師たちが、「私たちもまた、分に応じて世界宣教(evangelization of the world)に加わろう」とさえ言うならば、国内において、また世界の

他の多くの国々において、どれほど豊かな魂の刈り入れを目にするようになるでしょうか（八二四）。

前進、ただ前進あるのみ——それはホーイだけではなく、その後継者となるシュネーダーにおいても真実であった。日露戦争終結直後の日本基督教会東北教役者会においてなされたと推量される説教（ヨハネ一五章一六節）を、シュネーダーは次のような言葉で結ぶ。

日本近来の伝道の始めから、今日までのことを考えて見ると、伝道に様々の妨げがあったのでございます。主イエス・キリストの教えは、嫌われたり、伝道者は軽蔑されたり、伝道の結果が微々であったりした有り様であったのでございますが、今からは事情が非常に変わって参っておるから、我らは以前よりも、きわめて勇氣ある、大胆なる永久の希望、精神をもって働くのは、我らの義務ばかりではなく、我らの特権、我らの誇りでございます。願わくは、我らは我が同胞が戦場においてなしたことを忘れずに、これから“Forward”、“進め！”という格言を取りまして、今までなかった熱心をもって、日本の救い、日本の精神的大勝利のために働きたいものと存じます（『説教集』一一七—一一八）。

同様に、「良い篤い信仰の必要」という題のもと、一九一三（大正二）年、日本基督教会東北教役者会でなされた説教の中で、シュネーダーはアフリカの宣教師探検家リヴィングストンに言及しながら言う、「リヴィングストンという人は、どういう人物でありましたかと言うと、それはその人のひとつの言葉に現れておると思います。その言葉というのは『我はどこへ行ってもかまわないけれども、“Forward”（先へ進む）ことではなければなら

い』と云うのであります」（『説教集』五〇）。言葉尻にこだわるわけではないが、「前へ進め」こそは、ドイツ改革派教会の派遣した初期の宣教師たちに共通の合言葉であった。そしてそれこそは、十九世紀から二十世紀初頭にかけての世界宣教運動の情熱へと連なっていることは疑えない。

(1) マーサーズバーグ神学についての邦文による紹介は、前掲『アメリカ神学思想史入門』、第六章「ジョン・ウィリアムソン・ネヴィンとマーサーズバーグ運動」。最近、アメリカにおいてもこの方面の研究が広範囲に進展している。本学院とも関わりの深いアメリカ合同教会は目下、同教会を構成する四つの教派（Congregational, Christian, German Reformed, Evangelical）の原資料を包含する出版企画を進めているので、刊行の暁には、本学院関連の資料もいっそう明らかにすることが期待される。

### 三 二 宣教論の成熟

ドイツ改革派教会の日本伝道開始から五〇年後の一九二七（昭和二）年、同教会の専任幹事だったウィリアム・ランペは「過去四〇年間における外国伝道の目的と方法」と題する長い論文を執筆した（七七三―六三）。自らも一九〇〇年から十一年間にわたって宣教師として日本に在任し、プリンストン大学で学位を得てからは信徒宣教運動幹事、合同宣教委員会幹事等をも歴任、豊富な実地体験と宣教理論の構築の両面ですぐれたランペは、最

初期から半世紀間の外国伝道運動の変遷を次のように要約した。

ランペによるならば、外国伝道の目的は一つにかかって「世界宣教」(Evangelization of the world)にある。ところで、世界宣教とは何かと言えば、それはすべての人々に、イエス・キリストによる救いという「喜ばしい知らせ」を告げ広めることにほかならない。しかし最近になって、外国伝道はこのような「宣教」、あるいは「告知」をもって足れりとして良いのかどうか問われるに至った。つまり、宣教あるいは告知には、一国あるいは地域全体の「キリスト教化」が続かなければならないのではないかという問いである。別言すれば、すべての国々に「土着」のキリスト教、すなわち「自給」(self-supporting)・「自伝」(self-propagating)・「自治」(self-governing)の教会が樹立されるまでは、外国伝道は未達成でしかないか。その時初めて、人々の生活全体がキリスト教的となるであろう。確かに、救いとは個人的・個別的なものである。しかも、すべての個人が社会の一員であるかぎり、社会全体の改変、すなわちキリスト教化に責任を負うはずである(七七三、七二)。ついでながら、近年声高く語られる中国キリスト教会の「三自主義」は、すでにここで明言されていることを特に指摘したい。

こう総論してからランペは、過去五十年間のドイツ改革派教会外国伝道をもう一度振り返る。われわれの教会の最初の宣教師たちは、ほとんど例外なしに、一般に直接伝道と呼ばれる活動に専念した。すなわち、福音の説教、バイブル・クラス、そして求道者の教育がその任であった。横浜、東京、その近郊における七年間の伝道はこの種の活動であった。したがって、ホーイが仙台からの求めに応じて東北へ活動の重心を移そうと計画した時も、伝道局の指令は「第一義的には直接伝道に労力を用いるが、もしも状況が有利と思われる場合に限り、直接伝道に加えて教育にも力を割いてもよい」というのであった(七七〇)。結果的には、このような制約のもとで創

設された東北学院と宮城女学校という二つの教育機関は成功し、直接伝道と教育の二つの活動が平行して行なわれることになった。それによって、初期の外国伝道活動につきものだった「個人の靈的体験のみ過度の重点を置く」過ちは是正されるようになった、とランペは述べる。

ここからランペは、キリスト教宣教師における直接伝道と学校教育との相互補完的關係をさらに理論的に考究する。「キリスト教は、古今の他のいかなる宗派にもまさって教育に力点を置いてきたが、それは神、人間および人間関係についてのキリスト教的理念が、われわれの知性を最大に用い、また判断力を最高に發達させることを必然とするからである。伝道は現在の世代に関わるが、教育は次の世代に関わるという言い方は当たっている。

伝道は人々を教会に集めるが、教育は伝道が実現した機構の永続性を保証する」(七六九、六八)。そう言うてランペは、長く会津伝道に専念した宣教師クリストファー・ノツスの次のような命題を引用する、「日本では教育は集約的な伝道であり、伝道は外延的な教育である」(“In Japan education is intensive evangelism, and evangelism is extensive education” 七六四)。まことに言い得て妙とすべきであろう。ここには、宣教師における「直接伝道」と教育との相即が見事に言い表わされている。そして、その背後には、第一節の歴史的視点で瞥見した理性と信仰、リヴァイヴァルと正統主義が、バランスの取れた調和を見せていることも疑えない。要するに、ドイツ改革派教会の伝道の神学は、穏やかな中庸的立場であったのである。

この点をいっそう明らかにするために、ホーイが一八九二(明治二五)年十一月十八日の東北学院開院式の席上でおこなった記念すべき演説を取り上げることしよう(八三六―三二)。もっとも、仙台神学校が「東北学院」と改称したのはすでに前年のことであったが、神学部校舎の建築等の理由から公の開院式は遷延されていたので



ある。そもそも言えば、押川、ホーイ、シュネーダーらが、狭義の伝道者のみを養成する神学校を、もつと広く普通教育および専門教育を、しかも非キリスト者生徒・学生をも対象として施す決断をした事実そのものが、上述の姿勢を十分に反映していると言えよう。

さて、ホーイは六年前に「名声も、資金も、援助もなかったが、希望に満ちた心と神と自分たちの事業への信仰に燃え立つばかりの魂をもって、仙台の北西にあるみずばらしい陋屋で、六人の学生をもって教育を始めた」時のことを回顧しながら、今日の隆盛は「日本への愛、魂への愛、神への愛、そしてご自身が愛そのものであるイエス・キリストと日本の人々に仕えるために」こそ、東北学院が創設されたと断言する。さらにホーイは今後も信仰、祈り、神との交わりのうちに、イエス・キリストと日本人への奉仕を継続する決意を表明する。ホーイは続ける。

私たちの建学の精神は紛うかたもなくキリスト教的です。しかし、こう言ったからとて、自分たちが現に生き、労しているこの時代の進歩と、私たちが何の関わりも共感も持たないということではありません。私もまた、すべての心ある人々と同様に、この時代の学問的発見の驚くべき進歩を知っており、喜びとしております。私たち自身、日常生活と義務の遂行において、衣食住において、生活環境において、これまで自然が私たちに賦与してきたすべての富において、人間の欲求を充足し、人類の福祉に役立つ物資の生産と配分において、新しいもろもの原則が適用されるようになったことを喜びとするものです。自然に対する人間の勝利、物質に対する精神の優位を示す証拠と成果とは、人類の技術と才能を忍耐強く用いることによって得られた生活の快適さ、楽しさ、改善、向上において明らかです。人間は外的な

物質生活においても、内的な知性においても、知識と経験とを大いに増し加えました。

したがって、「私たちの東北学院は学問を大切にいたします。学問が教え、提供するすべてを歓迎します。その恵みと便益に感謝します」（八三五）。ホーイが「この時代の学問的発見の驚くべき進歩」と総括した時、具体的には何を念頭に置いていたかは確かめようもないが、自然科学における進化論、特にドイツにおいて力を得つつあった「新神学」等にも十分な知識を有していたことは、ホーイが海外の書店を通じて注文した書籍の題名からも推論できるところである。

ホーイはさらに言う、「しかも、学問の素養に加えて、私たちは美的感性の涵養にも注意を払います。美的感覚と理想は人間形成に不可欠だからです。自然においてにせよ、芸術においてにせよ、人生における美しいもの、その最善の形と内容とを目にし、理解し、用いることは、私たちの教育機関の指導原理の一つです」。ホーイ自身が形象的なものをすべてに鋭い感受性と、それを的確かつ流麗に表現・伝達する芸術的感覚を豊かに具えていたことは、残された韻文からだけでなく、平叙文の手紙などからも明白である。引き続きホーイは、「いつの時代、いずこの国においてであろうと、すべて偉大なるもの、善なるもの、気高いものの息吹き」である歴史、「もろもろの感覚を訓練する助け、知性を広く鋭くし、言語には厳密さを、思想には的確さを与え、根本的理念を開発し、意志力に加えるに健全で喜ばしい行動力を養う」哲学の必要を力説・強調してやまない。

しかもなお、このホーイ演説のクライマックスはその最後の数節である。ホーイは語を継いで言う、

これらはいずれも東北学院が得意とする分野ですが、それにもまして、このような広い一般教養を越えて、すべての学生のうちに人間そのものを捜し求めます。すなわち、人間を真に生きたものとする永遠の思想を求めます。真の教育とは人間を作ることにほかならないからです。それは精神と聖なる美しさのうちに、清らかな人格を形成することにはかなりません。そうすれば、すべての思いは清められ、すべての想像力は幼な子の魂のように潔白になるでありましょう。……すべての学生が、思いと言葉と行ないにおいて清い者となりますように。すべての学生が義と聖のうちを歩みますように。すべての学生がこのような真の人間になることによって、ナザレのイエスのような完全な人間となりますように。

年齢二十六歳で仙台神学校を創設してから六年余り、未だなお三十を幾つも越えているわけではないホーイは、しかしながら、すでに成熟した人間観を持つ教育者であった。そして、それはドイツ改革派教会の教育機関が生み育てた、誇らしい所産であったことに注目すべきであろう。ホーイ伝の著者メンセンディクも指摘するように、ドイツ改革派教会の最初期の宣教師たちはいずれも、当時のアメリカが与え得る最高・最善の教育を身に着けた第一級の教養人であった。後にシュネーターについても詳述するとおりである。

最後にホーイは、日本のナシヨナリズムという特殊・固有なものとの対話・折衝、そしてその超克を次のような形で試みる。明治二十四年秋と言えば、かの鹿鳴館時代はとうに去り、教育勅語の発布から満一年、ホーイは明治日本のナシヨナリズム、そして直接・間接にその投げる影のもと、押川その人とさえも酷しい齟齬を感じざるを得なくなっていた時期である。ホーイによるならば、すべての学生、いな、すべての日本人が、ナザレのイ

エスのような真の人間になる時、初めて真の愛国心を身に着けることができよう。「最高の愛国心は、国民が自分の国とその統治者に対して、義と聖とをもって仕え、また互いに仕え合うところから生まれる」からである。

ここで用いられる論法は、その後も東北学院、あるいは日本のキリスト教が、ナシヨナリズムと対峙するに当たって常に発動されることになる。すなわち、日本という国あるいは民族に特殊・固有な価値を、より広い普遍的・世界的な価値と連動させ、後者を追求し、あるいはこれを完遂することによって、前者がより完全に、徹底して実現されるはずだという論理である。すなわち、日本への愛あるいは愛国心というものは、愛そのものであるキリストを信じ・受け入れることによって、つまりイエス・キリストの恵みによって、初めて偏狭さから解放されるというのである。

ホーイによれば、このようにして真の愛国者になった「キリスト信徒の学生たちは、誰にも劣らず本気で国歌を歌い、誰にも負けずに気高い万歳を唱える」ようになるはずである。国歌を歌わず、万歳を唱えることを拒むことでキリスト者たることをあかしするのではなく、国や民族よりもっと高く広い価値を知ったが故にこそ、「本気で」国歌も歌えるし、「万歳も唱えられるはずだというのである。同じような教会の伝統を引く神学者H・リチャード・ニーバーの良く知られた表現で言い直すならば、根源的・徹底的に唯一の絶対者を知るが故に、すべてを相対化でき、しかもそれと真摯に関わることが可能となるのである<sup>10)</sup>。

実際、十五年の仙台在任期間を通じてホーイを悩まし続けたと言っても過言でないのは、この明治日本のナシヨナリズムの問題であった。この開院式から一年半ほど前、一八九一（明治二四）年六月六日付けで伝道局幹事キャレンダーに宛てたホーイの私信は、その頃彼が直面していた困難を浮き彫りにする。ホーイはドイツ改革派

教会年鑑で、仙台の学校が Sendai Boys Training School として挙示され、しかもホーイがその President となっていることを指摘、「日本の兄弟たちはこのような事柄には極めて敏感であって、何にせよ外国人が支配したり、権威を持つように思われることは、彼らにはおぞましいのです。彼らの『愛国心』なるものは病的と言わなければなりません。そこからガイジン宣教師は、時としてはなほだしく問題のある取り扱いをさえも忍耐しなければならなくなるのです」と記す。ホーイはさらに続けて言う、

時には、ガイジンであることが罪であるようにさえも感じられるほどです。過去三年間の経験は宣教師たちに多くを教えました。彼らは日本では何を期待して良いかを知っています。そうは言っても、私たちはこの地に存在することを喜んではいけません。ただ、数年前までは確かに存したより良好な関係を願い求めざるを得ないのも事実です。もともと、ガイコクのお金は決して拒否されることはありません。日本は貧しいのです。日本の最悪の敵は日本そのものです。日本はまだまだ多くを、そうです、多くを学ばねばなりません。……かの人種差別、人種意識、人種偏見を作り出すあの微妙なものの実体はいったい何なのでしょうか。人種が異なり、国が違うからといって、かつては彼らガイジン宣教師に結び付けていた情愛こまやかな絆を捨て去るとは、いかなるまか不思議な力が日本人キリスト者を動かしているのでしょうか。福音は私たちすべてを包括するほどに深くはないのでしょうか。「我が国」というかの病的な語句は、「我らの父なる神の御国」よりももっと包括的だということでしょうか。

以前に引用した押川演説の言う第一段階から、第二あるいは第三段階への移行期に不可避的に伴う痛みと見るべ

きなのだろうか。

通史篇でも詳述したように、ホーイは開院式演説から七年後、一八九九（明治三二）年秋遅くには東北学院を辞して、中国湖南省の新しい伝道地へと去って行く。もともと、この個所でホーイを長く引用したのはナシヨナリズムの問題を論ずるためではなくて、初期の宣教師たちが抱いていた広い文化形成・文化参与の姿勢を、ホーイの開院式演説を通して実証しようとする目的をもつてであった。ただ、この場合でさえも、広く世界に開かれた普遍的価値としての文化とか人間像とかが、日本、しかも明治前半という日本の特殊的・固有的なものと同接する時、双方にとって疵跡を残さざるを得ないほどの葛藤・相剋が避けられなかった事情をも付言しただけのことである。

(1) H・リチャード・ニーバーについての最上の研究書は、東方敬信『H・リチャード・ニーバーの神学』（日本基督教団出版局、一九八〇）。H・R・ニーバーの著作として、特にこの関連では *Radical Monotheism and Western Culture* (New York:1970) が有益である。

#### 四 シュネーダーの場合

以上、第一節において設定した三つの座標軸、合理主義とローマン主義、リヴァイヴァルと正統主義、および

特殊主義と普遍主義を、最初期の宣教師たちについていささかの論証を試みたわけであるが、以下においては、シュネーダー説教を題材としてさらに例証を進めることとしよう。ホーイと押川の両創立者が十五、六年の在任の後、それぞれの事情を踏まえて仙台の地を去ってからは、シュネーダーが文字どおり東北学院の命運をその双肩に担い通したことは改めて言うまでもない。シュネーダーの重きは東北学院経営の責任者としてだけでなく、日本在任のドイツ改革派教会派遣宣教師全体の象徴としての意義をも持っていたのである。

ここで使用するのは、約二十年前、東北学院創立八十五周年記念として刊行された『シュネーダー説教集』である。シュネーダーの没後、その遺稿類およそ二〇〇〇点は、ほとんど四十年にわたってシュネーダーの秘書であった鈴木市治郎の遺族に残されたが、その中から三十点の説教ならびに式辞等を編纂・印刷に付したのが同書である。収録したものの中で最も古いと推測されるのは、一八九八（明治三一）年秋、欧米各国周遊から帰任直後の「今日の日本における最大必要なもの」、最も遅いのは一九三六（昭和一一）年三月、院長としての最後の卒業説教である。期間にしてほぼ四十年にも及ぶので、その間の日本語文体的変化等もうかがわれて興味深い。

ただし、本書をシュネーダーの「伝道の神学」の題材として用いる場合には、幾つかの留意事項を念頭に置かねばなるまい。第一に、膨大な遺稿の中からの選別が必ずしも一定の原理・原則に基づいてなされたわけではないので、完全に網羅的とは言えないことである。第二には、もっと本質的に、説教という表出法そのものから来る制約がある。説教内容が、クリスマス、イースター等教会暦によっても、また、選ばれた聖書箇所によっても、さらには、対象である聴衆によっても大幅に制約を受けることはもちろんである。端的に、説教は教義学の教科書ではない。第三に、これらの説教はいずれも日本語で残されているので、どこまでが英語原文のニュアンスで、

どこからは翻訳による意味の増減かを判断することは決して容易ではない。もっとも、三品鼎の「思い出」によれば、「〔鈴木秘書は〕一通り翻訳原稿ができると、これを真中にして、先生と相對して、一言半句もゆるがせにせず、適正に訳されているか、日本語で真意が表現されているかどうか、納得できるまで検討が加えられ、書き直すことも度々あった」そうであるし、殊に晩年のシュネーダーは日本語に熟達していたので、この点は余り懸念が要らないかも知れない。これらの制約はあるにしても、キリスト教教理の包括的な著作を残すことのなかったシュネーダーの信仰内容は、これらの説教、および補足的には、これまた膨大極まりない書簡や公的報告書によつて知るほかないのも事実である。

これらの制約はあるとしても、この説教集を通じて浮かび上がるシュネーダーは、語の最も真実な意味で、「正統」信仰の生んだ子としてのシュネーダーである。そこには、永遠に消えることのない青く冷たい地獄の火の責苦をもつて回心を迫るような、いわゆるホット・ゴスペラーの片鱗されもつかかわれない。ここで語るのは、代々受け継がれてきた信仰内容を、宗教的涵養と神学の訓練とを介して主体化し、それを抑制された情熱をこめて表出する真摯な伝道者シュネーダーである。

ドイツ系移民の子孫として、家庭内の会話も、時には文通さえも、ドイツ語によることの少なくなかったシュネーダーが、当時のアメリカ神学界の中では例外的に、最新のドイツ神学に接近する有利な立場にあったことはもちろんである。若い日のシュネーダーはランカスター神学大学卒業後、ドイツ留学を夢見たのであったが、日本派遣が急に決まったために実現しなかった。もっとも、日本来任以後も帰米の途上、何度か欧英諸大学を巡遊して神学の研鑽を深めたのであった。そのうちの一度、一九〇六（明治三九）年六月より翌年九月までの



旅行を終えて帰任直後、主として牧師たちを対象に試みたと思われる「講話」(マタイによる福音書一三章の「パン種の譬え」に基づく説教)は、行政職に忙殺される以前のシュネーダーの、神学全体、殊にドイツ神学への傾倒と洞察を示して余りある。

シュネーダーの観察によるならば、ドイツ神学の主流は依然としてリッチル学派であるが、十年ほど前にドイツに滞在した時と比較するならば、保守派の自由化、反対に正統派のリッチル学派接近の傾向が著しい。さらにシュネーダーは、広い意味でのリッチル派に属する神学者として、ハルナック、カフタン、ヘルマン、ヘーリング、カッテンブツシュらの名を「神学の柱石」として挙げる。シュネーダー自身がリッチルに親しんでいたことは、現在「シュネーダー文庫」として残されている蔵書にも、リッチルの著作が含まれていることから明らかである。しかし、シュネーダーによるなら

ドイツの一番新しい神学の派は宗教歴史でございます。この学派のもとになっておる主義、もしくは、方針は何であるかと申すならば、この派は近来の科学の方法、すなわち帰納法の方法を、全く宗教と神学の範囲において実行するうちに、骨折っております。一歩進んで、この帰納的方法をどういう風に神学において使うことができるか、と言うならば、それは宗教歴史と心理学の立場から使うのでございます。……この学派はまだ新しくあるから、その結了はまだ良く固まりませんが、……キリスト教というものは、主に宗教進化の結果である事、もうひとつの事は、イエスという方は偉い人物であつたけれども、その神聖なる事は、まるで間違いであるというくらいのも事でございます……(『説教集』三四、三五。以下、特に断らないかぎり数字は同書の頁数)。

そう述べてシュネーダーはこの学派の主導者としてヴァイネル、ヴェルンレ、グンケル、アセットおよびトレルチらの名を挙げる。それでは、シュネーダー自身はこの宗教史学派に対してどのような見解を抱いていたのだろうか。次のような発言は注目に値しよう。

この新しい神学派の研究の方法は、決して悪い発明ではありません。帰納法の方法は研究のもっとも良い方法であるばかりでなく、神学を将来に大成功に導く方法であると信じます。なぜかというと、もし神学者は宗教歴史派によく見做って、キリスト教の現象、キリスト教の歴史および人の経験において現れたる事物を、よく研究の基としたならば、将来の神学は、昔よりも非常におもしろく、また有益になるに違いないと信ずるのでございます。そうしてまた、もしこの帰納法の方法によって、神学の研究の結果を、実際もつと人の生命に当てはめようとするならば、何よりも幸いであると信じます（三七、三八）。

もちろんのこと、僅かの題材からシュネーダーの神学的立場を断定することの危険は言うまでもないが、それを歴史的・批判的研究を決して退けない穏健な自由主義と判断することは、さして大きな誤りではあるまい。上記の引用のみならず、シュネーダーが神学部で担当した教義学の教科書として、バプテスト派の自由主義神学者ウィリアム・クラークの『キリスト教神学概論』 *Outline of Christian Theology* を用いた事実<sup>1)</sup> さらに、はるか後のことであるが、いわゆるストライキ事件に際して、シュネーダーおよび神学部全体が受けた神学的批判の性格

などからも、このことは確認可能と思われる。もつとも、歴史的・批評的方法論へのこのように開かれた姿勢にもかかわらず、説教集全体を通じてシュネーダーが聖書本文を使用する際は、伝統的な聖書の正典性に固着し、聖書そのものによる聖書の理解という改革派の遺産を、忠実に受け継いでいることは明らかである。

それでは、そのような聖書理解、すなわち「ただ聖書のみ」という福音主義の立場から生まれてくる信仰の内容はどうかと言えば、これまた極めて正統的な「ただ信仰のみ」、「ただ恵みのみ」の福音主義である。説教の機会そのものから当然かも知れないが、一九一七年の宗教改革四百年記念説教において、シュネーダーはこの二大原理（教理史の公式で言い直せば、形式原理と内容原理）を力説・強調する。「世界の歴史において、すべての大運動の基になっておるのは、ひとつの深い確信」であることを、使徒パウロ、使徒ペテロ、ヨーロッパのキリスト教化の立役者ボニファーツィウス、コルンバーヌス、パトリックなどを列挙して証示した後、シュネーダーは言う。

丁度そのように、ルーテルにも、ひとつの深い確信がありました。その確信は何でありましたか、と申すならば、それは「信仰によって義とせられる」ということでした。すなわち、我ら人間の神の御前に義とされる事、我らの神に受け入れらるることは、我らの行いによりませんで、根本的には、我らの神における信仰である、ということでございます（一一三一）。

「信仰によって義とせられる」という意味は何であるかという点、取りも直さず、キリストの福音、すなわち、キリストの喜びの音信でございます。人類は自分の汚れたる、不完全なる業をもっては、どうしても聖なる神を喜ばせ、満足

させることができないのでございます。……世界の歴史における第一の聖人でも、一番すぐれたキリスト信徒でも、まだまだ、欠点が多かったのであります。それに教会の儀式上の業も、ほとんど役に立たないのでございます。かくのごとき儀式は、いくらか信者の靈性の助けにはなりますけれども、神の前にはほとんど効能がないのであります。したがって、救いと限りなき生命の道は、ひとつしかありません。それは単に、キリストにおける信仰によって、神の赦しを受けることでございます。人類が己れ自らの業に信頼せず、また宗教上の儀式に依頼しないで、ただ神の恵みのみを信するならば、それこそ本當の道であります（一三四）。

「神のわざとしての信仰」と題される、本説教集でも最古の説教の一つにおいて、シュネーダーは信仰とは信任・信頼にほかならないことを強調する。

信仰は神のわざでございますか。しかし、信仰は人が義とせられるために、必要なる主なるものでございましょうか。信仰は神に対して私どもが持つべき、まことの關係の土台であるからでございます。……子の親に対する關係の土台は、信任でございます。ただし、どのように子供が正しき行いをなし、またその親に対して親切なるわざをしましても、もしその子供が、親を信するところの信任を持たなかったならば、その子の親に対する關係は、根本的に間違っております（三二）。

ここではシュネーダーの神学の全体像を構築しようとは試みていないのであるが、一般論として、それが健全

な福音主義信仰に基づいていることは疑いない。その罪観、および救済観においても、シュネーダーは伝統的な見解をしっかりと保持している。詳述の余地はないが、一九〇〇（明治三三）年、福島教会での伝道礼拝でなされたと思われる「罪と罪の犠牲」と題された説教は、シュネーダーが教理史で「代贖説」と呼ばれてきた贖罪理解を堅持していることを証示する（六八―七三、殊に七〇）。

同様に福島教会でなされた一九〇九（明治四二）年二月二六日の聖日礼拝説教は、信仰の要提を分かり易く伝える。シュネーダーはこの信仰を呼び醒ます神の自己啓示に触れて、神学上「一般啓示」と呼ばれる可能性を一部肯定しながら言う。

キリスト教によれば、神はいくらか自然界を通じても現われるのであります。神は自然界に行われておる勢力、自然界に現われておる美、自然界に存在しておる生命によって、御自身の性質をある程度まで、現わしておると信ずるのであります。昔の日本人は、大いに太陽や山や泉までを、神様として拝んでおりましたが、今日でもなお、そういうような習慣が残っております。ある人は、このような習慣は、まるでつまらぬものであると思えますけれども、私はこの昔の習慣は、絶対的に間違いであったとは言われません（五五）。

しかし、言うまでもなく、「神の本質は物質でなく、霊的なものであるから、神が主に自然界よりは、むしろ多く人の霊によって御自身を現わしたもう」ことは当然である。

我々は全世界の大多数の人々が、ひとりの宇宙以上の神を微かに認めて、これを不完全ながら敬うておる、と結論することが出来ます。まことの神がすべての人間の心のうちに、ある程度まで現われておるということが出来ます。そうしてまた、神が人の良心のうちに現われたものであります（五六）。

確かに、このような自然と世界史と人間の本性（良心）のうちに与えられる一般啓示の可能性を全く排除することはできないとしても、しかも、窮極的には、神の自己啓示はイスラエル史における「特殊啓示」として与えられると信じなければならぬ。

しかしながら、神が……自然界や、人間の心に現われておるより他にも、ひとつの方法をもって現われておいでになります。それは何であるかと言うと、イエス・キリストという、歴史上の人物によってであります。これは前に述べたものよりも、もっと完全な、また明白な現われ方であります。キリスト教と他の信仰と異なっておる、大いなるひとつの点は、実にこれでありませう（五七）。

数ページ前に引用した「宗教史学派」の方法論への開かれた姿勢にもかかわらず、シュネーダーの神学が、聖書に立脚し、そこで証言されている歴史的啓示に根ざした正統信仰だったことは十分に立証できたと思われる。

しかしながら、ドイツ改革派教会の子、しかも偉大なる世界伝道の世紀の子としてのシュネーダーは、信仰から出る新しい生き方、信仰のもたらす実り、具体的には正義の実現と実践へと関心を向ける。数えられないほど

多くの章句から、ごく限られた例を挙げることにしよう。

キリスト信者のうちに、時としては、信仰と正義とを全く違っておるもののように、誤って考えることがございます。そういう人は、信仰は正義でもなければ、また不正義でもない、と思うのでございます。……けれども、ただいま読みました創世記の言葉（一五章六節）によれば、信仰は取りも直さず正義でございます（前出。二、三）

……キリスト信者になるのは、外部の変化ばかりを意味するのではございません。ただ名を変えて、思想や主義や道徳を少し直すのは、決してキリスト教信者になることではないのでございます。キリスト教生命に入るのは根本的变化であつて、人の心の内なる革命でありますから、聖書にはこの変化を指して改良ではなく、「生まれ変わる事」と言つてあるのでございます。生命は新たな生命となるのでございます（「信仰の馳場」。ヘブル一第二章一、二節。一八三）。

……キリスト教生涯について、新約全書を書かれた人が、非常に重きを置かれた特典は、その新しいこと、また、その特別なることでございます。キリスト教生涯は新たな生涯であり、クリスチャンという人は、新しい、生まれ変わった、別になつておる人でございます（仮題「われら選ばれし輩」。ペテロ第一、二章九節。一八七）。

この救いを正直に、真心から受ける人はどうなりましたかというならば、かくの如き人は新たな人となるのでございます。まるで別の人、変わった人となつてまいります。彼らの心に新しい光が入つて来ます（講演「人類の救い」。

二〇三）。

このような反復は、シュネーダーが本質的には、十九世紀リヴァイヴァルの子であることを指し示している。すでに、日清戦争終結直後になされた前掲の「今日の日本における最大必要なもの」と題する説教において、「私が貴国に参りました所以のものは、この日本で生涯を送る覚悟で参りました。私が日本で勤めまする天職は、高尚なる道徳、教育の発達、宗教上の大事件、これを日本になさんがために、この五尺のからだを日本にいたすの決心でございます」（二一九）と断言されている。「宗教上の大事件」とは具体的に何を指すのかは必ずしも自明的ではないが、それが福音伝達による日本人の、そして日本全体の生まれ変わり、新生、リヴァイヴァルであることは推測にかたくない。

もちろんのこと、シュネーダーには十八、十九世紀アメリカの「キャンブ・ミーティング」に特有の、いわゆる「地獄の火説教」（“hellfire sermon”）の片鱗もうかがわれない。シュネーダーは新生の力そのものが、神からのものであることを十分に意識している。一九一三（大正二）年の教役者会での説教「良い篤い信仰の必要」においても、この点が力説される。

人を悔い改めさせる力はどこにあるか。人を新たに生まれ変わらせる力は、自己の意志の力でしようか。あるいは上よりの力でしようか。聖書によると、これは上よりの力であります。人を悔い改めさせ、新たに生まれ変わらせる力は、第一に、神の力であります。しかして、この人類以上の力は、何によってこの世の中に活動しましょうか。この力をどうしてこの世に持ち来たすことができるか。それは信仰によってでございます（四四、四五）。



ここには十九世紀特有の情熱が見られる。ホーイを、そしてシュネーダーを、草深いペンシルヴェニアの農村から引き出して、広袤たるアメリカ大陸を、さらに波荒き太平洋を越えさせた途方もないエネルギーの奔出がある。それなくしては、「この日本で生涯を送る覚悟」は困難だったし、いわんや、それを言葉どおり五十年にわたって果たし抜くことなど端的に不可能だったはずである。節度と教養によって抑制された表現ではあるが、シュネーダー説教全編を一貫するのはこの献身の情熱にほかならない。「すなわち、断然とすべての罪を捨てて、己の身を全く神の道に捧げる」(「信仰の馳場」一八二)ことがそれである。

もつとも、それだからと言って、救われ・新しく生まれたキリスト者の視野が狭くなり、それ以外の価値が何一つ見えなくなるというのではない。かえって、例えば安息日にさえも、「自然界に接することによって、信仰を篤くし、理想を高くし、敬虔の念を深くして、神の平安と喜びと希望とを味わって、また、新しい力と決心を与えられ」(「安息日を憶えよ」出エジプト二〇章八一―一節。一九三三〔昭和八〕九月一〇日、東北学院教会。一三)ることさえ許される。むしろ悔い改めたキリスト者は、この世にあって日々訓練され、より高い生を目指すのである。本小論の冒頭で掲げた「献身か涵養か」(Commitment versus Nurture)ではなくて、「献身から涵養へ」、あるいは「涵養から献身」への不断の相即とでも言えようか。一九〇七(明治四〇)年九月と思われる説教「みな新しくなれり」(コリント第二、五章一七節)においてシュネーダーは言う。

世間の人々にとって、悩みとか、病いとか、悲しみとかいうようなものは、人の心に苦痛、薄弱、失望を来たす他に

は、ほとんど何もないのでございませけれども、クリスチャンの立場から見れば、この世はひとつの大きいなる学校でございまして、すべて我々が世の中において出会うところの、困難とか禍とか、悔みとかは、我々神の子供らの精神の訓練の方法であつて、ついに我々がもつと高尚なる生涯に上がることができるところの、踏み石となるのでございます（一五四）。

最後に、上述の第三の座標軸とでも呼ぶべきキリスト教伝道における普遍と特殊の問題、すなわち、キリスト教使信の世界性と、それが出会う「状況」、あるいは「場」の特殊・特定性、もつと具体的には日本のナシヨナリズムとの対面・対決・葛藤・相剋の問題を、シュネーダーの場合に即して多少とも検討することにしよう。最も重要な問いの一つでありながらも、特に日本人聴衆を対象とする説教では表現されることも稀で、その場合でも極度の慎重さが求められたことはもちろんである。勢い、隔靴搔痒のもどかしさは免れがたいかも知れない。

シュネーダーが東北学院と関わつて過ごした五十年（一八八七〔明治二〇〕〜一九三六〔昭和一一〕）というものが、日本の歴史にとつて、どのような意味を持つかについては言及するまでもないだろう。ホーイと押川との間の抜きさしならない関係を直接に目にして「知恵」が増したこと、院長の重責を担つてからは、キリスト教と明治政府との関係も徐々に改善の方向へ向かつたこと、やがては、仙台のみならず日本国内でのシュネーダーの声望がとみに高まつたことなどの外的要因だけではなく、シュネーダーの個人的資質も加わつて、残された文章の中には、加速度を強める一方の日本のナシヨナリズムに対する批判的発言は、ほとんど見られないのが事実である。当然のことながら、意識的な自己抑制のあつたことは否定しがたい。

もともと、シュネーダーの中には国と国の関係、それぞれの国や民族が持つ特殊性について一種の樂觀主義が見受けられる。国や民族を分かち「隔ての中垣」よりは、信仰によって結ばれる兄弟愛の方がはるかに強いはずだ、という信念のごときものである。カリフォルニア州の日本人移民排斥問題をめぐって、日米間の民族感情が極度に高揚していた一九二四（大正一三）年一月一日、東北学院教会で試みた「米国より帰りて」と題する説教は、「正義と愛を実現させる神の霊」（二三）への信頼に満ちている。

アメリカのクリスチャンは日本のクリスチャンを、国の違いにかかわらず、彼らの本当に愛する兄弟と姉妹と見なしております。たとえ国会が日本の感情をむやみに害しましても、アメリカのクリスチャンはほとんどそのことを憤慨して、かえって以前よりも、日本に同情を表わして、日本のクリスチャンの兄弟姉妹を特別に気の毒に思っておるのでございます。また、あちらの兄弟姉妹は、日本の兄弟姉妹の信仰状態について、非常な喜びをもって聞いたのでございます（一六）。

我々キリスト信徒は、世界中いづこへ行きましたが、もしその所に本当の信者を見つければ、もう親しい兄弟を見つけたと同じことでございます。日清戦争の時に、日本の軍隊に入っておった信者とシナの軍隊に入っておった信者が、両方が集まって、共に祈禱会を開いたことは、度々のことございました。彼らは軍事上の敵として、相互に激しく相戦うたけれども、キリスト信徒として、相互に兄弟の關係を行なうたのでございます。日露戦争においても、同じような出来事が起こりましたそうありますが、これはまことにキリスト信者の深い兄弟たることを示しておりますまいか（仮題「われら選ばれし輩」前出、一九〇）。

シュネーダーは、圧倒的な「異教」社会の大海に浮かぶ少数者の群れという日本のキリスト教世界の現実が、かつてのローマ帝国と類似性を持つことを認めざるを得なかった。しかも、シュネーダーは二つの状況の間の類似・平行性よりは、その差異の大きさに目を向けたかった。同じ説教の中でシュネーダーはこうも言う。

我々日本におけるキリスト教徒の位置は、いくらか昔のローマ帝国の信者の、その政府に対する位置に似ておりますけれども、またそれと同時に、大変な違いもあります。キリスト教はローマ帝国においては、単に禁制の宗教でありました。日本においては、宗教の自由の行なわれておるといふ、大なる幸いがあります。ローマにおつた信者は、皇帝を拝むことを絶対的に拒みましたけれども、彼らは皇帝の命に忠実に従つたのみならず、皇帝のために熱心に祈つたのでございます。我々今日のキリスト信徒は、皇帝に対して真心より忠義を行ない、真心より国家の幸福を求め、我らの信仰を有しておらない人々よりも、精神の深い忠義者、愛国者とならなければならぬ、という義務が我らに懸っております（同上、一九四）。

一見すると「二人の主に兼ね仕える」至難事を意図しているかのごとくであるが、既述のように、このアポリアを解く鍵は、特殊を徹底することによって、かえって普遍に到達するという論理である。あるいは、特殊を突き抜けると普遍が開ける、とでも言えようか。日露戦争直後の説教においてシュネーダーはこう言う。

日本は日露戦争において東洋の永久の平和のために戦ったのでございます。我々教役者も、永久平和のために戦っております。そうして我々が来たさんとする平和は、国際間の平和よりも大切でございます。これは第一に、人の心の内にある平和でございます。……第二に我々が期せんとする平和は、人と人との間の平和でございます。……日本軍人がこの度なしとげたことは、世界の歴史において、一方から見るといつまでもひとつの麗しい現象でございます。日本の軍人は偉大なる勇氣、決心、犠牲、愛国心をもって、己れ自らではなく、君のために、国のため、正義と人道のために尽くしたのでございます……。

しかしながら、いま平和になりまして、軍人が現わしました精神が見えなくなるならば、何よりも残念でございます。むしろこの精神が、これから平和の事業と平和の戦いに移れば、非常に幸いなことでございます。……かくのごとき勇氣、決心、犠牲心という精神は、これから日本の伝道の事業に移れば、いかにも喜ばしいことであると思ひます。只今日本の前途に横たわつておる一番大いなる、一番大事なる働きは、伝道の事業でございます。どうか日本が、この戦いにおいても、日露の戦いと同様に、大勝利を得るよう、私は希望しております。ゆえに、どうか軍人の精神、軍人の魂が伝道に移つてもらいとうございます。これは今日もつとも望ましいことでございます（一一五―一一七）。

地上的・現世的な事象・徳目は、この地上を超えた永遠的なものの指標あるいは象徴であるという解釈である。それだからこそ、確かに本質的なのは超越存在であるとしても、なおも、その「しるし」を捨象することなく、棄却することなく、全体像の中に位置付けることが可能となる。もつと言うならば、地上的・現世的なものは、それを超えたものによって新しく位置付けられ、内容的にも変容・聖化されることとなる。シュネーダーもまた、

忠実な改革派教会の子として、地上的・現世的なものと、それを超えたものとの間に、「あれか・これか」の二律背反ではなくて、前者が後者を指し示し、後者は前者を照被し・高揚する関係を見ようとしたのである。仮に、H・リチャード・ニーバーの広く知られた宗教と文化をめぐる定式を借用するならば、第五型の「文化の改変者としてのキリスト」がそれに相当するのかも知れない。

シュネーダー伝の著者メンセンデイクは言う、

シュネーダーは全くのところ時代の子であり、現に生起しつつあった事柄に対しては沈黙を守った。この意味では彼は預言者的ではなかったのである。……特にその生涯の最後の十年間には、キリスト者の良心を重くするような多くの出来事——学校における御真影への拝礼から、日本の中国侵略に至る——が起こったことを考え合わせなければならぬ。ある事柄についてシュネーダーは妥協し、他の事柄に関しては沈黙を守った。……彼は革命家ではなかった。むしろ既存の体制を確固として支持し、東洋における日本の侵略政策を弁護しようとさえした。……この瑕瑾に目をつぶることは正直なところ許されまいであろう（『シュネーダー博士の生涯』二〇六）。

いずれにしても、このような発言さえも次第に困難となっていく日本の現実の中では、シュネーダーに残されたのが「好意的な沈黙」でしかなかった事情は、通史篇でも詳述したとおりである。シュネーダーには、『説教集』には収録しなかつた多数の式辞（四方拝、紀元節、天長節、明治節など）も残されている。日本のナシヨナリズムに対するシュネーダーの反応を掘り下げるには、これらの文章の精査も不可欠であろう。もっとも、それらの

文面のどこまでがシュネーダー自身の真意であるのか、それとも、彼を補佐した周囲の日本人たちのものであるのか判断は難しい。

通史篇でも詳しく触れたことであるが、院長退任の直前、外国伝道局幹事キャッセルマンはシュネーダーに手紙を送り、シュネーダーが日本国内で持っている影響力を活かして、現に中国大陸で起こっている日本の侵略行動に歯止めをかけるように強く迫った時、シュネーダーは次のような返事を書き送った、「あなたが東アジアの状況に関して書かれたことは、まことにもっとも至極です。あれほどまで詳しい手紙を感謝いたします。しかし、何をしたら良いかは容易には知り難いものです。何もしないで平然としていることはおそらく正しくないでしょうが、何かをすることは、かえって迷惑を引き起こしがちなものです」（『通史篇』八〇七、八）。何もしなかった、あるいは何もできなかったことにまで歴史が責任を問うかどうかは論の分かれるところかも知れない。いずれにしても、特殊と普遍の問題は歴史の終末まで残っていくことであろう。

(1) *Christ and Culture* (New York:1956) 『キリストと文化』赤城泰訳（日本基督教団出版局、一九六七）。

## 五 結びにかえて

以上、限られた資料という制約のもとではあるが、ドイツ改革派教会の宣教の神学を考究しようと試みた。グ

リングにせよ、ホーイにせよ、あるいはシュネーダーにせよ、いずれも当時のアメリカとしては最高・最善に近い神学教育を受けてから、日本に來任するわけであるが、狭義の神学者というわけではないし、神学各分野の専門的著述を残したわけでもないので、その神学の全容を明らかにすることは至難事である。勢い、冒頭で設定した三つの座標軸を手がかりにして、ある種のプログラムを作成しようとしたのであるが、それも必ずしも当初期待したほどには行かなかつた。今後には俟つほかないだろう。

それにもかかわらず、これら初期の宣教師たちが改革派の良き神学的伝統をしつかりと受け継ぎ、これを日本の宣教地にも移植し、定着させようとしたことは明白である。それは創造論や救済論といった神学の中心的な論題についてだけでなく、宗教と文化、あるいは教会と社会といった実践的な課題についても妥当すると思われる。そこから浮かび上がるのは改革派の遺伝子的特色とさえ言つて良いだろう。

もつとも、そこから若干の問題や限界も生まれて來たのかも知れない。ドイツ改革派教会は新大陸に移住して、すでに何世代も重ねていたはずであるが、そこで受け継がれている遺伝子の特質からして、共同体論についてはあまり明確な発言がないと感じられる。もともと旧大陸では、教会はそこにある地域共同体全部を包含する「同延的」性格を持っていた。そこから二つの共同体の協調・協力・相互保全といった傾向が自然であつた。この点で、成立の始めから異なつた遺伝子を受け継いだ他の教派的伝統とは別かも知れない。たとえ教会政治の面では多分に共通性を持つ長老教会でさえも、イングランドやスコットランドでは反体制運動であつた。

『キリスト教綱要』の第四巻全部を教会論に割いた改革者カルヴァンの伝統を受け継ぐ教会としては、いさゝか奇異でさえあるが、初期ドイツ改革派教会宣教の神学は、教会論においていくらか脆弱であることは認めざる



を得ない。風土、風俗、経済すべての面で東北地方が酷しいハンディキャップを負っているのは現在でも事実であるが、この東北の地における宣教の神学樹立の要は依然として、あるいは一層、大きいと言わねばなるまい。

藤村・泡鳴・春浪——東北学院時代の頃——

藤 一 也

序

島崎藤村（一八七二—一九四三）が東北学院普通科教師（作文・英訳）として在仙した期間は、明治二十九（一八九六）年九月から、翌三十年六月までの、ちょうどその当時の学制での、一学年であった。<sup>①</sup>

岩野泡鳴（一八七三—一九二〇）が「自伝と追憶」の中で言うよく知られた、そしてその信憑性は別として、「全体僕が同校に行つたのは、自分では教師になる心算で行つたのだが、行つて見ると入学試験をすると云ふ。馬鹿げて居て、碌に返辞もしなかつた。無論西洋人に試験を受けた。而して一年級に抛り込まれた。教師に行つて、一年級に抛り込まれた人間は、僕より他には有るまい」（「反抗的の答案」<sup>②</sup>）の生徒、即ち「一年級」（後の本科一年）に入学するのは、まだ東北学院の名称を持たない仙台神学校時代の、明治二十四年二月で、<sup>③</sup>明治二十六年十二月（本科三年）まで在籍した。泡鳴の来仙は明治二十四年一月であつたから、泡鳴の仙台時代は満三か年で、藤村の一学年・十か月より遙か長い。

春浪・押川方存（一八七六—一九一四）は東北学院（仙台神学校）創立者で、当時院長であつた押川方義の長

男であった。

横田順彌・會津信吾著、日本SFの祖・快男児『押川春浪』（昭和六十二年十二月、パンリサーチ、インスティテュート株式会社）巻末「押川春浪年譜」によると、明治二十四（一八九一）年の項に、

野球に熱中しすぎ、明治学院を辞めさせられ、方義が院長を勤める東北学院普通科に編入。

とある。

明治二十四年九月から始まる『東北学院成績簿』Grade Register of the Tohoku Gakuin, Sendai, Japan. Preparatory and Collegiate Departments, Vol.1. 予科一年（一八九七年卒業級）に押川春浪（方存）の名がある。この九月が東北学院の設置期になり、当時の学制は予科二年・本科四年制度であったから予科一年は最低学年であった。<sup>(4)</sup> 右年譜によれば明治学院予備科（予科）二年級（これは当時の学制から言っても一年級の誤りでないだろう）か）に入学したのが、明治二十二年であったから、春浪はここで一度も進級しない（二度落第した）ことになる。「野球に熱中しすぎ」は、あるいはそうした事情を示しているだろう（後出）。

東北学院退学についても、同年譜では、

明治二十六年（十七歳） 頭髮焼討事件で東北学院退学。札幌農学校実習科に入学。

とあるが、この退学を命じ札幌農学校に移したのも、父の院長押川方義であった。

島崎藤村が『桜の実の熟する時』の中で「今度の夏期学校の校長で、東北の方にその人ありと言はれ、見るからに慷慨激越な氣象を示したある学院の院長が通つた」と描く、その「慷慨激越」な性格の一端はここにも見える。

右年譜は春浪の退学を明治二十六年に置くが、前記『東北学院成績簿』で見れば、明治二十七年三月には、春浪は原級（但し学年平均68点）し、さらに同学年（本科一年）を明治二十八年一月まで続けている。

『東北学院学籍簿』第壹号・「押川方存」（二十七丁）の「卒業若クハ退学年月日」記入欄には、「明治廿八年一月廿八日 退校本科一年」とある。そして学内の機関雑誌『東北文学』第八号（明治二十八年二月二十五日）の「雑報」欄には、次の様な記事が載っている。

押川先生の息方存君は従来東北学院本科一年生なりしが、此度志す所ありて北海道なる札幌農学校へ入学せらるることとなりたる由。

これを見ると、春浪が札幌農学校実習科（農芸伝習科か？）に入学したのは年譜のように明治二十六年でなく、明治二十八年一月二十八日以降になる。たとえこれ以前としても、退学者でもないものを札幌農学校が受け入れる筈もない。同級生の井街頭は、既に同校（農業科・予科）に移っていた。

この調査も兼ねて、わたしは昭和六十三（一九八八）年七月十一日、北海道大学附属図書館・北方資料室を訪

ね札幌農学校関係資料を閲読した。その限りでは押川方存の記録は何一つ発見されなかった。

春浪が札幌農学校へ行ったとしても、右資料から見てもほんの短期間で、実習科という事から見ても正式入学かどうか、この点も明確にしえない要素を持っている。右年譜は前記に続けて、

明治二十七年（十八歳） 乱闘事件で札幌農学校退学。再び上京し、水産伝習所に入るが、まもなく退学。

明治二十八年（十九歳） 9月、東京専門学校専修英語科（翌年、英語学部と改称）一年級に入学。またこのころより

飲酒癖深まる。

とある。恐らくこの年譜通りではないにしても、春浪が明治学院から東北学院、続いて札幌農学校、水産伝習所、最後に大隈重信の東京専門学校（現、早稲田大学）に到着くまで、めまぐるしく転校を繰り返したことはこの通りであつたらう。しかも「野球に熱中しすぎ」とか、「頭髮焼討事件」「乱闘事件」など、後の『蛮勇豪語』（押川方存、大正三年三月・九十九書房）にあるように、若き日の春浪を彷彿とさせるものがある。

春浪が明治学院に入学する明治二十二年三月から二十三年五月までは、父押川方義は外遊中であり、一家は東京で生活をしていた。父から東北学院退学を命ぜられる明治二十八年一月二十八日は、ちょうど父押川方義は日本海外教育会の用務を帯びて朝鮮（韓国）視察のため仙台を出発する日であつた。この頃から押川方義は大隈重信と昵懇になりやがて大日本海外教育会の会長に大隈重信、副会長に押川方義が就く。そして春浪は明治三十四年七月、東京専門学校（翌年早稲田大学となる）を卒業する。

その卒業の前年、春浪は『海底軍艦』を文武堂より刊行（十一月十五日）する。

以上、藤村、泡鳴、春浪の東北学院時代を確定するために、今まで不分明であった泡鳴、春浪を手許資料で追ってみた。

各論に入る前に、三者がかかわった東北学院時代、つまり明治二十四（一八九一）年一月から明治三十（一八九七）年六月までの、年代記的な泡鳴、春浪、藤村の生活場における年表を、左につくって見る。

明治二十四（一八九一）年

一月 岩野美衛、押川方義を訪ねて来、東北学院（仙台神学校）教師にならんとする。

六月 『仙台神学校文学会雑誌』第壹卷（四・五・六月合併）刊（中旬）。

七月 「東北学院設置願」を県に提出（十四日）。

九月 開校、校舎完成（十八日）。その中の図書室を「ケルカー記念図書館」と称す。

押川方存、明治学院より東北学院に移る。

明治二十五（一八九二）年

三月 押川方義の発案により「労働会」創設（十日）。

四月 第一回文学会大会（二十九日）。

八月 東北学院理事局を組織（二十九日）。同時に押川方義院長、ホーイ理事長・副院長に就任。

明治二十六（一八九三）年

四月 第二回文学会大会（二十八日）。新たに英語劇が加わり、その最初に、「ハムレット」上演。

五月 神学生高橋伝五郎、郡司成忠の報効義会隊員として北辺防備と開拓のために、北千島に向かう。

十月 押川方存、学内に「東北学院ベースボール会」結成（初旬）。

『東北文学』創刊（十日、編集人・川合信水、発行所・東北学院文学会、印刷所・東京秀英舎工場）。

明治二十七年（一八九四）年

一月 橋本只子（押川方義実母）、仙台押川家にて死去（五日）。

七月 高橋伝五郎、北千島シヤスコタンにて越冬中殉難伝えられる（六日）。

八月 日清戦争始まる（一日）翌年四月十七日）。

十二月 押川方義、本多庸一・巖本善治らと「大日本海外教育会」設立（八日）。

明治二十九年（一八九六）年

一月 押川方義、本多庸一ら続いて北辺防備と北海道開拓を志し、「北海道同志教育会」設立。

四月 朝鮮京城に「京城学堂」（大日本海外教育会）開校（十五日）。

労働会機関誌『芙蓉峯』創刊（二十八日、発行兼編集人・川合信水、印刷所・東京秀英舎工場）。

九月 島崎春樹、普通科作文・英語教師として着任（八日）。

明治三十一年（一九〇七）年

一月 英照皇太后崩御（十一日）。翌日、歌舞音曲停止の閣令第二号出る。

三月下旬～四月中旬 前年九月から毎月、『文学界』（東京）に掲載していた作品を集め『若菜集』編集、東京・春陽

堂に送る。

四月 島崎春樹、新年度文学会会長に選ばれる（十五日）。

六月 島崎春樹、辞任（三十日）、同夜夜行（七月一日、午前〇時五分）にて離仙。

この明治二十年代の後半は、「大日本帝国憲法」発布（明治二十二年二月十一日）、「教育ニ関スル勅語」発布（明治二十三年十月三十日）に続く時代で、天皇制確立期の明治国家主義思想と、明治十年代の自由民権思想が崩壊して行く過程での、西欧（特にイギリス）文学の影響下に立つ明治浪漫主義思想とが、激しく奔騰する時代でもある。

以下に、この時代を東北学院に生徒として送った岩野美衛（泡鳴）・押川方存（春浪）、教師として送った島崎春樹（藤村）を学内資料を中心に、この順（時代順）に追ってみたい。<sup>(5)</sup>

## 一 岩野泡鳴

岩野泡鳴の年譜に、明治文学全集の中の一冊である『岩野泡鳴集』（昭和四十年三月、筑摩書房）の杉本邦子編・巻末年譜がある。そこでは泡鳴の東北学院時代を、次の様に述べている。概観できるので、引用する。

明治二十四（一八九一）年 一八歳



一月、『文壇』四号に新体詩「青菜摘」（表紙目次には「若菜摘」）を発表、社友勧誘に尽力したため、この号より田村三治と共に会費免除の特典を受ける。一月末、押川方義を慕って仙台神学校におもむく。教師として勤めるつもりであったが、米人宣教師に試験をされて、一年級に入れられる。三月、『文壇』五号に翻訳「エマルソン氏歴史論」を発表、六号に及ぶ。また『仙台神学校文学会雑誌』（筆写仮綴式、四、五、六、三ヶ月の合本）にも、白滴子と号して、新体詩「東京みやげ」「我父」や、訳詩「ロングフェロー氏村鍛冶の歌」、翻訳「エメルソン氏歴史論の一節」、評論「大詩人と〇〇」、和歌などを発表。この年、仙台神学校は組織を拡張し、東北学院と改称。仙台時代は、エマースンを心の友とし、万葉集、詩経、ギリシャ語、ドイツ語、梵語、シェークスピア、ミルトンなどを研究、修行僧のような生活を送り、詩作をも試みたという。

明治二十六（一八九三）年 二一〇歳

一月、『文学界』が創刊され、透谷の作品に感服した。また、ゲーテの『ファウスト』や、シェークスピアの『ハムレット』の影響裡に「魂迷月中刃」を執筆中だったので、藤村の「朱門のうれひ」（十月）に関心を寄せた。

明治二十七（一八九四）年 二二一歳

『文学界』の誌上の藤村の劇詩や、『早稲田文学』誌上の逍遙の演劇改良論などに刺激されて「劇界の創作的方面に飛び込む時期」と決心し、春頃、「魂迷月中刃」を携えて帰京。この頃、父直夫は熊谷まつを囲い、家庭不和づく。帰京後、透谷とも交わりを結んだが、五月、北村透谷死去。七月、『評論』第二十六号に仙台時代の詩作「樹だま集」を発表、はじめて泡鳴の筆名を用いる。

泡鳴は後に作家となってからも、自らの東北学院時代の頃について、しばしば言及している。国民図書株式会

社発行の『泡鳴全集』第十一卷（大正十年九月）の、

自伝と追憶

僕の十代の眼に映じた諸人物

東北学院と押川氏

反抗的の答案

教場で梵語の研究

答案に翻訳論

我は如何にして詩人となりしか

解答（五）

宗教より文芸に

僕の回想

（ここには、明治学院在学時代一年上級であった島崎藤村との交流などについてふれるところがある）  
などが、その主なるものである。<sup>6)</sup>

泡鳴には「はじめは自然哲学と称し、なか頃空靈哲学と唱へ、終に表象哲学と名づけるに至った思想」（「はしがき」という、泡鳴自らの「哲理」（思想）を発表した——もともと鎌倉建長寺での国詩社集会席上の講演（明治三十九年二月十一日）原稿——『神秘的半獣主義』（明治三十九年六月、左久良書房）という書がある。二十二項目にわたる多岐な論考（最後は「新悲劇論—シヨーペンハウエルの音楽論を破す」）であるが、その「（五）エ

メルソンの特色と神秘的傾向」の中に、次のような文章がある。

その頃から、僕の思想上に大変化が起つた——尤もこれは、エメルソンを読むのは危険だといふ宗教家輩から云へば、渠の影響が靦面に來たのだと嘲るだらうが——早くからた、き込まれて居た、耶蘇教の神が分らなくなつて、之を棄て、しまつたし、また自分の愛して居た少女が理想のもでなかつたり、一親友が急に死んだりしたので、精神は非常に錯乱して來た。それに、家の關係上、文学に少しでも手を出すなら、学校生活は続けられなかつたので、某校で理財科を終つてから、政治科をやらうと思つたのを断念して、仙台へ行つた。政治家になりたいという考へは微塵もなくなつて、それからといふものは、専ら詩的修養をするのが自分の生命になつたが、その時は毎週の自修科目を時間に割り当て、万葉集と詩経とシエキスピヤとミルトンと独逸語と希臘語と梵語とを研究した。梵語研究などは、金がなくつて、道具が揃へられないので直ちき中止をしたが、その間にでも、エメルソンは最も面白いので、毎日一回づゝ出て來た科目はこればかりであつた。

そこで、当時、エメルソンを樂天家だとは知らなかつたのである。たゞ字引と首引きで読んで行くうちに、無性に自分の精神が引き立つて來て、もう、絶望と死の苦みとを感得したと思つて居る自分に取つては、句々節々があらたの悲愁を養つて呉れるやうで、それがたゞ愉快であつたのだ。二年程経つうちに、エメルソンの形式的方面が厭になつたので、断然棄て、しまつたが、その同情的精神の沈痛なものには、当時、自分の頭腦と胸臆とはかき乱されて、また整へられて居たのだ。或時など、広瀬川といふ川のほとりに坐わつて、エメルソンを読んだが、秋の日はもう沈んだあとで、閑寂のうちに川水の響が何となく奥ゆかしく聴え、ゆふぐれの景色は惻々われに迫つて來た。これは丁度僕がエメルソンの暗示に接する時の様で、手にした全集のおもては、薄暗い空を飛びかふ夜の羽がひと一緒になつてしまつた様であ

つた。そこへ二つ三つ飛んで来たものがあつた。驚いて見まはすと、向ふ岸から小供が二三人、僕を目がけて、狸だ〜と呼んで、石を投げるのであつた。——エメルソンはつひに、僕を、狸と呼ばれる程に、幽暗なところへつれ込んだのであつた。

ここに出てくる万葉集、詩経、シェイクスピア、ミルトン、エマソン、それに「自伝と追憶」の「我は如何にして詩人となりしか」の「カントの『クリチツクオヴピウアリーズン』（純粹理性批判）、プラトーンの『ダイアログ』、エマソン全集、ミルトンの『失樂園』、ホーマーの『イリアッド』、万葉集、詩経、ゲーテの『ファウスト』、シェイクスピアの『ハムレット』」などと言う、当時としては聖書学、哲学、文学、歴史、科学などの最高の英書を持ち、また和漢書を持っていた東北学院図書館（ケルカー記念図書館）は、泡鳴——のみならず藤村においてもそうであつたが——の「詩的修養」の場となつた。

ここでは『神秘的半獣主義』の内容に踏み入つて泡鳴のエマソン論（自然論、神秘主義、恋愛論）、ショーペンハウエル論（意志と表象、善悪、悲痛、音楽論）、半獣主義、刹那的文芸観、国家論等について論ずることはできないが、泡鳴思想の基盤の形成に東北学院時代が、特にエマソン研究が、大きな意味を持つことだけは言えよう。泡鳴はまず「エメルソンは僕の恩人である」（緒言）と言う。

この『神秘的半獣主義』には「付録」があり、その「付録」（十三編＝詩論・評論・書評・書簡・日記）の中に「追憶」の題を持つ、吉野臥城への書簡がある。そこで泡鳴は、この東北学院時代を「失恋の時代、煩悶の時代、幼児より得たるキリスト教的神の觀念を離脱して、而もいまだ文芸の大海に方針の定まらざりし時代」と言う。

泡鳴の第一詩集『露じも』（明治三十四年八月、自費出版）には、泡鳴の仙台時代の長詩「十字架の影」（明治二十六年作）がある。その「はしがき」に「われ一度び懷疑の俘となりてより、未だその束縛を脱したりという能わず。曾て煩悶の余り一詩を物して、宗教上の安心を得んとせしことあり。即ちこの篇なり」とある。

失望 落胆 尽き敢へず

いはほに 立ちて 偽善者の

そら飛ぶ 鷺に 向く を 見よ

泡鳴の竜ノ口峡（仙台城跡）自殺未遂事件（明治二十六年）の背景をなすものである。

泡鳴の東北学院時代の頃の盛んな文学活動は、まだ『東北文学』創刊（明治二十六年十月）以前の前史時代であった。『東北文学』を創刊に持って行ったのは川合信水で、信水は邦語神学部に入學（明治二十六年二月）するまでは、東京で巖本善治の下で、『女学雑誌』の編集（明治二十三年九月以来）にたずさわっていた。同誌に寄稿していた「厭世詩家と女性」の北村透谷や、「小説の實際派を論ず」や「夏草」の藤村とは、既に知己の間柄になっていた。泡鳴は直接に東北学院時代以前の信水を知らない。『東北文学』創刊の頃、泡鳴の心は、既に仙台にはなかった。仙台神学校に「文学会」が出来たのは、明治二十二年一月であった。その月に、「第一回文学会例会」が持たれた。

この前史時代の文学活動（文学会雑誌活動）は、次の三期に分かれる。

第一期 東洋（中村長之助）時代 明治二十三年一月～二十四年春

第二期 東海（島貫兵太夫）時代 明治二十四年春～二十五年一月

第三期 白滴（岩野美衛）時代 明治二十五年一月～二十五年秋

以後は扶桑（中村長之助）、杏陰（前田次郎）が、これにかわるが、明治二十六年一月発行の『東北学院文学会雑誌』第十八号をもって文学会雑誌活動は、一時中止する。<sup>7)</sup>

『仙台神学校文学会雑誌』第壹卷（明治二十四年六月中旬）は、この第二期に属する。今この目次を、煩をいとわず列挙する。

仙台神学校文学会雑誌第壹卷（四・五・六月合併）

目録

祝詞

藤生 金六

論説

日本ノ教育者ニ告グ

島貫 兵太夫

俠客論

不 孤

仙台神学校及生徒

北 山 人

時勢英雄ヲ起スノ論

扶桑 学人

基督及孔子

しまぬき

品格養成法

如何ニシテ我同胞ノ名譽ヲ保ツベキ乎

改革論第一章（神学校）

基督ノ審判ヲ論ズ

英雄時勢ヲ起ス論

自国ノ歴史ヲ研究スベキ理由

何故ニ余ハ断乎トシテ国粹主義ヲ固執スル乎

仙台神学校ノ気風ヲ如何ニ造ルベキ乎

仏説転生輪回ノ説ハ吾人ノ擯斥スル所ノ者ナリ

恐ルベキ反動

画

東郊春色

雜録

偶感

回顧

隈川漫筆

英雄ノ心事常ニ綽々トシテ余裕アリ

紀事三首

扶桑学人

鶴城生

鳴貫生

桂浜漁夫

蝦夷山人

扶桑学人

香圃散史

美禄子

香圃散史

叩頭小僧

布施淡

布施淡

美禄子

鼎峯生

島貫

K、H、

千葉毅

千葉毅

喰客

柴ノ中ノ毛虫

英雄豪傑ニ欠クベカラザルモノハ何ゾヤ

島貫

羽陽上人ノ書簡

酒井勝軍

答酒井勝軍君書

杏陰逸史

忍耐ニ就テ

信夫覚悟

第二十六世紀ノ日本ハ大〇〇者ヲ生リ

兄、弟、椅子

仙台禁酒会第二回演説会ノ記

一會員

B、R、S、

尾陽生漫筆

尾陽生

牧夫

田舎出生

往事ヲ歎ジテ後來ヲ戒ム

岩洲鈍生

貞淑節操ナル静姫

香圃散史

諧談十則

諧々生

エジプトノ宗教

扶桑学人

香圃散史ノ国粹旨義ヲ読ム

美禄子

太陽構造ニ就テ

叩頭小僧

余ノ国粹論ニ就キ諸君ニ注意ヲ促ス

香圃散史

翻 訳

亜米利加国旗

神州男子



エメルソン歴史論ノ一節

エマーソン

紀行

松島紀行

御浦山龍口採貝之記

三十六峯(紀行)

藻塩草

東京みやげ及短歌数首

我が父

春声

送井深先生之欧米序

題八幡太郎過勿来関関

述懐

大詩人ト〇〇

文学会ノ隆盛ヲ祝ヒテ

ロングフェロー氏村鍛冶之歌

笑草

観桜花之記

岩野白滴

杏陰生

香圃散史

佳雲生

島貫生

白滴子

企人

企人

藤無懷

隱花漁史

企人

企人

企人

岩野白滴

水西泉士

白滴子訳

あらし

香圃散史

詩界ノ三偉人

文学会諸君ヘノワビ言

子供ト翁

読聖書有感

聖書ヲ読ミ侍リテ

伝記

ハンニバルノ伝(前号之続)

烈婦才藤之伝(画入)

小説

妙ナ教育

松柏後凋記聞

深山草

批評

開發的安息日学校教授法 島貫兵太夫著

日本人(雜誌)ノ歴史

基督教新聞ノ告青年文

国民之友、日本評論、女学雜誌

日本人 三宅雄次郎著

一貧書生

松琴生

紅翠女史

馨散花

芦雪

高々蓮士

高々蓮士

高々蓮士

K、S、

寸鉄子

松琴居士

松琴居士

以上

風立子

T、K、

以上

風立子

T、K、

時事

神学校花クラベ 城山ノ骸骨 加藤大学総長 自愛セ

—島貫松田ノ両士 阿部安二郎君 忠愛之友倶楽部

来ル二十八日 モール教師 日本ノ文学趣味 校長之

婦校 横井氏会堂成ル

以上 新 波 生

湖南ノ変ト日本国民 神国変ジテ売淫女ノ本産地タラ

ントス 現時ノ教育界 果シテ今是昨非乎 東西ノ大

山師 帰情勃々

以上 風 立 子

付録

教勢振起策

美 緑 子

教会信者ノ不振ヲ匡ス法

浦島 太郎

神学生ノ職務如何

月 城 生

全

抱 望 生

全

井端 主人

仙台神学校文学会雑誌!

鳴 貫

英語部

Feeling of spring.

K. Abe

What is death ?

K. Y.

Psalm, cxix, 18.

W.E.Hoy

The Loyal subject.

Kosankwa

Yosa the bird.

Dr.Rockfield

The Importance of courage.

D.B.S.

この筆写仮綴式（背皮、クロス表紙）、約三〇〇丁（六百頁）の『仙台神学校文学会雑誌』は全校教職員学生生徒のものであって——これはそのまま後の『東北文学』に引きつがれて行く——その点玉石混淆である。が、同時に当時は、後に「赤煉瓦造方形五層の塔及び円錐形スレート屋根の円塔より成るゴシック式シャトウ風の典雅な建築として、明治・大正・昭和前期を通じて仙台市民に親しまれ、名物となつて」いた神学校（東北学院）が建造中であつたこともあり、紙面にはエネルギーが溢れていた。その中で最も高い識見と筆力を持っていたのは最上級生でもあつた中村長之助、島貫兵太夫であらう。それにつぐものが岩野泡鳴や酒井勝軍（美祿子・水西泉士）、前田次郎（杏陰・月城・風立子）、鈴木瞭助（香圃）、市村竹馬（高々蓮士、桂浜漁夫）、須藤鬼一（松琴）、土田熊二（神州男子、耕堂）などであらう。

この中の布施淡の水彩画「東郊春色」は、貴重なものと言える。布施は小山正太郎の不同舎門人で仙台洋画界の先駆者の一人（明治三十四年、二十八歳没）であつた。

英語部にはホーイとシュネーダーのものがある。が、Yosa the bird・Dr.Rockfieldは岩野のものである。『東北文学』第十八、三十―三十三号には「東北学院に於ける文学発達の歴史」という副題を持った散木散人

(五十嵐正)の「今昔物語」がある。そこには泡鳴を含む、初期東北学院(仙台神学校)文学会の詳しい報告がある。しかしここでは、それにふれる余裕がない。そこには、泡鳴について(引用はその一部に過ぎないが)、

彼は東都に在りて同志の徒と文壇社とやらを結び、数号の雑誌をさへ発兌して己も之に新躰詩論文等を登載せるほどなれば、田舎に來りては大に幅を利かせたり。予科一年級に在りてエマルソン文集、ロングフェロー詩集等を繙き且つ『ポイトリイ、アンド、シヴィリゼーション』と題して英語演説を試みたることさへあり(尤も『アイ、キャン、ナット、スピーク、エニイ、モア』とて中止したれども)、日陰育ちの坊ちゃん達を仲間としていかに得意なりしか想ふべし。

ここでは泡鳴は予科一年(本科一年が正しい)になっている。

また『仙台神学校文学会雑誌』掲載の英文(「英語部」)については、次のように言っている。

此時英文麗藻の欄新に起り、ホーイ、シュネーター両教授を初めとして安部清行(尊称を付せざるは史家の例に従ふなり、以下皆然り)、吉永鵬丘〔樟馬〕、岩野白滴等之が寄稿者たりき。殊にホーイ教授は詩篇第一百九篇第十八節を題として長篇の詩をものしき。

と。

『仙台神学校文学会雑誌』は、明治二十四年九月からは校名変更に伴い『東北学院文学会雑誌』（現存のもの、十四・十七・十八号のみ）となる。明治二十五年一月には、中村長之助、島貫兵太夫は編集責任からは離れ、岩野泡鳴（白滴）がこれにかわる。

この時代の「大産物」は、「詩人は世界のたましひなり世界消え去るもなほ詩人は存ぜむ然れども詩人なくんば世界はたゞ死物の如し」と言う、泡鳴の「詩人論」であったといわれる（『今昔物語』）。

泡鳴の詩人論に『文壇』（三号、明治二十三年十二月）発表の「大詩人と文壇」（『仙台神学校文学会雑誌』では「文壇」を「○○」としている）がある。『文壇』は国木田独歩の編集である。

余り長い文章でもないので、今、『仙台神学校文学会雑誌』から、その全文（序）を転載する。

### 大詩人と○○

この文は我等青年の集つて発刊せる雑誌○○の我序なりこゝに転載して諸君の一覽に供す

岩野白滴識

天蒼くして地遙かに靄む、この間にあつて熟せる夢想は壮大なるかな。花に尋ねてローマの古昔を懐ひ、舟に棹してジブラルタルの鉄壁を望み、コルシカに上つてはナポレオンの豪邁を慕ひ、ロンドンの繁栄を見ては東洋の一孤島を憤る。吾人青年は実に憂胸の將に破裂せんとするの洋涯に立てり。然れども天地の渺漠をのみ見て人智不平なき能はず。宜なり事や、今日の日本は殆ど小批評家を以て充たんとす。冀くば一步を進めてトルコ軍艦の沈没したる紀州灘のなみ風に向へ、而して吾人の満足は果していづこに存するかを見よ。

現今青年の多くは見るべからざるところに常に注目せざるか。日本社会の青年は自家の影なる事物を追ひ行けり、その走るに従つてたゞ疲労を増すのみならず、到底及ぶべからざるの断念なきを得んや。たゞ社会を破拆のみして得るところなきは当然なり。然るになほ慷慨憤起、功名の成らざるを悲み、自らシントヘレナの柳に擬し、ひとりイタリヤの野に吟ひ、益々世を罵つて、つひには無為に己をルーソーの墓に葬らんとす。若しそれ之に反して我望足れりとする者あるも、たゞ小成のみ、一たびその立命の地にあらざるを覚るや、同じくこれ見るべからざるの仮装を見、追ふべからざるの自影を追ひしに過ぎず。いかんこれ両ながら以て青年の天真となすべきか。

乞ふ覆つて歴史の教ゆるところを学べ、後に巡りて古今の事実を觀察せよ。天下広しと雖ども厭世学の講堂いづこにある。鉄履堅しと雖ども井蛙の手引はいつまでも見付けるを得んや。知らずや、トルコ軍艦は自らトルコ軍艦を破裂せしめたることを。故に青年第一の事業は確信にあり。一たび吾人の心がその間を漂ひたる市街、人物、城壁、古刹、渾てこれ等の濤波は各自永遠エタルニチの存在を確めざるはなく。英雄の勝利を讃するも、またその失敗を悲むも、全く吾人同情シンプアスィの舟を押して凡ての苦難に堪へてそのかく成来りたる所以の理に乘出さざるべからず。然らば現今、涙を以て世の仮装を看破し、大に天地自然の理を悟りたる哲学者——自らその高尚なる理想に食み、我国の心荒を開拓するものなほ余ある大詩人——はこれ一種の必要ならざるか。あ、泰然たるかな理想峯、高く之に登れば諸景眼下にあり。天下の人物皆我心に再生せざるはなく、歴史上の事実悉く我脳裡の反照なるを知り。而して始めて天職実行の時代となり各自の冀望自ら満つるに至る。世事万端なりと雖ども渾て宇宙と全き真理に帰らざるべからず、一筆の遊も之によつて吾人の理想と品性とを高めざるべからず。故に文章上の豪傑は少しも社会の大活眼に異ならざるなり。エメルソン曰はく「若し世に、心胸豊沛にして精神確乎たる人物の处在を示す磁石ありとせば、余は囊中を尽して之を買ひ、即日訪問の途に就けるものを」と。我国恐くば人物なきにあらざるべし、ただ之を探ぐるに適當なる磁石なきのみ。然れどもここに〇〇あ

り、吾人は少しく望なき能はず。

それ交際は社会の鏡なり、人の過失は之に照らして始めて知らる、がごとく、○○上相互の鍛錬によつて吾人は各自大に悟るところあらずんばならず。而して古英雄の勝敗を読むと同じ価値あり。素とこれ吾人と一髪の隔あるのみ、いかなる人物もまた世と共に流汗の間に働くなり、而して桐葉の黄ばむを見て予め秋の来るを覚るがごとく、その活眼は夥多友輩の習慣に鑑みてその社会を前占す。こゝに於てか過去、現在、未来を抱括したる理想に養はれ、自家立脚の基礎始めて確信の上に建てらる。この境遇に住める者は渾て平等なり、自由なり、愛なり。見よ、ロングフェローの村鍛治も天下の大経綸を教ゆるにあらずや。財界の一力士も佐久間象山をして将に泣かんとせしめたるにあらずや。ピューリタンの剣、プラトーの脳、パトリックの弁、キリストの胸、豈我身の代表に過ぎざるを知らざらんや。人生の価値それ斯のごとく貴し。

「徳は孤ならず、必ず隣あり。」各人を除て別に囊中を尽すべき磁石なき所以即ちこゝにあり。若しそれ吾人青年にして着実確信、物に屈せず、事に撓まず、同情を以て理想の鍛錬に尽し、日一日と自家の品性を高むるを勉めんには、各自の天真自ら集つて或代表者に指向ふに至らん。あゝ、○○社諸子よ、余はこの口述を一括して壇上を下らん。諸子にして若し日本歴史に一のコンコルドを残さんと欲せば、必ず吾人の団結なるこの村落を代表する大詩人なかるべからざるなり。

To the poet to the philosopher, to the saint, all things are friendly and sacred, all events profitable, all days holy, all men divine. — Emerson.



最後の引用の英文は、エマソンの「歴史論」Historyの一節で、泡鳴が翻訳した「エメルソン氏歴史論の一節」（目録では「エメルソン歴史論ノ一節」）の中のものである。同翻訳の中で、泡鳴はこれを「詩人なり、哲学者なり、聖人なりにはあらゆる事物友情あつて罪なく、あらゆる出来事は有益に、あらゆる日は清浄に、あらゆる人は神聖なり」と訳している。<sup>68</sup>

東北学院が第一回文学会大会（大会は年一回、例会は毎月あつた）を持ったのは、明治二十五年四月二十九日であつた。これは「岩野白滴等の主唱に係れるものなり」とある。それは藤村が『桜の実の熟する時』でも描いている連合文学会が、頭にあつたからであらう。藤村はそこで「新青年最初の手段」を語り、泡鳴は「雑誌社会」を語つた。

この第一回の文学会大会には、泡鳴は出演していない。第二回大会は、明治二十六年四月二十八日であつた。この時には泡鳴も出演した。泡鳴は詩「悲詩人」（国詩）の朗読を行なつた。

その時のプログラムは次の通りであつた。

一、奏 樂

二、唱 歌（君が代）

三、開会の詞（邦語）

金成 兵助

四、演 説（邦語）

須藤 鶯郎

- |     |               |        |
|-----|---------------|--------|
| 五、  | デクラメーション（英語）  | 五十嵐 正  |
| 六、  | 唱 歌（独逸国譜）     | 独逸部生徒  |
| 七、  | 文 章（邦語）       | 堀田 正次  |
| 八、  | 演 説（英語）       | 出村悌三郎  |
| 九、  | 暗 誦（邦語）       | 須藤龍三郎  |
| 十、  | 文 章（邦語）       | 渡辺 萬藏  |
| 十一、 | 文 章（英語）       | 永島 藤三  |
| 十二、 | 唱 歌（埃国譜）      | 独逸部生徒  |
| 十三、 | デクラメーション（拉典語） | 田村 兼哉  |
| 十四、 | 演 説（邦語）       | 中村長之助  |
| 十五、 | 国 詩           | 岩野 美衛  |
| 十六、 | デクラメーション（独逸語） | 佐藤 稠松  |
| 十七、 | 朗 読（漢 文）      | 市村 竹馬  |
| 十八、 | 沙翁戯曲（ハムレット）   | 出村悌三郎  |
|     |               | 今井 栄吉  |
|     |               | 井上 哲郎  |
|     |               | 小此木文九郎 |

## 十九、奏 樂

これについて、次の様な解説がある。

中に就きて戯曲は非常の出来にて大喝采を博し、岩野白滴が新体詩『悲詩人』は其長詩なると読方の奇妙なるとを以て人々の注意を引けり。翌年十二月白滴之を散文脚本に改め『悲劇魂迷月中刃一名桂五郎』と題し作者阿波寺鳴門左衛門の名を以て女学雑誌社より刊行し、一時批評界の題目となれり。当日他の諸秀才が演ぜる所今は之を傳ふるに由なし、たゞ其題目の記憶に残れるもの、みを挙げれば、邦文の七は『富嶽』、十は『春』、十七の漢文は『題天驕図』、独逸語唱歌の六は『ツム、ライン』、十二は『カイゼル、フランツ』、十一の英文は『日本武士』、八の英語演説は『プロフェツ』、邦語演説の十四は『思想界の難問』なりしならん（『今昔物語』）<sup>(9)</sup>。

『桂吾郎』についての書評が『東北文学』第八号（明治二十八年二月）に出ている。評者はC. N.（中村長之助）である。この作品はまだ習作の域を出ていない。が、こうして泡鳴文学の最初の歩み出しが始まる。<sup>(10)</sup>

いずれにしても岩野泡鳴の東北学院時代の三年間は、その青春時代と重なり合うかたちで、泡鳴の文学的生涯への詩的修養の時代であったことに、間違いはない。

## 二 押川春浪

押川春浪の場合は、岩野泡鳴と異なり、東北学院時代、文学者になろうなどとは夢思わなかった。そのことは「少年小説大系・月報6」（一九八七・一〇、三一書房）・横田順彌「押川春浪と新渡戸稲造」の冒頭、

「だれでも、多かれ少なかれ、また、大きいか小さいかの差はあってもその人生には、いくつかの転換点があるものだが、押川春浪という人は、極端ないいかたをすると、その転換点の連続といってもいいような、波瀾の人生を送った人だった。」

その最たるものは、作家になろうという断固たる決意があつたわけでもなく、東京専門学校（現、早稲田大学）在学中に、小説でも書いてみようかといった程度の動機から書いた処女作『海底軍艦』が、当時の青少年たちに、圧倒的な支持を受け、作家として社会人のスタートを切つたことだが、それ以外にも数多くの節目があつた。

を見ても言える。

しかし、そう見える春浪・押川方存の中に既に東北学院時代に、その萌芽を見ることもできる。それは当時の東北学院文学会の雑誌である『東北文学』の「雑報」欄という学内外の消息欄を見ればわかる。今、その『東北文学』から引く。

第二号 (明治26・12)

文学会 は其第十五回例会を、十月第二(金曜日東北学院講堂に於て開き、健康(谷津善次郎)、邦文朗読「秋」(瀨成田格)、「高橋伝五郎君を思ふ」(高野外吉)、邦文朗読「庠序の教」(渥見貞吉)、漢文「吊三日月次郎吉」(押川方存)、人物養成法(木村清松)、其声や大也(須藤鷺郎)、其声や小也(酒井勝軍)、新軼詩「母と赤子」(鈴木瞭助)、「True Liberty」(熊谷駒之助)等の諸氏交々演ぜられたり、出席者は八十余名なりき。

第五号 (明治27・6)

文学会 の第二十一回例会は五月十九日午後七時講堂に於て開会

- 一 演説「調和」 伊藤嘉吉
  - 一 文章「人一度死せざるを得ず」 篠原正三
  - 一 演説「隠居廃止論」 石倉 梓
  - 一 同「趙子龍を論ず」 押川方存
  - 一 同「諸君の一致を望む」 原田一雄
  - 一 同「自然の声」 酒井勝軍
  - 一 同「改革の精神及覚悟」 萩原金太郎
  - 一 同「精神病雑話」 深田藤治
- の諸氏順次に演了して同十時閉会、来会者五十名

これを見ると春浪は、文学会例会・明治二十六年十月九日には「三日月次郎吉」、明治二十七年五月十九日には「趙

子龍」を論じている。

この三日月次郎吉と趙子龍のうち、三日月次郎吉は村上浪六（慶応元・一八六五―昭和一九・一九四四）の中編小説『三日月』で、「報知叢話」（明治二十四年四月五日―六月二十八日）——「郵便報知新聞」の日曜付録版で、浪六は校正係としてここに勤めていた——にはじめて浪六の名を用いて書いたものが、これであった。後、春陽堂から刊行（明治二十四年七月）される。当時の郵便報知新聞の編集長は森田思軒で、『三日月』はもともと同氏の勧めで書かれた関係もあって、思軒はこれに「三日月序」を書いている。これは発表と同時に非常な世評を呼び、無名の青年浪六は、一躍文壇の寵児となった。浪六は後に朝日新聞社に移り、明治二十七年二月から四月にかけて「朝日新聞」に「後の三日月」を書く。

三日月次郎吉は、町奴の武俠物である。

この頃、浪六は主として町奴が巷に仁俠を競う主題の作品を次々に発表している。浪六の目的は男伊達の粹と仁俠を描くことではなく、一見娯樂的と見える読物の中に、一つの寓意としての教訓性と倫理性を托すことに意図があった。「国家も社会も周囲もない空想的な不健全な西洋の文学趣味」の当世風潮に対して、一個の武骨漢を創造し「隠然天下の人心を化し將に大に為すあらんとす」るものを秘めていた。浪六においてはじめてこうした大衆文学の自覚的主張がなされるのである。この承譜はやがて矢野龍溪（『浮城物語』）、森田思軒（ジュール・ヴェルヌ『大東号航海日記』等）につながる。<sup>111</sup>

趙子龍は、藤村がその小説『春』（九十）で青木駿一（モデルは北村透谷）の少年時代の愛読書「其頃、生「透谷」の最も好みたる小説は、楠公三代記、漢楚軍談、三国志等にして、日夜是等の小説を手離すこと能はざりし

程なりき」の『三国志』（実際は『三国志演義』のこと）の趙雲（子龍）のことである。

趙雲は『三国志』の中で大活躍する蜀の英雄で、主君を哀紹、公孫瓚ととりかえるが、最後は玄德の武将となる。身の丈八尺、容貌魁偉、その勇名を馳せ、七十を越えながらも自ら北伐の先鋒として従軍した「五虎将」の最後の一人となった人物である。

春浪が東北学院時代、その文学会で、この三日月次郎吉を語り、『三国志』の英雄趙子龍を論じていたことは、後年の春浪を考える上で、注目してもよい。

特に浪六物を、春浪が愛読していたと言うことになれば、春浪のこの時代の頭髮焼討事件も乱闘事件も、この浪六物が下敷となった、青春の旺盛するエネルギーの任侠的擬似行為と見られなくもない。後年、春浪のペンネームを巖谷小波が春波としたのに対して、春浪を主張したそこにも浪六の春浪への影響が読みとれる。春浪はひそかに浪六を考えていたに違いない。

東北学院時代の春浪が、全く文学と無縁であったとは言えず、寧ろ文学というかたちではなく少年の愛読書として、武勇仁俠譚や、英雄譚があったと言える。

春浪に『蛮勇豪語』（大正三年三月、九十九書房、春浪の死はこの年の十一月十六日）という書物がある。

日本の危機を論じ、乃木希典を論じ、魔窟亡国論をぶち、野球を論じたもので、その最後（二四）に「僕等の野球時代」（四二五～四五〇頁）という春浪の自伝的な一章（明治四十一年九月稿）がある。上記横田順彌氏の春浪年譜もこの自伝的な記事によったものと思われる。この「僕等の野球時代」は、次のような内容を持っている。

- 一 初めて野球を見る
- 二 一同恐縮
- 三 間の抜けた捕手
- 四 乱暴狼藉
- 五 百鬼夜行的選手

- 六 空前絶後の大敗北      七 弟は猿奴だ      八 頭髪焼討事件      九 エックス倶楽部      一〇 僕の早大  
野球時代

一に「僕が初めて野球競技を見たのは、左様さ今から二十年程以前、田舎から出て来て、白金の明治学院へ入学した時だった」とある（『桜の実の熟する時』五、参照）。この明治学院で野球に「我を忘れて遊んでばかり居た為め、二度まで続けてお目出度く落第したので、忽ち親父の大目玉を喰ひ、仙台の東北学院と云ふ学校に投込まれ」（四）ることになる。「この学校は其当時親父が管轄して居たもので、大に僕を究命さする積りだったらうが、僕たるものなか／＼究命されては居らぬ。西洋人の教師と大喧嘩をしたり、犬殺しをして教場で煮て喰つたりして、夫れは／＼甚しい乱暴狼藉をやつたものだ」（同）と言ふ。

ここで春浪は野球会をつくる。

「然し学校には野球をやる程のグラウンドが無いので、僕等は毎日／＼放課後、半里ほど離れて居る宮城野原へ出張して練習をやる、弥次連中は御苦労にもゾロ／＼跟いて来る。何しろ少でも野球を知つて居るのは、其中の四五人で、大概は初めてバットやボールを見たと云ふ連中なので、所謂斯道の先輩たる僕や吉村の苦心は一通りでなかつた。第一グラウンドは凸凹で、バウンドなどは何処へ飛か分らぬ。且宮城野は兵隊の練兵場なので、試合最中一大隊突貫し来つて、追撤される事などは毎々ある」（同）。

この四七までは、春浪の東北学院時代の頃の野球狂振りである。

『東北文学』第二号（明治26・12）に、



東北学院ベースボール会 最も愉快なる運動の方法によりて、学生相互の強健なる身軀と活発なる氣風とを養生せんとの目的を以て、東北学院ベースボール会は、去る十月初旬に於て其旗幟を挙げたり、爾來毎週二回づ、市外宮城野に於て運動例会を催し来りしが、去る十一月十日当市尋常中学校ベースボール会の申込に応じ、宮城野に於て「ベースボールマッチ」を挙行せり、午後二時半に始まりセブンゲームス（七回）を演ず勝利終に尋常中学に帰したり、されど目今本会の会員は、三十余名に達し、旗色益々壮になりぬ、若し夫れ運動の發達は学事の進歩に伴ふものとせば、吾人は此会の将来愈々隆盛ならんことを希望するものなり。

『東北文学』第五号（明治27・6）には、

ベースボール会 学院内同会は愈盛大に趣き、会員の加入も数名あるよし。去る廿五日には第二高等中学大運動會に於て、各学校生徒競走の際第一の勝を占めたる菅小一氏及び五番に達したる京極教次郎氏等のため午後二時より慰勞會を兼て紅白組ベースボール、マッチを催し教員及び会員外の人々も賛同して相集まり、中々盛大なる會合なりき。

とある。春浪に始まる学内の野球熱の広がりが見えてくる。

春浪の頭髮焼打事件は、『蛮勇豪語』には次の様に描かれている。

僕は野球では始終凹まされる反比例に、乱暴狼藉では何時も人を凹まして居たが、或日大変な事をやらかして仕舞つた。

夫れは頭髮焼打事件とも云ふべきものだ。

僕のクラスに一人の長髪賊が居た。イヤ賊ではないが頗る人相のよろしくない男で年中頭髮を蓬々と延ばし、妙に澄ました面付きをして居るので癪に触つて堪らぬ。何時か一泡吹かして遣らうと、僕に劣らぬ乱暴者のK生に相談に及ぶと、ウン妙案がある／＼と、或日女の西洋人の会話の時間に、小さな茶碗に石油を入れて持込み、K生と二人で長髪賊の直ぐ背後に陣取り、気付かれぬやうに石油を少しづつ、少しづつ、指の先で其男の長髪に撥き掛け、よい加減に石油が染み渡つたと思ふ頃、無鉄砲千万にも不意に燐寸を摺つて、其頭へ放火したので、サア大椿事が出来た。頭髮はバリ／＼云つて燃上る、火勢は意外にも猛烈を極めたので、之には僕もK生も吃驚仰天、ヤア大変だ／＼と云ふので、平手でピシヤ／＼其男の頭を叩いて漸く叩き消したが、頭の火が消えたと今度は其男が火の様になつて怒り出す、女の西洋人は驚いて逃げ出す、結局僕は又もや親父から大目玉を喰ひ、早速放校の厳命を受けて北海道に追遣られた。

春浪の東北学院時代の頃の学内的、同時に国家的に最も刺激的な事件は郡司大尉の報効義会の壮挙であつた。これに春浪の上級生でもある神学生の高橋伝五郎が隊員として加わつて行く。

この頃の国家的事業と言へば郡司成忠大尉の千島探検（明治二十六年三月二十日、隅田川発）、福島安正中佐のシベリヤ単騎探検（明治二十六年六月二十九日、東京帰着）であつた。その翌年の正月にはこの探検双六が飛ぶように売れる。<sup>100</sup>そしてやがて日清戦争が始まる。そのナシヨナリズムの高揚期に高橋伝五郎は北千島で越冬中殉職する。

『東北学院七十年史』は第二編第三章に、明治二十年代のキリスト教への反動としての国家主義についてふれ、

その中で「第一節国家主義の勃興」に続き、独立した一項目として「第二節高橋伝五郎の千島開拓伝道」(一四一—一五一頁)を設けている。

明治二十六年五月一日、夜、学校の講堂では全校挙つての感激の送別会が催された。その席上、高橋伝五郎は槍絶の決心を満面に湛え、起つて壇上に自ら吟じ、白刃を抜いて一場の劍舞を演じた。

孤軍奮闘破困還 一百里程壘壁間

我劍既折我馬斃 秋風曝骨千島原

西郷隆盛の最後を詠じた「西道遷」の詩の結句「秋風埋骨故郷山」を即興に千島原につくりかえたのである。そしてその通りになった。伝五郎の殉職が軍艦磐城によつてもたらされるのは翌年七月六日であった。<sup>13)</sup>

春浪はこれに終始立会っている。後に父方義はひそかにアギナルド將軍のフィリピン独立運動の「布引丸事件」(明治三十二年七月)に加担する。既に押川方義の中にアジア独立運動の大アジア主義が形をとつて動き始めていた。春浪が『海底軍艦』『武俠の日本』『新造軍艦』『武俠軍艦』『新日本島』『東洋武俠団』の一連の武俠六部作(八年間)を書きはじめる最初の準備は、既にこの時代、春浪の身辺にでき上がっていた。春浪の冒険小説は、一般に見てジュール・ベルヌの空想科学小説や矢野龍溪などの政治小説の影響下に立つと見られているが、同時にそれと並行して村上浪六の任俠物や『三国志』があつたことも、見遁しえない重要なことであると言える。

### 三 島崎藤村

島崎藤村の仙台時代についてわたしは、既に昭和五十二年九月に『島崎藤村の仙台時代―「若菜集」をめぐる』(萬葉堂出版、A5三六〇頁)を出している。

その後の新しい資料と言え、今回の『東北学院百年史』執筆・編集の過程で手にした、当時の「東北学院理事會記録」と「東北学院普通科教員會記録」の中の藤村関係の記録である。<sup>44</sup>

が、ここではそれとは別に、『若菜集』詩を除いた藤村が学内の雑誌、即ち『東北文学』や、この時代新たに発行されていた労働會の『芙蓉峯』に載せたものを中心に、幾つかの事を述べたい。

一般に藤村が学内の雑誌に発表したものは、

#### 『東北文学』

第十九号 欧洲古代の山水画を論ず……………島崎春樹訳

第二十三号 欧洲古代の山水画を論ず 下……………島崎春樹訳

第二十四号 告別の辞……………島崎春樹

#### 『芙蓉峯』

第九号 芙蓉峯を読みみて……………島崎春樹

で、学内の文学會とのかかわりは、

東北学院文学會・第三十五回例會 学芸の愛慕(講演) 明治二十九年十一月十四日(土)

東北学院文学会・会長に選ばれる 明治三十年四月十五日（木）である。

『島崎藤村事典』（伊東一夫編、明治書院、新訂初版発行・昭和五十七年四月）も筑摩書房版『藤村全集』第六卷（昭和四十二年十一月）・初期作品集——無署名篇二十三篇を含む——も、学内誌からのものは、明確に署名のある「芙蓉峯を読みみて」「欧洲古代の山水画を論ず」「告別の辞」の右三篇だけが公認され、あるいは収録されている。

これは当然のことである。

藤村が『文学界』明治二十九年十二月三十日発行に、後の『若菜集』詩篇となる「うすごほり」（おえふ・おきぬ・おさよ・おくめ・おつた・おきく）——『若菜集』では総題なく、後の『藤村詩集』（明治三十七年九月）では「六人と処女」と改題——を書いた同じ時点で、無署名のもので『東北文学』第十九号・明治二十九年十二月三十日発行（印刷は『文学界』と同じ東京秀英舎）に、

うすごほり……………香川景樹判

という一文がある。

詩篇「うすごほり」（六人の処女）の中心をなすのは（少なくともその特異性から言えば）「おくめ」である。

この六人の処女を総題する「うすごほり」（薄氷）は、はじめから題名としては、無理な総題であった。

藤村の詩「うすごほり」（「六人の処女」と香川景樹の三十三番歌合「うすごほり」（文化十二年十二月）との関係については、既に笹淵友一氏が『文学界』とその時代』下（第七章、第二節「藤村の文学的教養」その二）

で指摘している。ただ、同氏はこの二者の関係を、詩が生れた季節・十二月とも関係があらうが、この景樹の『うす氷』に示唆されたのではないかとだけ指摘、それ以上は言及されていない。

〔うすごほり（薄氷） うすらひ 春の水 残る水 春先になって寒さがもどり、うすうすと氷の張るのをみる ことがある。薄く溶け残った氷にもいう。〕

薄氷やひとりたのしきかいつまり 石田波郷 （新版『俳句歳時記』春の部・角川書店編、昭和四十七年八月）

「うすごほり」は作品発表の十二月（実作は十二月でも早い時期か、もっと前）とは、題名から言っても関係ない。つまり内容との関係である。藤村の無署名文書（と言ってもそこに藤村の何らかの言及があるわけではなく、単なる転載紹介に過ぎないのであるが）「うすごほり」は一六番で打ち切られている。一番〜十一番は「千鳥」が歌題、十二番〜十六番は「雪」である。

一番 千鳥

左勝 常清

夕しほや沖のしらすに満ぬらん千鳥鳴たつ声そ聞ゆる

右 孝直

小夜更て北山おろしおろすらし鴨の河原に千鳥鳴たつ

ここにあるのは、鴨の河原と千鳥である。そこには糺の森の下鴨神社（社）——賀茂川と高野川の合流点——があ

る。「おくめ」の詩の主要語は、千鳥・河波・恋・社である。

この香川景樹判「うすごほり」は、藤村がそこ（『東北文学』）に無署名寄稿したか、誰かが無署名寄稿したのから、藤村が「うすごほり」（「六人の処女」）——少なくとも「おくめ」——詩篇をつくり上げたか、借名したか、いずれかになる。

『東北文学』第二十三号（明治三十年五月）には「董説 香川景樹」（一七—二三頁）がある。これも無署名稿で、

古へよりすみれといふは。今の世にいふけんけ花なり。けんけはれんけをなまれるにて。いとよく蓮に似たれは志かいふ。田舎わたりの人はやかてれんけといひ又仏の座なともいへり。これすなはちすみれ草にて昔も今も皆人の摘はやして見めつるもの也。これを年久しくあやまち来れるもとは董の文字になつみたるなり。

そして「さてけんけ花のまことのすみれなることは万葉集に」とあり、そこに万葉集卷八（一四二四）の山部赤人の、

春の野に董摘にとこし我ぞ野をなつかしみ一夜ねにける

以下三首をあげ、続いて「くたりては堀川院の御時の百首に董の題あり」とし十五首、源順集、金葉集、夫木集より計四首、千載集より三首総計二十五首、董の歌を取り上げ、実際は今の蓮華草（紫雲英）であることを説いている。そして「考ふるに志か差<sup>たが</sup>ひ初たるは新古今よりいとも後のことにそ侍らん」という。

藤村の『若菜集』には「秋風の歌」や「母を葬るの歌」（『文学界』明治二十九年十一月）、「うたゝね」四篇（「暗香」「蓮花舟」「葡萄の樹のかけ」「高樓」、『文学界』明治三十年三月）などに序歌がついている。その中の、さびしさはいつともわかぬ山里に

尾花みだれて秋かぜぞふく

（「秋風の歌」）

うき雲はありともわかぬ大空の

月のかげよりふるしぐれかな

（「母を葬るの歌」）

は、香川景樹の『桂園一枝』より（「仙台雑詩」）採ったと言う。

藤村の父正樹は平田篤胤門下で、桂園派の歌人でもあった。この香川景樹の「董説」の最後には、次のようなことが書かれている。

よしともおほし玉は、王岑ぬしへもつたへて見せ給へあなかしこ

うつき五日

景樹

桃沢のうしへ

本書は山村定常君よりかり弘化四とせの夏卯月朔日これをうつす



ここに何らかの藤村との結びつきがあるかも知れない。あるいは全く関係ないかも知れない。この「董説」掲載は五月、春のさかりである。藤村もまた「さわらび」（二月）、「うた、ね」（三月）、「白磁花瓶賦」（六月）と春の歌を書いた。<sup>10</sup>

『芙蓉峯』第七号・明治二十九年十月の「朋あり遠方より来る」で始まる「月夜の閑談」（一〜六頁、九月二十三日稿）は、『芙蓉峯』編集発行人であるかつての『女学雑誌』編集員の川合信水と藤村の、月夜の閑談であることは間違いない。この事も拙著『島崎藤村の仙台時代』に詳論（九〇〜一〇六頁）してあるので、ここではふれない。

「うすごほり」「董説」（いずれも香川景樹）、それにこの「月夜の閑談」（川合信水との対談、しかも九月）——それらは深く藤村とかわる作品と見てよい。

藤村の仙台時代で、もう一つ忘れてならない事は『早春』（新潮社、昭和十一年四月）・「仙台雑詩」の中に、「仙台の一年ほど本のよく読めた時もめずらしい。ちやうど東北学院の図書館はこの私を待ち受けてゐて呉れたやうなものであつた。わたしは誰も読み手のないやうな、塵埃<sup>ほこり</sup>だらけな希臘史やハインネの散文集などをそこから借り出して来て、その塵埃をはたき、切つてない紙を切つて、それらの書籍に読み耽つた。わたしはまた英訳本のゲエテの『ウイルヘルム・マイステル』などをその書庫の一隅に見つけた時は旧知に邂逅する思ひをした」とある東北学院図書館（ケルカー記念図書館）の事である。かつて泡鳴がこの図書館を利用し、勉強した事は前述

した。

藤村の東北学院時代の頃の作品に、ラスキンの『近代画家論』の中の一節を訳した「歐洲古代の山水画を論ず」（『東北文学』第十九号・明治二十九年十二月、第二十三号・明治三十年五月）やバーンズについてふれた「芙蓉峯を讀みて」（『芙蓉峯』）「告別の辞」（『東北文学』）があった。「告別の辞」のその部分は「芙蓉峯を讀みて」からのものである。

われこの地に来りて山河の間に遊ぶや、常に詩人バアンスのことを聯想し、曾て雑誌『芙蓉峯』のためにかの農夫の上を語りしことあり。いくたび同じことを繰り返すとも猶わが心に飽かざるはかの農夫なり。いでやこの地を辞するにあたりて再び彼の上を語らんか。それもおもしろし。

緑野の清声を発したるためしは鮮なからず。蘇格蘭土の一農夫、かれ学あり、才あり、常時情鬱し、感むすばれてとけず、相を采りて『エリスランド』に耕す。『エリスランド』は『ダムフライス』を去ること六里あまり、『ニス』河の西岸にありて、はるかに『ダルスウイントン』の深林を望む。西には『ダンスコア』の丘陵あり、北には『コルシンコン』の山々をも仰ぐべし。耕地凡そ百坪（原文 acres）、半ば小麦を作り、半ば烏麦を作れり。才あり情ある農夫がこゝにうつりしは西暦千七百八十八年の春にして、『ニス』の河畔に相をなげ、草を藉き、花を分け、情熱燃るが如くにして流水に唸ぜしは、バアンス詩集として世に伝はれり。

これは ENGLISH MEN OF LETTERS, EDITED BY JOHN MORLEY の Burns, BY J. C. Shairp

(P. 94 ~ 95) の第五章「エリスランドでの生活」LIFE AT ELLISLAND からのものである。藤村は後年の『桜の実の熟する時』(大正八年)の中でこの叢書への愛着と傾倒について語っている(四、参照)。そしてバーンズについては「麦島の中で熱い接吻をかはすといふ英詩の文句が岸本の眼前には開けてあつた。それは学校の図書館の本で英吉利の詩人バアンスの評伝中に引いてある一節であつた」(五)と言う。そして藤村はバーンズに親しみを覚えるようになる。

このケルカー記念図書館にはラスキンの「全集」も、「英国文人叢書」もあつた。

この現存の ENGLISH MEN OF LETTERS. 三十八巻は、各冊扉一頁にその全書名が印刷されているもので、今その通り書き写せば、次の様になる。

## ENGLISH MEN OF LETTERS

EDITED BY JOHN MORLEY

SAMUEL JOHNSON.....	By Leslie Stephen.
EDWARD GIBBON.....	By J. C. Morison.
SIR WALTER SCOTT.....	By R. H. Hutton.
PERCY BYSSHE SHELLEY.....	By J. A. Symonds.

DAVID HUME .....	By T. H. Huxley.
OLIVER GOLDSMITH .....	By William Black.
DANIEL DEFOE .....	By William Minto.
ROBERT BURNS .....	By J. C. Shairp.
EDMUND SPENSER .....	By R. W. Church.
WILLIAM MTHACKERAY .....	By Anthony Trollope.
EDMUND BURKE .....	By John Morley.
JOHN MILTON .....	By Mark Pattison.
NATHANIEL HAWTHORNE .....	By Henry James, Jr.
ROBERT SOUTHEY .....	By E. Dowden.
GEOFFREY CHAUCER .....	By A. W. Ward.
JOHN BUNYAN .....	By J. A. Froude.
WILLIAM COWPER .....	By Goldwin Smith.
ALEXANDER POPE .....	By Leslie Stephen.
LORD BYRON .....	By John Nichol.
JOHN LOCKE .....	By Thomas Fowler.
WILLIAM WORDSWORTH .....	By F. W. H. Myers.
JOHN DRYDEN .....	By G. Saintsbury.

WALTER SAVAGE LANDOR.....	By Sidney Colvin.
THOMAS DE QUINCEY .....	By David Masson.
CHARLES LAMB .....	By Alfred Ainger.
RICHARD BENTLEY .....	By R. C. Jebb.
CHARLES DICKENS.....	By A. W. Ward.
THOMAS GRAY.....	By E. W. Gosse.
JONATHAN SWIFT.....	By Leslie Stephen.
LAURENCE STERNE .....	By H. D. Traill.
THOMAS B.MACAULAY.....	By J. Cotter Morrison.
HENRY FIELDING .....	By Austin Dobson.
RICHARD BRINSLEY SHERIDAN .....	By Mrs. Oliphant.
JOSEPH ADDISON.....	By W. J. Courthope.
LORD BACON .....	By R. W. Church.
SAMUEL TAYLOR COLERIDGE .....	By H. D. Traill.
SIR PHILIP SIDNEY.....	By J. A. Symonds.
JOHN KEATS .....	By Sidney Colvin.

12mo, cloth, 75 cents per volume.

Other volumes in preparation.

モリーが主任編集をしたこの「英国文人叢書」は一八七八年からロンドンのマクミラン社で出されたものであるが、これはニューヨークのハーパー・エンド・ブラザーズ社のもので、明治学院現存のものもこれであるから、藤村が手にしたものは、マクミランではなく、このハーパーのものと考えられる。尚この記載順が発行順と思われるが、この段階では米人のホーソンはあっても、エマーソンはない。

ケルカー図書館が重要な意味を持つのは、藤村との関係だけではない。ここにある神学、聖書学、哲学、心理学、社会学、自然科学、文学などの広範な書籍は、明治二十年代のわが国の文学、思想（諸学問）の状況であつて、植村正久や内村鑑三などの著作集の背景なのである。<sup>16</sup>

最後に一言ふれたい。それは藤村の辞任の問題である。理事会で藤村の六月末での辞任願を受ける事に決まつたのは、明治三十年四月三十日であつた。この四月十五日には藤村は文学会長を受諾していた。藤村の六月一杯（学年の終わり）で辞任しようと決意したのは、意外に早い四月十五日から四月三十日の間である。

ちようどこの時期は藤村の『若菜集』編集終了時期（拙著前出書・第一部第八章「『若菜集』の成立」参照）に当る。藤村の文学者への最初の決断が、この時期であつたといえる。『藤村詩集』・「合本詩集初版の序」（明治三十七年夏）で藤村は「遂に、新しき詩歌の時は来りぬ。そはうつくしき曙のごとくなりき。あるものは古の予言者の如く叫び、あるものは西の詩人のごとくに呼ばり、いづれも明光と新声と空想とに酔へるがごとくなりき」と回想的に言ふ。<sup>17</sup>

泡鳴にしても、春浪にしても、藤村にしても、その仙台時代・東北学院時代の生活が、その後年の文学的生涯に大きく影響していることは疑いえない。

岩野泡鳴も、島崎藤村も、後に日本の著名な自然主義作家（文学者）に、押川春浪は日本SFの祖と呼ばれるようになる。が、それはここでの主題ではない。

## 注

(1) 藤村の来仙は明治二十九年九月八日（推定であるが、前後の事情からほぼ確実）、離仙は明治三十年七月一日。

(2) 泡鳴の「反抗的の答案」の初出は、『中学世界』明治四十三年三月号である。

(3) 『私立東北学院普通科教員会記録』巻号（明治二十三年九月～三十三年三月）の明治二十四年二月に、

二月十九日臨時会を開く

ホーイ氏議長の前席にあり 左の諸件を議決す

今野の退校願に付て議せし処自給にて充分勉強の時間なき故を以て之れを許す

二月廿日兎狩のため全校の願により之れを許す

岩野美衛矢野猪三郎の兩名試験の上第一年度に入学を許し且毎月三円宛貸与する事に決す

(4) 岩野泡鳴はこの二年級上の本科一年で布施淡、佐藤稠松、矢野猪三郎などが同級であった。当時本科四年三名、本科

三年三名、本科二年十二名、本科一年十五名、予科二年六名、予科一年二十二名、普通科計六十一名であった。

(5)藤村が明治学院普通学部本科一年に入学するのは、明治二十年九月、卒業するのは明治二十四年六月。泡鳴が同本科一年に入学するのは明治二十一年九月、従って一年以上級に藤村がいた。が、泡鳴は余り学校に出ず、一年後には退学、神田専修学校（現、専修大学、経済学・法律学）に移る。春浪は明治二十二年九月から二十四年六月まで同予科に在学、従って上級生に藤村がいた。序に泡鳴と藤村の教会のことを言えば、泡鳴は明治二十一年三月四日、宮川経輝の大阪教会（組合系）で受洗、上京、明治学院に入学後は、明治二十二年一月一日、藤村の高輪台町教会（日基系、木村熊二牧師）に移籍。藤村が同教会で受洗するのは、明治二十一年六月十七日であった。

(6)「宗教より文芸に」の中では、東北学院入学の経緯について「何れにしても、もつと勉強せねばならぬのであるが、学資金がないので、押川方義氏によつて、仙台の東北学院に這入つた。これが十九の歳であつた。これまでは尚常に聖書を読んで居つたが、此頃からはそれをやめて、エマーソンを聖書のかはりに読んだ」とあり、「反抗的の答案」とは全く違う調子で書かれている。泡鳴が入学後「毎月三円宛貸与」（これはスカラシップで給費）を受けていたことは注(3)にある通りである。この入学決定（二月十九日）に続く普通科教員会記録二月二十七日には、恐らく泡鳴自身から願ひ出たものと思われる、次のような議事録がある。

「岩野美術一年級の学課容易なるにより第二等級に編入せられ度旨の願ひ其果して然るや否の証跡明かならざるを以て学期の終りに於て試験の上取調ぶる迄尚原級に留まらしむ事に議決す」

同年末の十二月八日には「本科第一年生岩野、福喜多、小此木三名ハ若シ学（年）末試験優等ナレバ特ニ試験ヲ行フテ上級ニ組込ヲ可シト」ある。然しこの後、この件にふれる記録はなく、三名とも原級（もとの学級）のまま進級を続けている。



当時毎月定期試験があり泡鳴は、この十二月の学年末試験は英文法92、英語87、漢文100、作文97、日本史100、生理学96、数学70、英訳97、世界史98、平均93、序列1/12であった。

明治二十一年九月、明治学院本科一年入学の泡鳴が、東北学院入学を同じ本科一年から始めたことには、泡鳴の押川方義への傾倒（泡鳴は押川を「第二の父」と呼んでいる）があつたにしても、泡鳴自身に対しては、屈辱であつたに違いない。泡鳴の学院生活が異常なエピソードで満たされているそこには、泡鳴の性格にもよるが、この屈辱とそれへの反抗が、異常な行動と表現（文章表現）をとらせたものと思われる。泡鳴と福喜多はこの学年で一二を争っていた。

この泡鳴の教師就職説の「反抗的の答案」は、明治四十三年の泡鳴が、劇作家、詩人、評論家、作家（「耽溺」発表はその前年）として既に文学者・公認の時点に書かれたものであることを計算に入れれば、ひよつとして「教師」藤村への対抗意識からであつたかも知れない。

(7)拙著『島崎藤村の仙台時代―「若菜集」をめぐる』(昭和五十二年九月、萬葉堂出版)五一―五八頁参照。

(8)「エメルソン氏歴史論の一節」は、Works of Ralph Waldo Emerson, George Routledge & Sons, London 1901. p.3の3行目から89行分(一頁62行二列)、戸川秋骨訳の『エマーソン論文集』(明治四十四年二月、玄黄社)上巻では十一頁最後の行から十六頁七行目まで。忠実な訳であるが、時々、明らかに誤訳と思われる箇所がある。

(9)泡鳴の「悲劇魂迷月中刃」は藤村の劇詩「朱門のうれひ」(『文学界』第八号、明治二十六年八月)を意識してつくり上げられたもので『女学雑誌』第三九四号―四〇二号(但し三九九号除き)、明治二十七年八月二十五日から十月二十日まで阿波寺鳴門左衛門の名で発表された。四〇三号からは、泡鳴子の名で「樹だま集」(詩)が発表される。が、七月、『評論』第二十六号に仙台時代の詩作「樹だま集」を発表、そこではじめて、泡鳴の名を使用。

(10)「東北学院時報」には、泡鳴への思い出が幾つか載っている。第四号を除き、それは『東北学院七十年史』発行(昭

和三十四年七月）準備のための依頼原稿であった。左に挙げる。

四 号（大正5・4・1）「齋藤老教師を訪ふ」佐藤義郎

一六七号（昭和26・9・20）「岩野泡鳴の思い出」永島藤三 「むかしの思い出」栗原基

一七〇号（昭和27・9・15）「入学当時の思い出」畑井新喜司

一七七号（昭和30・7・5）「栗原基氏の思い出」（時報記者筆録）

単行本では、菊沢喜美子『思い出の父 栗原基』の中の栗原佑「栗原基と師友たち」、『東北学院七十年史』第二編・第二章・第四節の中の「岩野美衛（泡鳴）」一〇九―一一三頁参照。

尚『東北文学』第五号（明治27・6・15）には「曾て本会員たりし岩野美衛氏は、此回愈々身を梨園社会に投じ、専ら戯曲の著作に従事させらるゝ由」報じられている。

(11) 机上版『日本近代文学大事典』（昭和59・10、講談社）・村上浪六の項、「三日月」一四五二頁参照。

(12) 「（福島中佐  
郡司大尉）遠征壽候録」明治廿六年十二月十二日出版、学齢館（東京市神田区錦町一丁目五番地）。「尽忠報国」双六である。

(13) 高橋伝五郎については当時発行の『東北文学』第二号、第六号（明治27・10）——特にこの号は伝五郎の最後を詳細に報告し、『芙蓉峯』（十四号、明治三十年五月）には川合信水の「高橋伝五郎君伝」（山月編）があるが、これは春浪在仙後になる。郡司大尉一行が閑上港に到着したのは明治二十六年四月二十八日であった。

当時の地元紙「東北新聞」（明治26・4・28―5・6）は盛んにこれを報道している。

その中に、へ内田老鶴圃発行、依田百川序・入永廉三著『短艇遠征』石版密画挿入、全一冊、特別金二十錢郵税不申受が、説明文——その中に「若し之を繙かば童に一行の事を知るのみならず、社会の弊習、北海道の形勢、千島近海の洋

況、清、露、二国が我北を窺ふの内情、我国が將に講すべきの一大急務を知悉するを得べし——と共に広告されてい  
る。

(14) この詳細については、藤一也個人誌『島崎藤村』I号(一九八八・一二)「藤村拾遺・東北学院記録に見る(島崎藤村)」  
(二九―三五頁)参照。

「島崎春樹氏を本年九月一日より日本作文教授として月俸金貳拾円を以て招聘する事に決す」(明治二十九年九月七日  
理事会記録)。

「鳴崎春樹氏より当学期限り辞職致度との願書を呈出せり。之の願を請ける事に決し、後任者は院長をして之を撰ば  
しむる事に決す」(明治三十年四月三十日理事会記録)。

(15) 藤村は仙台に来る直前の八月号の『文学界』に「香川景樹の日記」を書いている。

尚『桜の実の塾する時』四には「その二階は特別な客でもあつた時にあげる位で、平素はあまりつかはない部屋にし  
てあつた。楠の木目の見える本箱の中には桂園派の歌書のめづらしくても読み手のないやうな写本が入れてある。長押  
の上には香川景樹からお婆さんの配偶であつた人に宛てたといふ歌人らしく達者な筆で書いた古い手紙が額にして掛け  
てある」と。

(16) この時代の藤村の作品である詩集『若菜集』、詩文集『一葉舟』の詩と散文は、ダンテ、シェイクスピア、バイロン、  
バーンズ、ルソー、ワーズワース、ゲーテ、ラスキンなどの西洋文学、李白、杜甫などの中国文学とのかかわりがある。  
ケルカー記念図書館はこの点でも、便利であつた。尚、植村正久等とのかかわりについては、『東北学院英学史年報』第  
12号・一九九一、拙稿「郡山源四郎」27頁参照。

(17) 藤村はその仙台時代、学内誌『東北文学』、『芙蓉峯』の外、毎月(明治三十年四月を除き)『文学界』に後の『若菜集』

詩篇を送り、雑誌では『世界之日本』、『文芸倶楽部』、『帝国文学』、それに「河北新報」などに寄稿していた。その点では、藤村の仙台時代は、日々、原稿に追われた生活であったとも言える。

## 明治の洋風煉瓦造校舎

R・ゼールとG・デ・ラランデ

坂田泉

一

欧米に対して、徳川幕府は鎖国を解いて安政六（一八五九）年に開港するが、明治維新後の日本は一挙に西洋文化に傾斜する。幕末時の各藩は主として兵器製造の工場建設に狂奔し、また開港場に外国人居留者の住宅などが建てられた。明治時代になると、新政府は富国強兵、殖産興業などの政策に従って、公共・文教施設を西洋風に強行することになる。

新首都の東京建設は急務であったろうが、その外国に対する窓口である新設港の横浜も急速に発展する。

またロシアに対しての国防上から北海道開拓は重視された。東北地方の幕末は勤皇派と佐幕派との激闘の最後の地であったが、全般的にはその開発に対して不利な扱いを受けたようであり、従って反体制の傾向が見られなくもない。仙台は近世からも東北地方の中心都市であったが、明治になっては国家的行政機能が集中して東京支店都市の性格を持つことになった。

幕末から明治初期にかけては、日本では未だ本格的な西洋建築の移植は適わず、日本人技術者の判断により木

造の擬洋風建築を考案した。とかく中央から疎まれた東北地方であるから、西洋建築の移植はなお抄らなかつた。キリスト教においては、ニコライによる東方のロシア正教（ハリストス正教）の布教は東北地方に重点が置かれ、宮城県の場合は全域にわたって明治十年代に聖堂が建設されている。これはあくまで擬洋風建築で正規の会堂形態ではなかつた（例、石巻ハリストス正教会聖堂）。

プロテスタントの日本布教は長崎と横浜で開始された。明治五年三月、横浜に日本基督公会が設立されているが、明治四年に來日したアメリカ婦人宣教師による横浜山手のミッション・ホームは擬洋風建築であつた。明治十年代になると都市から農村へと布教活動を展開し、自由民権運動にも活躍している。

## 一一

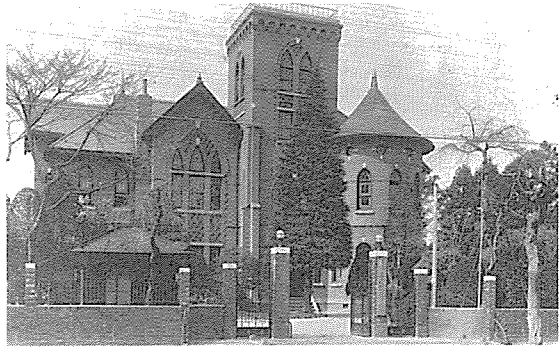
東北学院第一代院長押川方義は、明治初年横浜に在住して伝道活動を進め、十年代になると東北地方へと活動の範囲を広げた。さかのぼって、一八七三（明治六）年にアメリカのドイツ改革派教会外国伝道局は日本伝道を決議し、明治十二年にA・D・グリーング夫妻が來日し横浜に落着くが、同十八年にはW・E・ホーイ横濱着、押川は築地のドイツ改革派教会ミッション本部でグリーング、ホーイなどに会い、同年末に仙台を観察している。明治十九年になると、ホーイを仙台に派遣してキリスト教主義学校設立と伝道事業に着手するが、授業は粗末な日本家屋で開始され、明治二十年になって本願寺仙台別院跡を正式購入して、寺院の本堂を仙台教会に、僧房と長

屋を仙台神学校教室と寄宿舎に改造転用することになる。これは伝道初期に良く見られる現象である。このように仙台における活動が活発化されたのは、ドイツ改革派教会の在日宣教師団の活動本拠が仙台に決定したからであって、さらに促進するための施設の建設が急務とされ、それが神学校であり教会であった。このことについて東北学院百年史では、ドイツ改革派教会の最初の宣教師たちは著しい教育的関心を持ち、何らかの教育機関の設立を念願として、明治十七年七月十六日の『メツセンジャー』に「アメリカにおけると同様に、日本人にとっても外見が学校を選択する際に重要な要素となるからです」とあるように、中味を良くするには容器も重要であると強調している。これは現在においても同様であろう。

当時の仙台での教会や学校建築の状況は如何であつたらうか。

既に述べたようにハリストス正教では擬洋風の聖堂を宮城県全域に建設したのであるが、当時のキリスト教の他の教派はそれぞれ独自の会堂建築を建設するまでに至っていない。学校建築も本格的な校舎は明治二十年代に入ってからであって、まして明治初年の東北地方には煉瓦造建築はなかなか現れなかった。

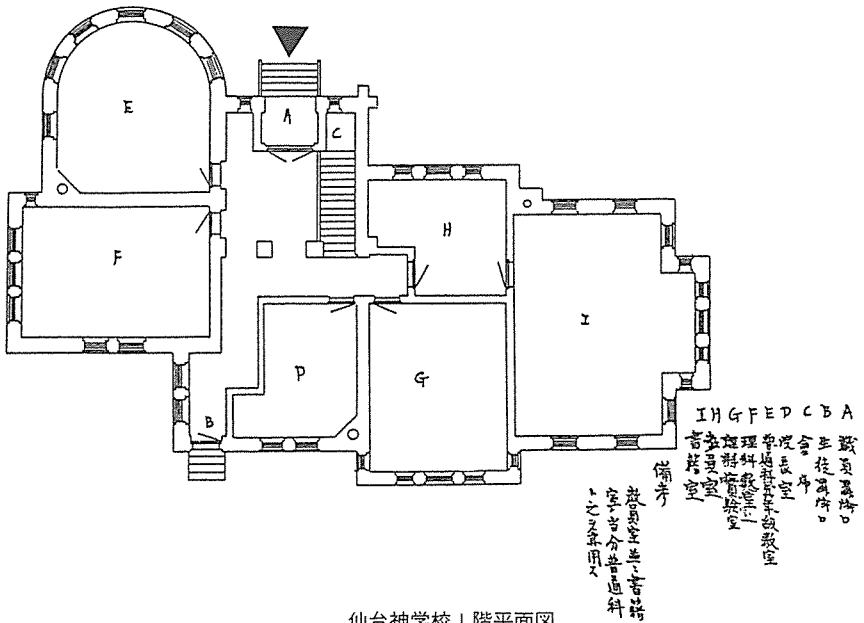
明治二十年に仙台神学校は開校する。そして明治二十三年になって神学校校舎を煉瓦造で新築する計画が決定し、秋に着工された。初期の洋風建築は木造に漆喰壁で、この壁体は明治十年代後半からは下見板張に転換するが、煉瓦造は少なかった。煉瓦造の西洋建築は日本人建築家の設計・監理の進展によって、明治二十年代の末頃から本格化するのであるから、地方都市の仙台において明治二十年代前半に煉瓦造の西洋建築の出現は、大いな話題となったであろうことは想像に難くない。明治になっての文明開花のシンボルとして登場した煉瓦造建築は、東京を例にとると明治初年で数棟、失敗はしたが一大煉瓦造による明治五、七年の銀座街など、明治十年代でも



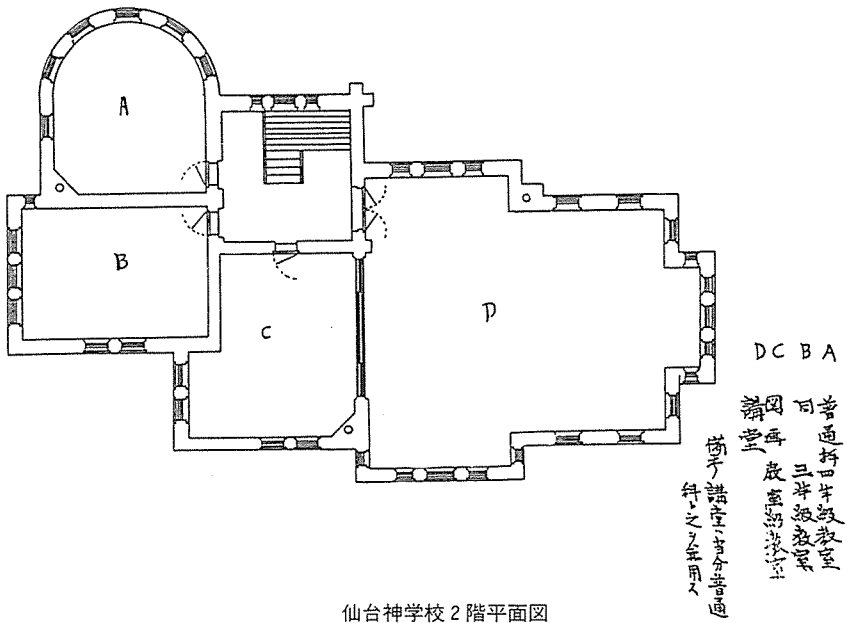
仙台神学校

二十例に過ぎない。東北地方では秋田県阿仁町古河鉱業の外人宿舎（異人館、国重要文化財）として明治十三年に煉瓦造が現れている。仙台の場合は明治十五年の仙台警察署が最古の煉瓦造で二階建の瓦葺、正面はバルコニー付き玄関、屋根上に時計塔を持つなど、これは擬洋風を煉瓦造で表現した明治建築に外ならない。このように煉瓦造の施工、経験を持つ明治中期の仙台であるから、本格的な煉瓦造の西洋建築の仙台神学校が難無く実現したのであろう。この神学校の建築に関する記録類は皆無であつて、一枚の写真と平面図が残されているに過ぎない。それによれば、木骨煉瓦造二階建、切妻造に寄棟造、円錐形屋根にスレート葺で、建築形態に変化の妙を持たせている。窓は尖頭アーチのゴシック風で、玄関上の方形の塔屋には城郭風のバットルメント（銃眼のある狭間壁）にロマネスクのロンバルト帯がみられる。そして、玄関入口アーチのキーストーン（楔石）に「仙台神学校」、左右の石にそれぞれ「明治二十四年1891」と刻まれていた。既に仙台では、外人宣教師の住宅が建てられているが、これが現在の東北学院構内に現存するデフォレスト館であつて、それは木造二階建、下見板張ペンキ塗、上下窓に屋根は寄棟造スレート葺、玄関の楕形のペディメント屋根に墓股風の鬼板をのせている。一般に擬洋風建築の平面は長方形が基本で凹凸は少なく、これは煉瓦造においても同様であるが、このデフォレスト館の平面にはかなりの凹凸がみられるのは注目に値する。さて煉瓦造の仙台神学校の場合は、その平面をみると玄関の位置と部屋の配置などはデフォレスト館のそれに近いところから、神学校

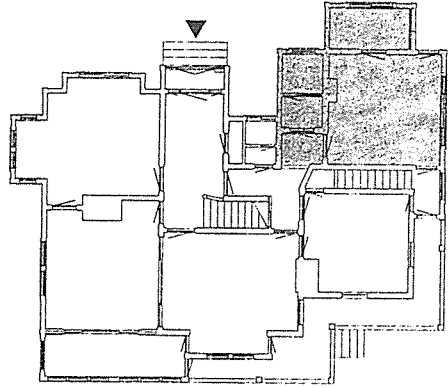




仙台神学校 1階平面図



仙台神学校 2階平面図



デフォレスト館平面図

は住宅平面の延長上にあるようである。両者とも玄関を入ると正面と左右に部屋を配置しているが、神学校の場合はさらに一階に書籍室（図書室）、そして二階は講堂のような大部屋が必要となり、それが付加されたのである。そして煉瓦造であるから壁は厚く外観上の意匠を学校らしくと、中央に四階の塔屋を置き（もとは鋭い四角錐体の屋根を架していたとのこと）窓はゴシック尖頭アーチを用いている。

この翌年、京都市同志社に煉瓦造の神学館が建てられた。それは明治二十五年六月着工、同二十六年竣工の煉瓦造二階建、塔屋四階、近世ドイツ様式、『同志社報告』明治二十五年度によれば

此建築ノ設計ハ東京明治学院ノらんです氏ノ紹介ニヨリ専ハラ独逸人ゼーる氏ノ工夫計画ニ因ルモノ

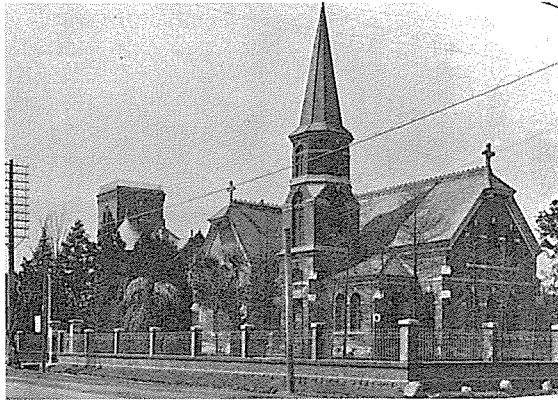
とあり、この設計者のリヒャルト・ゼール（Richard Seal）は、ドイツのエンデ・ベックマン事務所の筆頭技師であった。

日本政府は明治十九年に臨時建設局を設置して、帝国議会議院や中央官衙の集中計画を進めるが、この時の日本は政治・文化の諸問題に関してそれまでのイギリスからドイツに範を求めることになり、招聘されたのがベルリンのエンデ・ベックマン事務所であった。そしてゼールは御雇建築師として明治二十一年十月に来日したのである。

三一

仙台神学校の設計者は明らかでない。しかし当時は既にゼールは日本で設計活動に従事していて明治学院とも係わりを持っていた。同志社神学館（現クラーク記念館）はゼール設計の本格的な近世ドイツ様式の建築である。ゼールの所属していたエンデ・ベックマン事務所は、明治二十三年三月臨時建設局の廃止により外人の御雇建築技師は解雇された。しかしゼールのみは日本政府と雇用関係を継続し、同二十六年まで官庁集中計画に関与し、その後も東京を中心に建築設計に活躍している。この同志社神学館はその頃の作品であって、煉瓦造らしくかつちりとした長方形の平面であって、正面右方隅に八角形塔屋、中央は寄棟造、左方は切妻屋根の妻側を見せ、その後方東南隅に八角形小塔と、このように屋根に複雑な変化がみられるのは仙台神学校に通じているやに思われてならない。

ゼールは明治三十年から横浜山手に居を定めて建築設計事務所を自営し、オリエンタル・ホテル（明治三十一



仙台日本基督教会

年)、露清銀行(明治三十五年)、オリエンタル・パレス・ホテル(明治三十六年)などを設計しているが、この明治三十六年に日本を離れてドイツに帰国する。その間、仙台日本基督教会堂、明治学院礼拝堂を設計している。仙台では、明治二十六年頃から会堂建築の機運がたかまり募金活動が活発となり、明治三十四年十月二十三日『福音新報』では明治二十七年に三浦宗三郎牧師の新会堂建築についての説教に対して百円の寄付が佐伯長老より申込みがあり、その夜押川方義氏の会堂建築の相談会が開かれたとの記事がみられる。そして明治三十二年四月着工、明治三十四年十月二十日に献堂式が挙行された。新会堂の建築は、僅かの写真が残るのみで図面もないので、明治三十四年十二月廿日付けの『東北教会時報』の記事をそのまま記すことにする。

#### 仙台日本基督教会新会堂

(前略)約一万六千円の費を投じて落成せるものなるが、附図に見ゆるが如くレネーサンス式の建築にしてラテン十字架の形を成せり。間口九十尺。内部を先づ堅牢なる木材にて組立て次に煉瓦を積上げたものなりこれ防震の爲めなり、屋根は宮城県産の石盤石にて之を葺き壁柱も亦宮城県産の花崗石を以て之を冠せり。内部の木柱及び床板は杉にして晚餐台のまはりなる柵は旧会堂(即ち本願寺別院)東口の大門に用いし樺を以て之を作れり。(中略)窓は特に独逸国より購入せる会堂破璃にて作り床下には大なるクラウン式のストーヴあり火

気を以て堂内を暖むるの装置なり（日曜日朝の礼拝に用いんには土曜日の夕方より燃し置くを要す。）音響上の注意よりして天井には布を張りたるが、その結果として音響上遺憾なきが如し。（中略）建築技師は横浜のリチャード、ゼール氏にして工事監督の任に当られたるは藤枝氏なり。（後略）

これにより、この新会堂の設計者はゼールであつて、その建築の内容などもおぼろげながら知ることができ。現存する正面とやや背後の側面からの三枚の写真を参考にすると、煉瓦造平屋建、塔屋三階建、平面はラテン十字形で正面玄関の四角形の塔屋が正面に突出し、その上部は八角形の鐘塔で鋭い八角錐体の屋根、『時報』では様式はルネッサンスと記してあるがむしろゴシック式が強く、窓は円弧アーチ形に尖頭アーチを嵌め込んでいる。驚くべきことに暖房は床を暖めるパネル・ヒーティングで、そのため半日前からストーブを作動させている。そして多くの篤志家の寄附によつて備品が整えられた。

これより十年前に建てられた仙台神学校とこの新会堂との建築を比較してみると、幾つかの類似点が見出せる。先づ煉瓦造、中央の塔屋は方形で鋭い錐体の屋根（神学校では地震でとり外す）、窓は円弧アーチ内にゴシック尖頭アーチを嵌め込み、窓のキー・ストーン（楔石）や窓台に白い花崗岩、屋根はストレート葺などである。また新会堂の切妻部分の意匠にみられる取扱いは京都同志社神学校（現クラーク記念館）と同じである。

この屋根のストレート葺は明治後期からの一時期に広く全国に使われたのであつて、宮城県牡鹿・本吉・桃生郡から産出する粘板岩である。当時の洋風建築は主として瓦葺であつた。

このようにみると、この仙台日本基督教教会堂の設計者リヒャルト・ゼールは、さかのぼつて明治二十四年の

仙台神学校の設計においても、何らかの形でその建築意匠の上で関与したのではなからうか。或いはこのドイツ改革派教会は日本における本拠地を仙台に置いた在日宣教師団であるから、明治二十年代に日本政府の中央官衙集中計画に來日していたドイツのエンデ・ベックマン事務所に接触して係わりを持ったとしても不思議ではなからう。このことは、ゼールにかかわらずドイツ人の建築家に仙台神学校の設計について助言を求め、ドイツ風の建築形態で実現することになったのかも知れない。さらに仙台教会に続く東北学院普通科校舎の設計においてもドイツ人設計家デ・ラランデ (de LALANDE, George) に依頼することになったのであろう。デ・ラランデはウィーンやベルリンで建築活動に従事していたが、一九〇一 (明治三十四) 年から中国の上海や天津で、さらに明治三十六年に來日してゼールの事務所に入所して横浜に在住することになる。なおゼールは明治三十五年に露清銀行横浜支店、翌三十七年には明治学院礼拝堂を設計しているが、明治三十八年にドイツに帰国したらしい。従ってゼールの帰国後はデ・ラランデの活躍の場となった。

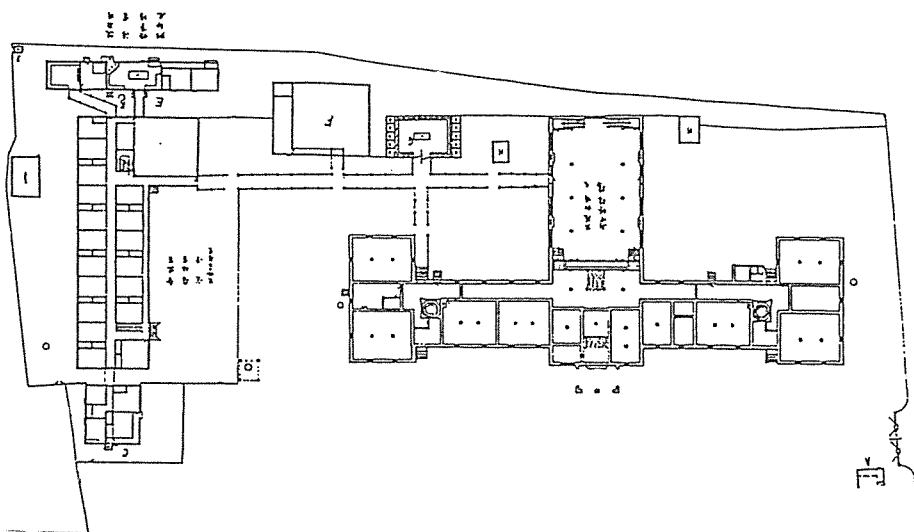
#### 四

デ・ラランデは横浜から東京に明治四十一年に建築の場を移すが、大正三年に東京で死亡する。その間、神戸異人館の風見鶏の館 (トーマス邸) を設計している。また当時の世紀末芸術のアール・ヌーボーはドイツ、オーストリアではユーゲント・シュティールであり、デ・ラランデはこのドイツの新風を横浜に送り込んだ建築家で

明治の洋風煉瓦造校舎



東北学院普通科校舎



普通科校舎平面図

もあつた。この新進気鋭の若い建築家によつて東北学院の普通科校舎が設計され、東二番丁に姿をあらわしたのである。

この新校舎はデ・ラランデの来日翌年の明治三十七年六月に着工し翌三十八年九月に完成する。日露戦争と同時期ではあつたが、建築費約三万ドルは当時としては巨費であり、その大半はドイツ改革派教会の負担であつたことからしても、この新校舎での教育に対しての期待が大きかつたことが理解される。この頃の仙台における主要な学校の官立第二高等中学校（旧制第二高等学校・明治二十二年）、宮城県立第一中学校（明治三十二年）などは木造二階建であつて、明治三十七年再建の宮城女学校が煉瓦造でデ・ラランデの設計のネオ・ルネッサンス式であるから、この普通科新校舎と同時に設計されたことになる。こうして仙台市内に規模、質、外観など群を抜く東北学院普通科校舎が新築されたのであつた。

東北学院普通科校舎はこのようにゼールに続くドイツ人建築家デ・ラランデの作品である。この校舎の平面は、片廊下式で左右対称に教室や諸室を配置している。バルコニーの玄関を入ると中央に二階へ通じる大階段があり、左右両端は切妻造りの妻側を正面にして両翼が羽ばたくような形態を持ち、平安時代の古建築である宇治平等院鳳凰堂に対応できる。

さて明治時代の学校校舎の平面は中廊下の両側に教室を配置する形式から始まつた。立面は中央にバルコニーかベランダの玄関、そして塔屋を設けるが、これは明治前期の擬洋風官庁舎と同形式で現存する役場や学校にみることができるところの字型の片廊下式の校舎が現われ、やがて片廊下式が主流となり、明治二十八年「学校建築図説明及設計大要」に、



中廊下ヲ設ケテ教室ヲ左右ニ配列スルコトアルヘカラス

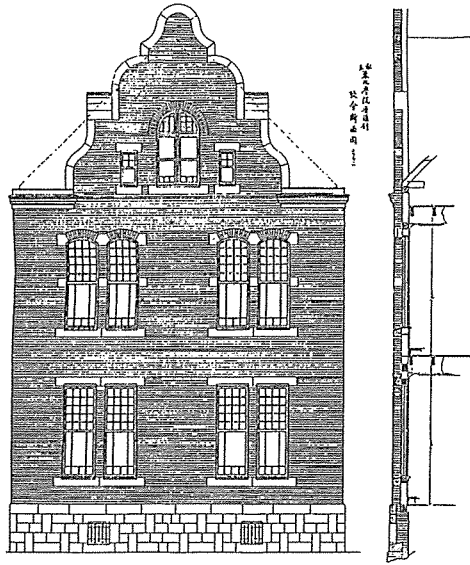
として中廊下式を否定するようになる。また煉瓦造校舎は明治二十三年の第五高等学校（熊本市・旧第五高等学校）明治二十四年の第四高等学校（金沢市・旧第四高等学校）明治二十一年～二十六年の海軍兵学校などにみられる。また木造校舎の形態は片廊下式の中央玄関がベランダ風ポーチで時計台塔屋、両端に切妻形の飾り破風を持つルネッサンス様式、現存遺構として明治三十四年の山形県師範学校本館にみられる。

この東北学院普通科校舎は木骨煉瓦造二階建、急勾配屋根にスレート葺でドーマー・ウィンドー（屋根窓）、中央と両端の突出部の切妻の大破風壁はドイツ・ルネッサンス様式に求められるようであり、その煉瓦壁の縁取りと窓廻りの要所とバルコニーの高欄などにみられる花崗岩による白と、煉瓦壁の赤との対照は、この校舎を際立って美しくしている。また、中央屋上の時計塔や全体構成は、明治三十年代の日本の学校建築に基礎を置いているようである。本校舎は屋根組や床は木造であるが、屋根はクイン・ポストの洋風小屋組で、キング・ポストと共に西洋建築のトラス小屋組として導入され、明治以降の日本の大規模建築の屋根構造に用いられた。特にクイン・ポストは学校や劇場のような大建築の小屋組に適している。

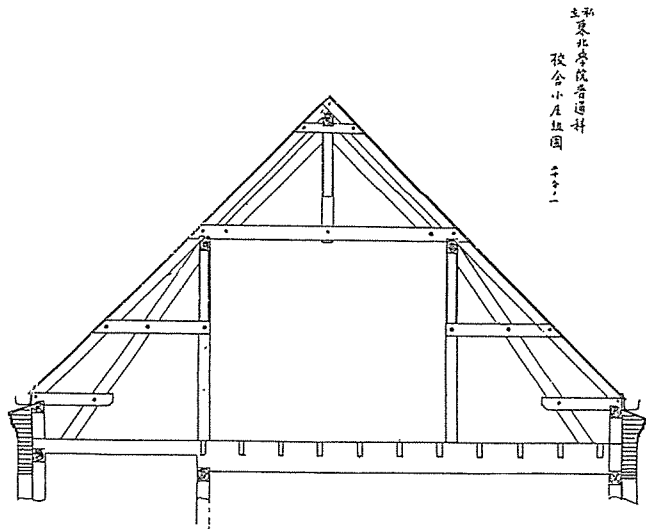
このようにみて来ると、明治の校舎の計画の段階での、日本におけるR・ゼールやG・デ・ラランデのドイツ人建築家による設計上の基本姿勢が問題となる。

前述したように明治十九年、明治政府は当時の諸外国との間の不平等条約改正と国会開設を目前にして臨時建

五



普通科校舎壁図



普通科校舎クイン・ポスト図

私立東北学院普通科  
校舎小柱組図  
二五二

築局を設置し、官庁集中計画の立案をドイツのエンデ・ベックマン事務所に依頼した。それは当時の新興国ドイツに範を求めて国力の充実を計っていた日本であるから、建築もドイツに傾いていたのである。来日したドイツ人建築家はH・エンデ、W・ベックマンなど数名に上り、R・ゼールは現場監理に従事していた。しかし政治情勢の変化などからエンデ・ベックマン事務所との契約を明治二十三年八月に打ち切りを通告したので、ドイツ人技術者の多くは日本を去るが、R・ゼールは明治三十七年頃まで日本に残って横浜に民間の設計事務所を開設して設計活動を続行し、ドイツ風建築を建てて行き、ゼールの跡をデ・ラランデが引継ぐ。仙台に本拠を置いたのがドイツ改革派教会であったからこそ、明治二十年前半に招かれたドイツのエンデ・ベックマン事務所と係わるようになったのであろう。ゼールの建築の作風は、高い尖塔を得意として用いているのであって、仙台日本基督教會堂は良くその特徴を示しているし、明治三十六年の明治学院も同様である。さかのぼって明治二十四年の仙台神学校も、バットルメントのある中央方形の塔頂には地震で崩れる前に急勾配の四角錐体の屋根がのつていたとすることであるから、ゼールの影がちらつくのである。日本は明治も半ば過ぎる頃から国粹化に傾斜するが、デ・ラランデの東北学院普通科校舎を見ると、基本的には平面も立面も当時の日本で本格化した西洋建築事情を背景として彼等なりに見事にまとめ上げた傑作と言えよう。

しかし、建築は科学にみられる発明や発見と言うものではなく、他の芸術に見られる独創性もない。その時代の社会を背景にして、人間生活の容器として建設されるのであるから保守的模倣的な面も強い。ゼールの作品にしても当時のドイツの建築界を背景にし、またエンデ・ベックマン事務所が設計した建築の影響を受けているし、デ・ラランデの東北学院普通科校舎の場合も、鮮かな赤煉瓦や、スカイラインをこわすような破風端の白線も、

欧州では既に前時代に流行した建築に見られなくもない。

うつろい易い人の世と同じように、名作として人々の話題に上った明治の東北学院の煉瓦建築も、次々と姿を消して百年近くになる。また残された資料も極めて僅かであるから、それにより往時の勇姿を推察する以外に手立がない。まことに残念と言うほかなく、言葉もない。

## 第二部

大正・昭和

## 笹尾兼太郎のカント理解―書かれた「序論」と生きられた「本論」

石川 文 康

### はじめに

ドイツのポケットブックに通称「ロ・ロ・ロ・モノグラフィー」というシリーズがある。主立った思想家、哲学者、宗教家、文学者、歴史家、自然科学者等を堅実に紹介する意図で編まれたもので、ドイツでは専門家と初心者の両方によく普及している。その中にウーヴェ・シュルツ（Uwe Schultz）著の『カント』が含まれている<sup>(1)</sup>。筆者も学生時代から愛用している文献の一つである。この書の利用価値はコンパクトな内容もさることながら、巻末の文献目録にある。過去のカント研究史に残る重要な文献が分野別にリストアップされている。言い方を変えれば、この文献目録に載っていれば、それは研究史に残るカント文献と言ってほぼ間違いない。その実践哲学分野（倫理学、法哲学、歴史哲学、宗教哲学）、とりわけ宗教哲学の項目の中に載っているのが笹尾兼太郎の『カントの神概念<sup>(2)</sup>』（一九〇〇年）である。

内容には後で詳しく立ち入ることにするが（248ページ以降）、笹尾のこの書がどの程度研究史上の意味を持つかについてのおよその見当をつけるために、とりあえず外面的な確認だけでも施しておくのは無益でないであろう。

先のウーヴェ・シュルツの書に見られる文献目録はカント研究の文献を分野別、年代順に掲げているが、笹尾のすぐ前にはアルベルト・シュヴァイツァー（Albert Schweitzer）の有名な『カントの宗教哲学』<sup>(3)</sup>（一八九九年）が、また笹尾から三つ後には新カント派の一角を占めるブルーノ・バオホ（Bruno Bauch）の『ルターとカント』<sup>(4)</sup>（一九〇四年）が、さらに四つ飛んで比較宗教学、インド学の分野で多大な貢献を残したヘルムート・フォン・グラージェナツ（Hemuth von Glasenapp）の『カントと東洋の宗教』<sup>(5)</sup>（一九五四年）が挙げられている。要するに、笹尾の当該書はこれら歴史的人物の業績と肩を並べる業績だったということになる。

この書は一九八〇年にドイツのゲオルク・オルムス社から復刻された<sup>(6)</sup>。この出版社はクリスチャン・ヴォルフ全集、ランベルト全集等、地味ではあるが本来の意味での古典や、研究史的に「古典」として認められるようになった文献を出版することで、識者の間で知られている。その面からも、笹尾のこの書の学問的価値の高さが容易に推測される。

以下では、『カントの神概念』を基に笹尾のカント解釈を再構成し、その意味を析出してみたい。そのために、それに先立って、笹尾の生涯を概観しておきたい。彼の生涯はそのカント理解と一体であり、それに支えられていたと考えられるからである。そして、そのことを明らかにすることこそ、本稿の本来の狙いである。

## 一 笹尾籾太郎の生涯<sup>(7)</sup>

一、修業時代

笹尾兼太郎は明治四（一八七一）年二月二五日、下関の大きな酢家の長男として生まれた。三歳のとき、不幸にして母を失い、祖父母も七歳のときに相次いで死去した。兼太郎は、忠実な番頭に育てられたという。

父勝蔵は養子であった。西南戦争の混沌とした時代に西郷の勝利を信じて米穀相場に手を出して失敗し、養家の全財産を失い、その悲境の中、大阪に出てさまざまな辛酸をなめ、結局地上の富を捨て、天上の宝を求めて、主イエスの救いの道に入った。後に聖職者となり九州の柳川に十五年間在職し、教会活動を続けた。

兼太郎が山口の高等中学校で学んでいたころ、財政困難のため勉学の続行もままならぬ状態となった。そのため、父の勧めにより東京の明治学院本科に転校し、勤労しながら勉学を続けた。雨の日も雪の日も白金から築地まで重い牛乳瓶を下げての朝仕事は、ひとかたならぬ重労働であったという。しかし、堅忍不拔の精神を貫徹し、常に勤勉で首席を保ち続けたことにより、卒業時には学校より栄誉章を授与された。

引き続き渡来し、ニューヨーク州のオーボルン神学校に入学、そこで四年間学んだ。ここでも毎日チャペルの鐘突きの労働をしながら奨学金を受けて研究に励んだ。当時アメリカの友人たちが、彼の鐘突きの仕事を助けるために「ダラー・ウオッチ」という一ドルの置時計をプレゼントしてくれたが、その時計は彼の生涯を通じて長く愛用されたという。笹尾が現地アメリカでいかに同僚から愛されていたかを物語るもう一つのエピソードがある。娘笹尾菊枝の回想によれば、オーボルン時代の学友たちがこの貧しい日本人留学生のためにみんなで協力して保険をかけてくれていたのだが、それが太平洋戦争中に満期になり、戦後笹尾の妻ヤスー笹尾自身は既に昭和



十六年に昇天していたので―の住所を探して、当時三千ドルほどを送金してくれたという。そのお金は東京に住宅を建てるための資金として用いられた。

更に向学心に燃えた笹尾はアメリカからドイツに渡り、ベルリン、ハレ、ボンの各大学に学ぶことになる。そしてボン大学で時の代表的カント学者ベンノー・エルトマン（Benno Erdmann）の下で学位論文『カントの神概念』を完成し、哲学博士号（Dr. phil.）を取得した。同学位論文は一九〇〇年にエルトマンが編纂していた一連の『哲学および哲学史論文』（*Abhandlungen zur Philosophie und ihrer Geschichte*）というシリーズの第十三巻として刊行されるに及んだ。これがわれわれが冒頭で触れ、後で（248ページ以下）詳しく見てゆく笹尾のカント解釈の典拠となる文献である。

ドイツ留学中、シュネーダー博士と親交があり、同博士が日本の東北学院へ帰任するにあたり同行の誘いを受け、これに応える。以後笹尾はこの人物の無二の親友として彼を助けることになる。

## 二、仙台時代と「忠愛之友クラブ」

笹尾は帰国と共に、明治三十三年仙台の東北学院教授となり、若き生徒らの宗教教育に全身全霊をかけた。

その情熱は東北学院内に止まらず、当時キリスト教に理解を示す教師の少なかったと言われる旧制二高のキリスト教青年会、いわゆる「忠愛之友クラブ」にも注がれ、そこから多くの弟子たちが育っていった。実に笹尾の

このクラブとの深い関わりこそ、仙台時代の彼の注目される活動の一つにはかならない。「忠愛之友クラブ」とは旧制二高創立間もないころ、キリスト教に思いを寄せる有志によって結成された青年会である。メンバーの一人、齋藤勇は次のように述べている。

「これは風変わりな名であるが明治二十（一八八七）年第二高等学校創立の翌年十二名の生徒が集まって計画を立て、一八九一年にいたり、神にも人にも忠愛の心をささげる志をもってつくった団体である。キリスト教に對する迫害を避ける一種のカムフラージュであったように見えるが、キリスト教徒は不忠不孝のやからであると、いう世評に反抗してつけた名称である<sup>(8)</sup>」。

因にこのクラブの出身者としては、吉野作造、内ヶ崎三郎、栗原基、小松治、滝浦文弥、金井章次、小林賢蔵、中野庄七、松本係一、星野鉄男、住谷悦治らの名が挙げられる。

先にも触れたように、当時二高には「忠愛之友クラブ」に関心を寄せる教師がいなかった中で、笹尾の存在は掛け替えのないものであった。その人柄を慕って多くの学生が彼の門を叩いた。彼の学生たちに対する世話は、クラブの例会での講話はもちろん、保証人役の引き受けから、洋書類の貴重な書物の貸与や自宅への食事の招待にいたるまで、公私にわたっていた。

講話に関して言えば、彼は小柄を割りには声が大きく雄弁の術をわきまえていて、聞く者に大きな感銘を与えたというのが複数の回想録の一致している点である。元同志社大学総長、住谷悦治によれば<sup>(9)</sup>、笹尾はクラブの講話で特に「ヨハネ伝」と「ローマ書」をよく引用し、ルターの話を好んでした。そしてルターの宗教改革の意義を強調することに因んで、ルター訳の聖書の迫力を解き、その熱弁はそのままルターの脈打つ生命を感じさせた

という。学生たちにドイツ語の習得をとりわけ熱心に勧めていたのも、ひとえにルター訳聖書の持つ迫力に触れさせたかったからに外ならない。

仙台時代の笹尾の家庭環境に若干目を向けてみれば、糸太郎は明治三十五年妻ヤスと結婚。ヤスはそれまで宮城学院を終了して東北学院院长、シュネーダーの夫人と共に伝道の仕事に携わっていた。柳川に居た糸太郎の父、勝蔵は再婚して、その間に五男二女を設けていたが、明治三十九年に父の死去に伴い、笹尾はこれらの異母兄弟と義母あわせて八人を柳川から引き取った。一家はにわかには大家族となり、家計も困難を極めた。ときに糸太郎三五歳、ヤス二八歳であった。そのうち二人の間にも四男二女が生まれ、さらにヤスの弟たち二人も兄を頼って来たので、笹尾家はいつも十六、十七人の大家族を成し、まれに見る一大共同体の様相を呈し、家計も一層逼迫したが、夫婦あい協力してよくこの苦境を乗り越え、子供と弟妹を医師、実業家、音楽家等に成長させるにいたった。

### 三、晩年<sup>00</sup>

昭和二年三月、笹尾は、東北学院を辞任し、東京の母校明治学院に迎えられる。一家は明治学院構内の洋館に住んだ。その間、笹尾はオーボレン神学校の招聘を受けてラッセル・レクチュアを行うために渡米した。

昭和九年、笹尾は、明治学院を退き、横浜公立女学校に校長顧問として迎えられ、同十一年校長となる。

校長職としての笹尾の業績で特筆されるものの一つは、共立女学校の経済的独立の実現である。当時、共立女学校はミッション・ボードより経済的援助を仰いでいたが、笹尾は日本人が日本人を教育するのに外国に経済的に依存するのは恥ずべきことであるという信念から、生徒の定員増加によって経済的独立を敢行するにいたった。その後、日米関係の悪化に伴い、文部省より、外国と経済関係にある学校はこれを断つべしという指示が下りるや、経営に苦しむ学校が続出する中で、既にいち早く経済的独立を確立していた共立は難を逃れた。これは笹尾の英断によるものである。

昭和十五年の夏、笹尾は御殿場の夏季学校に出掛けて発病、約五ヶ月間の自宅療養の後、翌十六年一月二九日昇天。重体となった後も、我が身を神に任せ、妻ヤスへの感謝を告げ、子供達のヤスへの真心を信じる、静かで立派な最期を遂げたという。二月一日、共立校葬をもっていとも厳肅な葬儀が執り行われた。

笹尾の生涯は以上のように教師として、キリスト教徒として、また夫として父親としてまことに淡々としていく。ある意味では、外面的にはそれに尽きるとも言える。しかし本稿の趣旨はカント学者としての笹尾を描出することにある。右のような笹尾の生涯とそのカント解釈がある種の内面的関係にあるとしたら、それはどのような点においてであろうか。以下では彼の『カントの神概念』を頼りに、そのことを跡づけてみたい。

## 二 笹尾のカント解釈

### 一、概要

「笹尾のカント理解」というタイトルで論ずる場合の扱ひ所は、『カントの神概念』ただ一つである。しかも同書は都合七十一ページのそれほど大部にわたるものではない。しかし内容は簡にして要を得ている。一言で言えば、この書は実体の相互作用と因果性問題という哲学史の古典的大問題をテーマ化している。

本文は大まかに第一章と第二章に分かれ、いずれも詳しいタイトルを持たない。ただ、第一章の途中から「カントにいたるまでの因果問題史の略述」(S. 4)、「合理論期」(S. 11)、「経験論期」(S. 14)という三つの小見出しを持つ叙述が見られる。序文のようなものも設けられていないが、第一章の始めに著者の問題設定と見通しが述べられており、それが序文の代わりを務めていると言えるであろう。

それによれば、古代ギリシャ哲学において既に、神が哲学の中心的位置を占めていたが、それが世界の創造主の役割を担うようになったのは、ユダヤ教・キリスト教的世界の出現と共にである(S. 11)。カントもピエティズムを介してその伝統に立っているとされる(S. 2)。哲学的に言えば、世界の創造とか万物の創造は、結局は万物の究極エレメントの創造という問題レベルで捉えられるが、そのようなエレメントは実体と呼ばれる。近世においてはデカルト以来、実体の創造主は神であり、したがって実体の相互作用を可能にしているのも神であると

いう世界観が展開されることになるが、カントにもそれが妥当し、要するに彼にとっても「神は一切の実体の相互作用の原理である」(S.3)とされる。

カントの神概念が中心テーマではあるが、著者はこのように近世哲学の根本問題を見定め(S.4-11)、またカント哲学のいわゆる前批判期の発展史を地道に踏破している(S.11-28)のがこの書の特徴である。近世の哲学者によってそれぞれ解決の仕方は異なるが、カントの先駆者ライプニッツも独特の仕方で実体の相互作用の可能根拠を神に帰していた。したがって著者は、ライプニッツ・ヴォルフの影響下にあるカントの初期の立場を尊重し、この立場がカントの批判哲学成立後も一貫していると見る。この一貫性を主張する点において著者のカント解釈は一貫している。

## 二、問題背景

先にも見たように、「神は一切の実体の相互作用の原理である」、というのが笹尾のカント解釈の繰り返し帰帰する中心テーゼでありかつ結論でもある。笹尾自身は問題史をゲーリンクスから歴史的に跡づけることによって(S.4ff.)、カントにおけるこのテーゼの妥当性を論証しようとしているが、近世全体におけるこの問題背景は周知のようにデカルトに溯る。したがって、笹尾のテーゼをより良く理解するために、また何よりも「実体の相互作用」とか、「因果問題」といった哲学のおよび哲学史的問題設定とは何かを了解しておくために、ここで一連

の問題背景を再構成しておく必要があるであろう。

デカルトの有名な命題、「われ思うゆえにわれあり」は、自我の原理の確立として、近世哲学の出発点とされている。この命題にはしかし、もう一つの重要な任が負わされていた。それは、一言で言えば精神と物体との互いに還元不可能な峻別である。「思う」ことのみによって存立できるのが精神であるとすれば、それは「思う」ことをしない存在者、すなわち物体に対して独立しており、同様に「思う」ことをしない存在者である物体もその存立のために、「思う」存在者である精神に依存しない。ここに精神と物体という二つの互いに還元不可能な存在者が成立する。それらは実体と名づけられた。実体とはデカルトによれば、「それ自身によって存在しうるもの」を言う。このように二つの実体を前提する世界解釈を二元論という。

ところが、ここから一つの難問が生じてくる。すなわち、このように精神と物体を二つの実体として前提すると、それらの間の相互作用、換言すれば互いの因果的影響は説明できなくなるのである。なぜなら、相互作用なり因果的影響なりは二つの項のいずれかが作用しもう一方がその作用を受けることによって成り立つが、二つの実体間レベルでは、それらの独立自存性ゆえに、一方が他方の作用を受けるということは原理的に考えられないからである。ところが、実際には両実体間にはまぎれもなく因果的相互作用が成立している（と少なくともそう見える）事実がある。卑近な例で言えば、右手を上げようと思つて―これは精神という実体内で起こっている―実際に右手を上げる―これは身体（＝物体）というもう一つの実体内でおこっている―こと等、思うことと身体的行為の対応がよく自然に起こっている。デカルト自身はこのような事実を自明と考えていたが、精神と物体を二つの独立した実体として前提するかぎり、そのような些細で自然な現象を理論的に説明することは困難であつ

た。

笹尾はこの次の段階から論を開始する。すなわち、ゲーリンクス(Arnold Geinckx)とマールプランシユ(Nicolas Malebranche)はデカルトの合理主義を徹底化して、実体の定義からして精神と物体(=身体)の間の相互作用をまったく否定する。これは実情に反する理論と受け取られるかもしれないが、わかりやすく言えば、相互作用があるかのように見えるだけであり、実際には精神内で意志作用や表象作用が起こるあらゆる機会に神がそれに対応させて物体や身体を動かしている、とするものである。なぜなら、神は精神と物体という有限実体を創造した無限実体だからである。この理論は世界のあらゆる機会に神が原因となっていることから、「機会原因論」(Okkasionalismus)と呼ばれる。いずれにせよ、笹尾のカント解釈の問題背景を見定める上で重要なのは、ここで既に神を実体の相互作用の可能根拠とする体系の一例が現れているということである。

次に二元論の克服を試みたのはスピノザ(Benedictus de Spinoza)である。彼によれば、唯一の実体しか存在せず、他はその属性にすぎない。その唯一実体こそ神であり、これまで実体と称されていた精神も物体も唯一実体の無限に存在する属性のうちわれわれの知りうる二つとして位置付けられる。この場合も精神と物体は直接相互作用しているのではなく、唯一実体においていわば並行関係にある。これは「汎神論的一元論」と呼ばれる。この問題に独特の、しかも徹底した理論で臨んだのはライプニッツ(Gottfried Wilhelm Leibniz)である。笹尾自身はライプニッツによる解決を「単に機会原因論の延長」(S. 6)と見ているが、事態はそう単純ではない。ライプニッツは実体概念の徹底化から着手する。真に実体の名に値するためには広がりを持ってはならない。なぜなら、少しでも広がりを持つことは、その分割の可能性を許すから、実体としての単純性に抵触するからで



ある。ところで、広がりとはデカルト以来物体的実体の属性であった。とすると、物体は実体としては廃棄されなければならない。残るは精神のみである。これは非分割で無限小の点と考えられ、「単子」||「モノド」と呼ばれた。実体は一種類化されると同時に、その数は無限化された。要するに、世界は様々なランクに位置する無限に多くの無限小のモノドから成るのである。このようなライブニッツの実体論を「単子論」(=モノドロギー)という。

勿論、各モノドは真の実体であるから、互いに依存せず完全な自発性を持っており、受容性を持たない。有名な「モノドには窓がない」、とはその意味である。自発性は具体的には「力」として発現する。その力の典型がいわゆる「世界の表出」(representatio mundi)である。各モノドはそれぞれ己の表出力によって世界を己の内から外へいわば投影しているのである。その代表例が人間の精神、すなわち自我であり、自我は実体としてひたすら己の自発性に基づいて、己の世界を表出する。

ところで、ここから再びデカルト以来の伝統的問題、すなわち実体間の相互作用の問題がより深刻な形で浮上してくる。すなわち、機会原因論の場合は異なった実体同士の相互作用のために説明が要求されたのに対して、単子論の場合は、実体を一種類に還元したために、同種類のすべての実体間の相互作用に説明が必要になるのである。いま挙げた単子の代表例である自我を例にわかりやすくいえば、自我と自我のコミュニケーションの可能性にも説明が要求されることになる。そのためにライブニッツが唱えたのは、有名な「予定調和論」である。それは、あらゆる単子が永久に調和の関係にあるように神が創造の際に予め定めた、とするものである。機会原因論との決定的な違いは、機会原因論があらゆる場面に絶えず神を煩わし、神の威厳を損なうのに対して、予定調

和論は一回限りの創造という神に最も相応しい業を神に帰するという点である。この場合も勿論、各実体は直接には相互作用しているのではなく、文字どおり調和の関係にある。

いずれにせよ、今見てきた哲学史的問題背景に共通して言えることは、どの学説も実体間の関係の原理を最終的に神に求めているということである。そして重要なのは、笹尾がこのような背景を踏まえてカントを、あるいはカントの神概念を捉えようとしているという点である。

### 三、笹尾のカント解釈の基本テーゼ

笹尾の論ずるテーマは以上のような伝統的問題背景を控えている。それを確認したうえで、次に彼のカント解釈の基本テーゼとその証明に立ち入ることにする。『カントの神概念』においては、カントの主著である『純粹理性批判』の、直接には神概念に結び付かない理論哲学に関する叙述も含まれており、すべてをここで網羅することはできないので、特に笹尾に固有のテーゼを挙げれば、次の二点に纏められるであろう。

(一)、伝統に則って、カントも実体の相互作用の可能根拠を神に求めていた、と一貫的に解釈する点。これが笹尾の主たるテーゼである。

(二)、人間の魂が実体であるという思想を断固としてカント哲学に読み取ろうとする点。これは笹尾の主テーゼではないが、後に見るように(261および263ページ)、彼の主テーゼと深く内通し、また主テーゼ同様彼

の生き方と不可分と思われることから、無視できないテーゼである。

#### 四、実体の相互作用の原理としての神

先ず、第一のテーゼから吟味してゆくことにする。

笹尾のテーゼの独自性を際立たせるためにここで予め確認しておく必要があるのは、周知のように、カント自身は『純粹理性批判』の「原則論」、経験の第三類推に見られるように、当該のテーマの下に、基本的に現象的実体の相互作用を理解しているということである。

「相互作用あるいは相互性の法則に従う同時的存在の原則。およそ一切の実体は、空間において同時に存在するものとして知覚されるかぎり、完全な相互作用をなしている」(B 256)。

これはカントによれば、たとえば力学の作用・反作用の法則となつて現れてゐる(vgl. IV 544, 551)。そして周知のように、カントにとっては現象界の、したがつて現象的実体の相互関係の原理はもはや神ではなくて、統覚という名の人間の主観性であり、そのことはカントの理論哲学体系の最も根本的な立場、すなわち「超越論的観念論」の内容でもある。勿論、笹尾もそのことを充分承知である。それにもかかわらず笹尾がカントの全体系の中に、神を実体の相互作用の原理とする思想を読み取るうとするのは、そもそも彼が問題の位相を現象界から観界に移しているからである。すなわち、彼がカント哲学の枠内で実体の相互作用をテーマ化する場合、基本

的に「叡知界」(vgl. S. 54 u.a.)における「物自体の相互作用」(S. 55)を念頭に置いているのである。「叡知界」とは、先程出てきた現象界と同義である。「感性界」の対概念であって、感性界が時間・空間軸の上に成り立つ世界であり、身体的存在者であるかぎりにおけるわれわれが属する世界であるのに対して、叡知界は理性的存在者であるかぎりにおけるわれわれが属する世界である。そのため笹尾は、世界をいわば精神化したライプニッツの影響が強いとされる初期のカントの世界観が批判期にも根強く堅持されている、という見方で自己のテーゼを裏付けようとする。笹尾も引用しているとおり、実際に『純粹理性批判』の中に彼のテーゼを裏付けるに十分と思われる件が見られる。

「相互作用に必要なのは次のことである。すなわち、多くの実体が実在するとき、一つの実体の中に何かあるものが存在するがゆえに、他の諸実体の中にも、それらが実在するということから理解されえないような何かあるものが存在しなければならない。それゆえにライプニッツは、悟性によってしか考えられないような世界の諸実体に相互作用を当てがおうとして、それらを媒介する神を必要としたのである。というのは、諸実体が現実に存在するというだけでは、それらの相互作用は理解できないと思われるからである」(B 293, vgl. S. 55)。

ここにはライプニッツの影響下にあるカントというより、むしろカントによって読み解かれたライプニッツ像がある。通説ではカントのライプニッツ批判とされているこの言明を、笹尾はまともに取る。しかしいずれにせよ言えることは、「悟性によってしか考えられない」「叡知界」における実体の相互作用があるとすれば、それは理論的には神という媒介者によってのみ可能であるということである。

しかしその際、笹尾がカントにおける実体の相互作用の問題を現象界から敢えて叡知界に転じる特別な理由が

あった。それを笹尾の言葉に即して概括すれば、「われわれの思弁的理性は…その創造主が神である叡知界を思惟する」(S. 64)。この段階では叡知界は単に無矛盾であるに止まるが、その現実性は実践理性によって道德界として認識される。これはすなわち問題レベルを認識論から道德論へと転じることを意味する。結論から言えば、笹尾は、感性的存在者としてではなく、理性的存在者としての、したがって道德的主体としての人間が属する叡知界におけるそのような主体同士の人倫的関係の可能根拠をテーマ化していたのである。

そのために、笹尾は「第三アンチノミー」における「自由」の概念(S. 54)、「道德意識」(S. 66)、「義務」の概念(S. 67)、「道德法則への尊敬の念」(ebd.)、「自律」(ebd.)、「定言命法」(ebd.)等「カントの一連の倫理学的基本概念を概括的に踏破したうえで、「叡知界は神を元首とする理性的存在者の王国である」(S. 68)という明快な表現に到達する。それを裏付けるために、笹尾は様々な論拠を、『レフレクシオン』と呼ばれるカントの遺稿から引用する。たとえば、

「叡知界はそれ固有の構成的原理、神と統制的原理、道德法則とを有する」(XVIII 88, vgl. S. 68)。  
 「叡知界は…世界一般の知性とその実践的根源的存在者としての神に対するわれわれの知性の実践的関係の対象として、真の概念であり確かな理念、すなわち神の国である」(XVII 516, vgl. S. 68)。

これら二つの典拠は笹尾の文脈の中にはびったりマッチし、また彼のテーゼを補強するに十分である。ところが注意しなければならないのは、これら二つの典拠の特に前者はバウムガルテンの『形而上学』における「神の知性」という項目にカントが加えたコメントであるということ、そして両者とも「アディケス(Erich Adickes)の年代決定によれば」遅くとも一七七〇年代後半、すなわち批判期以前のものだということである。

一般に笹尾は、叡知界という概念はそれ自体で必然的に神の概念を前提ないしは要求する、と考えているようである。

「実践理性によって叡知界の現実性が確定すれば、神の存在は……保証される」(S. 70)。

「実践理性の叡知界から、神の概念が必然的理念として生ずる」(ibid.)。

しかしこれらの言明は、笹尾が一連のテーマに関してカントの理論を「ライプニッツの单子論の思考過程に類比させて」(S. 69) 解釈しているからこそ可能であった、と言える。だが、識者にとっては明らかのように、少なくともカントの批判期においては、笹尾のテーゼを裏付ける典拠を見いだすことは困難であるだけでなく、その反対を裏付ける典拠は枚挙にいとまはない。なぜなら、カントの自由の概念は、勿論叡知界の概念を前提にするが、同時に実践理性の文字どおり「自律」として理性自身から生じてくるのであって、より高い存在者からではないからである。地により所を求めるのではなく、天にもより所を見いださないのである。カント倫理学本来の自律性思想の神髄であった。事実、神を叡知界の元首であるとする笹尾の結論的定式化に反して、カント自身は、自由の主体である理性的存在者を単に叡知界の成員と考えていたのではなく、同時に元首と見なしていたのである。「理性的存在者は目的の王国」「叡知界」において、立法的ではあるがその法則自体に従うという意味では、成員としてこの王国に属するが、他の存在者の意志に従属せずに立法的であるという意味では、元首としてその王国に属する」(IV 433)。

笹尾自身は引用していないが、彼のテーゼを弁明するに相応しいカントの言明が『レフレクシオン』の中に見いだされる。

「物の現象はわれわれの感性の所産である。神は物自体の創始者である」(XII 429)。

この引用の前半は明らかに超越論的觀念論の根本的立場、認識關係を言い表している。それに対して、後半は創造・被造の關係を簡潔に定式化していると言えよう。そして、神が物自体、すなわち叡知界の創造主であるなら、そのことから必然的に、神が叡知界における実体(＝叡知界の成員)間の相互作用の原理であることも帰結する。しかし、バウムガルテンの『形而上学』、「世界の創造」という項目に加えたカントのこのコメントも――再びアデイケスの年代決定によれば――一七七〇年前後の若き日に由来する。だが、用いられている用語法と内容はバウムガルテンとは独立の明らかにカント独自のものである。すなわち言えることは、若きカントにはたしかに笹尾の鋭い洞察が読み解いた形而上学的世界像が紛れもなく脈打っていたということである。

## 五、魂の実体性

次に、笹尾のもう一つのテーゼである魂の実体性の吟味に移ろう。

こちらの場合も笹尾はカントをライブニッツに引き付けて、あるいは同時代のヴォルフ学派の影響を重視して解釈している点では一貫している。すなわち端的に、「カントが魂を実体と考えていることには疑いの余地はない」(S. 50)と云っているのである。ところが、ここにも笹尾の思い切ったテーゼが現れている。なぜなら、言うところの魂の実体性に関する当時の証明を『純粹理性批判』の「誤謬推理論」において徹底的に批判したのがほかならな

いカントだったからである。

「……しかしこの命題は、わたしが客観として自存する存在者あるいは実体である、ということの意味するものではない。このような存在者を想定することはまったく行き過ぎである……」(B 407)。

勿論、そのことに関しても笹尾はやはり充分承知のうえであつたに違いない。それでは笹尾がなぜ敢えて自分のテーゼをカントの中に求めたのであろうか。

それに答えるためには、魂の実体性が証明された場合、それがどのような結果につながるかを確認しておく必要がある。結論から言えば、魂が実体であるとすれば、それは独立自存であり、かつ不生不滅ということになるから、そのことと同時に必然的に魂が永遠不滅、すなわち不死であることが論理的に導出されるのである。魂の不死性の証明は、先に見たカントの先駆者バウムガルテン<sup>80</sup>やマイヤー<sup>81</sup>(Georg Friedrich Meier)、彼の恩師クヌツェン<sup>82</sup>(Martin Knutzen)らによって、当時頻繁にかつ好んで敢行されていたが、分けても魂の実体性からそれを証明した代表者が、彼の同時代人にしてライバルでもあつたメンデルスゾーン(Moses Mendelssohn)である<sup>83</sup>。このことには笹尾は深く立ち入っているわけではない。しかし彼が、「カントが事実この超越論的自我に実体的性格を帰しているということは、伝統的靈魂論論議から来ている」(S. 49)と言うとき、彼はそれを強く意識していたということは充分に考えられる。事実、彼は魂の不死性に関するカントの命題を幾つか引用もしている(S. 50, Anm.)。むしろ、メンデルスゾーンがプラトンにあやかつたその主著のひとつ『フェードン』において、魂の実体性からその不死性の証明を典型的に試みたのに対して、『純粹理性批判』の第二版に、「魂の常住不変性に関するメンデルスゾーンの証明に対する論駁」という独立した項を設けて、これを徹底的に批判したの



はカントその人だったのである (B 413 ff.)。ということは、カントが魂の実体性に関して当時の合理的心理学と立場を同じくしていたと考えることには、やはり無理が伴うと言わざるをえないであろう。

たしかに笹尾はそれなりのはっきりした論拠を引き合いに出している。その一つは、ペーリッツ (Karl Heinrich Ludwig Politz) によって編纂されたカントの『形而上学講義』であり (vgl. S. 49f. Anm.)、もう一つは先にも出てきたカントの遺稿『レフレクシオン』である (ebd.)。『形而上学講義』に関して言えば、その心理学の箇所での魂の実体性およびそれに基づいた不死性の証明が述べられている。しかしその際、この講義がバウムガルテンの『形而上学』を教科書としたものであり、当然講義内容もこの教科書に制約されていたという事情を考慮する必要がある。つまり、『形而上学講義』の叙述がそのままカント自身の思想を反映しているとは言い難いのである。したがってこの書に関して、笹尾が次のように言えるのもそのはずである。

「カントが伝統的心理学のちつとも異ならない彼の初期の教理を堅持しているということは、容易に見いだせらる。」 (S. 49)。

魂の実体性に関して、カント自身は伝統的心理学に距離を置いていたその決定的証拠がある。それは、主著『純粹理性批判』および批判期倫理学全体における自由の概念の基礎づけ方が伝統的心理学のそれとは全く異なる、ということである。すなわち、魂が実体であることを前提した場合、実体の持つ絶対的自発性から機械的に魂の自由も導出されることになるが、カントはこのような自由概念の基礎づけを断念し、問題のレベルを心理学からより困難な宇宙論へと移すのである。これが有名な「第三アンチノミー」に見られるいわゆる「絶対的起始」としての自由である。

一方、笹尾が引き合いに出すもう一つの論拠、『レフレクシオン』からの幾つかのメモも主に『純粹理性批判』以前のもの、ないしはそう見受けられるものであり、『純粹理性批判』の著書によって克服されたカントの抜け殻に外ならない。このように見て来るかぎり、魂の実体性という思想をカントに求めようとする笹尾の解釈は、やはり勢い余っていると云わざるをえないであろう。

しかし、魂を実体として捉えれば、当然叡知界における相互作用の原理として神が要求されるという意味で、この第二テーゼは笹尾の第一テーゼにとって不可欠であったであろう。その意味では、彼の二つのテーゼは深く内通しあっているのである。

## 六、書かれた「序論」と生きられた「本論」

以上見てきたように、笹尾のカント解釈には若きカントの世界観を、円熟期のカントにも読み取ろうとする独自の情熱的テーゼに貫かれている。そのため、今日から見れば必ずしも問題なしとはいえない点をも含んでいた。しかしそれでもなお、彼のカント解釈が価値を持つとすれば、それはどのような意味においてであろうか。それを浮き彫りにしてこそ、笹尾のカント解釈は一世紀近くの年月を越えたメッセージとして今日のわれわれに届いてくるであろう。

笹尾はしばしばカントの「若くして得た形而上学的世界像」(S. 60)とか「形而上学的確信」(S. 61)云々を引

き合ひに出す。われわれはこれをそのまま笹尾自身に当てはめてみる事ができるであろう。なぜなら、そうするとすべてがよく理解できるからである。神が実体の相互作用の原理であるというのも笹尾自身が若くして得た根本確信であり、魂が実体であるというのも、魂の不死性を前提とする彼自身の前理論的確信であつたであろう。それは、こと当該テーマに関するかぎり、カント解釈として積極的に評価されてよい。なぜなら、笹尾も引用している以下のような若きカントの感動的にして意味深長な言明は真理であるであろうし、笹尾のカント解釈の根本姿勢にも当てはまるであらうからである。すなわち、

「神の存在を確信することは是非とも必要であるが、それを論証することはそれほど必要ではない」(II 163)。  
 だからこそカントは、『神の存在証明の唯一可能な証明根拠』と銘打った著書においてさえ、「証明を述べようと思つているのでなく」(II 67)、およそ何らかの証明が可能であつたとした場合の単なる「証明根拠だけ」(II 66)を提唱しようとしたのである。

誤解のないように付け加えておけば、ここから言えることは、少なくとも神に関する積極的言明を行おうとする場合、神に対する信仰が先行してはじめて意味を持つのであつて、その存在証明が先行してではない、ということである。笹尾はこの条件を満たしているのである。そうである証拠を挙げることができる。それは、当該書のそもそもの性格と彼のその後の生き方に求めることができる。

先ず、当該書の性格に関して言えば、それは日本語で厳密には『カントにおける神概念の規定への序論』と訳されるタイトルに現れている(因に、「序論」の原語はカントがその主著の一つに与えたタイトルを形作る“Prolegomena”という言葉であるのが印象的である)。つまり、笹尾はこの書を彼自身の神信仰に基づくその概念規定

の文字どおり「序論」として、したがっていわば後続すべき何かのための宣言として著したと言うことができるであろう。そして、序論であるからにはそれに後続すべき何かとは、当然「本論」のはずである。ここで人あつて、彼は当の「本論」を終に書き著さなかつた、という事実を挙げてそれもそれは何ら反証にはならない。なぜなら、その後の笹尾の全人生こそ彼によって生きられた「本論」そのものであつたと言えるからである。というのは、その後の彼の生き方は、実体の相互作用の可能根拠が神であるとするこの書の基本テーゼを、そして魂の不死性をひたすら身をもつて証明しようとしているかのようであるからである。その証拠がたとえば、先にも見た「忠愛之友クラブ」等における彼の人倫的關係であり(244ページ以下参照)、また一大共同体とも言えるまれに見る彼の大家族構成である(246ページ参照)。

そもそも、実体とはそれ以上分割できない究極単位を意味しており、その典型例はライブニッツにおけるように、各人間の自我であつた。「個人」を意味するラテン語の“*individuum*”——これは英語の“*individual*”の語源でもある——はもともと“*dividuum*”(分割されるもの)に否定的接頭辞“*in-*”がついて出来た言葉であり、文字どおりそれ以上分割されえない究極単位という意味であつて、モノダ的自我を表している。そして、各モノダは実体ゆえにそれ自体では互いに独立しており、他と結び付く可能性を内に含んでいなかった(252ページ以下参照)。とすると、自我実体説を前提にした場合、それぞれの自我同士のコミュニケーションの可能性は自我自身からは出てこないということになる。その意味で、実体間の相互作用の可能根拠を問題にすることは、多くの自我と自我、個人と個人の人倫關係の可能根拠を自我以外のものに求めることを意味する。笹尾が熱心に関わつたキリスト教關係のサークルや、彼が形成した大家族は、実は実体の相互作用を実証する人倫的世界にほかならな

った、と言えよう。そしてその可能根拠を神に求めるということは、各個人を究極において媒介し結び付ける存在者として神を信仰することを意味する。すなわち、笹尾の人生はあの「神を元首とする理性的存在者の王国」、「叡知界」（254ページ参照）をこの世に樹立しようとする生きられた「本論」だったのである。

叡知界の成員は自由の主体であった（257ページ参照）。その意味では、共立女学校の経済的独立（＝自由）の現も（247ページ以下参照）、彼によって書かれた「序論」の思想を実証する生きられた「本論」の一ページとして読むことができるであろう。総じて、彼の生涯はカントを導きの糸にして書かれた「序論」と、それに基づいて生きられた「本論」よりなる一つの一貫的かつ完結した「弁神論」そのものであったと言いうことができるであろう。

## おわりに

笹尾の生涯は、あたかもカントの生涯がそうであったように、淡々として目立たなかったという。しかし、彼の業績がカント研究史に一つの足跡を残すものであったことは事実であり、事実であるからにはわれわれはそれを誇りとしてよいであろうし、少なくとも識者はそれを記憶に止めるべきである。

笹尾が進める一連の作業の中で特筆すべき点を挙げれば、カントの恩師マルティン・クヌーツェンやカントの先駆者バウムガルテンを踏査し、カントの遺稿を独自の視点から駆使しているといふことである（vgl. S. 7ff., 12）。

このような着実で本格的な作業は日本人のカント研究としては今日でも珍しく、ましてや当時としては画期的な業績であったと言ふべきである。ここには、笹尾が師事したカント学者ベンノー・エルトマンの研究スタイルの影響が色濃く現れていると言つてよいであろう。恐らくこのような本格的で堅実な研究は、当時、我が国がヨーロッパ哲学を教科書的に導入するのが精一杯であった状況下においては、真の学問性という点から見ても、笹尾以外には波多野精一ぐらいいしかなし得なかつたであろう。

笹尾は今も黙して語らない。だが、彼の著した書物は、仮に彼の祖国の人々が読もうと読むまいと、カントを研究する世界中の人々の間で読まれ、今後も読まれ続けるであろう。彼の研究業績が後世にこのような形で残るとは、彼自身も予測していなかつたかもしれない。しかし、実際にそうなることによつて、彼は、彼の意図とは別に、自分が証明しようとした(本文で見た)第二のテーゼ、魂の実体性テーゼに関して、死してなお、そして「序論」からおよそ一世紀を経た今日においてなお、少なくともその半分を証明しているのである。すなわち、われわれが今日こうして彼の著書を扱い、彼のカント解釈を云々するということは、彼の永遠不死の魂をでないまでも、少なくとも彼の死後の魂とその健在性を証明しているのである。

注

※以下本文において、笹尾象太郎の『カントの神概念』からの引用の際には、Sという記号にページ数を付加する。

カントからの引用の際には、『純粹理性批判』第二版を慣例によってBと略記してページ数を付加する（本稿においては第一版からの引用は行われていない）。その他のカントの著作、遺稿はすべてアカデミー版から引用されており、ローマ数字で巻数が示され、その後にアラビア数字でページ数が与えられている。

- (1) Uwe Schultz, Kant, Rowohlt's Monographien, herausgegeben von Kurt Kusenberg, 101, 1965
- (2) Kunitarō Sasao, Prolegomena zur Bestimmung des Gottesbegriffes bei Kant, Abhandlungen zur Philosophie und ihrer Geschichte, herausgegeben von Benno Erdmann, Dreizehntes Heft, 1990, Neudruck 1980
- (3) Albert Schweitzer, Die Religionsphilosophie Kants von der Kritik der reinen Vernunft bis zur Religion innerhalb der Grenzen der bloßen Vernunft, 1899
- (4) Bruno Bauch, Luther und Kant, 1904
- (5) Helmuth von Glasenapp, Kant und die Religion des Ostens, 1954
- (6) この復刻の際、筆者（石川）は東北学院キリスト教研究所の依頼で同書の書評を纏めたことがある。同書のより簡潔な紹介を希望する読者には、この書評をお勧めする。『東北学院時報』、第三七六号（昭和五十六年七月十五日発行）、三ページ参照。

(7) 笹尾兼太郎の生涯に関する資料は乏しい。筆者が入手できた公刊物は、齋藤勇著『思い出の人々』（新教出版社）に見られる「笹尾兼太郎」（二五―三三ページ）、『恩寵と共に八十二年』―横浜共立学園八十二年史―明治四年―昭和二十六年、の三四―四十ページ等、ごくわずかであった。そのような状況下、笹尾菊枝氏より兼太郎の妻、笹尾ヤスの晩年の自筆ノート『わが生涯の記録』の中から、兼太郎に関する部分を提供して戴いた。以下の笹尾の生涯

に関する叙述は、専らその資料に基づいている。笹尾菊枝氏には、この場を借りて謹んで謝意を表する次第である。

(8) 斎藤勇、『思い出の人々』、二十七ページ。

(9) 住谷悦治、『忘れ得ぬ教師像―笹尾糸太郎を思う』、東北学院時報、第三二六号(昭和五十二年一月二十八日発行)、二ページ参照。

(10) 以下、笹尾の晩年の叙述にあたっては、注(7)に挙げた『恩寵と共に八十二年』、三十六―三十七ページを参考にした。

(11) Alexander Gottlieb Baumgarten, *Metaphysica*, Sectio III, 1757, in: *Kants Gesammelte Schriften*, XVII 149 ff.

(12) Vgl. Georg Friedrich Meier, *Beweis, daß die menschliche Seele ewig lebt*, 1751

(13) Vgl. Martin Knutzen, *Philosophische Abhandlung von immatriellen Natur der Seele*, 1744, §. XIII

(14) Vgl. Moses Mendelssohn, *Phädon*, in: *Moses Mendelssohn's gesammelte Schriften*, Zweiter Band, S. 65 – 206, 1843

(15) Vgl. Benno Erdmann, *Martin Knutzen und seine Zeit*, 笹尾のクヌーセン理解および前批判期のカント理解には随所にヘルダーマンの書の影響が見られる。Vgl. S. 7, 9ff. u. a.



# 山川丙三郎と『神曲』

下 館 和 巳

## 序

山川丙三郎は、東北学院の生んだ類い稀なるダンテ学者である。その生涯は、すべて、ダンテに捧げられたと言つてよい。『新生』と『神曲』はその結晶である。そして山川のダンテと文学への愛は、東北学院を築いてきた数多くの優れた教育者達に多大な影響を与えた。

山川には数多くの書簡と日記があることが確認されてはいるものの、山川が翻訳と注釈に心血を注ぎ、解説や随筆を殆んど残していないことが、これまでの山川研究、とりわけ、山川と『神曲』の関わりを考えるにあたって大きな障害となっている。

山川研究として纏まとまったものは少ない。一つは本間絢子の「山川丙三郎」(『学苑』一八一号、昭和三十年九月)であり、もう一つは、竹井一夫の「研究 山川丙三郎」(『東北学院英文史年報』九号・昭和六十三年三月)である。私の研究は、この二つの労作から出発している。

山川の年譜を考えるにあたって一番古い資料となるのは本間のものであるが、幾つかの点で、林竹二は、本間

と異なる説を述べている（『東北学院時報』一二八号・昭和四十三年十月）。林の次の一文は、本間の研究の意義と問題点を簡潔に示している。「先生の伝記としては：本間絢子氏のかかれた一文が唯一の纏まったものであろうが、これは数少なくなった古い時代の友人旧知をも歴訪して足まめに情報をあつめ、珍しい材料をも含んでいるのであるが集めた材料に対する批判的な吟味と処置を欠いているため単なるききがきのよせあつめに墮しているのは残念である」（岩波文庫版・『神曲』「天堂篇」跋 昭和三十三年八月）。

竹井の研究の特質は、本間と林の両方の説を慎重に検証し、詩人の感性と想像力をもって山川の文学性を探っていることにある。そして、研究としての新しさの主たるものは、東北学院に現存する資料に基づいた山川年譜の再確認と修正であり、山川と『神曲』の関わりの萌芽の探究であり、新井奥遼おくすゐと山川の思想の深い繋がりへの注目であり、そして又、今後の課題として山川・大賀往復書簡の所在の確認を提示したことである。

ここで私が与えられている課題は、竹井の研究に、その後明らかになつた事実を付加することによって、より真実に近い山川と『神曲』の関わりを模索することであり、又、山川を取り巻く人々の心の中に刻み込まれた多様な山川像を繋ぎ合わせて一つの顔にしていくことである。

## 一 北越学館から東北学院へ

山川丙三郎は、明治九（一八七六）年三月三日、新潟県北蒲原郡上館村に、山川経邦の三男として生まれ、幼

児期に叔父山川忠太の養子となった。本間は、その出生について、戸籍面では三月五日生まれとなっていることを指摘し、その理由として「田舎のことと遅れて届けられたのであろう」と推測し、養子については、「後継者になると兵役が免除されるためだったといわれている」と述べている。更に本間の資料に従えば、丙三郎の母の名はえきと言ひ、丙三郎は、兄二人姉二人の五人兄弟の末子であることがわかる。

竹井は、資料（『東北学院学籍簿』一号九十一帖）に基づいて、山川家が「士族」であったことを確認し、「新発田藩十萬石溝口誠之進の家臣」であったと考えている。

丙三郎が十六歳の折、東北学院に入学するまでの経歴は、林が山川夫人と大和久伊平（山川の米国留学中の友人）から伝聞して纏めた年譜の中には記されていないが、本間が、山川自筆の渡航願等によって調査した資料によれば、次のようになっていゝ。

明治十四年四月、新潟県北蒲原郡加治小学校に入学した。虚弱で神経質な子供で三年のとき弱いため一年休学したが、成績が良かったので一年飛び級し、結局同じになった。二十二年三月同郡新発田町商業学校卒業、九月新潟市、北越学館に入学した。：明治二十五年三月・同館解散により、退学、この頃キリスト教の洗礼を受け、同年九月東北学院予科三年に編入した。

竹井は、北越学館の廃校が、明治二十五年三月ではなく、明治二十四年十二月であるとして、山川在館期間を、二年三ヶ月に修正している。更に、山川の受洗については、『労働会・会員名簿』（一号・四十三帖）にある山川



東北学院時代の山川(後列左から二番目)

の名の上に記されている「信」つまり「信徒」の記録に注目し、山川が東北学院入学時には既に、同じく北越学館からの同窓生出村悌三郎、木村清松と共に、新潟組合教会牧師堀真一から受洗していたことをつきとめていいる。

林も本間も、山川の「明治二十五年九月、東北学院予科三年編入」については意見と同じくしている。竹井も『成績簿』(Grade Register)にあたり、山川が明治二十五(一八九二)年九月に入学し、明治三十(一八九七)年三月まで在籍したことを確認しているが、「予科三年」に編入については、東北学院の学制改革(明治二十六年)を根拠として、「本科一年」であったと異説を唱えている。

山川は、明治二十八年三月・普通科を卒業すると、同年四月文科専修科に入學した。山川が明治三十年三月に同科を卒業するまでの生活の一端は、本間の次の一文から垣間見ることができ

る。

当時東北学院の声望を聞いて集まって来た学生達は殆ど苦学生で労働会を組織していた。彼もこの労働会の一員で寮に入り、新聞や牛乳の配達から、油を売ったり、印刷を手伝ったりして学んだものである。彼は主に新聞配達で、朝登校前に東北新聞を配達し、午後二時頃到着する東京新聞を下校してから配達した。

山川が東北学院の演劇部に属していたことが、最近、山川の長女恵の記憶から探り当てることができた。山川は小柄で長髪であったので、よく白粉を顔に塗って女役をさせられたそうである。そこには学生生活を楽しんでいた山川の青春の顔がある。

## 二 藤村との触れ合い

本間によれば、山川は、卒業の年の六月、「母校の書籍係となったが二年程で退職、明治三十二年十月、憲兵司令部付陸軍通訳生に任せられ憲兵練習所助教となり四級俸を給せられた」とある。林は、書籍係としての経歴には触れず、「明治三十一年十一月憲兵練習所教授・明治三十二年陸軍通訳・憲兵司令部付」とだけ書いている。竹井は、山川の卒業直後の動向を確かめる資料を「三十年文科卒業」の寺田醇造の言葉に求めている。

君（山川）は文科を卒へてから一年ばかり図書係をつとめ、それから山口造酒先生（東北学院創立当時の語学教授で後神戸高等商業学校教授となる）の手引きで陸軍省へ出仕したが渡米して今は加州大学及太平洋神学校研究科在学中である。

山川の司令部勤務年度に関しては、林説と本間説に約一年の距りがあるが、そのいずれかを決定する資料はな

い。竹井が関心を持ったのは、この問題よりむしろ、寺田の言葉によつて確認を得られた「山川が一年ばかり図書係をつとめた」と言う事実であつたらう。それは、山川と『神曲』の繋がりの出発点を考える時に、一つの小さな手がかりになりうるからである。

竹井は、山川と『神曲』の出会いの可能性を島崎藤村と山川の触れ合いの中に見出だそうとする。藤村が東北学院の普通科の作文と英訳の教師として来仙したのは、明治二十九（一八九六）年九月で、山川が文科二年、二十歳の時である。藤村が山川に与えた情緒的影響を考えると、次の川合道雄の記録は雄弁である。

或る日、渡辺・山川二少年と松島に舟遊した藤村は何処となく舞い来つた一羽の蝶が疲れた羽を休めんとして止まるに術なく、遂に力なく波上に落ちた姿を見つめると、思わず顔を覆つてむせび泣いたという。渡辺氏がしみじみ父に語つたことだったが、その繊細な情感からやがて湧き出た清新の詩篇こそ、或は期せずして甦つた波間の蝶の化身であつたらうか（『山月子回顧ノート』基督心宗教団本部出版部・昭和四十年）。

藤村はダンテとの関わりをダンテ六百年祭を記念する「永遠の心を辿れ」と言う談話の中でこう語っている。

私達が初めてダンテを知つたのはもう三十年前、明治学院の学生時代で、当時古典の復活と外国文芸の移入とに青春の心は風のやうに烈しく動いてゐた。私は同期生の戸川秋骨君と、寄宿舎に小さな机を並べて初めて『神曲』の英訳を買つて来たものです。曲がりなりにもとにかく通読して実に立派なものだと嘆賞しましたが、然し本当に解つたか

どうか疑はしいものでした（『東京朝日新聞』大正十年九月十四日号）。

この藤村の言葉から伝わってくるのは、藤村の青春の送るような情熱と西洋古典文学の巨人とも言える『神曲』に初めて触れた時の厳肅な気持ちである。「三十年前」と言えば、藤村はまだ十八歳である。そして、『神曲』に出会った感動を心の隅に刻み込んだ藤村が東北学院に来るのは、それから五年後のことである。

山川は、冷露子と言うペンネームで『芙蓉峰』（十一号・明治三十年二月二十日）に、二篇の詩を書いている。その中の「島めぐり」に絶句として現れる「情の海の一葉舟」と言う山川の言葉と、藤村の詩の中でも重要な位置をしめる詩篇「一葉舟」とに、山川と藤村の「深い文学的交流・默契」を見いだす竹井は、こう語っている。

この松島舟遊で、藤村はダンテ『神曲』につき、あるいは「地獄篇」につき、あるいはヘフランチェスカとパオロ（その第五歌）につき……二人の文学青年に話さなかつただろうか。この山川のダンテの『神曲』の出発点と共に、ここで付け加えたい重要なことは、山川が既にすぐれた抒情篇を書きうる文学的素質を持っていたことである。これが後の山川の『神曲』翻訳の詩的形成に大きな力となったことは否定できない。

竹井によれば、藤村の読んだ英訳本はケアリーのものである。既に東北学院のケルカー記念図書館にあったケアリー（或いはケリー）訳『神曲』（一八一九年版）を、図書係であった山川が、藤村から影響を受けて、その存在を知り、本格的に読み始めはしないまでも、なにか霧の中に見える大きな存在として感じたとしても少しも不

思議ではない。

明治二十九年前後に、山川の目に触れた可能性のある日本語で書かれたダンテについての文章を探ることは、同時に、日本におけるダンテ認識の出発点を知ることでもある。

ボッカチオの『十日物語』が、明治十五年から明治十九年にかけて、大久保勘三郎と佐野尚によって訳されたのが、日本で最初のイタリア文学の紹介である。しかし、ダンテの最初の紹介者としては、森鷗外の名を挙げなければならぬ。鷗外は、明治二十五年十月から『しがらみ草紙』に『即興詩人』の訳を連載しているが、その中に「神曲・吾友なる貴公子」があるからである。鷗外の連載中に、青山学院の T. Funahashi が、ノートン著『ダンテの原の肖像に就て』の訳を「アオヤマ・レビュー」(明治二十六年十二月)に発表している。それに続くのが、上田敏の「ダンテ・アリギエリ」(『文学界』第三十四・明治二十八年十月)である。これは『詩聖ダンテ』(明治三十四年十二月 東京金港堂)に集成されるダンテ論考の第一篇である。

この明治二十八年頃から、上田敏と交流のあった平田秃木や戸川秋骨或いは高山樗牛等が論文や翻訳を次々と発表するようになる。秃木の「ベアトリーチェ(其一)ランドー作」(『文学界』明治二十八年十二月)、「地獄の巻の一節」(『うらわか草』明治二十九年五月)、「神曲余韻」(『文学界』明治三十五年五月)、秋骨の「以太利盛時の文学」(『うらわか草』明治二十九年五月)、「プロヴァンスの愛」(『文学界』明治三十年三月)、樗牛の「神曲の出づべき時」(『太陽』明治三十一年二月)である。しかし、山川にとって、最も身近なダンテ文献としては学内誌『東北文学』に明治二十八年十一月と十二月に連載された F.F. による「ダンテの女性」(F.F. Jordan "Christian Literature" からの訳出)があったことは、特筆すべきであろう。



### 三 渡米前

山川は明治三十七（一九〇四）年六月三日、憲兵司令部を退官しているが、林によれば、それは渡米のためである。山川が同年八月に渡米したことに間違いはないようであるが、東北学院を離れてから渡米するまでの六年近い東京での生活についての資料は殆んどない。

林の山川研究の重点が、留学中と帰国後に置かれていることは、「山川と『神曲』」の繋がりは渡米前の山川の中に見いだせない」と言う、林の説を端的に示している。そして、その林の考えは、本間の次の説に対する反論と言える。「在京中東北学院出身の人達で毎週読書会を開き、彼はこの時『神曲』を読んでいたのがもととなりこれより本格的な研究を始め、ダンテ研究を目的として三十七年六月渡米した」。

本間の説を裏付ける根拠はない。そして、この毎週の『神曲』読書会について、誰に聞いたかも記されていない。本間の研究に一貫して見られる危うさは、実証性の欠如に由来するが、逆にその事によって、最初の山川像には伝説めいた色合いが与えられていると言つてよい。

その最たるものは、山川のダンテ研究は恋愛に発しているという話である。本間は、こう書いている。

上京して間もなく彼に三つの恋愛が持ち上がった。或年上の一女性から愛され、帰朝後までもめたのを友人が解決したといひ、一方或る女子大学英语科の吉江某という女教師に愛されたが、彼女は後、慶応大学の学生と結婚したらしい。

更に、彼が上京して身を寄せた家庭の娘からも好意を寄せられた。娘の父も彼の人物を認め、むしろ将来結ばれることを喜んでいたが、他の恋愛問題等で実を結ばずに終わってしまった。そして運命の神は遂にこの恋を神格化し、傷心の彼が渡米したのはそれから間もなくのことであった。苦悩の中から彼が見出したものは、ダンテの神曲であり、その中に自分と同じものを発見したのである。事の真偽は別として性格温厚にして情け深く瘦身小柄の彼は、女性の誰彼から好かれ、若い頃はロマンスに富み常に女性問題が絶えなかつたとも言われている。

伝説のない伝記は香りのない花のようなものかもしれない。それにしても、三人の女性とほぼ同時期に何らかの形で恋愛関係を持っていたというのは特異なことである。しかも、山川は常に受け身であり、三人の女性のうち二人は年上である。この嘘のようなロマンスが、どのような経緯で本間に伝わったかは定かではないが、この話は山川の意外な一面を示唆していて興味深い。しかし、本間の筆は、山川の恋愛問題と『神曲』を結び付けるのにあまりに性急で粗雑である。

#### 四 米国留学

本間による、山川在京中の数々のエピソードは、山川の米国留学にダンテという明確な目的を与えているのに対し、林による山川の留学の動機は、むしろ曖昧である。そこで、本間と林の説を比較・対照しながらアメリカ

での山川の姿を追っていきたいと思う。

山川が、明治三十七（一九〇四）年八月にカリフォルニア大学に入学したということについては、林も本間も違いはないが、どの科に属したかに関しては、意見が分かれている。

本間は、当時のカリフォルニア大学が、本科生・専科生（本科生への予備）・特別科生（入学資格が緩く好きな科目が選択できるが学位はない）の三コースを設けていたとして、山川は「特別科」に入学したと考えている。しかし、林は、山川が「社会科学部」に入学したと主張し、その訳をこう記している。「入学前に、ギリシア語とラテン語の六単位を取っていなければ、皆社会科学部に入らざるを得なかったようであります。専攻はレターズ（英語と独逸語）となっております」。

ここでの林は舌足らずの印象を与える。社会科学部に属しながら専攻がレターズ、つまり文学というのは腑に落ちないが、竹井は、本間と林の説の食い違いに途惑いを見せながらこう推測している。「総合して見れば、まず社会科学部に入学、その後、文学専門の学部で、特別科生として英語・英文学を研究したと見るべきか」。

アメリカでの山川に関して、本間と林は、細部で違いを見せているが、共通点を探れば、三つ程あげることができる。一つは、山川が中世英語に見せた才能であり、二つ目は、米国高等教育資格試験の合格であり、最後は太平洋神学校での受講である。

本間によれば、山川が一九〇七年に提出した「中世英語の二重母音の変化」の論文審査教授は、山川の語学の才能に最初に注目したジョージ・ノイス（George Noyes）であるが、彼の山川論文への評価は次のように記

されている。

“There are a few mistakes in this paper, but as a whole it is wou<sup>l</sup>d<sup>d</sup>e<sup>s</sup> fully good work. The whole discussion shows a command of the subject that is really remarkable at this stage of progress.”

林もノイス（或いはノイス）の名に触れながら、山川の中世英語の力の卓越性を強調している。「言語学に興味を持ち、独仏等の現代語はもちろんギリシア・ラテン語、更にスラブ系の語学まで修められたようです。特に中世英語は非常に優秀であったので、ジョージ・ノイス教授は山川先生に大変惚れ込んで自分のセミナーに招待しました。そのクラスで五十人中・抜群で一番の成績を修めたということでした」。

留学中の山川は、ただ本当に勉強したいものだけを選んで自分のものとし、学位取得や卒業には関心を示さなかったようである。しかし、山川は、一九〇八年四月に受験したアメリカの高校教師になるための試験に一度で合格している。古代・中世英語を含んだ難関である。この事は、山川が日本人としては並外れた英語力を持っていたことを示している。

山川の直弟子の一人である林は誇らしげにこう語っている。「何でも日本人は argument と exposition はよいが、narrative の部門は弱くパスしなかったが、先生はこの部門も非常に優秀でパスされたのです。これはマスターの資格に通ずるものでした」。



ラマール教授邸にて庭掃除をする山川

最後の神学校について本間はこう書いている。「加州大学はバークレイの山際にあつて神学校と並んでいた。ここでダンテ講義を一、二年間聴講したらしかった」。林によれば、この「神学校」は太平洋神学校であり、「一、二年間」は、明治四十一年十月から同四十三年四月までとわかる。しかし、林はそこで山川が神学を学んだとは書いているものの、ダンテには言及していない。

ダンテ研究を目的として渡米したと捉える本間は、在米中の山川の姿を「ダンテ研究かバイオリンを弾くかのいずれか」と表現する。そして、英文学の講義やイタリア語を始めとする多様な外国語の学習については、「これを土台として、ダンテの研究を始めた」と解釈している。

林は、ダンテを前面に出している本間に抵抗を示すようにこう書いている。「大和久さんの話しによれば、山川先生は：ダンテにも興味を持っておられました。然しダンテではなくてヴェリギウスを一生の生涯の仕事にしようとしていたようです。イタリア語の勉強は学校では半年しかやらなかった。それがダンテをやるためのものではなくて、語法のためにやったものですが、ラテン語の力があつたので力がついたことと思います」。

山川はチャイルド（I.A.Child）教授からイタリア語を、ナッティング（H.C.Nutting）教授からラテン語を学んだようである。しかし、後年、山川が木村文雄に洩らした「そのとき勉強したイタリア語が役に立つとは思わなかった」（「山川先生の思い出」『展』二二号一九八一）という言葉は、林の説を裏付けるものである。

そして次の山川恵の記憶が伝えてくれるのは、山川の留学のもう一つの意外な動機と留学中の山川の潑刺とした生活振りである。「父は本当は音楽家バイオリニストになりたかったようです。それでアメリカに渡ったと言っていたことがありません。それからアメリカでケーキを作るのが上手くなったとも言っていました。フランス語教授の家にボーイとして住み込んで、とても可愛らしい子供達と遊んだりお掃除をしたりケーキを作ったりしたそうです。とても温かい家庭で、父が作ってあげたケーキの最初の一切れは、必ず父にくれたそうです」。本間の資料と併せて考えれば、この住み込みの時期は明治三十九（一九〇六）年から一年程であり、この教授はラマール（Lamare）である。

先に林説と本間説にある細部の違いと書いたが、その主たるものは、山川のカリフォルニア大学在籍期間と帰国年度である。林によれば、山川の大学在籍期間は、明治三十七（一九〇四）年八月から明治四十三（一九一〇）年四月までである。帰国については、説明に矛盾がある。印刷ミスでなければ、年譜に大正二（一九一三）年帰国としながら、こう語っている。「このようにして、米国七年間の生活を終わって帰国したのは一九一一年で明治四十四年になる訳です」。年譜の帰国年度一九一三年とに二年のズレがある。これは、林の単純なミスか、この事実に関する林の記憶の曖昧さの表われかはわからない。

本間は、山川の元に残っていたと思われる学生身分証明書に基づいて、在籍期間を明治三十九（一九〇六）年一月十六日から明治四十三（一九〇六）年一月十一日までと考え、「別様式の単位カード等（これらについての説明はない）を併せると明治三十七年の渡米から大正二年の帰朝まで十年近くも大学に在籍していた訳である」と書いている。

これまでの二人の資料から判断できることは、山川がどの学科かは断定できないが一九〇四年にカリフォルニア大学に入学し、転科を経て、或いは、不正規から正規の学生となって、一九〇九年から一〇年頃まで在籍したと言っていることである。と同時に不可解な部分が浮き彫りにされる。それは山川が大学を離れてから、帰国したと考えられている大正二（一九一三）年までの四年間の空白である。

竹井は、ある日付に触れて、「この明治四十五（一九一二）年と言えば、山川は既に加州大学を去り、バークレ一のJYMC（日本青年会）の英語教師をしていた頃である」と、本間の記録に基づいて記している。

東北学院大学の「山川文庫」に収められている四冊の本がある。ノートン訳『神曲』三巻（The Divine Comedy of Dante Alighieri, tr. by Charles Eliot Norton, Rev. ed. Boston, Houghton Mifflin, 1902.3v）とノートン訳『新生』（The New Life of Dante Alighieri, tr. by Charles Eliot Norton, Houghton Mifflin, 1909）がそうである。そのいずれにも鈴木（S. Suzuki）・江島（X. Ejima）両氏が山川に贈呈したと思われる日付が書き込まれている。ある日付とは、その「July 4th, 1912」のことである。

山川が、いつから本格的に『神曲』を読み、翻訳し始めたかは重要な問題であるが、竹井は、その問題への鍵を、この一九一二年七月四日に求めている。その訳は、林の次の証言に見出だすことができる。「先生は在米中ケリー訳でダンテを読まれたようですが、帰国にさいして鈴木重久さんからノートンの英訳を贈られた。このノートンをテキストとしてダンテを読みそのうちにダンテに対する興味を持たれ、一つダンテを翻訳してみようという考えを起こされたようです」。

カリフォルニア大学を離れてからの山川の活動を考える時に、紛れもない事実が、『神曲』「地獄篇」が大正三

(一九一四)年十一月に、警醒社から出版された、ということだけである。竹井は、山川の帰国が大正二(一九一三)年六月であつたことを、動かぬ事実として、翻訳開始から終りまでの経緯についてこう考える。

一年五ヶ月、これでは「地獄篇」全体の翻訳から出版社決定、組版、校正、出版と漕ぎつけるのは、後の山川の「浄火篇」(大正六・五)「天堂篇」(大正十一・二)の進行期間から見ても不可能で、山川の「地獄篇」翻訳は、その出版の四・五年前と見て(或いはほぼそれに近い期間と見て)山川の在米中バークレーの英語教師時代からと見るのが、やはり妥当と思われる。

竹井の推測は常識的である。しかし、竹井の突き止めた日付けと林の回想の一部を考え合わせた時、疑問が生じる。「帰国にさいして」と言う言葉を山川は、一年後の帰国を想定して言えたであろうか。「このノートンをテキストとしてダンテを読み、そのうちにダンテに対する興味を持たれ、一つダンテを翻訳してみようという考えを起されたようです」と言う言葉は、ノートンを媒介とした山川と『神曲』の接近の緩やかさを思わせるものではあるまいか。一年の間に、出版に耐えうる『神曲』の翻訳を始めたと考えるのは少し無理なのではあるまいか。私は、「大正二(一九一三)年帰国」の信憑性を疑わねばならないと考えた。疑っていい可能性を支えているのは、先に触れた林の不可解な「帰国したのは明治四十四年になる訳です」という発言である。

これまでの研究者達の目に触れなかつた資料として『東北学院新聞』(一九四八年十一月二十五日)がある。これは太平洋戦争終結直前の昭和十九年から二十三年まで発刊を中止している『東北学院時報』に代わって、四年



に互る学院史の空白の一つを埋める幻の新聞と言える。

その中に「神曲の翻訳について」と言う記事があり、筆者は故山川丙三郎となっている。その左には「カリフォルニア大学在学の頃」と記された一枚の写真が掲載されている。庭の緑に囲まれたベンチに、スーツを着て眼鏡をかけ髪の毛房々と黒い山川が少し前かがみに腰掛けている。左手は行儀よく右足の太腿の上に置かれ、右手は山川の隣に伏している一匹の猫の背中にある。優しく撫でているようである。猫の様子と山川の顔に浮かぶ微笑そして光の具合から暖かい日であったことが想像できる。

木村文雄は、その記事の後書きとして「山川先生を偲んで」という一文を残している。

この稿が何時書かれたか明確に知る由もないが恐らく神曲の翻訳が全部完了された直後（大正十一年頃）ではないかと思はれる。紙片に鉛筆で走り書きのこの貴重な資料が紛失のためこれだけしか見出だされなかったのはかへすがえすも残念なことである。『神曲の改訳が終わるまでは他に筆をとらない』と、洩らされた先生が、『神曲』『新生』の訳以外にダンテについて書かれたのは書翰を除いてはこれだけではあるまいか。

この文章が、誰に向かって何のために書かれたのかはわからない。そして、この文章が本当に山川によって書かれたものかどうかは、「紙片に鉛筆で走り書き」の原稿が見つかるまでは確認できない。しかし、仮にこれが山川その人の言葉だとすれば、山川と『神曲』の関わりの真実を知る極めて貴重な資料となる。

僕がケリーの英訳によって始めて『神曲』を読んでみたのはあまり久しい以前のことではない、またこれを読み終わった後の印象はさほど深いものではなかった。翻訳を企てた動機も詩人に対する深い景仰の念が主になったのではなく、また大いなる自信があったからといふものでもなかった。尤もウゴリーノ伯爵の悲惨なる物語などにはいひしれぬ刺激を受けたこともあるので在米の当時その一部を訳し友達に送ってやったこともあったが全体に於いてはまだなかなかこの大詩人に私淑するなどといふにはいたらなかったのである。帰国の間ぎはこの友達にノルトンの英訳を一部記念として贈ってくれた。

この山川の言葉は、これまで議論してきた幾つかの問題を解いてくれることになる。この文章が木村の言うように大正十一年頃に書かれたとすれば、「あまり久しい以前のことではない」と言う言葉から推測しても、山川がケリー訳で『神曲』を読み始めたのは留学中であつたろう。そして、山川が留学中出版に耐え得るような「地獄篇」の翻訳に着手していた可能性は、「その一部を訳して友達に送ってやったこともあった」程度の、極めて低いものである。

もう一つは帰国年度の問題である。山川は「帰国の間ぎは」と言っている。これは林の「帰国にさいして」に比べて、より差し迫った表現である。〈July 4th, 1912〉と総合して考えれば、山川は、定説の大正二年六月ではなくて、それよりも一年程早い、明治四十五年の夏に帰国していた可能性が高い。

## 五 新井奥邃との出会い

帰国後の山川について、本間はこう書いている。

帰朝した彼は小石川雑司ヶ谷金山の二軒長屋の八畳一間を家賃五円で借り、『神曲』翻訳に専念していた為、収入なく在米中の友人鈴木重久、田島堅吾、神原政雄等が後援会を作り、『浄火篇』が完成する迄毎月七ドル半（当時十五円）を送ったが長続きはしなかった。文字通り困窮著しく、甘藷とメリケン粉を混ぜたダンゴを食事とし、その時間も惜しんで翻訳に従事した。又、新井奥邃を中心に内ヶ崎三郎・平沼田次朗・田中正造・松本雲舟等と読書会をしていた。

山川丙三郎と『神曲』

この叙述には、幾つかの明らかな誤解がある。一つは、山川の翻訳の「後援会」が、帰国後に作られた印象を与えていることである。大正四（一九一五）年三月二十九日に、山川が鈴木重久に宛てた手紙がある。それは、「地獄篇」出版前後の心境を実によく物語っているが、その中で言及されている新潟の兄からの手紙は「後援会」について触れている。「就いて相考へ候に米国の御友人よりダンテ翻訳の後援会様のものを組織し、御被下候義は何程多大の同情有之次第にやと歡喜罷在申候」。山川の翻訳を一つの事業と考え積極的な協力を惜しまない兄の手紙に、山川は、「兄の満足が目の前にみえる様で誠に心強い」と感想を付している。この兄の一文から解るように、「後援会」ができたのは「地獄篇」出版後である。先に触れた本間の説明の中の、山川の「困窮の著しさ」は確

かで、それは『神曲』全訳まで変わることはなかったようである。そうした山川が全訳までに、どのような人達から援助を受けてきたかは、山川自らの言葉によって正確に把握することができる。

神曲翻訳着手の始めより「天堂篇」第一稿完成に至るまでの七年間、余の生活を助け余をして後顧の憂なく此業を継続することをえしめし人々には、「地獄篇」翻訳当時に於ける永嶋忠重氏（逗子）あり、「浄火篇」当時に於ける鈴木重久氏（当時在米、今仙台）及在米国知友諸氏あり、「浄火」「天堂」両篇に於ける榊原政雄氏（京都）あり。余はまた大阪の人新井栄吉氏の同情に対して感謝の意を表す（旧版天堂篇後記）。

本間のもう一つの誤解は「読書会」についてである。この頃出会った奥邃が山川の信仰と人生に深い影響を与えたことに間違いはないが、本間は、奥邃の存在とその奥邃の元に集まった者達が始めた「読書会」を混同している。帰国後ダンテの読書会が行われたと言うことは、林とそして山川自身の言葉から確かめることができる。本間は、帰国後の山川がただちに『神曲』翻訳に没頭したと語っているが、次の林の言葉は、山川の『神曲』に向かう模索を伝えつつ、本間の説を否定している。

先生は必ずしもダンテ研究をやるうという気持ちをかためて帰国されたものではありませんでしたが、帰って後の定職を求めずに自己の進むべき道をさぐりつつ生きた数年間にダンテに出会う経験をもたれたのです。そのきっかけとなったのは、友達と一緒に読書会を始め、そのテキストに神曲を選んだこの時期に先生は新井奥邃の門に入られ、その強い

影響を受けられたようです。

山川の次の文章は、林の話に具体性を通してふくらみを与えている。

国に帰ってからもしばらくは郷里にいたりまた近頃出版になった米国の小説などばかり読んでゐる神曲に親しむ時が極めて少なかったが此頃僕の一友が何かクラシックを読みたいという望を起し今一人の友達と僕と三人で相談の上ダントテを研究しやうといふことになり米国からノルトンの訳をとりよせて一週二回づ、研究をはじめた。此時分から僕ら神曲に対する興味はだんだん深くなつていった。

「読書会」は、山川と他の二人の友人で行われたようであるが、林は、そのメンバーとして、柳敬助・永島忠重・太田振策の名を挙げている。『新井奥遼先生関係者名簿』（昭和十九年内ヶ崎作三郎作成）は、この三人のいずれも奥遼と関わりを持つていたことを明らかにしているが、山川のいう二人にこだわつて三人と山川の関係を探つてみると、柳と永島の名が残る。前述したように、永島は「地獄篇」翻訳時における山川の支援者であつた。竹井は、永島夫人暎子が、宮城女学校（現宮城学院）出身であつたことから推測して、山川と奥遼のいわば仲介として永島を考えている。私は、柳敬助が、山川を奥遼に近付けた最初の人物と考える。

林は、山川の書齋の床わきの棚にいつもスケッチ版の風景画が飾られていたと言ふ。その絵は、印象派風の静穏な、その人柄を思わせる温かく味わい深い小品であつたらしいが、それは、洋画家柳敬助によるものである。

山川と柳の親交は、在学中からと林は語っている。

柳敬助の長男文次郎によれば、柳は、明治三十六（一九〇三）年美校を中退し渡米、欧州を回り明治四十二（一九〇九）年帰国している。在米中、彫刻家萩原碌山・高村光太郎と知り合い、その親交は終生続いたと言う。文次郎は、柳と奥遼の繋がりについてこう記している。「父は在米中守衛から、新井先生の名をたびたび聞いていたと思われる。いや二人の友好関係から推して、聞いていないのはむしろ不自然ともいえる。帰国したら共に先生を訪ねよう、と話し合っていたと考えても、決しておかしくはない」（『新井奥遼の人と回想<sup>2</sup>』、「父柳敬助と新井先生」一九八四年）。

山川が柳といつどこで出会ったかはわからないが、山川も柳から奥遼のことをよく耳にし、帰国したら会ってみたいと考えていたとしても不思議はない。山川が帰国した頃、奥遼は東京巢鴨の東福寺の後ろに建てられた謙和舎で聖書を実践する生活をしていた。

木下尚江から紹介されて奥遼を訪れた伊藤梯二は、謙和舎の風景をこう描いている。「太い質朴な黒焼の二本の棒は門をなして道に沿ふて丈ひくき松など植し寛潤な花畑を左方に、冬枯れの藤棚を透して硝子窓が見ゆる、閑寂した住居である。玄関前の萩花は淋しく咲いて、山茶花は霞のためうなだれていた」（『新人』十八巻五号）。

そこで奥遼を尊敬する者達が、毎月第一日曜日に教えを受けていた。奥遼は聖書を読んだり講じたりするようなことはなく、奥遼が「語録」を朗読し、その後食事を共にして、緩々休んで退散するというのが常であったらしい。

「隠者」とも「聖者」とも呼ばれた奥遼については、永島忠重や林竹二の研究があるが、その生き方は、弟子の一人であった岡通の言葉に集約されていると言える。「先生は一銭のためにも稼穡されることなく、名と誉れを求められることなく、徹底的に無欲・無財・謙虚にして、ただキリストの奴隷として終始された方である」（『新井奥遼の人と思想2』「新井奥遼先生」）。

永島は、奥遼が聖書を講義しなかった理由を、奥遼の言葉を引いて記しているが、そこには奥遼の思想の本質が見える。「人を愛すること己の如くせよとは解釈を要せず。解釈は却って議論を生ず。我は人を愛して足る。人を愛すれば則ち知至る」。

山川が奥遼に深く心酔していたことは、山川の次の一文が物語っている。「新井奥遼先生は余等の師父畏友なり。余は在京中先生をその巢鴨の寓居に訪ひ、誘導奨励を受けしこと一再に止まらず、先生はまた特に此書の為毎巻その抜翠文を賜り給へり」（旧版「天堂篇」後記）。

奥遼を「師父畏友」と呼ぶ山川に、私達は、ダンテとヴィルジリオの関係を見ることが出来る。奥遼は「地獄篇」のために「不求是求」・「晩年余息」から、「浄火篇」のために「難録」から、「天堂篇」のためには「手控書」からの抜粹を山川に贈っている。しかし、山川の死後出版された岩波文庫の『神曲』から、奥遼の文章は一切削除されている。昭和二年に、山川『神曲』を読んで感銘を受けた正宗白鳥が、奥遼の巻頭の言葉に対して「村学究然たる面白くもない感想録」と書いていることは、山川の時代の文学の風潮をある意味で象徴している。「文庫版の性質上」（林竹二）仕方のないことだったとは言え、山川が生きていたとすれば、山川『神曲』の神髄として割愛は許さなかつたらうと私は思う。

## 六 『神曲』 翻訳

明治四十五年に帰国した山川は、故郷に帰ったり、小説を読んだりして過ごし、奥遼との出会いや友人達とのダンテ読書会を通して、少しづつ、しかし、根深く『神曲』に心酔していく。

山川が「地獄篇」翻訳にどのくらいの時間を費したかは一つの関心事であるが、次の山川の言葉は、その経緯を明らかにしてくれる。

前にきまつた仕事がなかつたから初めの一章を訳してみやうといふ考を起してやつてみたがとても物になりさうにもないのでいく度か筆を棄てた。しかし在米知友の好意やら日本に訳書のないことやいろいろ考へてみてはまたまた草稿をたて約一年もかゝつて第一稿を終るに至つた。筆になれないのと語気語勢などの彼我甚しく隔絶してゐるのとで時間の長かつた割には効果が極めて少かつた。それから第二稿に筆をつけ約半年を費してやうやう印刷に着手するやうになつた。

出版年月日から遡及すれば、山川は大正二（一九一三）年春頃から翻訳に着手し、約一年半という意外な短期間で一気に完成に仕上げたことになる。テキストは、ムーア校訂の『ダンテ全集』（*Tutte le opere di Dante Alighieri, nuovamente rinedute nel testo dal Dr. E. Moor, Oxford, 1904*）である。



出版直前、直後の山川は喜びに溢れ又謙虚でもあった。「このやうにして出来上つた訳本が僕個人の極めて大切な記念であり翻訳の事業が一個人に極めて深い興味をうながすやうになつたのはすでにこの拙ない訳書の印刷に付せられてから後のことであつてこれは僕が世界の大詩人にたいして大いに恥ぢかつ恐れるところである」。

山川は、「地獄篇」を一年余りで訳して、初めて『神曲』の深さに畏れを感じたのではないだろうか。何故ならば、山川のそこからの歩みは極めて慎重であるからだ。それだからこそ山川は、「地獄篇」改訳に執念を燃やしたのだらう。山川にしてみれば、一気に生み落してしまつたものに対する後悔の念があつたかもしれない。

山川は「地獄篇」を出版すると新潟に帰つた。それは、七十九歳になる母のたつての要請に応じて結婚したためである。山川は三十九歳、新妻は二十二歳であつた。妻直は、医師渡辺護の次女であり、山川の長兄の嫁の兄の娘で、山川とは親戚関係にあつた。当時の鈴木重久への手紙の中では「教育もないし美人でもないが氣立はわるくない様にみえる」と十七歳も年下の若い妻をもらったことを照れるように書いているが、写真で見る山川夫人はなかなか美しい人である。

大正三年末に帰郷、翌四年一月十七日結婚、一ヶ月半程して、山川は一人駒込神明町の下宿の二階に住んで「老書生然を構へて」低い食卓を机代りに、「浄火篇」の翻訳に着手していた。そしてその春、山川は郷里から妻を呼び、本郷駒込動坂町一七八番地に新居を構えた。二帖・四帖半・五帖の二軒長屋である。

本間は、新婚当時の山川の生活を次のように語る。

何一つなく足袋まで兄の借りもので、羊羹色になつた着物を着たきりであつた。しかし「神曲」の翻訳は続行され、

朝食が済むと昼まで書齋に籠り、昼食が済むと夕食まで机に向かうといった生活で、慣れない東京に出て来て一言も語らず、しかも顔さえ見ることも出来ず、調度とてないガランとした部屋で、直は一人で幾度も泣いたという。

山川は、この頃貧乏のどん底にあった。生活費は「後援会」の人達が送ってくれる僅かなお金がすべてであったようである。悶々としつつも、山川は、非常の決心でダンテに向き合っていた。書齋に籠りきりの山川の姿は、山川自身がこう書いている。「なんにしろ非常にムツカシイ作品だから伊太利版の本を三冊英訳三冊を机の上下にならべて時々手近の参考書を引出し或は地図を開いたり、ゴム球でダンテ時代の地球をこしらへたのをふりまはしたりしてゐるところはむしろ我乍ら奇観と評さざるをえない」（前出「鈴木重久宛の手紙」）。

「浄火篇」翻訳中の大正五年四月二十一日、長男が生まれ、「浄火」にちなんで「浄」と名づけられる。続いて、大正七年十二月二十七日、次男純が生まれた。

前出の手紙の最後に「下駄のへりめが気になる位なので度々は手紙もかけぬ。」と書いているが、林が最後に山川夫人から聞いたところによれば、下駄さえも新しいものは買えずいつも中古のものだったそうである。子供が生まれてからは、夫人の内職であったこよりでキセル入れを編む仕事を山川も手伝うようになって、先生の編んだものは手先の器用さで綺麗に仕上るので、一本三十五銭になり、夫人のものより十銭も高く売れたそうである。

大正三（一九一四）年十一月に警醒社から「地獄篇」が出版された。その成就感にもかかわらず、山川の気持は満たされていなかった。それは、生活の貧困のせいでもあったが、更には、「地獄篇」に対して身の入った批評

が殆んどなく、それも大分は読まずに批評されたものばかりだったからである。そのためか、出版後四ヶ月経っても再版の見通しがたたなかつた。

山川は、鈴木に長々と愚痴をこぼしている。

しかし無理もない、「生の悲哀」などとばかり口走つて奥行の極めてせまい木の葉文学が横行しひさし髪的女生生までがベルグソン（少し古くなって此頃はタゴール）の名を口にしてゐる時代へこんな古くさい物を出すのだから。そして名もない訳者のことだから売れ行のよからう筈がない。：神曲は要するに一読して面白いものではないが米国のダンテ学者ノルトン博士がいつたやうに、多くの歳月を之が研究に費やしたことを惜しいとおもはぬといふべき本にちがひない。浄火は地獄よりも売れないだらう。天堂は浄火よりも売れないだらう。しかし今後あらゆる艱難と戦つていつかは三冊完結する。

山川の喘ぎが切々と伝わってくる。評価されぬ失望の中で、段々と弱気になってくる自分を書きつつ励ましている山川がここにいる。書きつつ自分は、時代を超えて読まれていく偉大な古典に向つているのだと云う自負を心の中に刻み込もうとしているかのようである。

出版直後の書評の幾つかを見てみると最も早いものに『万朝報』（大正三年十二月）がある。「：訳文現行の聖書の邦訳を聯想せしむ・巻後に詳細なる注解あり。一労作といふべし」。

翌年一月二十四日の『読売新聞』はもう少し長くこう記している。

ダンテの神曲は古今の大作中の大作である事は今更いふまでもない。これを研究するダンテ学者も外国には随分あるが、我国にはまだ二三の梗概研究しかなく訳に至つては一つもない。本書は実はその先駆をなしたもので、地獄篇だけに過ぎないが、最も価値ある部分の本書によつて味ふ事が出来る。…訳し振りは原書と比べないから何ともいへぬけれども兎にも角にも世界の名作が一卷になつて現はれた事は注目に価すべき事で、大に訳者の労を多としなければならぬと思ふ。

同年一月の『開拓者』には、山川の親友と自らを言う記者が、山川の経歴と清貧の中の仕事振りに触れながら、次のような紹介文を載せている。「氏の文才と性格は極めて能く此不巧の神曲の訳者たるに適して居る。内容は分り安い文章語で節を別けて読み易い云はゞ散文詩と云う書き方である…」。

この他に『新公論』『帝国』等の書評がある。しかし、いずれも、山川を満足させるものではなかつたにちがいない。山川の求めていたものは、真に『神曲』を理解する者による真剣な批評であつた。

## 七 大賀壽吉の批評

あまたの書評の中で、山川の目に止つた別格の記事があつた。それは、これからも『神曲』を訳し続けようと

していた山川にとっては、一条の光のように思われたかもしれない。一人でも真の読者を持つていと云う希望である。その批評は、大賀旭江なる人物のもので、当時としては破格に長い丁寧なものである。

吾人は一兩日前に山川丙三郎氏の訳にかかる神曲第一篇地獄界を入手していひ知らぬ喜びに溢れたものである。當に訳に訳者が我國に於ける神曲全訳者の第一人たるの榮譽を得られたるを祝するのみならず、我國文学界、將に宗教界の爲に大いに祝せざるを得ぬ、吾人は知人に訳者を知れるものありて、訳者が篤学の基督者にして、予てダンテを研究し、神曲を翻訳せる事を承知せるが、今本書に接して訳者が真面目なるダンテ研究者であり、主張ある人物であることを知りて、衷心より本書を広く世人に推奨することを喜ぶのである。

書き出しの大賀の弾みは、『即興詩人』のアントニオと『神曲』の出会いを、キーツと「チャップマン訳ホーム」の出会いを連想させないだろうか。大賀の喜びと興奮が文章に溢れている。大賀は原文を知る者の眼で詳しく山川ダンテに分け入っていく。

本書はライン・フォアー・ラインの直訳といふべきもので、往々神曲を初めて読む人には了解し難かるべしと思はる、個処あるも、こは止を得ぬ事である。而して直訳とはいひながら其文は余程精練された者で、ダンテの詩の生命なる簡勁を保有して居る。地獄界の二絶唱と云る、第五歌の婉美たとしへなき、フランチェスカの悲恋物語・第三十三歌の世にも珍しきウゴリノ伯の惨話の如き逆も原詩の妙趣を伺ふは不可能なれど、よくもかく迄に訳されたり、第三歌地獄門

上の銘の如き、数多き英仏独の訳書中にも満足なるはなしといはる、もの、我国語訳に今これ以上は求め難かるべし。

大賀は、「地獄篇」三十四曲の中でも、最も注目される「二絶唱」を取り上げ、その曲のエスプリである婉美と悲惨が、山川訳によって確かに、表わされていることを認め、訳の忠実さと日本語の洗練を高く評価していることがわかる。

作品そのものについては、最大級の賛辞を与えながらも、注釈に關しては、ある箇所で曖昧のまま打ち残したことに「個人性が余りに表れ過ぎたかと思ふ」と僅かだが不満を洩している。翻訳と注釈以外では、奥遼の序文の代わりに、山川のダンテ小伝或いは神曲の総論を載せるべきと助言している。助言は、用紙・印刷・装幀にまで及び、最後にこう記している。「細評は他日精読の上之を試むることあるべく、今は唯本書を紹介するに止む」（『基督教世界』一六一九号・大正三年十二月）。

大賀の喜びは、山川のものでもあったに違いない。そしてこれ以後、大賀は山川にとって最良の批評者或いは協力者となって、山川を『神曲』の完成に導いていく。

大正六（一九一七）年一月、中山昌樹の『神曲』が、洛陽堂から立て続けに出版される。全訳である。同時代に優れた翻訳を生み出した山川と中山を、大賀はあたかも二人の可愛い息子を讃めるようにこう記している。

余が両君の翻訳に就て殊にうれしく思ふのは、両君が忠実熱心なるダンテ研究者であつて、唯伊太利亜語を解せらるゝといふだけではないことである。両氏がダンテの「心に這入つて相生きようとして居」られて「それで言葉を選び、そ

の語法に原著者の呼吸を失はせぬやうにしようと思ふは「今日我國の翻訳界稀に見る所のことで感謝せずには居られないのである（『新人』第十八卷三号）。

同年五月、中山『神曲』全訳を追うように、山川の「浄火篇」が出版された。

山川と中山がお互いの翻訳を意識し合っていたことは自然なことであろうが、それぞれの本の「序」の言葉は、二人の性質をよく表わしている。中山が「邦訳のうちにて、先日出版されし山川丙三郎氏訳地獄篇に用ゐられた訳語及び註解も参照し」ただけ記しているのに対し、山川は、より厳密に「余は『浄火篇』印刷中、同氏（中山）の『煉獄篇』の訳語を参照して余の稿を改めし処二ヶ所あり」と書いている。

山川が中山の仕事にどういふ印象を持っていたかは、山川文庫にあるペン書きの貼紙（誰によって書かれたかは不明であるが、山川の死後、彼の書籍整理に當つた山川門下生によるものであろう）によってある程度推測することができる。

ダンテ全集の翻訳あり。個人でダンテの全作品を全訳したのは世界で中山氏唯一人である。その努力に対して敬意を払わねばならない。『神曲』と『新生』以外の翻訳のないわが国のダンテ学界に貢献している点は非常に大きい。先駆者として陥入り勝ちな資料不足・粗雑・間違ひ等が多いことは残念である。

大賀は、「再び神曲の邦訳に就て」（『新人』十八卷七号・大正六年七月）の中で、山川と中山の翻訳を比較して

批評しているが、彼の中山についての意見は山川と同質のものであることが次の文章から知ることができる。「実は中山氏が原文を誤解されたりと思はる、箇処、原文に余に忠実にならんとして却て反対の結果を来せしもの、訳の脱漏せるものなど兩篇を通じては随分とあるが、これは中山氏が或は翻訳を急がれしが如き事情にてもありし為ならんかと余は遺憾千万に思ふのである」。

これは、次の大賀の山川評とは対照的である。

山川氏は篤実なるダンテ研究者で、今は神曲の翻訳に全力を注ぎ、一篇の翻訳に少なくとも二三年の時日を費し、充分に研鑽推敲を経て之を公にせらるゝことなれば、其訳の信頼すべきは固より、訳文謹嚴にして平易、而も冗長に流れざるは流石に多年の丹精とうれしく思ふのである。余は同氏の浄火篇は未だ精読の機会を得ざれども、余が中山氏の訳について注意したる箇処を対照するに、ここの外は余の意見と符合せるを見て心強く感じた。

大賀が山川の翻訳事業に量り知れない貢献をしてきたことは、『天堂篇』巻末の「ダンテ研究目録」（大賀壽吉編）や『新生』の「おくがき」の大賀に対する長い謝辞から充分に確認することができる。

大正十一（一九二二）年二月、山川は、ダンテ六百年祭を目標にしていたかのように、『天堂篇』を出版し、『神曲』全訳を果す。その本の「後記」の冒頭で、山川は大賀についてこう書いている。「大賀壽吉は日本唯一のダンテ文庫所有者にて、熱心誠実なるダンテ研究者なるのみならず、斯学の文献に関する智識真に驚くべきものあり。余屢氏の示教を受く」。



山川がどんな形で大賀から「屢」<sup>しばしば</sup>教示を受けていたのだろうか。木村文雄は、往復書簡の存在に触れている。「このことは大賀氏との往復書簡にも見られる先生の翻訳態度をもっとも端的にあらわしたものだと思う」(前出「山川先生の憶い出」)。

「このことは」の前には、山川自身の言葉がある。「Traduttore traditore. (翻訳者は反逆者なり)」という語呂の似た諺がイタリアにあります。翻訳をする人は原典を傷つけないように、原作者の反逆者にならないようにしなければいけませんね」。

ここに見られるような山川の『神曲』翻訳に対する考え方を知る資料は、今のところ、皆無である。しかし、山川と大賀の往復書簡が存在しているとすれば、山川が翻訳中に直面した様々な問題について明らかにされるはずである。

京都大学附属図書館に旭江文庫がある。そこには、大賀壽吉(旭江)が蒐集三千冊に及ぶ世界各国のダンテ文庫から新聞雑誌の切り抜きまでが保管されている。この文庫は、大賀の嗣子榮滋より寄贈されたものであるが、山川の手紙はない。榮滋のその後の行方も確認できないため、残念ながら、今後の調査に期待するしかないようである。

大賀については知るところが少ない。大賀の示唆によって『神曲』翻訳を手がけた寿岳文章は、「邦訳『神曲』への道」(『現代詩手帖』昭和六十一年七月)の中で、大賀が「同志社大学神学部出身であり、武田薬品先代長兵衛に渉外顧問として重用された」と記しているが、これ以外の事実は不明である。

最近、武田薬品から入手した貴重な資料がある。そこには、本業以上にダンテに熱中していた若き大賀の姿が

ある。

この人は特殊の性格の持主でどちらかといえば付合にくいお人でしたが、博覧強記の頭の良い方で独乙の他に英国とも通信があった。大賀さんは当時ロンドンのウイリアム・ダフという代理業専門店との通信のついでに自分の読む本の店の費用でとり寄せていたが御主人は何もやかましく言わなかった。：しかし、大賀さんは本がつくと、これを読みたくて本をもって、店からサツサと帰宅するので、和敬翁は欧文の手紙や電報などを大賀さんに書いて貰うのに、おっかけ廻すような事が度々であった」（『武田和敬翁追想』「和敬翁の追想」竹田義藏昭和三十五年八月）。

京大のダンテ文庫の陰に武田薬品の貢献があったことがわかる。

山川は、昭和四（一九二九）年九月『新生』を岩波書店から出版するが、昭和二十三年二月に出版された文庫版『新生』の「おくがき」には、大賀の死に触れてこう記している。

大賀壽吉の逝去は我国に於けるダンテ研究途上の一大損失であった。ダンテに対する氏の熱愛とその真摯な態度とは誠に稀に見るところであって、或は講壇に立ち、或は文筆を馳せ、書庫を開放し、或はまた後進の学徒を集めて『神曲』を講じ、孜孜として斯学の興隆に努めた。氏の一親友の言によると、氏の私生活そのものがすでにダンテに終始していたのである。晩年イタリア・ドイツ・イギリス等の諸国に歴遊したのも、いはばダンテ行脚と稱すべきものであった。即ち到る処でその地のダンテ学者を訪問し、著名の図書館に足をとどめては詩聖の文献を漁り、日本に於けるダンテの

文献をフィレンツェで刊行し、人の依頼あれば、新古圖書の買求めや、注文の労をとることさへ厭はなかった。

山川は、ダンテを追って世界を縦横無尽に行脚し、ダンテ研究のために人生そのものを賭けた大賀に、満腔の敬意と賛意を表している。昭和十二（一九三七）年三月、山川は病に倒れた大賀から代筆の手紙をもらう。そこには、イタリアで発行された「ダンテ研究」最新号の紹介があった。しかし時をおかず同年三月二十八日山川は、榮滋より大賀壽吉の逝去の通知を受ける。日記には淡々と事実のみを記している山川であるがこの知らせに対しては真に珍しく感情を露わにしてこう書いている。

「万感胸に迫り茫然自失す：」

山川にとって大賀の存在がどんなに大きかったかがこの一行から察することができる。

## 八 東北学院教授

山川は、大正八（一九一九）年東北学院教授に就任する。その経緯については、林が次のように説明している。「天堂篇の第一稿が出来上がると先生は重い腰をあげて東北学院の教授になられることを承諾されたのです。出村悌三郎先生がしばしば使者にたつて学院に来ることを懇請されたのでした」。

出村悌三郎が山川に最初に就職の話を持ち掛けたのは、丁度「地獄篇」出版直後で、山川が貧困に喘いでいた

頃である。山川がこの話に一時心が揺れたことが、手紙の中から読み取ることができる。「丁度東北学院の出村君から英文科の教師が欲しいといつて来たので僕もせつぱつまつて行くかもしれないといつてやつた。しかし実際は九月から入用だといふので（尤もそれより早く、なるかもはからないとはいつて来たが）又々一頓挫を来した」。結局、山川は、長兄の反対もあつて、一切職に就かず、『神曲』完訳に専念することになった。しかし、それから五年後山川は、出村からの再三の要請に答えて、仙台行きを決めた。

東京の本郷から仙台市南鍛冶町一〇六番地に移転した山川の生活は、教授となつても、楽なものではなかつたようである。住居は寺の裏にある二軒長屋で、一階に三間・二階に一間の質素なものであつた。

山川が東北学院に赴任したばかりの頃、本科一年生であつた月浦利雄は、山川の風貌を次のように語っている。「和服姿に靴をはいてスルメマントを着られて、シャツと申せばその当時ハイカラな牛乳配達屋さんがよく着ていた襟が馬鹿に長く三角になつているシャツを着て、そして頭と申せば焼きいもからイキが上つたような蓬髪ほんとうに異様な感じでした」（『東北学院英学史年報』二号「山川先生の思い出」一九八一年三月）。二十数年振りに教授として母校に帰つてきた山川の姿を描く月浦にはヒューマーを感じる事ができる。

月浦は授業中の思い出を一つ書いている。「あてられて訳をさせられてこつちの訳が間違つた場合『さうでないでせうがなあ』とやさしく何となくふくみのある声でやられるのです。今でも耳にあの声がかきこえるやうな気がして」。

当時、山川の教授としての月給は百三十円であつたらしいが、本間によれば、学院から給料値上げの話があつても、自分より困っている者があるからと辞退して薄給に甘んじたという。



恵・純・浄(左から)と子供達と山川夫妻

大正十(一九二一)年七月十九日、長女恵けいが生まれ、その翌年二月「天堂篇」が出版された。

山川はこの「天堂篇」の一冊を、高村光太郎に贈っていたことが、光太郎の山川宛ての手紙から知ることができる。

今度又此の天堂篇を直接あなたから頂いて読む事の出来るのを実に幸福に思ひます。神曲がこんな立派な日本語になつて私等はじめ此らの人々の読み味ふにまかされた事は真に一大事と思ひます。此事に就てはあなたに私等読者からどんなに感謝しても尽きない気がします。この天堂篇を此夏通して又私は食べるやうに読む事でせう。今からその時のうれしさを想像します。私はまだ神曲について自分の感想を述べられる程になつてゐませんがいつかは此の訳を通して真の理解会得に達したいと思つて居ります(『文庫』『神曲』の訳者にあてた高村光太郎の手紙)林竹二、岩波文庫の会編、一九五八年十一月)。

光太郎は、これ以前に、柳敬助から「地獄篇」を、口村信郎より「浄火篇」を贈られていて、繰り返しの通説を通し、山川の「巖正忠実な訳と全体に溢れる敬服な心」に推服していた。山川と光太郎は直接会うことはなかったが、手紙の他の部分から、仙台に来る少し前、山川が江渡という人物に連れられて光太郎を訪れたが不在であったということがわかる。光太郎は、この手紙と共に『ロダンの言葉』(正統)を二冊山川に贈っている。消印

によれば、大正十一年三月六日である。

山川は、この頃から既に『神曲』改訳を決意していたが、その仕事は遅々として進まなかったようである。その理由の一つは、山川が教師としての義務を果すために、英語と英文学の授業の準備に多くの時間と精力を注いだからであるが、それ以上に山川の『神曲』への取り組み方が余りに深く大きかったためと言える。

林は、そのことについて、こう語っている。「神曲の理解が本質的な点で深められないかぎり改訳は実のないものになると感じておられた先生は、まずダンテの思想的源流に溯ろうとしてトマスやアリストテレスを読むことにとめられた」（前出『神曲』の訳者にあてた高村光太郎氏の手紙）。

そして、次の山川自身の告白は重い。

神曲がダンテの靈的生命を写したものであり、この靈的生命はまた詩人以外の多くの人の靈的生命であることを知つたのは必ずしも新しいことではなかつた。しかしかかる知識は生命のない絵のやうなものであつた。この知識が僕自身の生涯に密接に聯結し、いのちあり焰あるものとなつたのはつひ近頃の事である。世間の目からみればこれは甚しくおこがましい事柄でなければならぬが、僕はこれが偽りのない事実であることを告白せねばならぬ。時代の相違・思想の變遷の異なるにもかかわらず僕等は大体に於て詩人と共に淨めの火を過ぎて天堂にいたるの路を求めなければならぬといふ確信をもつ。神曲をみるにいたつたあかつき、神曲は新しい色彩と光榮とを帯びて僕の目の前にあらはるにいたつた。郷国を辭して後、僕の生涯は地獄の生涯であつた。罪業と苦患との生涯であつた。僕は地獄の至るところに僕自身の刑罪をうけつゝ、あることを感じた。パオロもチャッコもその他地獄の深みに叫喚をあげつゝ、ある罪人も多くはこれ僕自身

の変形に過ぎないものだとおもった。客観的同情は主観的苦悶に変じた（前出『神曲』の翻訳について）。

山川の『神曲』に向う真摯かつ敬虔な姿勢と『神曲』認識の深化は、旧訳のまま『神曲』を再版することを許さなかった。新潮社は、世界文学全集に山川訳『神曲』を入れる話を、当時の二、三万をもって、申し出たが、山川は頑固に拒んだという。岩波書店から再三『神曲』出版の申し入れがあったが、改訳が成るまではと断っている。しかし、山川はその代わりとして昭和四（一九二九）年四月、岩波から『新生』を出版した。

大正末期から昭和初期の山川の様子を一番よく伝えているのは、山浦拓造の「山川丙三郎先生の追憶」（『東北学院英学史時報』三号、一九八二年三月）であろう。

山浦は、山川に導かれて研究するようになった「バラッド文学」の歴史と形式を論じた後に、当時の山川をしみじみと思いついている。

この文章を書いていると、いまでも長髪・ハードカラー・蝶ネクタイで黒服装の山川丙三郎先生が現われて、あの名調子で講義され、バラッドを美声で朗吟された五十年以上前のTG本館二階の教室風景が浮かんでくる。そしてへんな発音をする学生をひやかされ、ぎこちない日本語には「そんな日本語があったかネー」と一種の鼻声で（先生はよく机に右手をつかれ、薬指で右の鼻孔を押えられたので）からかわれた愛嬌たっぷり、ヒューモアで余裕綽々のお姿が現われてくる。訪問日にお宅に伺えば、和服にくつろがれ、四方山のお話しに花を咲かせられるのであった。特に私は度々広瀬川の鮎釣りにお伴させて頂いたが、何時間経っても一匹も釣れない不漁にも喜びを満喫して帰宅される先生のお心

に打たれないではおられなかった。いまこの文章を書くために手にしている大正十五年に用いたテキスト、Katherine Lee Bakes, "Ballad Book" (一九二五)の米国版を開けばどのページにも書込みがいっぱいである。先生は克明なノートを作って講義に備えられたが、教員室備えつけのNEDの前に立つておられるのは必ず山川丙三郎先生のお姿であった。

山川の音楽性を引き継いだといえる山浦の観察は、細やかで優しい。

昭和二年師範科に入学した成瀬小四郎は、山川から教えられた印象深い作品の幾つかを挙げている。Keats: "On First Looking into Chapman's Homer", Lamb: "The Praise of Chimney Sweeper", Bates: "A Ballad Book", Stevenson: "Kidnapped"等がそうである。そして、山浦とはまた少し違った山川の授業風景を、成瀬はこう書いている。「先生は教室に入って来られて学生の礼を受けるとすぐ腰かけられて、学生の顔を殆んど見る事もなく、幾分うつ向きかげんに授業を進めて行かれた。低い澄み切った声が美しかった」(『東北学院英学史年報』九号・一九八八年三月)。

山川は、昭和七(一九三二)年、師範科長に就任。昭和十五(一九四〇)年には東北学院名誉教授となる。この頃の山川の面影を知る資料は殆んどないが、昭和十一(一九三六)年四月に行なわれた「現代教育の諸問題に就て」と題する座談会での山川の発言には、山川の教育に対する信念がよく現われていて興味深い。「キリスト教主義の学校の使命は愛にあります。今日教授と学生との間が未だ十分親密ではないが、教育は愛の実践であって、単に学問の教育ではないのですから授業時間だけでなく、教室の外に於ても教授が学生に対しても親切にいた



わつてやるといふやうにしたいものです」（『学生時報』昭和十一年五月）。

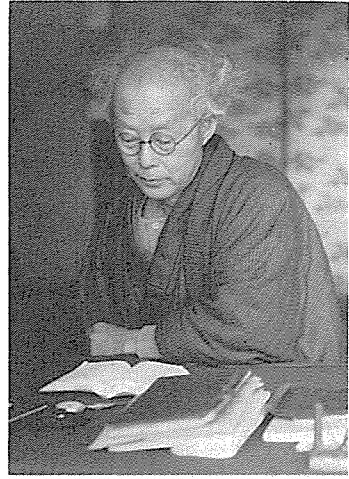
「愛の実践」が、山川の信条であった。そしてその山川の姿勢が学生だけではなく、すべての人に向つてのものであったことが、恵の言葉から知ることが出来る。「職業に貴賤はない、人間は皆平等という事で、誰に対しても父は同じように愛情をもって接してましたので、私も小さいときから、誰とでもすぐ仲良しになりました」（前出『展』「父のこと」）。

山川の温かい人柄のせいで、家庭はいつも和やかで来客が絶えなかつたようである。子供達の友達や弟子達や近所の人達も、山川の家庭にいつの間にか引き寄せられて、土曜の夜などは、一階の茶の間には笑いが一杯だったという。

山川には、二人の無二の親友がいた。一人は、山川の翻訳事業を支えてきた牛乳屋の鈴木重久であり、もう一人は、みみずの研究で有名な畑井新喜司である。三人共、東北の出身で東北学院に学び米国留学を経験しているという共通点を持っていた。

三人が集まるといつも本当に楽しそうだったらしいが、重久の娘竹内義子は、その様子をこう書いている。

三人とも柱に寄りかかったり、肘をついたり、ねそべったり、何の心配もない様をして、出されるものは皆おいしい、おいしいといいながら、アメリカの思ひ出話などしている様な雰囲気でした。畑井さんは少しトボけた表情で、山川さんは、私の母がよくいう「カスミソウのお花」の髪の毛を少し横ひろがりにもしゃもしゃさせて、目を細めて、煙草のけむりと一緒に「フッフッフ」と高めの声を出して笑っていました（前出『展』「カスミソウ」）。



書齋の山川

し上がるのでした」。

山川は約束と時間には厳しかったらしく、恵はこう書いている。「父は、一日一日を予定表に書かれた様に、時間を無駄にする事なく過ごしたようです。心ない近所の小母さんが子連れで長居したりして、母が言われた通りに行動できなかつた時など、父は御機嫌が悪いと母が困っていました。招待された時以外は、要件のみで玄關で失礼すべきだと教えられました…」。

昭和初期から戦前までの山川の生活は、とても平安で幸福であったことが、山川を取り巻く人達の思い出から推測することができる。しかし、戦中、戦後は不幸が続いて山川は悲しみの中にあった。

昭和十九（一九四四）年、長男浄は戦地フィリピンで消息を絶ち、昭和二十一年六月八日、戦死が確認された。次男純は、学生時代に、射撃の練習中雨に濡れ、肺を患ってから、自宅で長く療養生活を送っていたが、昭和二十（一九四五）年三月二十九日、肺結核で死亡した。浄は二十九歳、純は二十七歳という若さであった。この二

竹内は、山川についての忘れられない思い出として蜜柑のことを書いている。山川の手先の器用さがほのぼのと伝わってくる。

「火鉢に翳すか、炬燵の中であつたためるかした蜜柑の皮をあのしなやかな細い指で、丁寧に剥ぐのです。皮は柔らかく、透き通る様で、中の薄皮もあつたまつてふくれた中身を包みきれなくなつて、今にも破れそうになつたのをいかにも美味しそうに、目を細めて召

人の死が山川家にとってどんな悲しみであったかは察するに余りある。

山川家とは家族ぐるみで親しく付きあっていた高橋田鶴子は、この頃の山川の思い出をこう語っている。

先生は、私が遊びに行つて帰りが遅くなった夜は、家の途中まで送ってくれましたが、その道すがら、こう洩らしていたことがあります。「たこちゃん、どうしてこんなに悲しいことばかり続くんだろうね…。あんまり苦しい時は、思わず口ずさんでしまうんだよ。『わたしたちを試みに会わせないで、悪しき者からお救いください』『主の祈り』って。」

山川は、東北学院教会（南六軒丁教会）の熱心な信徒として日曜礼拝には欠かさず出席していた、信仰の人であつた。

悲しみの中でも改訳を進めていた山川だが、自分の仕事について木村にこう洩らしている。「私は神曲を読む人のために、幾分でも役に立てばよいんだ。伝記やその他はこれからの人がやるんで、私はその人達のために、出来ればダンテ事典をつくっておきたいんだがね。」

山川は『ダンテ事典』作成と共に『アエネイアス』の翻訳にも強い関心を持っていたようである。

昭和二十二（一九四七）年八月十七日、山川は、持病の腎臓結石で、七十一年の生涯を閉じた。

「地獄で終つてしまうのは嫌だね」と晩年気にかけていた山川の言葉通り、改訳「地獄篇」二十一曲九十六行で中断した。

山川の墓は北山の輪王寺にあり、その墓石の後ろにはこう記されている。

「我裸にて母の胎を出たり、又裸にて彼処に帰す」

山川の尊敬していた押川方義とシュネーダーの大きな墓が、山川を見守るように立っている。そして、山川の墓は、二人の親友畑井と鈴木との墓と一直線に日向ぼっこをするように並んでいる。

## 九 山川の死後

山川の死後、「地獄篇」（昭和二十七年）、「浄火篇」（同二十八年）、「天堂篇」（同三十三年）が岩波文庫から出版された。出版までの仕事は、山川の遺書に従って、林に一任され、「改訳の成った部分は新訳にして欲しい」と言う山川の強い意志が林に伝えられた。

山川は、晩年、既に再三岩波文庫から出版の依頼を受けていたが、無名時代の自分を助けてくれた旧版の発行者警醒社への強い義理から、岩波の要請に踏み切れずにいた。しかし、第三者的立場にある林は、「『神曲』出版を公事として」、躊躇なく岩波文庫を出版社として決定した。

また、林は、山川のよき理解者でもあった阿部次郎に私的助言を請い、岩波文庫のために『神曲』の原稿を作成する上での基本方針を打ち出して貰っている。次の言葉がそうである。

君達の仲間（いわゆる山川門下）には山川君の翻訳を批判するだけの資格をもったものはいないはずだ。だから新版

の原稿を作成する場合、極端にいえば誤を改めるといふことさえも考えずに、ただ忠実に旧版のうちに記されているものをそのまま再現することに努めればよい（岩波文庫版『神曲』「天堂篇」抜）。

しかし、実際出版された『神曲』に、新訳は採用されていない。その理由を林は次のように説明している。

そのさい先生の御意志に反いて改訳のすでに出来ている部分についても、新訳をとらなかつたのは、私は先生の翻訳自身がすでに一つの古典と見做すべきで、その全体の調子の統一を少しでも傷つけないと強く希望した結果であり、先生の御遺志は、別に定本の如きものを作ることによってお答えしたいと考えてのことであつた（前出・抜）。

この仕事は、いつ頃から始められたかは定かでないが、林が何故、山川の強い遺志と阿部次郎の助言にそむいてまで、自分の考えを通したのが、私には不思議でならない。

更に、遺憾なことに、林によれば、山川から託された原本（新訳は旧版本の本文の行間に赤いインクでピツシリ書き込まれている）は、昭和二十四六月、林の書齋から盗み出されている。そして、その原本の行方はいまだに知られていない。しかし、山川の原本を偶然木村が写し取っていて、それは、昭和四十九（一九七四）年三月十一日『神曲改訳編本』として仙台の日本工芸から出版された。

最後に、山川に私淑し、山川のもとに夜毎集まっていた四人の門下生について触れておきたい。

この研究にもしばしば登場する林竹二は、実践的な教育学者であり、新井奥遼と田中正造の研究書を残している。

山川家に最も深く関わった弟子と言える。木村文雄は、林同様山川家に関わり、山川の死後は山川夫人を助け、岩波文庫からの『神曲』出版に力を注いだ。宮崎信彦は、西洋史学者であり、山川の影響を受けてG・パピニ著『生けるダンテ』を訳している。石川重俊は、山川の弟子に相応しく語学に優れた英文学者であり、シェリーの詩劇『縛を解かれたプロミーシユース』を訳している。現在も山川のダンテを引き継ぎ研究を続ける唯一の門下生である。

### あとがき

この論文を製作中、これまでの研究者の目には触れなかった、山川の日記や手紙が発見された。今回は、そのごく一部を採用したに過ぎないが、山川研究は、大賀との往復書簡の調査も含めて、これから期待されるものが多い。なお、山川直は昭和五十三年五月二十三日、八十三歳で逝去し、山川の遺族は、山川の愛娘恵（ハワイ在住）一人だけである。

# ミミズの畑井とコケの飯柴

飯 泉 茂

## はじめに

畑井新喜司は、一八七六年、青森県平内町小湊に生れた。東北学院予科から本科、理科専修部に学んだあと、

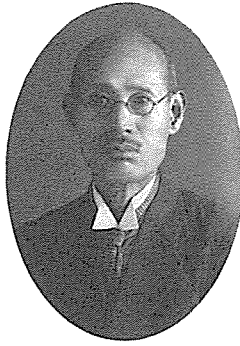
旧第一高等学校助手、そして一八九九年シカゴ大学大学院で学び、ペンシルヴェニア大学ウィスター研究所に勤め、教授となり、在米二十二年して帰国、東北帝国大学教授（理学部）、パラオ熱帯生物研究所長、東京家政大学長、などを歴任して、一九六三年八十七才で逝去した。一九二五年には帝国学士院賞受賞、同年からは、東北学院理事にも就任した。



畑井新喜司

乳を配達した。その道すがら、路面にはいだしたミミズに興味を覚え、動物学研究に進んだという。研究対象は、シロネズミ、カキ、シロナマコ、ナマズ、クマムシなどもあったが、ミミズの研究には特に力が入っている。ミミズの畑井の名は、こうしていつか定着するようになった。

飯柴永吉は、東北学院普通科教員になるとき提出した履歴書によると、一八七三年、三重県一志郡中原村に生れ、小学校卒業後、十年ほど小学校教師をした。一九〇二年に師範・中学の教員検定（植物学科）に合格した。同年上京して私立大成中学教諭、また仙台の東北中学にも勤め、翌一九〇三年五月、東北学院普通科教諭になった。



飯柴永吉

小学校教師の時、夏期講習会で三好学東京帝大教授らの指導を受けたとあるが、小学校以降は、正規の上級学校には籍を置かず、独学で教員検定を獲得した篤学の人である。そして、教師時代に、植物採集に熱中し、採集標本を牧野富太郎や梅村甚太郎に見せて教えるを受けた。

その頃の話だと飯柴は記している（『日本産蘚類の分類』四頁）、「全然田舎漢の予は三重県飯南郡神山産の蘚苔十数包を携へて今の東京帝大を尋ねた。ソナモノを持って来ても誰も調べる人がないし又将来も分らぬから持って帰れと云はれ失望したことがある」と。

東北学院教諭となって仙台に落着いた飯柴は、猛烈な勢いで各地の植物採集に出かけ、高等植物ばかりでなく蘚苔類（コケ）の採集にも積極的であった。採集した蘚苔類の標本は、殆んど外国のコケ学者に同定してもらった上で、そのコケの分類的位置の検討をするなどして論文発表を続けた。

こうして一介の教師として体験した苦節は、やがて報いられ、晩年の飯柴は、わが国のコケ類学研究のバイオ



ニアとして、その名がとどめられるようになった。学院での教師ぶりを古い卒業生に尋ねると、謹厳実直で近づきがたい風貌だったが、生徒にはとても優しく、いつも顕微鏡を見せ実物で教える授業は楽しかったという。

畑井、そして飯柴の、こうした異なる経歴のなかで、学院との関わりを大切に活かして、二人が得意とする動物学、植物学の分野で活躍した姿を見たいと筆者は願った。文系・社会系の学問を重視した学院の歴史の上で、珍しく理系で国内外に名を博した二人の仕事を追ひ、二人の道をたどってみたい。

## 一 畑井新喜司

畑井新吉（のち新喜司に改め）が故郷小湊に帰ると、太平堂の黒砂糖のあめ玉をしゃぶって、ヒタコ（同級生能登谷太平）どうしたべえ、と尋ねるのが常だった。年老ってからは、故郷のマスが一番のご馳走だといい、ホタテの塩焼きも好んで食べた。畑井の実家に住む畑井勉が話してくれた。

畑井新喜司は、九代目畑井多市の二男として平内町小湊に生れた。平内は、山間に川があるという意だそうで、夏泊り半島のつけ根で陸奥湾に接し、南に八甲田山系の山々を背にする小村である。林野が九割で農地一割未満の土地柄であり、人口密度は青森県平均の半分だという。平内は、津軽と南部の藩境の要所であったので、畑井家は代々黒石藩平内の代官を勤めた。なかには、目付、剣道指南、儒学者として名声高い人もいた（『平内町史』）。多市は、明治に入って寺小屋を小学校にして校長を務めたこともあり、青森県会議員にもなったほどの人望があ

った。

畑井の家は、経済的に豊かだとはいえないが、教育熱心な家人のすすめで、新喜司は、小学校を卒えると弘前の東奥義塾に進学した。開校当初より英学に力を注ぎ、教師として米国の宣教師を招き、キリスト教教育による人格形成を以て教育目的にしていた学校である。塾長に本多庸一が迎えられて、校運は一層盛んとなり、東北各地から生徒が集った。一八八七年には、高等普通科本科予科を置くようになり、その翌年に畑井新喜司は入学したことになる。

一八八九年十月のこと、原因不明の火災で義塾の校舎寄宿舎は焼失した。名塾長だった本多庸一は、弘前を離れて東京英和学校（青山学院）校長になっていたが、再び義塾に帰り校運が盛んになったという（『東奥義塾九十五年史』）。向学心に燃え笈を負って十八里の道をきた畑井少年には、校舎焼失や塾長転出の事件は、不安をよび、強く心をゆさぶったことだろう。

『東北学院時報』一七〇号に寄せた畑井の「東北学院入学当時の思い出」によると。

明治二十四五年頃、山形市の姉夫妻が斉藤壬生雄の導きでキリスト教信者になり、私に東北学院に転学することを熱心にすすめてきた。弘前中学校（東奥義塾）二年に在学中の私に、人格の高い押川先生の下で学んだ方がよいと言うのであった。私は東奥義塾生を二年中退し、夏休暇を利用して山形の姉の許に行き、相談の上学院予科三年の入学試験を受けるべく準備をした。

夏の終り頃試験を受け、畑井は学院予科三年に編入した。寄宿舎生活を一年以上続けたが、家計の都合で労働会に入った。労働会での働きながら学ぶ生活によって、畑井は、真の学院生徒としての生活ができた気がする、と先の思い出の記で述べている。

津軽の名門東奥義塾を二年で去った畑井は、陸奥湾から日本海へ、海路を南にとつて酒田港に着いた。それから最上川沿いに上つて山形に着くという鉄道敷設前の不自由な旅を続け、やつとの思いで姉の家に身を寄せたのである。

山形の姉夫婦が受洗した教会は、斉藤壬生雄牧師がいた六日町教会である。『山形六日町教会八十年史』によると、創立は一八八七年で、宮城中会代表の押川方義の指導と励ましによって、斉藤壬生雄を主任伝道者として迎へ教会が設立されている。同じ頃、山形英学校が開校し、押川を校長に、教頭に松村介石が就任し、正にミッシェンスクールの感を与えた教育の学校が出来た。やがて、六日町教会で受洗する人が増え、英学校の教師らの活動もあつて、教会の集会は百名を越すほど盛んになったという。

畑井の姉は、丁度この頃の教会隆盛期にあつた六日町教会で、斉藤壬生雄の指導を受けていたことになる。そして、押川が主宰する東北学院の姿を耳にして、弟新喜司に転学をすすめたのであろう。

『東北学院百年史』によれば、その頃とは学院の草創時代であつて、仙台神学校から東北学院と改称し（一八九一年）、予科二年本科四年神学科三年制の学校になったばかりである。押川方義が院長となり、労働会も設立され、シュネーダー夫妻も来日後数年を経過して、教育と伝道の着実な歩みが始まった頃である。

一九二一年、長い在米生活を終えて帰国したばかりの畑井新喜司は、「在学当時の追想」(『東北学院時報』四三号)なる一文を書いている。当時の学院生活がかがいがい知れるので、その一部をのせてみよう。

在学満四ヶ年中の出来事は凡て愉快な楽しい記憶ばかりで、在学中は労働会のお世話になつて居た。其頃自分は非常に動物学に興味を持つて閑さへあれば動物学書の閲読と動物採集などをやつた。又其時代に手製の顕微鏡で溜池の水の中の動物を見て楽しんで居た。自分は到底他処では得られぬと思はる、好教訓を学院で得る事が出来た。夫れは外でない。一つは労働会の生活より克己の精神を養ひ得たること、一つは押川先生やシュネーダー先生方の生きた模範によつて真理を愛するといふ素養をつくる事が出来たことである。その頃の読書は学院図書館にあつた動物学書とシュネーダー先生より頂戴した動物学書の二冊だけでくり返し読んだ。創設の際でもあつたから凡てが大ざつぱで試験などは無かつた様だ。学生の勉強は自発的で他より強制された余儀ない勉強ではなかつた。

予科から本科を修了した畑井は、学院に新設された(一八九五年)専修部理科に進学した。学院は規則改正をして、予科本科制を廃止して普通科(のち中学部に改める)五年に、文科と理科の専修部二年を置くことになつた。すでに動物学に興味をもっていた畑井は、第一回生の理科に進んだのである。ちなみに、専修部理科の学科課程をみると次のようである(『東北学院百年史』資料篇)。

第一年

修身講話	一週一時間
和漢学	〃 一時間
理科	〃 三時間
無機化学	〃 二時間
英語	〃 二時間
数学	〃 三時間
論理学	〃 一時間
地質及ヒ鉱物学	〃 三時間
画学	〃 二時間
体操	〃 三時間
随意科、聖書	一時間
独逸語	四時間

第二年

修身講話	一週一時間
和漢学	〃 一時間
理科	〃 三時間
天文	〃 二時間
数学	〃 三時間
英語	〃 二時間
倫理	〃 一時間
生物	〃 一時間
有機化学	〃 二時間
画学	〃 二時間
体操	〃 三時間
随意科、聖書	一時間
独逸語	四時間

話は少し戻るが、学院予科三年になった頃、畑井新吉（新喜司）は、仙台基督一致教会で、牧師三浦宗三郎から受洗している。一八九二年十月二十三日のことである。三浦宗三郎は、山形六日町教会で、斉藤壬生雄が仙台へ転任したあとの牧師を経験している。その後、畑井は米国から帰国してすぐに、学校教会として新設された東

北学院教会に転入し、生涯キリスト信者としての生活を送ったのである。

一八八九年発行の動物学雑誌第一巻に、「ダルヴェン氏ノ蚯蚓ノ作用」と題した論文が、七回に分けて掲載された。著者は、後に畑井の恩師となった五島清太郎で、当時、東京帝大の学生であった。この論文は、ダーウィンのミミズの研究をわが国に紹介した初めである。五島は、のち三十歳で旧第一高等学校教授、四十歳で東京帝大教授になり、腔腸動物、棘皮動物、貧毛類、寄生虫などの研究に携り、動物学界の重鎮として活躍した。なかでも、寄生虫の研究業績に対しては、一九一三年、帝国学士院賞が授けられている。

五島は、東京帝大在学中に友人らと基督教青年会を創り、本郷でキリスト教を説くようになった（『動物学雑誌』五島博士記念追悼篇）。この五島の旧一高教授時代に、畑井が助手として勤めるようになった。その経緯はよく知られていないが、畑井の友人が次のように述べて、この辺りの事情にふれている。

希望と信仰とに充滿した君を、天は長く顧みざるの理なく、或人の紹介にて、博士五島清太郎君に知られ、第一高等学校動物学教授の助手となる（『渡米新報』第一号一九〇七年）。

畑井は、五島の教えを受けてからは、その人となりと学問に強い影響をうけた。後年、畑井が記した文書の随所に、そのことが現れている。たとえば、『みみず』（改造社）の扉には、「みみずを私の生涯の友として御紹介くだされし恩師五島先生に深く感謝の意を表す」とある。また、『動物学雑誌』五島博士追悼篇にある畑井の文中には、

其根氣と熱心と御精力には唯々驚嘆しました。私も知らず識らずのうちにその感化を受けました。先生は他人の前では一言も小言らしいことを申さず、むしろほめて下さいました。学問以外の事では全く別人のように鷹揚で思ひやりの深い方でありました。私が明治三十三年アメリカ留学が決つた時には、教室に洋服屋を呼んで仮り縫ひをさせて下さいました。そして留学の心得を幾度となく説いて下さいました。

と記している。丸二年に満たない旧一高時代であつたが、その印象は、畑井にとって生涯強く残るものだったに違いない。この短年月の助手時代に、畑井は五島と共著で、ミミズの分類関係の論文を二篇発表している。いずれも英文で *Annot Zool Japon* に掲載されている。

一八九九年秋、旧一高の助手を辞めた畑井は、シカゴ大学大学院に入学、二年後シンシナチ大学助手、さらに研究意欲を燃してシカゴ大学特待生として再入学、神経学の大家であるドナルドソン (H. H. Donaldson) 教授に師事した。一九〇二年には学位をうけ助手となり、白ネズミの神経細胞、神経繊維の研究を続けた。

ドナルドソン教授が、ペンシルヴェニア大学のウイスター研究所に移るにおよんで、畑井も、一九〇七年ウイスター研究所講師として招かれ、教授となり一九二一年帰国まで滞米することになる。

ウイスター研究所 (The Wister Institute of Anatomy and Biology) は、一八〇八年に創設されたアメリカで最も古い解剖学研究所である。優れた業績のある研究所と解剖標本が豊富に集められた博物館があり、さらに、多くの研究

雑誌(たとえば、*Jour. Exper. Zoology*, *Amer. Jour. Anatomy*, *Jour. Comp. Neurology*, *Jour. Cell and Comp. Physiology* など)を出版していることで、世界的に有名な研究所である。

畑井は、ウイスター研究所でも白ネズミの研究に没頭し、シカゴ大学時代からの論文数は四十数篇を数えた。白ネズミの分類、遺伝、生理、生化学にわたる広範囲の研究成果で、これが帝国学士院賞授与の対象になった。一九二五年のことである。

白ネズミの動物学上の位置を決定し、その上で神経系統に関係した発育問題を扱い、生後から老死するまでの内臓器官の発育を調べ、栄養との関係、薬品に対する諸反応なども究めたのである。白ネズミが各国の生物学や医学、薬学の研究材料として、特に適当であるとされる理由が、畑井の研究によって、他の動物に比類ない程に白ネズミについて明らかになったからだ、と、学士院賞授賞審査の要旨にある。

優れた研究業績をもつ在米中の畑井を、新設の東北帝大生物学教室主任教授として招くに当っては、大分難航したようである。恩師五島清太郎と、当時の東北帝大総長小川正孝とは、かつて旧一高時代の同僚で親しく、畑井を積極的に推薦したが、ウイスター研究所のスタッフは、畑井の研究が中断するとして帰国に反対したという。この交渉に紆余曲折があったが、一九二一年、畑井は帰国して東北帝大の講師、一ヶ月後に教授に就任した。

帰国して仙台に落着いてからの、畑井の研究業績と活躍ぶりについては、畑井研究室で長年勤務した新谷文衛の著「畑井先生の生涯と業績」(『東北生物学同窓会報』十一号)に詳しいので、その要点のみを以下に紹介する。また、帰国後の東北学院との関わりについても、東北学院百年史が随所でふれているので詳細は省くことにする。





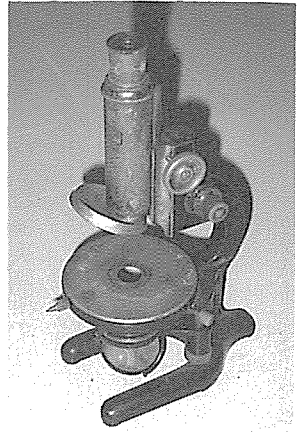
浅虫臨海実験所前の自然石に彫られた畑井新喜司の言葉  
「それは君 大変おもしろい 君ひとつ やって見たまへ」

畑井は、帰国するとすぐに、東北帝大生物学教室創設の準備に入った。片平丁の一隅に建設工事が順調に進み、教員人事、図書、設備品の調達も整い、一九二五年には六講座をもつ教室に発展して、畑井は生物学第一講座（動物生理学）を担当した。

生物学教室の研究成果も徐々にあがり、欧文の理科報告第四輯で発表されるようになった。かくして、帰国後の畑井が画いた生物学発展の方向と、その実現への努力が初まったのである。同時に、臨海実験所の適地を選ぶこともして、その適地が青森県浅虫と決り、一九二四年七月に開所式がもたれた。浅虫に近い小湊出身の畑井にとって、この臨海実験所の開設は、海洋生物への新たな研究欲となり大きな喜びであったに違いない。

東北帝大浅虫臨海実験所では、内外の研究者による共同利用を進め、海洋生物学への発展を目指した。開所と同時に、畑井は所長となり、仙台の生物学教室と一体となる研究教育の施設づくりに努力した。臨海実験所創立三十周年記念が開かれた時（一九五五年）、畑井は、浅虫の思い出を次のように述べている（『浅虫臨海実験所三十周年記念号』）。

一生の最良部分を浅虫に送った私にとっては、なつかしみの深い思い出の場所であり、又学問的生活からみて第二の



畑井新喜司が使用した顕微鏡

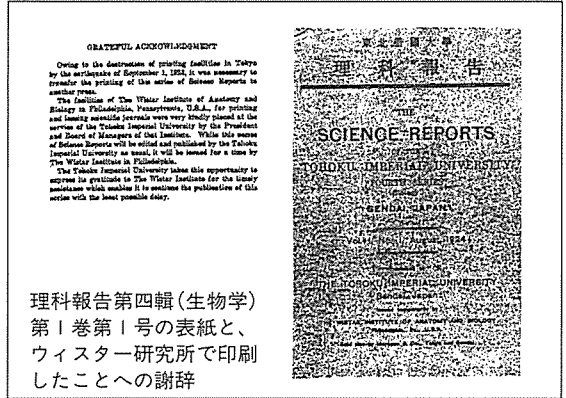
故郷であります。（そして実験所創設の頃にふれ）実験所建設地の選定に当って条件としたことは、実験所常住者家族の生活と子供の教育が容易なこと、健康地帯で皆が喜んで滞在できること、交通に便利であることなどをあげ、永続性のある研究が可能ないようにした。勿論、生物学上必要な資料が豊富で、採集地の変化に富むことは第一条件である。

自然相手の研究では、長期の滞在が不可欠である。研究者とその家族の生活を優先して施設づくりに努力した畑井の貢献は大きい。構内に四棟の宿舍と学生舎が出来て、実験所の研究教育発展に大きく寄与したことは申すまでもない。

畑井が東北帝大在職中に、理科報告第四輯に発表された論文数は三百を越え、畑井が研究材料としたミミズ、カキ、シロナマコ、ナマズなどを扱った論文は約八十篇に及んでいて、殆んどは畑井門下生の成果である。この理科報告第四輯（生物学）の創刊には、一つのエピソードがある。第一巻第一号の印刷を託した東京の印刷会社が、関東大震災で焼失してしまった。畑井は急遽フィラデルフィアのウィスター研究所に依頼して印刷してもらった。記念すべき理科報告第一号（生物学）には、この事情を記して畑井は謝辞を述べている。

このようにして、東北帝大生物学教室の発展の基礎づくりをした畑井は、一九三八年四月、停年制によって退職した。

東北地方における社会事業、ならびに学術研究の助成を目的にして、財団法人齊藤報恩会が仙台市に設立され



理科報告第四輯(生物学)  
第1巻第1号の表紙と、  
ウイスター研究所で印刷  
したことへの謝辞

たのは一九二三年である。その学術研究部総務部長に、畑井は現職のまま就任した。そして、東北地方の各大学、各高専校の優れた研究を選び、斉藤報恩会から多額の研究助成金交付に努力している。

たとえば、創設当初の東北帝大法文学部の図書充実や、電気通信研究所、金属材料研究所、浅虫臨海実験所などでの重要研究テーマには、当時の文部省校費では賄えない助成金の交付に努力し、それぞれ業績をあげるようになった。

また、斉藤報恩会の博物館設立にも、率先して参加し、一九三一年設立して諸準備に当り、二年後本館の建設が完了して開館の運びとなった。畑井は博物館長を兼任して活躍している。

博物館を、自然科学の研究施設として、また社会教育施設として、十分に役立てようとの理念が活かされ、東京以北で最大の自然博物館となった。生物、地学関係の標本収集と文献集め、展示や研究用の施設を整え、一九三三年開館式を迎えている。

ところで『斉藤報恩会時報』第五二号によると、博物館設立当初の一九三一年四月、標本採集に関する第一回委員会が開かれている。出席者には、畑井館長初め博物館主事、学芸員と、当時一中教諭の京道信次郎、学院中学講師の飯柴永吉、他数名の名が見られる。つまり、この章の主人公である畑井新喜司と飯柴永吉が、公式の場で会見したことを示す初めての記録であろう。

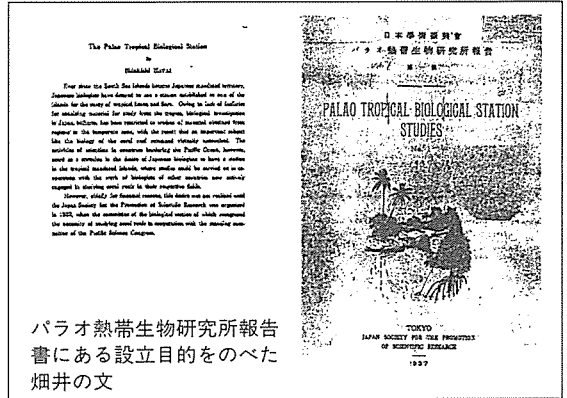
その後の博物館時報には、植物採集委員になった飯柴の活躍ぶりが随所に見られる。後の飯柴の項でもふれるが、これ以降斉藤報恩会の機関誌に、三篇の論文を発表して関わりを深めている。

畑井と斉藤報恩会との関わりで、忘れられない大切な事柄がある。開設間もない東北帝大生物学教室に、碩学ハンス・モーリシを招き、次いでロックフェラー財団派遣の米國動物学者五名を、毎年一名づつ来仙させて講義と研究指導に当たったことである。これら外国人教授の来日してからの諸経費援助は、斉藤報恩会の助成によるもので、畑井によってなされたことである。当時の畑井の夢に、わが国生物学界へ人類生物学という新分野の開拓を図る一面があり、その実現への第一歩でもあったのである。ちなみに招聘した外国人五教授（H.Molischの他）は、T.J.Lebanc, C.A.Kofoid, C.M.Child, J.F.McClendon, A.R.Mooreである。

米國より帰国して二年後の春、畑井の母校東北学院では、職員学生の有志によって組織された東北学院教会の設立が許された。出村悌三郎、五十嵐正らとともに、畑井新喜司も名を連ねて東北学院教会設立に参加した。仙台に到着した畑井は、この学院教会の行事に、よく参加したようである。

また、東北学院理事にも就任した。『東北学院時報』六三号の記録によると、一九二五年、専門部新校舎の定礎式で、出席した畑井理事は一席の演説をした。それは、畑井が在米中に見たシュネーダー院長の、募金運動へのなみなみならぬ苦勞を紹介して、新校舎は院長夫妻の涙の結晶であると述べたのである。

その一九二五年春には、新設間もない専門部商科で、いわゆる商科事件が起きている。学生が、ある社会科教授の転任人事を不満として、理事会へ質問書を提出したのがきっかけで、理事会のあり方を検討する要求にまで発展した事件である。



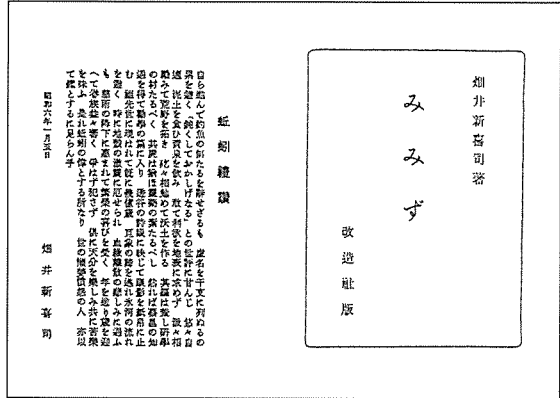
パラオ熱帯生物研究所報告書にある設立目的をのべた畑井の文

このとき、理事だった畑井は、理事会側と学生側の信任をえて、仲介に立ち、事件の収拾に努力した。畑井の誠実な言動が実を結んで事件は決着した。暑い母校愛がしからしめたのであろう。

北日本を代表する浅虫臨海実験所での研究活動が定着した頃、畑井は、熱帯圏での海洋生物学研究に意欲を燃やした。第四回太平洋学術会議が開かれた際（一九二九年）、畑井は、日本科学者代表団長として活躍したが、「サンゴ礁の生物学的研究」のプロジェクト採用に熱心であった。畑井は、その具体化に率先して努力し、研究調査の適地にパラオ群島を選んで、その予備調査をした。

一九三三年第五回太平洋学術会議では、参加各国の共通プロジェクトとして、サンゴ礁の研究が採択された。日本学術振興会は、畑井を所長とする「パラオ熱帯生物研究所」をコロール島に誕生させた。ここでの研究は、一人六ヶ月滞在を原則とする現地調査である。各大学からの研究参加は、一九四三年までに延べ三十五名あり、その研究成果は、*Palao Tropical Biological Studies* として刊行され、太平洋戦争で閉鎖されるまで六十六篇の論文となった。

畑井新喜司著の単行書には、岩波講座生物学で分担した「牡蠣の生理」（一九三二年発行、六八頁）と、改造社発行の『みみず』（一九三二年、二二八頁）がある。両書とも、畑井研究室の主要テーマであったカキと、ミミズの生理学的研究の成果が元になったと序文に書いてある。



内容は、両動物の分類から生化学に及ぶ研究成果を紹介したものだ、前

者は一般研究者を対象にして書かれ、後者は一般教養書として執筆している。

『みみず』の序には、一般の人にもう少し自然界に注意の目をひいて貰いたい老婆心から筆を執ったと述べている。また、この書の扉一頁分には、「蚯蚓札賛」なる漢文調の短文が載せてある。畑井が少年時代、身につけた漢文の素養がいかされた名文で、ミミズの生活と利用のことがまとめられている。各方面から多くの賛辞が寄せられたという。

畑井が座右の書として、自宅に、教室の研究室に、浅虫臨海実験所長室にと、三冊の英訳したダンテの「神曲」を置いていたのは、仕事の合間をみては何時でも読めるようにしたからだという。詩聖といわれるダンテの人となりばかりでなく、神学者であり哲学者でもあり、また古典的自然科学者でも

あったダンテの作品を、身近に置いて親しんでいた畑井の姿には敬服する。

動物学者畑井にとっては、「神曲」のなかで、ダンテは生命の霊を重んじ、心の洞に血液の溜りがあつて、体内を循環し、内臓特有の働きが司られている、という辺りの詩を読んでは、畑井は、十三世紀末のダンテの鋭い洞察に、さぞ、感慨にふけったことであろう。

ある時門下生の一人に、机上の「神曲」の口絵を見せながら、「ダンテによればだ、君も僕も妻も、いや殆んどすべての人間は、地獄に陥ることになっているんだ」と話し、過去をして過去たらしめよ、と結んで人生修業の

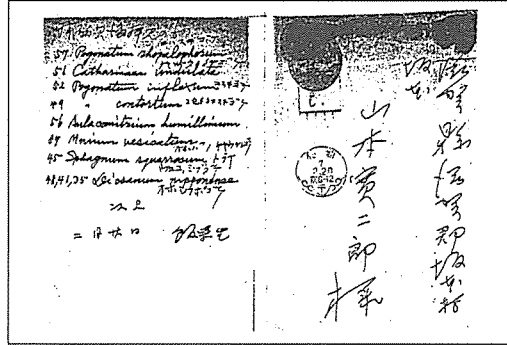
厳肅さを教えてくれたという。

なお、ダンテ研究で著名な東北学院教授であった山川丙三郎は、文科専修部の第一回生で、理科一回生の畑井と同期であり、帰国後の畑井とは親しい間柄であったという。また、畑井は在米中に、恩師ドナルドソンにすめられて「神曲」を机上に置いたと聞く。

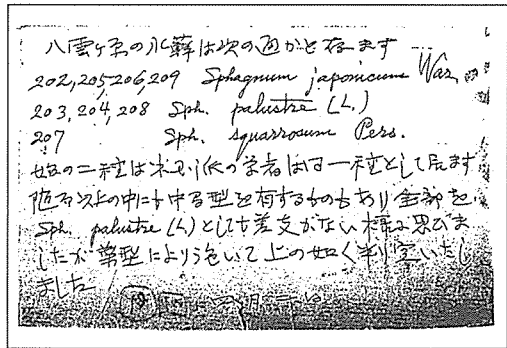
## 二 飯柴永吉

一九九〇年初夏、飯柴永吉関係の資料の一つとして、高知大学助教授出口博則から送られてきた「山本寛二郎植物研究覚書（C）」第一号を見ると、その中に、一九三二年から一九三五年の間に、山本寛二郎が受理した飯柴永吉の書簡があった。その殆んどは、山本が採集した蘚苔類（コケ）の同定依頼に対する飯柴の返書である。たとえば、一九三二年（昭和七年）二月二十日付の葉書には、「拝啓其後拝見のもの。ニワスギゴケなど八種類の種名。以上」とあり、また、一九三四年四月二日付の返事では、「八雲ヶ原の水蘚は次の通かと存じます。標本番号八ヶの種名。始の二種は米国派の学者は同一種として居ます。随而以上の中にも中間型を有するものもあり、全部を *Sph.palustre*(L.) としても差支がない様に思いましたが、葉型により強いて上の如く判定いたしました」とある。

飯柴のもとに送られてきたコケ標本には、一つ一つ番号が付せられているので、その番号と同定した種名が返



二月二十日付 飯柴からの返書



四月二日付 飯柴からの返書

には、自分が命名者になっているカトウゴケ *Cladobryum katoii* Broth. が産するので御注意願う」と、滋賀県

在住だった山本に報らせている。

飯柴永吉  
植松榮次郎  
加藤鉄次郎 共著

# 普通日本蘇類圖説

東京 成美堂發行

このカトウゴケは、加藤鉄治郎が観音寺山で採集し、飯柴がその標本をヘルシンキ大学のプロテルス (V.F. Brotherus) 博士に同定してもらい、一九二〇年新種として発表されたコケのことである (広島大学関太郎談)。

加藤鉄治郎は、元東北大学長加藤陸奥雄の父君で、明治後期から仙台

事となる。それに、コケ専門家として問題視される種については、四月二日付返書のように、飯柴の意見をつけている。また別の返書には、コケ採集上の詳しい注意からコケ研究書の紹介までが懇切に記してある。

明治後期から昭和初期まで、植物研究、なかでも蘇苔類植物の研究で活躍した飯柴永吉は、晩年、国内各地から送られてくるコケの同定で多忙をきわめた。その一例を紹介したのであるが、別の山本宛の返書に、「滋賀県観音寺山



に居住し、東華女学校などで博物学を教えていた。この頃、旧仙台一中の教諭であった植松栄次郎も加わり、飯柴永吉（学院普通科教諭）は、『普通日本蘚類図説』（一九一二年、成美堂発行、五四八頁）という日本で最初のコケ図鑑を作っている。三名の共著であるが、加藤は絵画の才能に秀でていてというので、この書のコケの挿図を担当した。

この頃の飯柴、植松、加藤は、各地での植物採集歴が豊富で、また採集旅行に同行しあうことが多かった。飯柴家に保存してある飯柴永吉記の「採集旅行日記」其一（一九〇二年から一九〇九年）と、其二（一九一〇から一九一三年）によると、交通不便であり山行きが不自由な時代に、秋保、泉岳、金華山島を採集して歩き、蔵王山、栗駒山、飯豊山、早池峰、岩木山、八甲田山などへも足を伸ばして植物採集をしている。

採集旅行の同行者には、植松、加藤、京道（前出）の名が頻出するが、興味深いことには、一九〇五年夏の吾妻山への採集行に、笹尾兼太郎・出村悌三郎の同行があったことである。学院理事また学院長になった若き時代の二人が、飯柴の植物採集に黙々とついて行く姿があったのである。この山行きは、途中大雨にあつて予定を変更し、日光へ廻る九日間の旅であつた。

飯柴永吉の植物関係の論文が公表された初めは、早池峰採集記（『理学界』一九〇五年）である。翌々年とその次年度には、それぞれ十篇づつの多数の報告が『植物学雑誌』に掲載されて目立った。それは、「東北地方植物目録」の表題で、其一から其拾参までのシリーズが中心で、高等植物とコケ類の目録、分布が地域別に記したものである。そして、其一の前文には次の文言が入っている。

予此地ニアル茲ニ五星霜跡渉未タ全般ニ至ラザルモ殆ンド主ナル山岳ヲ見舞ヘリ。―我国各地ノ目錄相次デ出デ予ガ此記事其隗タルニアリ―

と記し、この報告は仙台付近から始め、あと東北諸山に及ばず予定であると。飯柴の英気満々たるところを示している。其五と其拾參は、蘚類の目錄と分布について報告してあるが、同じ頃、別の報告で仙台付近のコケ類目錄と分布が掲載してある。飯柴の植物採集で、本格的にコケに注目した初めの頃になる。そして、蘚苔類の分類や分布調査に、積極的に手を下していく。

一九〇九年から一九一二年にかけては、日本産ヤスデゴケ属、シモフリゴケ属、スギゴケ科、それぞれの蘚類の分類検索表をつくり、各種の分布についても論じた報告を五篇発表している。このようにして、飯柴が、植物学雑誌、理学界、サイエンスなどに報告した論文数は、大正末までに三十二篇となり、うちコケ関係が十五篇になった。コケの新種、新産地の記録が増え、飯柴はコケの専門家として認められるようになった。

飯柴永吉は、一八七三年三重県一志郡中原村で生れ、十八歳から二十八歳まで小学校教師を勤めている。一九〇二年、師範学校中学校の教員検定（植物学科）に合格し、上京して私立大成中学教諭、ついで仙台の私立東北中学教諭となる。一年ほどして、一九〇三年五月、三十歳の時に、東北学院普通科教諭に就任した。

以降、一九三六年まで三十三年間、学院で教鞭をとり、同年の六月六十四歳で亡くなっている。その間、一九一〇年に動物学科の検定にも合格し、学院では博物学を担当した。

ところで、学院理事会の記録によると、学院での専任教員としての勤務は一九二八年までであって、それから

退職するまでは、講師嘱託であった。「一身上ノ都合ニ依リ今学期限り正教員タルコトヲ辞シ植物科講師トナリ度旨願出アリ之ヲ許可シ……」と記録されている。週六時間の講師勤めになった。

飯柴にとって、この節目は、二十数年間にわたる教育と研究を両立させてきた生活から、大幅にコケ研究の生活に専念する転期に当たったようである。

植物の分類、形態や分布の研究には、いうまでもなく、標本にする植物の採集、その検索、そして保管が重要な仕事になる。コケ類を研究材料にしても同じだが、検索し分類する作業が細かく、同定を確かなものにする場合は、解剖して顕微鏡で検査するので、多大の時間を必要とする。

飯柴は、コケ標本と高等植物の標本が多くなり過ぎた頃、自宅より学院校舎内に保管するのが安全として、一部の標本を残して他殆んどものを理科室に置いていた。それが、一九一九年三月の仙台大火の折に、校舎とともに全て灰燼に帰してしまった。焼失後、初めての開講式に、シュネーダー院長がこの損失にふれて、「飯柴先生の集められたものもとられました」との挨拶をした。飯柴は、その言葉を聞いて、しゅんとしていたのが印象的であったと、『東北学院外史』（青木徹）にある。

このコケ標本の焼失は、飯柴個人の損失であるばかりでなく、新種として登録した時の原記載にある多くの標本が失くなったゆえ、コケ類学界にとっても大きな損失となり、後年、コケ研究をする上で多大の障害になった。

一九二九年から二年間、仙台育英中学で教師をしたことがある野口彰（熊本大学名誉教授）が、在仙時代に足繁く飯柴宅を訪ね、教えをうけた頃の思い出がある（『日本鮮苔類学会報』第一巻）。それによると、すでにコケ学大家である飯柴は、実直そのもの無口で、ナイーブな方で冗談一つ出ない対応ぶりであったという。五十七、

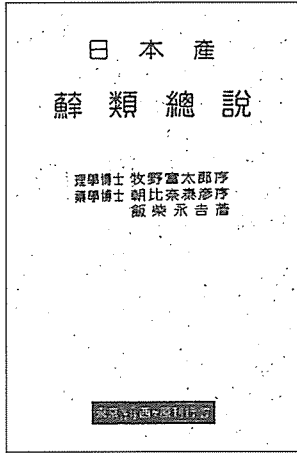
八歳になる飯柴と、二十代半ばの野口との交流が続いた。

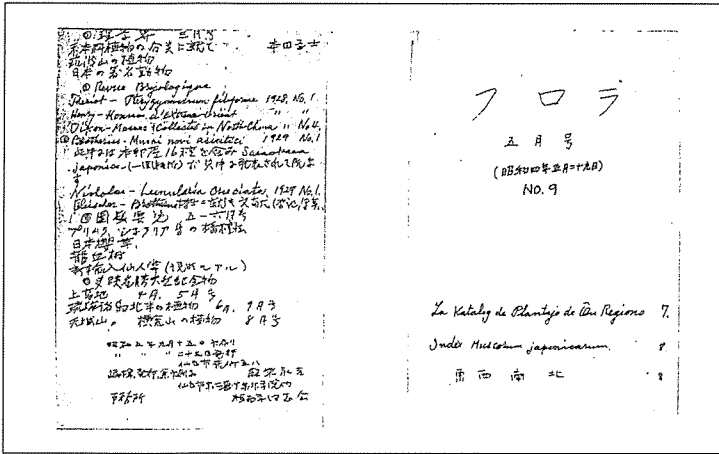
二年間に、どのくらいお宅を訪ねたか数知れないが、大抵夜であった。なに一つ世間話をするのでもなく、コケの話に終始した。私はコケに足を踏み入れたばかりの頃である。この先達から何でも引きだそうと考えているから、熱心でもあり厚かましくさえあった。それにも拘らず飯柴氏はコケが貼つてある帳面を見せて、コケの性質や採集した時の様子、関係する文献などを示される。

この頃、飯柴は学院の講師囑託で、比較的在宅する機会が多く、野口ら各地からの訪問者があってコケの教えを受けていた（飯柴三郎談）。ふり返えれば明治後年より二十余年、飯柴はがむしゃらといえるほどコケ採集と、標本づくりをし、コケ分類の検討を続けてきた。各地からの訪問者、専門家からの同定依頼や標本交換の仕事が増えた。

かくして飯柴の昭和初期は、わが国蘚苔類の資料収集とまとめに入る転期となった。若手のコケ研究者が出て多くのコケ論文が発表される時代になった。飯柴はこの時にこそ、自力でえたコケ資料を元にして、コケ研究の集大成を図るべきだと決心したのであろう。

たまたま、この頃、飯柴が恩師として敬い、常にコケの同定を依頼していたプロテルス（V.F. Brotherus, 蘚類）とステファニー（F. Stephani,





「フロラNo.25-26の頁10、東西南北と奥付」, 「フロラNo.9の表紙」

苔類)が相次いで亡くなった報らせをうけていることも、転期を志した一つの要因になったかも知れない。

昭和期に入ってからからの飯柴の論文数は十三篇となり、単行書が五冊となった。飯柴のコケ研究のまとめが現れ、たことを示している。このうちの、『日本産蘚類總説』と『日本産蘚類の分類』の両書は、一九二九年と一九三二

年発行(西ヶ原刊行会)のもので、わが国コケ分類学の草分けになった専門書である。飯柴の意気込みと精力ぶりに驚かされる。発刊を急がれたためか、不備な点もある、としても、わが国コケ研究のまとめに先鞭をつけた偉業であることに変わりはない。

また、一九三〇年『日本苔類総説』(謄写刷、仙台植物同志会刊)も発刊した。これで日本産の蘚と苔のまとめができたことになる。次いで、『日本産地衣類誌』の上梓も計画し、上巻のみが飯柴逝去後に岡山リムルス学会より発行されたが、その後は未刊である。もう一つの著書は、日光東照宮より発行された日光の植物・動物の分担執筆で、『日光の蘚苔類』である。この書の発行も逝去後となった。

昭和期に発表した論文は、植物学雑誌、札幌博物学会報、熱帯農学会誌、斎藤報恩会博物館時報などに掲載されたもので、ラテン語で書いた二つの論文が含まれている。

ところで、昭和期のまとめに入った飯柴の論著のなかに、珍しい形

の成果物がある。飯柴個人でつくった「フロラ」という謄写刷の雑誌である。一九二九年四月から一九三五年十二月まで、初めは定期発行だったが、あとは不定期となり、合計で四十九冊（四十九号まで）発行された。飯柴は、自分の手で原紙を切り、和紙に刷って同好者に配布した。毎号六ないし十頁で、年会費二十銭から五十銭で分けていた。

「フロラ」の内容を見ると、奥羽地方植物目録として二十六回分、日本蘚苔類目録が十四回分、日本産蘚類異名（七回）、植物分布資料（五回）、日本産蘚苔類参考書目録（三回）、その他、日本産苔類総目録、蘚類科属索引、などがあり、毎号終りには、東西南北（新刊の著書雑誌の紹介、連絡記事など）の欄が設けてある。これらを見ると、飯柴が力を入れたコケの分類と分布に関する記事が多く、また東北地方に分布する高等植物の目録づくりに貴重な資料が提供されている。

前述したように、一九二八年に学院中学部の正教員を辞めて講師になった節目から、「フロラ」づくりが初まり、亡くなる前年まで発行を続けた努力には驚嘆する。単行書として刊行されたコケ専門書の下書きともなった「フロラ」であるが、次々と新しいコケ情報を提供する役割も果している。

あくまで自力で、遅れがちの学会誌発表を待たずに、急いで、自分の考えを表明しておきたかったのであろう。晩年に体調を崩すことが多かったことも原因の一つになったろう。手元で、確実に早く書き、安価で配布する方法としてガリ版刷を選んだのであろう。ラテン語で記すコケの種名に、印刷所に委せた場合の誤りには、飯柴も大分閉口したのであろう。

わが国における植物学発展の歴史をみると、コケ類研究が学会誌に発表されるようになったのは、明治期半ば

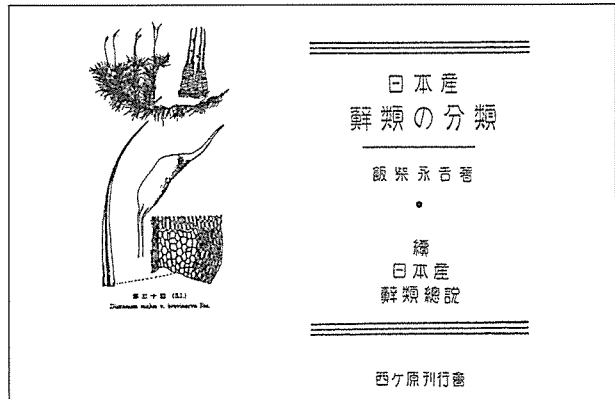
になってからである。高知県にいた岡村周諦（のち慶応義塾教授）と植松栄次郎（前出）は、早くから、採集したコケをプロテルスに送り同定してもらっていた。少し遅れて、飯柴は、岡村のすすめでコケをプロテルスに同定依頼をするようになった。

岡村は、やがて東京帝大選科で本格的なコケ研究をし、同定も自力でできるようになるが、飯柴は、プロテルスが亡くなるまで、ずっと、コケ標本を彼の所に送り続けた。独学で苦勞し、あくまで慎重を期して、「種」を扱った態度の違いであろうか。岡村に師事している頃、もう一人、飯柴の活躍に大きな支えとなった下等植物の研究者がいる。一八九七年、旧二高教授となり在仙して地衣類、菌類の研究業績をあげていた安田篤である。

安田について回想した文によると、「研究以外に何物もなく、几帳面の日常で、一面奇人的であった」（『地衣雑報』第6号）という。何故か飯柴の生活ぶりとはダブって筆者には映る。安田もコケ同定のため、プロテルスの所に標本を送ったことがあるという。

一九〇〇年、安田は仙台博物学会を創立して、その世話を引受け、月例会を開いて、在仙の動植物学、農学、地学関係の研究者、教師の勉強会に当てていた。その記録『動物学雑誌』によると、六十三回の例会をもち、安田を初め多くの研究発表があり、植松栄次郎、京道信次郎、飯柴永吉らの発表もあった。安田は、若手の植物研究者の面倒をよくみたようで、外国の学者への通信や、学会への紹介などしている。また、植物採集行で飯柴らと合流すると、多くの植物情報を提供している。

仙台荒町の飯柴家の庭には、飯柴が植えたタイサンボクの花が白く大きく匂って見えた。ツツジ類、ツバキ類、サクラの仲間など各地から寄せて栽植してあったし、庭木の間はクラマゴケがびろうどのように繁茂していた、



日本産藓類の分類、表紙とP.101のサクナミシッポゴケの図、S.1.とある

と三男飯柴三郎の話である。この家の前は、小さな植物園といえる程、多くの草木が飯柴によって植えられていた。また、地むろも作られて暖地性植物が囲われていた。

学院の生徒に、いつでも実物を見せて教育したいとの念願で、全国各地から採集した植物を植えていた。夏など植物への水掛けが大変で、よく手伝いをしたと三郎はいう。三郎は、『日本産藓類の分類』にあるコケの挿図画きも手伝ったという。図の下に小さくS・I・と印してあり、当時中学生であったというが、父のスケッチに劣らない確かな図である。

飯柴永吉は一九三六年六月十七日に永眠した。当時の『東北学院時報』に、中学部長五十嵐正の追悼文が載せてある。その中に「就中、藓苔類の研究に於ては世界的名声を博し―而も謙虚にして名を求めず孜孜として研究に従事せられた」とある。享年六十四歳であった。

くしくもこの年、東北学院は創立五十周年を迎え、五十年を物語る記念物の展示があった。その一隅に、飯柴永吉著『日本苔類総説』があった。それは、平成の今、学院図書館蔵として、飯柴を語る唯一のものとなっている。

なお、飯柴永吉逝去のことは、オランダで発行している藓苔類の世界的情報誌“Annales Bryologici”の十巻に、肖像とともに主な業績が紹介され世界的に記念されている。



終りに、一属一種として発見されたイイシバゴケ属イイシバゴケ (*Ishibaea japonica* Broth.) は、飯柴が一九〇九年（明治四十三年）信濃白馬尻で採集したコケである。

貴重な資料を提供して下さいました左の方々に心から謝意を表します。

飯柴三郎、井上浩、岩月善之助、加藤陸奥雄、北川尚史、木村有香、関太郎、高木典雄、出口博則、畑井勉、水島うらら、沼宮内隆晴、青森県立図書館、斉藤報恩会図書室、東北学院史料室、東北大学浅虫臨海実験所、東北大学生物学同窓会、山形六日町教会（アイウエオ順）。

## 杉山元治郎と労農運動

森 健 一

### 一 土に生き基督者となる——東北学院への道程——

杉山元治郎は明治十八（一八八五）年十一月十八日、大阪府泉南郡北中通村下瓦屋に政七を父とし、具満（くま）を母として生まれた。北中通村は大阪湾にそつた半農半漁の一寒村であつたが、生家は地引き網の網元の他に銭湯屋を営業し、更に精米業など、農業の他にも手広く仕事を行つていた。

明治二十七・八（一八九五・六）年、日清戦争の頃、隣村の鶴原部落にある北中通村立鶴原尋常小学校に入学、佐野町の尋常高等小学校に通学してゐた頃、家運が傾きかけ家の手伝いをするようになった。家の畑でできた野菜類を佐野町の八百屋に持つて行き、学校の帰りに代金と籠を貰つて帰る。途中、巡査の子に「土ん百姓、今日は何程もうけたか」と悔られ、怒つて天秤棒で殴ることもあつたほど、少年時代は貧乏の苦しさに耐えながら働いてゐた。

しかし家はますます貧窮の度を深めたため、明治三十三（一九〇一）年四月、学資を大阪府から補助してもらうことができるという理由から、つまり学資のかからぬ学校を選ばなければならぬということ、大阪府立農

学校に入学した。

当時農学校は全員寄宿舎生活で午前六時起床。入学した翌日から水田に入り、重い鍬を用いて泥田の除草の初実習をさせられるほど実習教育に重点をおくスパルタ教育であった。午前中は学課、午後は実習の連続であり、泥田の除草や茶摘みからハムの製造、麦酒の醸造など肉体的にもきつい作業を身体で覚えていった。彼はこのような厳しい生活環境のなかで、農業の実践的な知識と技術をみっちり叩き込まれてゆく。しかも実習主任の布施常松から強い精神的な感化を受け、とりわけ神について知らされ、キリスト教信仰に入る下地を与えられた。

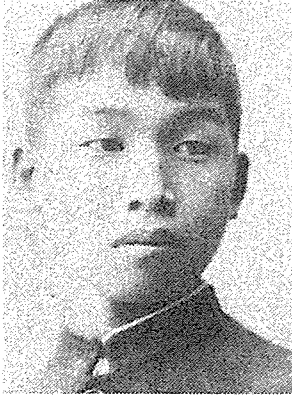
いずれにしても後年、杉山元治郎が農民運動家として大きな足跡を残したのは、彼のこのような出生と少年時代の貧しさと厳しい生き方によるところが大きかったといえよう。

明治三十六（一九〇三）年三月、大阪府立農学校を卒業し、十月、和歌山県農会技手となるが、この府立農学校時代に皆田篤牧師により受洗している。

その間の事情について自叙伝『土と自由のために』（十八頁）によると、ある日曜日、鳥ノ内の町内を歩いて

ると基督教会があり、「好奇心にかられて一寸入り口からのぞいて見た」ことから「日曜日毎に誰からすすめられたのでもないが、足は教会堂のある方に進み、入口の座席に忍び込み、そつと説教を聞いた」という。

そうしているうちに明治三十五（一九〇三）年の秋、当時特に親切に導いてくれた竹内孤梅（青年画家）の勧めもあって、ごく自然に受洗することになったと記されている。



大阪農学校時代

和歌山県農会に技手として勤めている頃、和歌山市三木町の日本基督教会に通っていたが、その当時の教会の牧師はアメリカ帰りの滝本幸吉郎であった。

当時、教会には沖野を中心として、三十人近い青年が集まっていたが、たまたま日露戦争のさ中で、杉山の言う「非戦論騒ぎ」があった。

『明治学院百年史』の「第四章、第六節、卒業生の社会活動」のなかに、「紀州グループの人々」として次のような記事が残っている。

日露戦争に際して、和歌山県の一角で非戦論を叫んだキリスト者青年グループがあった。沖野若三郎を中心とする児玉充次郎、杉山元治郎、山野虎市たちの紀州グループがそれである。かれらは伝道者の道を志して、杉山は東北学院、その他は明治学院の各神学部に進学した。沖野、山野、児玉はいずれも明治四十年六月に神学部別科を卒業した。

沖野は卒業後、紀州新宮教会に赴任した。ここで、かねて明治三十九年（一九〇六）の夏期伝道の際に出会った大石誠之助との親交がつづいた。いうまでもなく、この大石は、いわゆる大逆事件に連座して処刑されたドクトル・大石である。（略）

明治三十七年（一九〇四）十一月十四日、山野はいわゆる『真紅』事件により、戦争反対運動の尖鋭分子として、教会から除名された。『杉山元治郎自伝』（二十二頁）では、この『真紅』事件がもう少し詳しく書かれている。

そのうちに加藤一夫氏は和歌山中学生を相手に同人文芸雑誌『真紅』を発行する計画を立て、私にその発行人になることを依頼されたので引受けた。幸いに三号雑誌に終わらずに順調に発展したので、あるとき、和歌山城内の葵俱樂部で祝賀演説会を開いた。当時私達の仲間には平民新聞の愛読者が多く、人道主義的、キリスト教的社会主義の非戦論者がいたので、日露戦争の最中であるにかかわらず、出る弁士も出る弁士も非戦論を唱えた。翌日の和歌山新報が「和歌山市に露探現る」と大見出しで「中学生相手の雑誌真紅の幹部は非戦論を説く露探だ」と報道したので、和歌山市内は上を下への大騒ぎ、ちようど開かれていた県議会の問題になり、雑誌はすぐさま発行停止、生徒達はそれぞれの処分を受けて私達の仕事も泡の如く消えてしまった。

この事件によって沖野を中心にした山野、兎玉、加藤等は明治学院神学部へ、そして杉山だけが仙台の東北学院神学部に入る道を選んだ。

なおこの間、杉山は在学中から和歌山時代にかけて、内村鑑三の影響を受けたことも無視することができない。彼に大きい影響を与えた布施常松は、内村の信奉者であり、特に杉山は万朝報を愛読、内村の論文を研究課題とし、内村の主宰した『聖書之研究』は熟読していたという。内村が日露戦争に対して、平和主義や非戦論を唱えたことが、和歌山の青年をめぐる『真紅』事件の思想的背景となったことも容易に想像される。また農業こそ宗教的であり、無から有を生ずる神に次ぐ業務であるとする内村の「宗教と農業」と題するパンフレットにより、農業を愛し、農民の味方になる決意を固めたと言われ、のちに農民福音学校運動を起す原動力となった。



東北学院時代

杉山が東北学院神学部に入る決心をして仙台に着いたのは、明治三十八（一九〇八）年九月一日であった。

しかし、当時の専門学校は九月が新学期であると思ひ、杉山が仙台に着いて南町通りの東北学院を訪ねると、四月が新学期のため入学することは許されず、頼りにしてきた労働会も生徒でなければ入会も許されず、途方にくれざるを得なかつた。

そこで、東七番丁のある下宿屋に身を寄せ、友人の送金により翌年の四月まで生活を続けたという。杉山は当時、昼なお暗い孝勝寺の森の中でひたすら祈つた。

「私の欲望ばかりではありません。神の国の拡張を考え、その準備のため仙台に参りました。聖書に神の国とその義（ただ）しきを求める者には必要なものをみな与えられると約束せられているが、私は飢えていま死なんとしております。しかし私は神の約束を信じます。たとえ餓死するとも仙台で頑張りましょう」（『杉山元治郎伝』二十四頁）と記している。

ところで当時東北学院の神学部別科は、相当の年配者やすでに妻子をもつ学生など多彩な人物が揃っていたため、生え抜きの普通科出身の学生からは疎んぜられがちであつた。

在学中の杉山は、学業の面のみならず人格形成の面でも、深い感化をシュネーター院長から受けた。礼拝、勉学そして労働と、ほとんど休む暇もなかつたなかで、入学した年の夏に杉山は無銭伝道旅行のために富士登山を行い、明治四十一（一九〇八）年夏には仙台から和歌山へ四十五日間の伝道旅行、秋には盛岡を振り出しに東北

六県を伝道旅行している。翌年には救世軍ブース大将の来仙を機に、親しくその風貌に接し神に仕える決意を新たにした。また旧師布施常松よりメキシコにくるよう勧誘の手紙が来るが、シュネーダー院長からメキシコよりも日本にあって伝道するよう諭されている。

明治四十一年（一九〇八）年二月から級友四名とともに街頭伝道のため「クロス協会」をつくり、その責任者となつて機関誌『クロス』も発行。毎土曜日に寒い冬のときでも東一番丁の当時の藤崎呉服店の前で路傍説教をつづけ、東北冷害救援活動に身を投ずるなど、すでに学生時代から社会救済活動に意欲を燃やしていた。

このように杉山は東北学院に学ぶことにより、シュネーダー院長をはじめ、多くのよき師からキリスト者として生きる道を見出し、ブース大将によつて決意を新たにしたが、他方では無銭伝道や路傍説教によつてたくましい実行力の持ち主となり、後の農村伝道や労農運動への強靱な力が養成され、その後の人生の礎を築いていた。

## 二 苦難の農村伝道から農民組合の設立―賀川豊彦との出逢い―

明治四十二年（一九〇九）年三月、東北学院神学部を卒業した杉山元治郎は、卒業と同時に財政難のために、まさしく閉鎖の危機にあつた仙台東六番丁教会の牧師となつた。若き日の情熱と神への使命感が苦難の道を選ばしめたのであるが、月給一円五十銭であり、それは和歌山県農会技手のときの月給十五円に比べても経済的にいかに苛酷な伝道生活であつたかを推察することができよう。

しかし、杉山は栄養不良と過労のため肺を侵され、十一月には仙台を去ることになり、大阪島ノ内病院に入院した。医師からは六カ月の生命と宣告されたが、精神力により快方に転じ、翌年から紀州白浜で療養生活を送っている。



小高教会時代

明治四十三（一九一〇）年七月、シュネーダー院長の要請により、福島県相馬郡小高町の日本基督教会牧師となる。大正九（一九二〇）年十月まで、信者も少なく経済的にも恵まれてはいなかったが、あえて自給伝道の道を選んだ。そこで「種苗取次販売」「農具一式取次販売」「多木製肥取次販売」「屋根瓦製造販売」「相馬焼陶磁器取次販売」と多くの看板を掲げ、更に「杉山式瓦用犁」や「杉山式自転車修繕器」まで売り出した。

また、家族を呼んで水田二反、畑一町を借りて葡萄、桃、林檎、柿などの果実のほか野菜を作り、初めて玉葱とキャベツを大阪から持ち込み小高で栽培すると同時に、豚や鶏も飼ったという。

とにかく相馬焼を背負って大阪まで行って売り、帰りにはゴム足袋や靴下止めなども仕入れてくる。一方教会の入り口では、夫人が焼き芋釜を据えて焼き芋を売るといふ生活であった。

まさに八面六臂の仕事ぶり、彼自ら荷車を引いて町や村を行商し、雨の日も風の日も町中を売り歩くなど、生活のために血のにじむような奮闘を続けた。しかも、生活を通して農民と接することで、いつしか農民の気軽な相談相手となり、具体的な農作業についての適切な指導を与えるよき農業技術者になっていた。

反面、小高教会においては、教勢の発展はほとんどなかった。杉山が赴任した年、明治四十三年（一九一〇）



の在住会員数は十二名で、礼拝や祈禱会への出席者は七名か八名ほどであった。そして教会堂が建てられた翌年、それは杉山が小高を去る前年であるが、小高教会の教勢最も盛んな年でさえ在住会員数は二十一名、礼拝や祈禱会への出席者は十二名でしかなかった。

結局、杉山の十一年間にわたる小高教会の牧師生活のなかで受洗者は男七名、女三名、その中に彼の家族が五名含まれており、いかに農村伝道が困難であったかを示している。そのことは彼のノート『農村伝道に対して』において「農村に於ける迷信と戦うには如何にすべきか」を説き、「農村伝道に関する注意」に「農村事情を知ること、特に農民心理を知ること」を強く訴える根拠となり、それが『農村伝道の理論と実際』にあって、冒頭のこと、「一人の靈魂が全世界の富よりも貴い」と仰せられたイエスの精神よりすれば、人間の居る處、其ノ靈魂を救うために伝道の必要があるのである。故に是は都会伝道は、農村伝道或いは漁村伝道と区別すべき理由はない。靈魂のある所、殊にイエスの教への行届いて居らない所には時を得るも、時を得ざるも熱心に伝道せねばならぬのである」と農村伝道の必要性を説かせた素因ともなった。

このような苦しい農村伝道という逆境のなかで、彼は小高教会の外、大壠村、幾世橋町、飯崎原八沢浦干拓地まで伝道の輪を拡げていき、とりわけ自ら開拓した八沢浦干拓地においては、毎土曜日、農業上や移住民等の相談に応じ、また倉庫の二階を礼拝堂にして日曜日の礼拝を行う彼の真摯な姿にうたれて三十三人が信徒となり、恩師シュネーダー院長より洗礼を施してもらった。老院長は、愛した生徒のこの意外な成功と奇跡とに涙を浮かべて感動したことであった（沖野岩三郎『八沢浦物語』）。

その間、ホルマン著『国民高等学校と農民文明』の訳書を読むことによって、大正二（一九一三）年二月に「神

を愛し隣人を愛し、土を愛する精神をもって死を克服する奉仕者をつくる」ことを決意するとともに、農民高等学校を開校し、農村伝道の出発点を創った。

なお、この当時日刊誌『農業と宗教』を発刊、また「小高文芸会」を結成している。その目的は小作人の苦難を除き、農村の窮乏を救うにしても、農村を立派な文化の香り高いところにするにしても、その根源は人間であると考え、農業開発により田を作るには人を作ることが先決条件と教育事業の重要性を認識したからに他ならぬ。

大正七（一九一八）年小高教会の会堂建設を思い立ち、建設資金の募集にとりかかったが、青年実業家の寄付や農村青年の無料奉仕により完成した。しかもその間、『農村経営の理想』『農家経営の実際』『農家経営実地応用五用論』など農業経営に関する著書を精力的に出版している。

ところでキリスト教の牧師として農民とともに生き、農業技術の教育者でもあった杉山元治郎が、本格的な労働運動の指導者として社会問題に身を投じたのは、賀川豊彦との出逢いにある。

大正の初めごろから農村問題が議論されるようになったが、大正七年に物価は急速に高騰し、労働争議の波が高まり、七月には富山県の女房一揆、つまり米騒動が全国を席卷した。

同年十一月、沖野岩三郎が、雑誌『雄弁』に「日本基督教会の新人と其事業」を発表した。沖野岩三郎は同論文において、明治の初年から諸種の障害と苦闘しつつ、世界主義の宣伝に力を尽くした基督教会の新人、新島襄、植村正久、押川方義等をあげたうえで、「私はいまここに現今の日本における牧師中、最も社会と密接の關係にある事業をなしつつある二人の新人を紹介しうることを栄光とする。」それは「極端なるほど熱狂な賀川豊彦を紹介

すると同時に、冷静温厚な新人杉山元治郎を紹介したい。」として、生きた農業辞典、農民とともに生きる杉山牧師を次のように記している。

教会の牧師として、彼くらい社会の人と接触した牧師はおそらく稀であろう。私は温厚で誠実性に富んだ杉山元治郎と、熱烈にして篤学な賀川豊彦とを日本の基督教界における新人として推薦しえたことを喜ぶものである。

最早、今後の宗教は殿堂内に閉籠もつてはならない。口先の説教のみでは足りない。教養や神学をかれこれというている時代ではない。他力であろうが自力であろうが、そんな小さいことを争論している場合ではない。社会の民心をよく洞察して、その民心を如何にして導いていくのか、ということに専心を傾注しなければ、何の益にも立たない宗教である。私は賀川、杉山二氏をもつて、現今の基督教界におけるもつとも進歩した新人であるということを憚らぬ者である。

杉山がいよいよ社会運動に身を投じようとして小高の地を去つたのは、大正九（一九二〇）年十月四日であった。杉山は郷里大阪に行き、神戸市葺合の貧民窟に賀川豊彦を訪ねた。そのとき賀川は「労働運動はわしがやる。君には一つやって貰いたいことがある。それは農民組合運動だ。しかし時期がちょっと早い。しばらくの間待っていてくれたまえ。いずれそのうちに通知する」（『杉山元治郎伝』一五七頁）と語つたというが、ここに杉山の農民組合運動への第一歩をみる事ができよう。

杉山は大阪市の弘済会育児部の舎監兼農園指導者として午前中は働き、午後から夜にかけては大原社会問題研

究所員の一人として、大日本労働総同盟の成立をみた労働運動や社会事業について研究を深めた。

大正十（一九二一）年、労働者解放の論理と倫理を高唱した賀川からの手紙により、農民組合の発足を期したが、杉山の勤務の都合により、翌年四月、弘済会を退職するまで待たざるを得なかった。しかし農民組合の設立は、新聞記事にも大きく取り上げられ、協力者も続出してきたのである。

その間の事情を『日本労働組合物語』（大正編、大河内一男、松尾洋共著、筑摩書房、昭和四十年）第五章の「水戸平社と日農」は、次のように語っている。

大正十年の秋ごろ、神戸で総同盟を指導した賀川豊彦、福島県下でキリスト教の伝道にしていた杉山元治郎が、農民組合の結成について相談し、大阪毎日新聞記者村島帰之がこれを紙上に取り上げたことから、急速に話はまとまっていた。神戸の賀川宅には日本農民組合創立本部がおかれ、十一年一月には、雑誌『土地と自由』が創刊された。日農創立発起人は、東北、関東、関西から、中国、四国におよび、前川正一、玄岡八十一、難波孝夫ら一生を農民運動にささげた人々が名を連ねていた。

大正十一年四月九日、神戸のキリスト教青年会館講堂に百二十余人の農民代表を集め、日本農民組合が産声をあげた。賀川、杉山の開会の挨拶につづいて、総同盟神戸連合会柴田富太郎、おなじく関西労働総同盟会藤岡文六、総同盟鈴木（茂三郎）会長らの祝辞が述べられた。大会は、組合長に杉山元治郎、理事に賀川豊彦らの十人を選び、

綱領

一、われら農民は知識を養い、技術をみがき、徳性を涵養し、農村生活を享樂し、農村文化の完成を期す

二、われらは、相互扶助の力により相信し相寄り、農村生活の向上を期す

三、われら農民は穩健着実、合理合法なる方法をもつて、共同の理想に到達せんことを期す  
をはじめ、宣言、主張を決議した。

宣言・主張の目的は、「農は国の基であり、農民は国の宝である」という視点に立ち、「農民組合の目的は農村を立派にし、農村に働いている自作と小作の方々が安心して仕事に従事することのできるようにすること」であるから「吾等の目覚める時がきた。吾等は長き眠より覚めて真の生命に生きる春に会した。吾等の団結はこの春の喜びを長くつづけるためである」と小作人に呼びかけたのである。

大正十一（一九二二）年一月、日本農民組合機関誌『土地と自由』を創刊した（正式に機関誌となつたのは、この四月の結成大会以降）。

以下の『土地と自由』の創刊号における巻頭言の部分をもつても、杉山は社会主義的革命思想によつてではなく、キリスト教的人道主義の立場から、むしろ協調主義的立場による農民の解放を期待していた。

地主を苦しめ、地主を倒せば小作人が良くなると思ふは大きな誤りである。地主あつて小作あり、小作あつて地主あるのである。互いに協調し、相互扶助せねばならぬ。然るに農業労働者の實際生活を見るに「米作り米食はず」とは何と言ふ悲惨なる矛盾であろう。土地を耕し、肥料を与へ、額に汗して作りたる米の大部分は地主に収め、下等米や碎米合して僅か数か月の食料を支へるに足り得ないとは此処に何等の欠陥と間違がないでなからうか？（略）

我々は先にも言える如く地主あって小作あり、小作あって地主あるのである。即ち、地主と小作はできるだけ理解の下に協調一致して自家の福利を増進すると共に、国家のために生産の増加と安定を期さねばならぬ。

而してここに農民文明は建設され、国家は益々健全になるものである。我々は斯の如く農民の福利と国家の健全なる発達を期する為、全国的に日本農民組合を設立したのである。

### 三 動揺する労農運動と農民福音学校―半農半伝道の師として―

吉野作造が「憲法をもつてする政治」を説き、大正デモクラシー（民本主義）が一世を風靡しているとき、ロシア革命は労働者に「生きる光明を与え」、社会主義者を勇気づけ、富山の女房一揆（米騒動）は庶民の目を開かせることとなった。こうした社会的背景の下に鈴木文治を中心とする友愛会は、日本労働総同盟へと発展し、総同盟を中心として労働争議が激発、労働運動も次第に再生の道を歩んでいた。

一方、大正九（一九二〇）年の恐慌に引き続く不況、凶作、米価の下落によって農民の生活も窮迫し、小作争議が激化していた。その意味では農民組合の生誕は、長い間屈辱と忍従の生活を強いられていた農民の闘争意欲に大きな役割を果たす。しかもこれまでの暴動化する無組織の農民運動が、組織による運動へと転換を導き出す役割をも具備していたといえよう。

当時、杉山は「全国の稲作地帯の地主が小作料を収奪するという放火により小作人を苦しめていることを警戒

せよ、防火に努めよ」と半鐘を叩き、全国の村々に行くことを約束し、小作人を訪ね、麦飯、自家製茶を飲みながら改良を語り激励し歩いていった。それは当時の帝国大学で勉強し、机上の理論で社会主義を演説するという観念的なものではなく、土に生きる貧しい生活の中から生まれた姿であった。

かくて、大阪府、兵庫県から全国にまで農民組合結成の運動を展開し、数年にして三百組合、組合員は七万人を越えた。その意味では日本農民組合の生誕こそ、わが国の労農運動が近代的性格をもった組織として活動し始めた出発点と見ることができよう。

事実農民運動は、最初の本格的展開を日本農民組合の力によって發揮することができた。小作料の引き下げ要求を中心として、全国各地に小作争議が発生してきた。その嵐の中で農民は競って争議の解決と指導を日本農民組合に求め、杉山らは連日連夜東奔西走し、文字通り席の温まる暇もなく、争議の応援、日本農民組合支部の結成に全力を尽した。その結果、長く支配力を誇っていた地主側の後退と、牛歩のごとき歩みではあったが、小作人側の前進をみたのである。

しかしながら、以上のような目的と運動の方向性をもって生まれた新しい農民組合に対しても、世間の目は冷たく、農民組合は一時の流行でしかないとするなど多くの正鵠を欠く噂が流れた。このような世間の風潮に対して杉山元治郎は、次のような反論をもって対峙した。

昔ユダヤに於てイエスの教が勃興して来た時に、時の司祭者達は圧迫し、絶滅しやうと協議したのである。処がガマリエルと云う大学者は「人々よ其のように心配することはない。彼等のするが儘に任せよ、流行ならば消える。野心家

の仕事ならば倒れる。但し其の計画が神より出て、真理に根ざしているならば如何に圧迫しても栄える」と叫んで無益なる迫害沙汰を止めしめた。私は農民運動に対し、「一時の流行」だと云う人にガマリエルの言葉を以て御答へしたいのである。農民組合は生れて四年、年一年と発達していることを思はば一時の流行でないことが悟られやう。農民組合は永い間虐げられた農民の生命が今や伸びやうとする運動である。真理に根ざす、生命に即したる運動である。非常に伝播力のあるのはむしろ当然のことである。

杉山が更に大きな苦汁として味わねばならなかつたのは、内部からの批判であつた。発足した日本農民組合が運動を展開し、小作争議の指導にそれなりの役割を果たしているとき、無産政党的左翼分子が杉山を「ヤソ坊主」「日和見主義者」と非難や批判を浴びせ始めた事である。

このような世間の、そして内部からの攻撃を受けつつあるとき、杉山は大正十一（一九二二）年、農民を農村改良の主体とすべく第一回巡回農民学校を開校、次のような挨拶を行った。

名は農民学校であるが学校らしいものは何もありません。机は皆さんの食卓を借集めたものであり、教場はお寺です。学校でない寺子屋です。教育は校舎ではありません。設備ではありません。教師と生徒の人格の接触です。其で昔寺子屋からも偉人が出ました。少なくとも農民学校は此の意気と精神を以て居ります。恐らく日本に於いて将来農民組合運動史を書かるる時、此の第一回農民学校がお寺に開校したと云うことは、其の一頁を占むるに違いない。農民学校は日本の農村に一時期を画したものである。我々は真に大正維新を形づくらねばならぬ。



更に杉山組合長は「獅子飢ゆ吼えざるを得んや、人蹟きて誰か心熱せざらんや」と小作人の窮状を告げ、小作人を救ふべきを訴える（『土地と自由』九号、大正十一年九月二十五日）。

この「頭よりも人間そのもの」を作り、「知識も教えるが、それを実地に応用する手足のうごく人間を作ること」をねらいとして、「教師と生徒との人格の接触」を重要視し、「四六時中座一切が教育」と考えた杉山の教育への情熱こそが後日、農民福音学校運動による農村伝道へと受け継がれていったとみることができる。

驚くべきことに、この時期に一年間、受験書を読み、歯科医の検定試験の学術試験に合格、二年半かかって実地試験にも合格、大正十二（一九二三）年に歯科医師として登録されることとなった。それも、生活の基盤を得て農民開放運動に専心するためであったという。

さて農民組合の活動は文化的活動を含む幅広いものであったが、当時の最も重要な闘争目的は小作料の軽減である。それまでは地主に対して傷害事件を起こすこともあったが、農民組合の設立により、前述のようにようやく組織的になり、農民の意識も進み争議戦術も変わってきた。しかし小作料減免の闘いも地主と政府の攻勢、とりわけ治安維持法により弾圧され、次第に困難な道を歩むようになる。

日本農民組合にとって不幸なことは、政治との関わりから内部対立・分裂を繰り返すことにもあった。日本労働総同盟から左翼の日本労働組合評議会が分裂したことに始まり、無産政党的樹立が日本農民組合の根幹を揺るがさざるを得なくし、左右の激突、脱落のなかで、大正十四（一九二五）年十二月一日に農民労働党を結成するが、これは政府によって即日解散を命じられた。

翌十五（一九二六）年三月五日、左翼各団体を加えないで労働農民党が、わが国最初の無産政党として大阪キリスト教青年会館で設立大会を行い、中央執行委員長に杉山元治郎が選出された。三輪寿壯書記長、安部磯雄、西尾末広、賀川豊彦、麻生久、三宅正一などが執行部であつたことから、穏健な社会民主主義を基調として次のような綱領を發表した。

綱 領

- 一、われらは、わが国の国情に即し、無産階級の政治的、経済的、社会的開放の実現を期す
- 二、われらは、合法的手段により、不公正なる土地、生産、分配に関する制度の改革を期す
- 三、われらは、特権階級のみを代表する既成政党を打破し、議会の徹底的改造を期す

つまり普通選挙の実施と共に無産階級の政治的台頭があつても、農民の代表者が一人もない。したがつて農民が政治的な力をもつことにより、無産者によりよき制度を設けるため、全国的単一無産政党の提唱を行つたといえよう。

しかし、平野力三らは「農民は農民党へ」のスローガンをかけて、日本農民党を結成し、ここに日本農民組合の第一次分裂が行われた。他方、労働農民党の左翼分子が潜入し、次第に全面的な進出をみた。また安部磯雄を党首とする社会民衆党が結成され、右翼的傾向を明らかにしたため、麻生久ら中間派は日本労働農民党を結成した。このような外圧と激しい内部対立に責任を感じた杉山は、とりわけ共産主義的な左翼分子とは全く異質な存在

であつたため、十二月の日本労農党第一回大会で委員長を辞任、代わつて新しく大山郁夫が中央執行委員長に就任した。

すでに七万人の農民を組織した日本農民組合にも、右翼の地主と妥協する者や小児病的左翼との対立が生じていた。土を離れ農民生活そのものに即しない観念的運動が、いかに純朴な農民の道を誤るかとする杉山、温厚にて忍従の杉山も内部闘争を嫌つて一旦は身を退いたのであつたが、彼を「日本農民組合の創立者」、日本農民運動の父であるとする農民は、杉山擁護のために全国協議会を設置したのである。

しかし、ここでも杉山を支持する全国協議会は、農民組合の分裂をもたらし、その実体は日本労農党の支持団体であるとして、ついには「杉山氏支持協議会は地主の手先」との批判を受けるにいたつた。それでも杉山個人に対しては堅実派の組合長とし、五年間にわたる日本農民組合への尽力に敬意を表し、左翼分子からさえ「自愛を祈る」という言葉で語られているところに「農民の指導者」杉山への敬慕の深さを知ることができよう。

大正十三（一九二四）年十月、日本基督教聯盟が農村伝道に関心を寄せ始めたとき、杉山は大正十四（一九二五）年十月の日本基督教聯盟総会に、神学校で農村問題を講義すること、短期基督教農民学校を開くこと、農民セツルメントを設けることなどについて建議している。かくて賀川豊彦とともに日本農村の宗教的改造と建設を果たさんと志をたて、

#### 一、農民福音学校の開設

#### 一、文書伝道（伝道用パンフレット雑誌発行）

#### 一、講師派遣（神学校、都市教育その他への要求に応じて）

一、農村伝道（直接伝道後援）

一、農村セツルメント事業の普及

などの目的を実現するために、まず農民福音学校を開校、農村改造を志す戦士の養成を期待した。それはデンマークのグランドヴィツヒの精神に倣い、人格と人格の接触する教育の道場であり、教室も器具もなくとも修養の志に燃えるまさに戦士を養う三十人規模の小さな塾であった。

杉山は土に生きる農民たちの生活している農村こそが、厳しい条件があっても伝道の絶好の処女地であるとして、「農村教会の自給基地に就きて」などの講演を続けたが、平穏な話しぶりの中に長い忍苦の生活、深い農村問題への洞察などを汲み取って感銘を深めた農民が多かったという。

なお、杉山は大正十五（一九二六）年一月に『農民組合の過去、現在及び将来』（刀江書院）、『小作争議の実際』（啓明社）、そして現代に生きる古典として高い評価を受けている『農民組合の理論と実際』（エルノス出版）を出版している。

代表的な著書『農民組合の理論と実際』は、農民組合がどのような団体で、何をめざし、何を求め、どのような活動によって農民生活の向上という目的を達しようとしているのか、について杉山元治郎の基本的な思想、あるいは哲学が示されている。

杉山は、農は国の基、農民が喜んで生産に従事できるような農業復興を農民組合の力で実現することが出発点と説いた。そして農村窮乏の原因を土地制度の歴史の変遷をたどって考察し、窮迫した農村を救うのは政府でも政治屋でも農会でもなく、農民自身以外にはないと結んでいる。

本論に入つて、農民組合の進路を経済・政治行動について求め、とりわけ高額小作料の引下げを要求し、生産組合や消費組合、つまり今日の農業協同組合についても言及している。結びとして、「全日本の農民よ団結せよ」として最も大切な組合員の心得を力をこめて説いている。

まさに杉山自身の農民運動の体験のなから生まれた実践の手引であるが、それは杉山の農民運動家としての活動を基にして書かれたからであらう。

本書は知者、学者を教えるためではない。一般農民を目標としながら、出来るだけ言葉を通俗にし、用語を平易にしたのである。(中略)本書は真に野の声であり、農民の叫びであり、生活実験録の一部分である。知者、学者と雖も謙遜なる心を以て見らるるならば、確かに隠れたる真珠を見出されるに違いない(序)

しかも、杉山は文中しばしば比喻を用いて説いている。数字を並べ抽象的概念で話したのでは肉体労働で疲れ切っている農民に分からせることは出来ない。具体的な例を引き、例え話を使って語りかける箇所が多いのは、牧師杉山元治郎なればこそである。労農運動と基督者という二つの顔をもつ杉山元治郎が、一つに止揚されていくところに誰もが強く心惹かれたのであらう。



衆議院議員最初の立候補の頃

#### 四 平和と農民の開放を求めつつ——激動の戦時体制と受難の議員生活——

大正から昭和にかけて激動する社会情勢の下、農民組合とともに無産政党は七花八裂の状態であった。杉山は日本労農党から昭和三（一九二八）年には日本大衆党、昭和五（一九三〇）年全国大衆党、昭和六（一九三二）年全国労農大衆党、そして昭和七（一九三二）年には社会大衆党と所属政党を変え、昭和十五年（一九四〇）政府の弾圧によって政党が解散させられるまで、いずれの政党においても顧問に選任されていた。

大正十三（一九二四）年、長い間労働者、農民、一般民衆の願いであった普通選挙法が成立。昭和三（一九二八）年に普通選挙が行われたとき、杉山も日本労農党から立候補した。杉山は自動車を使う資金もなくオートバイで走り回ったが、官憲の妨害もあり次点で落選した。なお労働者や農民などの期待の下に、進出が予想された八十九名の無産政党の候補者は、当選者わずか八名でしかなかった。

昭和五（一九三〇）年の第二回目の選挙は日本大衆党から立候補したが、すでに共産党員の検挙や労働農民党、日本労働組合評議会は解散、更に治安維持法の公布から国体の変革、私有財産制度を否認するための結社は、最高死刑または無期懲役の嚴罰体制の下で、弾圧はいよいよ激化していたため、無産政党の当選者は五名に減少、杉山は再び次点で敗れた。

昭和の世界大恐慌により未曾有の経済不況、そして農村恐慌の嵐が吹くなかで、昭和七（一九三二）年二月十五日、第十八回衆議院議員総選挙において病床から立候補し、初当選を果たしたとき、杉山はひとり病床の上で神に祈ったという。

ところで、この頃すでに大恐慌が襲来し、とりわけ東北や北海道の農村は未曾有の大凶作に襲われ、青田売り、欠食児童、娘の身売り、夜逃げ、親子心中など農民の惨状は目もあてられないものになっていた。この慢性化した農村の窮状を救うために、昭和七（一九三二）年六月四日、本会議において國務大臣の演説に対し、杉山は初質問を行ったのである。

只今総理大臣初め各大臣の演説を承りまして、私は農村選出の代議士と致しまして現下の重大問題でありますところの農村問題にとくに重点をおいて、質問を致したいと思っております。

齊藤内閣の出現致しましたことは、さる五月十五日事件を契機と致しまして出来たことは申すまでもありません。五・一五事件そのものは、中間社会層の反資本主義化運動の急進的表現であります。それによる社会不安を利用致しまして、資本主義階級は政治の反動化を行って、齊藤内閣を組織せしめ、ついで来るところの社会不安を利用致しまして、さらに一層政治の反動化を行なわんとするのであらうと思っております。かくして、齊藤内閣の後に来るものは、いわゆる議会制度を忌避する純然たるファッショ独裁政治になりはしないか、あるいはかかるブルジョア・ファッショの下ではいわゆる軍部の国家社会運動も、あるいは赤松氏等の社会ファッショ運動も成長させないで、ただブルジョア・ファッショが社会不安を利用致しまして、上からの変革を行うのだと考えるのであります。

杉山は齊藤総理を前に、率直に日本のファシズム化への危惧を表明しつつ、同時に農村の窮状を述べ、農家負担の軽減、土地取り上げ、肥料、養蚕等の諸問題にわたり農民の救済を急ぐべきことを要求した。その結果本会議において、各党一致して農村救済を主眼とする時局匡救臨時国会を要求する決議が行われた。

続いて昭和八（一九三三）年二月十五日、政府予算に対して次の六点により反論している。

第一、本予算には、国民生活を安定するに足る重要な「プログラム」が欠けており、かつ資本家の中間安定策であるということ

第二、明糖事件、日糖事件の如き周知の脱税を曖昧に葬るは、政界浄化の無能を發揮せるものであり、国民思想を悪化するものであるということ

第三、高橋財政の誤謬、すなわち政局不安とともに、円の下落と予算の相違、恐慌の永続性、軍事費の継続的要求等は、十年度になるも好くならぬということ

第四、この際資本家地主負担税の増加を図るべきであるに、それをなさなかつたこと、すなわち資本家的予算であるということ

第五、赤字公債による「インフレーション」の結果、農民及び無産大衆を圧迫するということ、彼らは日銀「オペレーション」で統制せんとするが、それは駄目であるということ

第六、陸相のいう弾力性のある軍備をなすには、国防と財政との諧調を図るべきにもかかわらず、国防成つて財政危



うしとの感があること、来るなきを頼まず待ちつあるを頼むならば、軍備費を縮小して今国力充実に回すべきではないか

杉山は 挙国斎藤内閣は、国難打開をスローガンにしているが、「それはわが国の支配階級の利益と、資本主義防衛の爲の国難であり、非常時であつて、いわば資本主義の没落の悪足掻きに過ぎない」とみる。

とりわけ、膨大な軍事費を含む昭和八年度予算に対して、杉山は「高橋蔵相が目下の財政難を、いま委員長が報告になりましたように、時局匡救費、軍備改善費、満州事件費等に帰し、昭和九年度でそれらの費用が打ち切られるから、昭和十年度より収支が一致するようになるであろうと樂觀しておられるのでありますが、まず打ち切られるところのものは、時局匡救事業費位のものであつて、これとても今後報告のように継続して要求するものかも知れないのであります。而して今日の經濟恐慌は、資本主義經濟制度の没落の一過程であつて、益々深刻化するとも容易に恢復するものではない。蔵相が貧乏人には財政が分からぬと仰せられたが、吾々からみれば、あなた方御年寄は遺憾ながら今日の社會情勢の客觀的認識が甚だ不足であると申さねばならぬのであります。満州事件費の如きも、果たして十年度で打切られるのであろうか」と食い下り、国防成つて財政危うしの危機感から、軍事費を減らし国力の充実に振り向けるべしと反對論を強く説いた。

昭和十三（一九三八）年、國家總動員法が可決された年に、耕作權保護の規定を含んだ農地調整法案が提出されたのに対し、杉山は耕作者の地位の安定と農業生産力の向上のために政府原案は最小限の必要を充たすものと、地主本位の修正案に反對を続ける。しかし新体制樹立の声の前に各政党は解党、大政翼賛會が生まれ、杉

山の志とは逆に十五年戦争へと突入していくのである。

昭和十二（一九三七）年七月、日中事変が勃発するや杉山は、衆議院の議決により皇軍慰問団に無産政党の代表としてただ一人参加、国会議員として最初の慰問という名目で上海に渡り、その後も北支また食糧事情調査のため台湾、海南島、仏印にも足を向けた。

しかし一方では、十二月に全国農民組合中央常任委員に選ばれ、昭和十四（一九三九）年十一月には農地制度改革同盟が創立され、杉山は顧問として厳しい戦争体制の下で農民のために、よくその職務を果たしている。

ところで杉山は、昭和十七（一九四二）年六月三日には勲三等瑞宝賞を授けられ、六月十日は農林省委員、翌十八（一九四三）年十二月は全国労農連盟会本部理事となった。更に十九（一九四四）年六月母校である東北学院の理事長となり、戦時下のキリスト教に基づく教育の持続と独立経営の維持に多大な尽力をした。かつ東北学院の戦災からの復旧に日夜専念し努力を払い、東北学院の充実に協力するとともに、学制改革にあたり、専門学校から今日の新制大学に昇格する基盤を築くことにも多大の貢献をしている。

しかしながら、本格的な第二次大戦に突入した昭和十七（一九四二）年四月、翼賛選挙が行われたとき、社会大衆党の候補者の多くが非推薦となった中で、杉山は本意ながら推薦議員とされて当選した。このことを理由として杉山は敗戦後、公職追放となる。かくて衆議院議員になることもできず、東北学院理事長の職も退くこととなった。

杉山にとっては、敗戦後、まさにこれからというときの公職追放は、杉山のこれまでの人生からいっても、また同志たちの活躍や社会党の進出をみるにつけ、落莫した生活を送ることは堪え難い想いであったと思う。「梅雨

空の天気のように重苦しく、これ程いやなものはない」「運命のいたすところと諦めるのみである」とその心境を訴えている。「公職追放令該当者」の烙印は暗い谷間の労農運動から漸く立ち上がるうとしていたときだけに杉山の無念の想いは十分推察できよう。

その意味でも、杉山の人生にとって最も大きかった汚点ともいうべき追放令の真相を、杉山の名誉のためにも昭和二十五（一九五〇）年一月二十五日、東北学院大学長小田忠夫から文部大臣天野貞祐宛ての「教職不適格についての特免審査申請書」により紹介しておく。

昭和十七年の衆議院議員総選挙に当り所謂推薦制度なるものが設けられる様聞き及びましたが、我々無産政党に属するものが推薦される筈もなしと考へ、議会解散と共に選挙区たる大阪府に帰り選挙運動を開始したのであります。後に聞いた話であります、東京の中央推薦母体でも我々を推薦することに對しいろいろと強い反対もあつたが、儀礼的に公平振りを大衆に示すためには推薦する方が得策なりとの議論が勝を占め、党代表として川上丈太郎氏、被圧迫民代表として松本治一郎氏、労働代表として田万清臣氏、小作農民代表として私を推薦したとのことであります。

地元の大阪府に於いても、私共の農民組合と直接争議をした地主であり、当時府会議長であつた磯村氏が猛烈に反対したとのことであります、杉山氏は推薦しても又しなくても当選は確実であり若ししなければ一層盛んに運動することにより、同一地区より推薦せられている大倉候補が危うくなり、非推薦者の当選率を多くする恐れがあるから推薦するに如かずとの多数の意見により、私が推薦されたとの事であります。

私は其様な事は少しも知らず、選挙運動を初めていた時、東京から永井柳太郎氏が大阪に來り新大阪ホテルで面会し

たいとの通知が参りましたので行きました処永井氏が「此度君を推薦議員に決定したから承諾して貰いたい」とのことでした。そこで私は「無産政党として又多くの同志が推薦されていない点から御断りしたい」と答へたのでありますが、「それでは君と個人的に親しい関係で使いにきた僕が困る」と強いて云いはるので、私は「多くの同志や運動員もいることであるから、一応は其等の人々と相談の上、明日返答する」と申し其の日は別れ、帰って運動員と協議した結果多くの同志も「其の際は推薦議員を受けた方が良い。若し受けなければ軍部が無産候補に犬糞的に圧迫する危険がある」とのこと、私も不本意ながら決心し永井氏に受諾の返事をしたのであります。

右の様に所謂推薦議員であつたことは、私から要望したものでなく、政府の政策的にせられたもので私にとっては損失であつても利益には少しもなつて居らぬのであります。

杉山自身も公職追放に対しては、自分の人生を回顧しつつ特免申請を行い、キリスト者として平和主義から非戦論を唱え、農民開放のため農民組合と共に生き、民主主義運動に生涯を捧げ、決して軍国主義者でないことを訴へた。

また解除については、日本基督教団幹部が連署でマツカーサー元師に嘆願書を提出。カナダの宣教師は口頭で嘆願した。勿論多くの日本基督教信者、農民福音学校、東北学院同窓生も請願書を送付している。とりわけ昭和二十五（一九五〇）年一月には、東北学院学長小田忠夫が彫大な前記「杉山元治郎氏（覚書該当者の指定を解除された）の教職不適格について特免審査申請書」を文部大臣天野貞祐に提出した。本申請書のなかで、当時の東北学院理事長鈴木義男は、特に母校東北学院への杉山の尽力、水谷長三郎は杉山の農民運動への貢献の大きさ、

そして賀川豊彦は、杉山が自由と平和のキリスト者・民主主義者であることを強く訴え、日本社会党書記長浅沼稲次郎は、杉山の全人格と過去の経緯から心をこめて証明書を綴り、衆議院議長三宅正一、また全国農民組合大阪府連合会会長石原信二は、政府の謀略によって追放されたとして、怒りの心をもって解除を懇願した。まさに労農運動の父として生涯を綴ってきた杉山の人徳というべきである。

## 五 新しい時代の人間・杉山元治郎―クリスチャン・アカデミー運動に生きる―

農民組合運動の父であり、慈父である杉山は、昭和二十一（一九四八）年二月、日本農民組合が再建されるとともに顧問となった。創立大会宣言は次のように述べている。

長い陰惨な戦争は敗北を以て終りを告げた。今や混乱と激動のうちに民主主義革命が進行し、軍部・官僚・財閥の恣意と専制とから解放された国民は、自らの力によつてあらゆる苦難と障害を克服して、廃墟の中に新しい民主主義日本を建設すべく立上つた。支那事変以来支配階級は一切の社会運動に狂暴なる弾圧を下し、農民組合運動もまた、彼らの魔手より免れることが出来ず、往年の組合員は血涙を吞んで隠忍、時の到るを待機してゐた。新たな時代の到来と共に全国各地に雌伏した我等同志はここに再起し、旧農民組合のすべてを統一して日本農民組合の結成を準備し、また新たな組織と農民の直面する問題の解決のために邁進したのである。



戦後・日本農民組合(新農建派)大会にて

戦争終結と共に、農村人口の急激なる増加により土地に対する圧力が増加して、土地問題の解決が当面の重大問題となつてゐる。我等は現在の不合理なる土地制度を清算し、土地を農民に再分配することを農村における民主主義実現の根本問題であると把握し、この解決を基礎として新しき農村社会の建設を行ふことを目指して進まんとする。(略)

ここには、杉山元治郎の生涯の仕事の要約がある。

ところで終戦後最初に行われた総選挙に際し、杉山は公職追放令該当者として指定されたため東北学院理事長は辞任、立候補もできないことになったが、昭和二十六(一九五二)年三月、待望していた解除により漸く政界に復帰することができた。杉山は政界復帰とともに、社会党代議士会長、農村議員団長となり、また昭和三十(一九五五)年三月には衆議院副議長に選出され、強い信念と人徳による公正な態度により、小選挙区制の案をめぐる混乱の収拾にあたり、三十八(一九六三)年十月には、衆議院議員在職二十五年の表彰を受けている。

この間、杉山はよく「私は政治家ではない」といったが、むしろその点にこそ杉山が政治家としての代えがたい存在意義をもっていたといえる。

昭和三十八(一九六三)年、杉山は再び東北学院の理事長に就任したが、昭和三十四(一九五九)年からクリスチャン・アカデミー運動に力を注ぎ、日本に最初のアカデミーを作った。それが日本クリスチャン・アカデミーである。それは日本のキリスト教有志による積極的な社会奉仕の精神と実践を中核とする「話し合い」運動で

あり、杉山自らその理事長となった。「大磯アカデミーハウス」(四階建、建坪四百三十五坪)ができたのは、昭和三十八(一九六三)年十月であった。その十二月には、本格的な話し合い、とりわけノン・クリスチャンの参加が増えていた。杉山は「真の話し合いにおいては、人の言葉を深く聞くことが大切である」と語り、自らも常に他人の言葉に耳を傾け「いかにも、いかにも」と頷きながら静かに深く聴く姿勢であったという。晩年の杉山の人柄を偲ばせる風貌であろう。

昭和三十九(一九六四)年春、日本クリスチャン・アカデミーの名誉理事長になったが、その後の杉山は、大磯アカデミーの松林のなかに自分の家を建て、残る人生を「話し合い」に過ごしていた。「大磯アカデミーハウスのそばに私の小さな家を建てる。わたしはもともと百姓だ。だから百姓の話でも何の話でも、どうかみなさん、話しに来て下さい」という杉山の姿がそこにある。

昭和三十九(一九六四)年十月十一日、朝の礼拝が終ってから、杉山は脳出血で倒れた。秘書に「静かに、静かに」と語りつつ。

杉山が果たしたドイツのクリスト者とのかけ橋としての役割。すなわちその橋の上を多くの人が歩み、出逢い、共に語りあったことにより、昭和三十九(一九六四)年一月二十七日、リュプケ西ドイツ大統領から「大功労十字星章」を杉山元治郎は授与された。

昭和三十九(一九六四)年十月十八日、明治学院にて杉山の葬儀が行われ、三十一日には東北学院大学礼拝堂にて追悼式、十一月七日には大阪女学院講堂にて社会党葬、そして十二月三日、東京虎ノ門共済会館にて農民組合の関係者による追悼が深い哀しみのなかに営まれた。昭和三十五(一九六五)年四月に畏友賀川豊彦の葬儀委

員長として、青山学院において地上における永遠の別れを惜しんだばかりであった。

七十九年という杉山元治郎の生涯は、キリスト者として敬虔な信仰に生き抜いた一生である。同時に土に生きる農民と共に農民の解放のために戦い抜き、すさまじい情熱と実行力をもって、終始農民組合運動の実践家・指導者として活躍した。まさに『農民組合運動の父』である。

政治家として昭和三十九（一九六四）年に生存者叙勲を固辞した。長い政治生活を顧みて「余生は神のために、人類のために奉仕しようと考えた」という。杉山の日記や残された力のこもったペンで書かれた自筆のノートを見ると、農民解放に関係する実践のメモが多い。しかも、杉山は農村セツルメントの考察にまで論を進め、農村はまず伝道であり、そして農民の教化こそが生涯の課題であった。

深い包容力のある穏健で篤実な人柄ではあったが、農民の心得として窮迫した農村を救うものは政府でも政治家でも農会でもなく、それは農民自身以外にはないことを常に説いている。二宮尊徳翁の失敗した飯崎原の開拓のエネルギーも、このような杉山の自己に厳しい姿勢と気力の血と汗の結晶と見ることができるといえる。

今日でも、杉山の「私から恩を受けたなどと感じてはならない。もし恩返しなどという気持ちが起これたら、この分だけ誰か他の人を助けてあげなさい」の声は深く静かに聞こえてくる。

最後に、東北学院時代からの友人であり、杉山が初めて衆議院議員に立候補したとき、仙台から大阪にまで直行し応援演説まで行なった秋保孝蔵の言葉（追悼録『聖書の種まく人』）によって、現代にも生きる杉山の姿をみることにしたい。



杉山君は清廉潔白な政治家で、ウソを言えと言ったって言える人ではない。何人に対しても温順親切、何時も笑顔をもって接する人であった。

「悪をもて悪に報いず、凡ての人の前に善からんことを図り、為し得る限り力めて凡ての人と相和げ」(ロマ書一二章一七、一八)という聖書の言そのまゝを實行した人であった。辺幅を飾らず、自然のまゝ、謙遜に人に接する人であった。

旧弊を打破して新しい農村を打建てようとする闘士でありながら、決して他と争うが如き振舞を見せない紳士であった。杉山は何時も貧乏であったが不平不満らしい言を発しなかった。彼の生活はいわば天、まかせのそれであった。「空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に収めず。されど汝らの父はこれを養い給う。……野の百合はいかにして育つかを思え、勞せず、紡がざるなり。されど天の父はこれを飾り給う……ましてや汝らおや……汝らは先ず神の国とその義とを求めよ」(マタイ伝六章二六―三三)とのキリストの言(山上の垂訓)を信じて凡ての弱い者のために奉仕した生活であった。賀川豊彦と杉山元治郎とを私は大正、昭和の時代における日本の生んだ偉人であると思つて、亡きあとの今日でもなつかしくて堪らない。お、賀川君と杉山君の在天の靈の上に御祝福いよいよ豊かならんことを。

#### 杉山元治郎の主な著書

福音物語(中庸社) 明治四十三年七月十八日(一九一〇)

農家経営の実際(落陽堂) 大正五年八月(一九一六)

土地と自由 第一号発行 大正十一年一月二十七日(一九二二)

農民組合の過去、現在及び将来(力江書院) 大正十五年一月十五日(一九二六)

小作争議の実際(啓明社) 大正十五年九月十二日(一九二六)

農業組合の理論と実際（エルノス）昭和二年一月十日（一九二七）

農民貧窮論（農民消費組合協会）昭和四年十二月二十日（一九二九）

宗教団体法詳解（日昭世界社）昭和十四年六月三十日（一九三九）

南進基地を往く（協同公社出版部）昭和十七年六月五日（一九四二）

「農民クラブ」昭和二十四年三月（一九四九）

農民組合運動史 昭和三十五年十月十五日（一九六〇）

死後、昭和四十（一九六五）年に杉山元治郎伝刊行会（代表河上丈太郎）編、『土地と自由のために―杉山元治郎伝』が同刊行会より発行される。本書には伝記のほか、杉山執筆の自叙伝、農民組合運動の思い出、随筆などが収録されている。また再度、昭和四十四年（一九六九）九月一日、片山哲などが発起人となり杉山元治郎先生追悼録刊行会（キリスト新聞社）より杉山を追慕する多くの人々の手によって『聖書の種まく人』が出版された。

# 鈴木 義男

飯塚 滋雄

## 序

鈴木義男は、東北学院関係者から、尊敬の念と親愛の情をこめて「スズキ ギダン」とか「スズキ ギナン」とか呼ばれた。彼は、代表的な学院マンとして、教育界において、法曹界において、政界において目覚ましい業績を遺したばかりでなく、彼の母校東北学院のためには理事として、さらに理事長として大いに貢献するところがあつた。

鈴木義男の業績があまりにも多方面に亘っているため、彼の全体像を簡単にまとめることは殆んど不可能に近いので、全体像というよりも、彼の特徴をよく現していると思われる事柄を摘記するに止めたいと思う。

## 一 生い立ちから修業時代まで

鈴木義男は明治二十七（一八九四）年一月十七日、福島県白河市大字田町七七番地に生れた。父は鈴木義一、母はイエ、義男は第六子で三男であった。

鈴木家は、白河地方屈指の旧家の一つで、江戸時代には、代々苗字帯刀を許されて、検断、駒付役等の役職についていた大地主だった。

しかし明治維新を境に家産が傾き、田畑を手離すに至った。父義一は二四、五歳の頃医学を志して水戸医学校に学んだが、やがてキリスト教の信仰に入ると、「肉体の医者より精神の医者」たるべしの信念の下に、キリスト教の伝道者に転じ、各地を十数年間に亘って伝道して歩いた。

例えば、明治十九（一八八六）年四月三十日付の「奥羽日日新聞」の広告欄に、

米国ハリス押川方義玉虫修三郎鈴木義一

耶蘇教演説竝ニ幻燈うしほ

今卅日五月一日午後八時ヨリ宮城座

ニ開ク

傍聴無料

この記事が見えるが、これを見ても、父鈴木義一が、M・C・ハリスや押川方義らと一緒に伝道活動に従事していたことがわかる。因みにハリスはメソジスト教会の宣教師であったから、義一は、彼らと共にメソジスト派の

諸教会を伝道して廻ったが、その間に深く感ずるところあつて独立自給の伝道こそ本命なりと確信し、遂に郷里白河町に帰り薬種商を兼ねて、白河メソジスト教会の牧師として働くようになった。

鈴木義男が東北学院普通科（中学）に入学したのは、明治四十一（一九〇八）年四月のことである。当時の院長はシュネーダーであつた。このようにして鈴木義男は、東北学院と切つても切れない絆を結ぶことになるのである。かつて小田忠夫院長は、追想記「東北学院のため尽した三四年間」（鈴木義男伝記刊行会『鈴木義男』七二―七五ページ）の中で、

奥州みちのくの関門にあたる福島県白河に生れた十三歳の鈴木義男少年が、首都東京とは逆の方向にあたる仙台のキリスト教主義の私立学校を慕つてやつて来たということは、すでに世間の常識を越えた神の導きというべきであらう。そして鈴木先生のような偉大な人物が、東北学院から現われたことも、奇しき神の導きによるものと観ぜざるを得ない。と述べたが、既述の父義一のキリスト教信仰の深さや、学院創立者の一人押川方義との意気投合や、シュネーダー院長の人柄への傾倒などを思い合せると、彼の息子義男が東北学院に入学するに至つたのは、決して偶然ではなくして、まさに召命と呼んでもよいと思う。

当時東北学院で同級だつた小笠原政繁（後の長町教会牧師）は、その頃を追想して、「東北学院普通科一年」（前掲書 二七―二八ページ）の中で、次のように述べている。

丁度私が年十九才、南国土佐を後にして憧れの東北学院普通科第一学年に入学したのが明治四十一年四月であった。六月に労働会に入会した時、鈴木君はその十三号室にいた。彼は白顔の美少年で腹に首巻を巻き付けて、腹部をふくらまし「僕はナポレオンだ。」と大言壮語して歩いていたのが印象的であった。

毎朝四時半に叩き起され眠い目をこすりながらの新聞配達、彼は北山、僕は国分町。素足に草鞋ばき、脛に脚絆を巻き雪路を走るのは並大抵でなかった。殊に南国育ちの僕は冬の寒さに閉口したが、其時何時も僕を勇気付けたのは鈴木君の元気であった。其頃の労働会の舎生は四十五、六名と思う。年令十三才から二十才前後種々雑多であったが、東北学院中学部の中堅で各クラスの指導的立場にいた。一日三時間労働賃金九銭、一カ月の舎・食費共三円七十銭、朝食は半麦飯に味噌汁、沢庵二切、昼食夕食は交互に野菜の煮物か塩引あるいは安価な魚の煮付、それで誰人も不平を言うものもなく感謝していただいた。月謝一円二十銭。

舎生は一カ月四円の送金が必要であった。当時白米一升十三銭であった。

また当時の同級生の一人井上三郎は、回想記「一番で合格」(前掲書 二〇―二四ページ)の中で、

そもそも義男君と私との交友は、明治四十年の春、東北学院普通部の受験成績発表の時から始まる。その頃一番先に印象づけたものは、私も当時は同姓であり(のちに井上姓に変わった)たまたま発表を見に行く途中で、鈴木と言うのが一番であると言うことから、そんな筈がないと思ひながら掲示板の前に立って見たところ、案にたがわず姓は同じでも名前が違う、あわてたのは私であった。今度は後の方から前の方に逆に自分の名前を繰り上げて見たのだが、あわてた

時は二十数人の中に見落してしまい、漸く外の人に教えられて入学を確認したのであった。忘れもしないその帰り途で出逢った、風変りの男が大きく手を振りながらかぶった帽子が歩く度に頭の上で躍っているのがおかしく思われた。後日その男が私をあわてさせた鈴木義男君であり、あの帽子は兄さんから貰ったお古であると云う。そんなたわいのない話題が縁となり、何でも話し何でも相談し合う、交りとなったのである。

と述べたのち、

義男君と云えば、雄弁とか弁論会とかと、切っても切れない名前ではあるが、義男君と云えば随分先生を困らせたことも私達としては忘れていない。鈴木義男の名は正しいと信じたことは飽くまでも主張するが、義理と人情も解する人間としての半面がある。

と書いて、具体的な挿話を紹介し、当時の二人の交友関係と併せて鈴木義男の苦学ぶりなどにも言及している。そして終りの方で、

いよいよ高等学校に進学することになった。彼の悩みは尊父から医者になることを勧められていることであつた。彼は医者になるという名目で法科に入ることに決意するまでに何度も相談を受けたが、兎に角家の方には医者になることにして法科に学ぶと云うことに一決した。

と注目すべきエピソードを紹介している。

大正二（一九一三）年七月、鈴木は旧制第二高等学校一部甲類に入学する。二高時代の鈴木は、ミス・ブラッドショウ、サイプルのヘルパーとなり、働きながら勉学を続けた。鈴木は学院在学中から雄弁家として知られていたから、彼が二高受験の時には、「今年は仙台で著名な雄弁学生が二高法科を受験する。一昨年仙台劇場で河北新報社主催東北六県学生連合大演説会で一等になった、当時東北学院三年生の鈴木義男だ」という噂が流れたほどである。

二高時代の同級生室谷慶一は、追想記「あだ名は『労働党』」の中で、「当時鈴木さんは日本の政治は英国の労働党のような政党が生れ伸びて、貧乏を退治しなければウソだと常々申され、クラスのごく一部では鈴木さんを「オイ労働党」などと呼ぶ人もあった」と記している（前掲書 三五―三七ページ）。

大正五（一九一六）年九月、鈴木は東京帝国大学法学部法律学科（英法兼修）に入学した。そして大正八（一九一九）年七月、東京帝大を卒業すると、同年九月には東京帝大法学部の助手（大正十年七月まで）に就任した。助手時代を共に過した河村又介（後の最高裁判事）は、追想記「大家の風格を持った助手」（前掲書 四九―五二ページ）の中で、

鈴木君は助手の時代からすでに大家の風格を具えていた。大きな手提鞆を片手に威風堂々大手を振って闊歩していた。他の助手のように九時出勤、夕刻退庁というような小節にはこだわらなかった。鈴木君にそのことをいうと、生活費に



足る給料も呉れないでそうした勤務を要求するのは不当だ、と言っていた。多分今のいわゆるアルバイトをしていたのかと思われる。私を知る限りでは、当時新設された東京女子大学の講師として法学通論を教えていた。

と書いているし、同じく助手仲間の一人だった我妻栄（後の東大名誉教授）も、「義男君の想い出」（前掲書 五二―五五ページ）の中で、

東北生れの私は、鈴木君のあまり明晰でない発音に親しみを感じたが、それ以上に、苦学した学生時代の苦勞話に同感を覚えたのであった。

鈴木君は、あちこちでアルバイトの講義をしていた。夕方私が帰る頃、彼は「仕出しや」の夕食をとって一人で食べながら、これから夜学の講義だ、といていたことが多かった。ひると夜の二食を同じ「仕出しや」の弁当では辛かろうと同情したことも記憶に残っている。

そんな生活のあるとき、私は、鈴木君から、学生時代に学資のために借材<sup>かり</sup>し、千円の額に達しそれが相当の高利なので、今も苦しんでいることを聞き出した。

私も乏しい家庭に育ったが、大学の学費は育英財団の世話になったし、卒業後は、恩師鳩山先生のお宅に「居候」をしていたから、借金の味は知らなかった。

そこで、鈴木君の借金に同情した私は、ある日、鳩山先生に仔細を話したところ、先生は、即座に、僕が出してやろうといわれた。奥さん同席のところであった。

この話を私から聞いた鈴木君は、最初は極力辞退したが、結局、先生の厚意を受けることになり、千円の小切手が渡された。大正十年頃の千円である。先生の日常生活の経費のための口座も、これを出した残りは少なくなった。

このことは、先生はむろん誰にも話されなかったし、私も吹聴はしなかった。ただ鈴木君は、始終感謝し、思想の面では、おそらく鳩山先生から遠く離れるだろうが、先生の人間としてのあたたかい心は決して忘れない、などと私にいったこともある。

と、貴重なエピソードを書き遺している。

また二高の三年先輩で、裁判官生活をやめて、東大の研究室に入り、鈴木と助手生活を共にし、東北帝大に法学部が新設されるに先立って、在外研究員として一緒に留学し、帰国して共に東北帝大に奉職することになった小町谷操三（後の東北大学名誉教授）も、回想記「一見、尊大だが親切で世話好き」（前掲書 五五―五七ページ）の中で、「鈴木君は誰に言わせても恐らくエピソードが非常にすくない人である。彼は友人間に話題を作るようなことをつとめて避けたのではなからうか。彼は一見尊大であったが、実は細かいところに気がついて、非常に親切な人であった」と述べている。

木村亀二（後の東北大名誉教授）は、追想記「助手時代」（前掲書 六一―六二ページ）の中で、「わたくしと故鈴木義男君との交友は非常に古く且つ長いものであった。同君とはじめて知り会アいになったのは、もう四十年以上昔の大正十年五月のはじめころで、わたくしが同年、当時の東京帝国大学法学部を卒業して同法学部助手になったころである」と前置きした上で、木村がただ一人の助手だった公法研究室の様子を説明したのち、次のよ

うに述べている。

そのような公法研究室で本を読んでいたら、ある日、鈴木君がわざわざ顔を見せられ、挨拶をしたのが同君との交友のはじまりで、同君はもちろんわたくしより二年先輩の助手であった。その時何を御研究ですかとたずねたら、例の太い声で、僕は「社会立法」を研究しているといったのを今でも覚えている。社会立法というのは今日では社会法とか労働法とかいう意味で、当時労働法という概念が確立せられていなかったドイツ流の名称だったわけである。

## 二 教育者としての鈴木義男

大正十三（一九二四）年三月、鈴木義男は新設された東北帝大の法文学部の教授に任命され、四月から行政法学論、特別講義法学概論、翌十四年には社会法論、仏蘭西法論を担当した。当時の同僚だった河村又介は、鈴木が「行政法学論」という講座名をつけたのは、従来の注釈的あるいは形式論的行政学とは異なって、法哲学的性格の学問であることを強調したかったからだと言っている。

ところが、鈴木は、昭和六（一九三一）年五月には病氣の名目で、東北帝大を辞任する。同時に東京地方裁判所に弁護士登録をし、第一東京弁護士会に所属して、法律事務所を九段の一口坂に設けた。ここから鈴木は、昭和二十九（一九五四）



年九月三十日に、元専修大学総長今村力三郎の追悼会の演説（前掲書 五二―五七ページ）の中で、

私は危、険、思、想、の、故、を、も、つ、て、東、北、大、学、を、や、め、て、東、京、に、出、て、参、り、ま、し、て、新、聞、記、者、に、な、ろ、う、か、と、思、つ、た、の、で、あ、り、ま、す、が、吉、野、作、造、先、生、に、相、談、い、た、し、ま、し、た、と、こ、ろ、が、新、聞、記、者、と、い、う、も、の、は、寿、命、の、短、い、も、の、で、あ、る。せ、つ、か、く、君、が、こ、れ、か、ら、や、つ、て、も、ま、た、十、年、ぐ、ら、い、で、ほ、か、の、こ、と、を、考、え、な、け、れ、ば、な、ら、な、く、な、る。む、し、ろ、資、格、を、持、つ、て、お、る、の、で、あ、る、か、ら、弁、護、士、と、し、て、立、つ、た、方、が、よ、か、ろ、う、と、い、う、も、の、は、古、く、な、る、ほ、ど、よ、く、な、る、も、の、で、あ、る。

しかし指導よろしきを得る人がないと身を誤るおそれがある。指導者を選ぶことが大事である。それではどうという人について指導を受けたらいいでしょうかと相談いたしましたところが、今村力三郎という弁護士がある、あの人ならば実に立派な弁護士である、はたして指導してくれるかどうかからぬが紹介してやるから頼んでみたらよかろう、こういうことで成宗のお宅に約二十年前にお伺いをいたしましたわけでありました。先生はなかなか容易でないが、しかしそれほど熱心に希望するならば、何かと役に立つかも知れないから、ときどき自分の事務所に来てみたらよかろう、裁判所などにも一緒に行つて事件を扱うのを見ておつたらよかろう、こういうことを仰せられまして、ときには先生のカバンを持つて法廷に行き、当時の名弁護士といわれた占部先生、花井卓蔵先生、鵜沢総明先生その他いろいろな先生方のご弁論などを拝聴して非常に得るところがあつたわけでありました。

と真相を語っているからである。

鈴木は、弁護士になってから後も、昭和七年から十五年まで法政大学法学部の講師として行政法・英法を講義し、終戦後の昭和二十四（一九四九）年には専修大学理事に就任し、昭和二十六（一九五一）年には専修大学教授となり、昭和二十七（一九五二）年八月から三十（一九五五）年三月までは学長となり、またその間の昭和二十七（一九五二）年八月から昭和二十八（一九五三）年五月までの十ヶ月間は専修大学理事長を兼務した。

その後、鈴木が政界で活躍するようになってからも、昭和三十四（一九五九）年から昭和三十八（一九六三）年まで、青山学院大学教授となり、行政法学の講義を担当した。そして鈴木は、昭和三十七（一九六二）年十一月、青山学院大学で講義を終えたのち構内で倒れ、慶応病院に入院し、翌三十八（一九六三）年一月、聖路加病院に転院したが、同年八月二十五日、同病院で逝去したのである。

このように見て来ると、鈴木義男の生涯において大学教授としての学究生活が極めて重要な一側面をなしていたことがわかる。

なお既述のように鈴木は専修大学と極めて密接な関係をもったが、鈴木の「大学観」をしのばせる一挿話が、当時の同僚だった大河内一男（後の東大総長）の書いた追想記「鈴木さんと今村先生」（前掲書 八六―八八ページ）の中に記されているので、次に紹介することにしよう。

終戦後間もない頃の、専修大学の総長室で、総長の今村力三郎先生と大学の理事をしていた鈴木さんが、「大学」というものについて、まことにほほえましい話しをしている。私は聴き役。

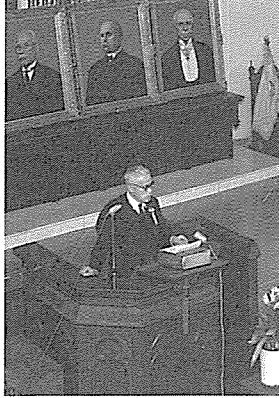
今村「鈴木君、私はとんだ風の吹き廻しで総長などにさせられたが、敗戦後のこの混乱期に、どっちを向いてこの大学を再建していいのか見当がつかない。自分の母校や学生たちが可愛い一心で頑張ってはいるが、なかなか気もちだけでは動かない。法学のことは、私も長年弁護士生活をやってきたので多少は見当がつくが、経済学となると、とんと判らない。どうしたもんかね。」

鈴木「いちばん必要なことは、軍国主義の片棒かくだいような専修大学を根本から建て直すこと、そして、これまでのように、あまり借りものの有名大博士にばかり頼らないで、若手の専任教員を養成することですよ。それさえ出来れば、専修大学の再建も九分通り出来あがったも同然でしょうよ。それからもう一つ、専修大学の学生は、だいたい中小企業の経営者の子弟が多いのだから、第一に、普通の私立大学のように高い授業料をとらないようにして、理事者がぎりぎりまで我慢すること、そして金持ちの息子でなくても大学に行けるようにすること、これは大事なことですよ。専修大学が先鞭をつけたらどうですか、先生。官立大学か有名私学の卒業生が、官庁や財閥系の大企業に這入ることばかりに浮身をやつしているなら、こっちは、中小企業へ人材を送り込むことにしたらどうですか。それこそが日本の民主化ですよ。」

そんな会話のあと、話しは、大学と政治との関係におよんだ。今村先生はもともと官僚ぎらい政治家ぎらい。鈴木さんは、当時、片山内閣の法務大臣だったが、大学教授としての経験から、大学の運営や行政については、随分と深い理解をもち、その点で表面には立たれなかったが、老先生の今村総長を親身に助けた陰の力であった。専修大学が今日のように揺がぬ基礎を据えるに至ったのは、私も学長や学監などをしばらく兼務して多少お手伝いはしたように思うが、何と言っても大学というものに対する鈴木さんの学者としての信念だったと思う。つまり鈴木さん自身、政治家として責任ある地位に在りながらも、日本の大学を育てるためには、政治が教育に手を出してはいけない、と言うのが、鈴木

さんの繰返し強調したことであった。

一方、鈴木は、昭和三（一九二八）年一月、東北学院理事の依頼を受けたのをはじめとして、昭和二十二（一九四七）年七月には財団法人東北学院の理事長に就任し、母校の発展に大いに寄与するところがあった。その体験を踏まえながら、昭和三十（一九五五）年五月十五日の東北学院創立七十周年記念式で行なった「鈴木理事長式辞」（前掲書 六六―六九ページ）の中で、次のように述べている。



学校法人東北学院はここに創立七十年を迎えたのであります。人生は七十古来稀なりと申しますが、長かるべき学校の歴史において、七十年の歴史は必ずしも古いと申すことはできませんが、創立時代に学んだ人々の孫が今、本院に学んでいることを思います時、その伝統を誇らずにはいられないのであります。しかも七十年前、押川・ホーイ両先生によって木町通りに一陋屋を借りうけ、わずか六人の志を抱いた青年を集めて、寺小屋式の教育を施しおったことを聞き、まする往時を回想しますれば、その後敷地を拡張し、増築に増築をもつてし、教職員は充実し、中学・高等学校と完備して、卒業生は一万数千名になんなんと、現に学んでいる学生・生徒数は五千五百名を数えるに至った今日の東北学院を見ます時、これもとより天父の御恩寵の然らしむるところ、又中興の祖とも言うべきシュネーダー先生、その他歴代の院長、理事、アメリカのミッション、主にある兄弟姉妹の精進の結果であること勿論であります、

又内外の同情者・理解者・旧教職員・同窓・父兄並びに本日御来臨の来賓各位や現在の教職員の暖かい御援助の賜でありまして厚く感謝するものであります。数多くの国公立の諸学校の中に処して、特に色々な困難と戦いながら、先輩が創立し、私どもがこれを継承しております所以のものは、特色ある人材を国家の各方面に供給したいと念願するに外ならないのであります。学院存立の意義はただに学問、知識・技術を授けるだけでなく、進んで信念を与え、毀誉褒貶に迷うことなく、自己の利益を思うことなく隣人のため、村のため、町のため、国家のため地の塩となり世の光となつて生きて行く人格を造るのにあります。これは決して自画自讃ではない積りであります。私どもは今更のように神の御恩寵の厚いことを感謝するとともに益々この聖業を続けてゆくことを祈るものであります。我国の教育制度所謂学制が整備した結果と致しまして、学校はその教育において画一性を強いられ、個々の学校の特性が失われつつあることは遺憾なことであります。人間に個性があるように学校に個性があつてよく、また個性なかるべからずであります。それをなるべく保存し、育成したいと言ふのが私どもの念願であります。学院の伝統は學術・技芸・スポーツ等の教授とともに常に魂をはぐくむところにあります。真の人間を造る、これが教育の最高目標でなければなりませんと信じます。この目的が見失われな限り学院存立の意義は永遠であります。教育は国家にとって最高の真摯な仕事であります。その恩恵が国立・公立に厚くして私立に甚だ薄いことを遺憾に存じます。これは制度を改めるべきではありませんが、その代り一面、官憲の干渉から解放されている特徴があります。それ故にこそ我等の伝統を維持することができるのであります。私どもは凡ゆる物質的財政的困難と闘いながら、この特色ある教育機関を永遠に育成してゆくことを決意する次第であります。あらためて内外の暖かい御援助と御鞭撻を懇請するものであります。ここに創立七十年を無事経過致しましたことを神に感謝し更に今後益々内容外観を整備致しまして、その生命を無窮に連続せしめますことを誓ひまして式辞と致します。



ここに鈴木義男の「教育観」なかんずく「私立学校教育観」が、彼自身の言で十二分に語られていると言つてよからう。

### 三 弁護士としての鈴木義男

弁護士として鈴木が取扱つた事件の主なるものは、帝人事件（昭和九年）、人民戦線事件または労農派グループ事件（昭和十二年）、敗戦後の米軍占領下でおこつた占領法規・団体等規制令（団規令）違反事件（昭和二十八年）などであつた。

ここで鈴木の思想的傾向を振り返つてみることは、彼の弁護士としての態度を知る上で極めて重要だと思つて、しばらく彼の政治思想について述べてみよう。鈴木が旧制二高に在学していた頃、すでに英国の労働党に関心を持ち、フェビアン社会主義（Fabian Socialism）に共鳴していたことは既に述べたが、彼は東京帝大に入ると、学内の社会主義の進歩的なグループである緑会に入会し、吉野作造の指導の下に、当時としては相当に急進的な活動を行なつていた。その頃に、彼は「民主、平和、博愛、人權、平等」等の政治信条を身につけたと云われている。そしてこの政治信条は、彼が東北帝大教授として仙台に赴任した後にも堅持され、そのため中杉山通の鈴木の家には特高の刑事や憲兵隊員が、しばしば監視の目を光らせていたとも言われている。既述のように鈴木が

病氣の名目で東北帝大を辞職しなければならなかったのは、実はこのためだったのである。他方、鈴木は、オート・フリードリッヒ・フォン・ギールケ (Otto Friedrich von Gierke) の『ドイツ団体法論 (Das Deutsche Genossenschaftsrecht)』や『団体理論 (Die Genossenschaftstheorie)』が説く有機的団体主義 (全体主義でも個人主義でもなく、総体の中での有機的調和こそ団体の本質であり、同時にゲルマン法的団体主義の原理であるとなす説) に共鳴し、当時日本を風靡しつつあった全体主義に対して批判的であった。また鈴木は、よく「自由に意欲する人々の共同体」を建設することが社会理想であると人々に語ったが、これは、ドイツの法哲学者シュタムラー (Rudolf Stammler) が彼の『唯物史観による経済と法 (Wirtschaft und Recht nach der Materialistischen Geschichtsauffassung)』の中で説いた、社会生活の形式 (外的規制すなわち法) と社会生活の質料 (すなわち経済) の調和統一の上の「自由に意欲する人々の共同体 (Gemeinschaft freiwillender Menschen)」が社会理想で、これに適合するように制定された法が「正法 (richtiges Recht)」であるとなす思想の影響であった。鈴木は徹底した民主社会主義の信奉者だったから、暴力革命を肯定する共産主義に対しては絶対反対の態度をとり続けた。

さて話を本題に戻して鈴木が弁護に当たった裁判について述べることにしよう。

帝人事件は、昭和九 (一九三四) 年一月十七日付の、元鐘紡社長・国民同志会会長の武藤山治が経営する「時事新報」に掲載された、『番町会』を暴く』という帝国人絹株式会社の特許売買をめぐる不正を暴露する記事が発端であった。番町会とは島田茂 (台湾銀行頭取)、高木復亨 (帝人社長)、永野護 (山叶商会取締役)、河合良成 (日華生命・福德生命取締役)、郷誠之助、長崎英造等財界人のグループである。

「時事新報」の記事は、この株式売買は番町会グループによる帝国人絹乗取りの陰謀であると決めつけ、中島

久万吉（商工相）もこれに関与していると主張したのである。曰く、

政党と政商の結託暗躍はあらゆる社会悪の源となり、つひに五・一五事件を誘発して非常時内閣の出現をみたことはあまねく知るところ、しかも五・一五事件の洗礼を受けた非常時内閣下において政党政商等はしばらくその爪牙そうがをかくして世の指弾を避くるに汲々たる折柄、ここにわれらは、わが政界財界のかけに奇怪な存在をきく。

そして「時事新報」が、この記事を掲載した目的を、「政権を笠に金権と筆権を擁して財界と政界の裏面に暗躍する暴状は眼にあまるものあり」これを世に知らしめることにあるとした。

これを契機として、帝人事件は史上稀に見る大疑獄事件に発展し、その結果、齋藤実内閣は昭和九（一九三四）年七月に総辞職するに至ったのである。

この帝人事件の裁判は昭和十（一九三五）年六月に開始され、昭和十二（一九三七）年十月までかかったが、判決は全員無罪であった。

この事件は、倒閣を目的としたデッチ上げに端を発し、犯罪事實は実在せず、すべてが「空中楼阁」（虚構）にすぎなかった。この陰謀をたくらんだのは枢密院副議長の平沼騏一郎で、彼は国家主義団体の国本社の主宰者であった。彼は、検察の巨頭たる塩野季彦（第一次近衛内閣の法相で国本社のメンバー）を使って、この事件を捏造したと言われている。この時の検事の取調べは極めてきびしく、時には拷問もどきの、虚偽の自白の強要まで行なったりしたので、帝人事件を境に「検察ファッショ」という語が使われるようになった。平沼は、右翼や軍

部を後楯にして政權を自ら握ろうと企図したが、彼の期待は外れて、岡田内閣の誕生を迎えることになった。一方、武藤山治は、帝人事件の最中の昭和九（一九三四）年三月九日、北鎌倉の自宅から駅に向かう途中、一青年によってピストルで射殺された。

鈴木はこの裁判で帝国人絹社長高村復亨被告の主任弁護人を引受け、全員無罪をかちとるのに大いに貢献した。この際鈴木義男（行政法専門）は友人の刑法学者木村亀二の援助を求め、特にドイツにおける背任罪に関する多数の文献を取り寄せ、協力して徹底的に背任罪の本質を研究した。この事情は、木村亀二の手記「帝人事件の弁護裏話」（前掲書 一〇三―一〇五ページ）に詳細に述べられている。鈴木はこの事件で一躍刑事弁護士界の第一人者の地位を獲得することになった。

高村復亨は、「帝人事件」と題する回顧録（前掲書 一〇一―一〇三ページ）の中で、

又本件に於ては各被告人は夫々各方面に於ける第一人者であり、所謂インテリ揃いであるから、二百三十余回の公判供述を通じ百名を越える証人の喚問により、検事の起訴事実に対する反駁と誤解と、誤認に対する批判是正釈明は余蘊なく為し遂げられたのであって、この上弁護人として加うる必要ありとせば被告等が非法律的に陳述した所を総合して、法律的に批判し秩序することが夫れであると信ずるといふ前提の下に進められ、背任罪については世界各国の例を細くあげてこれを批判論駁し、瀆職罪についても公訴事実の實在せざることを克明に究明し、経済界の実情に通ぜざる検事が、怪しげな告発状とパンフレットによりて起訴したることに、国家風教並に一般商取引に及ぼす影響の測り知るべからざるを憂い、昭和聖代の此の怪疑獄が有罪の判決をおくるが如きことなれば、司法権による資本主義の否定であると

断じて弁論を結んでおられるのであります。

人民戦線（労農派グループ）事件は、昭和十二（一九三七）年十二月十五日、山川均、加藤勘十、大森義太郎等労農派など四〇〇人余が検挙され（第一次人民戦線事件）、引き続き十二月二十二日には、日本無産党、日本労働組合全国評議会に結社禁止が命ぜられた、日華事変がいつ果てるとも知れず、膠着状態に落ち入った頃の思想・社会運動に対する弾圧であった。

日本労働組合全国評議会（全評）が組織されたのは、昭和九（一九三四）年十一月のことで、委員長は加藤勘十であった。日本無産党は昭和十二（一九三七）年三月に、鈴木茂三郎（日本大衆党、全国労農大衆党に参加、離党後は一時政治活動から遠ざかる）が全評に合流してつくった労農無産協議会を改称したものであった。無産党には、鈴木（茂）、加藤の外に中西伊之助、高津正道らも参加していた。この党は、当時としては合法的な最左翼の政党だったのである。しかるに、人民戦線事件では、鈴木（茂）、加藤、黒田寿男等が一網打尽に検挙されてしまつて、無産党は壊滅状態に陥り、かくして社会主義の最後の灯は消えてしまうことになる。

さて人民戦線事件の裁判で鈴木茂三郎の弁護を担当したのが鈴木義男であった。鈴木（茂）と鈴木（義）とは、これが初対面であった。鈴木（茂）は、その時すでに東北大学法学部教授としての鈴木（義）の名声を聞き及んではいたが、今村力三郎の法律事務所を彼が受け継いでいたことは、この時初めて知った、と当時を回想している。そして鈴木（茂）は、日本の敗戦によって免訴になるまで、鈴木義男の大変な世話になった。彼のおかげで求刑七年が第一審で五年、第二審で二年六カ月に減刑、それに百五十日の未決通算がついたのである。

鈴木（茂）は、回想記「人民戦線事件」（前掲書 九五〜九八ページ）の結びに近いところで、

私の記憶違いでなければ、法廷を通じて義男氏は先ず一般論として第一に「マルクス主義とマルクス主義者の意義」第二に「労農理論と労農派の実体について」理論的に究明された。これは氏が東北大学法文学部教授であった当時から、マルクス主義に関する学識の深さを法廷に於いて立証したものであって、裁判官を驚かせたということである。

次いで私に関する「弁護要旨」は一冊の著作となるボウ大なものであった。しかも情義兼ね具えた弁論であり法廷に於ける真摯な態度と相まって堂々たる弁論であった。

と述べている。

その鈴木義男の「弁護要旨」の最後の部分（前掲書 四三八〜四三九ページ）を、次に引用して読者の参考に資したい。

本件（人民戦線事件）に関連ある別件即ち労農派グループに属するといわれる人々の中には労働協議会、日本無産党なるものを組織したことが、問題とされているように承わるのでありますが、労働協議会にせよ日本無産党にせよその当時においては内務大臣によって承認されていた立派な合法的団体であったのであります。それが近頃俄かに非合法として糾弾せられるというのであります。

社会情勢の変化によって責任の変化をきたすということは法律上の問題でなくして、あくまで政治上の問題であります。

す。政治的にその勢力に消長をきたすというだけならば、それでも我々はその合理性は疑いますけれども、已むを得ないと思います。然し数千年来の法律上の原則を無視して法を行なうものが動くということは後世裁判の歴史を編む者がこれを如何に見るでありましょうか。

検察御当局というものは一つの行政機関でありますから、広い意味の政治的活動をするものとして時の政治的情勢に左右されましても或は已むを得ないかも知れませぬ。併し裁判はあくまで司法でありますから、法律に従つてのみ判断すべく、それ以外の力に影響されるということが如きことがあってはならぬと信ずるのであります。この意味において当時非常な政治的圧迫があつたにも不拘唯法律に従つてのみ裁判されました大津事件の裁判官の態度は千古に輝くものであります。

或る党派の専制の行なわれております国においては今でも随分乱暴な裁判が行なわれているように我々の耳に伝わってくるのでありますが、それは名は法治国でありましても、實質的には行政と司法との分界なき専擅主義の昔に帰つたものであります。「裁判所は法律によりてのみ裁判を行なう」という憲法の条章の蔽として廃棄せられないでおりまする我国においては固よりそれ等の国と同一であるべき筈はないのであります。

もし我国の裁判所が法律を超然として裁判を行なうようになったという印象を与えますならば、憲法の保障は廃棄されたということになるのであります。實質的に革命を遂げたこととなるのでありましょう、容易ならぬ問題と思つてであります。深く御明鑒を希うものであります。

団体等規制令違反事件は、当時日本共産党中央委員で、朝鮮戦争直前の昭和二十五（一九五〇）年六月、占領軍最高司令官マッカーサーの指令によつて公職追放された松本三益に関する事件であつた。松本は公職追放され

たのに続いて、占領法規である団体等規制令違反のことで出頭命令を受けたが、彼は、この政令はポツダム宣言に違反し、日本国憲法に違反する反民主主義的、反民族的政令だから無効だとして、追放と出頭要求を無視して政治活動を続けたため、昭和二十八（一九五三）年五月十三日に逮捕されたのであった。

鈴木義男は、松本の主張を支持し、昭和三十六（一九六一）年十二月二十日最高裁の大法廷において免訴の判決を獲得するまで、八年間に亘って弁護に当たった。米軍の占領下で法務大臣を経験していた鈴木は、大法廷の口頭弁論の中で次のように主張した。

団規令という政令は、その前身たる昭和二十一年のポツダム勅令「政党、協会その他の団体の結成の禁止等に関する件」とともに一種の特別の形態の法律であります。行政調査とともに犯罪捜査ならびにその処罰をも併せもっている混合形態の政令であり、しかも占領治下における限時法であります。行政法と刑事法の混合形態であります。こういうすつきりしない法律は占領立法に特殊なものでありまして、通常の法治形態のものではあまりその例をみないのであります。こういう変則が行なわれたのはひとえに占領治下であり、連合軍総司令官の指令下であり、超憲法的に多くの立法がなされたためであります。（中略）

検察官は団規令の企図するところは行政調査だけであって犯罪調査はふくまれないと主張するのであるが、調査の結果、犯罪の予備的行為があると認定すれば告発も予定しているのであるから、きわめて重要な犯罪捜査の一部をなすことは明らかである。それが捜査機関でもない通常の行政官庁たる法務総裁がこれを行なうことはすでに違法であるのに、関係者を召喚するのに裁判官の令状をもってしないのは原判決もいうごとく明らかに憲法違反である。



以上、鈴木義男の弁護士活動の一端を紹介したが、かつて昭和十一（一九三六）年から昭和二十（一九四五）年まで鈴木事務所番頭兼助手をつとめたことのある福田力之助（弁護士）も、追想記「科学的構成の弁護」（前掲書 一一五―一一九ページ）の中で書いているように、鈴木は弁護活動に一時期を画した偉大な人物であったと評すべきである。

鈴木先生が弁護活動に一時期を画したというのは、訴訟記録を精読調査して、起訴事実を分析検討し、広い視野に立って裁判所に訴え、無罪判決若くは執行猶予の判決を言渡す外ないという心証を科学的に構成し弁護した点である。先生の博識と雄弁は大いに役立つたものと思ふ。

と述べて、従来の弁護が弁護士個人の権威と独自の見識を以って起訴の欠陥を鋭く突いて、法廷に無罪の雰囲気を作ることを主眼として来たのと比較して、鈴木弁護士の科学的構成を高く評価しているが、誠に正鵠を得た批評であると思う。また鈴木弁護士の活動が熱烈な気迫と積極性に富んだものになった根底には、「法は万人を保護する」という堅い信念があったことを指摘する意見も傾聴に値すると思ふ。

#### 四 政治家としての鈴木義男

鈴木義男は、昭和二十（一九四五）年十一月、日本社会党に入党するが、彼は社会党の結成に参画し、同党結成準備委員から結成後は、中央執行委員・文教部長となる。そして昭和二十一（一九四六）年四月十日の戦後最初の衆議院議員総選挙に、福島県第二区から立候補して当選し、社会党中央執行委員となる。続いて昭和二十二（一九四七）年四月二十五日の総選挙では日本社会党が第一党となり、六月一日片山哲内閣（社会・民主・国民協同三党の連立内閣で、外相芦田均、逓相三木武夫）が成立すると、鈴木義男は司法大臣（昭和二十三年二月十五日に司法省が廃止され、法務庁が設置されて以後は法務総裁）に就任し、閣僚となった。

翌六月二日夜、片山首相は、「国民諸君に訴う」と題して施政方針をラジオ放送し、その中で、

新内閣は、さきに成立した政策協定および三党の間に交わされた申し合わせの線にそい、極右および極左に偏せず、中庸の道を取り、とくに共産主義に対しては明確に一線を画し、挙国的救国内閣の実質と精神を以て進まんとするものである。

と宣言し、国民一般に対しては「民主主義平和国家、文化国家の国民としての精神革命」を要請した。

片山内閣は、占領軍当局の指示に従って、財閥解体、警察制度の民主化、家族制度の廃止など、いわゆる民主化政策を推進したが、他方では極左勢力の労働攻勢に対抗して資本を擁護する立場にも立たされ、社会党は自ら

の主義と政策との矛盾に直面してその足場を崩され、連立内閣は僅か八ヶ月の短命に終わった。

鈴木義男は、続く芦田均内閣（昭和二十三年三月十日から十月十五日まで）でも法務総裁に就任した。彼の在任中に、日本の法律全体は、革命的变化の過程にあり、新裁判所法、検察庁法が制定され、民法、刑法、訴訟法等が改正され、また国家補償法、行政事件訴訟法、人身保護法等の二次的立法も行なわれた。鈴木は、連合軍総司令部法律課長アルフレッド・C・オプラー（Alfred C. Oppler）等の協力を得て、日本の法律全般を新憲法の民主的原则に合致するよう改正することに挺身した。彼は旧官僚たちからの強い抵抗を物ともせず、法律及び警察制度委員会の委員長として、指導的役割を演じたのである。鈴木は、一般に不評だった占領政策の一つ、ページ（公職追放）を弁護して、日本におけるページは、ドイツにおけるナチスおよびナチス支持者に対する過酷な処罰とは趣きを異にし、日本の国際的信用を回復する為に必要な手段であるとの所信を表明した。

鈴木が法務大臣・法務総裁の職にあった時の、最大の試練は、何と言っても昭和電工大疑獄事件であった。この事件で時の芦田首相を初め国務大臣数人が収監され、そのため内閣総辞職に追い込まれた。その難局の渦中に立たされたのが鈴木であった。十数年後に芦田元首相を初め二、三の元大臣が無罪となったが、容疑渦中の者が大臣の座にあることは国民大衆の心理にいかによましからぬ影響を与えるかを考慮すれば、最高の司法当局としては地検高検の正当な調査と高裁の判決に干渉すべきではない。正しい国法は一内閣の寿命より尊ばれるべきであるとの確信の下に、鈴木は、時の内閣閣僚や民主党や社会党の党員の冷笑に屈せず、国法の尊厳を守るために敢えて内閣の寿命の無理な引延し策を取らなかったのである。ここに彼の面目躍如たるものを見る。

閣僚としての鈴木は活躍もさることながら、既述のように、彼は昭和二十一年に衆議院議員の総選挙に立候補

して第一回目の当選を果たして以来、昭和二十二年に第二回目、昭和二十四年に第三回目、昭和二十七年に第四回目、昭和二十八年に第五回目、昭和三十年に第六回目、昭和三十五年第七回目と、前後七回に亘って衆議院議員となり、国会議員としての活躍にも注目すべきものが少なくなかった。

中でも、昭和二十一（一九四六）年六月二十六日、第九十回帝国議会の衆議院本会議における憲法改正法案の質問演説——鈴木の新代議士としての処女演説——は歴史的な演説であった。鈴木はこの時、社会党の一年生議員だったが、抜擢されて社会党の代表質問に立ったのである。鈴木は、この演説の中で、第一次吉田内閣が提出した「帝国憲法改正案」（原案は連合軍総司令部内で極秘に起草された「Constitution of Japan [draft]」）、内閣が提出した案は、この総司令部案いわゆる「マッカーサー草案を和訳したものであった）について次のように述べた。まず前文については、

之を読みますると、洵に冗漫であり、切れるかと思へば続き、源氏物語の法律版を読むが如き感がある。極端に申せば、泣くが如く、訴ふるが如く、嫻々として尽きざること縷の如しと言ひたい、一抹の哀調すら漂って居るやうに感ずるのであります。是れ果して経国の大文字と言ふことが出来るでありませんか、私共は現在に生きて此の文字の成立由来を感得致して居りますから、聊か了解する所がありますが、後世子孫が之を読みまする時、如何なる印象を受けるでありませんか。事は我が国の再出発であります、もっと明朗、もっと積極的であつて宜しいのではないかと信じます、何よりも先づ普通の我々の言葉らしい日本語に改作せられんことを希望するものであります、所謂不磨の大典の前文として冗漫に過ぎます、牛の涎式である、泣き言の臭ひがする、是は遺憾なことであります。政府は簡潔、莊重、典

雅、千鈞の大文字に改められる御意思はありませぬか、御伺ひを致します。

と質問した。次にこの憲法改正案は主権の所在、主権の概念を明らかに定めていない点で不充分ではないかと質問した後、第一の主要争点すなわち第一条に言及して、

草案の第一条は主権の所在を規定したのではなく、天皇の御地位と御性格とを規定したものであります、我々は之に対して別に異議あるものではありません、天皇が日本国と日本国民統合の象徴であることは、恐らく最も適切に天皇の御地位と御性格とを表現したものでありまして、日本国民大多数の意思と信念も、其処に帰著すると信ずるのであります。一体日本国民の皇室に対する意識は法律以上のものでありまして、権力と云ふものに結付けて尊崇して居るのではない、飽くまでも道義的、感情的のものでありまして、現実に政治的権力を有せらるるか否かと云ふことに依つて、其の敬愛と尊崇の念は毫末も減却するものではないのであります。現実政治の上に超然と遊ばされることに依つて、却て光輝を増し、安泰を得るのであります。徒らに天皇に多くの大権を帰属せしめますことは畏多いこととあります。が、所謂最良の引倒しであつて、採るべからざる所と信ずるのであります。

と、いかにも明治の人らしい意見を述べている。

そして第二の主要争点すなわち第二章の戦争放棄については、

戦争の抛棄は國際法上に認められて居ります所の、自衛権の存在まで抹殺するものでないことは勿論であります、其のことは心配は御無用であります、併し軍備なくして自衛権の行使は問題となる余地はないのでありますから、将来幸ひに國際連合等に加を認められます場合に、國際連合に安全保障を求め得られるであらうと云ふことを期待致すのであります、我々の心配致しますのは、我が国が第三国間の戦場となるやうなことであります、是は憲法の問題ではありませんが、斯う云ふ宣言を致します以上、政府は将来外交的手段其の他に懇へて、一日も早く國際連合に加を許され、安全保障条約等に依つて我が国が慘禍を被むることを避けられるやうに善処せられる用意があられるかと云ふことを念の為に御尋ね致します。(中略)

局外中立、殊に永世局外中立と云ふものは前世紀の存在でありまして、今日の國際社会に之を持出すのは「アナクロニズム」であります、今日は世界各國團結の力に依つて安全保障の途を得る外ないことは世界の常識であります。加盟國は軍事基地提供の義務があります代りに、一たび不当に其の安全が脅かされます場合には、他の七十數箇國の全部の加盟國が一致して之を防ぐ義務があるのである、換言すれば、其の安全を保障せよと求むる權利があるのでありますから、我々は、消極的弧立、中立政策を考ふべきでなくして、飽くまでも積極的平和機構への参加政策を執るべきであると信するのであります。此の点に付て政府の御所見は如何でありますか。

と質問したのである。

この後、鈴木義男は、社会党代表の帝國憲法改正委員に選ばれ、憲法改正について積極的に前向きの意見を提出した。

鈴木は、昭和三十五（一九六〇）年一月、民主社会党の結党に参加し、統制委員長に就任する。そして十一月二十日、第七回目の衆議院議員当選を果たした。翌三十六年一月、彼は民社党国会議員団長に就任し、八月三日、ブラッセルにおいて開催の列国議会同盟会議に出席し、併せて欧米各国における政治経済事情等を視察するため衆議院から派遣された。

彼は、昭和三十七（一九六二）年一月、民社党顧問となったが、既述のごとく昭和三十八（一九六三）年八月二十五日に逝去した。

因みに、鈴木義男がなぜこの時に永年共に歩んで来た社会党と袂を分かち、欣然として民社党結成の難業に馳せ参じたかを、彼自身の言葉で語っている。「民主社会党綱領に対する鈴木綱領試案」（前掲書 三五二―三六七）の一部を引用して示すことにする。

高度に発達した現代日本の社会構造には、マルクス主義の生きつづける現実的基盤があり得ないにも拘らず、このイデオロギーが支配的影響力をもって、社会党、総評を左傾せしめているのは、いわゆる進歩的文化人達の、マルクス主義に基づく左翼的ムードが、今日の文明状況に、なお強い影響を与えているためである。

日本知識人の多くは、近代的自我を確立し、合理主義を成長させ、社会に能動的に働きかける知的能力を、今日に到るも修得しようとしない。（中略）

左の暴力が右の反動を助長し、右の多数専横が左の革命化を結果せしめ、相互に健全な議会主義的政党政治の成長を阻害しているのが嘆わしき現代日本の政治状況である。（中略）

国民はこのような政治の現実に強い不満を感じている。

今日国民は、真に自主独立の精神を持ち、権力主義や事大主義を克服し、民主主義を基調とした、現実的、かつ建設的な政党の出現をこそ待ち望んでいるのである。

わが党は現代日本資本主義の現実的認識に立って、広汎な国民大衆を基盤とし、健全なる国民世論の期待に応えて誕生したのである。

鈴木義男は、かつてヨーロッパ留学の帰途、賜暇帰米中（大正十二年五月～十三年十二月）の恩師シュネーダー院長をランカスターに訪ねたことがあった。その時シュネーダーは、鈴木を、*Young Wilson for Japan* の標題の下に、アメリカの新聞に次のように紹介した（前掲書 二六七～二六八ページ）。

彼は仙台にある東北大学の行政法の教授になることになっている。彼は母校の街路一つ隔てた所にいることになっている。彼はすばらしい修業で政治学に於て東洋一の権威となるであろう。そして彼は一権威たるに止らず彼の国に彼の政治理想を実現する推進力となることであろう。彼は日本の若い「ウイルソン」となるであろう。

鈴木義男は、シュネーダー院長の期待に違わず、日本のトマス・ウッドロー・ウイルソン（Thomas Woodrow Wilson）となつたと評すべきであらう。



## 東北学院の英語教育とゲルハード・メソッド

清水 浩三

### 序

東北学院には、英語教師としての卓越した才能と独創的ひらめきをもち、しかも信仰に基づく使命観と豊かな人格的魅力によって学生、生徒に大きな影響を与えながら斯界に貢献した先生方は枚挙にいとまがない程である。中でも、英語の教員として仙台においてばかりでなく東北、北海道は勿論、全日本的なレベルにおいても良い働きをした先生が多数いることは多言を要しないであろう。東北学院はその先生方を通して、英語として、アメリカ、イギリスのみならず世界に通ずる言葉をもって各種の事業を行なっている優れた人物や、英語の教育を通して世に奉仕する多くの人材を輩出しているのである。このようにして「英語の学院」、「学院の英語」として高い評価を得てきたのである。

その原動力となったものは、何であつたのだろうか。明治三十年代から、その独特の英語教授法をもって生徒を指導し、実際に通用する英語を身につかせ、生徒の血となり肉となつて、三十年、五十年の後までも生きて働く英語をその生活の中に残したのは、ポール・ゲルハード、その人に他ならないのである。

勿論、ポール・ゲルハードには多くの理解者と協力者があつたことも、その大をなさしめる要因であつたのである。「仙台神学校」を創立した当初より、牧師、神学者であり、創立者の一人として行政から財政にいたるまでの重い複雑な責任を負うていたW・E・ホーイ、その後を継いで院長となつたD・B・シュネーダーが自ら進んで英語の教鞭をとつている。その体験から英語教育を専門に推し進める教師の必要性を痛感してランカスターまで出向き、牧師の道を選んだポール・ゲルハードを説得してミツシヨナリー・ティーチャーとなる決心をさせたホーイとそれを支えたシュネーダーの理解と指導を忘れてはならない。

ポール・ゲルハードが英語教育の担当者として教壇に立ち種々の迷いと困難と戦つている時、良き協力者となつたのはモールであり、又ゾーグとその後につづくメアリー・シュネーダーであつた。大正二年に専門部文科を卒業するとすぐゲルハードに請われて英語教師の道を選び、そのよき協力者となつて教室に臨み、直接生徒の指導に當つた三品鼎、その他多くの日本人教師と、ゲルハード・メソッドが大方かたまつた時に来日し、そのよき後継者としての責務を果たしたスタウト等、時にのぞんで正にその人を得たと言ふべきであらう。

そのようなポール・ゲルハードの英語教育を一層効果あらしめるために果たした、その長男ロバート・ゲルハードの「発音学」の貢献も極めて大きかつたことを忘れてはならない。このようにして着々と英語教授法の理想に向かつて進展するゲルハード父子の努力精進を蔭ながら支え、それに厚みと深みと高さを加えるために尽くしたポールの妹ミス・ゲルハードの英語、英米文学を通してのアカデミックな面での協力は尊敬に価するものである。

我が国における英語教育界においては、一九二二（大正十一）年に文部省英語教育顧問として来日し、英語教授研究所（The Institute for Research in English Teaching）を設立し、その所長としてオーラル・メソッ

ド (Oral Method) を提唱し、多面にわたる指導を通して日本の英語教育の推進に多大の貢献をしたハロルド・E・パーマーは余りにも有名であるが、氏の来日に先立つこと三十五年、在日四十二年にわたるポール・ゲルハートの英語教授法は、比類なき成果よりして、又その学的確かさと卓越性において、パーマーのそれに優るとも劣らないものと高く評価されるべきであろう。更に「音声学」の権威である長男のロバートと「アメリカ文学」担当の妹ミス・ゲルハートその他の宣教師の協力のもとに完成された多角的且つ生涯教育に類する教授法は、出色のものと思われされる。

## 一 ポール・ゲルハートと英語教授法

### 一、ゲルハート・ファミリー

#### 1、ランカスター市のゲルハート家

昭和四十二年九月七日、ポール・ヴァーベック・ゲルハート (Paul Verbeck Gerhard) が夫人と令嬢を同伴して東二番丁の東北学院中・高校に月浦校長を訪ねて来た。ポール・ゲルハートの次男であり、中高礼拝堂で生徒一同に仙台の懐かしい思い出を語った。「昨日の朝仙台にやって来て、五十年前に住んでいた家のあたりを歩いてみました。まるで故郷に帰った思いでしたが、仙台も学院も余りに変わってしまつて、ほとんど昔の面影がありません。

ません。私の父と叔母と兄のロバートの三人が東北学院で教鞭をとったことを私は誇りとしています」。

ポール・ヴァーベック・ゲルハートは、ポール・ランバート・ゲルハートの次男であるが、明治初期の宣教師フルベッキ（ヴァーベック）の名に因んで命名されたとのことである。父親のポール・ゲルハートは、ドイツの牧師で讃美歌の中に作詩者として十篇も採用されているパウエル・ゲアハルト（Paul Gerhardt 1607 - 76）と同名であり、その子孫であることが判明している。

昭和三十四年十二月の『東北学院時報』に、大内経雄（大正十二年師範科卒業、立教大学教授）の一文が寄せられている。



ゲアハルト記念切手  
（ゲルハート記念室に掲示されていた）

私ども米国の工場現場監督制度視察団（八名）が、ランキヤスター（ペンシルバニア州）を訪れたのは、四月二十七日であった。いかにも古風な市庁舎にモナハン市長を訪ねた折、私は旧師ゲルハート家の墓参をしたい旨を述べると、市長は気の毒そうな顔で、知らないという。丁度その時来合せていた市内の新聞記者が早速新聞社に電話をかけてくれると、ものの十五分もしてゲルハート家に関する一切のことを調べてくれたのにはまた驚いた。

翌日は丁度日曜日だったので旧師の墓所を訪ね、その夜は年老いた二人の従妹の家を訪ねて旧師の懐旧談にふけた。



P. L.ゲルハートと家族  
(左からVerbeck,Mrs.Gerhard,Robert,Paul)

ワシントンでは、郊外に住むポール・ヴァーベック・ゲルハート氏に迎えられ、晩餐に招かれ、話して見ると少年時代は仙台育ちであることが分り、大いに話しがはずんだ。その話しの中でゲルハート家の祖先にドイツ人で著名な讃美歌作者のあることを知った。その名はパウル・ゲアハルトで一六〇七年生れ、ルーテルと並んでドイツの代表的作詩者であることが分った。ドイツ政府は、彼の偉業を讃えて一九五七年に記念切手を発行している。

## 2、讃美歌作家、パウル・ゲアハルト (Paul Gerhardt)

パウル・ゲアハルトは一六〇七年ドイツのサクソニー生まれで、父は市長であった。パウルが十二歳の時、三十年戦争が起り、その渦中にまきこまれた。当時、市長という職は、町の安全と幸福との責任を負わされていた。従って市民の安全と食糧とを市長に求める要求が強く、家族は非常な苦難と危険にさらされることになった。敵と戦っている市民がパウルの家の戸をたたいて「おおい起きろ、町をまもれ！」という声に眠りをさまされることが毎日のように続いた。

パウルは、四十八歳になってから牧師になり、ミッテン・ワルトの森に囲まれた小教区が与えられ、アンナ・マリアを妻として迎えることができた。これから六年間に数多くの讃美歌をつくり出版し、

非常な賞讃を得た。

一六五七年、招かれてベルリンの聖ニコラス教会の牧師となった。ここにおいて彼の名声は益々高くなり、彼の説教の時は市民が教会に殺到したといわれている。多くの人が相談に訪れ、又悩みをうったえて来た。彼は貧しい者の友であり、父母を亡くした子をひきとって育てたということである。

その頃ルーテル派とカルヴィン派の争いが起こり熾烈な論争が続いていた。パウルは病床に伏していたが、ベルリンの牧師達がその枕辺に集まり協議をし信仰と説教の自由を主張した。そのため彼は反対派の首領と見なされ、教区から追放されることになった。ベルリンの市民は、愛する説教者を失うことを悲しみ、その復職運動を起こしたので、ウイルヘルム一世はそれを認めたが、多くの厳しい条件がつけられたので彼はこれを断つたのである。

それから、彼は家族と共に旅に出なければならなくなった。と、ある田舎の宿についたとき妻と子を宿に残して祈るために森に行ったが、そこで「汝の道をエホバにゆだねよ」（詩篇三十七・五）の聖句を思い出し、非常な力を得て一つの讚美歌を作った。

汝がすべての悲しみと

その道とを主にゆだねよ

天地を続べたもう

かの真心とやさしき御手に

これは、ジョン・ウェスレー等によって英訳され広く教会で歌われるようになった。

その後、彼はメルゼブルクのクリスチャンセン侯からの招きにより、リューベンの副監督に復したが、七年後一六七六年、六十九歳のとき一人淋しく天に召されたのである。ゲアハルトの生涯は、悩みと苦難に満ちたものであったが、信仰をもってこれを克服し、自由と真理のために戦い、恵みによつて多くの讃美歌を残している。讃美歌一三、一四、四一、一〇七、一三六、一五三、一七九、二六六、二九〇、三四二の十篇が現在の讃美歌（一九五四刊）に収録され歌われている。

その死後二百六十六年にして、この世に生を受けたポール・ゲルハートが日本において英語教育に顕著な業績をあげることができたことも、その牧師、伝道者としての働きと共に、故なしとしないことが首肯できよう。

## 二、ポール・ゲルハートの人となり

『東北学院百年史』にポール・ランバート・ゲルハートについて次のように書いてある。

ゲルハート一家の長ポールは、牧師の子として一八七三（明治六）年七月四日、ペンシルヴェニア州ニューホランドで生まれた。ランカスターから僅か数マイルの所である。フランクリン・アンド・マーシャル大学を一八九四年六月に卒業、故郷の小学校で一年間教鞭を取った後、一八九五年秋からランカスター神学校に学び始める。そのゲルハートが牧師の道を断念して、ドイツ改革派教会派遣教師として仙台に向かうに至る事情はこうであった。仙台における同教会



ポール・ゲルハード先生  
(昭和7年)

の宣教師活動はすでに満十年に及んでいたが、先任のホーイ、シユネーダーを始め、ミラー、スナイダー、ノッスらは正規の神学教科の授業のほかに担当を余儀なくされる英語の授業で悩み抜き、かねがね外国伝道局に英語を専門に担当する学校専任の宣教師の派遣を強く要望していた(一八七六年二月一九日付のホーイの手紙)。

たまたま、ゲルハードの神学校在学一年目の頃、前述のようにホーイは最初の休暇を得て帰米中であつた。しばしばランカスターを訪れたホーイが、その父親とは旧知の仲のポールに向つて、仙台来任を懇願したとしても少しも不思議ではあるまい。

十月に宣教師任職を受けたゲルハードは、十二月にアメリカを発つて日本に向い、一八九七年一月三十日(注、一月十日が正しいようである)無事仙台に着任した。ゲルハード以前の男性宣教師はすべて按手礼を受けて正式に牧師の資格を与えられていたので、彼は最初の「平信徒」宣教師であつた。

もつともポールは、一九〇一年九月に休暇を得て帰国するやランカスター神学校に再入学し、一九〇二年六月に卒業している。その後一九二二年二月二十三日按手礼を受け正式に牧師の資格を得ている。

ポールは、フランクリン・アンド・マーシャル大学を一八九四年に卒業すると直ぐ、ニューホランドのグラマ





授業（左端ゲルハート、右端三品、大正3年頃）

ー・スクールで教師となり一年間教壇に立っているので、東北学院に来て英語を教えるには最適任の先生であったと言える。

### 三、ポール・ゲルハートの英語の授業とその協力者

ポール・ゲルハートの東北学院における英語の授業は、明治三十年の一月から三月までの準備の後、四月の新学期から開始された。

一体、学校における英語の授業は、教科書があり、「学習指導要領」で決められていても、その運用に関しては、その学校その学校によって独得のものがあり、それが伝統的に受け継がれ特色として存続するものである。この傾向は、特に私学において顕著である。又同じ伝統の中で継承された方針があっても、担当者による多少の違いは生ずるものであるが、優れた教師、指導者のもとで卓越した教授法と教育計画による場合、何年か、何十年かの後までもその成果が生きて認められ高い評価を得ることがあるものである。東北学院中学部における英語教育にそれを見ることが出来る。

『東北学院英学史年報』第二号に、石川重俊は次のように書いている。

英 語	読方、書取
	会話
	文法、作文
	習字
	訳解

幸か不幸か、東北学院に関するいろいろの記録や資料の中に、私の中学部時代の成績表と高等学部英語師範科時代の成績表が残っていた。

他の科目は割愛するとして、「英語」の部分だけをとり出してみると、一年から五年まで図のように編成されている。この編成は一年から五年まで変らない。しかし各項目は、各学年、学期によって、重点の置き方が異なっていたようである。

さて、いよいよ一年生となった私たちは、こうして英語との最初の出会いをするわけである。そこは東二番丁（現在は一番町となっている）の赤れんがの校舎正面入口のまじ、三階の音楽

教室であった。（この校舎は昭和四十年に解体鍵入れ式が行われ、同五十四年、赤煉瓦校舎見送り式の後解体された。昭和五十五年になってその跡地にシュネーガー記念館が建設されて現在に至っている）その先生は、教室というところであつた初めての外国人であつた。その先生がポール・L・ゲルハード先生であるということは、やがて分ることであつた。脱衣場の着物を入れるカゴの様なものに、何やら小さな物を一杯入れ、それをこわきにかかえて、せかせかと教室に入つて来られる。何が何だか分らないでいるうちに、そこには初めて耳にする英語と、先生の忙しげな動作、小さな品物を出し入れしながら、大声で言つてくださる外国のことばがあつた。そのうちに一人一人がひっぱり出されて、何やら英語でうながされ、戸口に行かされたり、窓のところに行かされたり、物をとらされたり、またそれをかごの中に入れたり、自席に帰れと言われ（たような気がして）座らされたり、またたくまに時間が過ぎていく。これが私たちの当時の一年生一人一人の生徒の東北学院の英語との最初の出合いなのである。

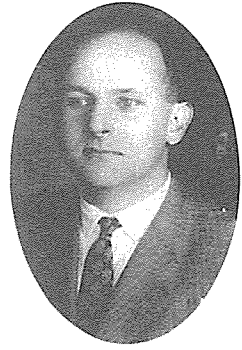
このようにして、夏休みが始まるまでの英語の時間はつづけられて行つたように記憶している。その頃には、ゲルハード先生から言われたような動作が出来るだけでなく、ある動作なり行動なりをしていかどうかをきき、その返事を

待ってから、その動作なり行動なりをしようと、自分が選びとった品物（小物）を中心に動作したり、行動をしたり、かなり広く、やりとりを先生とすることが出来るようになっていたようである。ゲルハート先生のあの問答のやりとりの独特なつなぎのことはなどは、いつの間にか、クラスの者同志でまねをしあったりしていたことを想い出す。この期間の中で、日本人の先生がたの授業があったという記憶はない。（A、B、Cの三クラスであったので、クラスによって多少ちがうかも知らない）「英語」と言えば、あの三階の音楽室だけのように記憶している。

昭和二年クラスの石川重俊は、ゲルハートから直接指導を受けた幸運な一人であり、極めて詳細に写實的に述べている。

私は昭和三年クラスで、ゲルハートの直接の授業ではなかった。当時は始業のベルが鳴ると、全校生徒が校舎中央にある「講堂」（当時は礼拝堂といわず「講堂」といつていた）の下のうす暗く、円柱がところどころにある「控室」に集合することになっていた。各クラスが二列縦隊に背の低い者を先頭にして並んで担当の先生の来るのを待つことになっていた。私が先頭であった。

さて、期待と不安な気持ちで待った英語の時間であった。どんな先生が来るかが楽しみでもあった。やがて私の前に来て立たれたのは、今まで見たこともない程顔のまん丸い外人の先生であった。先生のあとに続いて「講堂」正面の広い階段を昇り、二階から三階へと昇って行った。階段の中は一メートルもなかったような気がする。一列になって先生のあとに続いて行くと、ちょうど私の顔のすぐ前で階段一杯に広がっているネクネクとしたお尻が右、左、右、左とうねっていた。



オスカー・スタウト

三階の音楽室につくと、先生が教卓の前に立って何やらあいさつをしたようであった。誰かが「ブツ」と吹き出してしまった。どういいうわけか笑いをこらえられなくなり、クラス全員が大きな声で笑ってしまい、とうとう先生までが笑って、仲々とまらなかつたのを覚えている。これが、英語のクラス第一時間目であった。今まで見たこともない外人の先生で、異常に太っておられる先生であったためなのだと思つた。この先生がスタウト先生であることを組主任の三品先生から教えていただいたのは後になってからであった。

三階の音楽室は、普通教室の二倍程もある大きな部屋で、正面に黒板がありその両側にドアがあつて両側から出入ができるようになっていた。音楽の授業にも使われていたので左前方にアップライトのピアノが置いてあつた。教室の両側は前の半分が壁になっていて、その前に教材を入れて置くガラス戸棚があつた。その中には、フオーク、ナイフ、スプーン、カップと皿、グラス等の生活用具、ボール、バット、ラケット等のスポーツ用品、りんご、みかん、バナナ、パイナップル等の果物の模型、太鼓やトランペットなどの楽器、その他様々なものの絵の画いてあるボードや掛軸などの他小さな手鏡の入った箱などが入れてあつた。

教室に入つて座るやいなや級長が、「スタンダップノバアーウノ」と号令をかけ、お辞儀をさせられた。これは、組主任でもあつた三品先生の英語の時間から教えられていたので難なくできたのである。やがてスタウト先生が自ら動作をしながら「Stand up.」と云つたので全員、立ち上り、次に「Sit down.」と云つて坐らされた。数回やらされた後、「Sato, Stand up.」と今度は個別に立たされ、次いで「Sit down.」と座らされ、次々と何人もやらされ

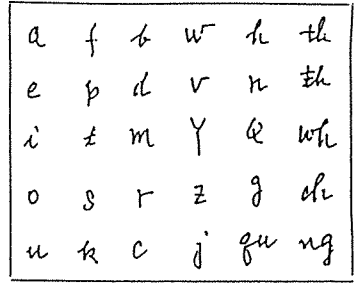
た。次いで、“Go to the door.” “Open the door.” 等々動作が繰り返された。

次に単語が与えられた。“cup”それから、“saucer”そして“a cup and saucer”であった。同じ皿のようでも“a plate”と“a saucer”とではどうして言い方が違うのだろうか。うと疑問に思った。

宇田道夫（大正十五年中学部卒業）は、『東北学院英学史年報』第四号に次のように書いている。

大正十一年の四月に中学部に入学したが、全く白紙の状態で英語の手ほどきを受けることになった。ポール・ゲルハート先生と三品鼎先生とが、全く文字抜きで教えられた。最初の言葉が Stand でそれが Stand up になり walk になり、Walk to the door. Open the door. Shut the door. Go back to your seat. Sit down. になりだんだん回を繰るにつれ vocabulary がふえて行った。私は本来郷里の原町に近い相馬中学に入るべきところを、叔父が学院出身だったこともあり、小高町の教会で受験した上で入学を許された。当時は東北各地の教会などで受験できた。一学期中は会話以外は何も教えられなかった。中学最初の夏休みで帰省した時、相馬中学に入った友達は、みんな reader が読めるようになっていた。自分は alphabet 一つ、単語一つ読めない。これでいいのかしら、と思った。あとになってこれがゲルハート先生の oral method という方式だと教えられた。赤ちゃんが言葉を覚える時の過程をそのまま英語学習に採り入れたもので、文字から入って行く visual 偏重の当時の大方の教授法から見ると画期的なものだった。

しばらくすると、絵のかいてある大きなボードが使われ、色々な名詞や色のことが教えられ、動物や乗物な



東北学院英学史年報(第5号)

どが示された。

ある時、掛軸を持って来られたが、それにはアルファベットが書いてあった。これについては、『東北学院英学史年報』第五号に青木徹(大正十年中学部卒業)が書いてるので引用する。

教室正面の壁にアルファベットを書いたポスター様のものが張られていた。ゲルハド先生に最初に教えられたのは二行目上の「f」であった。各自小さな鏡を左手に持ち、ゲルハド先生の口もとを見ながら、下唇の上に門歯を重ねて「f」の発音を何回も繰り返したものである。

昭和三年のクラスの場合は、スタウト先生が、ボール箱に入った小さな手鏡を各人に配り、壁に掲げたアルファベット表に従って、懇切丁寧に指導して下さった。最初は正面から御自分の口をよく見せ、それをまねて発音させ、生徒は自分の口を鏡にうつして先生の口と比べて見て直すようにさせた。次に生徒の横に来て同じ鏡を使って見比べさせ、まねさせるのであった。外人独特の匂いのあることをも知ったものである。

次に色紙を示して色のことを教え、やがて I am a teacher. You are a student. This is a desk. That is a chair. 等と授業が進んで行った。

#### 四、英語教授法の模索

明治二十四年、「仙台神学校」は学制を変更して「東北学院」と改称し、一般教育を始めようとして、県知事と文部大臣宛に提出された認可申請書の中から英語科担当者を拾ってみると、ウィリアム・ホーイ、デー・ビー・シュネーダーとヂェー・ピー・モールの氏名の他に、ミセス・ホーイとミセス・シュネーダーの名がでてくる。

押川の後を継いで院長になったシュネーダーが自ら英語の教師をも兼ねなければならなかった。そのために宣教師としての本務と牧師、神学者としての仕事と研究、東北学院の院長としての責務とが重なり、種々の困難と戦わなければならなかった。明治二十九年のミッシェン・ボードへの報告書の中で英語教師の派遣要請がなされている。

これに應える形で、神学校に入学したばかりのポール・ゲルハードが志を変えて仙台に来て英語の教師になる決心をするのである。ポール・ゲルハードは、ミッシェン・ボードのキャレンダー幹事宛てに次のような書翰を書き送っている（一八九六（明治二十九）年三月一八日付）。

*I have learned through Mrs. W. E. Hoy and his family, that at the meeting of the Foreign Missions Board held last week, it was decided to send to the north in Japan, an uneducated single man; I have for some years thought of becoming a missionary if Providence opened the way. I therefore write to you for information concerning the present need.*

I have learned through Mr. W.E. Hoy and his family, that at the meeting of the Foreign Mission Board held last week, it was decided to send to the work in Japan an unordained single man.

I have for some years thought of becoming a missionary, if Providence opened the way. I therefore write to you for information concerning the present need.

(私は、W.E.Hoy先生とその御家族の方から、先週行われた外国伝道局の会議で、按手札を受けていない独身者を日本に送ることに決まったとおききました。

もしそれが神意にかなうなら宣教師になりたいと、ここ何年間か考えて居りましたので、今どうなっているのかをお伺いしたくてこの手紙を差し上げる次第です)。

弱冠二十二歳の青年が、学半ばにして未知の日本に来る決心をするには、尋常一様のことではなかったであろうと思われる。そこには人間を超えたところの働きがあったのではなからうか。

ポール・ゲルハートは、明治二十九年十二月二十六日に乗船し、一月七日に横浜に到着、船上でホーイの出迎えを受けて上陸した。仙台に着いたのは一月十日であった。

### 1、英語の担当時間

四月に新学期がはじまると週十八時間英語の授業を担当したが、その様子を六月十一日付のミッション・ボード外国伝道局宛ての報告書に次のように書いている。



I am glad to say I find the work very pleasant. The students are anxious to learn to read and to speak English and apply themselves very earnestly and are making considerable progress. As I am teaching 18 hours a week and have a great deal of written work of the students to correct, and as my time is very much interrupted by visits from the students I have found plenty to do and the time has passed very rapidly. During the voyage and at all times since I have enjoyed excellent health.

I have done very little at the study of Japanese. If I understood your wishes aright, you sent me here to teach English and I am devoting my time almost exclusively to this but even this short residence in Japan has demonstrated to me the necessity of a knowledge of the Japanese language in order to teach English most successfully or to do any other work here and I am therefore endeavoring to devote some time to studying the language.

要約すると、仕事が楽しく、生徒は熱心に読み方、話し方を学んでいます。週十八時間やっていますが、生徒の書いた文を直すのに時間をとられています。訪ねて来る生徒で仕事がさまたげられることが多いです。日本語の勉強はほとんどできませんが、英語の授業効果をあげるために日本語の勉強に力を入れています。

更に一八九八（明治三十一）年四月二十八日付のカレンダー「牧師宛の書翰でも日本語の必要性を益々強く感じていることを訴えている。

ところが同年六月八日付の外国伝道局への報告書では、担当時間が二十時間となっていて、そのうち「会話」の時間は十時間だけになっている。これは何を意味するのだろうか。初年度の英語教育に迷いを生じ英語の他に

聖書、文学史、シエクスピーア評論、修辭学（ゲルハード書翰）などを担当したのではないかと憶測される。

翌明治三十二年になると再び英語だけ一学期十四時間、二学期十六時間、三学期十八時間となっているが、これは或る意味での目的意識が明確になると同時に、授業にも何らかの手応えを感じて、気持ちの整理がつきはじめたことを意味しているのではないだろうか。この頃から、日本語の必要性については一切語っていない。

## 2、英語教授法の研究

このようにして十年の歳月が流れ、次第に経験を積んでゆく。当初は、英語教授の補助手段として日本語の必要性を感じそれを訴えていたが、その後一度も日本語について触れていない。これは、Direct MethodかNatural Methodを研究し、東北学院における独得の教授法を考えはじめたためと思われる。一九〇七（明治四十）年六月二十二日付の外国伝道局宛ての報告書には「年々生徒の英語力が向上し、先生方と共に懸命の努力を続けている」旨が書いてあるが、授業に力を入れて行えば、生徒も懸命の努力をもって応えており、又他の先生方の協力もあることを語っている。

翌一九〇八（明治四十一年）年の報告には、「ティーチング・メソッドは困難な問題ですが、私共は次第にそれを克服し解決する方向にあります」と書いており、更に一九〇九（明治四十二年）年になると「私共の努力は徒勞に帰すことなく、英語のレベルは、日本の他校に比しても劣るものではありませんが、現在は強力な競争にさらされておりますので、外国における最も優れた教授法を研究する必要を強く感じております。現在は、ベルリツ・メソッド（Berlitz Method）、グワン・メソッド（Gouin Method）その他の近代的な教授法を私共の目的に

合せて採用しておりますが、日本では、外国の情報を入手することが困難です。教務的には英語教授に大いに関心が示されており、英語科の成功が東北学院全体の成功につながるものと考えています」と書いている。

ポールは、来日以来はじめての休暇を得て一九〇一（明治三十四）年から一年間アメリカに帰っているが、その間にベルリッツの教授法についても更に研究を深めて来たようにも思われる。一八八〇年にボストンで学校を開いたベルリッツは、一九〇〇年にパリ万博でその教授法について発表し名声頓に高くなっていたからである。更にフランス人グワンは、一八八〇年に既に *L'art d'enseigner et d'étudier les langues*（言語の教授と学習）を發表しており、それを入手研究しており、それも採り入れていたが、更に一九〇三年七月にはグワンの高弟であるハワード・スワンが東京高等商業学校の招聘に応じて来日し「文部省夏期講習会」の講師となっておりゲルハードもこれに出席している（『東北学院英学史年報』第六号）。しかしながらポール・ゲルハードは絶えずよりよいものを求め研究を続け精進している。一九一〇（明治四十三）年には「今度の休暇には、ヨーロッパの幾つかの学校をまわって教授法の研究をしたいと思えます」とと外国伝道局に書き送っている。一九一四（大正三年）には、ゾーグ、モール、メアリー・シュネーター等の協力を得てその英語教育が充実していることを報告している。

## 五、教授法の確立とゲルハード・メソッドの特徴

『東北学院英学史年報』第六号には、三品鼎の遺稿が次のように掲載されている。

この教授法の実施にあたっては、外人と限ったわけではなく、日本人教師の協力が不可欠のもの。そこで養成の必要に迫られ、それがあらぬか知るよしもないが、私が奨学生として二ヶ年ポスト・グラジエート・コースに入學許可と同時に与えられた研究テーマは、教授法の研修であった。大正二年であったが、同時に助教諭を命ぜられ、先生（ゲルハート）と共に教壇に立ったことを思えば、その間の消息がうかがわれる。

三品は、明治四十二年に普通科、大正二年に専門部文科（英文学科系）を卒業している。従って専門部文科を卒業すると同時に特別研究生として研究を続けながら、ゲルハートの助手として普通科の授業を担当したのである。



メアリー・ゲルハート

このようにして、ゲルハートは初めは自ら日本語を習って英語の授業を進める補助手段としようとしたが、三品を得たことにより「英語は、英語のネーティブ・スピーカーが、日本語は日本人が使うのがよい」と考え、それをもって生涯貫き通したのである。その長男ロバート・ゲルハートも、ミス・ゲルハートもその考え方に協力し、教え子に対しては一言半句も日本語を使わずに通したのである。

この頃になるとポール・ゲルハートは、普通科の他、専門部の要請にも応えなければならず、更に東北学院の財務担当の仕事やミッション事務所の要職に就くことになり、英語教育ばかりに専念することができなくなったものと思われる。

英語教授法とはいえば、多くの先生方の協力もあって、ベルリッツやグワンを超えて独自のものを考え、その

実績を積み重ねて、理論と実践を通してそれを完成したといっても過言ではないであろう。その教授法を敢えて「ゲルハード・メソッド」と称したいと思う。

ここまで来るには、ポール自身の熱心さと明朗さとリズム感にあふれた生活態度ばかりでなく、週一回行われた英語礼拝において、ポール・ゲルハードの全身の表現豊かな伴奏によって歌わされた *Jesus, I live to Thee.* の英語の讃美歌は、音符を与えられず歌うことを通して、靈的導きと共に心の奥底から英語の心に触れる機会が与えられたものと考えられる。

一九一七（大正六）年には、オズカー・スタウトが着任し、ゲルハードの後を継いでゲルハード・メソッドの後継者となり昭和十四年まで続けていた。

更にそれを戦後において引き継いだのが月浦利雄中・高校校長であり、中学一年生は、少なくとも一学期間は、完全に英語だけの授業を実施させたが、これは昭和三十年代まで続いていた。この時、教師用として使用したのが *Harold E. Palmer, The First Six Weeks of English* であったが、ゲルハード・メソッドの手引書又は教師用テキストがあったらよいつくづく思わされたものである。

#### ゲルハード・メソッドの特徴

ポール・ゲルハードは、明治三十年に来仙し、多くの迷いと戸惑いと試行錯誤とを繰り返しながら、中学部の生徒に英語を教えていた。当初は、必要に応じて日本語による説明をしようと考え、日本語に取り組んだが、諸種の事情から充分時間がとれず焦っていたようである。ところが数年をいわずして、その事には一切ふれなくな

っている。この頃からグワンやベルリッツを研究し、日本語を使わずに英語を教えることを考えたものと思われる。この事はそれ以前から居た宣教師は勿論、後から来日したアメリカからの宣教師とも協議し、その協力態勢が強力にでき上っていたものと思われる。事実公の場でのシュネーダー院長の挨拶は別として、その教え子に対して日本語を使った宣教師の先生は一人も居なかった。この状態は生涯続くのである。もつともゲルハードは、後に牧師の資格をもとり宣教師として伝道をするのもその仕事であったから、その意味においても生涯教育の責任を感じていたのではないだろうか。従って教え子とのお付き合いには常に英語が使われ、他に類例を見ない大きな教授法を確立したと言えるのである。その方法として教室ばかりではなく、廊下でも、グラウンドでも、礼拝でも又家庭に招待した時でも、すべてが教育の場であった。更にテキストは一切使わず生活のあらゆる物、あらゆる場にテキストと教材とがあった。

大正十一年に文部省の招きでハロルド・E・パーマーが来日した時には、ゲルハードの英語教授法は既に三十五年の歴史をもち確立されて居り、その実績を積み、多大の成果をあげているところから、敢えて「ゲルハード・メソッド」と称してもよいのではないかと思われる。

ポール・ゲルハードは、独特の卓抜した英語教授法をもってその全生涯を日本人の教育のために献げ、他に類を見ない教育者、宣教師として永く歴史に輝くものと信ずるものである。

## 二 ロバート・ゲルハートの英語音声学

### 一、ロバートの生い立ち

ロバート・ゲルハートの誕生日は、一九〇四（明治三十七）年六月二十七日、誕生地は東京である。（注、どの資料にも「仙台」とあるが、一九〇四年六月三〇日付、父ポールからバーソロミュー宛の書翰には次のように書いてあるところからすれば、明らかに東京生まれである。）

Tokyo, Japan,  
June 30, 1904.

My dear Dr. Barthelmeus,

Two weeks ago Mrs. Hubard and I came to Tokyo in order to have the names of a foreign physician for the suite of our first class. On Thursday the 27th, a fine little boy was born and we are very very happy indeed.

少年時代を仙台で過ごし、在日五十九年（内十七年間は米、英留学）のロバートには、日本は母国であり仙台は故郷であった。それ故太平洋戦争がはじまっても仙台に留まり、昭和十七年になってやっと交換船でアメリカに行ったが、終戦となるや帰るべき所は仙台であったと思われる。

東北学院大学中央図書館には、ロバート・ゲルハードの「日本語ノート」が三冊保管されている。達筆ではな

Robert H. Gerhard.

19. 夏休の後の挨拶									
一 私 軽井沢から帰つたつぎの日									
二 私 が 教会 の 門 口 まで 参り ます と 丁度									
三 私 一 時 暫く 参り ました									



学校法人東北学院に提出された履歴書によれば、現住所は、仙台市南六軒丁六番地（現土樋一―三―一）で「学歴、職業」欄には次の如く記載されている。

- 一九二二年六月 米国フランクリン・エンド・マーシャル・アカデミー卒業
- 一九二六年六月 米国フランクリン・エンド・マーシャル大学卒業
- 一九二六年より 米国エフレテ高等学校教授となる。
- 一九三一年 米国オハヨー・ステート大学入学
- 一九三二年 マスター・オブ・アーツ
- 一九三九年より 米国ロンドン大学に在学
- 一九四〇年まで

一九四〇年に仙台に帰ったが、引き続き日米開戦後も仙台に留まり、一九四二（昭和十七）年、ゾーグ夫妻（ゾーグは、神学部長から高等学部長を歴任し、さらに東北学院の理事の要職にあった）と共に、交換船でアメリカに送りかえされるまで、元寺小路にあるカトリック教会内の生活を強いられていた。

終戦後は、昭和二十二年のはじめに仙台に戻り、いち早く東北学院に復帰している。この頃の仙台には、アメリカの進駐軍の将兵が溢れ、いたる所を闊歩していた。これは仙台ばかりでなく日本全体において見られた現象で、全ての事がアメリカ支配のもとに動いていたのである。

このようにして米進駐軍の影響下にある日本の英語教育界は、それまで主流となっていたイギリス英語から、にわかにはアメリカ英語が重視されるようになった。それに応じて、ダニエル・ジョーンズ (Daniel Jones) のイギリス発音と共に、ゲルハートのアメリカ発音が重んじられるようになり、その一つの例として、昭和二十六年に発行された三省堂の『コンサイス英和辞典』ではゲルハートは“Pronunciation Editor”となっている。その緒言には「特色の一つとしてゲルハート博士の指導による『標準簡易表記法』を採用して米国発音の正確な表現を期した」と記載されている通りである。

ロバート・ゲルハートは、昭和二十四年に *A HANDBOOK OF ENGLISH AND AMERICAN SOUNDS* を出版しているが、これはゲルハートの「発音」学の集大成とも言うべき著書であって、*The International Phonetic Alphabet* (万国音標字母あるいは万国音標文字) を重視しながら、ダニエル・ジョーンズに依存し“a quite broad system of notation” (簡易表記法) を採用することにした。それが三省堂の『コンサイス英和辞典』において明確にされたのである。

このようにしてロバート・ゲルハートは、戦後の日本における英語教育、特に「音声学」を通して英語の発音教育の指針を明確ならしめるのに偉大な貢献をなしている。

昭和二十六年、惜しまれつつ四十七年間住みなれた仙台と、父子二代にわたって英語の教育と伝道のわざを通じて築きあげた固い友情と師弟の絆とに決別することになったのである。新たに創立される国際基督教大学の準備のため東京に移らなければならなかったからである。

さてアメリカ構造主義言語学は、戦後になって急速かつ顕著な発展をとげ、ロバート・ゲルハートもその学的

影響を少なからず受けている。それは、昭和三十五年に出版された *Standard American Pronunciation* において明らかになるのである。

## 二、「英語発音学」の授業

中学部では、教室の中を歩きまわってよく一人一人懇切丁寧に指導していた。口の開き方が悪いといって口の中に指を差し込んでみたり、舌が出てこないといっては舌を指でつまんで引っ張り出したり、小さな手鏡を使う指導もあった。ポケットに手を入れて歩きながら、コインをチャラチャラ鳴らすのが癖であった。

高等学部には、「英語発音学」があった。当時の授業の様子を『東北学院英学史年報』第五号より引用する。

先生は、教室に入って来られると、教卓に腰をかけ、一番前の個人机の左の列の先頭に右足を、右列の先頭に左足をのせて授業をはじめられたので先ずびっくりした。

第一時間目のはじめに「舌の体操」をさせられた。「僕が見本を示すから、その通りにしなさい」といって、舌を出し、上―下―左―右、上―下―左―右と次第にスピードを増していった。何度も何度も繰り返してやらされた。そんなことは、生まれてはじめてなので、ついて行けず、舌がもつれたり、こわばったり、大変なさわざであった。これが毎時間続くので大変であった。

大西雅雄著、ハロルド・イー・パーマー、千葉勉、ジェイ・ウィ・マーティン校閲『英語発音明解』(The Principles of English Pronunciation) (開拓社、昭和八年第九版、定価金壹円) がテキストであった。

〔日本語版で、大きな明快な口型写真があつて、分かり易かつたが、その序文には次のように記してある。「この改訂版で、よかれ悪かれ一番骨を折つたのは何と云つても「挿絵」である。中でも側面図は原図を薄い製図紙に描き、石膏板に写し取り、彫刻し、写真に撮り、調音点を描き込み、それを銅板にしたものである。この物好きな糞骨折には、自分乍らつくづくあきれ、危く中止しかけた事も一再ではなかつた〕。

毎時間のはじめに、顔の断面図を画くことがしばらく続いた。それを使つての音声器官の名称と機能について懇切丁寧に解説して下さつた。次に母音表を、又次には子音表を、毎時間のはじめに書き、毎回繰返された。ダニエル・ジョーンズ (Daniel Jones) の発音記号であつた。一つ一つの音の解説のために、全体を覚えさせ考えさせるところから出たのである。要するに、単一の音も全体の音体系の中で(「生きていること」の意味を教へていたということが後に分つた。ダニエル・ジョーンズの母音の四角形が繰返し画かれ、それに伴つて“rounded”と“unrounded”が体験的に覚えさせられた。

一音毎に、毎時間発音させられ練習が繰返されたが、よく小さな鏡を全員に配り、口許をよく見るように指導され、先生の口とテキストの写真とを対比しながら説明された。

次にその音を含む短い syllable の発音練習があつた。板書して、それを発音してよくきかせ、学生に発音させ一人ず

つ矯正していった。一クラスの人数が十名以下であったので実によく行き届いた指導であった。それがしばらく続いたあと、主に nonsense syllable の dictation で、毎回1〜10まで書かせられ、発音させられ、文字と音とが一致するまで行われた。

日本語の母音、子音との比較において、英語の母音と子音との説明があったが、これは先生が日本語の native speaker に近い方である上に、音声学的な分析と研究を徹底して行って居たために可能であったのである。又五十音表に独特の〔w〕(ワ),〔j〕(ヤ行の子音),〔ϕ〕(フ),〔ŋ〕(ン)などの発音記号を使うことによって英語の音との違いを明確に示された。

Daniel Jones, *AN OUTLINE OF ENGLISH PHONETICS* をもとにして発音解説をし、その発音記号を紹介して下さったが、これも大変丁寧な説明で、この本を買うことが一種の憧れとなった(しかし実際は、戦後になってやっと入手することができた)。

種々のプリントを配って下さった。その中に次の表題のものが、テキストに挿んで残っている。

*SUGGESTED PHONETIC NOTATION for uniform adoption in Japan by all Publishers and Teachers of English*

である。その中に Consonants (子音) と Vowels (母音) の表があり American Pronunciation (アメリカの発音) には※印がつけてあった。2項目には Kenyon & Knott と Daniel Jones の母音表がならべてあり、その右側に Suggested Notation が示されてゐる。3項目には SPECIMEN TRANSCRIPTIONS illustrating

「ロバート・エッチェルヘッド君は千九百三十八より三十九年に至る年を通じ、英語發音學に於て、予の指導下に勉學された。彼は英國學生に對する英語發音學の課程、並に外國學生に對し、英語を教授する課程の學期的課程を探り、同時に外國學生に對する學級にオブザーバーとして出席された。

彼は又一般發音學の課程、並に發音學研究室に於ける實驗法の課程にも出席された。

學年末に於て、彼は英語發音學科に於ける試験を受け、第一等免許狀を獲得し、同時に國際發音學協會の試験に於ても第一等免許狀を得られた。彼は又日本語發音學に關する獨自的研究に對し、ローラ・ソームス賞を授けられた。

學年間に、彼は東洋語學科に於てロイド・ゼームス教授の下に日本語並に他の國語に關し研究された。

予は彼の勉學に對し、大に満足し且つ學生として彼を指導せることを甚だ喜ぶものである。

千九百三十九年六月二十日

ロンドン大學發音學教授

ダニエル・ジョンズ」

『東北学院時報』第146号（昭和14年12月）

the Phonetic Notation Suggested for use in Japan であつた。上段に、English Text 次に General American Pronunciation 下段に、Southern British Pronunciation が type してあり、これを反復して読まされた。

『英語發音明解』の中の「發音記号転写文の読方練習」を使つての發音記号の読み方には、相当力を入れられていた。

このクラスでは、主に發音の練習と、發音記号の正確な把握が主体であつたので、「イギリス英語」とか「アメリカ英語」というような区別は、それ程はつきりとは意識させられず、両方共英語という受取り方をしていた。

IPA については、International Phonetic Association に関連して「万国發音記号」として「あらゆる言語の音声表記のできる大変都合のよい、便利なものだ」ぐらいの意識しかもたなかつた。従つて Phoneme とか、Phonemics とかの説明もなかつた。

ロバート・ゲルヘッドは一九三九年から一年間ロンドン大学でダニエル・ジョンズの許で研究を積んだが、同教授より上の如き賛辞が送られて居る。

一九四〇年に帰国されると、一段と學問的スケールが大きくなられたの

を感じた。 R.P. に対して *General American* を明確に教えて下さったのもこの頃であった。先生は、よく自室で自ら発声の練習をしておられ、自ら矯正しておられる場面に接したことがあったが、その学的探求の真摯な態度に強く打たれたものであった。

### 三、音声学の研究と著書

ロバート・ゲルハートの著書は、大別して戦前のものと戦後のものとの二つに分けられると思う。戦前のものというのは、「発音学」を中心としたものであって、日本人の学生を対象として考えながら書かれたものである。ダニエル・ジョーンズの *Phonetics* を基本におきながら *Ohio State University* の 恩師 Dr. Oscar Russel の影響を受けて自ら完成した理論をふまえながら、日本語の発音との対比に於て日本人の学生の前に展開すべき教授法を常に考えていたものである。一九三七(昭和十二年)年に出版した *A TEXTBOOK OF ENGLISH SOUNDS* において明らかである。実際の出版は戦後になるが、戦前一九三九年からのロンドン大学に於けるダニエル・ジョーンズの学的影響を強く受けたことにより、かえってアメリカ英語を意識しながら出版されたのが一九四九(昭和二十四)年の出版になる *A HANDBOOK OF ENGLISH AND AMERICAN SOUNDS* と、一九五四(昭和二十九)年出版の *GENERAL AMERICAN PRONUNCIATION* である。

これまでは、理論よりは実践を通して学生に体験的に学ばせることに中心がおかれているが、これは *A TEXTBOOK*

*OF ENGLISH SOUNDS* (昭和十一年出版)の冒頭において引用している Ida C. Ward の次の言葉によるものがあると考えられる。

TO THE TEACHER

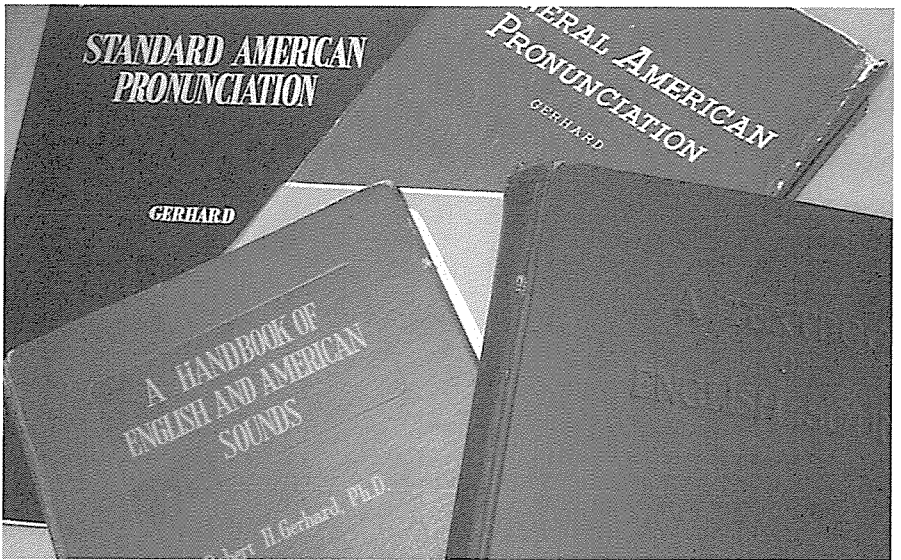
Miss Ida C. Ward, in her little book *The Phonetics of English*, has said: "It is not advocated that phonetic theory should be taught in schools. The aim of the teacher is, presumably, to teach a good pronunciation, and in the quickest time possible. Phonetics is a science for the teacher to know and apply in a practical fashion in the teaching of pronunciation." With this I most enthusiastically concur.

(*A TEXTBOOK OF ENGLISH SOUNDS 1937*)

(大意) 「先生方に」 「音声学の理論は学校では教えるべきではない。教師は、発音教育では良い発音をできるだけ短時間に習得させることが目的である。音声学は、先生がその知識をもっていて発音の教育のとき応用すべき学問である。」

戦後に属するものとしては、アメリカの構造言語学的理論に基づく考え方により「発音学」より「音声学」になり、更に「音素論」的考え方を反映して一九六〇(昭和三十五)年に出版された *STANDARD AMERICAN PRONUNCIATION* がある。この著においては理論の説明ばかりではなく、巻末に *Glossary of Phonetic Terms* を付しているところに新たな展開を見ることが出来る。





ロバート・ゲルハートの著書

- 1 A TEXTBOOK OF ENGLISH SOUNDS for Japanese Students  
(有明堂 1937)
- 2 A HANDBOOK OF ENGLISH AND AMERICAN SOUNDS  
(清水書院 1949)
- 3 GENERAL AMERICAN PRONUNCIATION (三省堂 1954)
- 4 STANDARD AMERICAN PRONUNCIATION (清水書院 1960)

## 四、ロバート・ゲルハートの音声学の特色と貢献

ロバート・ゲルハートは、最初は「発音学」を担当していた。東京生まれ、仙台育ちのロバートには、日本語は第二の自国語とも言える程のものであったが、教室では勿論のこと、それ以外のところでも教え子に対して日本語を使うことは決してなかった。これは、父親のポールも、叔母のミス・ゲルハートも同じであったが、ポール・ゲルハートの確立した「英語教授法」(ゲルハート・メソッド)の大きな特色の一つでもあり、その生涯教育の一大方針とも言えるものである。

ロバートは、日本語に熟達していたのと、日本語の音声の研究によって科学的にその特色を把握していたことにより、独自の発音教授法を編みだすことができたのである。日本人でなければわからないような日本語の発音の機微さえもわきまえて居り、それとの比較において、英語の音と音組織とを教えようとしていたことを伺い知ることが出来る。こうした方法と基本的な考え方は、余人のとうてい及ばないところである。こうしたことは、戦後我が国において有名になった米国ミシガン大学のフリース(Charles Carpenter Fries)教授のオーラル・アプローチ(Oral Approach)と基本的に軌を一にする卓見であった。

ロバートは、当初は「発音学」であり、理論を教えるよりは、直接的、実用的に良い発音を習得させることを優先している。より自然な発音をあらゆる環境に於て身につけさせることに重点がおかれていた。この考え方の拠り所として一九三七年版の *A TEXTBOOK OF ENGLISH SOUNDS* には A.D. Ward からの引用がなされてい

るが、理論は教師が徹底的に研究しその奥妙を極めることに努め、その結果としての果実を生徒に与えることを考への基本においていたのである。理論ではなく、実際に通用する言語としての英語を身につけさせるための「発音」であったのであり、言葉として生きたものでなければならなかったのである。彼は、その二面的な努力を絶えず続け、自らには極めて厳しい反面、生徒には懇切丁寧、微に入り細にわたって具体的に指導することに熱心であった。

一九六〇（昭和三十五）年に出版された *STANDARD AMERICAN PRONUNCIATION* では、アメリカ構造主義言語学の影響と彼の「発音学」の理論とが色濃くあらわれている。その序文には次のように書いている。

Nevertheless, I have included here as little theoretical material as possible.

（しかしながら、ここでは理論は最小にとどめておいた）

とあるが、その内容としては、前に出版された三冊とは異なり「発音学」の理論が随所に見られ、彼の理論の深さが現れている。

一九二八（昭和三）年に東北学院中学部において始められたロバート・ゲルハードの発音指導は、高等学部においては「発音学」となり、戦時中のオハイオ州立大学においては、日本語教育を担当し、戦後日本に帰り一層の深さと広がりを増し国際的にも認められるようになった。更に昭和二十六年の三省堂の英和辞典を通して日本における「発音学」の権威として高く評価され、国際基督教大学における業績を通して広く国内的にも国際的に

も認められたのである。が昭和三十八年四月十五日、狭心症で倒れ五十八歳で天に召されたのである。昭和三十八年五月十五日付『東北学院時報』には次の如くその訃報を掲載している。

ロバート・H・ゲルハート

有名な故ポール・L・ゲルハートの長男で日本生れのロバート・H・ゲルハート先生は音声学の有名な大家であったが、昭和二十六年本学院大学教授を辞し、東京三鷹市の国際キリスト教大学教授に移られたが、去る四月十五日狭心症に罹り突然永眠され、同十八日同大学礼拝堂にて葬儀がとり行なわれた。行年五十八歳。

東北学院においては、先生が天に召されてから一ヶ月後の五月十五日に、学内の押川会館に会場が設けられ、「ロバート・H・ゲルハート先生追悼会」が行われた。

なお、一九六三年四月十八日のニューヨーク・タイムスにもその訃報が写真入りの記事となり、その偉業がたたえられている。

ロバートH・ゲルハート先生追悼会

一、前奏	一、讃美歌	一、聖書朗読	一、祈禱	一、詠唱	一、故人を偲ぶことば	一、故人を偲ぶことば	一、頌歌	一、祝祷	一、挨拶
伊藤久子	小笠原政敏	同	グリイクラブ	月浦利雄	小田忠夫	シツブル	山浦拓造	日下一	阿部欣二
一九六三—五月十五日午後三時三十分	東北学院大学 押川会館	司会者 阿部欣二	東北学院大学 校長	高野学校長	東北学院長	ミンシヨン・ボート代表	故人愛語持篇三 独唱	五三九	東北学院大学 監

THE NEW YORK TIMES,

April 18, 1963



Dr. Robert H. Gerhard

### ROBERT GERHARD, EDUCATOR, 68, DIES

Department Head at Tokyo's Christian University

Dr. Robert H. Gerhard, chairman of the division of languages and professor of phonetics and English at the International Christian University in Tokyo, died of a heart attack Monday in Tokyo. He was 68 years old.

Dr. Gerhard was a son of Evangelical and Reformed Church missionaries and was born in Sendai, Japan. In 1919 he came to the United States to attend a high school and then Franklin and Marshall College in Lancaster, Pa. He received a Bachelor of Arts degree in 1926.

He taught English for two years in a high school at Ephrata, Pa. before he returned to Japan to become an English teacher at North Japan College in Sendai. During a subsequent stay in the United States he earned a master's degree at Ohio State University.

In 1932 Dr. Gerhard became assistant professor of English and phonetics at North Japan College. In the late nineteen-thirties he interrupted his ca-

reer in Sendai to study at the University of London. When he returned he became full professor and acting chairman, of the college's English department as well as visiting professor at Miyagi College in Sendai.

After Pearl Harbor, Dr. Gerhard was interned by the Japanese for about six months and then repatriated to the United States. During the war he taught Japanese and speech at Ohio State University. In 1945 he received a Ph. D. degree from Ohio State and became assistant professor of speech there. He was also the director of International House, a residence for foreign students, and a board member of the university's Young Men's Christian Association.

In 1948 Dr. Gerhard returned to Japan to head the speech department at North Japan College. Six years later he began to organize the language program at the International Christian University. When the Protestant interdenominational school, which is supported by American and Japanese sources, opened in 1953, he became professor of phonetics and English and chairman of the division of languages.

Dr. Gerhard was the author of a "Textbook of English Sounds" and a "Handbook of English and American Sounds," both in Japanese.

Surviving are his widow, Mrs. Helen I. Weed Gerhard; an adopted son, Mikio Michael,

## 東北学院「英学」の伝統と

### 大学「英語英文学教育」を始動させた群像

志子田 光雄

#### 一 伝統

「英語の東北学院」「東北学院の英語」という評価がいつ頃確立し、いつ頃まで真実なものとして存在し、受け入れられてきたのか、あるいは現在も認められているのかを確認することは容易ではない。しかし、少なくとも明治時代に既にこのような名称が存在し、昭和も十四、五年、すなわち第二次世界大戦突入直前まで、英語に堪能な人材を多数世に送り出していたことは事実である。

その濫觴を求めれば、仙台神学校にまで遡ることが出来るであろう。明治二十一（一八八八）年十二月十日制定の『日本基督一致教会仙台神学校憲法』第九条に、「本校ハ之ヲ分テ三学部トス英語神学部、邦語神学部、及ビ英語予備科之ナリ」とあり、第十条には「英語神学部ハ英語ヲ以テ神学ヲ教授ス学期ヲ三年トス」、第十二条には「英語予備科ハ英語神学部ニ入ルノ生徒ヲ予備スル処ナリ学期ヲ四年トス」とある。すなわち、『東北学院二十五年の歴史』の記述によれば、「当時邦語にて著述せられたる神学哲学等の書籍も少なく、且つ訳語の如きも一定せ

るものなく、教授に不便を感じる事多かりしかば授業には、殆ど全部英語を使用したため、生徒には英語の運用能力が必須であったのである。ここでは学習の目的としての英語であるというよりは、学習の手段としての英語が求められていた訳である。この伝統が、英語の東北学院の源になったことは否むべくもない。

明治二十四（一八九一）年七月十四日付の東北学院設立認可申請書類には、発音、読法、書取、習字、訳読、会話、英文法、作文、英文学等の科目が見られ、もともとは英学研究のため横浜に出てキリスト教に導かれた院長押川方義自ら聖經、心理学、希臘語とともに英語を担当し、副院長ウィリアム・E・ホーイは神学、哲学、倫理学とともに英語を、D・B・シュネーダーは教会歴史と同時に英語を教えるという状況であった。やがて、明治二十五（一八九二）年九月六日の学科課程改正により、予科第一年級には英学として訳読、綴方、発音、習字が週十時間、第二学年級には訳読、綴字、書取、発音が週九時間、第三学年級には訳読、文法、綴字、書取、作文が週八時間、本科第一年級には同じく英学として訳読、文法、会話、作文が週八時間、第二年級には修辞、作文、英文学が週四時間、第三年級には英文学史が週三時間、第四年級では高等英文学（詩歌之類）が週一時間となっている。そして、本科を卒業後進学する英語神学部ではその大部分の科目が英語で講義されていたの言うまでもないが、邦語神学部においても第三年級に至るまで週三時間の英学があった。明治二十八（一八九五）年に設置された普通科においても、第一年から第五年に至るまで英語は週七時間（ただし一定時授業時間は四〇分）であり、すべての科目を合わせて一週の総開講時間数が二十七時間であることを考えるならば、いかに英語に重点を置いていたかということが分かるであろう。

このようないわば実学としての英語教育から英語教育に携わる人物教育へとその方針を転換せしめたのは、明

治三十三（一九〇〇）年三月二十八日の押川方義の教況報告によれば、次のような事情による。すなわち、前年発令された私立学校令並に訓令第十二号により、押川の表現を用いれば「総て学校に於ては宗教上の儀式及教育を施すを厳禁したるの怪事を見た」ため、「他の学校の共有せる権理<sup>クワンリ</sup>を得るの方針を執らん事を希望」し、今後の方針の一つとして、「東北学院高等部は英文及英文学を専修せしめ卒業生をして英語及英文教授たるに適當なる資格を与ふる事」を希望したのである。その後、普通科の上に専門学校令による専門部が設置され、その師範科に対し大正九（一九二〇）年九月二十二日に待望の師範学校、中学校、高等女学校教員英語科無試験検定取扱許可が下り、やがて高等学部、そして戦後には専門学校へと受け継がれ、戦時中を除いては常に英語教育がその教育の重要な目標の一つとなったのである。

大正七（一九一八）年開設の「中学程度ノ諸学校ノ英語科教員タラントスル者ニ須要ナル教育ヲ授クル」師範科のカリキュラムを見れば、予科合計三十二時間中英語は二十一時間（読方・書方・発音・会話及作文五時間、文法三時間、英文和訳十時間、和文英訳二時間、英語聖書一時間）、本科第一学年は合計三十二時間中英語十五時間（会話及作文三、高等英文法三、英文和訳六、和文英訳二、英語聖書文学一）、第二学年は合計三十四時間中英語は十四時間（作文及修辭二、英文学二、英文学史二、英文和訳五、和文英訳二、英語聖書文学一）、第三学年は合計三十三時間中英語は十四時間（作文一、英文学二、英文学史一、英文和訳八、和文英訳二）となっている。「高等ノ學術ヲ授ケシ神学科第一部入学志願者」を対象とした文科、並びに商科もほぼ同様の英語の時間数を割り当てられていた。このようなカリキュラムは、昭和十七（一九四二）年の文科廃止に至るまでほぼ変わらずに続けられてきた。その原動力となったのは優秀な日本人教師の存在もさることながら、多くの外人教師による教育で



あつた。たとえば、第二次世界大戦勃発直前においてさえ、英文科の授業全体の半数は、外人（アメリカ人）教師による大部分は英語だけをを用いての教育であつた。そのカリキュラムは、アメリカのリベラル・カレッジのそれに範をとり、狭い専門性を避け、広い知性の陶冶を目指すものであつたが、同時に英語教育を念頭に置いた実学を重んじた教育であつた。

第二次世界大戦終了の翌年、昭和二十一（一九四六）年に東北学院専門学校が発足し、経済科とともに英文科が設置されたが、そのカリキュラムにおいて、一年から三年まで各学年合計三十三定時中に占める英語関係の科目は、英文和訳、和文英訳、会話作文、文法、タイプライター、修辞学、発音学、英文簿記、英語通信文、演説法等のいわゆる英語力をつけるための科目の組み合わせで大体半分近くを占めている。

昭和二十四（一九四九）年東北学院大学が発足したとき、そのカリキュラムの内容はそれを色濃く受け継いでいる。そのうち英語関係科目を列举すると（カッコ内の数字は単位数）、

「一般教養科目」英語（四）、以下「専門科目」として英語講読（十二）、英米文学講読（四）、英語音声学（六）、英語会話（六）、英文法（十二）、英作文（十二）、英文学（六）、英米近代劇（二）、米文学（四）、シックスピヤ（二）、エッセイ（二）、英語演説法（二）、英語発音教授法（四）、英語史（四）、英文学史（四）、米文学史（四）、言語学（四）、修辞学（四）、英米文学論（四）、商業英語通信（四）、タイプライティング（四）、英文簿記（二）、速記術（二）、基督教文学（二）、外国新聞講読（四）などとなっている。

このカリキュラムは、その単位数の配分から分かるように英語力涵養を意図していたことは明らかであるが、同時に兎玉省三の証言によれば、英語教員養成を主たる目的としていたのである。これは後に様々な要因により

修正を施されていくが、平成三（一九九一）年に新しいカリキュラムが施行されるとともに、平成六（一九九四）年に完全に消える最終のカリキュラムでは（カッコ内の数字は単位数、×印は必修を表す）、

「一般教育科目」英語読解Ⅰ（×二）、英語読解Ⅱ（×二）、英語構文理解Ⅰ（×二）、英語記述表現Ⅰ（×二）、「専門教育科目」としては第一類に英文学史（×四）、米文学史（×四）、英語史（四）、英米文学評論（四）、英米文学講読（四）、英語学講読（四）、英文学（四）、米文学（四）、シェイクスピア（四）、英米近代劇（四）、基督教文学（四）、英聖書（四）、英語学（四）、英文法（×四）、英作文（四）、英会話（×二）、英会話（上級）（四）、英語音声学Ⅰ（×二）、英語音声学Ⅱ（四）、近代英散文（二）、現代英米詩（二）、言語学（四）、修辞学（四）、和文英訳（二）、演習（×八）、オーディオ（×四）、卒業論文または卒業試験（×四）、第二類にはスピーチ・クリニック（四）、商業英語（四）、時事英語（四）、商業実践Ⅰ・Ⅱ（タイプライティング）（四）など英語関係の科目がある。これは、文学、語学の両分野ともに学習させようとすると同時に、虚学（断るまでもなく、否定的な意味は無く、職業に直接結び付く実学に対する用語）とともに、実学をも修めさせようとする弾力性に富んだものとなっている。大学発足当時、山浦拓造の言葉を借りれば「大学になり、『英文科』ではなく『英文学科』になった」のだと言ってアカデミズムを強調したが、このカリキュラムの重要な目的の一つは、依然として大学発足当時と変わらず英語教員の養成にあった。それは、当時の英語教育に必須の英文法が、必修単位でありながら他の科目にはない二時間週二回、合計四時間をあてられ、また英作文を二単位に押えて二、三年の両学年に配し、英語教員免許状取得を望む者には必修とされていることから窺えるであろう。英語音声学ならびに英会話は、ともに一学年で二単位必修、その後三、四年次で二単位ずつ、しかも三年次、四年次ともに履修しなければ単位

にならない。二単位であるということはプラクティカルな科目を意味するが、三、四年次を通して修得しなければ完成しないということは、英語のプラクティカルな能力を求めていた実学的な意図からである。演習に関して、文学、語学各二単位ずつ三年次、四年次ともに履修し、合計八単位の修得を定めているが、それは専門に偏らず、オールラウンドな人物を育てようとする意図からであったと言えるであろう。前述の通り、英文学科のカリキュラムは主たる目的を教員養成にしていたが、その多彩さ、充実度において他の教員養成大学を遙かに凌いでいた。このような多彩な科目の履修は、それが学生定員の増大とともに果たして所期の目的通り機能したかどうかは異論があろうが、東北学院の英学の源初にあつたあくまでも実学的な伝統に立つものであつたと言えるであろう。

## 一 群像

さて、この大学のカリキュラムを実施して来た教師の数は、創立百周年の時点迄では、非常勤も含めるなら膨大な数になるであろう。ここでは紙幅の都合上、戦後の混乱期にあつて、しかし英語の需要が増大してきた時期に、東北学院英学の伝統を受け継ぎ、大学のカリキュラムをスタートさせた群像に絞って光を当て、寸描を試みたい。

昭和二十三（一九四八）年七月二十日、財団法人東北学院理事長鈴木義男が文部大臣森戸辰男に提出した「大

学設置認可申請書」のうち「学長並びに学部及び学科別教員予定表」には、英語英文学関係の専任教員として、記載順に書き出せば、情野鉄雄、吉田盛次郎、山浦拓造、児玉省三、和泉幸一郎、石川重俊、三浦運五郎、月浦利雄の八名と、数名の宣教師たちの名が列挙されている。もとより実学の点から言えば英会話を担当した宣教師の働きは無視できないが、ここでは取り上げる余裕がないので、この八名のみ絞って描出を試みたい。



三浦運五郎

社会に出てすぐ有用な知識を与えるような科目を実学とするならば、東北学院大学の英語関係カリキュラムのうちもっとも実学的な要素の濃いものは商業英語であろう。この商業英語を時事英語とともに担当し、戦前、戦後にわたって東北学院の実学の一角を守ってきたのは三浦運五郎である。三浦は明治三十一（一八九八）年二月二十日の生まれ。農場経営のために渡米した父親とともに中学生の頃カリフォルニアに渡ったが、現地の中学校に入学したものの英語が少しも分らないため、小学校からあらためて米国の学校教育を受けた。ハイスクールではフットボール部員として活躍、一九二二年カリフォルニア州のポモナ大学に進学、数学が得意であったのでどうせやるならと東部の名門MIT（マサチューセッツ工科大学）を志すが、全米から秀才が集まる同校には入れず、本人自身の言葉を用いれば「やむなく」ハーバード大学の大学院商工経営科に入学、一九二四年マスター・オヴ・アーツの学位を得た。卒業後ニューヨークの商社に一年間勤めたが、大正十四（一九二五）年四月に東北学院専門学校教授として迎えられ、昭和十三（一九三八）年まで教壇に立った。そののち横浜専門学校に転じ、第二次世界大戦中はアメリカ軍の放送の聴取

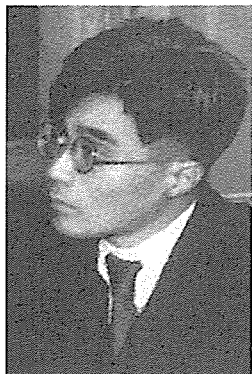
に従事した。戦後「極東国際軍事裁判」の通訳を依頼されたが、このような役目を嫌って拒否し、昭和二十一（一九四六）年再び本学に戻り、昭和五十八（一九八三）年三月三十一日に嘱託教授を辞任するまで実に合計五十年間東北学院で教鞭を執った。その功績によって退職の年の五月には東北学院大学名誉教授号を贈られている。

その間、日本時事英語学会理事並びに東北支部長、あるいは日本商業英語学会幹事として労を厭わず奔走した。大学では商業英語の授業において、輸出入業務の補助機関である船会社、為替銀行、海上保険会社、領事館などに対して行なう手続や術語を講義しながら、輸出入業務に必要な商業文の書き方を教え、時事英語では、絶えず最新の英字新聞、雑誌によって、新しい用語、表現の使用を研究し、卒業後各分野で必要とされる英語の指導を行なった。また教養課程、専門課程ともに、英作文、和文英訳という「体力」の要する科目を長年担当してきたが、そこで教えた英語はいわゆる生きた英語であった。三浦の講義に出席した学生であるならば、宿題の和文英訳を黒板に書いても、一読するや「こんなのは英語ではない」と言われて添削も受けずに消されてしまったり、辞書に載っている表現を用いても「こんな古い表現は使わない」という一言で容赦なく切り捨てられた経験の持主は多いであろう。しかしそのショックを通し、その後に三浦が書く模範解答は、生きた英語とは何かということ、生きた英語を書くことの必要性をしっかりと教え込んだと言えるであろう。学生時代フットボールの選手であったことを彷彿させる常に元氣溢れる教授姿勢は、時折口をつく皮肉に味付けされて、学ぶ者に大きな刺激を与えたこととは否定出来ない。

専門専攻分野ではドウバーの『海上保険論』の翻訳があり、學術論文としては、近東及びアフリカにあった英國、仏国の植民地との貿易通信文で使用される辞句および術語の意味と解釈が本国のそれと相違することに着目

し、その慣用句的使用の研究をした「対欧貿易に於ける英語通信文」などがある。また昭和三〇（一九五五）年には、NHK仙台放送局から、東北六県の定時制高等学校生徒対象の放送による英語の授業を担当したり、米国フルブライト奨学金留学生の選抜試験委員を務めてもいた。

さて、上述のように、東北学院の英語教育の主要目標の一つに英語教育者の養成があるが、P・ストレヴンズ（P. Stevens, "The English language made plain for the teacher of English: the descriptivist and the linguistic traditions," 1978）によれば、今世紀の英語教育に携わる者の拠り所としては、（一）いわゆる伝統文法、（二）記述派文法、（三）理論言語学の三つをあげることが出来る。これらは、英文学科のカリキュラムの中では、英語学、英文法、英語学演習、そして教科教育法や教育実習で扱われてきたが、この分類で言えば、大まかに言って、月浦利雄が伝統文法、情野鉄雄が主として記述派文法を、児玉省三が理論言語学に基づく英語教育学・英語学を展開してきたと言えよう。



月浦利雄

月浦利雄は、前記「大学設置認可申請書」のうち「学長並びに学部及び学科別教員予定表」の中でただ一人名誉教授・専任として名を連ねている。当時既に東北学院中学高等学校長であったので、本来は兼任とでも記されるべきであるが、専任、しかも名誉教授となっているのは、当時の法人の中における中高校勤務の一部の教員を専門学校（後に大学）のスタッフとして扱っ

ていたという理由からだけでなく、月浦の東北学院における重要性を物語っているものと取ることも出来るであろう。月浦五十歳の年である。

月浦は明治三十一（一八九八）年九月四日石巻に生まれた。尋常小学校五年のとき巖父を亡くしてから苦勞の日が続き、石巻高等小学校に進んだが、青雲の志止みがたく、明治四十五（一九一二）年四月東北学院普通科に入学した。労働会に所属して牛乳、新聞配達を行ない、苦学力行して卒業のち東北学院専門部師範科に進学した。第一回生であったが同期生は他に一人も無く、ただ月浦一人のために開かれた授業を四年間受け、大正十一（一九二二）年四月に卒業した。卒業後は朝鮮光州高等普通学校で一年、東京府目白中学で二年間教鞭を執った後、大正十四（一九二五）年四月に東北学院中学部教諭として母校に戻った。翌大正十五（一九二六）年四月から三年間、現職のまま東京帝国大学文学部英文選科で学び、卒業後は東北学院高等学部教授として主として専門の英語教育に専念した。昭和二十六（一九五一）年には米国オハイオ州立大学で教育学の講義を受けている。

大学設置時の月浦の担当科目は英米近代劇と教育実習であった。日本英学史の話をし、いわゆる車屋英語などを紹介し、その蘊蓄のあるところを披露して学生を面白がらせたが、講義の主要内容は一般に「月浦英語」と呼び習わされていた月浦自身がまとめた英語教授法であった。これは月浦が、普通科から専門部にいたるまで文字通り「英語の東北学院」で一貫して受けた教育と、長い間の教育経験から編み出した実践的な英語教育法であり、ひとつたび月浦が自ら行う英語教授の実際に触れるや、多くの人々がその魅力にたちまち虜にされてしまうような内容のものであった。この月浦英語は、具体的には独特の英文解釈法であり、その根幹については清水浩三が『東北学院英学史年報』第一号（一九八〇年三月）に詳しく紹介している。

月浦が書いた項目を基に、東北学院中学高等学校教諭石沢輝夫が、当時の英語科主任横山敏夫の指導の下にまとめた『構文分析に關しての考え方と解き方』によれば、全体は五十六項目からなり、清水が行った大まかな文法的分類によれば、(一) 統語論的・構文分析的な項目十五、(二) 品詞論的項目三十、(三) 訳し方に関するもの十一と分けることができる。これらは厳密な意味での文法体系ではなく、あくまでも英文解釈のための方法論であり、しかも主として英語教育の現場で具体的英語例文を用いて統語論的、意味的に構文解説を施すためのものであった。例文はすべて自製の大体十五センチ×九センチのカードに万年筆で丁寧に書かれており、授業の際にはそのカード数枚を持参するだけで、それを黒板に間違え筆記体で書き写し、その構文を見事に解析して行くのである。

「文章を見たらまず動詞を探せ(動詞は一番見付け易い。動詞が見付けられないようではどうしようもない)。それから主語を探せ(どうして—動詞—生きるかは死後—主語—より大切)。主語のないものは定動詞にあらず」。『省き得るものは省け。すなわち前置詞句や関係代名詞節など修飾語はカッコで括るか消してしまえ(消してもけつして心配するな)』、『名詞に格あり。何格だ(と質問し、間違つと)せつかくだが錯覚だ(とやりこめられる)』など記憶に便なる諺的、警句的表現を用い、地口、語呂合わせの類いを多用して学ぶ者の注意を文章の上に引き付ける。幾度も繰り返されているうちに自然に頭に入ってしまうという教育法である。どのような長い複雑な文章でも、構文を一度基本文型に解体し、たとえ意味の分からない単語があっても構文から訳文を組み立てられるという方法で、意味決定のために辞書を引くのは最後の最後という教育であった。

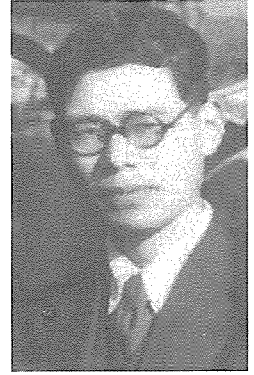
その説明には基本的な文法用語で十分であったが、しかし驚くような高等文法用語を用いたりもする。大江善



男も『東北学院英学史年報』第一二号（一九九一年三月）に寄稿した「月浦利雄先生の思い出」のなかで指摘しているように、adverbial accusative（副詞的対格）' vocative（呼格）' locative（所格）' ablative（奪格）' absolute genitive（独立属格）' dative of interest（利害の与格）' cognate object（同族目的語）' double superative（二重最上級）' pseudo-relative pronoun（擬似関係代名詞）' copula（繫辞）' deponent verb（異態動詞）' half-gerund（半動名詞）' pro-infinitive（代不定詞）' split infinitive（分離不定詞）、共軛先行詞などといった文法用語が次々に出て来る。月浦の拠って立つ文法が誰のものであるか明らかではないが、古典語文法、特にラテン語文法の深い知識がその根底にあることは否めない。このような英語教授法は、ただに東北学院内部に止まらず、東北、そして東京にまで知れ渡り、英語の東北学院の名を喧伝するのに役立った。

短軀、大声、精力的に教壇の上を歩き回る姿は、ジープの綽名にぴったりで、自分は「Digでなく、Greatだ」と言って、二つの単語の意味の違いを感覚的に知らせながら自分自身を描写した言葉は、まさに実感として学ぶ者に強烈に印象づけた。人情味溢れる性格は、一種カリスマ的な魅力を備え、多くの生徒、学生を魅きつけずにはおかず、その一言に励まされ、将来の進むべき道を決定した人も少なくない。月浦に影響され、月浦英語を体得して英語教師になった者も多い。

英文学科の教科の中で、特に教職に必修の科目であったため、とりわけ重視されたものに英文法がある。伝統文法の重要性が説かれてきた影響が未だ色濃い時代に作成されたカリキュラムのためもあるが、週に二時間（九十分）二回が割り当てられていた。これを三十年余にわたって担当してきたのが情野である。



情野鉄雄

情野は明治四十二（一九〇九）年十二月三日、山形県新庄に生まれた。旧制新庄中学（現新庄北高）に入学、はじめは数学に興味を抱いていたが、五年生のとき東北学院出身の英語教師青木義夫（大三普、大七専文、大十神牛）に出会い、一年の薫陶を受けて「遅まきながら」英語に取り付かれ、青木の薦めもあって、昭和三（一九二八）年、東北学院高等学部師範科に進学した。

入学後、遅れを取り戻すため、中学時代のテニスはきっぱり止めて勉学に専心した。教室では郡山源四郎や下山彦太郎、山川丙三郎、和泉幸一郎、小林淳男らに学んだ。四年生在学中文部省の中等教員検定試験を受け、約千人の受験者中二十八人合格という難関を突破して合格している。東北学院を卒業後、北海道の北星女学校、続いて郷里の山形工業学校で教鞭を取ったが、昭和十六（一九四一）年四月広島文理科大学教育学科に入学、高等教員（修身）並びに師範学校教員の免許状を取得している。昭和二十一（一九四六）年東北学院専門学校教授、二十四（一九四九）年東北学院大学助教となり、同二十七（一九五二）年には教授に昇任した。その間、昭和四十九（一九七四）年九月から二ヶ年間米国オハイオ州立大学大学院に留学、主として英語学を専攻したが、広く古代、中世、ルネッサンス等の文学も読ませられたと言う。昭和二十年代の後半から三十年代の前半にかけて宮城県の視学委員を務め、昭和二十九（一九五四）年三月に宮城県教育委員会から出された『中学校英語科教育課程の基準、附英語科学習指導法』などの作成を指導しており、また当時宮城県の指導主事であった山家保がその著書『Pattern Practice と Contrast—新しう英語の学習指導法—』（昭和三十一年十一月、開隆堂）の序文で、「この原稿を御覧の上、数々の得難い御助言を頂いた」と情野に感謝の言葉を述べているが、単に原稿に目を通した

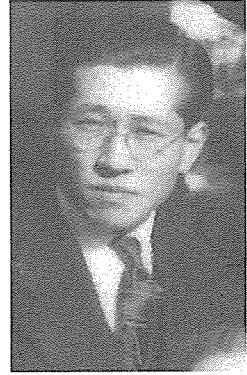
だけでなく、当時の宮城県の英語教育の指導方針であったパターン・プラクティス（文型の練習）の確立と実際の運用に適切な助言をなしており、宮城県の英語教育界に与えた貢献度は高い。（ミシガン大学のC・C・フリーズのメソッドに基づくこの新しいパターン・プラクティスによる指導法を推進した点で、情野は上述のように単に記述派文法だけを扱っていた訳ではないことを付言しておく）。

情野は、大学ではいわゆる一般英語、和文英訳、修辞学、英語史、英聖書、それに専門の英文法など多彩な教科を担当した。しかし、長い教壇歴のなかで学生に一番影響を与えることになったのは英文法である。う。はじめ、いわゆる伝統文法に属するJ・C・ネスフィールドを取り上げたが、やがてヘンリー・スウィート、オットー・イエスペルセン、G・O・カーム、H・E・パーマー、R・W・ザンドヴォルト、A・S・ホーンビー、C・T・アニアンスなど、いわゆるスクール・グラマーの基礎となった記述文法派に属するほとんどの学者の著書を教科書として使用している。就中、記述文法の祖ともいえるスウィートをはじめ、イエスペルセン、パーマーなどの外国語教育における音声学を基礎にした教授法の研究は、情野に大きな影響を与えたようである。情野の正しい英語の発音に対する執着とも言える態度がそれである。ネイティブ・スピーカーの発音の模倣は勿論であるが、その不在のときも、発音記号で正確に記されている場合は、標準的な発音の再現を可能にするからであり、これは、情野自身が心掛けると同時に学生にも試みさせていたのである。

この姿勢は、やがて大学のオーディオ・センターに対する大きな貢献となって現われる。戦後宣教師フィリップ・ウィリアムズがもたらした本学初のテープ・レコーダーを基として発達してきたオーディオ教育は、全国でも早いほうであったが、情野はその当初より、また後にオーディオ・センターが独立機構となったときその所長

として、その充実発展に努力した。そのポリシーは、機械とそれを操作する教員との協同一体化であり、機械の導入のみならず、教員を海外に留学させるなど、積極的にその教育者の育成に意を尽くした。同時に充実させた施設はフルに活用することを求め、東北地方の中学・高等学校の教材作成をはじめ、一般にも公開講座（昭和三十八（一九六三）年より十年間）の形で開放した。ヴィデオ録画機等、新開発の機材をいち早く導入し、本邦におけるLL授業、LL教室の原型、さらに視聴覚機材の充実により、視聴覚室の原型を作ったと言えよう。

また、彼の関心の大きな部分を占めていた英語の語法の実証的研究、現代英語における文体の種々相への関心は、結局正確な英語表現、あるいはグッド・イングリッシュへの志向による。それが修辞学や英語学の講義となつて具体化してきた。その講義の特徴は、一言で言えば、その発音に対する場合と同じように正確さである。教科書を読む場合でも、いわばその左端上部の頁の数字から、その頁の一番下の注、そして注の注まで余すところなく読み、解説すると言つてもよいほどであった。学生にも、分からないところはそれを調べる方法を指摘し、徹底的に調べることを命じた。このような態度は、英語を読むときに速読による大意を取ることと大切であるが、少しでも分からないものがあれば徹底して調べ、手を触れずにおくのはよろしくないという、いわば完璧主義なのである。ホーンゴイの *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* が出版されたとき、これを愛用したのは、根拠を求められたとき非常に役に立たないと言つたのも、このような姿勢からきている。要するに、情野は、英語教師を目指したとき、教師として学生からどんな質問があつても一応答えが出来る、あるいは何を調べれば解答が得られるかを答えられるようにしておこうということからきており、教師を目指す学生達にもその姿勢を身をもって教えていたわけである。



児玉省三

児玉省三は大正二（一九一三）年十一月十八日、仙台に生まれた。東北学院中学部を経て、東北学院高等学部師範科に進学、月浦利雄の評によれば「もつとも出来る学生」であった。昭和十一（一九三六）年師範科を卒業と同時に東北学院中学部に奉職したが、すぐ内地留学を命じられて同年東京文理科大学英文学科に入学、昭和十五（一九四〇）年に卒業した。卒業後は本学院の中学部で英語を担当、現場での経験を積んだ後、昭和二十一（一九四六）年本学院専門学校教授、同二十四（一九四九）年新制大学発足とともにその助教教授となった。昭和二十八（一九五三）年からミシガン大学大学院に留学、帰国後昭和三〇（一九五五）年に教授に昇格。勉学のために他大学に出た以外は一貫して東北学院で教育に携わってきた。「体が弱かったので、穏やかに暮らした方がいい」と恩師に勧められて、私学東北学院を選んだ」と言うが、ここでのクリスチャン教師たちとの出会いが英語、英文学の研究に進む契機となった。

東京文理科大学では英語英文学を専攻し、当時の東北学院長出村梯三郎に、特に教育学関係を研究せよと命じられ、英語教授法に力を入れた。時あたかも東京文理科大学では石川林四郎のいわゆる「新教授法」が完成し、児玉はその影響を大いに受けた。本来、石川の教授法は、東北学院のポール・ゲルハード教授によるオーラル・ダイレクト・メソッドから学んだものである。この事実は、石川が、三、四年間にわたり、毎年四年生を修学旅行と称して松島に連れて来たが、その真の目的は東北学院中学部でゲルハード教授の授業を参観させることにあることからも窺うことが出来るであろう。石川は、この「ゲルハード・メソッド」を発展させるため、イギリ

スからH・E・パーマーを招聘し、文部省に英語教育研究所を設置し、理論と実践の研究をさせた。この新教授法は、昭和八（一九三三）年に福島中学で行われた研究所年次大会での公開授業で、さらに翌年東京高師の学生を使つての研究授業でその有効性が立証され、英語教育界の耳目を惹きつけた。その影響で、それまで東北・北海道で優位を占めていたゲルハード仕込みの東北学院出身の英語教師の地盤は、かなりの程度東京高師出身者に奪われることになった。このような状況下で、児玉は、石川林四郎の下で、口頭英語に優位性を置く教育法、いわゆる「イングリッシュ・スルー・イングリッシュ」教育を学んだのである。

これは、やがて、児玉のミシガン大学におけるC・C・フリーズの膝下での研究へとスムーズに繋がる。フリーズの理論は当時もつとも新しい英語教授理論であり、ブルームフィールドの言語理論である構造言語学に基づく教授法である。その理論を構成する枠組の第一は、記述論的立場である。すなわち何が記述されるべきかを特定化することを必要と考え、それを「言語の慣用」にあるとした。学習者はその慣用を正確に真似る努力を要求されるのである。第二は口頭言語の高い優位性を強調することにある。すなわち、フリーズは、言語の口頭面の重要性についての信念を言語学習と教育方法論の中に引き入れたのである。この場合、言語とは、同一の発話音声の反復再現によって生じる一連の型であり、その音が反復再現を促す同一の刺激を有するとともに、同一の反復再現を引き出す音の組織である。フリーズはこのような基本的な定義に基づき、具体的には第一にオーラル・アプローチの有効性を健全な言語理論に一致して選ばれるべき基本的材料の選定に求め、第二に母国語と目標言語の相違を明らかにするための記述的分析に求めた。児玉が、よく学生に対し、日本語の音素（phoneme）の分析などを課題として与えたのは、この母国語と学習目的言語の相違を明らかにするために、実際に記述的分析を

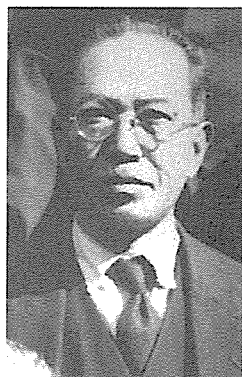
試みさせたものと言えよう。

児玉は、このフリーズの理論を体して教育活動を行ってきたが、彼自ら中学校、高等学校の教科書を編纂して基本的材料の選定を行なったことは、その具体的な行動の一つと考えることが出来る。すなわち、東京書籍から昭和四十七（一九七二）年に中学校用英語教科書として *New Horizon English Course I・II・III* を編纂したが、この教科書はその後幾度か改定されて現在に至っている。また昭和四十八（一九七三）年から五十六（一九八一）年まで出版された高等学校英語 A 用教科書 *New Horizon Senior English Course I・II・III* ならびに英語 B 用の *New Horizon English Readers I・II・III*、そして英語教育内容の改正に伴い、その後を受け継ぐ高等学校英語 I の *New Horizon English Course I・II* と *New Scope English Course I・II* を昭和五十七（一九八二）年に編纂したが、これらは現在も広く使用されている。現在これらの教科書の編纂者リストには多くの名前が記載されているが、そのスタートにおいては、児玉と他に三人の編纂者によって始められたものである。これらの教科書は、現代英語教科書の主流を占める口語英語を主体とした教科書に、先鞭をつけたものと言えるであろう。

児玉は、大学において、音声学、教科教育法、英語学演習等を担当した。主としてフリーズの著作をテキストとしてその理論と實際を学生に教授したが、フリーズの愛弟子という自信が講義の隅々まで溢れており、構造言語学に対する造詣の深さが窺われた。児玉を通してフリーズに触れた学生は卒業後各地に教員として赴任し、当時全国を風靡した耳で聴いて口で話す「オーラル・アプローチ」の具体的な教授法、コントラスト（対比）による発音訓練とパターン・プラクティスによって、英語教育界に大いに貢献したことは推測に難くない。

児玉の講義のヴァイタリティは特筆すべきものがあり、読ませる分量の膨大さにも、またかなりの努力と工夫

を要求するような宿題のテーマの与え方にも現われている。それはアメリカの学生の凄まじい勉強ぶりにじかに触れ、教育こそ国の力であると見て取った結果であった。講義にはその時間ごとの一つのテーマ、例えば、‘utterance’と‘sentence’の違いなどが用意してあり、時にはそのテーマだけで終わるほど集中的であった。授業は厳しいが、一度脱線すると際限がなく、風刺のピリツと効いたユーモアをまじえた人生教訓は、いまだ耳朵を離れない。



和泉幸一郎

さて、文学の分野では、まず和泉幸一郎を挙げなければならない。和泉は明治二十八（一八九五）年六月二十二日宮城県伊具郡角田に生まれた。大正七（一九一八）年東北学院専門部文科を卒業、東京帝国大学英吉利文学科選科に進学、大正十一（一九二二）年三月卒業と同時に本学院専門学校教授に就任、戦前戦後を通じてちょうど五十年の間、東北学院の歴史とともにひたすら英語教育に専念してきた。青年教師時代は和服で通した特異な存在であったが、洋服に変えてからもそのダンドイぶりは変わらなかった。和泉は、現代のように研究論文執筆を強く要求されるのではなく、直接的に教育を主眼とすることを求められた旧制の高等教育機関のいわば良き時代の教授タイプであり、その英語教育の方針はいわゆる訳読中心主義であった。洪い声で読む英語の発音は歯切れ良く、テキストもイギリス、アメリカを選ばず、古今の名作、人情味に溢れた作品が多かった。中でもイギリス・ヴィクトリア朝期の文学に造詣が深く、テキストとしてカーライルの『衣裳哲学』(Sartor Resartus)、ラスキンの『近代画家論』(Modern Painters)等を教科書に用いた記録があるが、特に後者に非常に惹きつけられていたのは、おそらく自分の浮世絵などに対する



る趣味において通ずるものがあつたからであらう。その講義もさることながら、テキストから離れて語り出す洒脱な脱線に妙味があつた。しかし、口癖は「いついかなるときにも役に立つような英語を身につけることが肝要」であつて、単に訳読だけでなく会話の能力をも重視していたことは、和泉自身が、終戦直後にアメリカン・スクールで教えるために仙台に来ていた米国人教師やその友人たちに、浮世絵や茶道、華道を英語で解説、手ほどきをしていたことから窺われるであらう。また *curriculum vitae* 「履歴書」を英文で書いてレポートとして提出させるという実務的な教育もしていたことは、文学書を読ませていたダンディな先生を知っている者にとっては驚きであらう。

残されている手帳を見ると、卒業論文の指導のために丹念なメモがびっしりと綴られており、学生一人一人について出身校、扱っている作品についての解説と問題点の列挙、学生の書いた論文に関する疑問点の指摘など詳細をきわめている。かつて学生監としてその勇名を馳せたが、怒ると真つ赤になるので鬼瓦と綽名された恐ろしい顔で怒鳴られたり、特別な指導を受けた学生も多数にのぼる。しかし本当は大変な人情家であり、学生の面倒を実に良く見、学校の中でも外でも和泉ほど学生に慕われた教授は他に多くはないであらう。曲直理非の判断を明らかにし、直言する人物であつたが、英文学科会議で議論が沸騰すると、「若い人達に有利になるように取り計らいなさい」と言い、その一言は大変な重みをもって若い人々に希望を与えた。戦前から長く野球部名部長として活躍し、また図書館長として今日の東北学院図書館の基礎を築いた。江戸版画の蒐集家として、また骨董陶器の鑑識家としても著名であつた。



吉田盛次郎

和泉と同様東京帝国大学出身の教授に吉田盛次郎がいる。吉田は和泉より年齢的には一年だけ先輩であるが、帝大を卒業したのは和泉より四年も早い。福島県石城郡内郷村に明治二十七年（一八九四）年六月十七日に誕生し、福島県立磐城中学校を明治四十五（一九一二）年三月卒業、大正二（一九一三）年九月大阪府立高等医学校に入学するが半年で退学、その年の九月に第二高等学校英文科に入学、大正六（一九一七）年九月には東京帝国大学英吉利文学科に入学し、同九（一九二〇）年七月に卒業している。翌年三月三十一日宮城県仙台第一中学校教員を嘱託され、同十一（一九二二）年四月英語科教員免許状下附されて初めて教諭に任ぜられている。以後昭和二十一（一九四六）年七月二十四日まで四半世紀の間仙台一中で教鞭を執った。翌七月二十五日東北学院専門学校教授に就任、同二十六（一九五一）年東北学院大学講師となり、同三十八（一九六三）年教授に昇進、昭和四十二（一九六七）年三月一杯で教壇から完全に退くまで、英語、近代英米劇などを担当した。

東京帝国大学での優秀な成績はつとに伝わっており、仙台一中に赴任したときは、他校の生徒の間にまで帝大出の吉田の噂は広まっていた。しかし、地味な性格で、自らを目立たせず、東北学院大学で教えるようになってからも平生は言葉数少なく、どちらかと言えば口の重い人であったが、教壇の上では一言も忽せにせず講義を行なった。大変力のある人であったが、教える前には訳文の推敲を重ね、細かいところまで気を配り、文法的な解説も懇切丁寧であった。本当の意味での言葉の使い方を教え、完璧に近い翻訳を行なうては学生たちを感嘆させたものである。教科書としてはマーク・トウエイン、セオドア・ドライサーなどアメリカ物からスコットランドの小

説家ロバート・ルイス・ステイヴンソン、演劇ではバーナード・ショウなどの作品を取り上げていたが、特にアイルランド文芸復興期の演劇に関心を抱き、日本英文学会に做って組織された東北学院英文学会の活動の一環として、吉田はアイルランド劇文学研究会を主催し、毎週木曜日の午後、シングの『海へ乗入れる人々』(The Riders to the Sea)の研究を学生達とともに行なっていた。『東北学院論集』第二号にはアイルランド文芸劇場創設の主唱者の一人であるイザベラ・オーガスタ・グレゴリー夫人の喜劇についての紹介がある。東北学院大学演劇部の部長としてよく学生演劇を指導し、戦後の学生演劇活動を鼓舞した功績は大きい。モルモットと綽名された吉田は、その優しい思い遣りのある人柄と高邁な人格のゆえに、多くの学生に慕われた。



山浦拓造

カリキュラムの中に、他の大学にはあまり見かけない米国式の「シェイクスピア」がある。専門学校時代からシェイクスピアは宣教師をはじめ多くの教師によって講じられ、実際に仙台名物の英語劇として上演されてきた古い歴史を有しているが、大学に昇格後この講義はもっぱら山浦拓造によって長年の間講じられてきた。

山浦は明治三十六(一九〇三)年一月二日、福島に生まれた。大正六(一九一七)年福島県小学校准教員検定試験に合格、翌年伊達郡藤田町立尋常小学校准訓導を一年勤めた後、大正八(一九一九)年東北学院中学部に入學、同十三(一九二四)年卒業と同時に専門部師範科に進学し、昭和三(一九二八)年三月に卒業。福島県立安達中学校で一年間教鞭を執った後、昭和四(一九二九)年東北学院中学部教員となり、同時に東北帝国大学法文

学部英文学科に入学、教えつつ学生の身分を三年続けた。昭和十一（一九三六）年には東北学院高等学部教授となり、商業英語等を担当したが、そのころ美濃部博士の天皇機関説が出たり、二・二六事件等が起こり、山浦は国家学に興味を抱き、昭和十六（一九四一）年教鞭を執りながら再び東北帝国大学法文学部法学科に入学、昭和十八（一九四三）年に卒業し、文学士とあわせて法学士の学位を取得した。第二次世界大戦が激しくなるにつれて英語教育は圧力を受けて廃止され、たまたま転出して不在となった経済学担当の教授の代用として商法や統制経済学等を講じたが、やがて高等学部が閉鎖されると学徒動員指導で行っていた萱場製作所に勤務、終戦後は宮城県の渉外課、河北新報その他に在職した後、昭和二十三（一九四八）年すでに復活していた東北学院専門学校に復職した。翌年東北学院大学発足と同時に助教教授となった。

山浦の東北帝国大学での卒業論文は英語発達史についてであったが、東北学院大学では、文部省に登録されていた関係上、英文学担当教員としてスタートを切った。その研究対象はトマス・ハーデイに始まり、戦後進駐軍との渉外経験からインドにおける征服者と被征服者との関係を取り扱ったE・M・フォスター、さらにワーズワス、デイラン・トマスなど多岐にわたるが、山浦の述懐によれば、昭和二十七（一九五二）年四月から突然専攻以外であったシェイクスピアの講義担当を命じられ、それ以後シェイクスピアは終生の最大の研究テーマとなったのである。その研究成果をまとめた第一作である『火の車 シェイクスピア試論 第一集 「リア王」と「マクベス」』によせた小林淳男の序文によれば、山浦は「音楽が好きであったように……基督教神学にも明るい。加うるに、大学では本業の英文学の外に、法学も修められているので政治や法律やこれにまつわる社会的諸問題にもひとかどの知識を具えておられる。……myriad-mindedと称せられる大劇作家（シェイクスピア）」

の豊富な内容の戯曲をこなすには、山浦君の今までに経て来た学問的素養が正に打ってつけのものと、わたくしには感ぜられる」と述べているように、該博な知識と旺盛な問題意識は山浦の多くの論文に具現され、講義に生かされている。とりわけバリトンの美声で歌い、チェロを奏するという音楽を愛して止まなかった山浦は、音楽との関わりで、バーンズ、ミルトン、シェイクスピア研究にその真骨頂を発揮した。その成果は、昭和四十（一九六五）年十月十六・十七の両日東北学院大学で開かれた第四回シェイクスピア学会での前代未聞のピアノ伴奏による歌唱実演付研究発表「シェイクスピア劇の歌曲」、翌年五月に上智大学で開催された日本文学会での発表「悲劇に秘められた歌曲の本質——シェイクスピア神技の一解剖」、さらに同年十月九州大学で開かれた第五回シェイクスピア大会での「『柳の歌』の演劇的手法と効果——シェイクスピアの妙技とその背景」として次々に発表され、それらは後に『シェイクスピア音楽論序説』（一九七〇年、泰文堂）にまとめられ、わが国のシェイクスピア研究における未開拓の分野に鍬を入れることになった。しかしここで付け加えなければならないことは、彼のこの研究は単に彼が音楽を好きだからというのではなく、シェイクスピア当時の音楽の基調が短旋律で短調であったが、それは日本の民謡などの調子と同一であり、もしこの感受性がエリザベス朝人のそれと同質であるならば、もしかすると多旋法によるハーモニーと長音階が著しく発展したクラシック音楽以降の音楽に親しんだ現代英国人よりは日本人の方が、原作シェイクスピア劇を、単にその音楽だけではなく、より正しく理解し味わう素質を持っていることになるかもしれないからである、と山浦は述べている。

また、山浦は「ことばとはなし」というエッセイの中で、日本人の外国語上達の遅さを分析し、「音痴——音楽のそれほどではないが——少くとも音・音声に対してわれわれはきわめて無関心あるいは鈍感である人が多いか



石川重俊

ら、ことを音の流れとしてとらえることがおろそかになっているのが原因の一つではあるまいか」と推論している。この考えに立脚してのことと思われるが、山浦はよく教場で学生に英語の歌を歌わせ、「受験英語で歪められ、狭められ、無味乾燥化していた英語学習を本然の姿にかえす第一歩として英詩鑑賞」（『昭和四十一年度学生要覧』）を積極的に薦め、特にスキャンション、すなわち韻律分析ないし韻律的朗読を強調した。左耳が全聾であったにもかかわらず、音・音声に対して敏感であった彼は、言葉に対する感受性が鋭く、しばしば抒情詩を読んでは感極まった批評をして学生を驚かせた。彼はその上能弁であった。しかもそれは単に口頭だけでなく、書き物においてもそうであり、流れるように出て来る発想は平易にして暢達な筆致で次々と文章にされた。山浦の研究論文六十余編の三分の二はシェイクスピアに関するものであるが、その他の研究論文は『文集イギリス文学』（昭和四十九（一九七四）年、高山書店）に収録されている。山浦は学務繁忙の折りにもよく新刊の研究書を涉獵読破し、常に机上に厚く積み重ねておく原稿用紙に寸暇を惜しんで筆を走らせていたが、文筆の才に恵まれ、研究論文のみならず、説教、随筆、創作の類いもかなりの数になり、四冊の文集に集められている。

東北学院中学部、高等学部において児玉省三とともに学んできたが、児玉が英語学方面に進んだのに対し、英文学の分野に進んで活躍したのは石川重俊である。大正四（一九一五）年四月一日仙台の生まれ。昭和七（一九三二）年三月東北学院中学部を卒業して高等学部英語師範科に進学、昭和十一（一九三六）年卒業と同時にシュネーター院長の勧めで九州・福岡の西南学院中

学部教諭となった。当時西南学院高等学部にも英文科はあったが、石川がその中学部に呼ばれて行ったのは、西南学院は未だ英語教員の資格を与えることが出来なかつたからである。その点では、前述のとおり、大正九（一九二〇）年にその資格を許可されている東北学院は、英語教員養成において全国のキリスト教系私立学校の中ではかなり先んじていたわけである。ところで、石川は、月浦利雄に「NEDが無いような学校では教えるな」と言われていたが、最初の赴任校にNED（オックスフォードの『ニュー・イングリッシュ・デイクシヨナリー』）があつてほつとした思い出があると述懐している。研究心旺盛な石川は、さらに昭和十四（一九三九）年九州帝国大学法文学部文科に進学したが、ここで石川は同級生の白線組（旧制高等学校卒業生達）の英語英文学の一般的知識、古典語の素養、また外国人教師の講義を理解する能力がかなり劣るのを知り、東北学院の教育のレベルの高さと充実度を改めて経験することになった。昭和十七（一九四二）年九月に卒業すると同時に同大学の副手として残るが、翌年大分経済専門学校に勤務、昭和二十二（一九四七）年四月には東北学院専門学校教授として母校に戻った。昭和二十四（一九四九）年大学発足と同時に同大学の助教授となり、同二十六（一九五一）年三月まで勤務、のち愛媛大学、東京慈恵会医科大学教授を歴任の後、梅花女子大学文学部創設の仕事を終え、昭和三十九（一九六四）年四月再び東北学院大学に戻り文学部ならびに大学院文学研究科の教授として昭和四十四（一九六九）年三月まで教育と研究指導にあつた。その後宮城学院女子大学、北九州大学、甲南大学などで相次いで教鞭を執り、福岡大学を最後に第一線から引退した。その間、昭和三十二（一九五七）年八月から一年間フルブライト講師・研究員として米国インディアナ州立大学大学院比較文学講座で講義をし、さらにイエール大学大学院で研究に従事している。昭和五十五（一九八〇）年三月から四月にかけてインディアナ州立大学比較文学プ

プログラム三十周年記念研究集会にパネリストとして招待されたり、同年ノース・キャロライナ大学で行われた国際比較文学会、同理事会に日本比較文学会会長代理で出席、同時開催の人文科学研究者コロキウムに発題者として参加するなど、海外でも活躍している。

東北学院専門部時代、山川丙三郎に出会ってダンテに惹かれ、イタリア語や他のロマンス語に関心を抱いて研究を始めたが、その後公表した二十数編の論文を調べれば、石川の研究主題は大別してT・S・エリオットとP・B・シェリーとなるであろう。エリオットのダンテ論を読んでいるうちにエリオットにのめり込み、エリオットを研究しているうちに、エリオットのロマン派批判にふれてロマン主義文学研究に入ったというのが実情のようである。そして「P・B・シェリーの詩の弁護論——理念をめぐるシェリーとエリオットの場合」（『東北学院大学論集』昭和四十一年）に代表されるように、二人の詩人の詩論に、石川はクローチエを経由しヴィーコーにまで遡れる共通の問題点を見出している。特筆しなければならないのは、昭和三十二（一九五七）年八月に岩波文庫の体裁で出版されたシェリーの『縛を解かれたプロミーシユース』の翻訳である。原作中の三十六種にもよる詩型を巧みに移し換え、含意と心象に富む訳語からなる翻訳は、原作の持つ不羈なる主人公の精神の表出を良く写している。九州帝国大学時代、豊田実の演習でこの作品に触れ、彫琢の結果を土居光知に認められ、岩波から出版されたものである。

石川はいエール大学大学院で研究に従事していたとき、ニュー・クリティシズムの泰斗クレアンス・ブルックスの十九世紀イギリス文学演習に出席し、ニュー・クリティシズムの文学教育法が大学の国語（英語）教育と密接に結びついており、教室で、意味、韻律、イメージ、隠喩、象徴などを厳密にしらべて形式と内容の一致を探



る読み方をしているのを実際に経験し、この批評の方法に改めて啓発された。そのため、彼は詩を克明に読むことを要求し、特に現代詩は「言葉を潰して読め」という表現を用いた。しかし、一方、小説を読むにあたっては、文章の構文に拘泥したり、代名詞一つ一つが何を指すかを確認しながら読むというような、いわば「職工的」な読み方を禁じ、いわゆる訳読をせずに意味を取ることを主眼として多読をさせた。例えばマンスフィールド、あるいはヴァージニア・ウルフの長編小説を、一回に三十頁前後読んでこさせ、言葉のつながりを重視して、質問によって読み進めるという方法を取ったこともある。石川はまた英米文学評論を担当し、主として批評の概念が、近代文化思想との関連において、どのように理解され、どのように文学批評において実践されてきたかをアーノルドからニュー・クリティシズムに至るまで講義した。彼の講義は、いわゆるノートを取らせる講義ではなく、フリー・トークキングで進めるため、学生はノートを取るのに苦労したようである。いずれも、学生にとってはきわめて厳しいものであったが、その知的で、しかもヴァイテリティに溢れる講義は、聴くものを納得させる内容を持ち、文学の魅力を十分に学生たちに植え付けて、当時の東北学院大学の教室に新風を吹き込んだ。

### 三 結語

以上、東北学院英学の伝統は、実学にその力を置いてきたことを述べてきた。しかし、この実学という言葉には、意味の陰影に変遷があることを認めなければならない。神学校時代は読み、書き、話す能力としての実用

的英語の運用能力が目的であったが、それとても神学研究のための手段としての英語であった。やがて英語教員養成が教育目的の一つとされ、職業につながる実践としての実学が前景化してくる。しかし大学発足当時、この実学は「プラクティカル」という言葉でもう一度問題にされたことがあった。すなわち戦後の英語ブームに乗って良い発音で滑らかに話せるという会話能力を増進させること、言い換えれば英語を「使える」人材の養成が主張された時、大学としては英会話だけ出来る者に学士号をやる訳にはゆかないというような表現で議論がなされたのである。それが、前述の「英文科ではなく、英文学科なのだ」という言葉になる。これはアカデミズムに基づくいわば虚学の主張であるが、これは決して実学を無視した言葉でなかったことはその後の東北学院の教育が実証している。ちょうど、大学の発生の歴史において、コレギウムがそれぞれ独立性を保持しながらウニヴェルシタスを構成したように、カリキュラムのレベルにおいても同様に、多様な科目のそれぞれが独自性を維持しながら、しかも排他的でなく、有機的、総合的な効果を目指して存在し、対象の人格を教育してゆかなければならないのであるが、東北学院はその百年の歴史において正にその実をあげてきたと誇ることが出来るであろう。価値の一層の多様化と、専門性のさらなる分化の時にあって、この要請は一層重要性を増していると言えるのである。

## キャンパスの自然

村山 磐

### 一 仙台および周辺の自然概観

一九八四年と一九八八年の二回みちのく仙台を訪れ、本学九〇周年記念館主催教養講座で三回もイスラエル国やユダヤ人について講演して下さったヘブライ大学教授（地質学）イスラエル・ザック博士は、「仙台の地形はエルサレムに似ている」と話されていた。それは「山々がエルサレムを囲んでいるように……」（詩編一二五）とあるように、南・西・北は標高一〇〇m内外の丘陵に囲まれ、あたかも聖地エルサレムに似た地形だったからである。東もしくは南東方向は開けて太平洋に臨み、都市騒音の無かった静かな時代には、波の音が聞えていた。明治二十九（一八九六）年九月から翌年七月まで東北学院に在職した二十五歳の多感な島崎藤村は、「仙台の回想」の中で「名掛町というところに、三浦屋という古い旅人宿と下宿を兼ねた宿がありました。あの裏二階へは、遠く荒浜の方から海の鳴る音がよく聞えて来ました。『若菜集』にある数々の旅情の詩は、あの海の音を聞きながら書いたものです。」と、当時を回顧している。その頃の仙台は市になったとはいえ人口は少なく（明治二十二年市制施行、人口八万六千三百五二人、戸数一万六千八百六戸）、乗合馬車はあったが自動車として無く、ようやく市中に

電灯（明治二十七年）がもつたというように、静かな田舎町だったので荒浜の波の碎ける音が響いてきたのであろう。

海鳴りが聞えたように、仙台は東方の太平洋に向つて開いたやや内陸に位置し、旧市街地の輪郭に沿つてその周りが緑の森林におおわれた丘陵で囲まれている。樹種はコナラ、クリが主となっているが、アカマツ林やスギ植林地も点在し、「杜みやの都」としての自然美を強く印象づけている。秋ともなると広葉樹は黄ばみ、やがて真紅の紅葉と化し、碧空からさんさんと降り注ぐ陽光をいっぱいを受けて黄金の光を放ち、錦のように輝く。木枯しに落葉した後も、緑の針葉樹が点在して自然の暖さを残す。しかも市街地と丘陵とに狭まれて流れる広瀬川の清冽な流れは、うねうねと蛇行しながら銀色にあるいは群青に光つて、堆積岩の白い断崖と緑や真紅の森林との織りなす絶景を随所に現出している。

昔も今も、このような広瀬川に市民はロマンチックな詩情をかきたてられる。「広瀬川流れる岸边 思い出は帰らず 早瀬躍る光に揺れていた君の瞳 時はめぐりまた夏が来て あの日と同じ流れの岸 瀬音ゆかしき杜の都 あの人はいない」（星間船一作詞）の「青葉城恋唄」は、佐藤宗幸の叙情的なメロデーにのつて多くの人の琴線にひびいてくる。

広瀬川河岸のススキや河原草原、その他周辺森林では、多くの種類の小鳥がわが世の春を謳歌するかのようになさえずっている。次に、仙台で観察される鳥類を記してみよう。ウグイス、キゼキレイ、セグロセキレイ、キジ、キビタキ、ジョービタキ、ホトトギス、カッコウ、カワセミ、クロツグミ、トラツグミ、アカゲラ、コゲラ、ヒガラ、ツグミ、ムクドリ、モズ、サンコウチョウ、スズメ、ノビタキ、ツバメ、トンビ、タカ、キジバト、ヤマ

バト、ヒヨドリ、カラス、その他である。

豊かな自然に恵まれた仙台の都市景観は、他の諸都市の追従を許さないものといえよう。「何を見ても眼が覚めるようであった。新しい自然、新しい太陽、そして新しい青春」と藤村が記しているように、殊に明治時代の仙台の景観は「詩の土地」であり、詩的情熱がいかに高度に燃焼したことであろうか。宮城野原について藤村は、「道なき今の身なればか われは道なき野を慕ひ 思ひ乱れてみちのくの 宮城野にまで迷ひきぬ 心の宿の宮城野よ 乱れて熱き吾身には 日影も薄く草枯れて 荒れたる野こそうれしけれ」（若菜集）と詠じている。

ところで、仙台市を取り囲むような丘陵は、奥羽山脈から東方に広がった定高性の丘陵地帯の東縁部分で、多くの河谷によって開析されたものである。丘陵の崖下から太平洋岸までの開けた土地の大部分は第四紀に堆積された台地や低地で、南部や北部の諸平野とをつなぐ陸上交通の要衝の地となっている。

丘陵は通常、青葉山丘陵・国見丘陵・七北田丘陵・富谷丘陵・蕃山丘陵・坪沼丘陵・高館丘陵などに分けられよう。

青葉山丘陵とは、北→東を広瀬川、南は名取川が流れ、その間に第四紀更新世（洪積世）青葉山礫層の堆積面を残している台地のような丘陵で、二百十二mから約百mまでの高さで東方に傾斜している。土樋キャンパスから望むと、南→西にみられる広瀬川対岸の黄白色や灰色の急崖は青葉山礫層の基盤である。この基盤は新第三紀鮮新世の地層で、上部から大年寺層・向山層<sup>むかいやま</sup>・竜の口層・亀岡層と分けられ、その下部は不整合で中新世の地層（白沢層・三滝玄武岩など）となる。

青葉山礫層は、径十→三十cmの円礫（青葉山段丘陵）で構成されている二ツ沢礫層とその上を覆う越路火山灰

層からできている。この火山灰層は赤色を呈しているが、詳しく観察すれば赤一色ではなく、軽石・青粘土・褐鉄鉱・黒土などいろいろな層を含み、何回か降り積もったことが分かる。火山灰の赤色は、リス氷期とウルム氷期との間、いわゆるリス・ウルム間氷期に亜熱帯のような気候となり、その温暖化の環境下で赤色化したものと推定されるが明らかではない。青葉山礫層の分布高度・転位状態などから、礫層堆積当時に起こった北西→南東方向の軸をもち北東に低下する階段状撓曲運動と、これにほぼ直交する北東→南西方向の背斜軸と一本の向斜軸を伴って南東に傾下する撓曲運動とが想定されている。

国見丘陵はおもに三滝玄武岩部層や向山層からなり、部分的に青葉山礫層を載せる個所もみられる。最高地点は権現森（三百十四・二m）で、他に三百mを越えるところはない。国見丘陵はさらに、国見峠面（高さ二百三十m内外）、中山面（百八十→百六十m）、大石原面（おおいしばら百八十m内外）、吉成面（百二十→八十m）とに区分される。七北田丘陵とは、七北田川と広瀬川との間の丘陵地のうち、百二十m内外の定高性があつて著しく開析された部分である。

富谷丘陵は、主体が富谷周辺にあつて富谷地塊と呼ばれることがあり、百m前後の定高性をもつ典型的な丘陵地で、七北田丘陵などと共にいわゆる陸前準平原の一部をなしている。中新統七北田層の砂岩・凝灰岩を切る広大な侵食平坦面の開析されたものである。

蕃山丘陵は、広瀬川と名取川との丘陵地のうち、原地形面をほとんど残さないほど開析されて台地状になった西半部である。中新統秋保層群のうちおもに旗立層・はただて綱木層つなきからなり、西縁では湯本層・茂庭層・白沢層もみられ、また鮮新統三滝玄武岩も広く発達している。

坪沼丘陵は広義の高館丘陵に含まれるが、丘腹斜面傾斜・谷形・谷密度・起伏量・地形面の性質などから、いわゆる高館丘陵とは著しく異なっている。

高館丘陵は名取川南岸から岩沼にかけて展開する広大な台地状丘陵である。丘頂高度約二百mで、中新統高館安山岩（両輝石安山岩・集塊岩および凝灰岩などの累層）、槻木層（砂岩・頁岩・植物化石層）などを開析によって一様に切っている。

ところで広瀬川は、青葉山・国見両丘陵を分割している峡谷を出ると兩岸に広大な段丘地形を発達させた。これが仙台市街台地であるが、大きく四段の段丘群に分けることができよう。仙台市街の大部分が、これらの段丘面上に立地しているのである。各段丘面の名称は、田山利三郎の命名（一九三三、北上山地の地形学的研究、其一のA・仙台近傍の河岸段丘、斎藤報恩会学術報告一七号）に従って呼称する。

(1) 台ノ原段丘……仙台市北部の丘陵縁辺（海拔四十〜九十m）に標式的に分布する。北山付近では丘陵頂面を形成し、東方の榴岡〜原町付近では高度四十〜三十mと低下するが台地状の高まりとなっている。段丘礫層は最大十mほどで礫・砂・粘土からなり、上部は愛島火山灰に覆われる。現在、台ノ原地域は七北田川支流の梅田川流域にあるが、段丘面の南西方への連続からみて、かつての広瀬川によって形成されたものと推定される。この段丘上の建造物のおもなものには、大崎八幡神社・東北福祉大学・青葉神社・東北労災病院・宮城県警察学校・榴ヶ岡公園・仙台管区気象台・宮城野中学校などである。

(2) 上町段丘……仙台市街の北半が載る段丘面（海拔二十五〜八十m）で、さらに明瞭な斜面によって上・中

・下の三段に細分することができる。上段は子平町（半子町）―北山方面、中段は東北大学付属病院・宮城県庁・仙台地方合同庁舎・仙台白百合学園などの載る面で、広瀬川右岸の川内では東北大学教養部・同文学部・同経済学部や講堂などの建っている面である。下段は北東部の堤通雨宮町にある東北大学農学部付近から東方に広がり、幸町の宮城県総合衛生研究所―東仙台に至る。この段を梅田川の流路が五―六mの深さで下刻している。

(3) 中町段丘<sup>なかまち</sup>……海抜二十五―六十mの範囲にあり、基盤岩の竜ノ口層（青灰色シルト岩・凝灰質砂岩・凝灰岩）を切つて厚さ三―七mの段丘礫層が載っている。この段丘面も急斜面によつて三段に細分される。上段は県民会館・中央警察署・東北電力ビルなどの面、中段は仙台駅・中央電報局・中央郵便局・東北大学片平丁キャンパス・東北学院高中キャンパス（一番町）・東北学院大学本館（土樋）などの面、下段は石垣町バス停・南警察署などの面となる。これらの段丘面の区分は、市内のおもな道路の坂（段丘崖）で示されることが多い。たとえば、宮城県庁（本町三）と仙台市役所（国分町三）の間の坂（勾当台通）、県庁前の勾当台公園南東の坂、本町一丁目と二丁目との間の坂（宮城県神社庁前）や本町一丁目と花京院一丁目との間の坂（自衛隊連絡部前）などが上町と中町両段丘を境する段丘崖を横切るところである。

中町段丘内の上・中・下各段を区分する坂は、上・中段間のもは大町一丁目と一番町二丁目との間の青葉通（藤崎デパートは両段にまたがる）、青葉通国分町角付近、高等検察庁東側の坂などで、中・下段間のもは荒町―愛宕橋間、石名坂付近などにそれぞれ見られる。

(4) 下町段丘<sup>しもまち</sup>……海抜二十―五十mの範囲の広瀬川沿いに発達している。この段丘は主として広瀬川曲流部の滑走斜面側に発達し、小崖によつて二段の面（滑走斜面段丘）に細分される。左岸では角五郎、市民プール―花



壇、評定河原、米ヶ袋、宮城県工業高校、土樋、舟丁、河原町、右岸では川内大工町（宮城県第二高等学校）、川内仲ノ瀬町（仙台商業高校）、県スポーツセンター、追廻住宅、霊屋下などを載せる。

なお低地としては次のようなものがある。

(1) 広瀬川・名取川低地……広瀬橋付近から下流に広瀬川低地、名取川の富田付近から下流に名取川低地が発達する。これらの地域には砂礫が大量に堆積し、氾濫原や自然堤防などがみられる。

(2) 霞の目低地……旧広瀬川や名取川の堆積作用によって生じた河成面である。氾濫原堆積物の砂質粘土、偽層の発達する砂礫層からなる厚さ三〜七mの霞の目層の分布域に一致する。

(3) 郡山低地……長町駅の南東の郡山付近に分布する堆積層である。

(4) 苦竹低地……七北田川低地と霞の目低地の両河成面に挟まれた低湿地である。

(5) 七北田川低地……七北田橋付近から下流で海拔十五m以下を占め、七北田川の氾濫原・自然堤防・後背湿地、旧河道の広がる地域である。

(6) 海岸低地……海岸線に沿って三kmほどの幅をもつ海岸平野面で、内陸側に三列の浜堤帯と砂丘帯とが二〜三mの高まりとなり、それらの間には後背湿地・潮汐湿地や潟湖が分布している。

仙台の気候は、その温和さにおいて東北地方の諸都市の中では最も恵まれた地域の一つといえよう。

春……学生・生徒が希望に燃え胸を弾ませて入学する四月上旬は、暖かさを増して通年桜花爛漫と咲き乱れ、春

の季節を堪能する月である。太陽高度が高まって日長も長くなり日照の多い季節になってくる。五月になるとさらに日長が長くなり、平均気温も摂氏十五度、降水量も比較的少なく百八mm内外で、秋の十月と共に年間で最も快適な月である。

梅雨：盛夏に入るまでの六月中旬ごろから七月中旬ごろまでの約一か月ほどが梅雨の季節である。梅雨の初期から中期にかけてはオホーツク海高気圧の支配を受け、「やませ」といわれている冷湿な北東気流が吹いてくる。「やませ」がよく発達すると、青森県太平洋岸から三陸海岸にかけての沿岸低温帯がしばしば仙台平野にまで伸びてきたり、湾岸からガスや霧雨きりさめまじりの北東気流が仙台にまで流入してることがある。異常低温はこのような時に発生することが多い。仙台が霧雨でじめじめした陰湿な梅雨のころ、奥羽山脈がこの雨雲をせき止めるために、西側の山形県は晴れ間の多い陽性の気候になっているが、ときにはフェーン現象で高温になることが多い。盛夏：小笠原高気圧からの南東季節風が卓越しているので、南方気団が北上して日本に近づくころには下層が冷やされて安定し、上暖下冷型となって仙台では天気が良い。このような季節は、梅雨の終わった七月下旬ころから八月下旬ころまでである。海陸風が発達し、日中に発達する海風はほぼ海面温度に近い気温なので、仙台湾岸は日中の日盛りでも涼しい。海風が仙台市街地に到達するのは午前九時過ぎごろで、午後二時から三時ごろまでは最も強くなり、その後夕方に向かって弱まる。内陸からの陸風が吹き始めるのは、午後九〜十時ごろである。

秋：九月になると、東北地方の上空には秋雨前線が現われてくる。このころ秋雨で、時には台風のために暴風や豪雨に見舞われることがある。十月になると、台風の襲来は少なく、移動性高気圧に覆われて空が澄み渡り静

かな晴天となる。また、仙台の空はシベリア寒気団に覆われるようになり、日陰の冷たさや夜の冷え込みを感じるようになる。

冬：冬の木枯しが吹き始めるのは十一月に入ってからである。冬の季節風は仙台では比較的強いが、西方の奥羽山脈がこれを遮るので降雪は少ないほうである。冬は割合に天気がよく、空つ風は冷たい冬の寒さを感じさせないが、日当りのよい屋内はガラス窓を通した日射で暖かい。

季節風に運ばれた雪雲は奥羽山脈にかかり、日本海側と同様に山沿いに降雪があるが、仙台では降雪は非常に少ない。しかし異常寒波の時は季節風も強まって仙台付近にも雪片を飛ばしてくる。春先などに太平洋岸沖を台湾坊主と呼ばれる低気圧が通った時は、重く湿ったいわゆるボタ雪が降ることがある。

仙台における最寒月は一月で平均気温摂氏〇・九度ぐらいで、次いで二月の平均気温一・三度と寒い。しかし、二月も下旬なると急に寒さがゆるんでくる。三月になるとさらに太陽高度が高まって日長も長くなり、日に日に暖かさを増して春らしくなるのである。四月中旬には、通年桜の開花宣言が聞かれるようになる。

次に仙台の気候を表にまとめてみよう（気象庁、日本気候表、その二、一九八二。一九五一―一九八〇年の平均）。

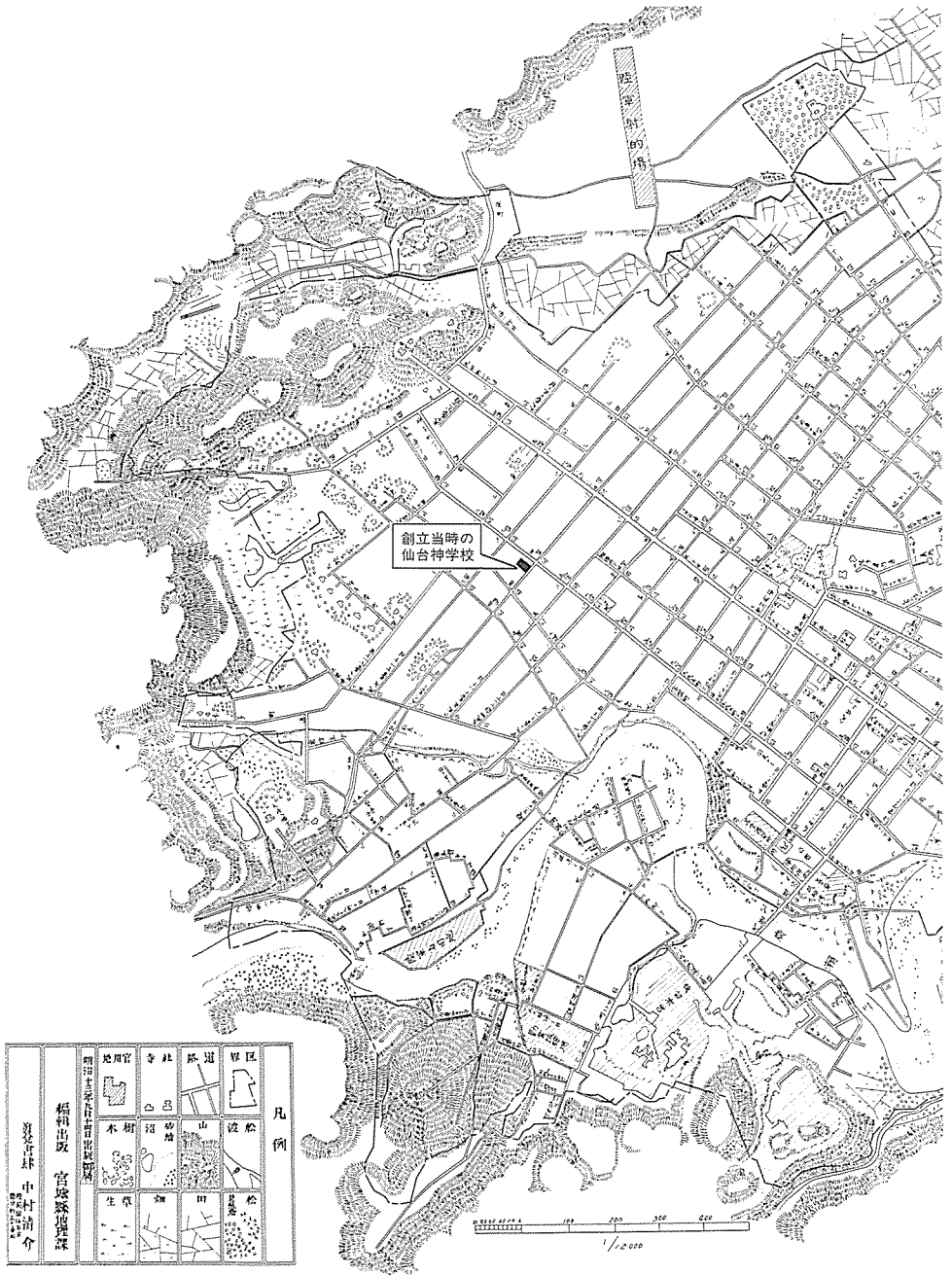
年 三 十 九 八 七 六 五 四 三 二 一	月
11.9 3.7 8.7 14.3 20.0 22.2 14.9 4.2 0.9	平均気温 ℃
16.4 8.1 13.7 19.0 24.1 25.9 19.8 9.1 5.2	最高気温の平均
8.1 -0.1 4.4 10.3 16.6 19.3 10.3 -0.1 -2.7	最低気温の平均
1219.0 48.6 68.6 116.1 175.3 160.1 108.6 72.0 45.7	降水量 mm
1977.2 145.2 152.5 154.9 133.6 164.4 141.5 151.6 215.7 196.7 157.4	日照時間 日

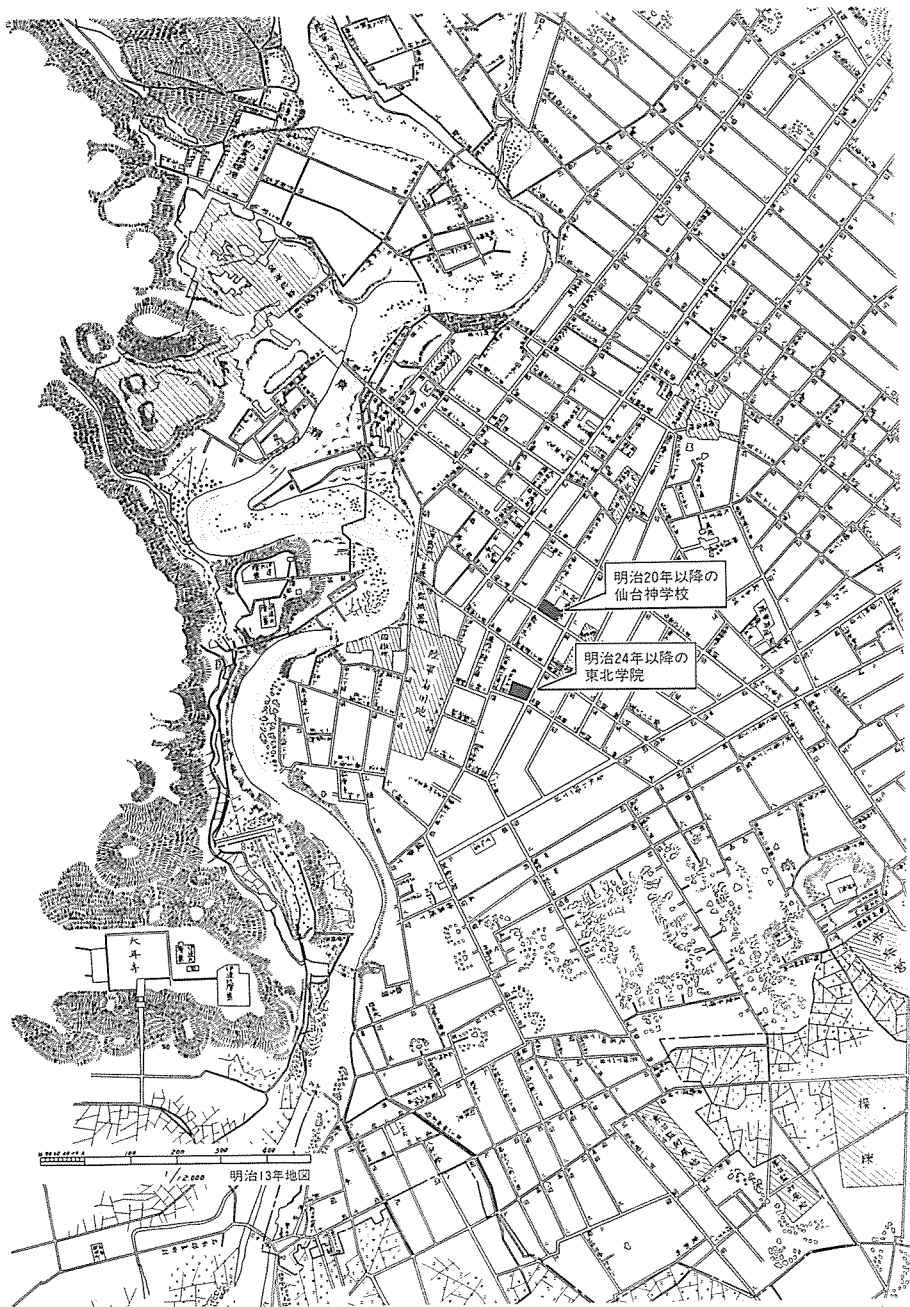
## 二 土樋・一番町キャンパス

東北学院の前身仙台神学校の授業が初めて行なわれたのが、一八八六（明治十九）年五月、木町通と北六番丁の交差点北西角地西へ二軒目（現星陵町、東北大学歯学部付属病院南東角地）であった。

明治十三（一八八〇）年に出版された仙台市街地図（宮城県地理課）を見ると、北六番丁と北七番丁、あるいは北八番丁と北山との間に多くの寺院があり、それらの境内にはうっそうとした樹木が生え、また半子町西方から北方北山にかけての丘陵は森林に覆われ、畑地なども多く見られた。仙台神学校の南側も現在のような東北大学付属病院（明治四十四年現在地に移転）は無く、庭木の多い閑静な住宅地で実に自然に恵まれた環境であった。

旧城下町である市街の人口は、幕末に約五万人ほどであったが、明治に入ってもほとんど変化がみられず、仙台神学校創立の明治十九年は五万八千二百八十七人（仙台の歴史、宝文堂、一九八九）で、同年には人力車七百三十二台、乗合馬車十一台、荷馬車五十一台、荷車千八百十台（仙北鉄道社史）だったというから、市街地は非常に閑静であったかが推察されよう。当時、市街地といっても、建物が連続して市街を形成しているのは、旧奥州街道沿いの町屋敷および大町周辺だけで、その町屋敷の裏手に存在する侍屋敷は城下の六割以上を占める面積を持ちながら、竹林や畑の中に散在して田舎の光景のような雰囲気をもっていた。侍屋敷は緑高によって約三百坪から千坪を越す面積であったが、土堀で囲まれたこの広大な敷地には、どこの家でも裏には竹藪があり、畑には柿・梅・桃・梨といった果樹が植えられ、大人三人で抱えるような栗や胡桃くるみの大木が生い茂っていた。明





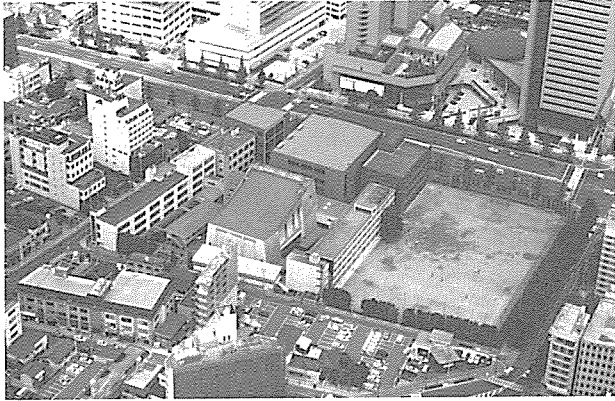
治の中ごろまで、東一番丁でさえ夜になると狐が現われ、便所に行く渡り廊下では手燭のローソクが暗闇からとんできた狐に取られることもあったという（仙台の歴史）。まして辺鄙な木町通と北六番丁の角地の仙台神学校にも、当時は狐が訪れたに違いない。

翌一八八七（明治二十）年四月ごろ、宮城女学校が東三番丁一六二―一六九番地に新校地二千四百余坪を購入した際、仙台神学校はその中であつた古い民家を借り受け、一時そこに移つた。しかし、同年五月十八日に本願寺仙台別院跡（東二番丁三三番地、南町通一三番地）を購入することを正式に契約（登記完了は明治二十四年）し、僧房と長屋とを仙台神学校教室および寄宿舎に、本堂を仙台教会に当てることになり、同年七月ころから使用した。翌明治二十一年八月にW・E・ホーイが仙台教会名義の本願寺仙台別院跡の敷地の一部である西半分千二百坪を自費で購入し、キャンパスの一部となつた。

東北本線の上野―仙台―塩釜間が開通したのは、明治二十年十二月十五日のことであつた。その朝上野駅を七時二十八分に発車し、午後七時三十分に着する予定であつたが、折から降り積もつた雪のため越河付近の坂を登りきれず、機関車を二台に増やしてやっと午後十時二十五分に仙台駅に到着した。鉄道開通は仙台の姿を変え、駅は東五番丁・東六番丁の名掛丁と柳町通の間に建ち、それまでの道路を分断したので、北目町から南町に至る九間幅の道路を新設した。それまで一間半幅の南町通は、待屋敷の塀や垣根が続き、笹や樹木が覆いかぶさるように茂り、ぬかるみが続いていた道路だつたという。明治二十年の仙台の人口は急増加し、現住人口六万七千二十七人、現住戸数は一万五千七百戸で、やがて市制（明治二十二年四月一日）が施行されるのである。

自然環境に恵まれた東二番丁キャンパスが、最初の災害に見舞われたのは明治二十二年九月十一日の大洪水で





一番町キャンパス

あった。前日来の降雨が十一日正午ごろから暴風雨となり、広瀬川の出水二丈（六m以上）に達したのを始め、市内の溝渠から水があふれ、ついに天保六年（一八三五年、閏七月七日）仙台大風雨洪水、大橋落ち民家流失二千四百十六戸、溺死者二十七人）以来の大洪水となり、大町以南はほとんど脛を没するほどであった。東二番丁キ

ャンパス（現一番町キャンパス）内は一面湖水のようになった。澱橋防衛のため出動して橋上にいた下士官・兵十四名は、澱橋流失と同時に押流され、そのうち三名だけは難を免れたが他の十一名は溺死した。この外、大橋、長町橋、六郷橋も流失した。その後、明治四十三年八月十一日にも大洪水に襲われ、キャンパスを含め東二番丁一帯も浸水した。

大正八（一九一九）年三月二日午前二時半ごろ南町「電話横丁」から出火、季節風の北山おろしにあふられ、周辺建築物に延焼すると共に立ち昇る黒煙は濛々として南天に渦巻き流れ、たちまちにして付近一帯は阿鼻叫喚の巷と化した。そのころ南町には高樓が建ち並ぶようになっていた。

東一番丁を南に延びた紅蓮の炎は付近一帯を焼払いなめ尽くして柳町通に及んだが、午前四時ころ飛火が意外にも東二番丁東北学院中学部の赤レンガ洋式建築の上層尖塔に移り、烈風にあふられた炎は見る間に同建物の階上各室に拡大、校舎を全焼したのである。同校舎は寄宿舎と共に明治三十八年工費九万円を投じて建築したもので、当時、中学校としては本邦無比の堂々たる洋式校舎四百六十坪、寄宿舎四十六坪、さらに内部の調度を加

えると損害六十万円といわれた。東北学院からの飛火は清水小路を焼き、柳町通からの延焼は北目町両側をなめながら南進し、西側は道場小路角から南へ、東側は菊の湯に達した。この火災で南町をはじめ十二ヶ町に延焼、東北学院の外、郵便局・電話交換局・芭蕉館・横浜火災など七百余戸を焼失し、そのうえ、由緒ある多くの名木・古木あるいはうっそうたる樹木を炎上灰燼に帰し、自然環境を著しく破壊した。全焼した中学部校舎は、大正十（一九二一）年に再建された。その後、昭和二十（一九四五）年七月十日拂曉の仙台空襲で再び焼失、戦後再建されて現在に至っている。

南六軒丁に野球グラウンドを開設したが、大正十一（一九二二）年六月のことであつた。さらに専門部校舎が完成（南六軒丁二番地）したのは、大正十五（一九二六）年七月のことで、ここに現在の土樋キャンパスの基礎が開かれたのである。校地総坪数七千五百二十三坪、屋外運動場坪数三千百六十坪、校舎総延坪数六百三・七八坪、建坪百五十五・七三坪であつた。地形的にみると校舎は中町段丘上に建設され、南側に隣接するグラウンドは下町段丘上に位置していた。校舎落成の記念として植えられた校舎（本館、中町段丘南端）南側の桜の苗木（ソメイヨシノ）五本は、その後すくすくと成長し、現在（一九九〇年）、樹令七十年ともなり、毎年新入生が入学するころはさも祝福するかのよう爛漫と咲き誇っている。その南側は地面が一段下がった下町段丘面のグラウンドで、冬の日差しとて遮るものもなくさんさんと降り注ぎ、北西側は建築物で寒風膚を突き刺すような季節風を防ぎ、あまつさえ窓ガラスに反射した太陽光は桜の老木をいたわるように温かく投げかける。このように恵まれた微気候は、毎年仙台市で最も早く咲く桜としている。



土樋キャンパス

ト、ヒヨドリなどやヨシ原にはオオヨシキリ、上空にはトビが見られ、水辺ではキセキレイ、セグロセキレイ、ハクセキレイ、ササゴイなどが採餌し、カルガモ、バン、ヒクイナ、イカルチドリ、イソシギなどが繁殖している。夏鳥のイワツバメが巢の材料を集め、冬には広瀬橋の上流側などにユリカモメ、コガモなどが渡来している。その他、経ヶ峰や竜ノ口の断崖で繁殖するチョウゲンボウは貴重な鳥である。魚類を食べるヤマセミヤカワセミも崖地に巢をつくっている。

グランドの南をゆつくりと流れる広瀬川、流れが広い意の「広瀬」といっても川幅は場所によって異なり、学院大学付近では数十mの幅で流れ下流の日辺ひらべ付近で名取川に合流する。山形県境の関山峠南斜面から東流し、大倉川、横川、新川、青下川、芋沢川などを合わせ、作並温泉、熊ヶ根を経て愛子あやし盆地に入る。郷六の小盆地から仙台市放山はなれまの峡谷を抜けて仙台市街地を北西から南東に貫入蛇行して土樋キャンパスの南側を流れている。流路延長四十五km、流域面積三百一十一km<sup>2</sup>となっている。キャンパス付近の広瀬川には、アユ、ウグイ、ヨシノボリ、ギバチ、カマツカなどの魚類のほか、特にオイカワが多く、淵にはフナ類、コイ、ニゴイなども生息する。またカジカも増えてきている。

広瀬川は多くの野鳥の採餌、休息、繁殖の場所となっており、仙台市街地域だけでも約一二〇種の鳥類が観察されている。河原にはキジ、キジバ

昆虫類として仙台市内の広瀬川には、底生の水生昆虫が生息し、ウルマーシマトビケラ、ヘビトンボ幼虫、トンボ類幼虫のヤゴ、各種のプ幼虫などがおり、鞘翅目のヒラタドROMシ幼虫は水中の石に円板状の体で付いている。静かな水面にはアメンボが多く、ヨシなどが生えている場所などには、沼や池に多いガムシやゲンゴロウ類、ミズカマキリ、タガメなどが生息する。なお、ヤナギ類の多い河原には、タテハチョウ科のコムラサキが生息し、その他の河原にはカンタン、ウマオイ、コオロギなど秋に鳴く虫も多い。

このように多くの動物が生息し、白く輝く断崖を映じて清く流れる広瀬川は、多くの人の詩魂をかきたてる。

土井晩翠は「天地有情」の中で、「都の塵を逃れ来て 今わが帰る故郷の 夕涼しき広瀬川 野ばらの薫り消え失せて 昨日の春は跡も無き 岸に無言の身はひとり。…… 流はゆるし水清し 樂の、波のまに すすしく澄める夜半の月 ああ自然の心ころにて 胸に思のなかりせば 樂しかるべき人の世を。」と詠み、土樋キヤンプスの近くにあった阿部次郎（大正十五、昭和四年まで専門部で教鞭をとる）の広瀬河畔の家（一九九〇年、現存）を訪れた齋藤茂吉も「わがこころ和きついたり川の瀬の音たえまなき君が家居に」とうたっている。

キヤンプスの真南、広瀬川対岸に位置する小山は、青葉山丘陵の一部である愛宕山（標高七十八m）である。旧市街地のどの方向からも見えるので向山と呼ばれて親しまれ、山上には伊達政宗が一六〇三（慶長八）年に創建した愛宕神社（祭神は軻遇土神）がある。社殿西の虚空像堂には、仙台の地名の起こりとなった千体仏の一部が安置されており、その北側には「向山の早鐘」と言われる鐘楼がある。地質学的には下部の白っぽい断崖は向山層（広瀬川凝灰岩）で、その上に青葉山礫層が載っている。

この山頂に石川善助の詩碑「光の澱む切り通しのなかに 童子が化石を捜していた 黄緒の地層のあちらこち

らに 白いうづくまる貝を掘り 遠い古時代の景色を夢み 母の母なる匂ひを嗅いでいた……もう日はかけるよ  
空に鴉は散らばるよ だのになほも探している 探している 外界きぎの外のころを 生の始めを 母を母を」。愛  
宕山からの化石の発見は困難で、「光の激む切り通し」とは竜の口峡谷を言ったものと考えられ、子供達が竜の口  
層から新第三紀鮮新世の海生貝やその他の化石採集の様子を描写したものであろう。

また、土樋に住んでいた阿部次郎は、老足にも無理のない道程の対岸の愛宕神社の丘を選んで散歩し、「二百段  
も越える石段をのぼりきれば桜ともみぢの並木をあしらふ仁王門の奥に伊達家の信仰をとどめて、今を清らかに  
ひっそりとした社殿が見えてくる。……」（残照）と、毎日のように自宅との間を往復したことが述べられている。  
キャンパスの北西方向、広瀬川の袂状部に位置しているのが伊達政宗の墓のある丘陵経ヶ峯である。キャンパ  
スから直線距離にして約1kmほどの所なので、仙台市教育委員会発行「経ヶ峯」（昭和五十五年）に基づいて自然  
環境の概要を述べてみたい。

経ヶ峯の標高は七十三・六mで青葉山丘陵に属し、その周囲を上町段丘、中町段丘および下町段丘が取り囲む  
ように発達している。地質学的には、下部から上部に新第三系鮮新統の向山層（北山層・広瀬川凝灰岩・八木山  
層）、大年寺層および青葉山礫層が分布している。

植生は、江戸時代以来仙台藩主の廟所（瑞鳳殿）として利用されてきたため、人為作用の影響を受けており、  
またスギの植林が行われている。藩祖の廟ができたとき、その遺命によって紀州から杉の苗を取り寄せて植えた  
のが現在の杉の起源であると伝えられている。植物学者木村有香博士は、「昭和四十一年八月十二日仙台城二の丸  
跡の老杉に落雷があり、幹に割れ目ができたので伐り倒して測定したら、地上1・5mの幹囲は2・六五mで、

年輪数約三百三十を数え得た。経ヶ峯は二の丸跡と距離も近く、環境も昔から大差なかったものと推定し、この測定結果を目安にすると、経ヶ峯で地上1・5mの幹囲2・6m以上の杉は樹令少くとも三百二十年以上と考え得る。調査の結果そのような老杉は経ヶ峯全体(但し瑞鳳寺墓地沿いを除く)で四十七本あり、おもに瑞鳳殿参道と西参道に沿った地域、感仙殿・善応殿跡地の西側と北側に沿うた場所、および御子様御廟の周辺にある。四十七本のうち幹囲3・0〜3・5mのものは二十本、それ以上4・0mまでのものは十本、4・0m以上が二本ある。参考のために記すが、昭和五四年早春瑞鳳寺の境内の老杉を伐ったところ、地上1・5mの幹囲は3・五六m、年輪数約三百四十二あった。経ヶ峯の老杉を全体として見れば、その配置は建築物や墓地を冬の北西の季節風や雪からまもるようになっていて、いわゆるいぐね林(屋敷林)の趣のあるのは興味深い。これらの老杉とその後植えられた杉が主体となり、これにもともと此処にあったモミや種々の広葉樹が加わって今日見るような杜ができたものと考えられる。」と、前記「経ヶ峯」に記している。

杉の外、暖地性の植物として、シラカシ、アラカシ、アカガシ、シロダモ、ユズリハなどの常緑樹の外、イイギリ、カラスザンショウ、アカメガシワ、ザイフリボク、ネジキ、ヤブムラサキ、ナガバノコウヤボウキなどの落葉樹木や落葉低木が見られる。陰地植物としては、御子様御廟付近を中心にシダ類が多い。なかでもベニシダ、イタチシダ、ナライシダ、リョウメンシダなどは装飾的で美しく、大形である。草本類は春はカタクリ、ショウジョウバカマ、エンレイソウ、ヒカゲスゲなどで、やがて新緑となるとチゴユリ、ホウチャクソウ、ヒメシヤガなどが花を咲かせる。また秋にはオヤリハグマ、キツコウハグマ、オクモミジハグマ、タマブキ、ノブキ、あるいはチヂミザサ、コチヂミザサなどが生えている。タケやササ類としてはアズマネザサ、スズタケ、アズマザサ

やクマザサが人目を引く。

哺乳類としてはムササビやリス（ニホンリス）が経ヶ峯地域に生息している。また、この地域に見られる鳥類は、ゴイサギ、ササゴイ、マガモ、カルガモ、コガモ、トビ、チョウゲンボウ、コジュケイ、キジ、キジバト、カッコウ、ツツドリ、ホトトギス、アオバズク、アマツバメ、ヤマセミ、カワセミ、アオゲラ、アカゲラ、コゲラ、ツバメ、イワツバメ、キセキレイ、サンショウクイ、ヒヨドリ、チゴモズ、モズ、ミソサザイ、ジョウビタキ、トラツグミ、クロツグミ、アカハラ、ツグミ、ヤブサメ、ウグイス、エゾムシクイ、クイイタダキ、センダイムシクイ、サンコウチョウ、エナガ、コガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、メジロ、カシラダカ、アオジ、カワラヒワ、マヒワ、ベニマシコ、シメ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、カケス、オナガ、ハシボソガラス、ハシブトガラスなどが報告されている。

その他蝶類としては、アオスジアゲハ、アゲハ、クロアゲハ、カラスアゲハ、キチョウ、モンシロチョウ、スジグロシロチョウ、ゴイシジミ、ベニシジミ、ヤマトシジミ、ルリシジミ、ツバメシジミ、イチモンジチョウ、コムスジ、ヒメウラナミジャノメ、ヒカゲチョウ、クロヒトデ、キマダラヒカゲ、ヒメジャノメ、コジャノメ、ダイミョウセセリ、コチャバネセセリ、ヒメキマダラセセリ、オオチャバネセセリ、イチモンジセセリなどが発見されている。

昆虫のトンボ類（蜻蛉目）としては、オオアイトンボ、ハグロトンボ、ミヤマアカネ、マイコアカネ、ノシメトンボ、ナツアカネ、アキアカネなどで、セミ類ではヒグラシ、アブラセミ、ミンミンゼミ、ツクツクボウシ、ハチ類（膜翅目）ではキオベッコウ、クロスズメバチ、キイロスズメバチ、フタモンアシナガバチ、オオハキリ

バチ、トラマルハナバチ、ガ類としてコスカシバやユウマダラエダシヤクなどが認められている。

以上は、土樋・一番町キャンパスおよびその周辺の自然について述べたものである。なお、南六軒丁キャンパスとして親しまれた場所は、一九七〇（昭和四十五）年二月一日、新住居表示によって「土樋一丁目三番一号」、東二番丁キャンパスとして知られた中・高校は、「一番町一丁目九番一号」と呼ばれるようになった。

### 三 泉キャンパス

泉キャンパスは一九六五（昭和四十）年五月、宮城郡泉町市名坂字天神沢（現、仙台市泉区市名坂字天神沢九一）に、山林、畑地、宅地からなる約十万坪の土地取得から始まる。最高点標高八十三mの丘陵を整地したもので、富谷丘陵の南縁部に属する。

キャンパスの平均高度は五十m内外に整地され、西側には国道四号線（陸羽街道）が南北に走り、その東側は要害川が南流して七北田川に注ぎ、通学バスはその架橋第二小野目橋を渡って正門前に着く。また、大学建築物の南は榴ヶ岡高校となり、校舎の南側には地名の示す天神沢が苗代沼を通して曲流しながら南の七北田川に合流する。キャンパスの北西方向には将監団地、北側には泉共栄団地、泉ニュータウン、いずみ向陽台団地、東側には永和台、百合ヶ丘、松陵ニュータウンなどの団地が造成されている。

富谷丘陵と七北田丘陵にはさまれた幅約3kmの七北田川の谷には、約1kmの振幅をもって東流する七北田川に





泉キャンパス

沿って四段の河岸段丘が発達している。経済企画庁による土地分類基本調査（仙台、能登志雄・中村嘉男、一九六七）によると、この段丘面を上位から下位に飛鳥原・八木沢・下ノ原・実沢の四面に分けている。

(1) 飛鳥原段丘：海拔五十〜八十mの範囲で、七北田川左岸飛鳥原から根白石にかけて広く発達する。

(2) 八木沢段丘：海拔三十〜五十mの範囲で発達し、5m前後の高さの段丘崖で上位の飛鳥原段丘や下位の下ノ原段丘に接し、断続的に下流域の鶴ヶ谷付近まで追跡される。向八木沢で基盤の七北田層を切って厚さ一・五mの砂礫層を載せ、さらに五十cm内外の火山灰風化層に覆われる。

(3) 下ノ原段丘：海拔三十〜四十五mの範囲で、上流の福沢〜露払〜萩坂から西方へは高さを増すが、一般に分布は断片的で中流の七北田付近にまでしか分布しない。

(4) 実沢段丘：海拔二十〜三十mの範囲で、現河床上四〜五mの高さにあって曲流袂状部（滑走斜面）を占める。去田・古内・狼河原付近には旧流路を示す微地形が認められ、全体として氾濫原段丘の性質をもっている。

広瀬川流域の段丘群との対比は、直接連続する段丘面がないので困難であるが、相対的な高度関係から、飛鳥

原面が仙台上町段丘、以下八木沢面が中町段丘、下ノ原・実沢面が下町段丘に相当するものと推定される。

キャンパスの地質は、第三系中新統の七北田層といわれる堆積岩で、シルト岩や砂岩の互層からなる。層名は泉区役所のある七北田に模式地をもつことに由来するが、将監団地南西地区の泉高校敷地一帯のシルト岩・砂岩の互層からは、サンドパイプの化石帯が何帯も認められ、またクロスラミナも発達しており、陸に近い浅海の環境を示している。松森と七北田に近い青麻あおせ神社付近は貝化石の多産地で、七北田層の最下部の礫岩からはグリシメリス、クラミス（ヒザラ貝）を始め、ホタテ貝・カキ・ハマグリ・カガミ貝など多くの貝化石を産する。

キャンパス上の土壌は、おそらく船形火山群の噴火に由来するものと推定される火山灰から変化したもので、土壌学でいう褐色森林土である。

海岸から幾分奥まったこの地域の気候は、冬季は旧仙台市内より若干低温で積雪も多く、夏季は反対に幾らか高温となる。年平均気温摂氏十一・三度、月平均気温の年較差摂氏二十三・七度、年降水量千二百三十二mmの気候要素であるが、春先に強風・突風も多い。

植生については教養学部生物学研究室（飯泉茂、郷右近勝夫、栗田町子）で「東北学院大学泉キャンパス、コナラ林植物目録」（一九八九年）を出版したが、それに基づくと次の通りである。ただし、植物調査を行なった泉キャンパスのコナラ林は、キャンパス敷地の北側になる県道西成田～泉線で画された北向き、一部西向きの斜面の山林で、標高四十～八十m、小沢五本を含む起伏のある約四ヘクタールの地域である。

高木：コナラ（樹高十二～十五m）、クリ、カスミザクラ、アオハダ、ウリハダカエデ、ヤマモミジ、ヤマウルシ、ウワミズザクラ、スギ、モミ、アカマツ

低木：リョウブ、ガマズミ、ヤマツツジ、アオキ、コゴメウツギ、ノイバラ、ツクバネ、オトコヨウゾメ、オオバクロモジ、ミヤコザサ、スズタケ、アズマネザサ

草本類：タガネソウ、チゴユリ、シュンラン、タチツボスミレ、アキノキリンソウ、オクモミジハグマ、オヤリハグマ、オケラ、シラヤマギク、ヤマユリ、

前記「コナラ林植物目録」によると、現時点で確認された高等植物の種数は三百三十三種で、このうちシダ植物は三科十七種、裸子植物は二科三種、被子植物の単子葉類は八科五十種、双子葉類の離弁花類は四十七科百六十五種、合弁花類は二十二科九十七種と報告されている。

鳥類としては、シジュウカラ、ヒヨドリ、コゲラ、センダイムシクイ、メジロ、ヤブサメ、カッコウ、ツツドリ、ウグイス、ホオジロ、ムクドリ、スズメ、ツバメ、ハシボソガラスなどが見かけられる。

爬虫類としてトカゲ、カナヘビ、シマヘビ、アオダイショウ、ヤマカゲシ、マムシなどが生息している。

蝶類としては、林縁に春はミヤマセセリ、夏が近づくとコチャバネセセリ、ヒメキマダラセセリ、ダイミョウセセリ、オオチャバネセセリが見られるという。

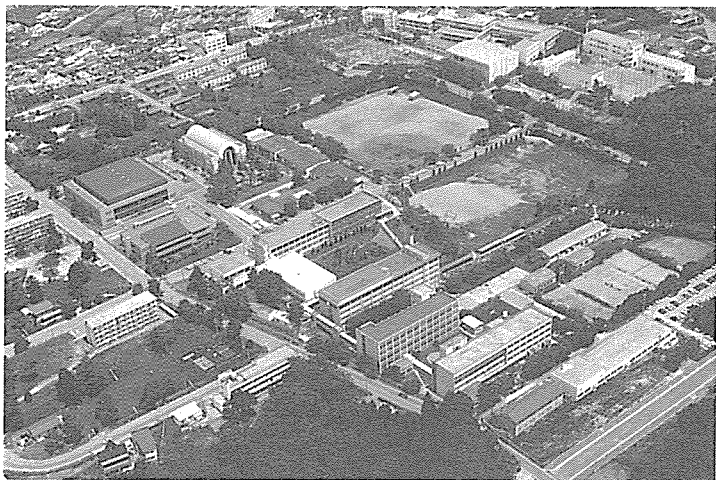
セミ類は、ニイニイゼミ、ヒグラシ、アブラゼミ、エゾゼミ、ツクツクボウシ、チツチゼミなどである。

## 四 多賀城キャンパス

多賀城には工学部（多賀城市中央一丁目十三の一）並びに幼稚園（多賀城市高崎三丁目七の七）が位置している。工学部も幼稚園も一九六二（昭和三十七）年四月一日に開設されたが、キャンパスは米軍キャンプ跡の三万三千七百七坪（当時は多賀城町留ヶ谷）であった。

キャンパスの北西約一・五kmの地点には、有名な多賀城跡（国特別史跡）がある。多賀城の始まりについては続日本紀の七二二（養老六）年の条に「鎮所」「陸奥鎮所」とあり、これが多賀城の前身ではなかったかという説もある。多賀城が正史に登場するのは続日本紀の七三七（天平九）年四月で、「多賀柵」という名称が用いられている。このように、奈良時代の初め陸奥鎮所であり、陸奥国を統轄する国府と鎮守府が並置されて「府国並行」体制が成立し、それに陸奥・出羽両国を監督する按察使府も加えられ、広域東北行政府としての性格が強かった施設である。また、キャンパスの北西に隣接している「多賀城廃寺跡」（国特別史跡）は、多賀城鎮護のための付属寺として国家が建立したもので、創建年代もほぼ多賀城の創建の時期と考えられている。昭和三十六年から発掘調査されたが、それによると三重塔・金堂・講堂・中門・鐘楼・僧房などのある立派な寺院だったという。

キャンパスの平均高度は約二十m（西方の最高点三十七・七m）で、塩釜丘陵といわれる低平な丘陵上にあり、その東、西、南は最低位段丘（宮城野海岸平野の連続）で囲まれている。キャンパス北西側を砂押川が北西から流下し、南側で東向きを変えて東北石油仙台製油所に突き当たるようにして仙台港に注ぐ。



多賀城キャンパス

多賀城跡南西の砂押川河底から海岸砂に埋もれた土器類を本学史学科教授加藤孝が発掘したが、これは貞観十一（八七〇）年の津波によって埋没したものではないかと推察している。それは三代実録に、「五月二十六日（新七月十三日）。陸奥国地大震動。流光如昼隠映。頃之。人民叫呼。伏不能起。或屋仆压死。或地裂埋没。馬牛駭奔。或相昇踏。城郭倉庫門櫓牆壁頽落顛覆。不知基類。海口哮吼。声似雷霆。驚濤涌潮。浜洄漲長。忽至城下。去海数十百里。浩々不弁基涯淡原野道路。忽為滄溟乘船不逞。登山難及溺死者千許。資産苗稼。殆無子遺焉」と記されたときの津波なのである。このときの津波は、仙石線多賀城南西数百m地点の「末の松山」まで襲来したと伝えられているが、若し加藤教授が発掘した土器類がこのときの津波によって流されて埋没したものとすれば、砂押川を逆流して多賀城跡の西側辺まで来襲したことになり、三代実録の記録を裏付けることになる。ただしそのころ、現在よりも気候が温暖で海進となり、海岸線がもつと多賀城に近付いていたと国史の記録から推定される。

さて、キャンパスが位置する塩釜丘陵の地質は、大部分が新生代新第三紀鮮新世の下馬層（仙台地層郡の亀岡層に対比）で広く分布し、凝灰質シルト岩、砂岩、礫岩からなり、下部に亜炭層をはさんでいる。また、その縁

辺部には中生代三疊紀の利府層（粘板岩、砂岩の互層、ひん岩の岩脈、アンモナイト・ダオネラを含む）が基盤として見られ、キャンパスの下馬層の北側には隣接して新第三紀中新世の東宮浜層（仙台地層群の綱木層に対比、凝灰質砂岩・礫岩の互層からなり、礫岩中には直径四mくらいの岩塊も含まれる）が広く分布している。

植生としては、キャンパスの西側にはコナラ・クリ林が若干残っており、南西には小面積ではあるがアカマツ林が残存し、またところどころにクロマツも点在する。動物としては、セミ類はヒグラシ、アブラゼミ、ミンミンゼミなどが見られ、鳥類ではハシボソガラス、ヒヨドリ、シジュウカラ、エナガ、カワラヒワなどが多い。

気候は土樋や泉キャンパスに比べて、夏冬および昼夜の温度変化が小さい。降雪時など泉・土樋キャンパスに積雪があつても、多賀城キャンパスに積雪が見られないことがしばしばある。このように他のキャンパスに比し温和な気候と言えよう。

暖候季の日中に陸地が高温になると冷たい海面との温度差が大きくなり、また夜になるとむしろ陸側が低温になるので、海陸の温度関係が逆になる。ことに気圧傾度の弱い夏などは海岸には海陸風が発達する。塩釜では、海風が吹き出すのは夏は九時前後、春・秋には十時過ぎである。海風が入ると海上の涼しい気流を受けるので気温の上昇が抑えられ、この影響下の多賀城キャンパスは比較的涼しい。冬季は陸地が冷え込んでいるので、陸側から海側に向かう風が吹き易い。それに北西季節風が卓越する季節なので、内陸側から海岸に向かう風が圧倒的に多い。しかし、奥羽山脈から離れているので、冬の季節風型の降水は少ないと言えよう。

## 五 青根セミナーハウス

「みちのくの蔵王の山のやま腹にけだものと人と生きにけるかも」（赤光、齋藤茂吉）。蔵王山麓青根温泉地域に、東北学院大学自然科学研究室分室（青根山荘）を設けたのは一九五九（昭和三十四）年十月十三日のことであつた。その後、一九六六（昭和四十一）年十二月六日、青根セミナーハウス（柴田郡川崎町青根温泉一五一二）として完成したのである。

青根温泉は蔵王山火口湖「御釜」の東方約八kmの山腹（標高五百m内外）に位置し、基盤は第三系中新統の青根層（綠色凝灰岩）であるが、その上を第四紀の段丘堆積物が載っている個所に存在している。

セミナーハウスの湯は南方約四百m離れた「大湯」から、ボイラー室を通して加熱された後、引湯したものである。宮城県衛生研究所によると（宮衛研第八五号）、毎分八〇八リットルの自然湧出、泉温摂氏四三・五度、無色透明で異臭・味なく中性反応（pH七・四）を呈し、カリウムイオン（1kg中一一・〇mg）、ナトリウムイオン（一一一・〇mg）、カルシウムイオン（二八・〇mg）、マグネシウムイオン（二・四mg）、塩素イオン（六〇・五mg）、硫酸イオン（一七〇・七mg）、ヒドロリン酸イオン（〇・四mg）、ヒドロ炭酸イオン（二七三・六mg）、ケイ酸（五二・〇mg）、ホウ酸（八・四mg）、遊離炭酸（一一五・七mg）を含む単純泉（緩和性高温泉）である。

セミナーハウス周辺の植物相はコナラ林で、南側に一部ブナ林が見受けられる。哺乳類としてはニホンカモシカ、ツキノワグマ（ニホンツキノワグマ）が周辺に生息し、またホンドキツネ、ホンドタヌキも見られるという。鳥類としては、ホオジロ、アオジ、ムクドリ、ヒバリ、キジ、モズ、ヒヨドリなどの留鳥が多く、マヒワやツグ

ミなどの冬鳥やノビタキなどの旅鳥も渡来している。

青根温泉で採集された蝶類としては、アオバセセリ、キバネセセリ、スジグロチャバネセセリ、ヒメギフチョウ、ウスバシロチョウ、ミヤマカラスアゲハ、スジボソヤマキチョウ、ウラゴマグラシジミ、ムモンアカシジミ、アカシジミ、ウラクロシジミ、メスアカミドリシジミ、アイノミドリシジミ、オオミドリシジミ、エゾミドリシジミ、ジョウザンミドリシジミ、コツバメ、ウラギンスジヒヨウモン、ミドリヒヨウモン、ルリタテハ、ヒオドシチョウ、クロヒカゲ、その他である。

風は年間を通じて西々南西の風が圧倒的に多い。次に青根温泉の気候を表にまとめてみよう（間野浩、蔵王連峰の気象概要、一九五五）。



キャンパスの自然

年	三	二	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	月
10.1	0.8	8.9	12.7	18.8	22.8	21.4	17.3	13.2	8.5	1.4	-1.5	-1.6	平均気温 (一九二八、五〇)
14.5	4.5	11.4	17.1	23.0	27.1	25.8	21.9	18.4	14.1	5.6	2.3	2.2	最高気温の平均 (一九三〇、四七)
5.6	2.9	2.5	8.2	14.5	18.5	16.8	12.8	7.6	3.0	-3.1	-5.6	-5.6	最低気温の平均 (一九二五、四七)
2044.3	132.9	120.8	208.2	278.9	268.5	245.0	208.7	151.5	132.7	107.9	107.5	107.8	降水量 (一九二〇、四七)

## 六 高山セミナーハウス

宮城郡七ヶ浜町花淵浜高山を購入したのは一九四〇（昭和十五）年のことで、その後高山セミナーハウスを完成（七ヶ浜町花淵浜字金色二八一―）したのは一九七二（昭和四十七）年七月二十四日である。

高山（海拔約二十m）は塩釜丘陵の一部で菖蒲田浜海岸の北東に位置し、東には吠崎の御殿山（海拔約五十m）が突き出て高山を包むような地形になっている。

菖蒲田浜前面の海面上には、鴻ヶ島、萱島、立石、兜島などの島が浮き、花淵浜と吉田浜前面には、西箱島、中箱島、東箱島、権現堂島、雀島、榎島、クド島、二ツ島、毛無島、などが存在する。島嶼の配列、特徴的な島の侵食形態などは、地質や地質構造と深い関係があるといえよう。つまり、褶曲構造は松島湾内の島の配列を規制して北西から南東方向へ延び、この褶曲軸と並行して断層が認められている。

高山の地質は第三系中新統の網尻層（上部吉田浜層）で、シルト岩、凝灰質砂岩、礫岩、凝灰質シルト岩などで構成されている。また、その南西の菖蒲田浜海岸は第四系完新統の浜堤堆積物である福浦島層で砂礫からなり、高山と御殿山の間にも福浦島層の浜堤堆積物や後背湿地地堆積物（砂礫、ピート、ロームなど）が存在する。

植生としては、高山から花淵浜までの周縁部を帯状に取りまくようにクロマツ林が見られ、また菖蒲田浜では砂浜と蔬菜畑の境界を画するように帯状にクロマツ林が存在する。七ヶ浜町の丘陵地は大部分アカマツやクロマツの植林で覆われているが、御殿山の鼻節神社境内にはモミに混ってスギ、イヌシデ、アカシデ、コナラなどの

林がある。菖蒲田浜の砂浜には、ハマニンク群落、コウボウムギ群落、ケカモノハシ群落、コウボウシバ群落、ハマヒルガオ群落などが配列を保っている。

松島地域の水面には秋から春にかけて、カモ類が多数飛来し生息する。それらは、スズガモ、ホシハジロ、キンクロハジロなどが観察され、その他マガモ、カルガモ、ハシビロガモ、キンクロハジロ、カワアイサ、ミコアイサなどが散在している。カモメ類としてはウミネコ、カモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、ユリカモメ、アジサシ、コアジサシ、シロカモメ、ワシカモメの九種が認められている。陸域の鳥類として認められているものは、ヒヨドリ、シジュウカラ、ウグイス、コゲラ、ヤブサメ、ホオジロ、トビ、コジュケイ、キジ、キジバト、ホトトギス、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、オナガ、カケスなどである。

蝶類では特徴のある地域で、暖地性のアゲハ類であるアオスジアゲハが良好な状態で生息し、またジャコウアゲハ、モンキアゲハも発見されている。トンボ類では、北限または北限に近いと考えられるアオモンイトトンボやムスジイトトンボの生息、寒地性のエゾイトトンボ、稀産で分布上重要なタイリクアカネなどの生息が確認されている。

景観の人工改変としては、松島湾全般に言えることであるが、湾内の水路以外の水面はノリ、ワカメ、カキなどの養殖棚でおおわれていることであろう。高山から菖蒲田浜にかけての前面も、水路を除いてこれらの養殖棚が一面に存在している。

東北学院のキャンパス周辺は、一般に自然破壊、特に人工改変が進んでいるので、各キャンパスは率先して環境保全に尽すべきであろう。

- 11 – Hoy Letter, Nov. 27, 1894.  
12 – Hoy Letter, Nov. 11, 1893.  
13 – *Reformed Church Messenger* Dec. 7, 1893.  
14 – Hoy Letter, Feb. 21, 1894. (Kelker was a prominent and well-to-do lawyer in Harrisburg, and a dedicated long-time Board member, who, with his wife, had been very friendly to the Hoys. )  
15 – *Ibid.* Sept. 1, 1893.  
16 – *Ibid.* Mar. 1, 1894.  
    cf. Mensendiek, *Not Without Struggle*, pp. 142–144.  
17 – Hoy Letter, March 1, 1894.  
18 – *Ibid.*, June 6, 1894.  
    cf. Mensendiek, pp. 145–147.  
19 – Reformed Church in the U. S. , Reformed Church of America, American Episcopal, Church of England, American Baptist, Christian Church of America, Presbyterian North and South, Cumberland Presbyterian, Congregational, Evangelical Association of North America, Evangelical Lutheran, German and Swiss Evangelical Protestant, Methodist Episcopal Church of Canada, Methodist Episcopal North and South, Methodist Protestant, Scandinavian Japan Alliance, Society of Friends, Universalists.  
20 – Hoy Letter, Aug. 20, 1894.  
21 – *Ibid.* , Nov. 6, 1897.  
22 – Mensendiek, *Not Without Struggle*, pp. 170 f.

#### *BIBLIOGRAPHY*

- Cary, Otis. *A History of Christianity in Japan*. Revell Co. , N. Y. 1909.  
Hoy, William E. -*Correspondence* with Foreign Mission Board of the Reformed Church in the U. S. -1893–98.  
*The Japan Evangelist* -Volumes I -VI, 1893–1898.  
Mensendiek, C. W. *Not Without Struggle -The Story of William E. Hoy and the Beginnings of Tohoku Gakuin*, Sasaki Publishing Co. , Sendai. 1986.  
*The Reformed Church Messenger* -1893–1898.

sulting veteran missionaries about the need for missionaries to pioneer new work, he was urged to confer with the revered Dr. Griffith John of the London Missionary Society in Hankow 650 miles up the Yangtze. During his furlough in 1896 the General Synod of the German Reformed Church had voted to start a mission in China, but no missionary had as yet been sent. So as a result of his visit to Hankow Hoy wrote to Dr. Callender offering himself as the first missionary of his church to China and suggesting that work be started in the largely unevangelized province of Hunan west of Hankow. In September 1898 he was officially appointed and instructed to proceed to China as soon as possible. (22)

The last issue of *The Japan Evangelist* under Hoy's editorship was the May 1899 issue, Volume VI, Number 5. The July issue featured a full-page portrait of Hoy and a long article by Christopher Noss, his colleague who was then professor of theology at Tohoku Gakuin. Hoy was forty-one years old and Mary, thirty-six. They had five children ranging in age from nine to two. They were going to a remote interior area of China where there was much hostility to foreigners. There was a new language to learn and Christian work would have to start from almost the very beginning. But William and Mary were now veterans, well-prepared. In just thirteen years they had pioneered not only two schools and a church in Sendai, but also the first English language Christian journal about Japan, the centennial of which will be celebrated in 1993.

#### FOOTNOTES

- 1 – Letter, Hoy to Callender. Sept. 1, 1893.
- 2 – Hoy Letter, Nov. 11, 1893.
- 3 – *The Japan Evangelist*, Vol. I, No. 1, pp. 1–4.
- 4 – *Ibid.* Vol. I, No. 3 p. 131.
- 5 – *Ibid.* Vol. I I I, No. 2. p. 104.
- 6 – Cary, *History of Christianity in Japan*, Vol. 2, p. 296.
- 7 – *The Japan Evangelist*. Vol. I, No. 5, p. 281.
- 8 – *Ibid.* Vol. I, No. 5, pp. 287 f.
- 9 – *Ibid.* Vol. I, No. 6, p. 338.
- 10 – *Reformed Church Messenger*, Dec.7, 1893.

tablished firms resulted in an increase in the number of subscribers is not known. Some changes were also made in the content of the journal. With the June 1896 issue, the lovely ink sketches were dropped from the Children's Department as were the essays accompanying the photographic scenes of Japanese life. Also the quality of the photographs themselves was no longer as excellent.

After Hoy returned to Japan in July 1896 it was decided to publish the journal monthly beginning with the October issue, with the subscription rates remaining the same. Then, with the December issue the Children's Department was discontinued and the photographs of things Japanese began to include famous places like the Kamakura Daibutsu, Nagoya Castle, Fujiyama and the Sacred Bridge at Nikko, but without any explanations. Also, pictures of churches, mission schools and various types of Christian work began to appear. At the same time articles about Japanese culture and society, which had played such a major role in the earlier volumes, became shorter and fewer. *The Japan Evangelist* was well on its way in becoming a promotional organ of Christian work in Japan. This represented a fundamental departure from its original intent "to give the reader a comprehensive grasp of Japanese life and characteristics."

In the fall of 1897 *The Japan Evangelist* suddenly ceased publication after the September issue without any explanation. But Hoy received so many letters "with offers of help and patronage," that he resumed publication in January. Hoy was pleased, for as he wrote to his mission board secretary, "I myself miss the magazine. It has been a great benefit to me in more senses than one. This recess of three months gives people a chance to tell me how much they like the magazine." (21)

Hoy, however, was suffering increasingly again from the asthma which had begun to plague him soon after his arrival in Sendai in 1886. In the spring of 1898 his condition became so severe that he was advised to go to China for three months to recover. Almost immediately after arriving in Shanghai he was completely relieved of his suffering. Upon con-

you or our beloved Reformed Church ? Are not the children of God all one ?

Brethren I am profoundly and humbly thankful to Almighty God for *The Japan Evangelist*, and so are many of God's people all over the world. Testimonials, earnest and grateful, come to me from many countries and many churches, and from many missionaries grown gray in the service in Japan. Thank God, *The Japan Evangelist* has already a host of friends, and they are rapidly increasing. The past three months have been especially good. The magazine is getting on its feet.

With this long awaited improvement in the prospects of his magazine, Hoy was able to leave on furlough in December 1894 to be with his family for Christmas. In his eighteen-month absence, David B. Schneder and Henry K. Miller, his Sendai colleagues, served as acting editors.

#### 6— *The Evolving Journal*

Some of the changes as *The Japan Evangelist* developed during the Hoy years are significant. While he was on furlough, a section on the Women's Christian Temperance Union was added to the Women's Department beginning with the June 1895 issue. It was edited by Miss F. Mary Denten, a Congregational missionary, who spent her long career in Kyoto. The W. C. T. U. , which had been organized in Japan in 1885, focused attention not only upon the ills of alcohol on which many day laborers spent most of their meager earnings, but upon "the Social Evil" of prostitution which was legalized, with poor country girls the chief victims. Then in 1896, upon the death of Iwamoto Kashi, the Women's Department was edited by Miss Annie Buzzell, an American Baptist teacher at Shokei Girls' School in Sendai.

While Hoy was in America the agents for the journal were changed to the Fleming H. Revell Company of New York, Chicago and Toronto, and the Methodist Publishing House in the Ginza, Tokyo. Subscriptions continued to be handled in Japan. Whether these changes to more well-es-

at your meeting in Pittsburgh you endorsed the magazine and recommended it to the Reformed Church. Why this change of front and this charge that I am not discharging my full duty as your missionary ? I ask for an understanding. I do not seek a quarrel, and I think I am perfectly self-possessed, by the grace of God, while writing this. I know you are displeased at my delay in returning to America ; but pray, am I not more useful to God and man today than I was a year or even six months ago ? In being truly useful to God and to man how can I prove false to you ? God knows I do not desire to disobey or defy the Board, but I must say in all frankness, honor and truth that my best work has always been along those lines where the Board most misunderstood me. I regret this, yea, many are the tears I shed over this; but I must above all things to mine own self be true and to my God, and in the end I cannot be false to the Board. I ask for more confidence and sympathy.

As for my faithfulness to my immediate duties as your missionary, I am as true to our common interests as I ever was. Have you forgotten the fact that I virtually “made bricks without straw” in the material development of the Tohoku Gakuin ? Are you not aware that I, though frequent have been our misunderstandings and bitter often, taking my circumstances into consideration, have been the largest donor to your mission plant in Japan, now upwards of \$6000 Gold ? And at the same time have I been slothful in teaching and in preaching? Great God! Has it come to this that I must defend myself like a common criminal ? Brethren, I am ready for more confidence, sympathy and love. Are you ? I judge no man. I seek only to be true to the best opportunities for extended usefulness that God and man offer me. Would you have me otherwise than widely useful? *The Japan Evangelist* does not narrow my work as your missionary, while at the same time it does widen my influence as the servant of our Lord Jesus Christ. Brethren, would you have me hide my light under a bushel ? In helping others, do I forsake



hinted such an untrue and unkind thing. Unfounded accusations are cruel. God knows the work is hard enough without such letters.

I do not hesitate to say that *The Japan Evangelist* ought to be in every Reformed family. Japan is more to you than any other foreign land. Here your foreign mission love and prayers and efforts center. You need, yea the best of you, the information made possible in this magazine. The first years' work has made me a better and a fuller missionary. It is not for me I plead. It is for you and Japan.

Subscribe yourself and get others to subscribe. Let me have 5,000 new subscriptions by May of 1895. Then I can make the best possible arrangements for the magazine and take advantage of the furlough granted me by the Board more than a year ago. Read *The Japan Evangelist* consecutively, and your mind and heart will grow with the increase of your knowledge of Japan, of things Japanese, and of the great work of God in Japan. After the secure founding of the magazine all profits are for God's work in Japan.

Meanwhile the news from Mary was alarming. She had written personal letters to about six hundred pastors asking for their help in promoting the magazine, but had received replies from only about fifty, most of whom were already subscribers. (20) But when Hoy learned that he was being criticized for neglecting his missionary duties and that some members of the board regretted that he had started the magazine, he was both pained and indignant. In a seven page letter dated November 27th he poured out his heart to the board secretary. Since it reveals much about himself and the situation surrounding the beginnings of *The Japan Evangelist* it is worth quoting at some length :

I cannot understand. At first you wrote very kindly about the magazine both to me and to other members of the Mission. Then

(17)

tion about Japan and the work to the people of my own Church. That the first year's efforts on these lines have met with much encouragement, I think you already know. Experience, however, is teaching me my weakness in editorial work, but I hope to improve.

In August Hoy decided to write the article for *The Messenger* which Callender had suggested earlier that year. In the form of a letter addressed to "Dear Reformed Friends," which was carried in the October 11th issue, he began by insisting that he was "not blowing my own horn, but the trumpet of the Lord, as the magazine is devoted purely to God and His great cause in Japan. Twenty denominations are represented in the subscription book. Along these lines we have union. The magazine goes to many Y. M. C. A. Reading Rooms in the U. S. as well as Foreign Mission Boards and Unions. Many groups of Japanese and missionary friends are assisting without a thought of denominational differences."(19) At the end of the first year, however, he was not only encouraged but discouraged :

The most cordial appreciation of *The Japan Evangelist* has come from other Churches than my own. This causes me pain, not as personal vanity grieved, but as something I fail to comprehend. Japan is the only country in which you have foreign mission work. Here I am disappointed. Love and knowledge of the object loved go together. Do you know Japan ?

*The Japan Evangelist* is not a personal business venture on my part, though I bear all the financial responsibilities. Nor is it "an outside affair," as some one unkindly has asserted. I began this magazine in the same spirit in which I underwent the heaviest burdens of Tohoku Gakuin. Some of you found fault with me then. Does the Tohoku Gakuin need any apology today ? In the conduct of this magazine I have neglected none of my other duties as a missionary. Some one wrote me that I must be overlooking some of my other work. No one on the field has ever

ed to underwrite this new venture of introducing a Japanese Christian women colleague to the "Home Church." Hoy's chief concern, however, was to promote the magazine : (17)

I am thoroughly convinced that my magazine has a mission, and in order to accomplish its purpose my attention will be needed for sometime yet. I am training a capital young man, a Methodist, for the work. The magazine is gaining many friends. It must be kept up and to do this I can't leave now. I think Mrs. Hoy's personal presence and her presentation of the claims of the magazine will greatly help matters in America among the various denominations. Especially can she be useful in our Church. I sincerely hope the Board will ratify our plans. The mission does. I should love dearly to go now too, but I must bear my burden a little longer for the Christ's sake.

It was just at this time that the problems of Oshikawa as president of Tohoku Gakuin were coming to a crisis. Outstanding as a public speaker in much demand, he was a poor administrator, especially with finances, and was often absent from his duties at school. He was also quite authoritarian and increasingly nationalistic with more and more of his attention focused on secular activities. Hoy's position as vice-president and treasurer of the school became exceedingly unpleasant. To Callender he confided that he was "seeking in *The Japan Evangelist* a means of forgetting the friction and annoyances incident to my peculiar relations to the [founding and development of] Tohoku Gakuin. I seem to be on a fine way to that evenness of nervous mechanism which is so necessary to one subject to asthma." (18) He insisted he could not go on further until the magazine was established on permanent financial lines. Also, he was teaching four hours a day, mostly in the Theological Department. For his magazine he had high hopes :

The origin of *The Japan Evangelist* lies in the desire to make myself more widely useful in the cause of Christianity, to bring the East and West closer together and to give more informa-

(15)

best to improve the magazine and am willing to wait patiently for proper recognition and support. I am sure my friends will continue to help me in this enterprise. But please excuse me from “blowing my own horn.” Why is it that most of my best encouragement should come from beyond my own church, I do not understand. I am surprised, too, that men like Father Kelker give me no support. Do you know why? You may be frank with me in this?

From present indications I am sure that I shall be able to do more good for Japan in this new enterprise than in any other way. The leading native religious workers of all denominations in Japan are delighted with my magazine and entertain high hopes of its usefulness. I only wish I had more time to devote to it. If I could devote all my time to the proper studies connected with my editorial work, I could, of course, do much better. At present this is impossible. Have you any suggestions to make on these points? Does the whole Board endorse this movement? I have heard from only a few of them. (14)

#### 5—A Venture Undaunted

That previous fall of 1892 the Board had granted Hoy a furlough, at the urging of his invalid father and friends, who, however, had not consulted him. He and his wife had been in Japan seven years, they had three small children, and he was suffering from severe asthma. Also, missionaries were wanted to help promote the work in the churches at home. But Hoy had begged off, insisting that he needed a year or two before he could leave his work in Japan, especially his fledgling magazine. Finally, it was agreed that Mary and the children would precede him, which they did in May. (15) Accompanying them was Mary’s “Bible woman” (assistant), Yoshida Misao, to help with the work in the churches and to care for the children when Mary was not at home. This, however, led to an unpleasant misunderstanding when the board treasurer wrongly assumed that Hoy expected the board to pay her travel expenses. (16) Although this had never been his intention, no financial help was provid-

secretary, recommended it highly to the pastors and people of the German Reformed Church through its weekly publication, *The Reformed Church Messenger*.

It is entitled to the highest consideration. It is eminently calculated to meet a want which we know exists in our Church. We have heard many complaints of a want of information on missionary topics, and the inquiry is not infrequent, where can the information be procured? Not a few of our ministers have felt themselves at a loss in that regard, and have found it a task to make an impressive and instructive presentation of the cause to their people. Now this magazine is just the literature they need. It abounds in illustrations of the effect of Christianity upon the Japanese mind and heart. It exhibits the transforming power of our holy religion upon society as well as upon the individual. It narrates experiences whether of the missionary in the prosecution of his work, or of individuals whose hearts have been touched and enlightened by the power of the truth. Our experience has been that people will listen with unflagging attention to the recounting of facts, the narrative of results reached and the reciting of personal experiences, when discussions and exhortation will soon become unattractive. This publication will furnish just such material, and we are at a loss to see how a minister who has any heart for this blessed work can afford to do without it. (13)

Hoy was much encouraged with the initial response, though a bit concerned. To Callender, who had urged him to write an article for further promotion of the magazine in *The Messenger*, he replied :

I am glad to know that you are interested in *The Japan Evangelist* and appreciate your efforts and your kindness in securing subscribers. I do not, however, feel free to write that suggested article on "the claims of the magazine upon our church." Brother Schneder will write one for you. I shall do my

Even a century later, the materials and techniques belie their age. Printed by the Yokohama Seishi Bunsha with Hoy as editor, each issue has about sixty pages bound in a gray paper folder with an ink sketch on the cover of Mt. Fuji framed in cherry blossoms and chrysanthemums. Among the few advertisers were Japanese and foreign companies in Tokyo, Yokohama and San Francisco, which catered to the special needs of foreigners; grocers, tailors, druggists, homeopathic medicine, publishers, life insurance, and western-style furnishings including pianos and organs. A subscription cost \$1 dollar or ¥2 yen per year, but it is not known how many copies were printed or how many subscribers there were. Annual volumes bound in raw silk hard-covers with the Mt. Fuji sketch were available at \$1.25 or ¥2.50. The business agent in Japan was Messers. H. MacArthur & Co., No. 10, Bund, Yokohama, and Rev. C. H. Ferner, Mt. Pleasant, Pennsylvania. The only known complete set of this journal is in the archives of Tohoku Gakuin University, of which Hoy was co-founder.

No financial records of the journal are extant. All that is known is that Hoy financed it himself out of his meager salary until it became self-supporting at the end of its first year. (11) Such bold initiative was typical of Hoy, for when he felt a need deeply he went ahead on his own, trusting that God would provide. In co-founding Tohoku Gakuin in 1886 he had not waited for support from his mission board, but had financed it himself in his humble Japanese-style house living very frugally as a bachelor until such support was granted at the end of the first year. So, once again he pressed his new project, unrelentingly and often with much passion.

To promote the journal Hoy had sent out many complimentary copies along with a personal letter asking for help in circulating it. But there is no record of how many letters and copies of the journal were sent or whether they went to persons in both Japan and America. However, it is evident that several copies were sent to some recipients, for the first sentence of his form-letter has a open space for writing the number of copies enclosed. (12) At the same time, Dr. Callender, the mission board

val for girls and the Carp Flags for boys ; the Obon Festival with lanterns for the dead and New Years Day. Among the short stories was one entitled, "A True Monkey Story," which has a Buddhist theme. One short essay about how fast bamboo grows asked : "Just think of growing up as tall as your papa within a few months after you are born. But how can you tell whether are young or old ? The young have not yet quite put off their swaddling clothes. A few of the brown scales are still clinging to the bottoms. The green of their stalks and leaves are fresher and deeper in color. Let us hope that children may be taught to put on the bright robe of righteousness fit to be received by their Lord and maker." (9) So, things Japanese became Christian parables.

*The Japan Evangelist* did, indeed, represent "all aspects of the work and every phase of Japanese life," as Hoy had promised. He had procured the services of a wide variety of writers in Japan, both missionary and Japanese, men and women, even some who were not Christian. Most were well-educated, tolerant and broad-minded. Some of those who were missionaries had graduated from elite schools like Yale and Princeton. The writers who were Christian, overwhelmingly the majority, covered the span of Protestantism from high to low church, though most were Reformed, Presbyterian, Congregational, Methodist or Baptist. The journal was both ecumenical and cross-cultural, which proved essential to the Christian mission to the world.

#### 4- "A Surprise To Not A Few"

The early issues of *The Japan Evangelist* are especially impressive in the excellent quality of the paper, printing, photographs and sketches. As Hoy's mission board secretary, Dr. Callender, noted in promoting the new journal in *The Reformed Church Messenger*,

As to its style and mechanical execution it will be a surprise to not a few who are not informed as to the progress in the arts in that oriental land. Its get-up is really superior, and will compare well with our American periodicals, and in instances not a few, it excels. (10)

enter this place, they must take the lowest seat at our feet and learn of us. We have a wonderful life, full of love and deep with hope and joy. The men and women of the grown world may be wiser than we are, but I am sure we can tell them many things they have already forgotten in the cares and toils of life. Ours it is to keep this world bright and fresh. In our quickening thoughts we find ourselves very near to nature and to God. Jesus said the kingdom of God is like unto us. We stand nearest and newest to the creative hand of our Father in heaven. We breathe the air of Paradise.

Here in Japan we live and love a life of which very little has yet been truly observed and described. People come and go, like the brooklet at the base of our beloved Mt. Fuji. They look at us, make a few remarks, and then pass by on the other side. We hope to find a friend who will know us with mind and soul and heart in abiding touch with our own. We are more, *very* much more, than mere curios to be set down on the list of "things *seen* in Japan." We are a part of an old nation ; we are a part of the human race ; we are children with the same tender hearts, the same love of play, the same desires to love and to be loved, *the same human nature*, as men find in the little ones of Europe and America, the countries that seem so far away. The Editor of *The Japan Evangelist* believes us and believes *in* us when we say these things. He hopes to look around for some one to bring us into loving touch with "the wee ones" in distant lands. May we not hope for a channel of common thought and feeling in which we must learn from our very first years the real facts of life all over the world on whose truth the brotherhood of man remains to be based according to the love of God ? May we not as children learn to love each other from one end of the earth to the other ? Will we not try ? (8)

Each section, beginning with the October 1895 issue, featured a lovely ink sketch of various activities of Japanese children accompanied by a simple and sensitive description. Among these were the Dolls' Festi-



gainst only fifteen for boys. Also, because the missionary career offered unprecedented opportunities to single women for careers, and since most of the men were married, there were by that time almost twice as many missionary women in Japan as men. (6) Furthermore, since much of the support for foreign missions throughout the churches in America came from women, it was only natural that women's concerns played a major role in *The Japan Evangelist*. It is also significant that the Women's Department was edited, and many of the articles in the journal written, some in English, by Japanese Christian women only two decades after the first higher school for girls in Japan was started.

The introductory essay of the Women's Department was addressed to "our sisters beyond the great ocean, our sisters whose hearts yearned toward us daughters of Japan, when as yet the Sun of Righteousness had not risen in our behalf." Gratitude was expressed to those "who gave gifts out of their by no means abundant resources so that we might have a leading hand to guide us to the Great Light ; who, not having themselves enjoyed high educational privileges, strove for the means by which we might be taught. . . . The daughters of Japan have a great deal against which to contend, perhaps a great deal more than their American sisters could think of or imagine." (7)

In introducing the Children's Department, Hoy, who was then thirty-five and the father of three small children, wrote :

Our little friends across the seas shall have a corner in this magazine all to themselves. If any of the big folks come here, they must keep quiet and let the little ones do the talking and the playing. Grandfather and grandmother, with their golden spectacles and their smiles worth more than gold ; father and mother, with perhaps a sign of a frown at the innocent noise we are making ; big brother Tom and elegant sister Mary, both so superior to the "youngsters" ; uncles and aunts and cousins ; these must not insist on the privileges of our little child-world. If they

the American Presbyterian physician and linguist, who also arrived in 1859 and who became noted for devising the system of writing Japanese in roman letters which bears his name. Another noted pioneer was Bishop Nicolai of the Greek Orthodox Church, who had come to Hokkaido in 1861. The first woman honored was Sister Olga of that church, followed by Mrs. T. True, a Presbyterian who came to Japan in 1874 as a widow.

The difficulties of Christian outreach in Japan proved to be a persistent theme. The initial period of rapid growth following the opening of Japan had subsided. Increasing nationalism with the attendant anti-foreign feeling leading to the Sino-Japanese War of 1894-95 was making Christian work more difficult and less fruitful. Such concerns were evident in essays like "Religious Ideas of the Japanese People and the Difficulties of Propagating Christianity" - "The Outlook of Christianity in Japan" - "Is the Assertion that the Japanese are Barbarians Truthful and Just" and "A New Plan for the Evangelization of Japan."

Much attention was given to articles and reports about specific Christian work in local areas throughout the country - evangelistic outreach, church and school activities, social service projects, relief work after a natural calamity, as well as a variety of meetings and conferences. A regular column entitled "Notes From the Missions" carried short items from the various denominations and societies at work throughout the country which then numbered over forty. Beginning with the June 1894 issue, two special sections of several pages each were added : the Woman's Department and the Children's Department, which respectively were edited and mostly written by Iwamoto Kashi and William Hoy.

One of the chief concerns of Protestant missions throughout the world was the "uplift of womanhood." In Japan, as elsewhere, where the priority in education was given to boys, the first schools of higher education for girls were Christian. By the end of the century there were throughout the country forty-four Christian schools for girls over a

mi, in full samurai dress complete with two swords seated on an ornate Victorian chair. Common were such articles as "Evangelistic Work in Japan" - "Hindrances to Mission Work in Japan" - "Education of Japanese Women" - "Church Dedication" - "Experience of Converts." More substantial essays like "Introduction to Christianity in Japan," by S. Watanabe, required nine issues to complete. Articles like "The Moral Preparation for Christianity in Japan," by DeForest, "Is Japanese Buddhism a Religion?" by H. S. Jeffreys, and "Good and Evil Effects of Buddhism," by H. Kannari reflected the comparative religious concerns being championed by the more liberal missionaries, thus pioneering what has come to be known as inter-faith dialogue.

The second issue inaugurated a series entitled "Japanese Religious Workers," with a full-page photograph and a biographical sketch of several pages. First, quite properly, was the widely-known Neeshima Jo, founder of Doshisha University. Next came Okuno Masatsuna, of the Yokohama Band, together with his wife whose name is not given and about whom nothing is written. The same is true of Ishii Juji, founder of the Okayama Orphanage, with his wife and two small children, all of them in kimono in a Victorian setting. Other Meiji Christians are Ito Kazutaka of the Sapporo Band and Honda Yoitsu of the Yokohama Band, at that time President of Aoyama Gakuin in Tokyo and later a Methodist Bishop. The first woman to be included was Kimura To of Meiji Girls' School in Tokyo, followed by Iwamoto Kashi, to whom twelve pages were devoted upon her death in 1896 at age thirty-three. A graduate and teacher of Ferris Seminary in Yokohama, the first school of higher education for girls in Japan in 1875, she was deemed "the best educated woman in the country, with a perfect knowledge of English," according to the founder of the school, Mary Kidder, (Mrs. E. R. Miller) who had arrived in 1869 as the first single woman Protestant missionary.

Toward the end of the second year prominent missionaries were regularly featured. First came Rev. D. C. Greene, who arrived in 1869 as the first Congregationalist. Next was the venerable pioneer, Guido Verbeck, the Dutch scholar at Tokyo University who in 1859 had been among the first seven missionaries to gain entry to Japan; then Dr. James Hepburn,

cal, not without reason. The language was never inflammatory or abrasive, and such biased terms as heathenism, idolatry, and false religion were not much used.

Some articles were by persons who were not Christian. There were, for instance, two untitled essays by Fukuzawa Yukichi, the influential educator and political Meiji mentor. Also included were translations from the Japanese press, both secular and religious, as well as excerpts from *The Japanese Mail*, the leading daily English newspaper. From the second year a regular feature was a biographical sketch with a full-page photograph of a Japanese public figure. The first was Date Masamune, the first feudal lord of Sendai and one of the most powerful in the early Edo Period, who in 1613 sent a mission to Pope Paul V in Rome. Next came Yoshihito Haru-no-miya, as a child, later the Taisho Emperor ; also Count Matsukata, Count Okuma, the Marquis Hirobumi Ito, Count Kaoru Inouye, Count Awa Katsu, and finally the Meiji Emperor in ornate western military uniform with the Empress in Victorian attire. Many issues carried articles about the political situation written by Christians, such as "Justification for the Korean War" by Uchimura Kanzo, one of the most influential Meiji Christians ; "The Status of Japan Among the Nations" by Rev. Henry Loomis, the Bible Society secretary, who was prominent in public affairs, and "A Review of the Year 1895" by Fujiu Kinroku. Indicative of the wide scope of the journal were articles entitled, "The Past and Future of Japanese Women Physicians" by Mrs. Gin Ogino and "On Japanese Exclusivism" by Professor Nitobe Inazo, who later founded Tokyo Christian Women's University. As Hoy had promised, *The Japan Evangelist* was, indeed, inclusive.

### 3—The Christian Focus

Since the intent of *The Japan Evangelist* was "In the Interest of Christian Work in Japan," as stated on its title page, its main emphasis was to describe the Christian encounter with Japan and to inform its readers about the various activities of Protestant missions. The first illustration in the opening issue was a sketch, along with a brief biography, of "The First Protestant Believer in Japan," Murata Wakasanoka-

Women,” and “Darkest Tokyo,” about the poor which was serialized in eleven issues. There were also short stories such as ; “A Double Tragedy” - “The Dream of My Sword” - “Story of an Old Woman” - “Story of a Faithful Wife” - “The Young Assassin” - “Story of a Young Priest” - “Tidal Wave Baby” and “The Deserted Flower,” in three parts. “Okubo Hikozaemon,” a drama by Fukuchi Genichiro, was carried in four installments. Poems were frequent, some of them by Hoy. One issue even featured a delicate water-color print of iris by a pond with a haiku translated into English :

Water was the painter,  
 Water again was the eraser,  
 Of the beautiful fleur-de-lis! (5)

All such selections are warmly appreciative of Japan and the Japanese, designed to help the reader come to know a world almostly completely unfamiliar.

In addition, every issue had at least two more scholarly articles concerning some aspect of Japanese culture, religion or society. Most substantial was “Excursions Through the Japanese Ethical Literature of the Present Time,” by Dr. L. Busse, Professor of German Literature at Tokyo University, which had been read before the German East-Asiatic Society of Natural Science and Anthropology in Tokyo and which was carried in twelve installments. Others were “The Influence of Pantheism,” by Dr. John H. DeForest, a veteran Congregational missionary, and “Fragments of the East,” by A. Miyake, both in three parts. “The Scholars of the Nation” and “Japanese Buddhism” were early contributions by David B. Schneder, professor in the Theological Department of Tohoku Gakuin. A regular feature beginning with the third issue was the well-researched column. “Religious Thought,” written by Rev. Fujiu Kinroku of the Yokohama Band and Mr. K. Kimura, which surveyed various aspects of Shintoism, Buddhism and Christianity in three approximately equal parts. The approach to the non-Christian world was neither condescending nor pejorative, but well-informed, and when criti-

(5)

see through other men's eyes and to hear through other men's ears and to speak through other men's mouths. No task is more delicate or more difficult. . . . but, life is lived minute by minute; thought follows thought; expression, expression; and the record is made. Finally, we ask the reader . . . to be patient with us as we struggle after fuller knowledge and after better experience. (3)

The word, *Evangelist*, is, therefore, somewhat misleading, especially according to its current usage. For although this journal was unapologetically Christian in its purpose and style, its task was not to proselytize the Japanese, but to inform church people back home about Japan in general and the growing Christian movement there in particular. Its readers were Christians, and largely foreigners, who knew little about Japan. Its contents, therefore, were not confined to specifically Christian subjects only, but included many articles on various aspects of Japanese culture and society. Most of these were rather brief and written for the average person, but a few were longer and more erudite for those with such interests.

## 2— Things Japanese

The range of articles and illustrations about Japan was broad. Included in every issue in the early years was a short essay on some aspect of Japanese life, accompanied by an artistic full-page artotype photograph of excellent quality. Among the subjects were: "A Japanese Maid at a Well" - "A Japanese Family at Dinner" - "A Young Woman" - "Old Style Physician" - "Carpenters at Work" - "Washing Day" - "Farmers" - "Wedding Ceremony" - "A Yaoya" (vegetable peddler) and "Harakiri." The essay by Mary Hoy entitled, "Fox Worship," is a well-informed description of that popular folk aspect of Shintoism as practiced at the famous Takekoma Shrine near Sendai. She concluded with a brief editorial comment, "The Lord grant the day may soon come when fox worship and all other forms of idolatry may be wiped out of the land." (4) Essays by Japanese writers in translation included: "The Japanese Samurai" - "Ancient Japanese Superstitions" - "Mirror for

Father has named in His covenant family.

We tremble, however, at our own weakness. The weak, sometimes, *must* enter and stand where the strong see no opening. We should like to promise you a richly-gifted mind and heart as wide and deep in range as man and nature. To be true to all the changes and modifications of Christian life and work in Japan by climate, by national and local manners, by conventional usages, by individual peculiarities, by every influence of an effete civilization operating on the complex nature of the Japanese, -aye, this requires better powers of perception, analysis, synthesis and representation than we possess. A description of all varieties of life and character and work, being tolerant to all, and realizing them to the eye of the reader with vivid and vital truth, calls for an even enthusiasm that will never hurry one into bigotry. And there is necessary an inspiration and aspiration to exhibit things simply in their right relations. Who is sufficient for all these things ?

The facts of Christian life, work and experience in Japan, intellectual and spiritual, must be frankly, fearlessly and constantly kept in view. Any sentiment or opinion, critical or uncritical which contradicts them is necessarily false. . . . Full attention must be given to those social, political, ethical and psychological relations in which these vital facts obtain. Thoroughly understood and properly taken, they may prove of great value and helpfulness to the reader in the present day and preserve material for the historian yet to come.

Our great care shall be to supply as much as possible the want of present, personal and direct observation which we cannot practice on account of other professional duties, through scores of correspondents and writers from all parts of the Empire ; for it is the only means of knowing men and institutions. Doubtless this will always be more or less incomplete; but that we cannot help. It is better to have an imperfect knowledge than none at all; and in all branches of learning there is no other means of complementing our knowledge of facts and phenomena, than to

forth his intent for the new journal in lofty, though often somewhat verbose, language. It is worth quoting at length, for it expounds the underlying philosophy of the journal, especially during Hoy's five years as editor. This monograph, in turn, will deal only with those years.

A thorough-going force of soul, intimating a living belief in God and in man redeemed by Christ, is concentrated on the personal object which calls it forth and does not shrink from entering into an exclusive and intelligent devotion to a palpable end, to secure a practical good. . . . Zeal is tempered with knowledge. Freshness, elasticity, and independence, the joyousness and sturdiness of growth in wisdom and experience, in man's love of his kind, and in his sense of duty to his kind are expanding virtues in modern philanthropy and modern missions. . . . *The Japan Evangelist* offers no excuse for its being. It must become self-authenticating. . . . . A sturdy, steady-going purpose is its own best vindication. In this age of making many books, . . . . some might expect us to beg pardon for the birth of this new Child of the East. Not so, however.

*The Japan Evangelist* goes into life and work with the inherent right and purpose of doing good and of thus realizing the ideal and of idealizing the real of its kind in the service of God and man. . . . *The Japan Evangelist* makes no pretensions to extensive learning or recondite researches. It will simply be an organ of familiar chat for the family circle beyond the sea. It is hoped that it may be found worthy of a welcome. In the confident belief that its contents, coming largely fresh from the hearts and brains of Young Japan, equally instructive and entertaining, will represent a substantial share of the aspirations and achievements of this always interesting people, *The Japan Evangelist* will sit down in the study, the workshop, or at the family fireside, and tell you of your own sons and daughters whom you have so cheerfully given to the Lord's cause in Japan, and, most of all, speak to you through the words of the Japanese themselves about the new sons and daughters whom the



primarily for circulation in the U. S. The name chosen is, "The Japan Evangelist." It is undenominational. All aspect of the work and every phase of Japanese life will be represented. I have correspondents all over Japan, giving a little aid to scores of students in the Girls' and Boys' Schools. Able Japanese and missionary writers, irrespective of denominational lines, are writing for me. My magazine will be unique in the annals of Foreign Missions. I am coming into touch with new sources of life, work and information. My only motive, as in all other things, is to do it unto the Lord in the spirit of helpfulness and hopefulness. I go on with my teaching and preaching as before, but I rejoice to be able to enlarge my scope of usefulness. Now, do not pre-judge me. Wait and see. I am receiving encouragement on all sides. (1)

In a form-letter to friends enclosing complimentary copies of the first issue to promote the journal, Hoy further described its scope :

The object of the magazine will be not only to give a survey of all phases of missionary work in Japan, but also at the same time by a series of articles on timely topics afford a view of the conditions under which we live and labor. The magazine will enter into things Japanese far enough to give the reader a comprehensive grasp of Japanese life and characteristics. Well informed missionaries have promised us their aid. Our main reliance for material, however, will be upon pure Japanese sources. We have already made engagements with many correspondents from all parts of the empire, and some of the leading Japanese writers will occasionally favor us with contributions. The lives of the leading Japanese religious workers will be given in a continued series. In addition to these resources we have recourse to several scores of the leading native papers and magazines. We hope thus as far as possible to let the Japanese speak to you fresh from the head and heart. (2)

In his four-page "Salutatory" in the first issue of the journal, Hoy set

(1)

WILLIAM E. HOY AND "THE JAPAN EVANGELIST"

William Mensendiek

*The Japan Evangelist*, which was started in 1893 by William E. Hoy, has the distinction of being among the first journals on Japan in English printed in Japan. It began as a bi-monthly with the October issue, but in the fall of 1896 it became a monthly. In January 1926 it became the current *Japan Christian Quarterly*. With its Centennial approaching, it is one of the oldest continuing journals about Japan in English published in Japan.

William E. Hoy, a graduate of Franklin & Marshall College and the Lancaster Theological Seminary in Pennsylvania, arrived in Japan in December, 1885, as the third missionary of the German Reformed Church in the U. S. The work of this small denomination in Japan had just begun in 1879 and was still confined to Tokyo. Within a few weeks, however, Hoy went to Sendai at the invitation of Masayoshi Oshikawa, a member of the Yokohama Band and one of the first Protestant converts in Japan, to help him start two Christian schools, one for boys and another for girls. (Tohoku Gakuin and Miyagi Gakuin) With the opening of the new work in Sendai, and especially because of the unprecedented opportunities presented by the rapidly growing schools, the need was imperative for increased support from the churches in America, which had always been inadequate. It was, therefore, in order to promote interest in the work among the pastors and people of the "home churches" that this magazine was begun, at the suggestion of Hoy's senior colleague, Rev. Jairus P. Moore.

1—A Comprehensive Approach

A month before the appearance of the first issue, Hoy described his plan for the journal in a letter to his mission board secretary in Harrisburg, Pennsylvania, Rev. S. N. Callender :

I am about to publish an English bi-monthly magazine devoted to the interest of Christian work in Japan and intended

## 編集後記

一九八一年七月一日、東北学院百年史編集委員会が結成されて以来、十年間にわたった『東北学院百年史』三巻、すなわち通史篇・各論篇・資料篇総計約三〇〇〇ページに及ぶ編纂事業は、本巻をもって終結する。思えば、長い準備と調査研究、それに続く執筆・校正・編集の日々の連続であった。委員会発足当時の十年前、委員の誰が、このような膨大な三部構成の年史の完成を、具体的な形で予見し得たであろうか。

特に、今回の各論篇においては、当初の意図と執筆の現実との間に困難な問題が少なくなかった。事実、最初の計画からはかなりの変更を余儀なくされたのである。それだけに、編集委員会案に全面的な協力を惜しまれなかつた十四篇の十三人の執筆者各位には、満腔の謝意を捧げたい。企画公表から僅か一年の間に、執筆者たちはそれぞれ校務繁忙の中にあつて努力を傾けられ、ついにこのような形で結実を見るに至ったことは、編集委員会としても感謝の極みである。

ただ、この間にも、執筆者の一人であつた飯塚滋雄法学部教授は、担当された「鈴木義男」を完稿され、初校正中の今年一月十七日、病気のために本篇の刊行を目にすることなく長逝された。悼みても余りあることであつた。深く哀悼の意を表する次第である。

『東北学院百年史』三部構成のうち、既刊の通史篇では、本学院の建学の精神の再確認を目指したが、そのために、そのはるか遠い前史である宗教改革の源流まで遡って言及しながら、本学院百年の発展の跡を辿る努力

を重ねた。これに続く資料篇は、前記通史篇で用いた原資料を編集したものである。

この「各論篇」の意図するところは、通史篇や資料篇の枠内では、十分な紙幅を割くことが不可能であった特殊・具体的な論題を独立して取り上げ、それぞれ専門の執筆者によって東北学院百年の歩みを、より立体的に描き出し、刻み出すことにある。幸いにも、この意図は十分に実現を見たことを喜びたい。

この三部構成によつて、東北学院の百年の歴史は初めてその広さ、深さ、高さを見せることになったと言える。今、東北学院は第二世紀へと力強く踏み出している。この歩みが、過去を振り返ることによつていつそう確かなものとなり、建学の精神が発揚せられることを祈念してやまない。

思い起こせば、十年前に百周年記念行事が企画・立案されて以来、早い段階で小田忠夫第六代院長を、百周年直後には大河内雅夫、高橋英吾の両編集委員を、そして今回は前記のように飯塚教授を天に送った。十年はやはりそれなりに一つの歴史でもあったのである。

この十年間のたゆまない努力によつて、膨大な資料と貴重な遺品が収集された。これらは三つの部屋を満たすに足るほどの量であつて、この修史事業の貴重な副産物となつた。今後に残された課題としては、これらの散逸を防ぎ、保存・保管を計るだけでなく、学内外関係者の参観と閲覧の要望にも応えるに足る資料館あるいは博物館の設置が考えられる。一日も早い立案・実現を願つてやまない。

今ここに、写真誌を加えれば計四冊の年史編纂を終えるに当たり、編集委員会として、各執筆者、実務担当者、印刷関係者、それにもちろんのこと、十年にわたつて財的にも支援を惜しまれなかつた東北学院理事会当局に、心よりの敬意と謝意とを表する次第である。

編集委員全員は今厳粛な思いをもって神の前に立っている。終わりに際し、通史篇の最後の一行を再度ここに掲げたい。

ただ神にのみ栄光あれ

百年史編集委員会

委員長  
主任委員

小笠原 政  
出村 弘  
稲垣 喜  
大井 一  
櫻井 夫  
竹井 清  
土山 良  
西野 哲  
樋野 順  
松浦 順  
守屋 嘉  
四津 隆  
一美 藏

一九九一年五月

執筆者紹介

小笠原政敏	本学教授
竹井 一夫 (藤 一也)	本学講師
C・ウィリアム・メンセンディク	本学教授
出村 彰	本学教授
坂田 泉	元東北大学教授・本学講師
石川 文康	本学教授
下館 和巳	本学助教授
飯泉 茂	本学教授
森 健一	本学教授
飯塚 滋雄	本学教授
清水 浩三	本学講師
志子田光雄	本学教授
村山 磐	本学教授

東北学院百年史 各論篇 *History of Tohoku Gakuin : Collected Essays*

---

1991年5月15日 発行

編 集 東北学院百年史編集委員会

発 行 学校法人 東北学院

〒980 仙台市青葉区土樋一丁目3番1号

印 刷 凸版印刷株式会社東北事業部

〒983 仙台市宮城野区大槻7番1号